岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第425集

杉の堂遺跡発掘調査報告書

国道４号水沢東バイパス建設関連遺跡発掘調査

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

杉の堂遺跡発掘調査報告書

国道４号水沢東バイパス建設関連遺跡発掘調査

遺跡上空（南から）

調査区上空（北から）

竪穴住居跡完掘（ＳＩ０８）

平角材を用いた柱穴（ＳＩ０７）

遺物出土状況（Ｓ１０３）

板状炭化材出土状況（Ｓ１０３）

方形周溝完掘（ＳＤ０１）

出土したかわらけ（ＳＤ０１）

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする、数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私達県民に課せられた重大な責務であります。

一方、現代社会を豊かにし快適な生活を送るための地域開発も、県民の切実な願いであります。発掘により遺構が消滅することはまことに惜しいことではありますが、反面それまで闇に包まれていた先人の営みに光明があたるのも事実であり、埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、国道４号水沢東バイパス建設工事に関して、平成14年度に発掘調査を行った岩手県水沢市杉の堂遺跡の調査結果をまとめたものであります。調査によって、遺跡は奈良から平安時代を主体とする居住域であったことが明らかとなり、該期の貴重な資料を提供する事ができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究に寄与するとともに、埋蔵文化財に関する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書の作成にあたりご協力とご支援を賜りました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、水沢市教育委員会、水沢市埋蔵文化財センターをはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成16年１月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　合　田　　武

例　　言

1．本報告書は、岩手県水沢市神明町２丁目58－４ほかに所在する杉の堂遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、国道４号水沢東バイパス建設工事に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡番号、遺跡略号は次の通りである。

杉の堂遺跡　…（遺跡番号）ＮＥ27―0100

（遺跡略号）ＳＤ―02

4．野外調査の期間と面積、調査担当者は次の通りである。

調査期間：平成14年４月16日から９月４日　　調査面積：6,626㎡

調査担当者：丸山直美・齋藤麻紀子

5．室内整理期間と整理担当者は次の通りである。

整理期間：平成14年11月１日から平成15年３月31日

整理担当者：丸山直美・齋藤麻紀子

6．報告書の執筆はＩを国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、そのほかを丸山直美と齋藤麻紀子が担当し、文末に名前を付した。

7．各遺物の鑑定・分析は次の方々にお願いした。

石質鑑定：花崗岩研究会

炭化材樹種同定：日本木炭協会

放射性炭素年代測定（ＡＭＳ）：パリノ・サーヴェイ株式会社

炭化種子同定：高瀬克範（東京都立大学）

羽口鉄滓の成分分析：赤沼英男（岩手県立博物館）

鉄製品保存処理：岩手県立博物館

8．座標原点の測量及び空中写真撮影は、次の機関に委託した。

座標原点の測量：株式会社中央測量設計

空中写真撮影：東邦航空株式会社

9．野外調査及び報告書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を頂いた（五十音順・敬称略）。

赤沼英男　伊藤博幸　井上雅孝　宇部則保　小島敦子　斎野裕彦　佐藤良和　関俊明　高瀬克範　高橋千晶　津野仁　能登健　畠山剛　平塚幸人　八重樫忠郎　吉川純子

10．発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

11．調査成果は現地説明会資料ほかに発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

目　次

序
例言
目次

〔本　文〕

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．立地と環境 …… 3
　1．遺跡の位置 …… 3
　2．遺跡周辺の地形と地質 …… 3
　3．基本層序 …… 7
　4．周辺の遺跡 …… 7
Ⅲ．調査の方法と室内整理 …… 9
　1．野外調査の方法 …… 9
　2．室内整理 …… 10
Ⅳ．検出した遺構と遺物 …… 13
　1．竪穴住居跡 …… 13
　2．遺物集中区・竪穴状遺構 …… 97
　3．方形周溝・溝跡 …… 107
　4．土坑 …… 113
　5．Ａ・Ｂ区小柱穴群 …… 117
Ⅴ．遺構外出土遺物 …… 117
Ⅵ．まとめ …… 141
Ⅶ．分析・鑑定 …… 161

〔表目次〕

第１表　周辺の遺跡一覧表 …… 5
第２表　Ａ・Ｂ区小柱穴群計測値一覧 …… 120
第３表　遺物観察表（土師器・須恵器） …… 126
第４表　遺物観察表（かわらけ） …… 138
第５表　遺物観察表（国産陶器・磁器） …… 139
第６表　遺物観察表（土製器） …… 139
第７表　遺物観察表（羽口） …… 139
第８表　遺物観察表（鉄製品） …… 139
第９表　遺物観察表（石器・石製品） …… 140
第10表　竪穴住居跡一覧 …… 142
第11表　岩手県内炭化種子出土遺跡一覧 …… 144
第12表　床面･カマド内出土遺物器種構成一覧 …… 149

〔図版目次〕

第１図　周辺地形区分図 …… 2
第２図　周辺遺跡分布図 …… 4
第３図　基本土層柱状図 …… 7
第４図　グリッド配置図 …… 9
第５図　図版凡例 …… 11
第６図　遺跡周辺現況地形図 …… 12
第７図　ＳＩ01竪穴住居跡（１） …… 13
第８図　ＳＩ01竪穴住居跡（２） …… 14
第９図　ＳＩ01竪穴住居跡（３） …… 15
第10図　ＳＩ01竪穴住居跡（４） …… 16
第11図　ＳＩ02竪穴住居跡（１） …… 18
第12図　ＳＩ02竪穴住居跡（２） …… 19
第13図　ＳＩ03竪穴住居跡（１） …… 20
第14図　ＳＩ03竪穴住居跡（２） …… 21
第15図　ＳＩ03竪穴住居跡（３） …… 22
第16図　ＳＩ03竪穴住居跡（４） …… 23
第17図　ＳＩ04竪穴住居跡（１） …… 24
第18図　ＳＩ04竪穴住居跡（２） …… 25
第19図　ＳＩ04竪穴住居跡（３） …… 26
第20図　ＳＩ04竪穴住居跡（４） …… 27
第21図　ＳＩ05竪穴住居跡 …… 28
第22図　ＳＩ06竪穴住居跡（１） …… 30
第23図　ＳＩ06竪穴住居跡（２） …… 31
第24図　ＳＩ07竪穴住居跡（１） …… 32
第25図　ＳＩ07竪穴住居跡（２） …… 33
第26図　ＳＩ07竪穴住居跡（３） …… 34
第27図　ＳＩ07竪穴住居跡（４） …… 35
第28図　ＳＩ07竪穴住居跡（５） …… 36
第29図　ＳＩ07竪穴住居跡（６） …… 37
第30図　ＳＩ08竪穴住居跡（１） …… 38
第31図　ＳＩ08竪穴住居跡（２） …… 39
第32図　ＳＩ08竪穴住居跡（３） …… 40
第33図　ＳＩ08竪穴住居跡（４） …… 41
第34図　ＳＩ08竪穴住居跡（５） …… 42
第35図　ＳＩ08竪穴住居跡（６） …… 43
第36図　ＳＩ08竪穴住居跡（７） …… 44
第37図　ＳＩ09竪穴住居跡（１） …… 45
第38図　ＳＩ09竪穴住居跡（２） …… 46
第39図　ＳＩ09竪穴住居跡（３） …… 47
第40図　ＳＩ10竪穴住居跡（１） …… 48
第41図　ＳＩ10竪穴住居跡（２） …… 49
第42図　ＳＩ10竪穴住居跡（３） …… 50
第43図　ＳＩ10竪穴住居跡（４） …… 51
第44図　ＳＩ10竪穴住居跡（５） …… 52
第45図　ＳＩ11竪穴住居跡（１） …… 53
第46図　ＳＩ11竪穴住居跡（２） …… 54
第47図　ＳＩ11竪穴住居跡（３） …… 55
第48図　ＳＩ12竪穴住居跡 …… 56
第49図　ＳＩ13竪穴住居跡（１） …… 57
第50図　ＳＩ13竪穴住居跡（２） …… 58
第51図　ＳＩ14竪穴住居跡（１） …… 59
第52図　ＳＩ14竪穴住居跡（２） …… 60
第53図　ＳＩ14竪穴住居跡（３） …… 61
第54図　ＳＩ14竪穴住居跡（４） …… 62
第55図　ＳＩ14竪穴住居跡（５） …… 63
第56図　ＳＩ14竪穴住居跡（６） …… 64
第57図　ＳＩ15竪穴住居跡（１） …… 64
第58図　ＳＩ15竪穴住居跡（２） …… 65
第59図　ＳＩ15竪穴住居跡（３） …… 66
第60図　ＳＩ15竪穴住居跡（４） …… 67
第61図　ＳＩ16竪穴住居跡（１） …… 68
第62図　ＳＩ16竪穴住居跡（２） …… 70
第63図　ＳＩ16竪穴住居跡（３） …… 71
第64図　ＳＩ17竪穴住居跡（１） …… 72
第65図　ＳＩ17竪穴住居跡（２） …… 73
第66図　ＳＩ18竪穴住居跡（１） …… 74
第67図　ＳＩ18竪穴住居跡（２） …… 75
第68図　ＳＩ18竪穴住居跡（３） …… 76

第67図　ＳＩ18竪穴住居跡（２）……75
第68図　ＳＩ18竪穴住居跡（３）……76
第69図　ＳＩ18竪穴住居跡（４）……77
第70図　ＳＩ19竪穴住居跡（１）……78
第71図　ＳＩ19竪穴住居跡（２）……79
第72図　ＳＩ19竪穴住居跡（３）……80
第73図　ＳＩ19竪穴住居跡（４）……81
第74図　ＳＩ20竪穴住居跡（１）……82
第75図　ＳＩ20竪穴住居跡（２）……83
第76図　ＳＩ21竪穴住居跡（１）……84
第77図　ＳＩ21竪穴住居跡（２）……85
第78図　ＳＩ21竪穴住居跡（３）……86
第79図　ＳＩ22竪穴住居跡（１）……87
第80図　ＳＩ22竪穴住居跡（２）……88
第81図　ＳＩ22竪穴住居跡（３）……89
第82図　ＳＩ22竪穴住居跡（４）……90
第83図　ＳＩ23竪穴住居跡（１）……91
第84図　ＳＩ23竪穴住居跡（２）……92
第85図　ＳＩ23竪穴住居跡（３）……93
第86図　ＳＩ23竪穴住居跡（４）……94
第87図　ＳＩ24竪穴住居跡（１）……95
第88図　ＳＩ24竪穴住居跡（２）……96
第89図　ＳＸ01遺物集中区（１）……97
第90図　ＳＸ01遺物集中区（２）……98
第91図　ＳＸ01遺物集中区（３）……99
第92図　ＳＸ02竪穴状遺構（１）……100
第93図　ＳＸ02竪穴状遺構（２）……101
第94図　ＳＸ02竪穴状遺構（３）……102
第95図　ＳＸ02竪穴状遺構（４）……103
第96図　ＳＸ03竪穴状遺構……104
第97図　ＳＸ04竪穴状遺構……105
第98図　ＳＤ01方形周溝（１）……106
第99図　ＳＤ01方形周溝（２）……107
第100図　ＳＤ01方形周溝（３）……108
第101図　ＳＤ01方形周溝（４）……109
第102図　ＳＤ02・03方形周溝……110
第103図　ＳＤ01～03方形周溝（遺物）
遺構外出土遺物（１）……111
第104図　ＳＤ04溝跡……112
第105図　ＳＫ01・02土坑……114
第106図　ＳＫ03・05土坑……116
第107図　ＳＫ06～08土坑……118
第108図　Ａ・Ｂ区小柱穴群……119
第109図　遺構外出土遺物（２）……121
第110図　遺構外出土遺物（３）……122
第111図　遺構配置図……123
第112図　床面・カマド内出土遺物集成（１）…150
第113図　床面・カマド内出土遺物集成（２）…151
第114図　床面・カマド内出土遺物集成（３）…152
第115図　床面・カマド内出土遺物集成（４）…153
第116図　床面・カマド内出土遺物集成（５）…154
第117図　床面・カマド内出土遺物集成（６）…155

〔写真図版〕

写真図版１　遺跡遠景・調査区全景……193
写真図版２　遺跡全景・土層断面……194
写真図版３　ＳＩ01竪穴住居跡……195
写真図版４　ＳＩ02竪穴住居跡……196
写真図版５　ＳＩ03竪穴住居跡……197
写真図版６　ＳＩ04竪穴住居跡……198
写真図版７　ＳＩ05竪穴住居跡……199
写真図版８　ＳＩ06竪穴住居跡……200
写真図版９　ＳＩ07竪穴住居跡……201
写真図版10　ＳＩ08竪穴住居跡……202
写真図版11　ＳＩ09竪穴住居跡……203
写真図版12　ＳＩ10竪穴住居跡……204
写真図版13　ＳＩ11竪穴住居跡……205
写真図版14　ＳＩ12竪穴住居跡……206
写真図版15　ＳＩ13竪穴住居跡……207
写真図版16　ＳＩ14竪穴住居跡……208
写真図版17　ＳＩ15竪穴住居跡……209
写真図版18　ＳＩ16竪穴住居跡……210
写真図版19　ＳＩ17竪穴住居跡……211
写真図版20　ＳＩ18竪穴住居跡……212
写真図版21　ＳＩ19竪穴住居跡……213
写真図版22　ＳＩ20竪穴住居跡……214
写真図版23　ＳＩ21竪穴住居跡……215
写真図版24　ＳＩ22竪穴住居跡……216
写真図版25　ＳＩ23竪穴住居跡……217
写真図版26　ＳＩ24竪穴住居跡……218
写真図版27　ＳＸ01遺物集中区……219
写真図版28　ＳＸ02竪穴状遺構……220
写真図版29　ＳＸ03竪穴状遺構……221
写真図版30　ＳＸ04竪穴状遺構……222
写真図版31　ＳＤ01方形周溝……223
写真図版32　ＳＤ02・03方形周溝……224
写真図版33　ＳＤ04溝跡・作業風景他……225
写真図版34　ＳＫ01～04土坑……226
写真図版35　ＳＫ05～08土坑……227
写真図版36　ＳＩ01竪穴住居跡出土遺物……228
写真図版37　ＳＩ01・02竪穴住居跡出土遺物…229
写真図版38　ＳＩ03竪穴住居跡出土遺物……230
写真図版39　ＳＩ03・04竪穴住居跡出土遺物…231
写真図版40　ＳＩ04～06竪穴住居跡出土遺物…232
写真図版41　ＳＩ06・07竪穴住居跡出土遺物…233
写真図版42　ＳＩ07竪穴住居跡出土遺物……234
写真図版43　ＳＩ07・08竪穴住居跡出土遺物…235
写真図版44　ＳＩ08竪穴住居跡出土遺物……236
写真図版45　ＳＩ08竪穴住居跡出土遺物……237
写真図版46　ＳＩ08～10竪穴住居跡出土遺物…238
写真図版47　ＳＩ10・11竪穴住居跡出土遺物…239
写真図版48　ＳＩ13・14竪穴住居跡出土遺物…240
写真図版49　ＳＩ14竪穴住居跡出土遺物……241
写真図版50　ＳＩ14・15竪穴住居跡出土遺物…242
写真図版51　ＳＩ15竪穴住居跡出土遺物……243
写真図版52　ＳＩ16竪穴住居跡出土遺物……244
写真図版53　ＳＩ17・18竪穴住居跡出土遺物…245
写真図版54　ＳＩ18・19竪穴住居跡出土遺物…246
写真図版55　ＳＩ19竪穴住居跡出土遺物……247
写真図版56　ＳＩ20・21竪穴住居跡出土遺物…248
写真図版57　ＳＩ21・22竪穴住居跡出土遺物…249
写真図版58　ＳＩ22・23竪穴住居跡出土遺物…250
写真図版59　ＳＩ23・24竪穴住居跡出土遺物…251
写真図版60　ＳＩ24・ＳＸ01出土遺物……252
写真図版61　ＳＸ01・ＳＸ02出土遺物……253
写真図版62　ＳＸ02竪穴状遺構出土遺物……254
写真図版63　ＳＤ01～03方形周溝・
遺構外出土遺物（１）……255
写真図版64　遺構外出土遺物（２）……256
写真図版65　遺構外出土遺物（３）……257
写真図版66　遺構外出土遺物（４）……258

Ⅰ．調査に至る経過

「杉の堂遺跡」は、水沢東バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道４号は、東京を起点として、福島県、宮城県、岩手県を経て青森県に至る主要幹線道路である。

水沢東バイパスは、水沢市真城字大深沢を起点とし、同市佐倉河十文字を終点とした国道４号の交通混雑解消と、交通安全の確保、沿道環境の改善を図ると共に高速時代の一端を担い地域経済発展の根幹となる道路として昭和60年度より事業化し進めてきた。

現在までに、終点側より延長3,600メートルについて暫定２車線の供用を行っており、延長は9,600メートルである。

又、バイパス整備の効果として特に次の４点を目標としている。

１．ゆとりのある交通

交通混雑が解消され、スムーズな通勤・通学が出来るようになる。

２．生活環境の改善

交通がスムーズに流れるため騒音、振動が改善され、住みやすい町づくりに貢献する。

３．安全な交通

交通量が分散減少され、沿道の人々や通過する人々の交通の安全性が高まる。

４．地域活性化の支援

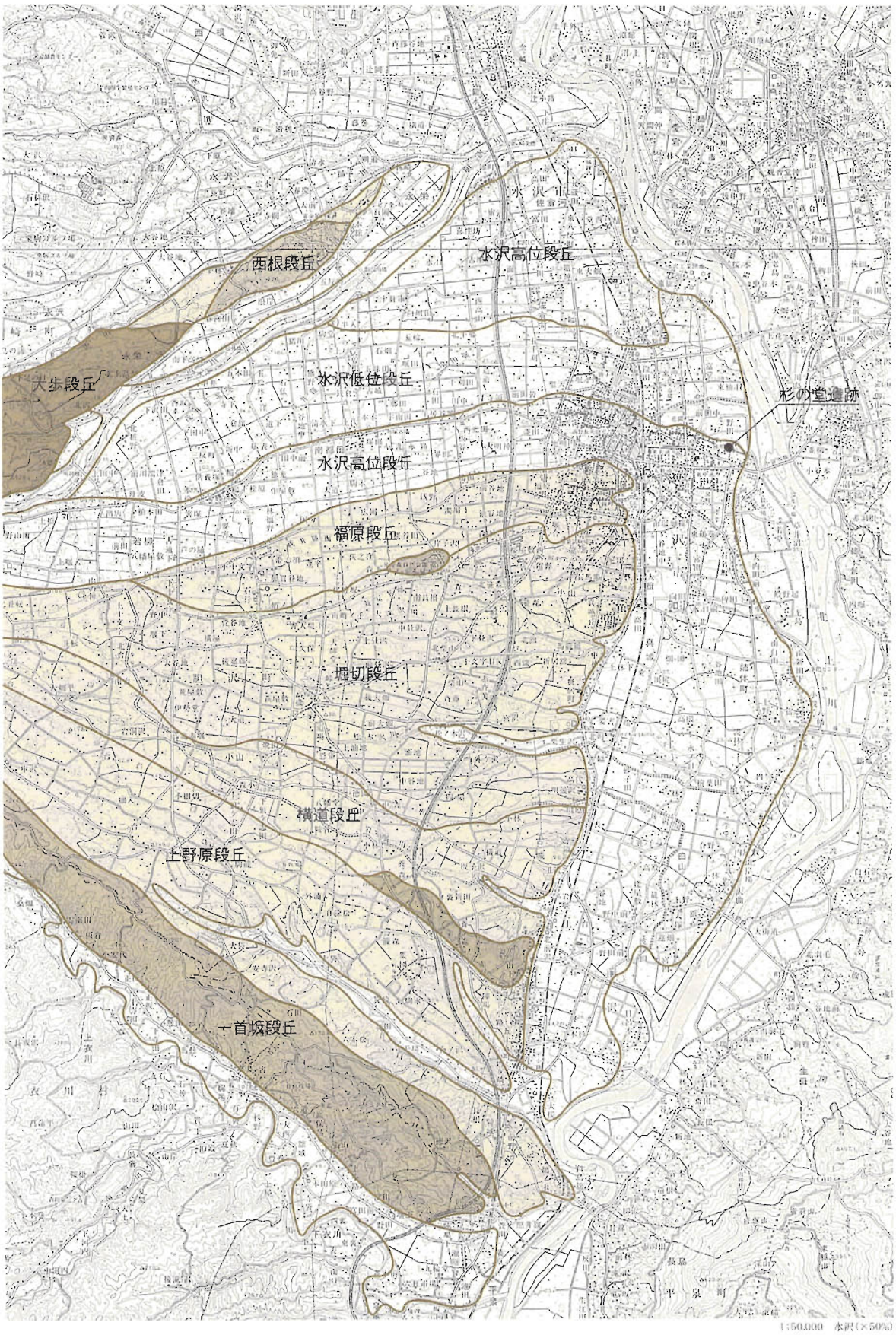
産業・観光を支える道路の機能が強化され、地域が活性化する。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和62年度に分布調査を実施し、「杉の堂遺跡」も確認されている。

同遺跡の試掘は平成13年度に実施され、その結果に基づいて岩手県教育委員会は国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所に対し、事業について照会した。回答を得た岩手県教育委員会は岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、岩手県教育委員会は、平成14年度事業について、財団法人岩手県文化振興事業団へ通知した。これを受けた財団法人岩手県文化振興事業団は平成14年４月１日付けで岩手河川国道事務所長と受託契約を締結し、「杉の堂遺跡」の発掘調査に着手した。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）


西根段丘
水沢高位段丘
大歩段丘
水沢低位段丘
杉の堂遺跡
水沢高位段丘
福原段丘
堀切段丘
横道段丘
上野原段丘
一首坂段丘
1:50,000　水沢(×50%)

第１図　周辺地形区分図

Ⅱ．立地と環境

１．遺跡の位置

杉の堂遺跡は、岩手県南部の水沢市神明町二丁目58―４他に所在し、東日本旅客鉄道東北本線水沢駅の東約1.4kmの地点、北上川西岸の河岸段丘上に立地する。本遺跡は、国土地理院発行の５万分の１地形図「水沢」（ＮＪ―54―14―14）の図幅に含まれ、その地点は北緯39°08′21″東経141°09′45″付近である（世界測地系に基づく）。標高は42～43m、遺跡の東方約700mを南流する北上川との比高は約11mである。

遺跡の所在する水沢市は、岩手県南部の北上山地と奥羽山脈に挟まれた低地帯に位置し、県庁所在地盛岡市までは65kmの距離にある。北は金ヶ崎町、南は前沢町、西は胆沢町、東は江刺市と境を接しており、その面積は約96km²である。水沢市街地は北上川と胆沢川の合流点にも近く、南北に東北新幹線、東北本線の鉄道網と東北縦貫自動車道、国道４号が、東西には国道343号と397号が走っている。同市は胆沢地区の交通上の要衝、中心的役割を果たしていると同時に、本県随一の穀倉地帯としても有名である。

２．遺跡周辺の地形と地質

水沢市は、東北最長の大河北上川中流域に位置し、市のほぼ中央を北上川が南流する。川を挟んだ東西の地形は、大きく異なった様相を呈している。東岸の地質は主として古生層からなり、北上山地に連なる丘陵が迫る。西岸は新第３系と呼ばれる地層からできていて、奥羽山脈の隆起と胆沢川の浸食、堆積によって形成された胆沢扇状地が広がる。県内最大、北上川流域最大の面積を持つこの扇状地の上には、広大な段丘群が展開している。この段丘群は南から北に向かってだんだんと低下しており、高位のものから人首段丘・胆沢段丘・水沢段丘に大別される。さらに胆沢段丘は、上野原・横道・堀切・福原の各段丘に、水沢段丘は上位面と下位面に分けることができる。水沢市では市域の多くの部分が水沢段丘に属している。

本遺跡は、北上川に架かる小八木橋の北西約700m、水沢高位段丘の段丘崖縁辺部に位置している。下位面との比高は３～４ｍである。花園町、神明町から杉の堂付近へと続く段丘崖には多数の湧泉が湧き出ており、その周辺には縄文時代以来、数多くの集落が形成され密集している。

低位段丘にあたる遺跡の北側には、堰を挟んで一面の水田地帯が広がっているが、南側の高位段丘上では、表層土が１ｍ前後と薄い上に地下水の水位が低いこと、表層地質が細砂からシルト質の土壌であることなどから水田には適さない土地であるとされている。そのため、遺跡の現況は宅地やリンゴ畑として利用されており、水田開発による破壊を免れた。周辺は住宅地であるが、国道４号水沢東バイパスの伸長に伴って、今後の発展が予想される地域でもある。

《参考・引用文献》

水沢市教育委員会（1984）：水沢市文化財調査研究年報1984『水沢の自然と文化Ⅰ』
(財)水沢市埋蔵文化財調査センター（1996）：水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第７集『杉の堂遺跡』
(財)水沢市埋蔵文化財調査センター（1998）：水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集『杉の堂遺跡群』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2000）：埋蔵文化財調査報告書第314集『惣前町遺跡発掘調査報告書』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2002）：埋蔵文化財調査報告書第395集『北田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

第２図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺の遺跡一覧表

No	遺　跡　名	時　　代	種　　別	内　　容
1	八ツ口	奈良・平安	集　落　跡	土師器・須恵器
2	玉貫前	奈　　良	集　落　跡	土師器・須恵器
3	玉貫	奈　　良	集　落　跡	土師器・須恵器
4	膳性	古墳～平安	集　落　跡	土師器・須恵器等
5	胆沢城	平　　安	城　柵　跡	国指定遺跡
6	北館	奈良・平安	散　布　地	土師器
7	祇園	平　　安	集　落　跡	土師器・須恵器
8	権現堂	奈　　良	集　落　跡	土師器
9	伯済寺	平　　安	集　落　跡	土師器・須恵器
10	獅子鼻	平　　安	散　布　地	土師器・須恵器
11	富田（A）	縄文・平安	散　布　地	縄文土器・土師器等
12	藤古	縄文・平安	集　落　跡	須恵器等
13	白井坂Ⅰ	中　　世	城　館　跡	空堀・複郭
14	白井坂Ⅱ	中　　世	城　館　跡	空堀・複郭
15	堀ノ内館	中　　世	城　館　跡	平地居宅
16	竈堂	平　　安	散　布　地	祠社土師器
17	竈堂Ⅱ	中　　世	集　落　跡	
18	東大畑Ⅱ	平　　安	散　布　地	須恵器
19	東大畑Ⅰ	縄文・平安	集　落　跡	土師器・須恵器
20	東大畑	平　　安	集　落　跡	土師器・須恵器・石器
21	面塚	古墳・奈良	散　布　地	土師器・須恵器
22	吹張Ⅰ	平　　安	散　布　地	土師器
23	吹張Ⅱ	平　　安	散　布　地	土師器
24	東館Ⅰ	中　　世	散　布　地	陶器
25	東館Ⅱ	平　　安	散　布　地	土師器
26	仙人西	平　　安	集　落　跡	土師器・須恵器
27	佐野原	縄文・平安	集　落　跡	土師器・須恵器等
28	下河原釜石	平　　安	散　布　地	土師器
29	嶋館西	縄文・平安	散　布　地	土師器・須恵器等
30	道本	平　　安	散　布　地	土師器・須恵器等
31	西光田Ⅰ	平　　安	集　落　跡	土師器・須恵器
32	久田	平　　安	散　布　地	土師器・須恵器
33	南久田	平　　安	散　布　地	土師器・須恵器
34	西館	平　　安	散　布　地	土師器
35	稲荷田	平　　安	散　布　地	土師器
36	仙人東	弥生・平安	集　落　跡	土師器・須恵器等
37	沢田	縄文・平安	散　布　地	
38	東鍛冶屋	縄文・平安	散　布　地	土師器・石器
39	蟹沢	平　　安	集　落　跡	須恵器
40	矢中	平　　安	散　布　地	土師器・須恵器
41	南桜沢	平　　安	散　布　地	土師器・須恵器
42	高谷	縄文・平安	散　布　地	土師器・須恵器等
43	嶋館	中　・　近　世	城　館　跡	堀・土塁
44	惣前町	縄文・平安	散　布　地	土師器
45	杉ヶ崎	縄文・平安	散　布　地	土師器・フレーク
46	石橋	平　　安	集　落　跡	土師器・須恵器
47	中前田	弥生・平安	集　落　跡	弥生土器・土師器
48	横枕	縄文・平安	散　布　地	土師器・須恵器等
49	東袖ノ目	平　　安	集　落　跡	土師器
50	久根妻	奈　　良	散　布　地	非ロクロ土師器等
51	北田Ⅰ	平　　安	集　落　跡	須恵器
52	北田Ⅱ	弥生・奈良・平安	散　布　地	土師器・鉄滓
53	常磐広町	弥生・奈良・平安	散　布　地	弥生土器・石鏃・管玉
54	女子高校跡地	平　　安	散　布　地	土師器・須恵器
55	水山	平　　安	散　布　地	土師器
56	後田	平　　安	集　落　跡	土師器・須恵器
57	一本杉	平　　安	散　布　地	土師器
58	南矢中	平　　安	集　落　跡	土師器・須恵器
59	北田	縄文・平安	集　落　跡	土師器・須恵器
60	高屋敷	平　　安	集　落　跡	土師器・須恵器
61	蛇塚	不　　明	塚　　跡	メノウ勾玉
62	野田	縄文・平安	散　布　地	土師器・石鏃
63	北田Ⅲ	弥生・平安	集　落　跡	弥生土器・土師器
64	跡呂井館（岩淵館）	奈良・平安・中世	城　館　跡	空堀・複郭
65	沼尻	平　　安	散　布　地	土師器
66	大学Ⅰ	縄文・平安	集　落　跡	土師器・須恵器等
67	大学Ⅱ	縄文・平安	集　落　跡	土師器・フレーク
68	垣ノ内Ⅱ	縄文・平安	散　布　地	縄文土器・土師器等
69	垣ノ内Ⅰ	中　　世	散　布　地	陶器
70	梨畑	縄文・平安	散　布　地	縄文土器（中期）等
71	小山崎	縄文・平安	散　布　地	縄文土器（中期）等
72	福原	平　　安	集　落　跡	土師器・須恵器
73	袖谷地Ⅳ	縄文・平安	集　落　跡	土師器・須恵器・フレーク等
74	附野森	縄文・中世	散　布　地	縄文土器・陶磁器
75	龍ヶ馬場	平　　安	散　布　地	土師器
76	須江	平　　安	集　落　跡	土師器・須恵器

No	遺跡名	時代	種別	内容
77	林前	平安	集落跡	土師器・須恵器
78	林前南館	縄文・平安	城館跡	土師器・石器
79	林前館	中世	城館跡	単郭
80	上姉体館	中世	城館跡	空堀・複郭
81	大内田前	平安	散布地	土師器・須恵器
82	林前Ⅱ	平安	散布地	土師器・須恵器
83	水ノ口	平安	散布地	須恵器
84	上野	平安	散布地	土師器・須恵器
85	大壇	平安	集落跡	土師器・須恵器
86	向田	平安	散布地	須恵器
87	北野Ⅰ	平安	散布地	土師器・須恵器
88	小水ノ口	平安	散布地	土師器・須恵器
89	姉体車堂Ⅲ	平安	散布地	土師器・須恵器
90	北白山	平安	散布地	土師器・須恵器
91	元天神前Ⅱ	平安	散布地	土師器・須恵器
92	水ノ口前東	平安	散布地	土師器・須恵器
93	北野Ⅱ	平安	集落跡	土師器・須恵器等
94	北野Ⅲ	平安	集落跡	土師器・須恵器
95	金田Ⅰ	平安	集落跡	土師器・須恵器
96	高田	平安	集落跡	土師器・須恵器
97	雷神Ⅰ	平安	集落跡	土師器・須恵器
98	中林A	平安	集落跡	土師器・須恵器
99	中林下	平安	集落跡	土師器・須恵器
100	中林B	平安	集落跡	土師器・須恵器
101	中林Ⅲ	平安	散布地	土師器・須恵器
102	堤ヶ沢Ⅰ	平安	集落跡	土師器・須恵器
103	堤ヶ沢Ⅱ	平安	散布地	土師器・須恵器
104	折居館（要害）	中・近世	城館跡	単郭・濠・土塁
105	二ノ淵	平安・中世	散布地	土師器・須恵器・陶器
106	真城落合	平安	散布地	土師器
107	中野城	中世	城館跡	複郭・土塁
108	中平館	中世	環濠屋敷	単郭・堀
109	中平西	平安	散布地	土師器・須恵器
110	中平東	平安	散布地	土師器・須恵器
111	寺ヶ前Ⅱ	平安	散布地	土師器
112	目細	平安	散布地・環濠	土師器・須恵器
113	北白山Ⅱ	平安	散布地	土師器・須恵器
114	樋ノ口	平安	散布地	土師器・須恵器
115	土手南	平安	散布地	土師器・須恵器
116	二ツ淵南	平安	散布地	土師器・須恵器
117	栗林	中・近世	経塚・屋敷跡	一字一石経
118	谷地	平安	城館跡	単郭
119	六日城	平安	城館跡	連郭・土塁・空堀
120	西城	中世	城館跡	単郭・平場
121	内館（下姉体城）	中世	城館跡	単郭・平場
122	新川Ⅲ	古代	散布地	土師器
123	後中野	縄文・古代	集落跡	縄文土器・土師器・須恵器
124	宮地	古代	集落跡	土師器・須恵器
125	朴ノ木	古代	散布地	土師器
126	下惣田	縄文・古代	散布地	縄文土器・土師器・須恵器
127	寺田Ⅱ	縄文・古代	散布地	縄文土器・土師器
128	寺田	弥生・古代	散布地	弥生土器・土師器・須恵器
129	後田Ⅰ	古代	散布地	土師器
130	五位塚古墳群		古墳	塚
131	力石Ⅲ	縄文・弥生・古代	集落跡	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器
132	鴻ノ巣館	（平安）・古代	城館跡・集落跡	土師器・須恵器・住居跡・堀
133	大畑	古代	散布地	土師器・須恵器
134	前広田	古代	散布地	土師器
135	中屋敷	古代	散布地	土師器・須恵器
136	四丑		古戦場	
137	鹿野	縄文・古代	散布地	縄文土器
138	羽黒堂古館	中世	城館跡	複郭・平場・空堀
139	外浦洗田	平安	窯跡	須恵器
140	窪田	平安	散布地	
141	旧羽田中	縄文・平安	散布地	縄文土器・土師器・須恵器
142	北鵜木方八丁	縄文・中世	城館跡	縄文土器・複郭・平場・堀
143	鵜ノ木新田法師塚	中世	塚跡	塚
144	鶴城館	中世	城館跡	連郭・平場
145	鶴城	縄文・平安	散布地	縄文土器（後・晩期）・須恵器
146	**杉の堂**	**古墳・奈良・平安**	**集落跡**	**土師器・須恵器・かわらけ・陶磁器**

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1996）：「龍ヶ馬場遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第243集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1997）：「白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第248集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1998）：「北野Ⅳ遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第272集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2000）：「惣前町遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第314集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2002）：「北田Ⅱ遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第395集

3．基本層序

調査区内では以下のような層序が観察された。調査区は南西の隅から北側段丘崖に向かって緩い下り勾配で傾斜している。

Ⅰ．10ＹＲ2/3　黒褐色シルト　粘性やや強　しまりやや疎

　　10ＹＲ4/6　褐色シルト斑状10％含む　雑物多い　（耕作土）

Ⅱａ．10ＹＲ2/2　黒褐色シルト　粘性中　　しまり密

Ⅱｂ．10ＹＲ3/3　暗褐色シルト　粘性中　　しまり中

Ⅲ．10ＹＲ3/2　黒褐色シルト　粘性やや強　　しまり密

Ⅳ．10ＹＲ3/4　暗褐色シルト　粘性やや強　　しまり密

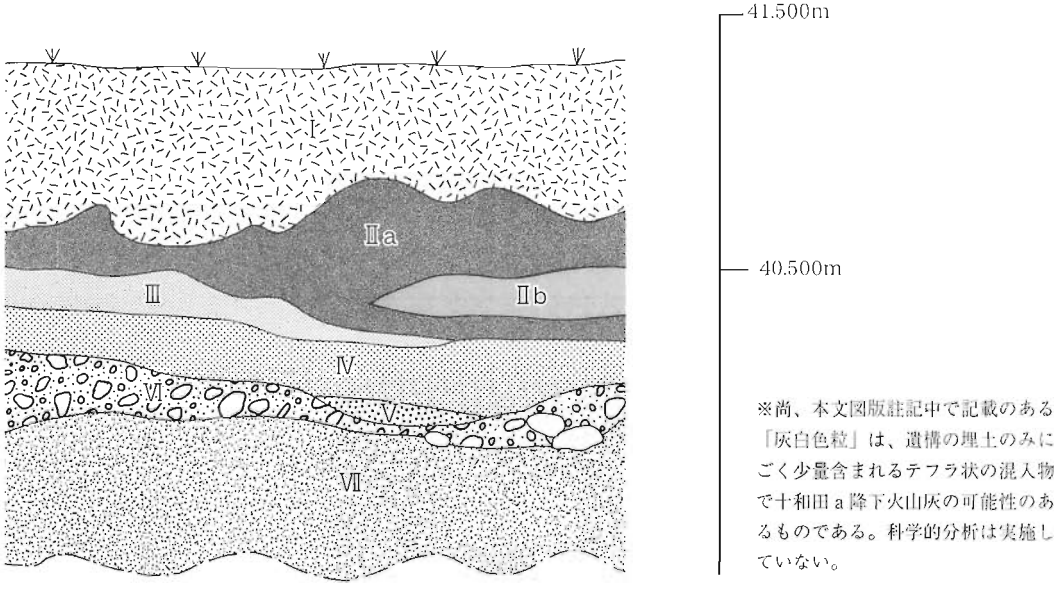
　　10ＹＲ2/2　黒褐色シルトが混じる　（漸移層）

Ⅴ．10ＹＲ4/4　褐色シルト　粘性やや強　　しまり中

　　10ＹＲ4/3　にぶい黄褐色砂質シルト混じる

Ⅵ．10ＹＲ4/6　褐色の砂礫　粘性弱　　しまり密　径10cm大の礫含む

Ⅶ．10ＹＲ3/4　暗褐色の砂　粘性弱　　しまりやや疎　径１～３cm大の礫含む



第３図　基本土層柱状図

4．周辺の遺跡

水沢市には古い時代から人々の生活の痕跡が残っており、岩手県教育委員会生涯学習文化課遺跡台帳によると計320ヶ所の遺跡が登録されている。そのうちもっとも多いのは平安時代の遺跡であり、ついで縄文時代、中世となっている。縄文早期など古い時代の遺跡は上位の段丘や、北上川東岸の丘陵地を中心に分布するが、里鎗遺跡などに代表される後・晩期には下位の水沢段丘面に、さらに弥生時代には水田として利用可能な沖積地へと分布が広がっていく。

古墳時代から奈良時代では遺跡の数は比較的少なくなるが、７世紀に入って増加の傾向を見せる。この時期の代表的な遺跡は21面塚遺跡・４膳性遺跡・20東大畑遺跡・３玉貫遺跡などである。６世紀前半の面塚遺

跡からは、４．５世紀には見られなかった、カマドを持つ住居が見つかっている。膳性遺跡は古墳時代後期から平安時代を中心にして、中世まで続いていており、集落や住居の変遷が辿れる貴重な遺跡である。またこの遺跡では奈良時代の住居跡から圭頭大刀の柄頭が出土している。同様に８世紀の東大畑遺跡からも中央政権の位を示す石帯が出土しており、この地方と中央との交流を示すと共に社会の階層化を示す資料となっている。

８世紀から９世紀初頭にかけての時期は、胆沢地方が大きく混乱した時期である。中央政府の進出による恒常的な戦争状態が続いた後、その結果として律令体制に組み込まれていくのである。136四丑遺跡はこの古戦場の擬定地であるとされている。このような中、現在国指定史跡とされている５胆沢城が作られた。胆沢城は杉の堂遺跡から北西約4.5kmの地点に位置しており、延暦二十一年（802年）坂上田村麻呂によって、軍事・行政の機能を併せ持つ東北支配の拠点として作られた施設である。約150年に渡ってこの地を支配しており、この地域の平安時代は胆沢城を中心に発展していったと言っても過言ではない。

胆沢城が作られた９世紀初頭以後は集落数が増加して居住域も広がり、同時に遺跡に現れる集落の形態が大きく変化する。奈良時代までの自然発生的な集落ではなく、人為的に作られ支配された計画村落・政治村落が見られるようになり、規模も大集落よりは中小の集落が中心となる。それらの集落跡では遺構が計画的に配置、区画されており、土地利用の制約と地元勢力の分断を意図した中央の方針を読みとる事ができる。このように計画的に作られた村落は、先に挙げた膳性遺跡・77林前遺跡・袖谷地遺跡・58南矢中遺跡に見ることができる。

集落の変化と同時に生産に関わる遺跡の増加も見られるようになる。農業生産の面では９～10世紀頃に集中し、124宮地遺跡・中林遺跡などで畠跡が、53常磐広町遺跡・中半入遺跡からは水田跡が確認されている。また須恵器の生産も行われるようになり、胆沢城の官窯とされる江差市の瀬谷子遺跡、水沢市の見分森窯跡などが作られている。

10世紀後半頃なると胆沢城の機能は失われ、それ以後は在地武士団の台頭に関わる遺構、遺物が見られるようになり、11世紀に台頭した安倍氏や平泉の藤原氏の支配を経て、中世へと進んでゆく。

杉の堂遺跡は以前から縄文時代晩期と奈良・平安時代の遺構・遺物が検出される遺跡として知られており、現在まで本調査も含め25次に亘って調査が行われている。今後も国道４号水沢東バイパスの伸長に伴い、遺跡の領域はさらに広がるものと推定される。水沢市では今後も杉の堂遺跡の発掘調査を続ける予定であり、遺跡の全容の解明が待たれる所である。

（齋藤麻紀子）

《参考・引用文献》

水沢市教育委員会(1984):水沢市文化財調査研究年報1984『水沢の自然と文化　Ⅰ』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1996):埋蔵文化財調査報告書第243集『龍ヶ馬場遺跡発掘調査報告書』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1997):埋蔵文化財調査報告書第248集『白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1998):埋蔵文化財調査報告書第272集『北野Ⅳ遺跡発掘調査報告書』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(2000):埋蔵文化財調査報告書第314集『惣前町遺跡発掘調査報告書』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(2002):埋蔵文化財発掘調査報告書第380集『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(2002):埋蔵文化財発掘調査報告書第395集『北田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
河出書房新社　図説　日本の歴史３　「図説　岩手県の歴史」

Ⅲ．調査の方法と室内整理

1．野外調査の方法

（1）グリッドの設定

グリッドの設定は、国家座標第Ｘ系に合わせて基準点２点を設定して基準線とし、これを通るような補点２点を設定した。これらの点は、平成12～13年度に亘って当センターが調査を行った北田Ⅱ遺跡のグリッドにならうものとした。

大グリッドは、これらの点を通るような形で、西から東に50m間隔でＡ・Ｂ・Ｃとアルファベットの大文字を、北から南にＸ・ＸⅠ・ＸⅡと昇順するローマ数字をあてて区画した。またＡ区より西側の部分に関しては、－Ａ区として表した。小グリッドは大グリッドを５×５ｍの間隔で細分し、東西にａ～ｊのアルファベットの小文字を、南北に１～10の算用数字をあてて区画した。グリッドの基点は北西に置き、調査区の名称は大グリッドと小グリッドの組み合わせでＸＡ１ａ、ＸＢ２ｂというように呼称している。

基準点、補点の国家座標第Ｘ系の座標値は以下の通りである。

	日本測地系		世界測地系		標高
基準点１	Ｘ＝－95,770,000	Ｙ＝28,780,000	Ｘ＝－95,461,821	Ｙ＝28,479,697	Ｈ＝41.150m
基準点２	Ｘ＝－95,820,000	Ｙ＝28,780,000	Ｘ＝－95,511,821	Ｙ＝28,479,697	Ｈ＝40.480m
補点１	Ｘ＝－95,820,000	Ｙ＝28,730,000	Ｘ＝－95,511,821	Ｙ＝28,429,697	Ｈ＝42.197m
補点２	Ｘ＝－95,850,000	Ｙ＝28,780,000	Ｘ＝－95,541,822	Ｙ＝28,479,696	Ｈ＝40.653m

（2）粗堀・遺構検出

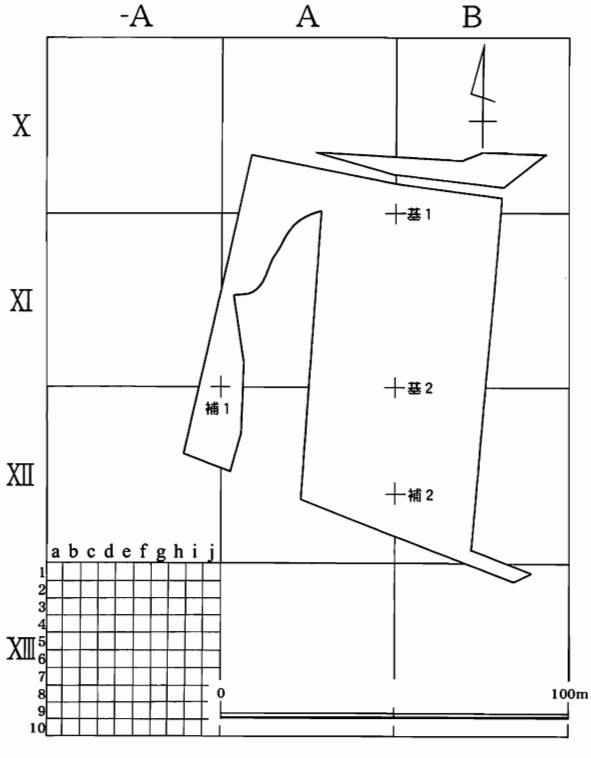
調査は、雑物の除去後に表土の厚さや遺構の有無・遺物の出土状況を確認する目的で、調査区全体に人力により数本のトレンチを入れ、その後重機を使用して表土除去を行った。次に試掘結果に基づき、人力により遺構の有無を確認しながら地山まで掘り下げた。

（3）遺構の命名・精査と遺物の取り上げ

検出された遺構は、検出順・種別ごとにＳＩ01竪穴住居跡、ＳＫ03土坑というように命名した。基本土層の層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

遺構の精査は４分法を原則として土層を観察しながら進めたが、必要に応じて他の方法も併用した。精査の各段階において必要図面の作成や写真の撮影も適宜行っている。

遺物の取り上げに当たっては、遺構内では埋土上位・中位・床面等で取り上げ、遺構外遺物については小グリッドと基本層序で取り上げた。



第４図　グリッド配置図

（4）実測・写真撮影

各遺構とも平面実測はグリッド軸に合わせた１ｍのメッシュを基準として、断面実測では水平水糸を張り基準として行った。原則として20分の１縮尺を用い、必要に応じてその他の縮尺も用いた。

野外調査における写真撮影は、35㎜判２台（モノクローム・カラーリバーサル各１台ずつ）と６×９判モノクローム１台を使用し、遺構・遺物の検出状況や出土状況を中心に撮影した。他ポラロイドカメラ１台、デジタルカメラ１台をメモ的に使用している。

２．室内整理

図面の点検・合成・遺物の洗浄・写真の整理は、原則として野外調査と並行して行った。

（1）遺物の処理

遺物は、洗浄後に全出土遺物を点検し、実測や拓本の必要なものを選択した後、遺構内外に分けて登録し、注記・接合・復元の順に進めた。その後、写真撮影・実測・トレース・図版作成と作業を進めた。

（2）遺構図面

遺構図面は、平面図・断面図の照合、土層注記・レベル等の確認後に第二原図を作成し、その後トレース・遺構図版組みの順に作業を進めた。

１．遺構図の用例は下記の通りである。

（１）遺構実測図の縮尺は基本的に竪穴住居跡・遺物集中区・竪穴状遺構・方形周溝1/60、土坑1/40、柱穴状小ピット群1/120である。ただし遺構規模の関係上これに合わない図面もあるため、その都度スケールおよび縮尺を付した。

（２）推定線は原則として破線で表記した。これに沿わない場合は挿図中に記した。

（３）色調の観察に当たっては、農林水産省農林水産技術会議事務所監修「新版標準土色帖」を使用した。

（４）図面中の土器は「Ｐ」、礫は「Ｓ」の略号で表記した。

（５）挿図中で使用したスクリーントーンの用例は下図の通りである。それ以外の物についてはその都度挿図中に記した。

２．遺物実測図の用例は下記の通りである。

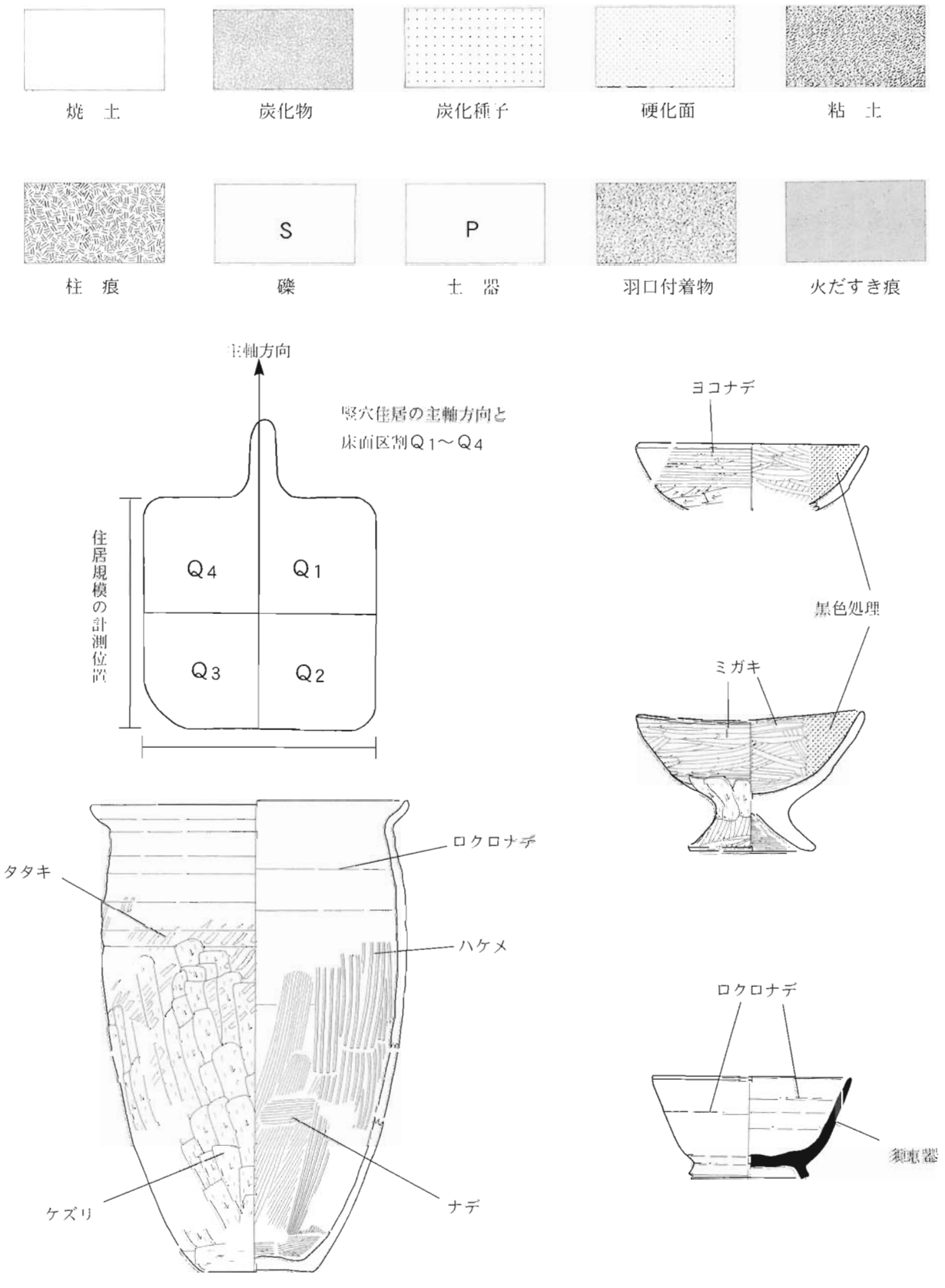
（１）縮尺は土器・礫石器が1/3（大形の土器1/4、1/6）、古銭が1/1、その他が1/2である。尚、同一図版上に異なる縮尺の遺物が混在する場合は、その都度スケール及び縮尺を付した。

（２）土器の実測にあたり、口縁部1/5以上残存する場合は努めて図上復元を試みた。

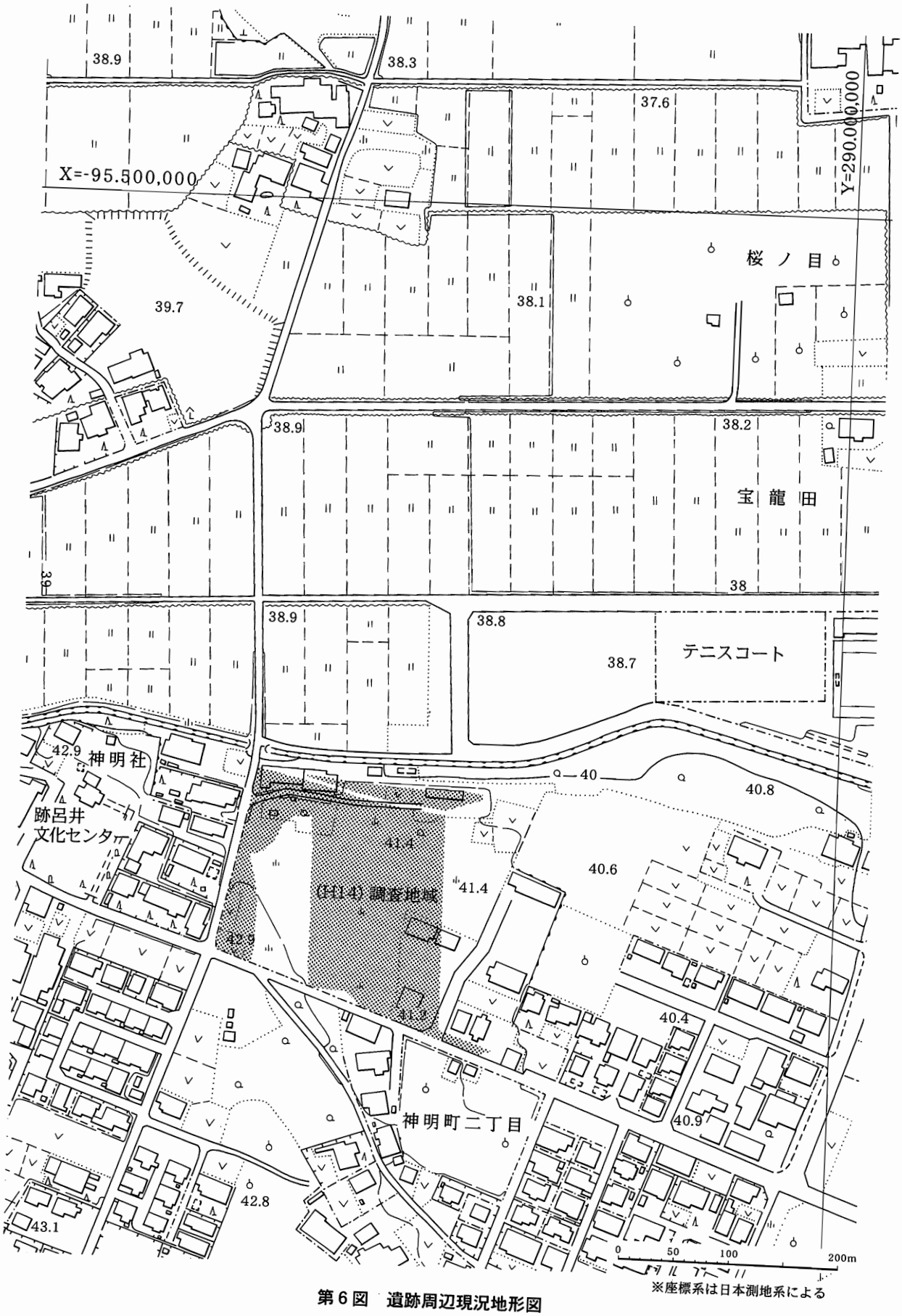
（３）本文および遺物観察表の数値に冠した（　）は推定値を、－は残存値を示している。

３．国土地理院発行の地形図を複製したものは、図中に図幅名と縮尺を記した。

４．引用・参考文献は各章末に記した。


焼　土
炭化物
炭化種子
硬化面
粘　土
柱　痕
S
礫
P
土　器
羽口付着物
火だすき痕
主軸方向
竪穴住居の主軸方向と
床面区割Q1～Q4
住居規模の計測位置
Q4
Q1
Q3
Q2
ヨコナデ
黒色処理
ミガキ
ロクロナデ
タタキ
ハケメ
ケズリ
ナデ
ロクロナデ
須恵器

第５図　図版凡例



※座標系は日本測地系による

第6図　遺跡周辺現況地形図

Ⅳ．検出した遺構と出土遺物

１．竪穴住居跡

ＳＩ０１竪穴住居跡

遺構（第７～９図、写真図版３）

＜位置・重複関係＞ＸＩＢ10ｃグリッド、検出面はⅣ層の暗褐色シルトである。東壁は本調査前試掘時の削平により消失している。北東側で24号竪穴住居、４号土坑と重複しており、これにより切られる。

＜規模・平面形＞東辺6.2m、西辺6.4m、南辺6.2m、北辺6.19mのほぼ隅丸方形を呈する。

＜埋土＞黒褐色シルトを主体として構成され、全体に焼土粒、炭化物粒を含む。

＜壁＞暗褐色シルトを掘り込んで構築している。壁高の残存値は15～28cmである。

＜床面＞床面上４～15cmほどのところで拳大の礫が多量に認められた。床面そのものはほぼ平坦でしまっており、東西と南側の壁際には壁溝が巡る。８層は黒褐色シルトと明黄褐色シルトの混合土で、貼り床と考えられる。

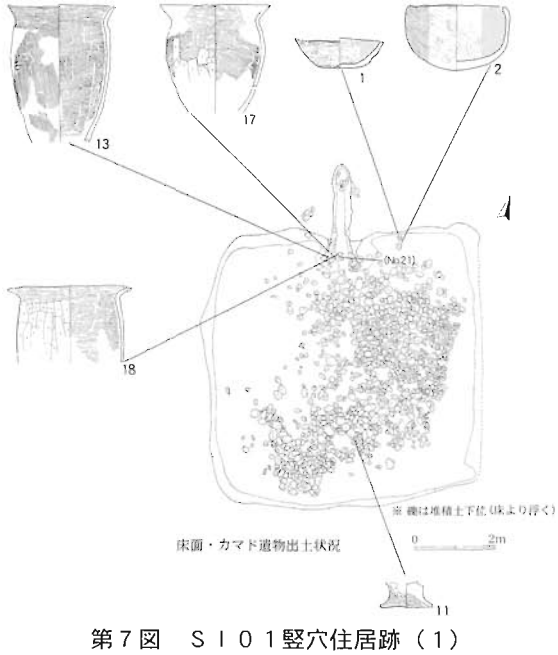
＜カマド＞北壁の中央に構築されている。煙道、煙出し部は近接する24号住居跡による削平を受け、残存状態は不良である。カマド本体は黒褐色と暗褐色のシルト主体で造られ、左右の袖には拳大の礫や土師器長胴甕が芯材として用いられる。火床面は76cmほどの楕円形で、酸化面は弱く、赤褐色焼土ブロックが混入する程度である。燃焼部中央には拳大の礫に土師器甕の底部を被せた支脚が検出された。煙道部は残存部で幅45cm、長さ184cm前後の溝状に掘り込まれる。煙道部は煙出孔へ向かい徐々に深くなっており、確認面からの深さは26cmである。煙道の構造など詳細は残存不良のため不明である。

＜柱穴・ピット＞床面の四隅から計４基の柱穴と、北東隅にピットを１基検出した。柱穴は径40～55cm、深さ30～40cm前後で平面形は円形を呈する。これらは配置により、住居内の主柱穴を構成するものと考えられる。ピットは径42cm、深さ19cm、平面形は同様に円形を呈している。

遺物（第10図、写真図版36・37）

21点が出土した。床面から土師器片10点、カマド芯材として土師器片４点、支脚に転用された土師器片１点、住居堆積土から土師器片６点である。器種は坏、高坏、甕で構成され、製作に際してロクロは使用されていない。３は土師器坏でＳＩ02カマド周辺床面から出土した破片と接合した。17はカマド構成材となる土師器甕でＳＩ02の１層から出土した破片と接合した。

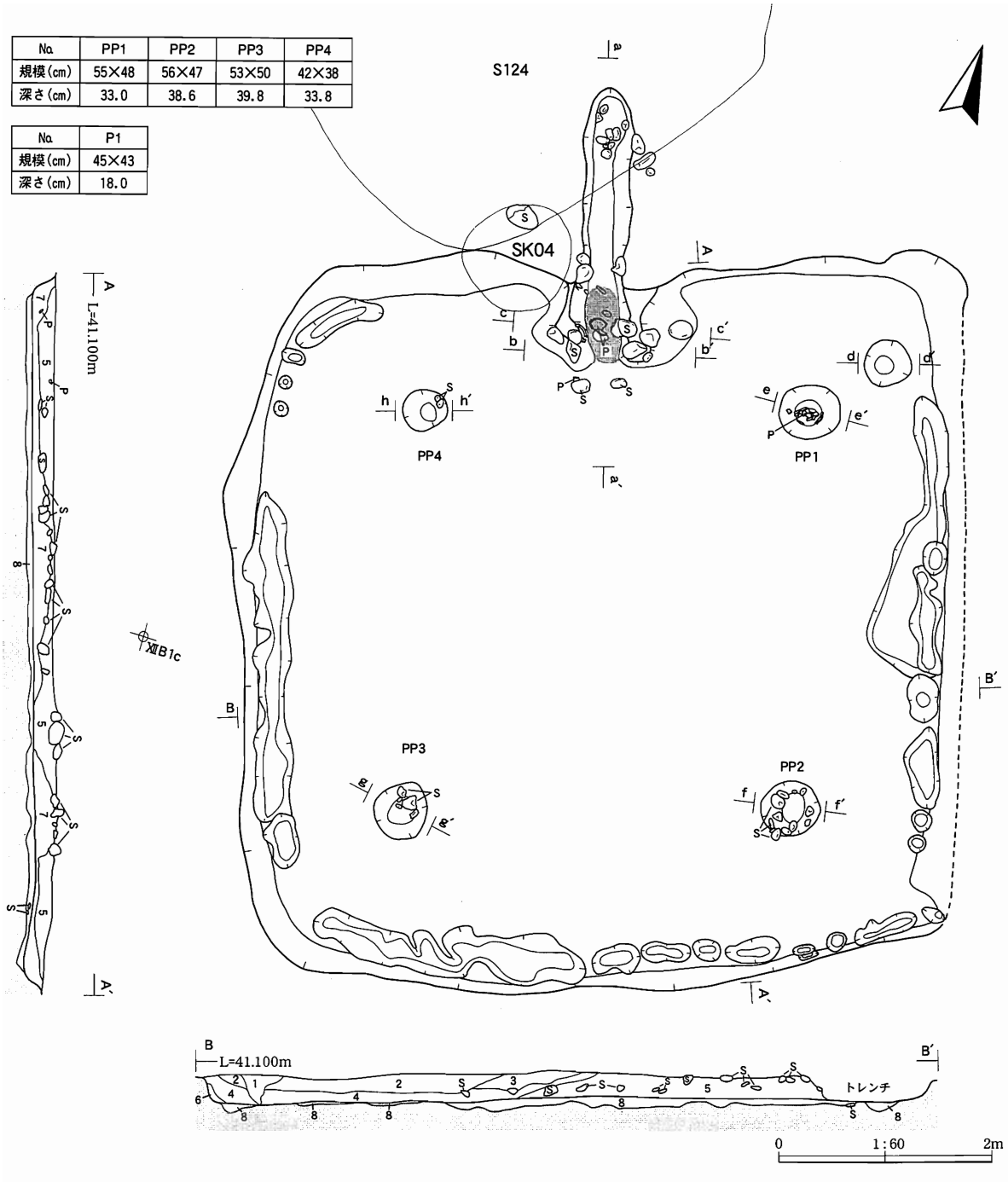
〔小結〕床面直上で多量に認められた礫は、検出状況から判断して一括して廃棄されたような状態を示すものと推測された。礫は周辺の基盤礫層のものと類似することから、隣接する２号住居を構築する際の基盤礫が本住居跡の廃絶後に投げ込まれたものである可能性がある。遺物の特徴から本遺構は奈良時代に属するものと推察される。



第７図　ＳＩ０１竪穴住居跡（１）

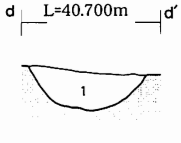
No.	PP1	PP2	PP3	PP4
規模(cm)	55×48	56×47	53×50	42×38
深さ(cm)	33.0	38.6	39.8	33.8

No.	P1
規模(cm)	45×43
深さ(cm)	18.0



埋土断面(A−A′・B−B′)

1	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性中 しまりやや密	灰白色粒2%含む 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
2	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性やや強 しまり中	灰白色粒1%未満含む 焼土粒5%・炭化物粒2%含む
3	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性やや強 しまり中	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
4	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性やや強 しまり中	10YR5/8黄褐色シルト粒2%含む 炭化物片1%含む
5	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	
6	10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/8黄褐色シルトの混合土	粘性強 しまり中	10YR5/8黄褐色シルト粒1%含む 焼土粒2% 炭化物片1%含む大型の礫を多量に含む
7	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性やや強 しまりやや疎	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
8	10YR2/3黒褐色シルトと10YR6/8明黄褐色シルトの混合土	粘性やや強 しまり密	貼り床部分

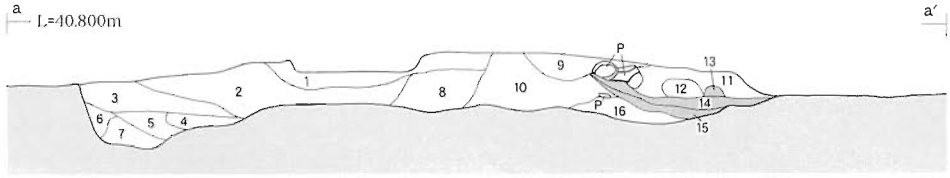


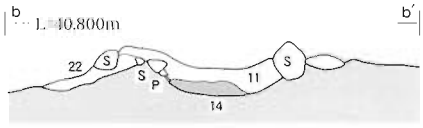
P1(d−d′)

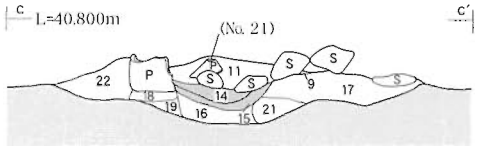
1	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性弱 しまり疎	10YR5/6 黄褐色シルト粒1% 炭化物粒1% 径0.5~3cm大の礫2%含む

0 1:30 1m

第8図 SI01竪穴住居跡(2)

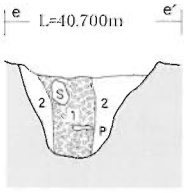






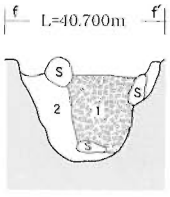
カマド煙道埋土（a－a′・b－b′・c－c′）

1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり密		10YR5/6黄褐色シルトブロック10% 焼土粒・炭化物粒各1%含む
2	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり密		10YR5/6黄褐色シルト粒5% 焼土粒・炭化物粒各1%含む
3	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性やや強 しまりやや疎		10YR5/8黄褐色シルト粒2% 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
4	10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト	粘性弱 しまり中		径5cmほどの砂礫が混じる
5	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性強 しまり疎		焼土粒・炭化物粒各1%含む
6	10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトと10YR2/2黒褐色シルトの混合土	粘性中 しまり中		炭化物粒1%含む
7	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性やや強 しまり疎		10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト粒2%含む
8	7.5YR2/3 極暗褐色シルト	粘性中 しまりやや疎		10YR5/6黄褐色シルトブロック15% 炭化物各1%含む
9	10YR5/8黄褐色シルトと10YR3/3暗褐色シルトの混合土	粘性弱 しまり密		焼土粒1% 炭化物粒1%未満含む
10	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性弱 しまり密		10YR5/6黄褐色シルト粒10% 焼土粒・炭化物粒各2%含む
11	7.5YR3/1 黒褐色シルト	粘性やや弱 しまり密		10YR8/1灰白色粒1%含む 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
12	7.5YR7/6 橙色の灰?	粘性弱 しまり密		焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
13	5YR4/4 にぶい赤褐色の焼土	粘性弱 しまり中		
14	7.5YR3/4 暗褐色シルト	粘性弱 しまり密		7.5YR8/4浅黄橙色粒2% 焼土粒2%含む
15	5YR4/6赤褐色の焼土と7.5YR5/6明褐色シルトの混合土	粘性弱 しまり中		
16	7.5YR3/3 暗褐色シルト	粘性弱 しまり中		一部は被熱赤変する。炭化物粒1%含む
17	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性弱 しまり密		10YR6/6明黄褐色シルトブロック8% 焼土粒1%未満含む
18	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性中 しまり密		10YR6/6明黄褐色シルト粒2% 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
19	10YR5/8 黄褐色シルト	粘性弱 しまり密		
20	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性弱 しまり密		10YR5/6黄褐色シルトブロック5% 焼土粒2%含む
21	10YR4/6 褐色シルト	粘性中 しまり中		10YR2/2黒褐色シルト斑状5% 焼土粒3%含む
22	10YR3/3暗褐色シルトと10YR5/8黄褐色シルトの混合土	粘性弱 しまり密		灰白色粒1%未満含む



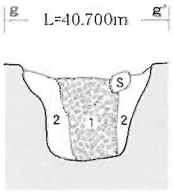
ＰＰ１（e－e′）

1	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性やや弱 しまり疎（柱痕）	径5cm大の礫含む
2	10YR4/6褐色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混合土	粘性やや弱 しまり疎	



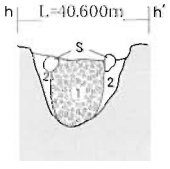
ＰＰ２（f－f′）

1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性やや弱 しまり中（柱痕）	10YR4/6褐色シルトを斑状に5%含む 径5cm大の礫含む
2	10YR4/6褐色シルトと10YR3/4暗褐色シルトの混合土	粘性弱 しまりやや疎	



ＰＰ３（g－g′）

1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性やや弱 しまり疎（柱痕）	10YR4/6褐色シルト粒3%含む
2	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性弱 しまり疎	10YR4/6褐色シルトを斑状に5%含む 径3cm大の礫含む

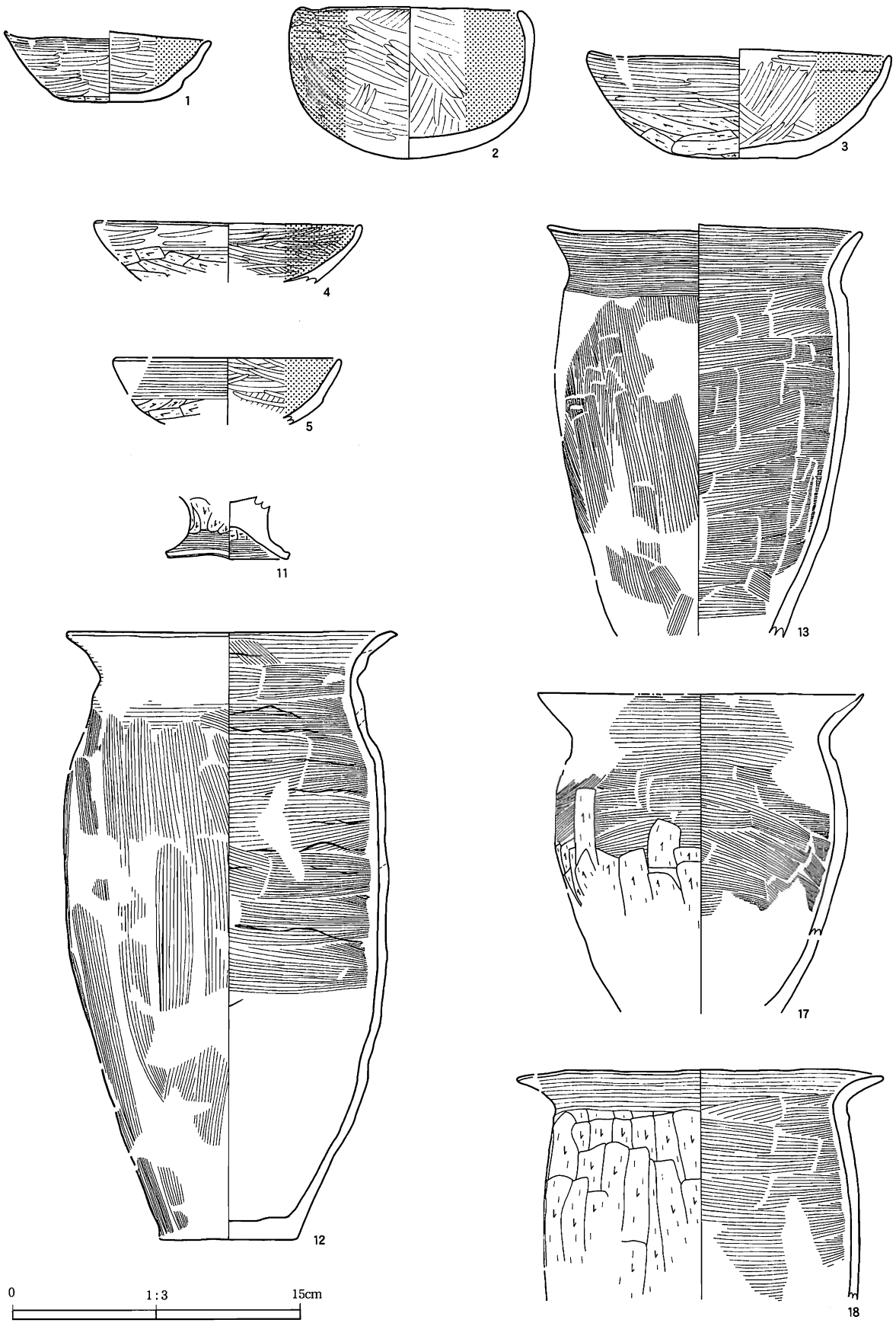


ＰＰ４（h－h′）

1	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性 中 しまり中（柱痕）	径3～5cm大の礫含む
2	10YR3/2 黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂質シルトの混合土	粘性弱 しまり中	

0 1:60 2m

第９図　ＳＩ０１竪穴住居跡（３）



第10図　ＳＩ０１竪穴住居跡（４）

ＳＩ０２竪穴住居跡

遺構（第11・12図、写真図版４）

＜位置・重複関係＞ＸⅡＢ１ｅグリッドに位置する。東隅は調査区外にかかっており、この部分については未調査である。検出面はⅣ層下位である。東壁は本調査前試掘時の削平により消失している。検出された段階で上部は削平されており、床上数cmを残すのみとなっていた。

＜規模・平面形＞北東辺－4.12m、北西辺6.9m、南西辺6.48m、南東辺－3.0mのほぼ隅丸方形を呈するものと推定される。東隅が調査区外にかかっているため北東辺、南東辺の値は残存値である。

＜埋土＞黄褐色シルトを含む黒褐色シルトを確認したのみである。これより上位は削平されており不明である。

＜壁＞壁高の残存値は２～８cm前後である。

＜床面＞段丘基盤礫まで掘り込んで床面としており、堅くしまる。西～北西の壁際の一部に壁溝が巡る。貼り床は確認できなかった。

＜カマド＞北西壁の中央に構築されている。煙道、煙出し部はトレンチ溝による攪乱を受け、残存状態は不良である。カマド本体はにぶい黄褐色、黒褐色～暗褐色のシルトで造られ、左右の袖には径18～26cmの礫が芯材として用いられる。火床面には径60×45cm、厚さ10cmの範囲で焼土が形成され、強い酸化面を形成する。支脚は検出されていない。煙道部は残存部で幅36cm、長さ180cm前後の溝状に掘り込まれる。煙道部は煙出孔へほぼ平坦に続いており、煙出孔は径55×40cm　深さ17cmの土坑状に掘り込まれる。煙道の構造など詳細は残存不良のため不明である。

＜柱穴・ピット＞床面から計４基の柱穴および土坑が検出された。規模は径50～80cm、深さ34～45cm前後で平面形は円形を呈する。ＰＰ１～ＰＰ３は配列により主柱穴の一部を構成するものと考えられるが、Ｐ１に関しては位置・形状から判断して土坑と考えられる。柱穴は更に東側の未調査部分にも存在するものと推測される。

遺物（第12図、写真図版37）

残存状態が悪く、出土点数は少ない。床面から土師器片１点、堆積土中から土師器片３点、須恵器片１点が出土した。器種は坏、高坏、甕で構成される。26は床面から出土した甕で、カマドの右袖脇からつぶれた状態で出土した。25は堆積土中から出土した大甕で、外部からの混入と考えられる。27は床面から出土した羽口片である。本遺構に伴うものであるかは不明である。出土遺物から判断して、本遺構は奈良時代に属する可能性が高い。

ＳＩ０３竪穴住居跡

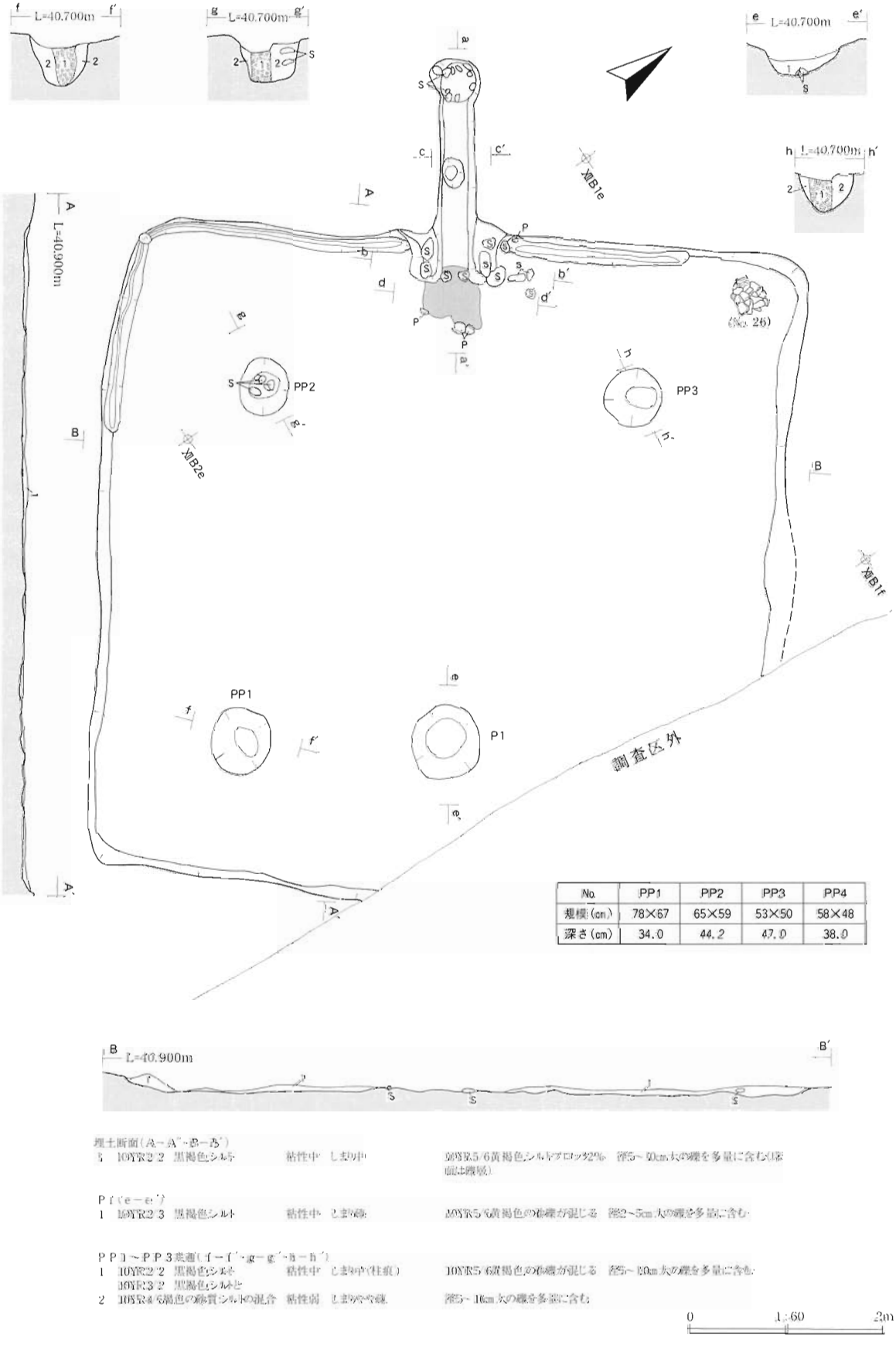
遺構（第13～15図、写真図版５）

＜位置・重複関係＞ＸＩＢ３ｃグリッドに位置する。１号溝跡と重複し、これにより切られる。検出はⅣ層で、多量の炭化物を含む黒色のプランとして確認した。

＜規模・平面形＞北東辺5.95m、北西辺－3.5m、南西辺－1.35m、南東辺6.26mのほぼ隅丸方形を呈するものと思われる。北西辺、南西辺は残存値である。

＜埋土＞３層からなり、黒褐色シルト主体で構成される。全体に焼土、炭化物を含む。床面直上に炭化材、移地性の焼土が多量に分布する。

＜壁＞壁高の残存値は10～20cm前後である。



No.	PP1	PP2	PP3	PP4
規模(cm)	78×67	65×59	53×50	58×48
深さ(cm)	34.0	44.2	47.0	38.0

埋土断面(A－A′・B－B′)

5	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR5/6黄褐色シルトブロック2% 径5～10cm大の礫を多量に含む(床面は礫層)

P1(e－e′)

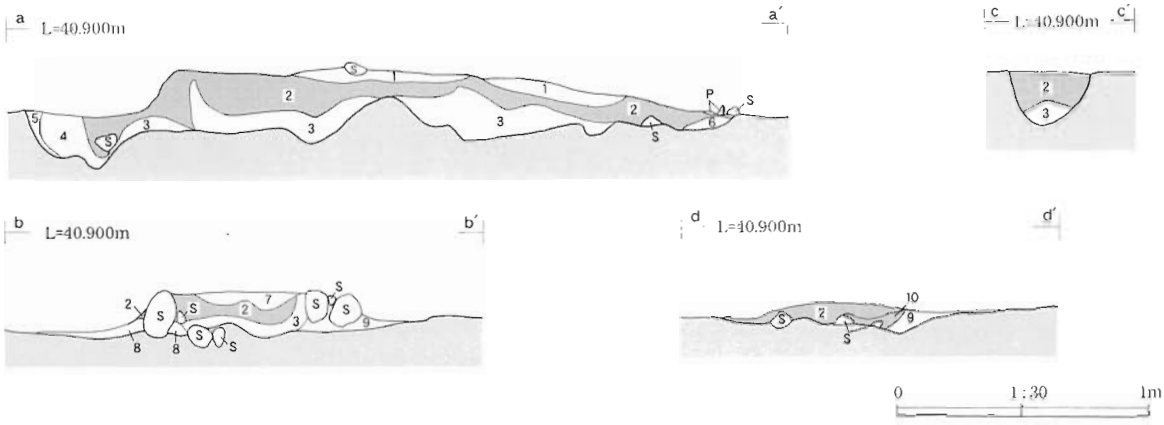
1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり強	10YR5/6黄褐色の砂礫が混じる 径2～5cm大の礫を多量に含む

PP1～PP3共通(f－f′・g－g′・h－h′)

1	10YR2/2 黒褐色シルト 10YR3/2 黒褐色シルトと	粘性中 しまり中(柱痕)	10YR5/6黄褐色の砂礫が混じる 径5～10cm大の礫を多量に含む
2	10YR4/6黒色の粘質シルトの混合	粘性弱 しまりやや強	径5～10cm大の礫を多量に含む

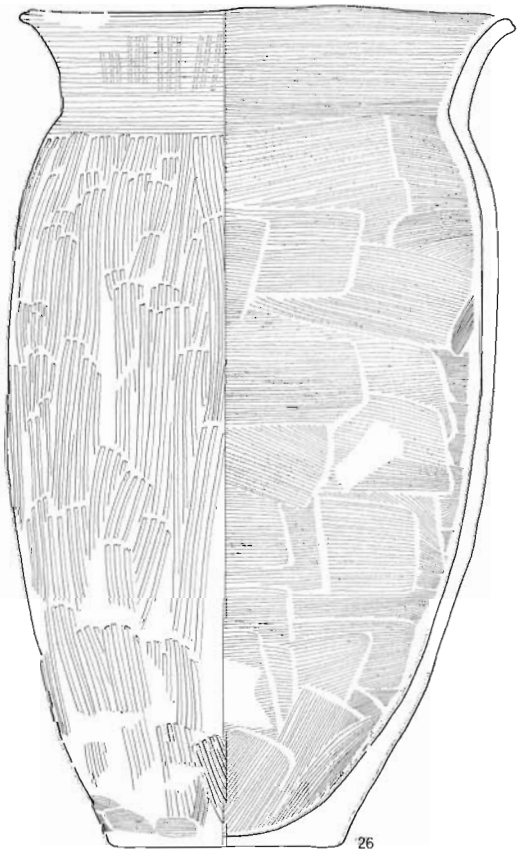
0　1:60　2m

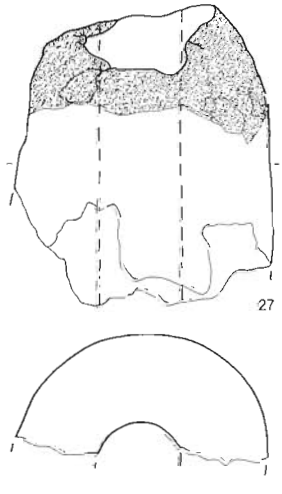
第11図　ＳＩ０２竪穴住居跡（１）

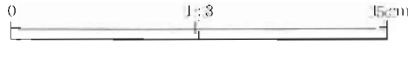


カマド煙道埋土（a－a′・b－b′・c－c′・d－d′）

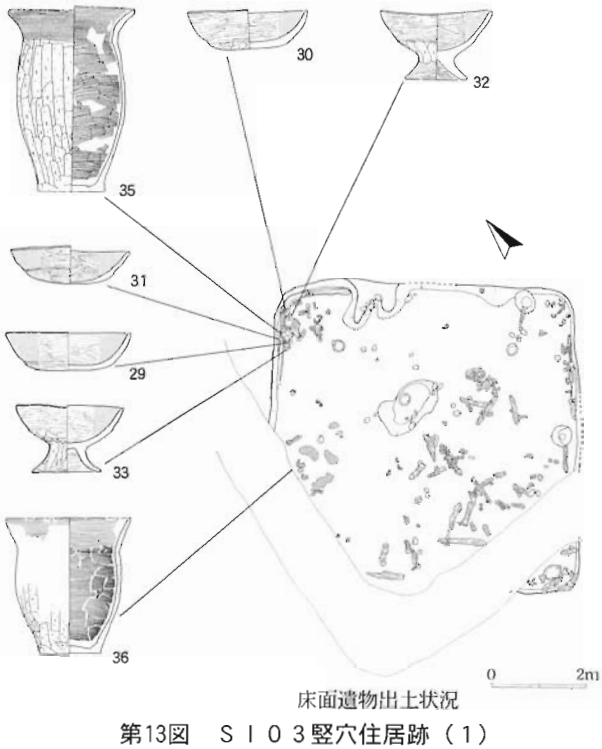
1	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性中 しまり密	10YR5/6黄褐色シルトブロック10% 焼土粒1%未満、炭化物粒1%含む	
2	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性中 しまりやや密	焼土粒・炭化物粒各2% 一部被熱赤変する	
3	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性やや強 しまりやや疎	10YR5/6黄褐色シルト斑状3%含む 焼土粒・炭化物粒各5%含む	
4	7.5YR2/2 黒褐色シルト	粘性やや強 しまりやや密	焼土粒・炭化物粒各1%含む	
5	10YR3/2 黒褐色シルトと 10YR4/6褐色シルトの混合土	粘性中 しまりやや疎	炭化物粒1%未満含む	
6	7.5YR2/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	炭化物粒2%含む 径3～5mmの砂礫2%含む	
7	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト	粘性弱 しまりやや密	炭化物粒1%未満含む 径5～10cm大の礫多く含む	
8	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性やや弱 しまりやや密	10YR5/6黄褐色シルト粒1%含む	
9	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	炭化物粒1%未満含む	
10	7.5YR5/8 明褐色の焼土	粘性やや強 しまりやや疎	10YR2/2 黒褐色シルト粒2%含む	







第12図　ＳＩ０２竪穴住居跡（２）



第13図　ＳＩ０３竪穴住居跡（１）

＜床面＞多量の炭化材と焼土が散材し、焼失住居の様相を呈する。床自体はほぼ平坦でしまっており、黒褐色シルトと黄褐色シルトの混合土により貼り床が施される。北西、北東、南東の壁際には壁溝が巡る。

＜カマド＞北東壁の北寄り、壁辺1/3の場所に構築されている。全体的に残存状態は不良である。カマド本体は黒褐色～暗褐色、黄褐色シルトで造られ、左右の袖には大型の礫が芯材として用いられる。火床面は明確に認められず、全体的に赤褐色の焼土ブロックが５％ほど混入する程度である。煙道部は削平のため残存しておらず、構造など詳細は残存不良のため不明である。

＜柱穴・ピット＞床面からピット２基、柱穴４基を検出した。柱穴は径24～44cm前後、深さ25～40cm前後で平面形は円形を呈する。これらは配列から住居の主柱穴を構成するものと考えられる。

Ｐ１は住居の中央部に位置する。径135×75cm、深さ35cmで平面形は不整な楕円形を呈する。

Ｐ２は北東隅の壁際に位置し、径51×42cm、深さ30cmを測る。平面形は円形を呈する。

遺物（第16図、写真図版38・39）

良好な一括遺物が得られている。床面から土師器片12点、カマド構成材として土師器片３点、堆積土中から土師器片１点が出土した。器種は坏、高坏、鉢、甕で構成され、製作に際してロクロは使用されない。

坏は、体部下半において弱い段を形成するもの（29～31）と、無段のもの（28）で構成される。32・33は高坏で、坏部の下半に弱い段が形成され、脚部が短く開く。35は甕で体部弱く膨らみ、口縁部に最大径を持つ。外面はハケメ＋ケズリ調整される。44は床面から出土した安山岩製の円礫である。出土遺物から判断して本遺構は奈良時代に属するものと推察される。

ＳＩ０４竪穴住居跡

遺構（第17～19図、写真図版６）

＜位置・重複関係＞調査区北側段丘縁のＸＩＢ１ｅに位置する。検出面はⅣ層で暗褐色のプランとして確認した。南側の一部は塩化ビニール管敷設時の撹乱を受けている。

＜規模・平面形＞東辺4.63m、西辺3.85m、北辺4.84m、南辺4.46mの隅丸方形を呈する。

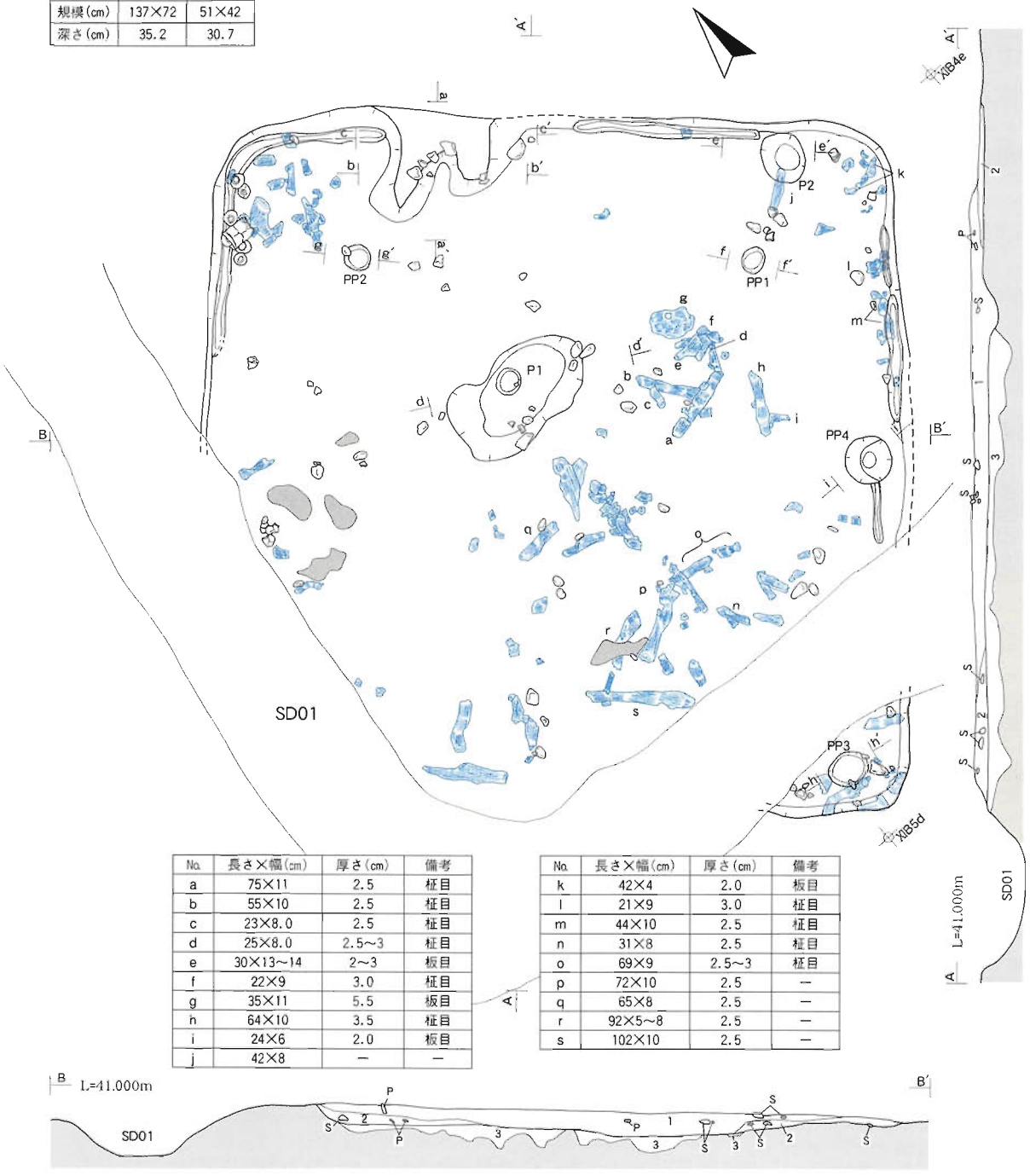
＜埋土＞13層からなる。焼土、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成され、下位に黄褐色シルトが少量含まれる。また、中位に径５～10cm大の礫を多量に含む。

＜壁＞壁高の残存値は12～20cmである。

＜床面＞Ⅳ層を掘り込んで形成されている。床面はほぼ平坦で堅くしまるものであるが、中央部～北側にかけては若干凹凸が認められる。床面の全域には黒褐色シルトと黄褐色シルトの混合土によって貼り床が施される。東辺を除く三方の壁際には壁溝が途切れながら短く巡る。

No.	PP1	PP2	PP3	PP4
規模(cm)	25×23	24×23	36×30	44×43
深さ(cm)	33.9	39.7	26.6	35.1

No.	P1	P2
規模(cm)	137×72	51×42
深さ(cm)	35.2	30.7



No.	長さ×幅(cm)	厚さ(cm)	備考
a	75×11	2.5	柾目
b	55×10	2.5	柾目
c	23×8.0	2.5	柾目
d	25×8.0	2.5～3	柾目
e	30×13～14	2～3	板目
f	22×9	3.0	柾目
g	35×11	5.5	板目
h	64×10	3.5	柾目
i	24×6	2.0	板目
j	42×8	—	—

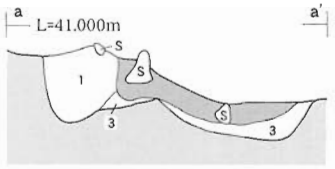
No.	長さ×幅(cm)	厚さ(cm)	備考
k	42×4	2.0	板目
l	21×9	3.0	柾目
m	44×10	2.5	柾目
n	31×8	2.5	柾目
o	69×9	2.5～3	柾目
p	72×10	2.5	—
q	65×8	2.5	—
r	92×5～8	2.5	—
s	102×10	2.5	—

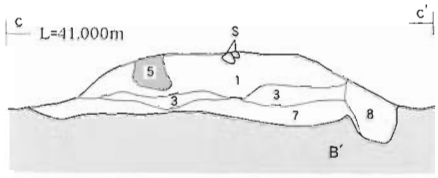
埋土断面(A－A′・B－B′)

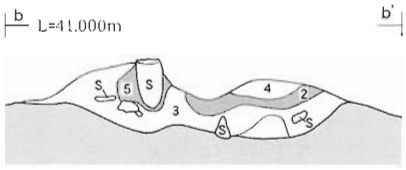
1	10YR2/1 黒色シルト	粘性中 しまり中	焼土粒1%含む 炭化物粒2%含む
2	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性やや弱 しまり中	焼土粒2%含む 炭化材、炭化物片を8%含む 径5～10cm大の礫を含む
3	10YR2/2 黒褐色シルトと 10YR5/8黄褐色のシルトの混合土	粘性弱 しまり中	貼り床部分

0 1:60 2m

第14図 ＳＩ０３竪穴住居跡（２）

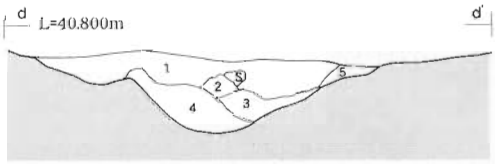


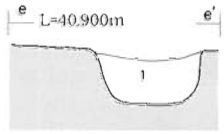




カマド埋土（a－a′・b－b′・c－c′）

1	10YR3/1　黒褐色シルト	粘性中　しまりやや疎	焼土粒・炭化物粒各2%含む
2	7.5YR2/3　極暗褐色シルト	粘性やや弱　しまり密	10YR5/8明赤褐色の焼土ブロック5%含む　径5cm大の礫多い
3	10YR2/3　黒褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	10YR5/8黄褐色砂質シルト2%含む
4	7.5YR3/2　黒褐色シルト	粘性やや弱　しまり密	焼土粒5%含む　炭化物粒2%含む
5	7.5YR2/2　黒褐色シルト	粘性中　しまり密	10YR4/8赤褐色の焼土斑状8%含む　炭化物粒1%含む
6	10YR3/3　暗褐色シルトと 10YR5/8黄褐色砂質シルトの混合土	粘性やや弱　しまり中	炭化物粒1%未満含む
7	10YR5/8黄褐色砂質シルト	粘性やや弱　しまりやや疎	10YR3/1　黒褐色シルト斑状5%含む　径1～3cm大の礫多く含む
8	10YR2/2　黒褐色シルト（抜き取り痕）	粘性中　しまり中	10YR5/8　黄褐色砂質シルト1%未満含む



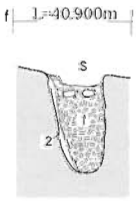


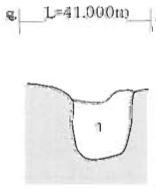
P1（d－d′）

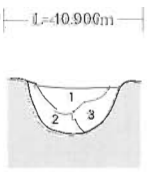
1	10YR2/2　黒褐色シルト	粘性弱　しまり中	焼土粒2%含む　炭化物粒5%含む
2	10YR4/4　褐色砂質シルト	粘性やや弱　しまり中	10YR2/2黒褐色シルト3%混じる　炭化物粒2%含む
3	10YR3/2　黒褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	10YR4/4　褐色砂質シルト2%含む　炭化物粒1%未満含む
4	10YR2/2　黒褐色シルトと 10YR4/4褐色のシルトの混合土	粘性中　しまり中	炭化物粒1%未満含む
5	10YR4/3　にぶい黄褐色シルト	粘性中　しまりやや密	炭化物粒1%未満含む

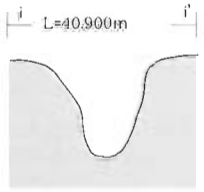
P2（e－e′）

1	10YR2/2　黒褐色シルト	粘性やや強　しまり疎	10YR5/8黄褐色砂質シルト斑状5%含む　炭化物片8%含む









PP1（f－f′）

1	10YR2/2　黒褐色シルト	粘性中　しまり疎（圧痕）	10YR5/8黄褐色砂質シルト斑状3%含む　上壁部に径3～5cm大の礫を含む
2	10YR5/6　黄褐色砂質シルトと 10YR2/2黒褐色シルトの混合土	粘性中　しまり疎	

PP2（g－g′）

1	10YR2/2　黒褐色シルト	粘性やや強　しまり疎	10YR5/6黄褐色砂質シルト斑状5%含む　炭化物粒1%未満含む

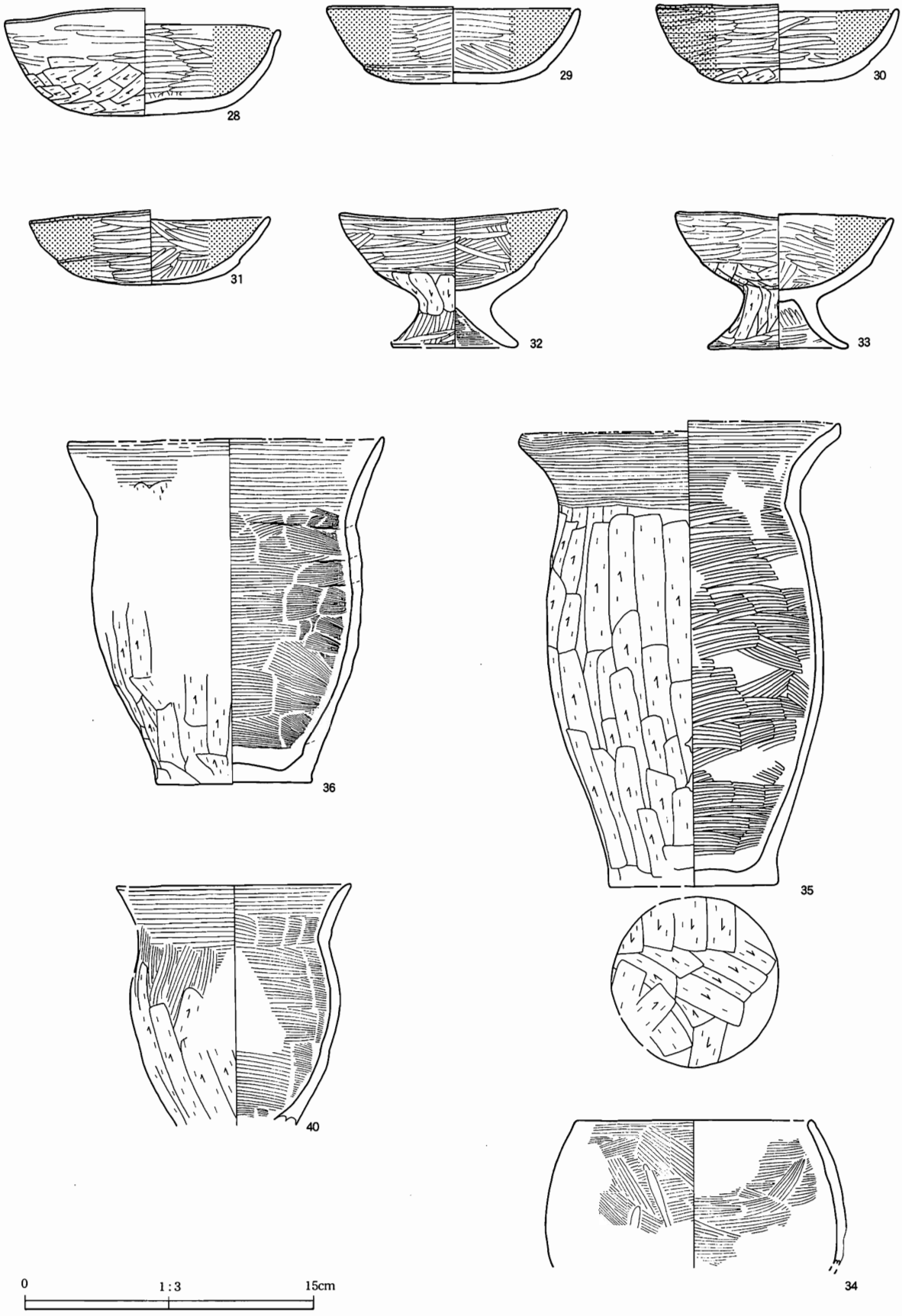
PP3（h－h′）

1	10YR2/2　黒褐色シルト	粘性中　しまり疎	10YR4/4　褐色砂質シルト2%含む　炭化物粒1%含む
2	10YR3/2　黒褐色シルト	粘性やや強　しまり疎	10YR4/4　褐色砂質シルト3%含む　炭化物粒1%未満含む
3	10YR4/4　褐色砂質シルトと 10YR2/2黒褐色シルトの混合土	粘性やや強　しまり疎	

PP4（i－i′）エレベーション図のみ

0　1:30　1m

第15図　ＳＩ０３竪穴住居跡（３）

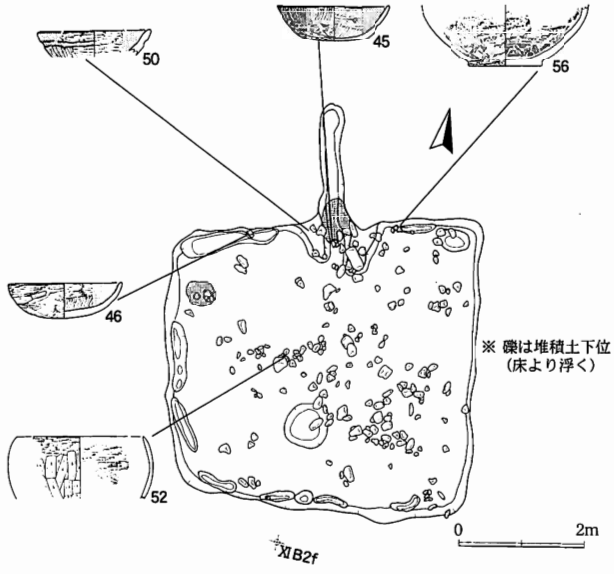


第16図　ＳＩ０３竪穴住居跡（４）

<カマド>北壁の中央やや東よりに構築されている。カマド本体は黒褐色～暗褐色、黄褐色のシルトで造られる。燃焼部には60×45cm、厚さ8cmの範囲で焼土が形成される。燃焼部中央には土師器の坏を伏せた支脚が検出された。煙道は長さ210cm、深さ35cmの溝状に掘り込まれる。煙道部底面は煙出孔へ向かい約9°の角度をもって緩やかに深くなっており、確認面からの深さは37cmである。煙道の構造など詳細は残存不良のため不明である。

遺物（第20図、写真図版39・40）

床面から土師器片4点、カマド構成材として土師器片3点、支脚として土師器片1点、堆積土中から土師器片4点が出土した。器種は坏、小形土器、鉢、甕、球胴甕で構成され、製作に際してロクロは使用されていない。46は床面から出土した土師器坏で内面に籾痕状の圧痕を持つ。鉄製品として堆積土中から刀子が1点出土した（57）。出土遺物から判断して、本遺構は奈良時代に属するものと推察される。



第17図　ＳＩ０４竪穴住居跡（１）

ＳＩ０５竪穴住居跡

遺構（第21図、写真図版７）

<位置・重複関係>調査区北側段丘縁のＸＢ10ｄグリッドに位置する。検出面はⅣ層で、遺物の分布状況とごく薄い暗褐色のプランにより確認した。検出の時点で床上数cmを残してほとんどが削平されており、段丘縁にかかる北側部分では壁が確認できなかった。

<規模・平面形>東辺－1.7m、西辺－1.18m、北辺（2.7）m、南辺3.26mの隅丸方形を呈するものと推定される。北側部分は削平され消失している。東西辺は残存値、北辺は推定値である。

<埋土>大部分が削平されており、確認できたのは暗褐色シルトのみである。

<壁>壁高の残存値は確認された部分で４～９cm前後である。

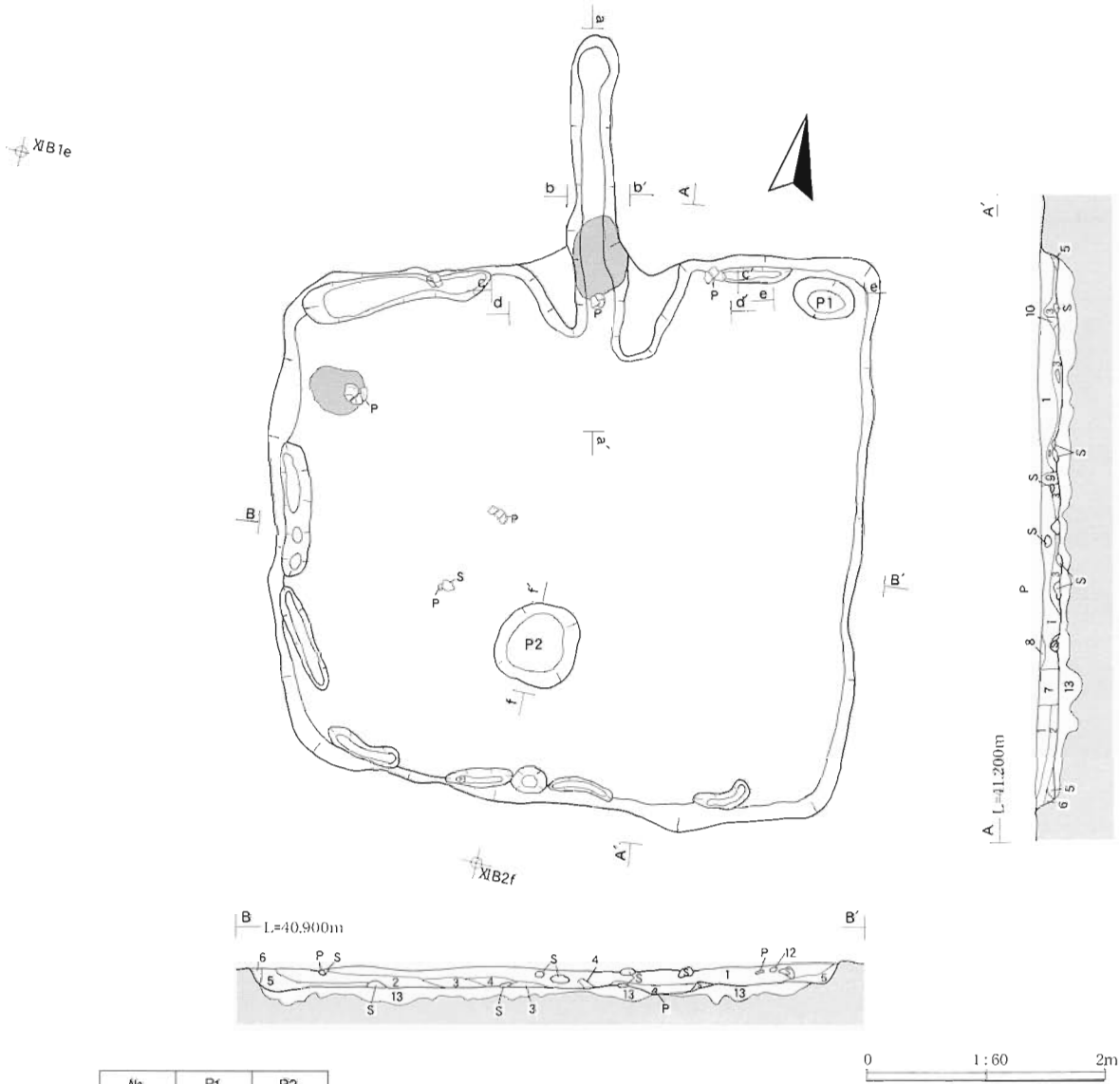
<床面>床面はほぼ平坦で堅くしまる。西壁、南壁、東壁の壁際には壁溝が途切れながら巡る。貼り床は確認できなかった。

<カマド>カマドは削平によりほとんど残存しておらず、西壁中央部でごくかすかな酸化面を認めるのみである。このため、西壁中央部付近にカマドが設置されていた可能性が高いと推測される。構造など詳細については不明である。

<柱穴・ピット>床面から柱穴は検出されなかった。

遺物（第21図、写真図版40）

西側床面から一括遺物が得られている。58は土師器坏で口縁部と体部との接続部分外側に稜線が形成されている。59は土師器甕で外面ナデ・ケズリ調整される。60は土製の紡錘車である。鉄製品は堆積土中より刀子が１点（61）出土しているが、本遺構に伴うものであるかは不明である。出土遺物等から総合的に判断して、古墳時代に位置付けられる可能性がある。共伴遺物が少ないことから詳細は不明である。

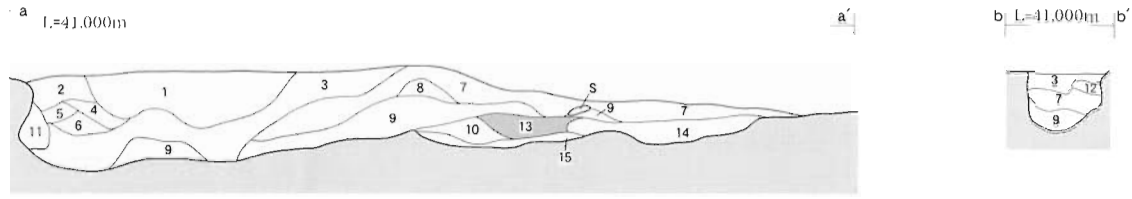


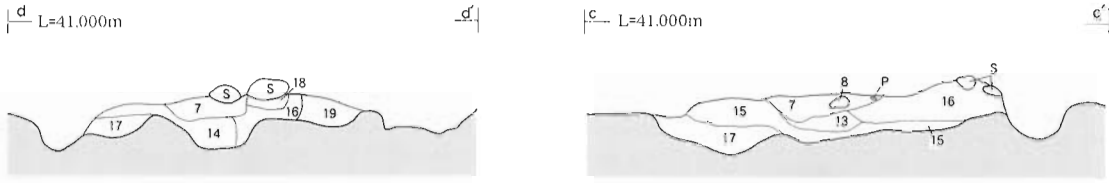
No.	P1	P2
規模(cm)	52×32	68×67
深さ(cm)	20.6	34.7

埋土断面

1	10YR2/3　黒褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	10YR5/6黄褐色シルト粒2%含む　焼土粒1%　炭化物粒2%含む　径5cm大礫含む
2	10YR2/3　黒褐色シルト	粘性中　しまりやや疎	焼土粒・炭化物粒各2%含む
3	10YR3/1　黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/6黄褐色シルトブロック3%含む　炭化物粒1%未満含む
4	7.5YR2/2　黒褐色シルトと7.5YR5/8明褐色の焼土の混合土	粘性やや強　しまりやや疎	炭化物粒1%含む
5	10YR3/1　黒褐色シルト	粘性中　しまりやや疎	10YR6/6明黄褐色シルト粒5%含む　焼土粒・炭化物各粒1%未満含む
6	10YR3/1　黒褐色シルトと10YR5/6黄褐色シルトの混合土	粘性中　しまりやや密	
7	10YR3/4　暗褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色シルトの混合土	粘性やや弱　しまり密	焼土粒・炭化物粒各2%含む(撹乱層)
8	10YR3/3　暗褐色シルト	粘性やや弱　しまり密	焼土粒1%未満含む(撹乱層)
9	10YR5/4　にぶい黄褐色シルト	粘性中　しまりやや密	10YR3/1　黒褐色シルト斑状8%含む(撹乱層)
10	10YR3/2　黒褐色シルト	粘性中　しまりやや密	10YR5/6　黄褐色シルト粒3%含む
11	10YR6/6　明黄褐色シルト	粘性やや強　しまりやや密	10YR3/2　黒褐色シルト斑状5%含む
12	10YR5/6　黄褐色シルト	粘性やや弱　しまり密	
13	10YR5/6　黄褐色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混合土	粘性弱　しまり密	貼り床部分

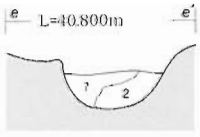
第18図　ＳＩ０４竪穴住居跡（２）





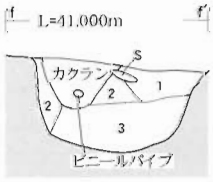
カマド煙道埋土（a－a′・b－b′・c－c′・d－d′）

1	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック5%含む　炭化物粒1%未満含む
2	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	5YR5/8明赤褐色の焼土粒1%含む　炭化物粒1%含む
3	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性やや弱　しまり密	10YR8/4浅黄橙色灰ブロック10%含む　焼土粒1%未満含む　炭化物片2%含む
4	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8　黄褐色シルト粒2%含む　炭化物粒1%含む
5	10YR5/8 10YR2/2	黄褐色砂質シルトと 黒褐色シルトの混合土	粘性やや弱　しまりやや疎	
6	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性やや弱　しまりやや疎	10YR5/8黄褐色シルト粒3%含む　焼土粒1%未満含む　炭化物粒2%含む
7	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性やや弱　しまり密	10YR5/8黄褐色シルトブロック5%含む　焼土粒2%含む　炭化物粒1%含む（燃焼部付近に多く含まれる）
8	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR3/1　黒褐色シルト斑状8%　炭化物粒1%未満含む
9	7.5YR4/3	褐色シルト	粘性やや強　しまりやや疎	5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック3%含む　炭化物粒1%含む
10	10YR4/3	褐色砂質シルト	粘性弱　しまりやや疎	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
11	10YR5/6	黄褐色砂質シルト	粘性弱　しまりやや疎	
12	10YR5/6 10YR3/3	黄褐色砂質シルトと 暗褐色シルトの混合土	粘性中　しまり中	炭化物粒1%含む
13	5YR5/8	明赤褐色の焼土	粘性弱　しまり中	炭化物粒3%含む
14	7.5YR4/6	褐色シルト	粘性中　しまり中	焼土粒・炭化物粒各2%含む
15	10YR4/6	褐色シルト	粘性弱　しまり中	10YR5/6　黄褐色シルト粒2%含む
16	7.5YR2/3	極暗褐色シルト	粘性弱　しまり中	炭化物粒1%未満含む
17	10YR4/3	暗褐色シルトと10YR5/6黄褐色砂質シルトの混合土	粘性弱　しまり中	
18	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	焼土粒・炭化物粒各1%含む
19	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む



P1（e－e′）

1	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや弱	10YR4/6　褐色シルトブロック2%含む
2	10YR4/6	褐色シルト	粘性やや強　しまりやや密	10YR3/2　黒褐色シルト粒2%含む

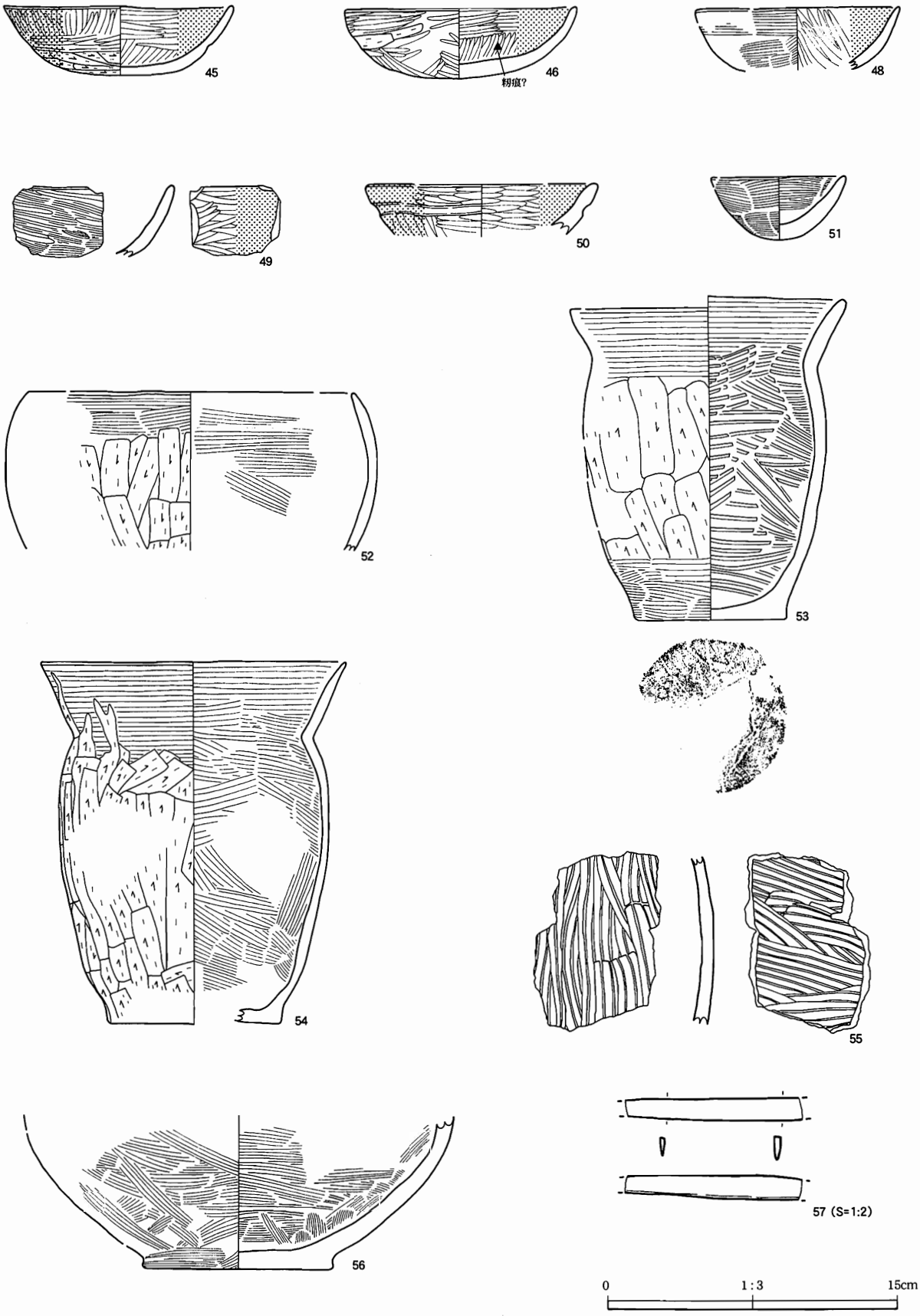


P2（f－f′）

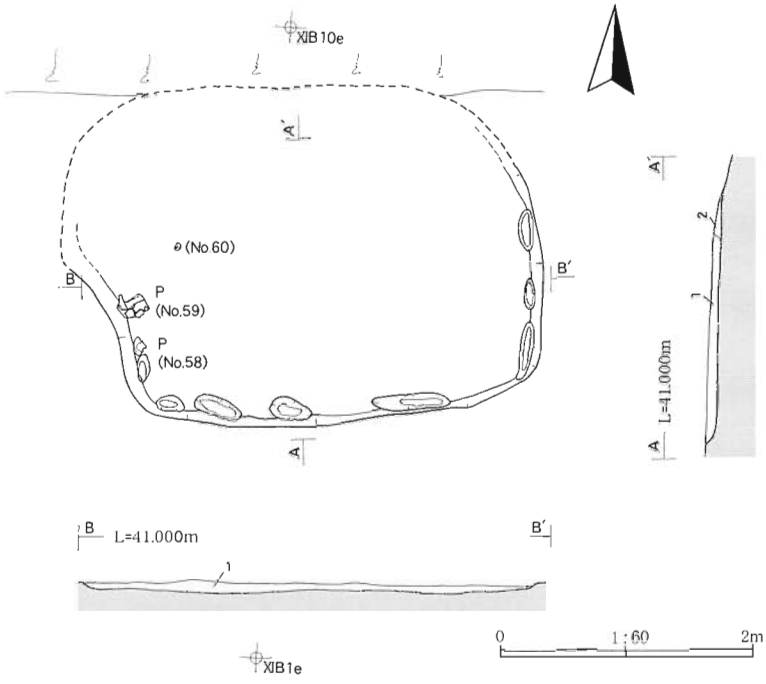
1	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	5YR5/6明赤褐色の焼土ブロック2%含む
2	10YR6/6 10YR2/3	明黄褐色粘土と 黒褐色シルトの混合土	粘性やや強　しまりやや密	
3	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性やや強　しまりやや密	10YR6/6明黄褐色粘土ブロック5%含む

0　1:30　1m

第19図　ＳＩ０４竪穴住居跡（３）

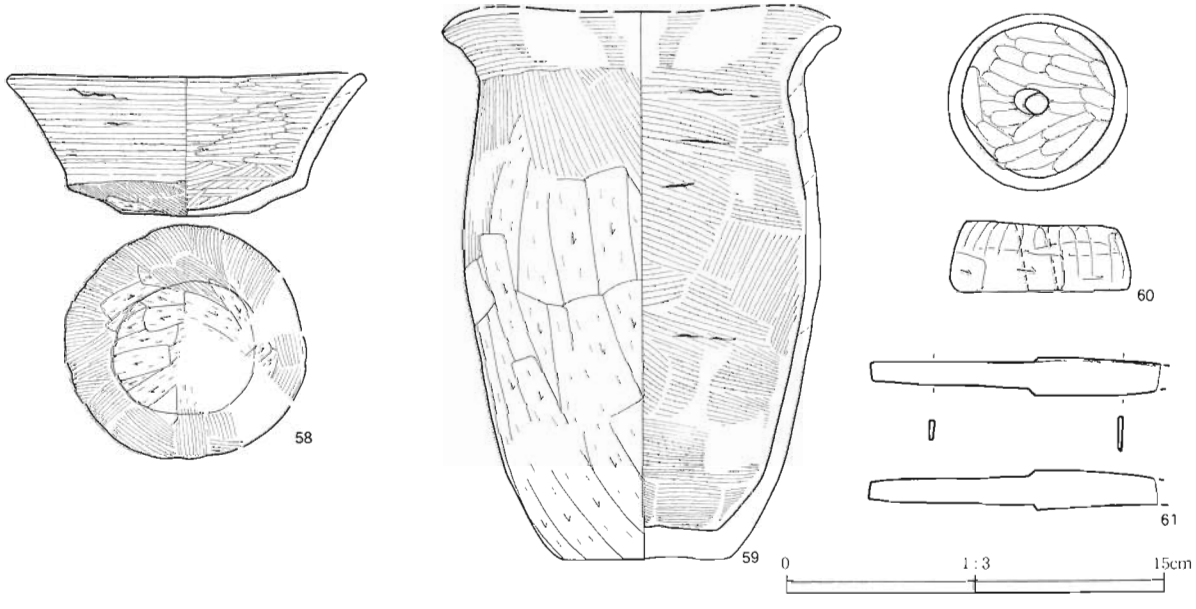


第20図　ＳＩ０４竪穴住居跡（４）



埋土断面（A－A′・B－B′）

1	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性やや弱 しまり中	10YR4/4褐色シルト粒3%含む 灰白色粒1%含む 炭化物粒1%含む（住居の埋土は1層のみか?）
2	10YR5/6黄褐色砂質シルトと10YR3/4暗褐色シルトの混合土	粘性弱 しまり中	



第21図　ＳＩ０５竪穴住居跡

ＳＩ０６竪穴住居跡

遺構（第22図、写真図版８）

＜位置・重複関係＞ＸＩＢ５ｅグリッドに位置する。検出面はⅣ層で、本調査前試掘トレンチを挟んで広がる黒褐色シルトの範囲として確認した。東壁は民家の土台によって攪乱、削平され消失しており、住居の中央部も試掘トレンチによって一部が破壊されている。

＜規模・平面形＞東辺4.4m、西辺4.8m、北辺（4.79）m、南辺（4.29）mの隅丸方形を呈する。南辺、北辺は推定値である。

＜埋土＞６層からなる。黄褐色シルトを含む黒褐色シルト主体で構成され、下位には焼土、炭化物が混じる。

＜壁＞壁高の残存値は14～17cmである。

＜床面＞床面はほぼ平坦で堅くしまり、一部に礫層が露出する。壁際には壁溝が途切れながら全周する。全域ににぶい黄褐色シルトを主体とした貼り床が施される。

＜カマド＞カマドは北辺中央部に設置されているが、試掘トレンチによって上部を削平されており、両袖の痕跡と、燃焼部と見られる部分に現地性の焼土の痕跡を認めるのみである。酸化の範囲は50×42cmを測る。煙道、煙出しは確認できなかった。

＜柱穴・ピット＞床面から４基の柱穴と２基のピットが検出された。柱穴は規模が径44～65cm、深さ12～30cmを測り、平面形は円形、または不整円形を呈する。これらは配置により、住居内の主柱穴を構成するものと考えられる。Ｐ１は北東隅で検出された。規模は47×45cm、深さ18cmを測り、平面形は円形を呈する。Ｐ２は南西隅で検出された。規模は155×72cm、深さ18cmを測り平面形は不整な楕円形を呈する。

遺物（第23図、写真図版40・41）

床面から土師器片３点、須恵器片１点、カマドの構成材として土師器片３点、堆積土中より土師器片６点、須恵器片９点、貼り床埋土より土師器片１点が出土した。器種は坏、高台坏、小形土器、鉢、蓋、甕、甕壺類で構成され、製作に際してはロクロが使用されている。坏は須恵器が卓越する。73は須恵器の蓋である。内面に摩耗痕を持ち、器面が滑らかであることから転用硯として使用されたものと考えられる。出土遺物から判断して本遺構は平安時代に属するものと推察される。

ＳＩ０７竪穴住居跡

遺構（第24～26図、写真図版９）

＜位置・重複関係＞ＸⅡＢ１ｂグリッドに位置する。検出面はⅣ層で黒褐色のプランとして確認した。21号住居跡と重複しており、これより新しい。西辺の一部は現代の攪乱によって破壊されている。

＜規模・平面形＞東辺6.0m、西辺（6.1）m、北辺5.95m、南辺5.97mの隅丸方形を呈している。西辺は推定値である。

＜埋土＞７層からなる。灰白色粒、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

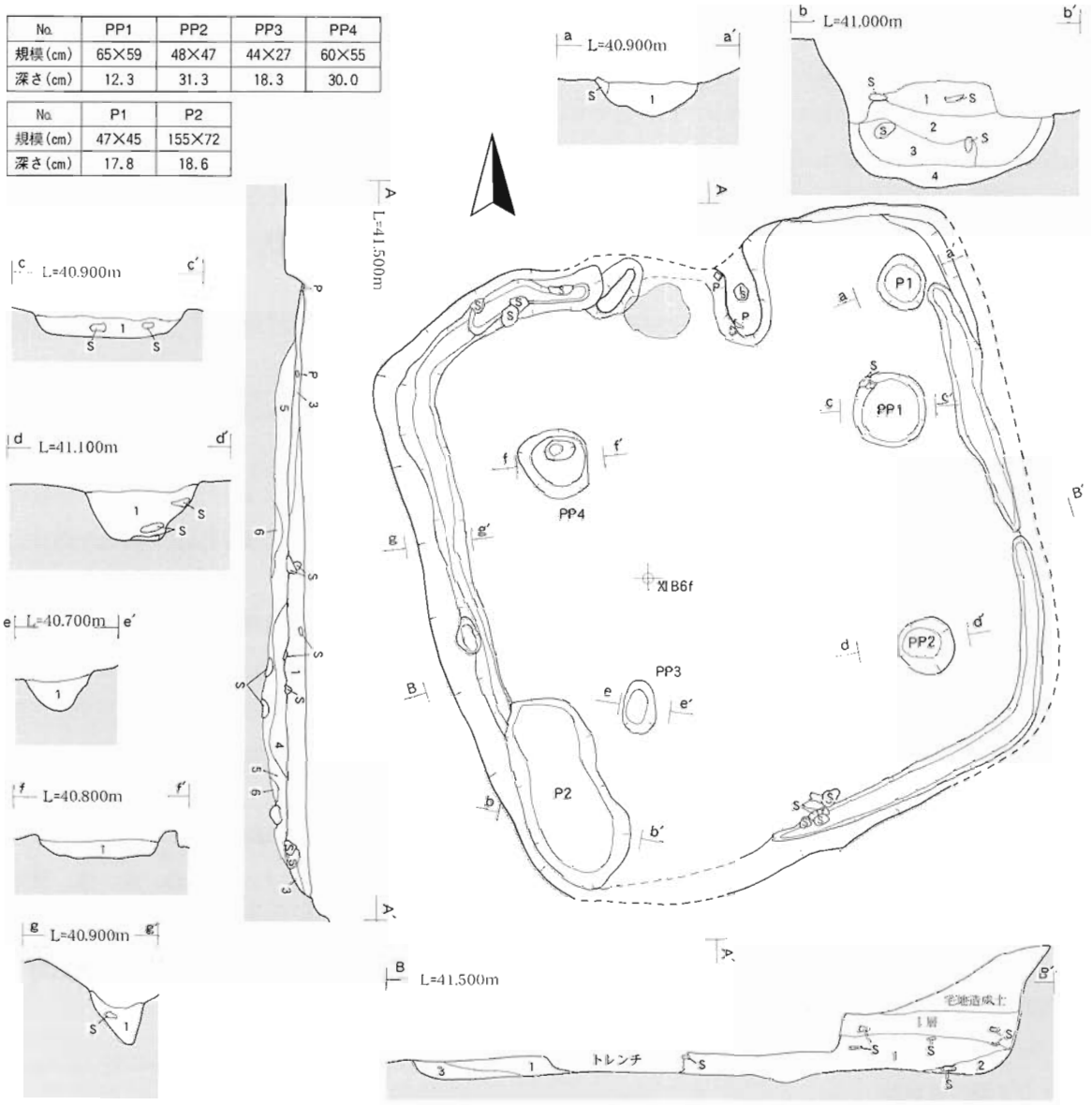
＜壁＞残存値は12～16cm前後である。

＜床面＞ほぼ平坦で壁面付近は固くしまるが、中央部は21号住居跡を暗褐色シルトで埋め戻して構築されており、壁際周辺に比してやや締まりが弱い。西壁、北壁、東壁の壁際には壁溝が途切れながら巡る。全域に黒褐色シルトと黄褐色シルトの混合土による貼り床が施される。

＜カマド＞南壁の中央やや東よりに構築されている。カマド本体は黒褐色と暗褐色の粘土で造られ、左右の袖には大型の礫が芯材として用いられる。燃焼部には69×72cm、厚さ８cmの範囲で焼土が形成されている。

No.	PP1	PP2	PP3	PP4
規模(cm)	65×59	48×47	44×27	60×55
深さ(cm)	12.3	31.3	18.3	30.0

No.	P1	P2
規模(cm)	47×45	155×72
深さ(cm)	17.8	18.6



埋土断面(A－A′・B－B′)

Ⅰ層	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中	しまり密	10YR6/8明黄褐色シルト粒2%含む 径5～10cm大の礫含む
1	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR5/6 黄褐色シルト粒5%含む 焼土粒3%含む 炭化物粒2%含む 径5～10cm大の礫含む
2	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR5/6 黄褐色シルト粒3%含む
3	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR5/6 黄褐色シルト粒1%含む 焼土粒・炭化物粒各1%含む
4	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性弱	しまり密	10YR5/6 黄褐色シルトブロック5%含む(貼り床部分)
5	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	粘性弱	しまり密	径5cm大の礫多く含む(貼り床部分)
6	10YR5/8	黄褐色砂質シルト	粘性弱	しまり密	(貼り床部分)

0 1:60 2m

P1(a－a′)

1	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中	しまりやや密	10YR5/8 黄褐色砂質シルト3%含む 径3cm大の礫含む 土器片を含む

P2(b－b′)

1	10YR2/2 黒褐色シルトと 10YR4/4 褐色のシルトの混合土	粘性中	しまり密	径3～5cm大の礫含む
2	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR5/6 黄褐色シルト粒3%含む 径3cm大の礫多い
3	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性弱	しまり密	10YR5/6 黄褐色砂質シルト粒2%含む 径3～5cm大の礫含む
4	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト	粘性弱	しまり密	10YR3/3 暗褐色シルトブロック含む 径3～5cm大の礫多い

PP1・2・4共通(c－c′・d－d′・f－f′)

1	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性中	しまりやや密	10YR5/6 黄褐色砂質シルト粒2%含む 径3～5cm大の礫含む

PP3(e－e′)

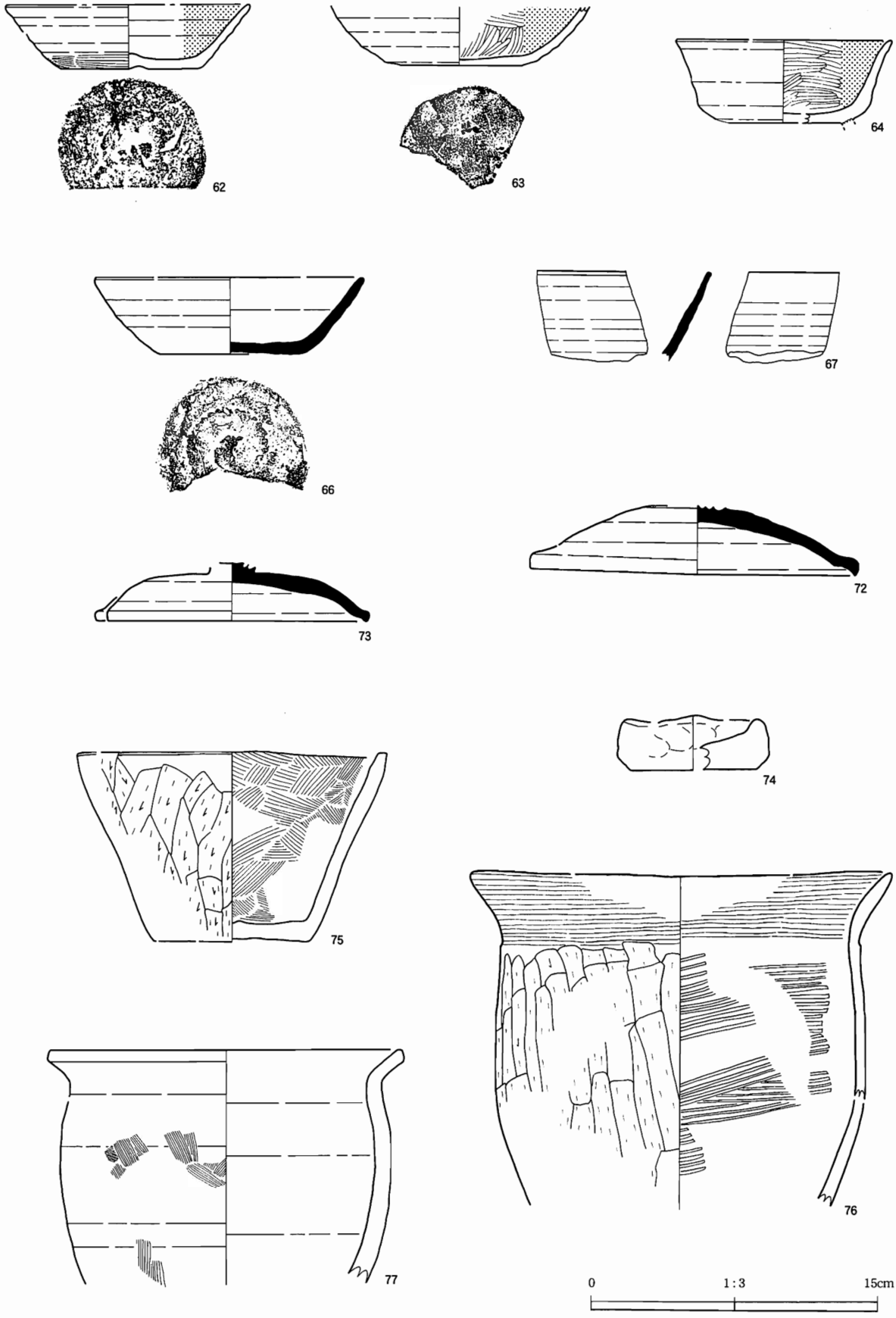
1	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性中	しまりやや密	10YR5/8 黄褐色砂質シルト5%含む

壁溝(g－g′)

1	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR4/4 褐色シルト粒2%含む

0 1:30 1m

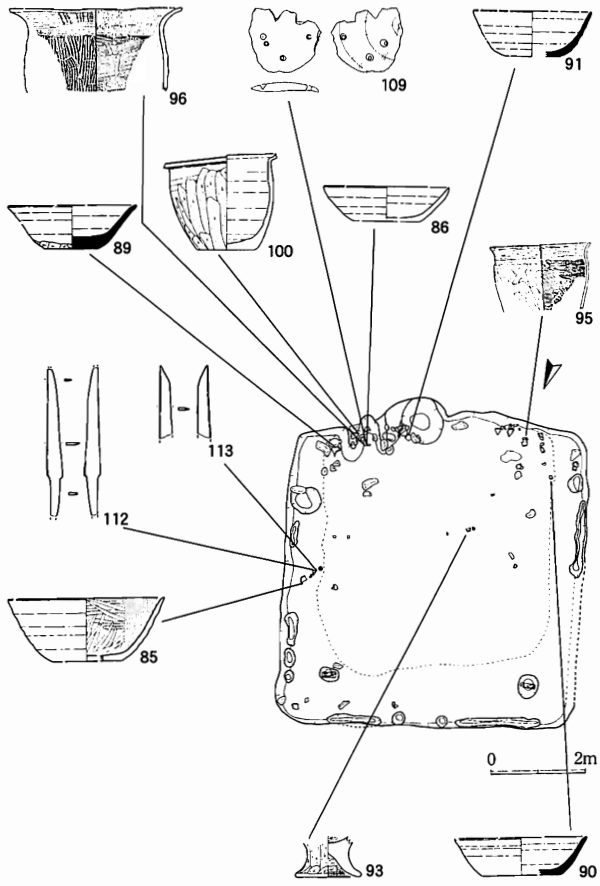
第22図　ＳＩ０６竪穴住居跡（１）



第23図　ＳＩ０６竪穴住居跡（２）

燃焼部には右側に亜角礫を設置した支脚、左側に土師器の甕を伏せた支脚が検出された。煙道・煙出孔は残存不良のため確認できなかった。このため詳細を明らかにできなかったが、住居跡の壁面が12～16cm掘り込まれているのに対して煙道部・煙出孔が完全に削平されたとはレベル的に考えにくく、煙道の形態がもともと壁際で短く立ち上がる形状であった可能性がある。

＜柱穴・ピット＞床面から柱穴２基、ピット２基が検出された。ＰＰ１～ＰＰ２は配置から住居の主柱穴を構成するものと推定され、また柱材として平角材を用いていたことが埋土から確認でき、特筆される。掘り方規模は径42～50cm、深さ33～38cmを測り、平面形は円形を呈する。平角材部分は幅30～31cm、厚さ９～12cmの長方形で、板状の断面を呈する。ＰＰ１の底面には根固め石と見られる小礫が据えられている。Ｐ１はカマド右脇で検出した。規模は径97cm×78cm、深さ22cmを測り、平面形は不整な円形を呈する。Ｐ２は東壁、南寄りの部分に検出された。規模は径62×58cm、深さ15cmを測り、平面形は不整な円形を呈する。



第24図　ＳＩ０７竪穴住居跡（１）

遺物（第27～29図、写真図版41～43）

床面から土師器片６点、須恵器片５点、カマド構成材として土師器片６点、須恵器片１点、堆積土中より土師器片１点、須恵器片３点、カマド支脚として土師器片１点、カマド燃焼部より土師器片１点が出土した。器種は坏、高坏、甑、甕、甕壺類、大甕で構成され、製作に際してはロクロが使用されている。87はカマド燃焼部から出土した土師器坏で、底部に線刻を持つ。91は須恵器坏で、底部回転イトキリ後、ヘラケズリ再調整が施される。94は土師器の甑で、外面タタキ＋ケズリ、内面ナデ＋ハケメ調整される。鉄製品は堆積土中より刀子２点が出土している。石製品は３点が出土した。109は凝灰岩製の有孔石製品である。石製品としては３点が出土している。109はカマド埋土から出土した有孔石製品である。110、111は床面から出土した砥石である。鉄製品は２点が出土している。112・113は堆積土中から出土した刀子である。出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属するものと推察される。

ＳＩ０８竪穴住居跡

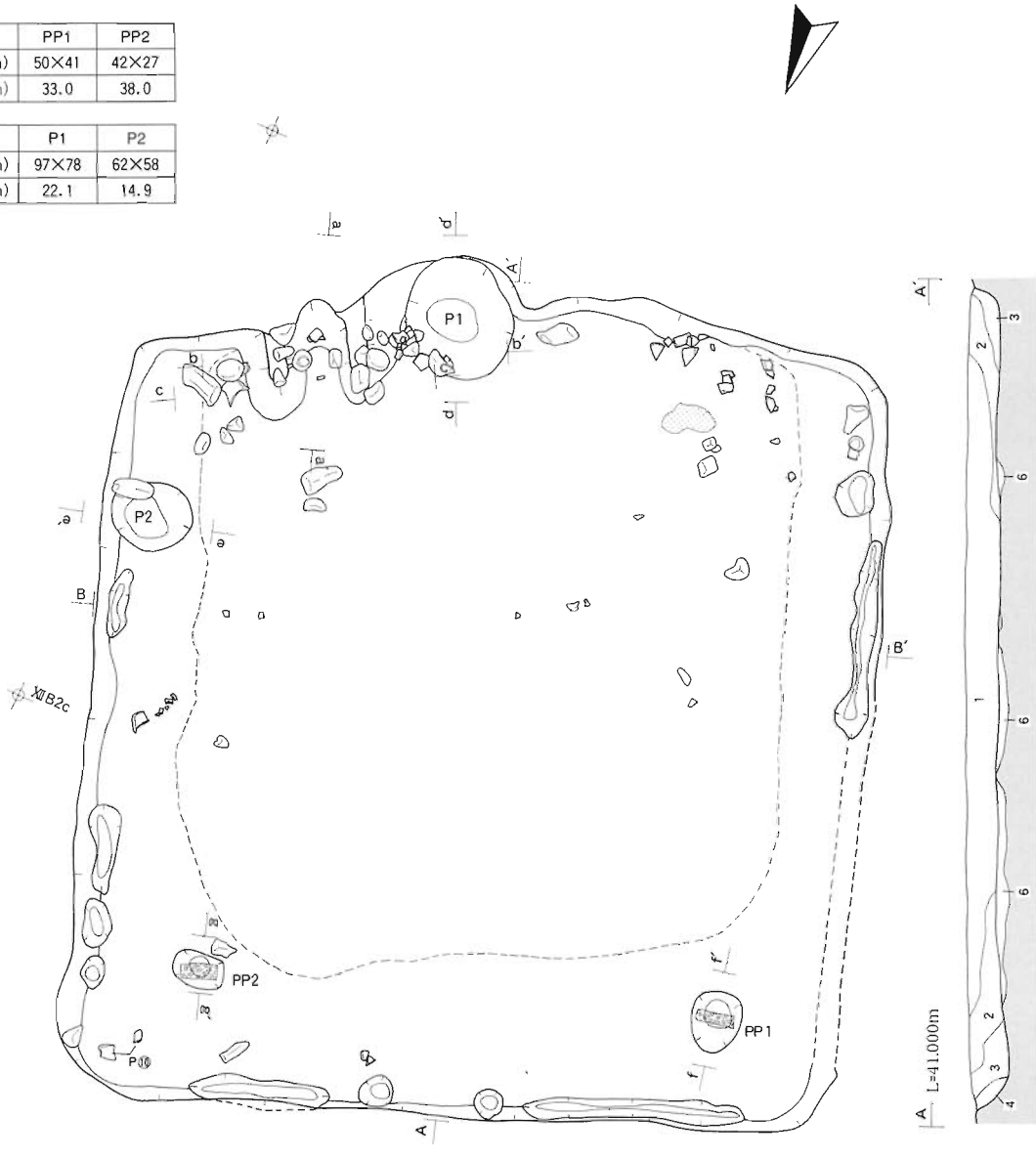
遺構（第30～33図、写真図版10）

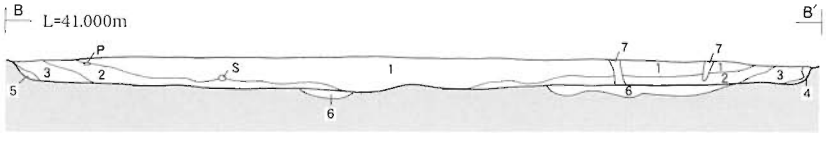
＜位置・重複関係＞ＸⅡＡ２ｊグリッドに位置する。検出面はⅣ層で暗褐色のプランとして確認された。18号住居跡、28号住居跡と重複しており、これらによって切られる。

＜規模・平面形＞東辺5.8m、西辺－4.05m、南辺5.98m、北辺－4.15mの隅丸方形を呈する。西辺と北辺

No.	PP1	PP2
規模(cm)	50×41	42×27
深さ(cm)	33.0	38.0

No.	P1	P2
規模(cm)	97×78	62×58
深さ(cm)	22.1	14.9



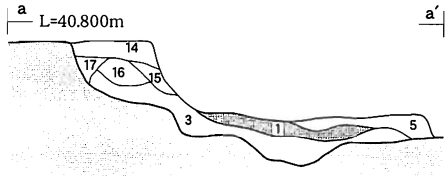


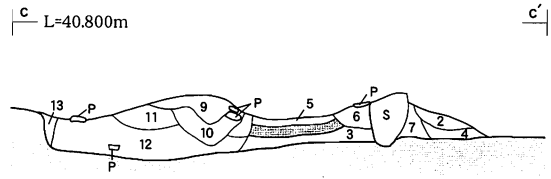
埋土断面(A－A′・B－B′)

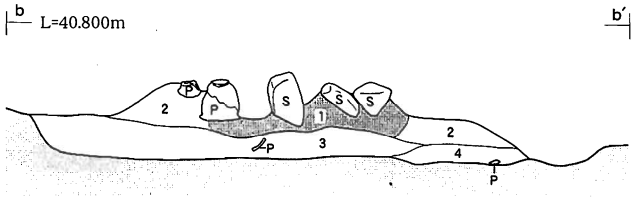
1	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性中　しまり密	10YR5/8黄褐色シルト粒2%含む　灰白色粒5%含む　焼土粒・炭化物粒各2%含む
2	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性やや強　しまり中	灰白色粒1%未満含む　焼土粒・炭化物粒各1%含む
3	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8黄褐色シルト粒1%未満含む　灰白色粒2%含む　炭化物粒1%未満含む
4	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8　黄褐色シルト粒1%未満含む
5	10YR2/1	黒色シルト	粘性やや強　しまり密	
6	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性やや弱　しまりやや密	10YR5/8黄褐色シルト粒1%含む　灰白色粒1%未満含む　貼り床部分
7	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性やや弱　しまり密	灰白色粒2%含む　炭化物粒1%未満含む

0　1:60　2m

第25図　ＳＩ０７竪穴住居跡（２）

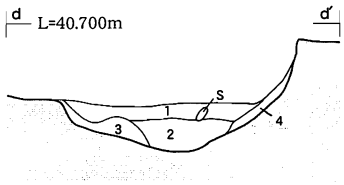


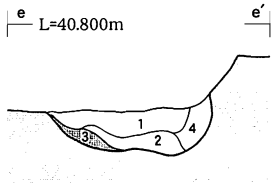




カマド煙道埋土（a－a′・b－b′・c－c′）

1	7.5YR3/3	暗褐色シルト	粘性やや弱　しまり密	燃焼部は5YR3/6暗赤褐色を呈する。焼土ブロック10%含む　炭化物粒8%含む
2	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性弱　しまり密	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
3	7.5YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや密	焼土粒3%含む　炭化物粒2%含む
4	7.5YR4/4	褐色シルト	粘性弱　しまり密	7.5YR8/2灰白色粒1%含む　焼土粒2%含む　炭化物粒1%含む
5	7.5YR4/4	褐色シルトと5YR4/8赤褐色焼土の混合土	粘性弱　しまり密	炭化物粒3%含む　部分的に強く赤変する。
6	5YR4/4	にぶい赤褐色の焼土	粘性やや弱　しまり密	炭化物粒1%未満含む
7	7.5YR3/4	暗褐色シルト	粘性やや弱　しまりやや密	焼土粒・炭化物粒各2%含む
8	7.5YR4/3	褐色シルト	粘性やや弱　しまりやや密	焼土粒3%含む　炭化物粒1%未満含む
9	7.5YR2/3	極暗褐色シルト	粘性中　しまりやや密	5YR3/6暗赤褐色の焼土ブロック含む　炭化物片1%含む
10	7.5YR2/3 5YR3/6	極暗褐色シルトと暗赤褐色焼土の混合土	粘性中　しまりやや密	炭化物片2%含む　赤変した礫を含む
11	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性中　しまり密	10YR5/8黄褐色シルト粒2%含む　焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
12	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	焼土粒1%含む　炭化物粒3%含む
13	10YR3/3 5/6	暗褐色シルトと10YR黄褐色砂質シルトの混合土	粘性やや弱　しまり密	
14	7.5YR4/6	褐色シルト	粘性中　しまり中	5YR4/8赤褐色の焼土ブロック5%含む　炭化物粒2%含む
15	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性弱　しまり密	10YR5/8　黄褐色シルト粒3%含む
16	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや密	焼土粒・炭化物粒各1%含む
17	10YR4/6	褐色シルト	粘性やや弱　しまりやや密	10YR3/1　黒褐色シルトブロック8%含む　炭化物粒1%未満含む
18	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	焼土粒2%含む
19	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや疎	10YR5/8　黄褐色シルト粒1%未満含む
20	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
21	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや密	炭化物片2%含む
22	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性中　しまりやや疎	焼土粒・炭化物片各1%含む



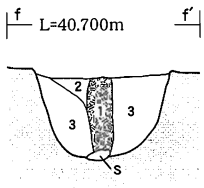


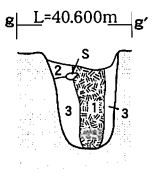
P1（d－d′）

1	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや密	10YR5/8黄褐色シルト粒1%含む　焼土粒1%含む　炭化物粒1%未満含む
2	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	焼土粒1%含む　炭化物片2%含む
3	10YR3/4	暗褐色シルト(やや砂質)	粘性中　しまりやや疎	10YR5/6　黄褐色シルト粒1%含む　焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
4	10YR4/4 2/3	暗褐色シルトと10YR黒褐色シルトの混合土	粘性やや弱　しまりやや疎	

P2（e－e′）

1	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR4/6褐色シルトブロック3%含む　灰白色粒5%含む　焼土ブロック3%含む
2	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや疎	10YR4/6褐色シルト粒2%含む　灰白色粒5%含む　焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
3	5YR3/6	暗赤褐色の焼土	粘性弱　しまり中	炭化物粒1%含む
4	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性やや強　しまりやや密	10YR4/6褐色シルトブロック8%含む　灰白色粒1%未満含む



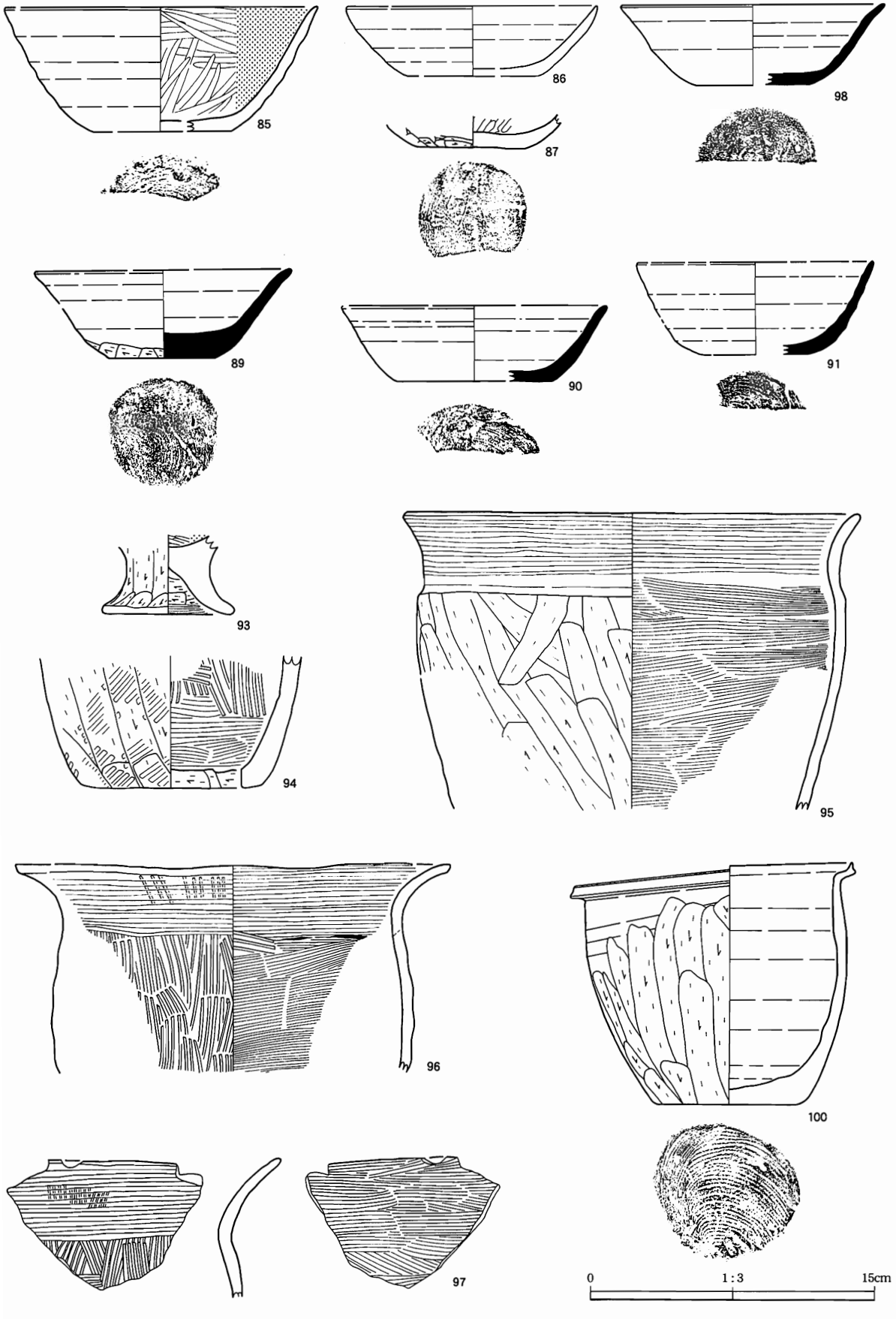


PP1・PP2共通（f－f′・g－g′）

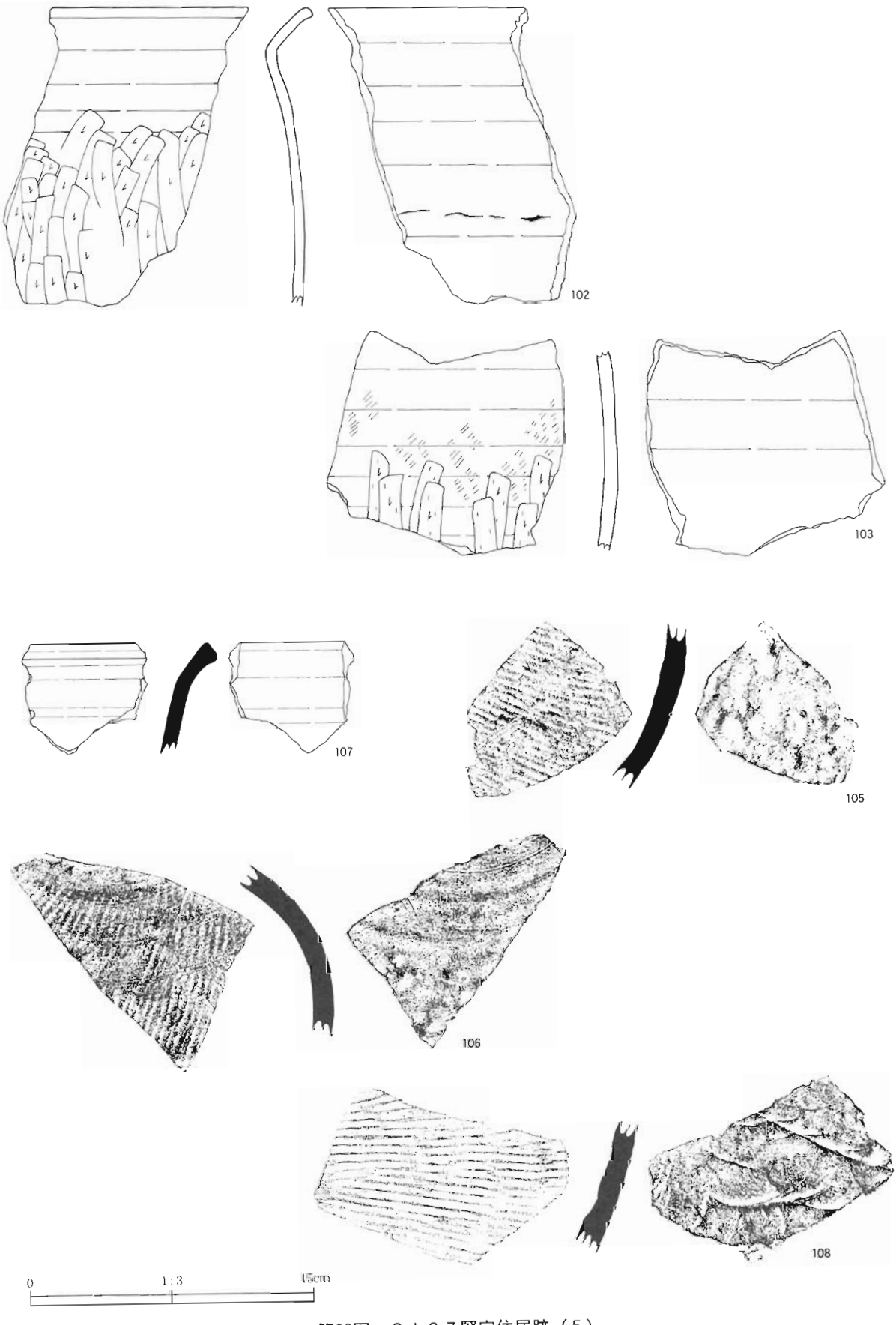
1	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性やや強　しまりやや疎(柱痕)	10YR5/6　黄褐色シルト粒5%含む
2	10YR5/6 2/3	黄褐色シルトと10YR黒褐色シルトの混合土	粘性やや弱　しまり中	
3	10YR3/1 5/6	黒褐色シルトと10YR黄褐色シルトの混合土	粘性やや弱　しまり中	

0　1:30　1m

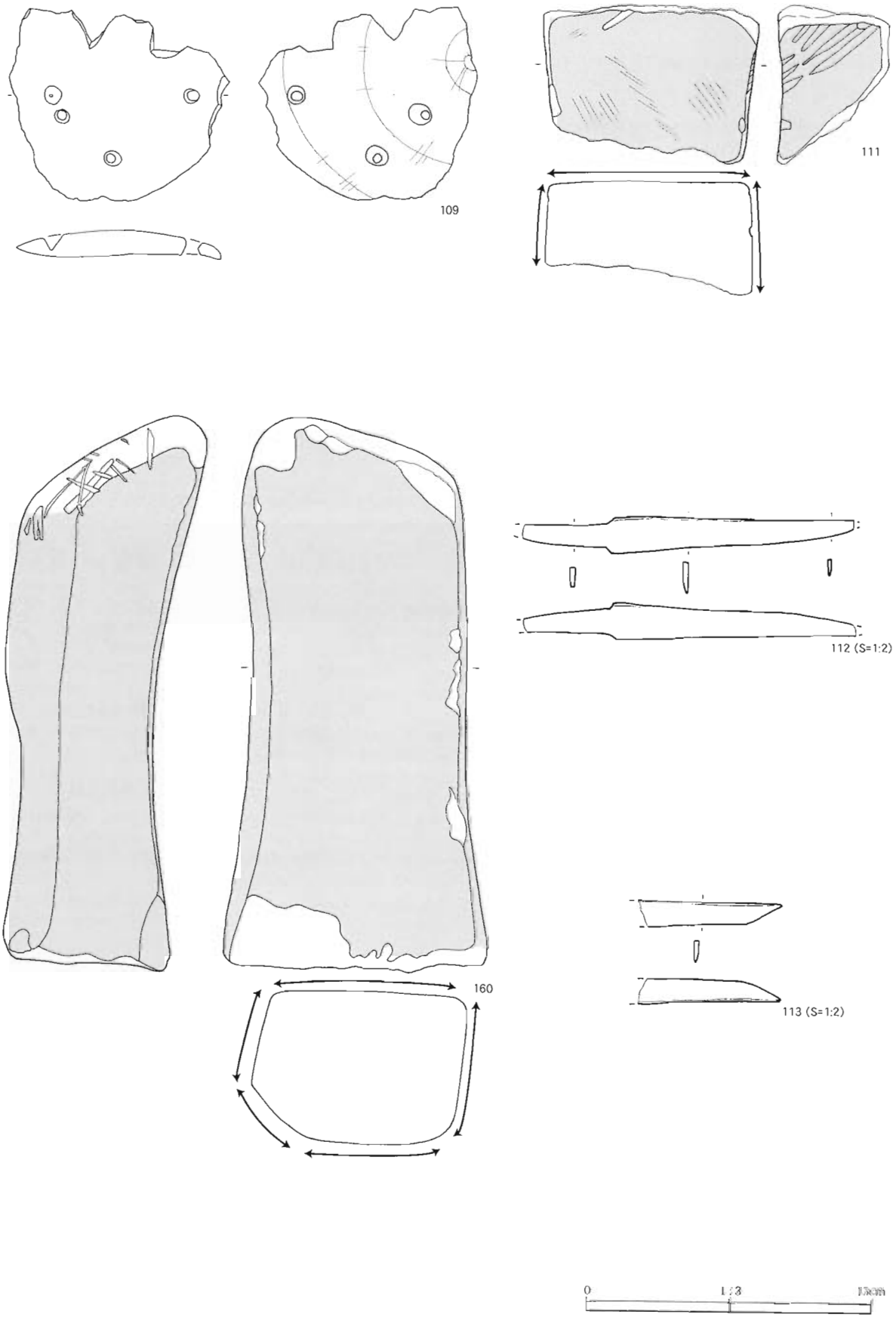
第26図　ＳＩ０７竪穴住居跡（３）



第27図　ＳＩ０７竪穴住居跡（４）



第28図　ＳＩ０７竪穴住居跡（５）



第29図　ＳＩ０７竪穴住居跡（６）

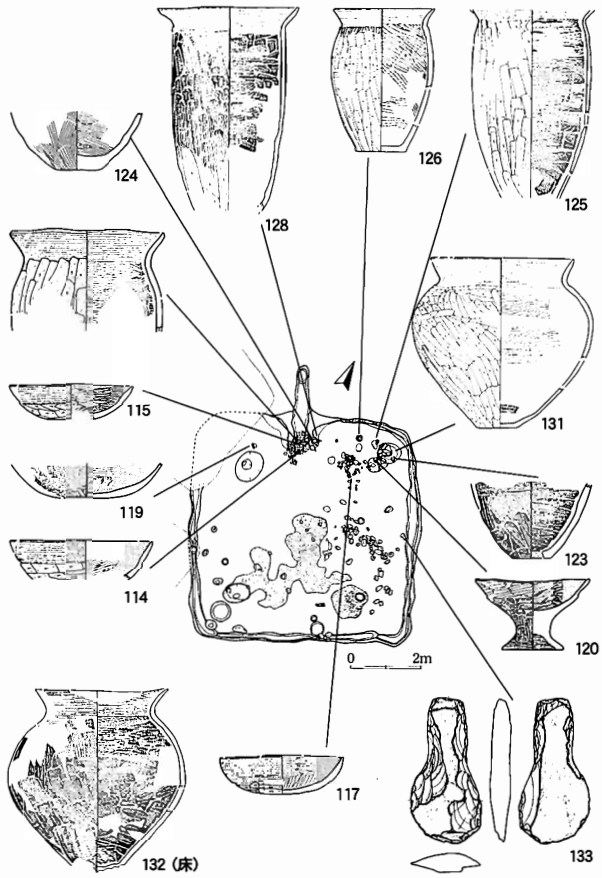
は残存値である。

<埋土>11層からなり、灰白色粒を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

<壁>暗褐色シルトを掘り込んで構築されている。残存値は21～39cmである。

<床面>ほぼ平坦で堅く締まる。東側部分からは埋土の中位に相当する高さに径10～15cm大の礫が多数出土している。礫の一部は被熱し赤変するものもあり、南側部分には炭化物の広がりが見られる。北東部（Ｑ１）には遺物が集中する。壁際には壁溝が巡り、黒褐色シルトと黄褐色シルトによって貼り床が施される。

<カマド>北西壁のほぼ中央に設置されている。カマド本体は黒褐色と暗褐色の粘土で造られ、左右の袖には大形の土師器甕が伏せた状態で芯材として転用されている。火床面は燃焼部には燃焼部には径70×50cm、深さ10cmの範囲で現地性の焼土が見られる。燃焼部中央には２個の円礫が支脚として用いられている。



第30図　ＳＩ０８竪穴住居跡（１）

煙道は上部を削平されており、形状は不明であるが、長さ1.5m、幅40cmの溝状に掘り込まれる。煙出し部は径51×38cmの土坑状に掘り込まれ、確認面からの深さは46.5cmである。

<柱穴・ピット>床面から大小合わせて計14基の柱穴と１基のピットが検出された。柱穴の規模は径20～90cm前後、深さ11～52cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。これらのうち、その配置からＰＰ１～ＰＰ４までの柱穴が住居の主柱穴を構成するものと考えられる。ピットは北東隅に１基が検出された。規模は径68×58cm　深さ24.1cmを測り、平面形は円形を呈する。

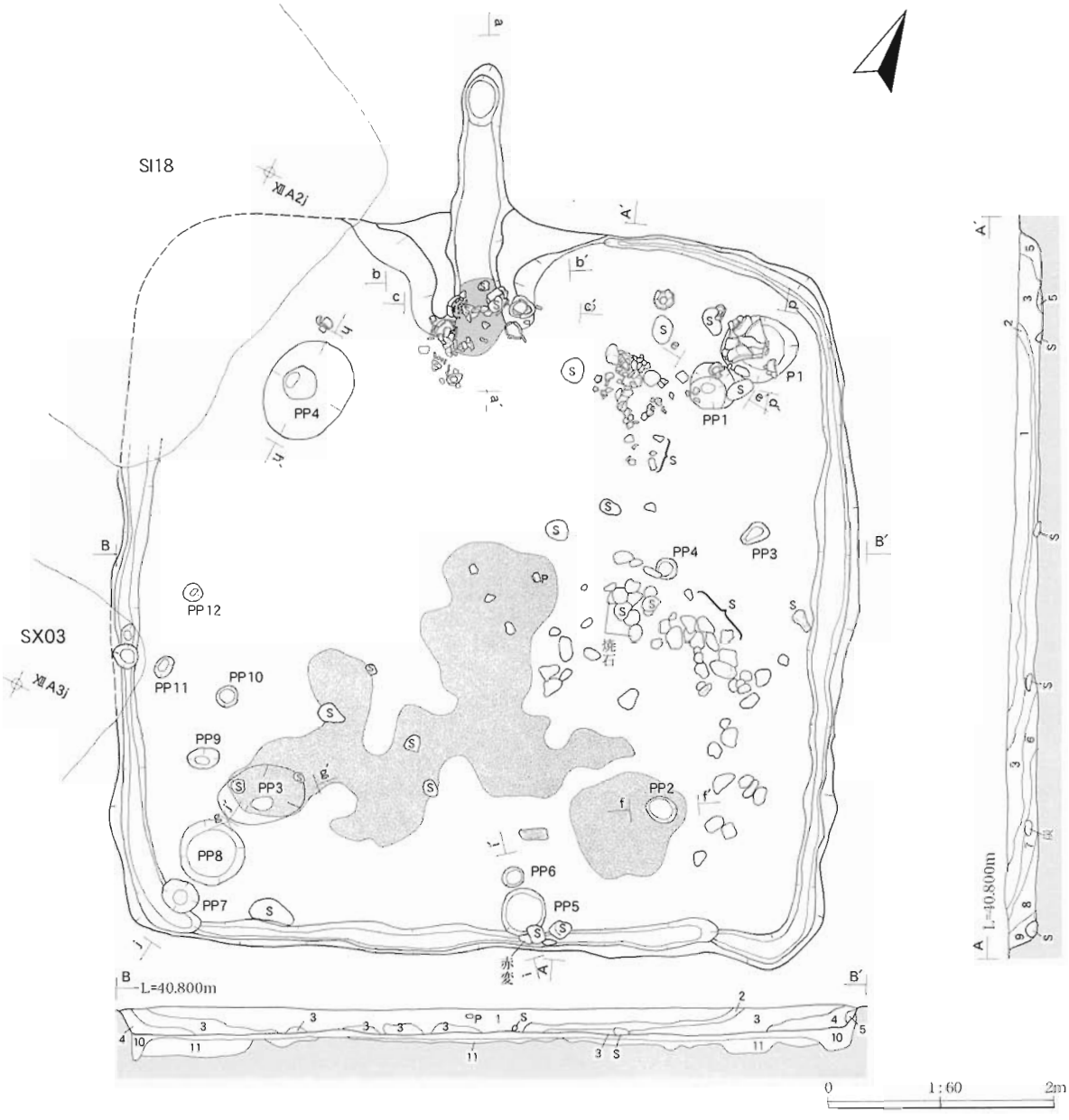
遺物（第34～36図、写真図版43～46）

床面から土師器片８点、カマド構成材として土師器片５点、堆積土中より土師器片５点、カマド燃焼部より土師器片１点が出土した。器種は坏、高坏、甑、甕、球胴甕で構成され、製作に際してロクロは使用されない。坏は体部に段を持ち、内面黒色処理されるものが多い。121は高坏で、底部にヘラ書「×」を持つ。123は単孔の甑で、体部は内外面共にナデ調整される。石器は１点が出土している。133は床面から出土した石鍬である。鉄製品としては２点が出土している。134はＰＰ７から出土した鉄鏃である。135は堆積土中から出土した刀子である。出土遺物から判断して、本遺構は奈良時代に属するものと推察される。

ＳＩ０９竪穴住居跡

遺構（第37・38図、写真図版11）

<位置・重複関係>ＸⅡＢ３ｂグリッドに位置する。検出面はⅣ層で黒褐色のプランとして確認された。検出の段階で遺構の上部は削平をうけ消失していた。東辺の一部は現代の攪乱によって破壊されている。



埋土断面（A－A′・B－B′）

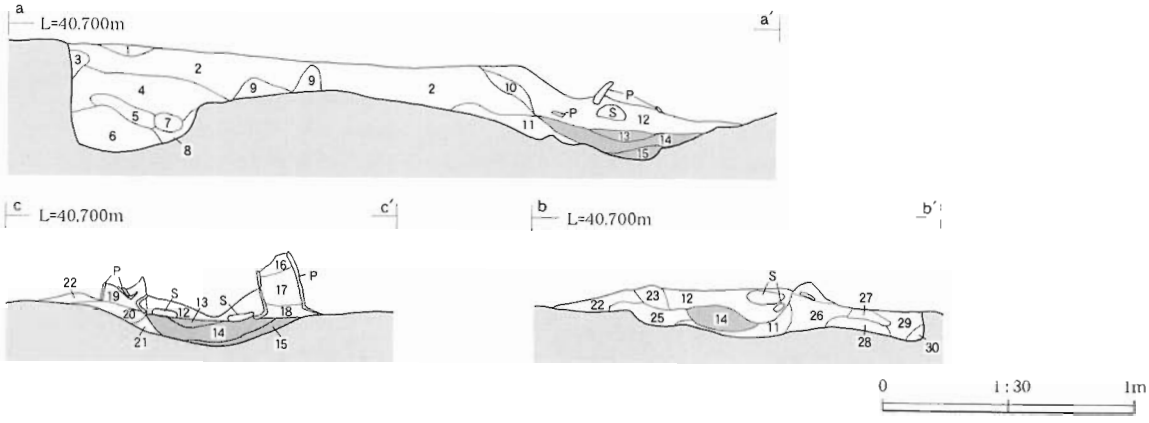
1	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	粘性中　しまりやや密	10YR5/6黄褐色シルトブロック5%含む　灰白色粒全体に1%含む
2	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性弱　しまりやや密	10YR5/6黄褐色シルトブロック10%含む　灰白色粒1%未満含む　炭化物ブロック5%含む
3	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	灰白色粒1%未満含む
4	7.5YR2/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/6黄褐色シルトブロック1%含む　灰白色粒1%含む
5	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR4/6褐色シルトブロック2%含む
6	10YR4/4	褐色シルト	粘性弱　しまりやや密	10YR6/6明黄褐色シルトブロック5%含む　灰白色粒2%含む
7	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/6黄褐色シルト粒2%含む　灰白色粒1%未満含む　炭化物ブロック2%含む
8	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性弱　しまりやや密	10YR5/6黄褐色シルト粒2%含む　灰白色粒1%未満含む
9	10YR4/2	灰黄褐色シルト	粘性弱　しまりやや密	灰白色粒1%未満含む
10	10YR3/4 10YR5/8	暗褐色シルトと黄褐色シルトの混合土	粘性やや弱　しまり密	
11	10YR5/6	黄褐色シルト	粘性弱　しまり密	10YR3/3暗褐色シルトブロック10%含む

No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7
規模(cm)	46×42	72×47	90×71	25×23	44×37	19×16	33×25
深さ(cm)	46.9	41.5	52.3	44.3	18.8	13.0	16.0

No.	P1
規模(cm)	68×58
深さ(cm)	24.1

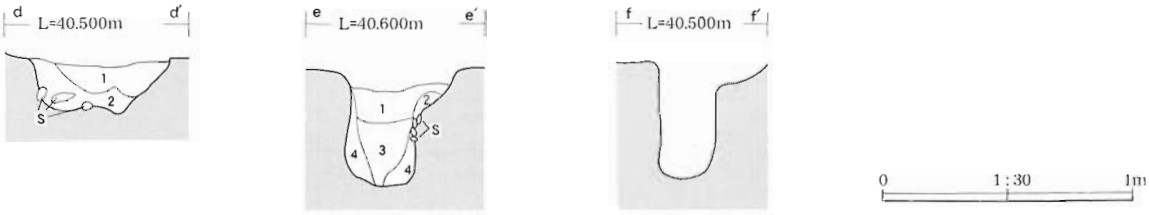
No.	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12	PP13	PP14
規模(cm)	59×54	28×17	19×17	21×14	17×16	25×16	19×18
深さ(cm)	13.6	20.3	20.6	17.0	30.4	13.0	11.1

第31図　ＳＩ０８竪穴住居跡（２）



カマド煙道埋土（a－a′・b－b′・c－c′）

1	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり密	10YR5/8黄褐色シルト粒1%含む　灰白色粒1%含む　焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
2	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり密	10YR5/8黄褐色シルト粒2%含む　灰白色粒1%未満含む　焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
3	10YR4/4	褐色シルト	粘性弱　しまり中	灰白色粒1%未満含む　炭化物粒1%未満含む
4	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8黄褐色シルトブロック3%含む　焼土粒・炭化物片各2%含む
5	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや疎	焼土粒・炭化物片各1%含む
6	7.5YR2/2	黒褐色シルト	粘性やや弱　しまりやや疎	炭化物粒1%未満含む
7	10YR4/6	褐色砂質シルト	粘性弱　しまりやや疎	
8	10YR4/4	褐色シルト	粘性中　しまり中	炭化物粒1%未満含む
9	10YR4/4	褐色砂質シルト	粘性弱　しまり疎	10YR3/3暗褐色シルト粒3%含む
10	10YR3/3	暗褐色シルトと10YR4/6褐色シルトの混合土	粘性中　しまり密	炭化物粒1%未満含む
11	10YR3/4	暗褐色砂質シルト	粘性弱　しまりやや疎	
12	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや疎	10YR6/6明黄褐色シルトブロック5%含む　暗赤褐色焼土ブロック5%含む（崩落土）
13	5YR5/8	明赤褐色の焼土	粘性中　しまり中	
14	5YR4/8	赤褐色の焼土	粘性中　しまり密	
15	10YR5/6 10YR3/2	黄褐色砂質シルトと黒褐色シルトの混合土	粘性中　しまり中	
16	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性弱　しまり密	灰白色粒1%含む（ソデの土器内）
17	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性やや弱　しまりやや密	（ソデの土器内）
18	7.5YR3/4	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	焼土粒・炭化物粒各1%含む（ソデの土器内）
19	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	粘性弱　しまり中	（カマド左ソデ）
20	7.5YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	焼土粒1%未満含む（カマド左ソデ）
21	7.5YR3/4	暗褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	炭化物粒1%未満含む
22	7.5YR3/2	黒褐色シルト	粘性弱　しまり密	焼土粒3%含む　炭化粒1%未満含む
23	10YR5/8	黄褐色シルト	粘性弱　しまり密	焼土粒・炭化物粒各2%含む
24	7.5YR5/6	明褐色シルト	粘性弱　しまり密	焼土粒・炭化物粒各1%含む
25	10YR4/4	褐色シルト	粘性中　しまり密	焼土粒・炭化物粒各1%含む
26	7.5YR3/1	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	焼土粒2%含む
27	7.5YR2/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり密	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
28	7.5YR3/2	黒褐色シルト	粘性弱　しまり中	10YR4/4　褐色シルトブロック3%含む
29	10YR5/8 3/2	黄褐色シルトと10YR黒褐色シルトの混合土	粘性弱　しまり中	焼土ブロック3%含む
30	10YR5/8	黄褐色シルト	粘性弱　しまり中	10YR2/2　黒褐色シルトブロック含む



P1（d－d′）

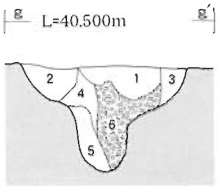
1	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや疎	10YR4/4　褐色砂質シルトブロック2%含む
2	10YR4/4	褐色砂質シルト	粘性やや弱　しまりやや疎	10YR3/3　暗褐色シルトブロック2%含む　底面は径5～10cmの礫層

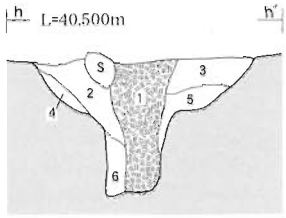
PP1（e－e′）

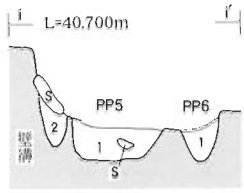
1	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性やや強　しまり疎	10YR5/6　黄褐色シルトブロック含む　灰白色粒1%未満含む
2	10YR5/6	黄褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR3/3　暗褐色シルト斑状3%含む
3	10YR4/4	褐色砂質シルト	粘性弱　しまりやや疎	径3～5cmの礫を多く含む
4	10YR3/3 10YR4/4	暗褐色シルトと褐色砂質シルトの混合土	粘性中　しまりやや疎	
7	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	

PP2（f－f′）
断面なし、エレベーションのみ

第32図　ＳＩ０８竪穴住居跡（３）







ＰＰ３（ｇ－ｇ′）

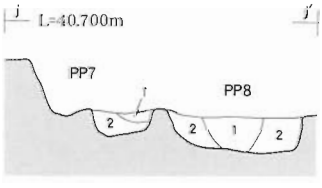
1	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/6黄褐色シルト粒1%含む　灰白色粒1%未満含む　炭化物粒1%未満含む
2	10YR3/2 10YR5/8	黒褐色シルトと 黄褐色シルトの混合土	粘性弱　しまり中	
3	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや密	10YR5/8黄褐色シルト粒1%未満含む
4	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/6黄褐色シルトブロック含む
5	10YR5/6	黄褐色砂質シルト	粘性弱　しまりやや疎	径3～5cmの礫を多く含む
6	10YR3/4 10YR5/6	暗褐色シルトと 黄褐色シルトの混合土	粘性弱　しまりやや疎	炭化物粒1%未満含む（柱痕）

ＰＰ４（ｈ－ｈ′）

1	10YR2/3 10YR3/3	黒褐色やや砂質シルト 暗褐色シルトと	粘性やや強　しまり疎（柱痕）	10YR5/8黄褐色砂質シルト粒2%含む　灰白色粒1%未満含む　炭化物粒1%含む
2	10YR5/8	黄褐色砂質シルトの混合土	粘性弱　しまりやや疎	
3	10YR2/3 10YR3/2	黒褐色やや砂質シルト 黒褐色シルトと	粘性弱　しまり中	10YR5/8黄褐色砂質シルト粒1%含む　灰白色粒1%含む　炭化物粒1%含む
4	10YR5/8	黄褐色砂質シルトの混合土	粘性中　しまり密	
5	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8黄褐色砂質シルトブロック5%含む
6	10YR3/3	暗褐色砂質シルト	粘性弱　しまりやや疎	

ＰＰ５・６共通（ｉ－ｉ′）

1	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8黄褐色シルト粒1%含む
2	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり密	10YR4/4　褐色砂質シルト2%含む（壁溝）



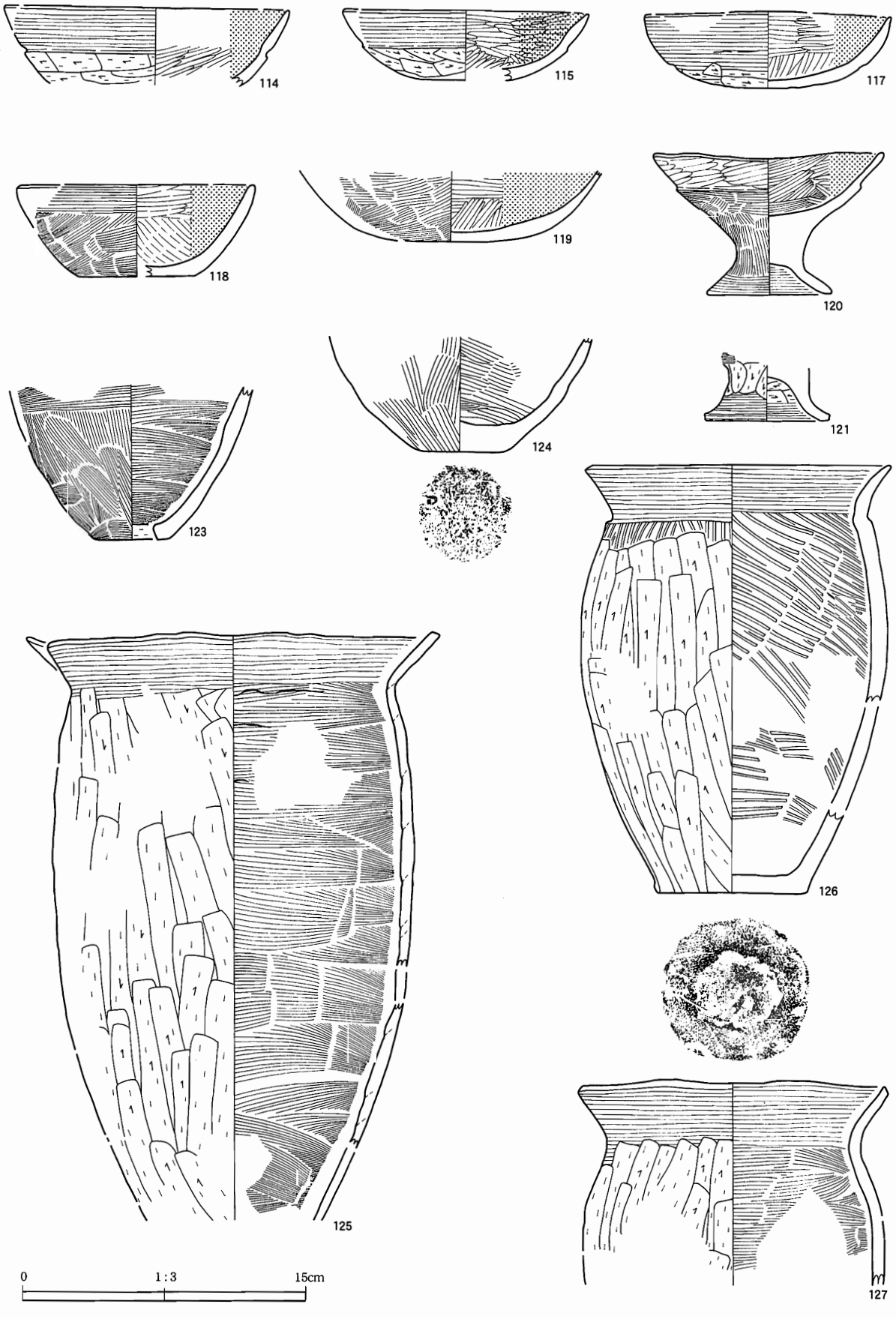
ＰＰ７・８共通（ｊ－ｊ′）

1	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	10YR5/8黄褐色シルト粒1%含む
2	10YR4/4	褐色砂質シルト	粘性弱　しまりやや疎	

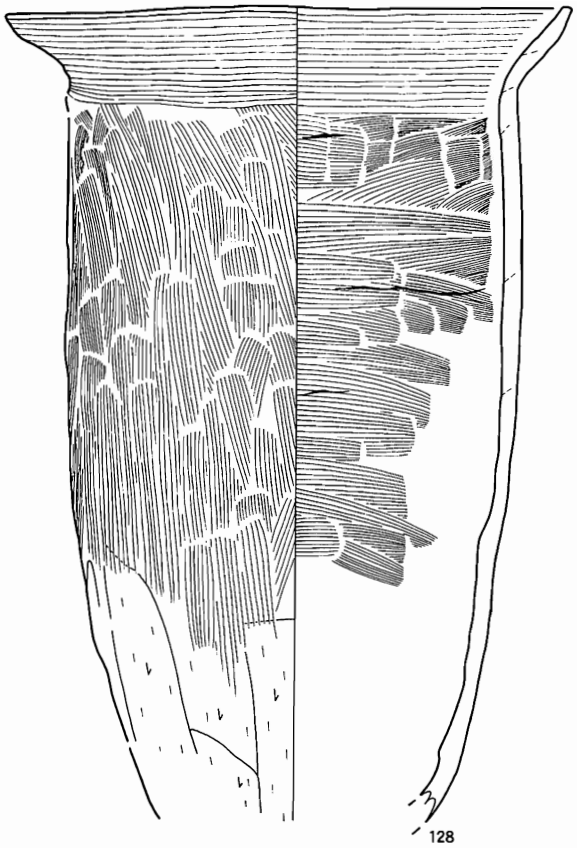
ＰＰ９以下は平面図のみ、断面なし

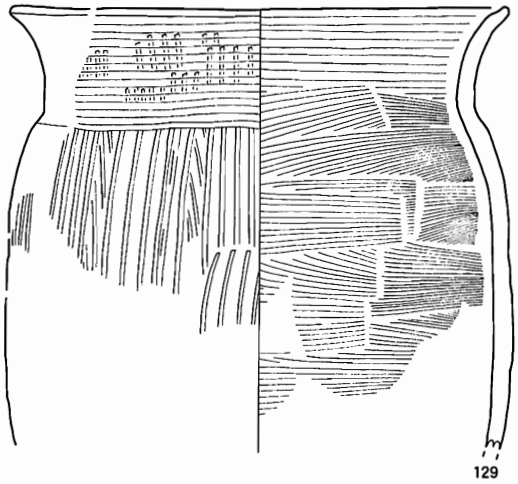
0　1:30　1m

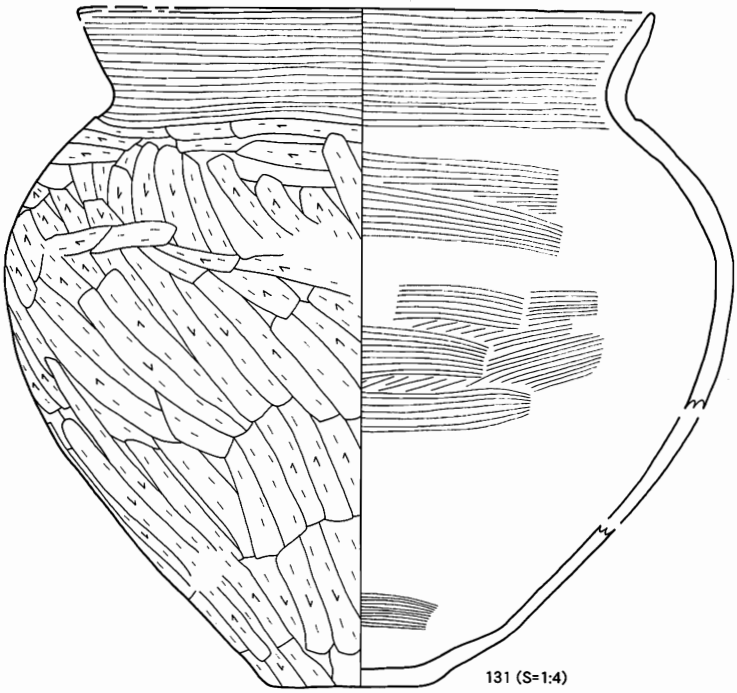
第33図　ＳＩ０８竪穴住居跡（４）



第34図　ＳＩ０８竪穴住居跡（５）

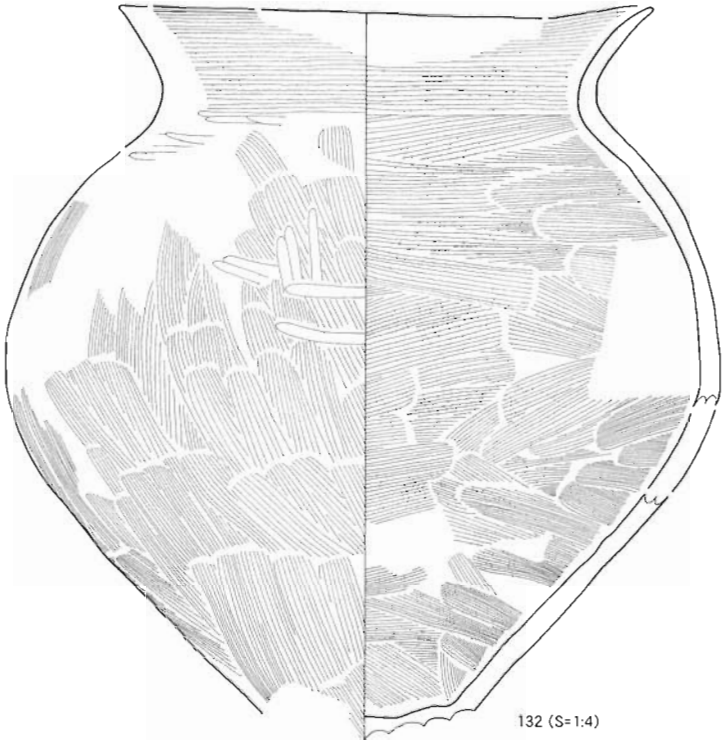


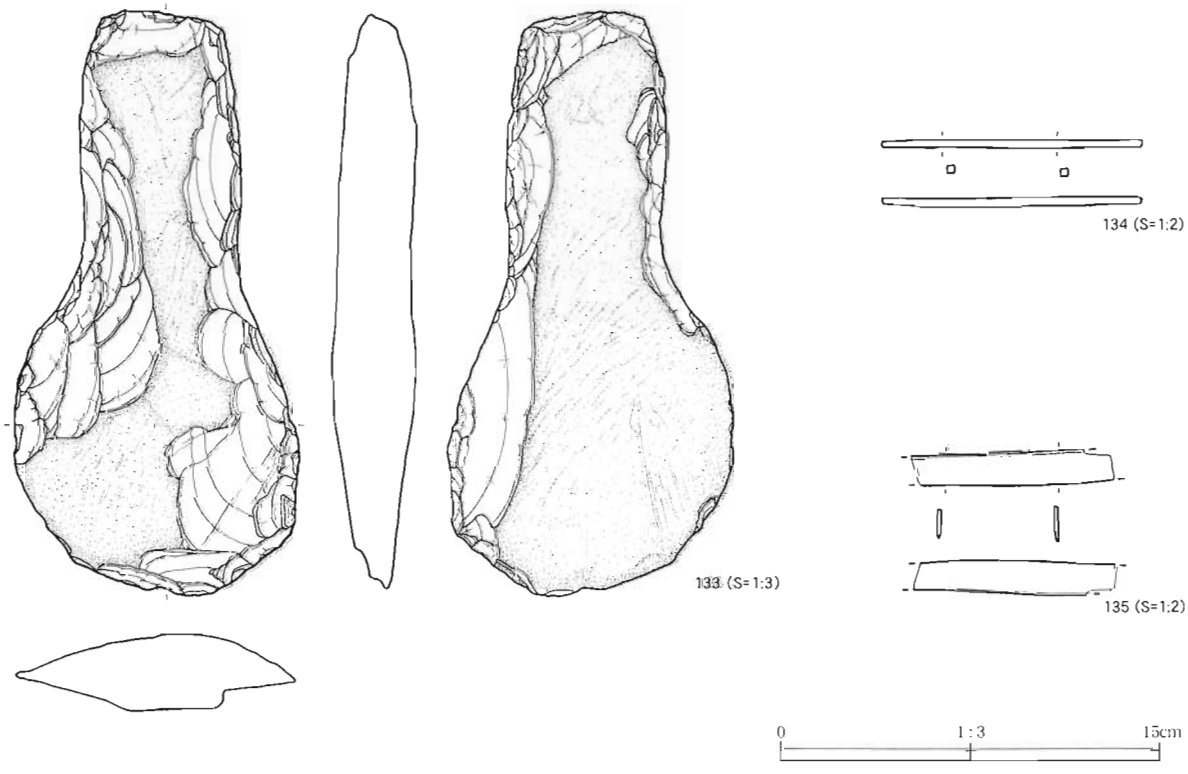




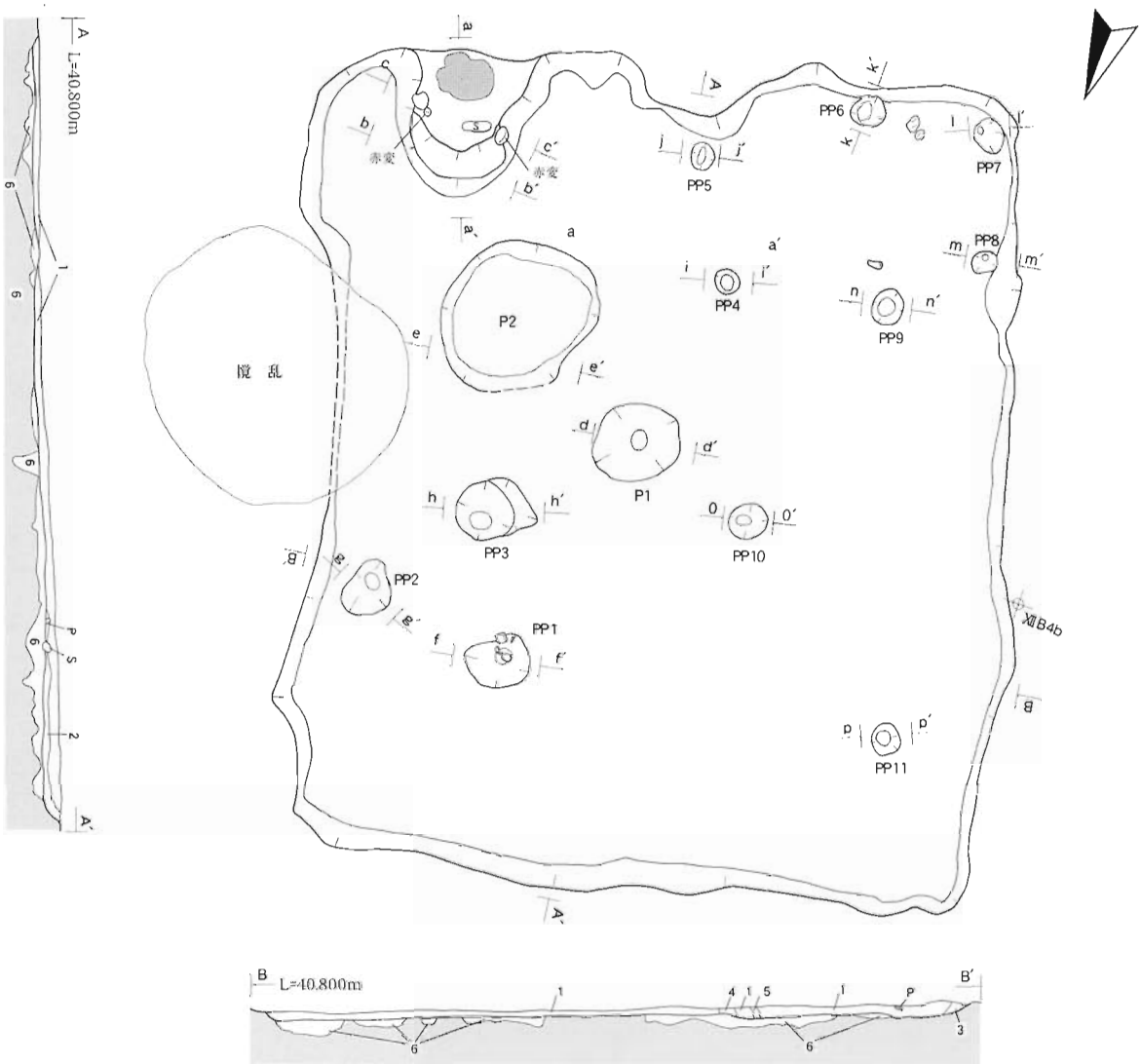
0　1:3　15cm

第35図　ＳＩ０８竪穴住居跡（６）





第36図　ＳＩ０８竪穴住居跡（７）



埋土断面（A－A'・B－B'）

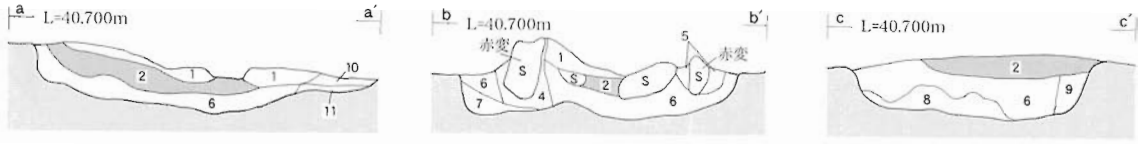
1	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性中	しまり密	10YR4/6褐色シルト粒1%未満含む　灰白色粒5%含む
2	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中	しまり密	灰白色粒1%含む
3	10YR2/2 黒褐色シルトと10YR 3/4暗褐色シルトの混合土	粘性中	しまり中	
4	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性弱	しまり密	10YR4/6褐色砂質シルトブロック含む
5	10YR4/4 褐色シルト	粘性弱	しまり密	灰白色粒1%未満含む
6	10YR2/3 黒褐色シルトと10YR 4/4褐色シルトの混合土	粘性弱	しまり密	灰白色粒3%含む　貼床部分

No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7
規模(cm)	53×39	48×39	66×46	20×17	22×19	29×26	31×23
深さ(cm)	36.9	14.1	36.6	14.7	12.8	28.1	19.9

No.	PP8	PP9	PP10	PP11
規模(cm)	22×18	31×24	31×24	32×24
深さ(cm)	14.7	18.1	23.3	18.0

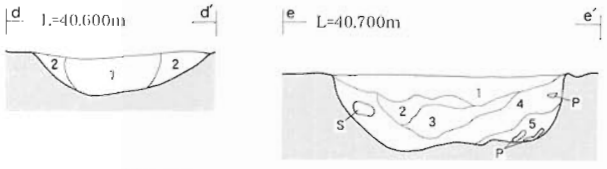
No.	P1	P2
規模(cm)	67×64	136×108
深さ(cm)	38.6	24.5

第37図　ＳＩ０９竪穴住居跡（１）



カマド埋土（a－a′・b－b′・c－c′）

1	7.5YR3/1 黒色シルト	粘性弱 しまり密	灰白色粒3%含む 焼土粒3%含む 炭化物粒1%含む
2	7.5YR2/4 極暗赤褐色の焼土	粘性中 しまりやや疎	炭化物粒1%含む 強く赤変した礫を含む
3	10YR4/6 褐色シルトと10YR3/4 暗褐色シルトの混合土	粘性やや強 しまり中	焼土粒ブロック2%含む 炭化物粒1%含む
4	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性弱 しまり密	灰白色粒2%含む
5	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	灰白色粒3%含む 焼土粒3%含む
6	7.5YR2/3 極暗褐色シルト	粘性中 しまりやや疎	焼土を粒状、ブロック状に5%含む 炭化物粒1%未満含む
4	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性やや強 しまり中	炭化物粒1%未満含む

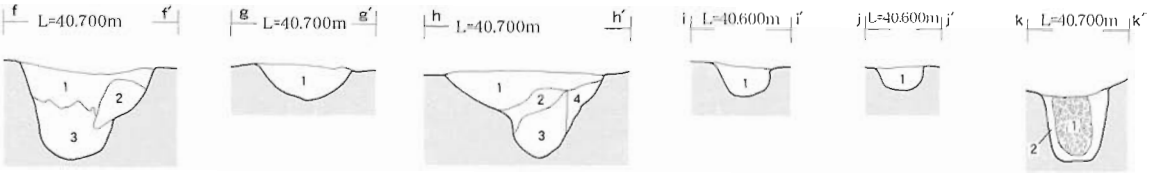


P1（d－d′）

1	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR4/6褐色シルト粒1%含む
2	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性やや弱 しまり中	

P2（e－e′）

1	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性弱 しまり密	灰白色粒5%含む 焼土粒・炭化物粒各1%含む
2	10YR4/4 褐色シルト	粘性中 しまり密	10YR3/3褐色シルトブロック10%含む 灰白色粒1%含む
3	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性中 しまり密	10YR4/4褐色シルトブロック5%含む 灰白色粒1%含む 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
4	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR4/4褐色シルトブロック2%含む 灰白色粒1%未満含む 径1cm大の礫2%含む
5	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR5/6黄褐色シルト粒1%未満含む 土器片含む



PP1（f－f′）

1	10YR3/3 暗褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの混合土	粘性中 しまり中	灰白色粒2%含む
2	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR5/8黄褐色シルト粒1%未満含む
3	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性中 しまりやや疎	10YR5/8黄褐色シルト粒2%含む

PP2（g－g′）

1	10YR2/3黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの混合土	粘性中 しまり中	

PP3（h－h′）

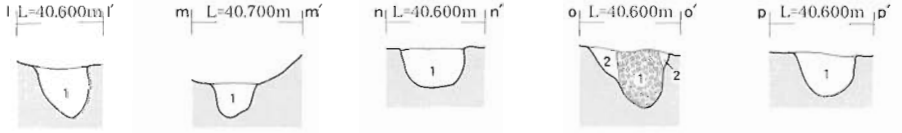
1	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR4/4褐色シルト粒2%含む 灰白色粒1%未満含む
2	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR4/4褐色シルト粒1%含む
3	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性やや強 しまり中	10YR4/4褐色シルトブロック5%含む
4	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性やや強 しまり中	

PP4・5・7・8共通（i－i′・j－j′・l－l′・m－m′）

1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR5/8黄褐色シルト粒1%未満含む

PP6（k－k′）

1	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり中（柱痕）	焼土ブロック・炭化物片各2%含む 柱穴のアタリ部分
2	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	灰白色粒1%含む 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む



PP9（n－n′）

1	10YR3/2 黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの混合土	粘性中 しまり中	灰白色粒1%未満含む 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む

PP10（o－o′）

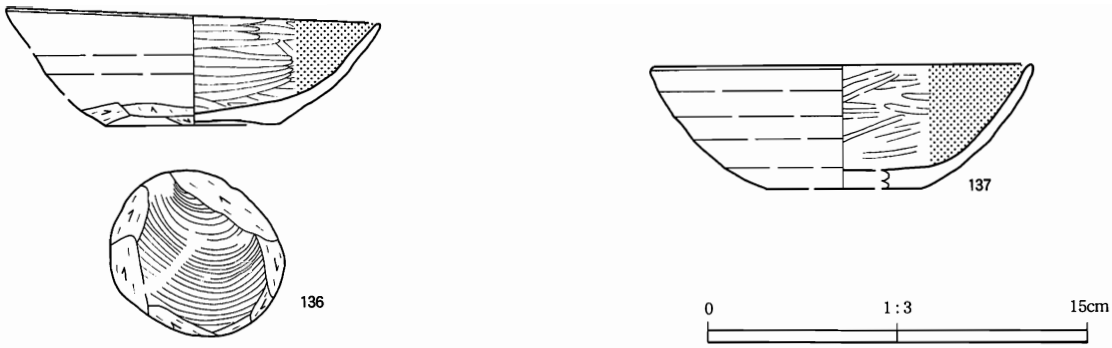
1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性やや強 しまりやや疎（柱痕）	灰白色粒1%未満含む
2	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり密	

PP11（p－p′）

1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり密	径1cm大の礫5%含む

0 1:30 1m

第38図　ＳＩ０９竪穴住居跡（２）



第39図　ＳＩ０９竪穴住居跡（３）

＜規模・平面形＞東辺6.4m、西辺6.6m、南辺5.75m、北辺5.54mの隅丸長方形を呈する。

＜埋土＞６層からなり、灰白色粒を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

＜壁＞壁高の残存値は７～14cmを測る。

＜床面＞床面はほぼ平坦で堅く締まり、黒褐色シルトと黄褐色シルトの混合土によって貼り床が施される。

＜カマド＞南壁の東より1/4の地点から、構築土と思われる径1.15×1.08m前後、厚さ９～12cmの不整形な焼土混じりの暗褐色シルトの堆積を確認した。両袖と見られる部分には礫が芯材として用いられており、被熱赤変している。燃焼部には73×84cm、厚さ９cmの範囲で焼土が形成されている。燃焼部から支脚は検出されなかった。煙道・煙出孔は残存不良のため確認できず詳細は明らかではない。住居跡の壁面が７～14cm掘り込まれているのに対して煙道部・煙出孔が完全に削平されたとは考えにくく、煙道がもともと壁際で短く立ち上がる形状を呈するものであった可能性がある。

＜柱穴・ピット＞計11基の柱穴と２基のピットが検出された。柱穴の規模は径20～66cm前後、深さは12～37cm前後を測る。平面形はほぼ円形を呈している。埋土は灰白色粒、黄褐色シルトを含む黒褐色シルトを主として構成される。柱穴は住居内の主柱穴を構成するものと推定される。

ピットは住居の中央部より検出された。Ｐ２は貼り床をはがした状態で検出された。規模はＰ１が径67cm×64cm、深さ38.6cm、Ｐ２が径1.36×1.08m、深さ24.5cmを測る。平面形は不整な円形を呈する。

遺物（第39図、写真図版46）

床面から土師器片１点、貼床より土師器片２点、堆積土中より土師器片10点が出土した。器種は坏、甕、大甕で構成される。坏の製作に際してはロクロが使用されており、内面が黒色処理される。底部は切り離し後、ヘラケズリ再調整を持つものが多い。他に回転イトキリのもの（142・143・144）も、少数ながら見られる。出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属するものと推察される。

ＳＩ１０竪穴住居跡

遺構（第40～43図、写真図版12）

＜位置・重複関係＞ＸⅡＡ７ｊグリッドに位置する。検出はⅢ層で黒褐色のプランとして確認した。

＜規模・平面形＞東辺5.17m、西辺5.28m、北辺5.14m、南辺5.14mの隅丸方形を呈する。

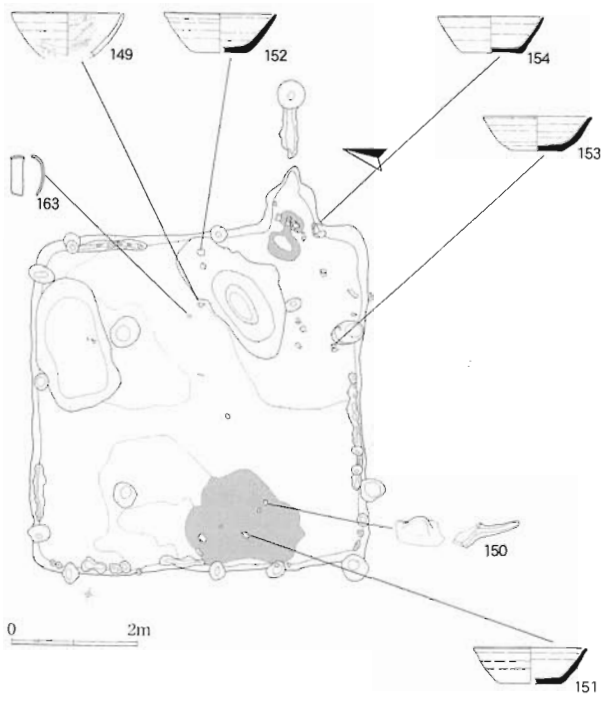
＜埋土＞13層からなり、灰白色粒、炭化物粒を含む黒褐色～暗褐色のシルトを主体として構成される。

＜壁＞壁高の残存値は11～18cmである。壁際にはＰＰ４・ＰＰ６～14が巡る。これらは配置から判断して壁柱穴を構成すると見られる。

<床面>床面は黒褐色と黄褐色シルトを主体とする混合土によって貼り床が施され、ほぼ平坦で固く締まる。壁際には壁溝が途切れながら全周する。

<カマド>東壁の南寄り、壁辺の1/4の場所に構築されている。カマド本体は削平を受け、天井～両ソデ部は残存していなかったが、箱形状の掘り方痕跡が確認された。掘り方内部からは土師器甕片が確認されている。燃焼部には径75×48cm、厚さ9cmの範囲で現地性の焼土が形成されている。煙道部の長さは推定2.2mを測るが、削平を受け底面付近のみが検出された状態であったため、掘り込みの深さや構造については不明である。煙出し部はほぼ円形で径48×44cm、深さ19cmの土坑状に掘り込まれる。

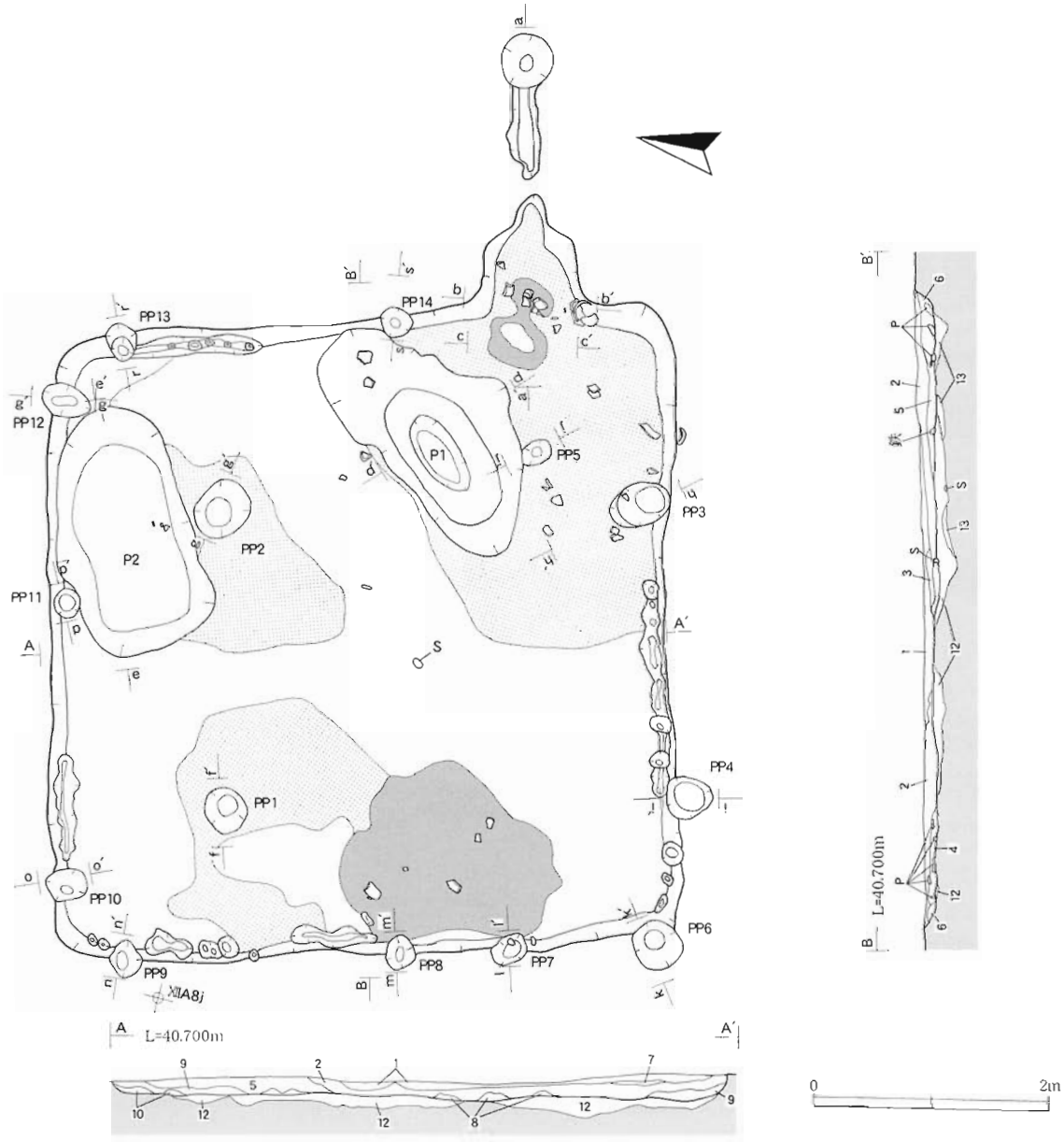
<柱穴・ピット>計14基の柱穴と2基のピットが検出された。柱穴の規模は径25～53cm前後、深さ14～54cmを測る。平面形はほぼ円形を呈する。ＰＰ１～ＰＰ３・（ＰＰ４？）はその配置から、住居の主柱穴を構成するものと考えられる。ＰＰ６～ＰＰ14・（ＰＰ４？）は壁面に接して掘り込まれた壁柱穴と考えられる。Ｐ１は住居東側、カマド付近で貼り床下位から検出された。平面形は不整な楕円形を呈する。規模は径2.24×1.2m、深さ49.6cmを測り、断面形はすり鉢形を呈する。Ｐ２は北壁側で検出されたものでＰ１より新しい。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は2.1×1.18m、深さ17.8cmを測る。



第40図　Ｓ１１０竪穴住居跡（１）

遺物（第44図、写真図版46・47）

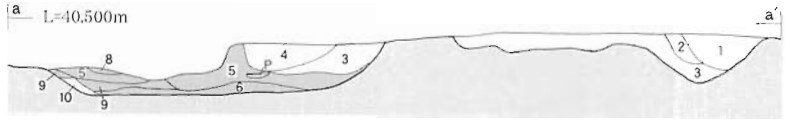
床面から土師器片２点、須恵器片４点、カマド構成材として土師器片３点、須恵器片１点、堆積土中より土師器片２点が出土した。器種は坏、双耳坏、甕、甕壺類で構成される。坏は須恵器が卓越し、底部は回転イトキリされるものが多いが、回転ヘラキリによるものも（151）少数存在する。150は土師器の双耳坏で、内面黒色処理される。石器は１点が出土している。161は床面から出土した磨石である。鉄製品としては２点が出土している。162は堆積土中から出土した刀子である。163は堆積土下位から出土した刀装具である。出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属するものと推察される。

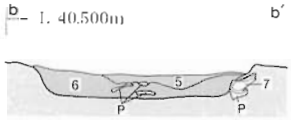


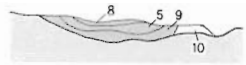
埋土(A－A′・B－B′)

1	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性弱　しまり中	10YR5/6黄褐色シルト粒灰白色粒1%未満含む
2	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
3	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性弱　しまり中	灰白色粒1%未満含む
4	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	焼土ブロック・炭化物片各2%含む　土器片多く含む
5	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	灰白色粒1%未満含む　炭化物粒1%未満含む　土器片を含む
6	10YR5/6	黄褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	10YR3/4　暗褐色シルト斑状に5%含む
7	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	灰白色粒1%未満含む
8	10YR4/4	褐色砂質シルト	粘性中　しまり密	10YR3/4　暗褐色シルトを斑状に含む
9	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8　黄褐色シルト粒1%含む
10	10YR5/8	黄褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR2/2　黒褐色シルト斑状に10%含む
11	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8　黄褐色シルトブロック2%含む
12	10YR2/2	黒褐色シルトと10YR 4/4褐色シルトの混合土	粘性中　しまり中	灰白色粒1%未満含む　貼床部分
13	10YR5/6	黄褐色砂質シルト	粘性弱　しまり中	貼床部分

第41図　ＳＩ１０竪穴住居跡（２）

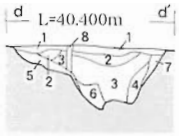






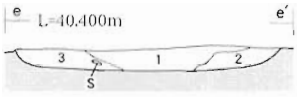
カマド煙道埋土（a－a′・b－b′・c－c′）

1	7.5YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR4/6褐色シルトブロック2%含む　焼土ブロック・炭化物片各3%含む
2	7.5YR2/3	極暗褐色シルト	粘性中　しまりやや密	炭化物片5%含む
3	10YR2/3	黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの混合土	粘性中　しまりやや密	灰白色粒1%未満含む
4	7.5YR3/3	暗褐色シルト	粘性やや弱　しまり密	灰白色粒1%未満含む　焼土粒2%含む　炭化物粒1%未満含む
5	7.5YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや密	7.5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック7%　炭化物粒1%含む
6	5YR3/3	暗赤褐色の焼土	粘性やや強　しまり中	炭化物片1%含む　土器片を多く含む
7	7.5YR2/3	極暗褐色シルト	粘性やや弱　しまりやや疎	10YR5/8黄褐色シルトブロック5%含む　焼土粒2%含む（ソデと思われる土器内）
8	5YR6/8	橙色の焼土	粘性弱　しまり密	7.5YR3/4　暗褐色シルト斑状に2%含む　炭化物粒1%未満含む
9	5YR3/2	暗赤褐色の焼土	粘性やや強　しまりやや密	灰白色粒1%未満含む　炭化物粒1%未満含む



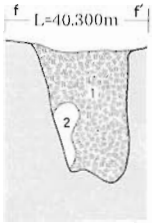
P1（d－d′）

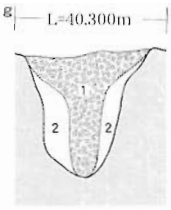
1	10YR2/2	黒褐色シルトと10YR5/8黄褐色シルトの混合土	粘性弱　しまり密	灰白色粒2%含む（貼り床部分）
2	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性やや強　しまり密	10YR5/8黄褐色砂質シルトブロック1%含む　灰白色粒1%未満含む
3	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性やや強　しまりやや疎	10YR4/4褐色シルト粒1%含む
4	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや疎	10YR4/4褐色シルト斑状3%含む
5	10YR5/8	黄褐色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混合土	粘性弱　しまり密	灰白色粒1%未満含む
6	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや疎	10YR5/8黄褐色シルト粒1%含む　灰白色粒1%未満含む
7	10YR4/4	褐色シルトと10YR3/4暗褐色シルトの混合土	粘性中　しまり密	
9	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	

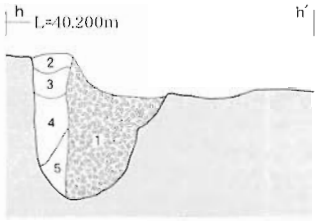


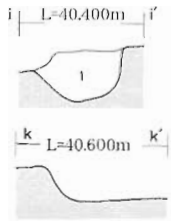
P2（e－e′）

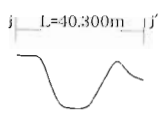
1	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまり密	10YR4/4褐色シルトブロック3%含む　焼土粒・炭化物片各2%含む
2	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性やや弱　しまり密	10YR4/4褐色シルト斑状5%含む
3	10YR3/2	黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの混合土	粘性やや弱　しまりやや密	焼土粒1%未満含む











PP1（f－f′）

1	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性やや弱　しまりやや疎（柱痕）	10YR5/6黄褐色シルト粒1%未満含む
2	10YR4/4	褐色砂質シルト	粘性やや弱　しまりやや疎	

PP2（g－g′）

1	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性やや弱　しまり密（柱痕）	10YR4/6褐色砂質シルト斑状5%含む　灰白色1%含む
2	10YR2/3	黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの混合土	粘性やや弱　しまり中	

PP3（h－h′）

1	7.5YR2/2	黒褐色シルト	粘性強　しまり疎（柱痕）	10YR4/4褐色シルトブロック1%未満含む　焼土粒・炭化物粒1%未満含む
2	10YR3/2	黒褐色シルトと10YR5/6黄褐色シルトの混合土	粘性弱　しまり密	灰白色粒3%含む
3	7.5YR3/2	黒褐色シルト	粘性強　しまり疎	焼土粒1%含む
4	10YR5/6	黄褐色シルトと10YR2/2黒褐色シルトの混合土	粘性強　しまり疎	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
5	7.5YR3/2	黒褐色シルト	粘性強　しまり疎	10YR5/6黄褐色シルト粒2%含む

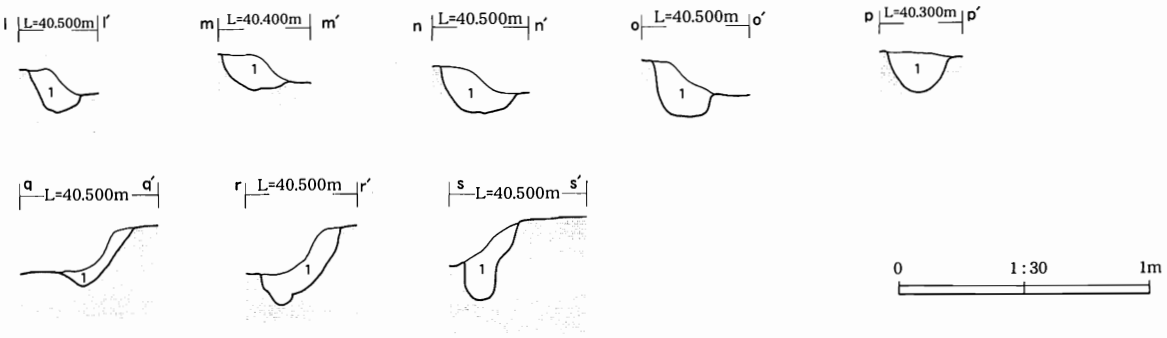
PP4・7～10・共通（i－i′・j－j′・k－k′）

1	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり密	10YR4/4褐色シルトブロック含む

PP5・6はエレベーションのみ

0　1:30　1m

第42図　ＳＩ１０竪穴住居跡（３）



ＰＰ７～11（ｌ－ｌ′・ｍ－ｍ′・ｎ－ｎ′・ｏ－ｏ′・ｐ－ｐ′）
1　10YR2/3　黒褐色シルト　粘性中　しまり密　10YR4/6褐色砂質シルト斑状5%含む(特に下部に多い)

ＰＰ12･13･14共通（ｇ－ｇ′・ｒ－ｒ′・ｓ－ｓ′）
1　10YR3/3　暗褐色シルト　粘性弱　しまり密　10YR2/3　黒褐色シルト斑状に3%含む

No.	P1	P2
規模(cm)	224×120	210×118
深さ(cm)	46.9	17.8

No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5
規模(cm)	38×35	52×40	53×35	39×36	26×19
深さ(cm)	52.0	49.6	29.0	54.0	20.0

PP6	PP7	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12	PP13	PP14
46×40	30×24	30×26	32×30	36×27	25×23	41×26	32×24	26×25
21.1	16.3	14.4	17.0	22.8	15.3	32.3	27.9	32.8

第43図　ＳＩ１０竪穴住居跡（４）

ＳＩ１１竪穴住居跡

遺構（第45・46図、写真図版13）

＜位置・重複関係＞ＸＩＡ８ｉグリッドに位置する。検出面はⅣ層で、北側を砂礫層と接する部分で黒褐色のプランとして確認した。３号土坑と重複し、これによって切られる。

＜規模・平面形＞南東辺4.33m、北西辺4.06m、北東辺3.75m、南西辺3.46mの隅丸方形を呈する。

＜埋土＞７層からなり、炭化物を含む黒褐色シルト主体で構成される。

＜壁＞壁高の残存値は23～31cmである。

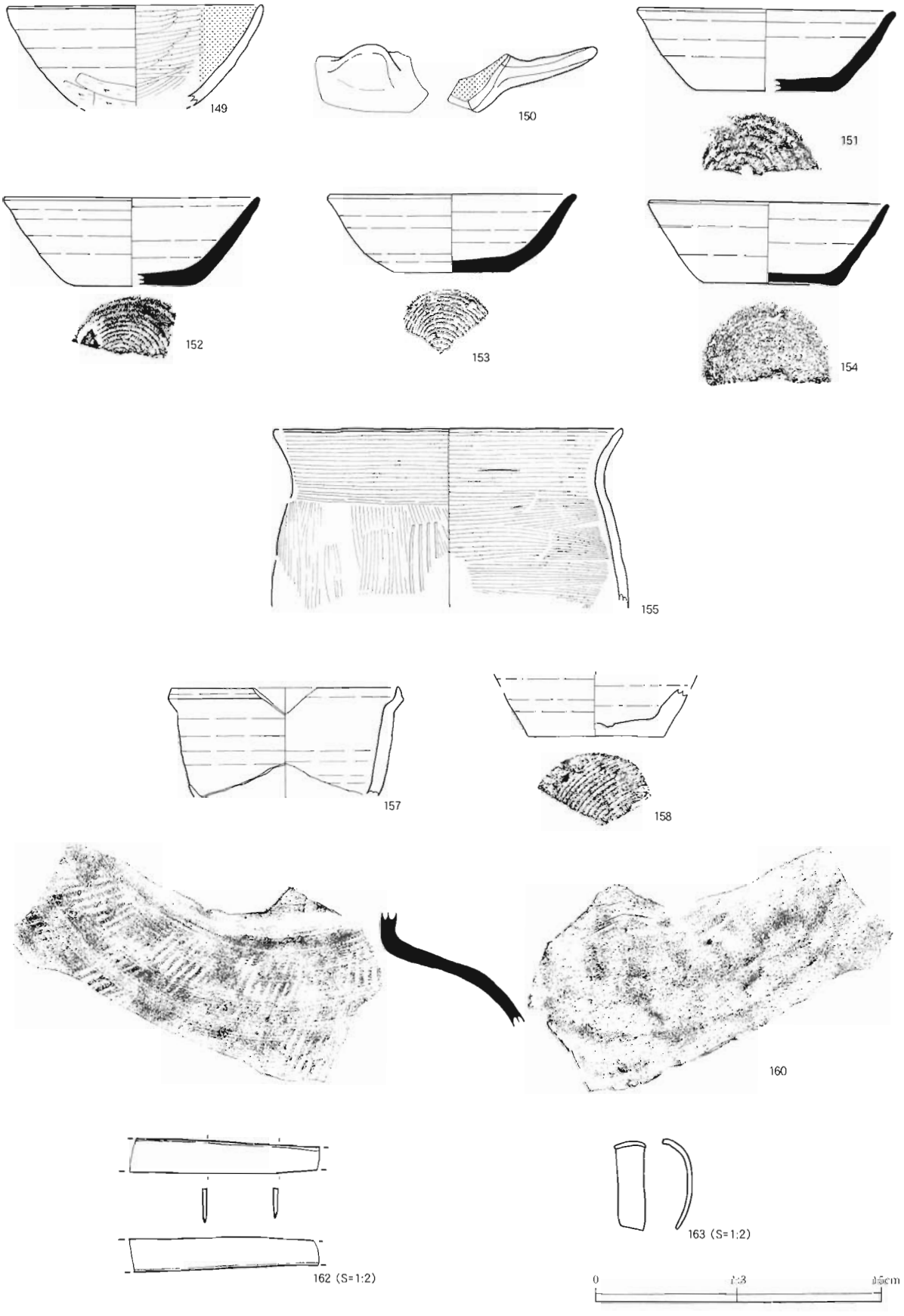
＜床面＞床面はほぼ平坦で固くしまり、一部には砂礫が露出する。床面からは炭化した木材が多量に出土しており、焼失住居と考えられる。褐色砂質シルトと暗褐色シルトの混合土によって、貼り床が施される。

＜カマド＞北西壁ほぼ中央に構築されている。カマド本体は黒褐～暗褐色の粘土質シルトを主体として構築される。燃焼部には39×45cm、厚さ13cmの範囲で現地性の焼土が形成される。煙道部は幅37cm、長さ1.55mの溝状に掘り込まれる。煙道部は煙出孔へ向かい、ほぼ平坦な角度をもって延びており、確認面からの深さは62cmである。煙道の構造など詳細は残存不良のため不明である。

＜柱穴・ピット＞計６基の柱穴が検出された。住居中央部に検出された１基を除き、残り５基は壁柱穴である。柱穴の平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は径22～37cm前後、深さ11～56cm前後を測る。これらの柱穴は、その配列から住居の主柱穴を構成するものと考えられる。

遺物（第47図、写真図版47）

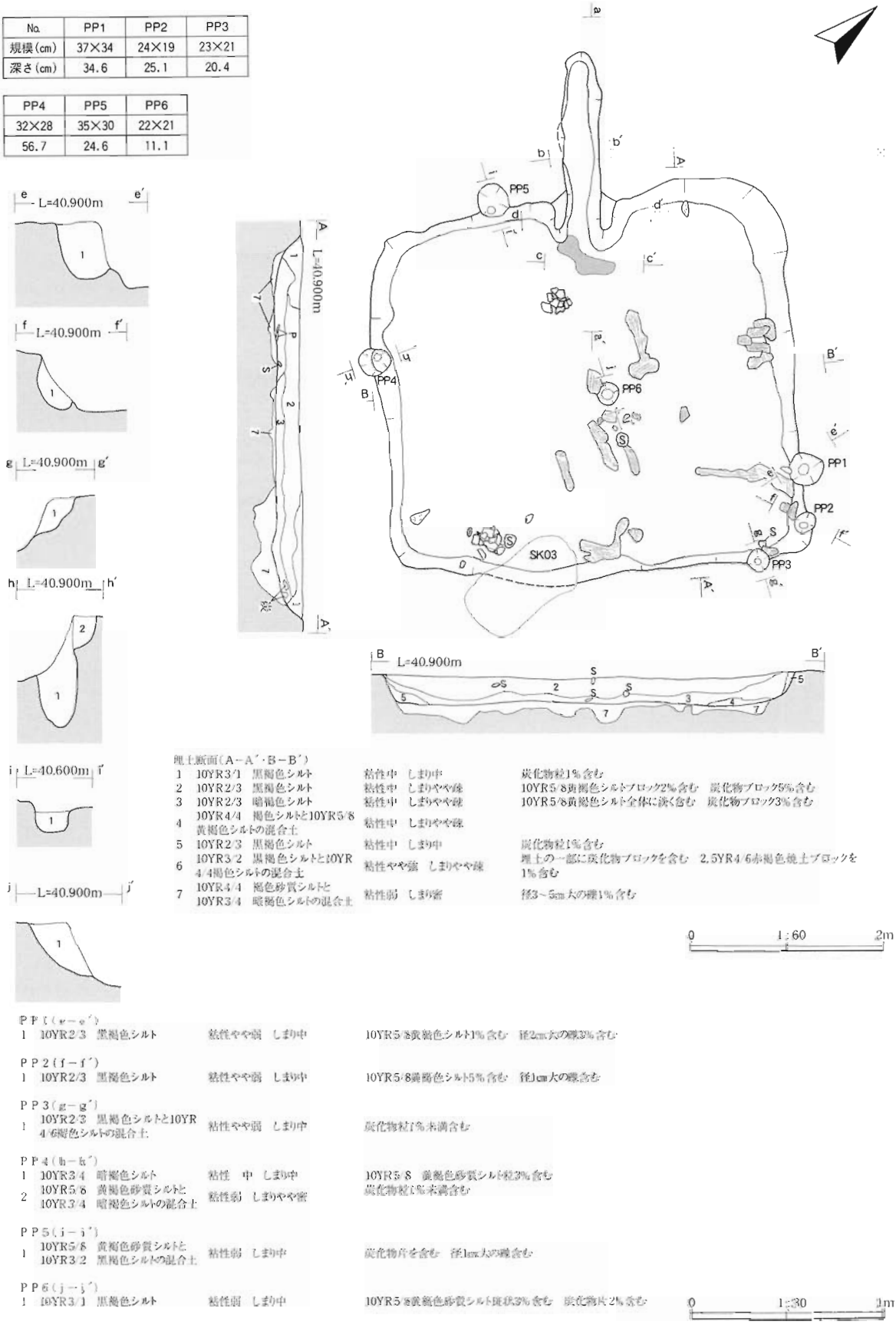
床面から土師器片３点のみ出土している。器種は坏と甕で構成される。製作に際していずれもロクロは使用されない。164は土師器の坏で、体部と口縁部の接するところに段を持つ。内面は黒色処理される。出土遺物から判断して、本遺構は奈良時代に属するものと推察される。



第44図　ＳＩ１０竪穴住居跡（５）

No.	PP1	PP2	PP3
規模(cm)	37×34	24×19	23×21
深さ(cm)	34.6	25.1	20.4

PP4	PP5	PP6
32×28	35×30	22×21
56.7	24.6	11.1



埋土断面(A－A′・B－B′)

1	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	炭化物粒1%含む
2	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまりやや疎	10YR5/8黄褐色シルトブロック2%含む 炭化物ブロック5%含む
3	10YR2/3 暗褐色シルト	粘性中 しまりやや疎	10YR5/8黄褐色シルト全体に淡く含む 炭化物ブロック3%含む
4	10YR4/4 褐色シルトと10YR5/8黄褐色シルトの混合土	粘性中 しまりやや疎	
5	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	炭化物粒1%含む
6	10YR3/2 黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの混合土	粘性やや強 しまりやや疎	埋土の一部に炭化物ブロックを含む 2.5YR4/6赤褐色焼土ブロックを1%含む
7	10YR4/4 褐色砂質シルトと10YR3/4 暗褐色シルトの混合土	粘性弱 しまり密	径3～5cm大の礫1%含む

PP1(e－e′)

1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性やや弱 しまり中	10YR5/8黄褐色シルト1%含む 径2cm大の礫3%含む

PP2(f－f′)

1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性やや弱 しまり中	10YR5/8黄褐色シルト5%含む 径1cm大の礫含む

PP3(g－g′)

1	10YR2/3 黒褐色シルトと10YR4/6褐色シルトの混合土	粘性やや弱 しまり中	炭化物粒1%未満含む

PP4(h－h′)

1	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性 中 しまり中	10YR5/8 黄褐色砂質シルト粒3%含む
2	10YR5/8 黄褐色砂質シルトと10YR3/4 暗褐色シルトの混合土	粘性弱 しまりやや密	炭化物粒1%未満含む

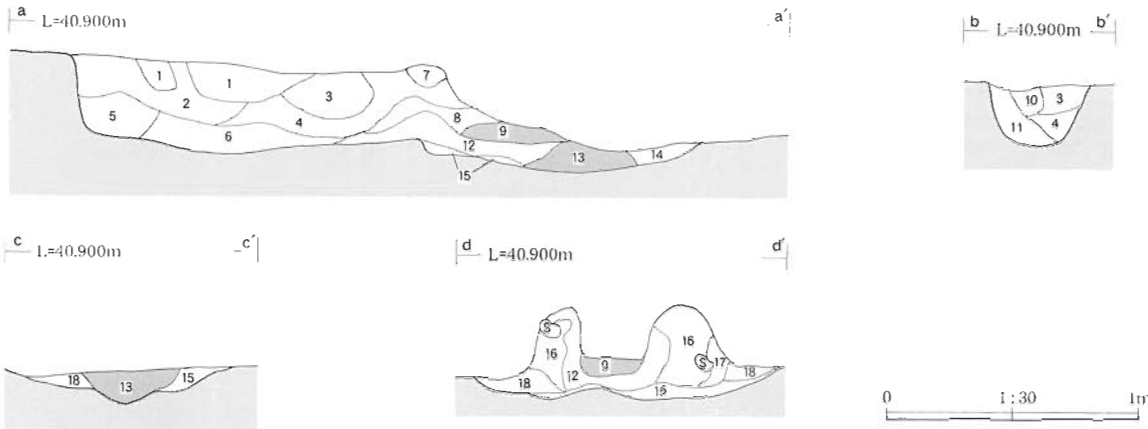
PP5(i－i′)

1	10YR5/8 黄褐色砂質シルトと10YR3/2 黒褐色シルトの混合土	粘性弱 しまり中	炭化物片を含む 径1mm大の礫含む

PP6(j－j′)

1	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性弱 しまり中	10YR5/8黄褐色砂質シルト斑状3%含む 炭化物片2%含む

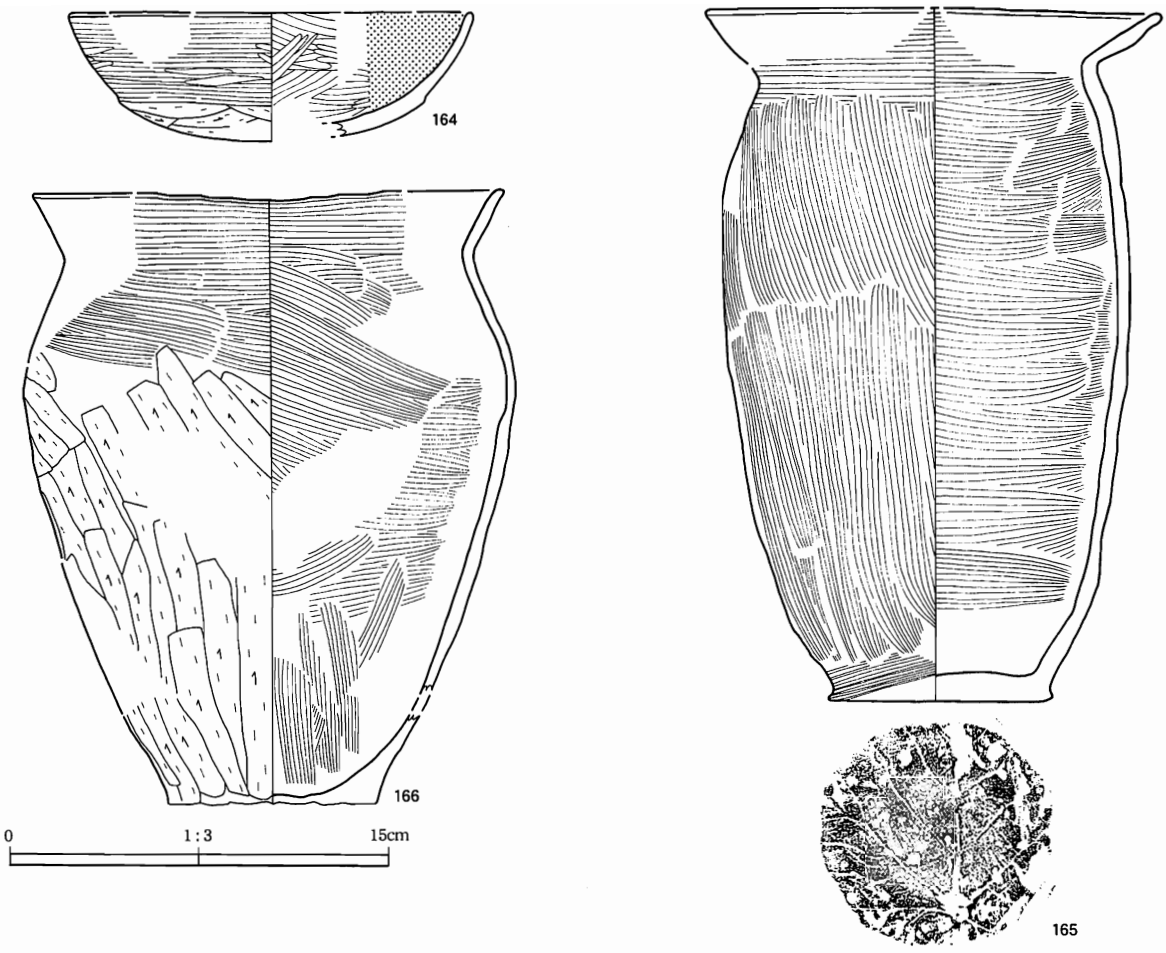
第45図　ＳＩ１１竪穴住居跡（１）



カマド煙道埋土（a－a′・b－b′・c－c′・d－d′）

1	10YR4/3	褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	10YR2/3黒褐色シルト斑状15%含む　炭化物粒1%含む
2	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり疎	10YR5/8黄褐色シルト粒5%含む　径1cm大の礫2%含む
3	10YR4/3 10YR5/8	褐色シルト主体に 黄褐色シルトとの混合土	粘性中　しまりやや密	炭化物粒1%含む
4	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	10YR5/6黄褐色シルト(やや砂質)を斑状に10%含む　径1cm大の礫含む
5	10YR5/6	黄褐色砂質シルト	粘性やや弱　しまり中	10YR2/2黒褐色シルト粒2%含む　径5～8cm大の礫含む
6	10YR2/3 10YR5/8	黒褐色シルト主体に 黄褐色シルトとの混合土	粘性中　しまり中	炭化物粒3%含む
7	10YR5/6	黄褐色シルト	粘性中　しまり密	10YR3/1黒褐色シルト粒2%含む
8	10YR5/6 10YR3/4	黄褐色砂質シルトと 暗褐色シルトの混合土	粘性弱　しまり密	炭化物粒1%含む
9	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性中　しまりやや密	5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック3%含む　炭化物片2%含む
10	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/6黄褐色シルト斑状10%含む　炭化物粒1%未満含む
11	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/6黄褐色シルト斑状15%含む　炭化物粒1%含む
12	10YR3/4	暗褐色シルトと10YR4/6褐色シルトの混合土	粘性中　しまり密	炭化物粒1%未満含む
13	5YR5/8	明赤褐色砂質の焼土	粘性やや弱　しまり疎	7.5YR4/6　褐色やや砂質のシルト斑状2%含む
14	7.5YR2/3	極暗褐色シルト	粘性弱　しまり疎	10YR5/8黄褐色砂質シルト斑状5%含む
15	10YR5/8	黄褐色シルト	粘性やや弱　しまり密	10YR3/1黒褐色シルト粒1%含む
16	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性中　しまり密	10YR3/2黒褐色シルト斑状2%含む　径5cm大の礫を含む　(カマドのソデ部分)
17	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性弱　しまり密	10YR3/4褐色シルト粒3%含む
18	10YR3/4 10YR2/2	暗褐色砂質シルトと 黒褐色シルトの混合土	粘性弱　しまり中	

第46図　ＳＩ１１竪穴住居跡（２）



第47図　ＳＩ１１竪穴住居跡（３）

ＳＩ１２竪穴住居跡

遺構（第48図、写真図版14）

＜位置・重複関係＞ＸＩＡ５ｂグリッドに位置する。検出面はⅥ層の砂礫で、黒褐色のプランとして確認した。検出の時点で遺構の上部は削平により、殆ど消失しており、床面の僅かな部分が検出されたのみである。また南西部分も攪乱を受けていた。遺構の南東部分は調査区域外にかかり、未調査である。

＜規模・平面形＞北東辺－3.45m、北西辺（4.65）mの隅丸方形を呈するものと推定される。北西辺は推定値、北東辺は残存値である。

＜埋土＞上部が削平されており、層として確認できなかった。

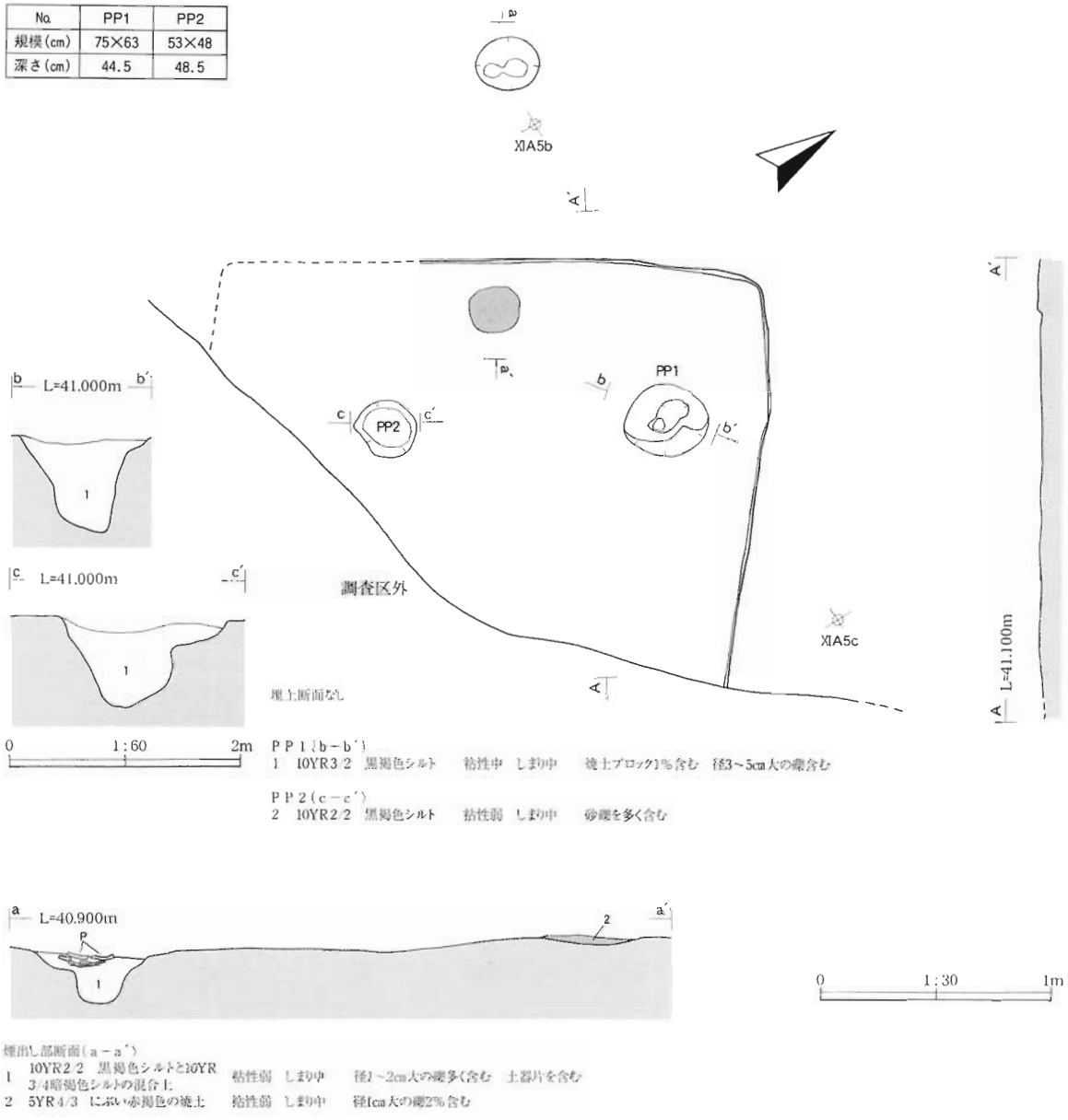
＜壁＞殆ど残存していない。計測できた残存部で0.5～2.5cmを測る。

＜床面＞床面は礫層で、やや起伏を持つ。壁溝と貼り床は確認できなかった。

＜カマド＞残存状態は悪いが、燃焼部と思われる現地性の焼土及び煙出しの位置から、北西壁のほぼ中央に構築されていたものと推定される。焼土の規模は径44×39cm、厚さ４cmを測る。煙道部は確認できなかったが、煙出し部は住居の壁から北西145cmの位置に、径56×45cm、深さ20cmの土坑状に掘り込まれる。煙道の構造など詳細は残存不良のため不明である。

＜柱穴・ピット＞床面から柱穴を２基検出した。平面形は不整な円形を呈し、規模はＰＰ１が径75×63cm、

No.	PP1	PP2
規模(cm)	75×63	53×48
深さ(cm)	44.5	48.5

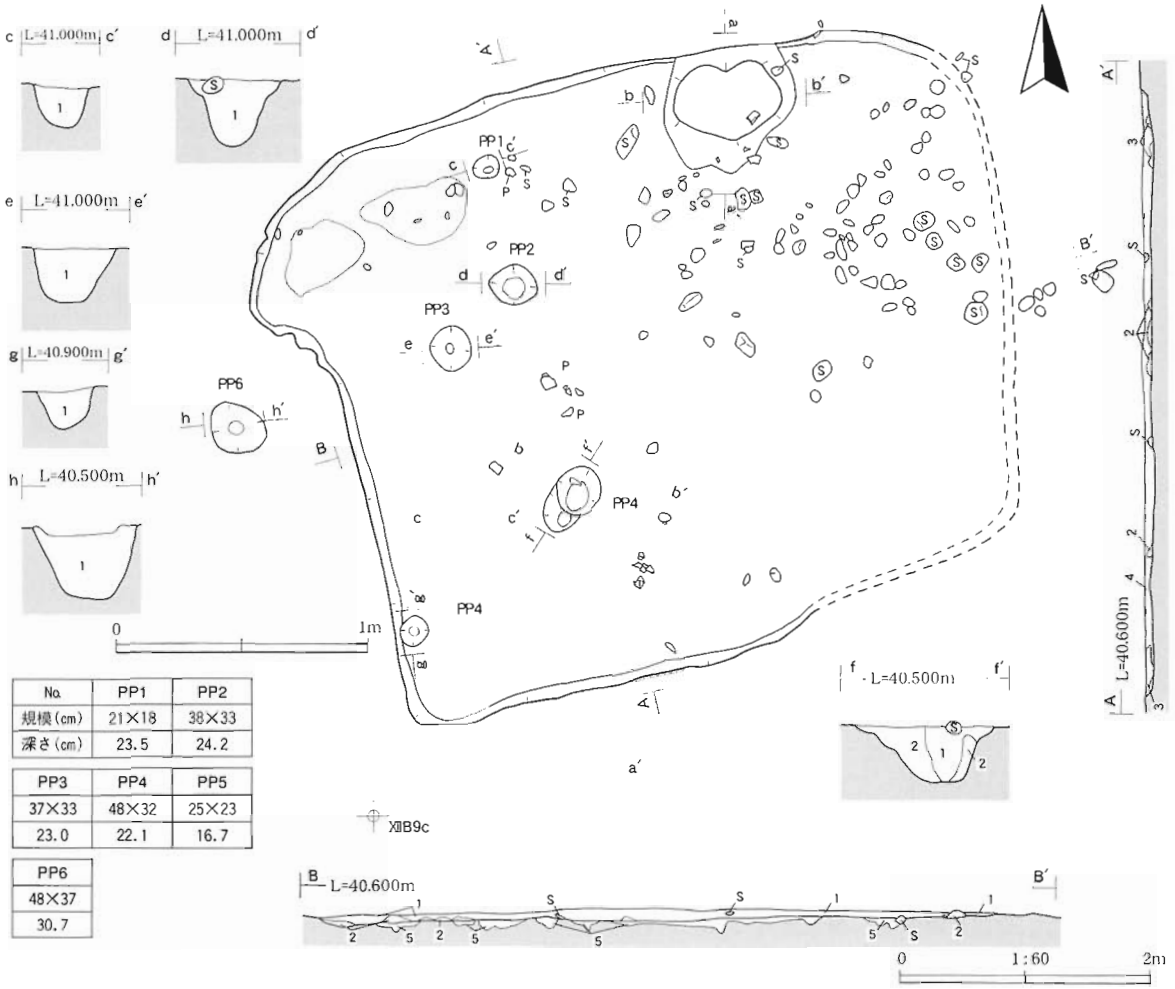


第48図　ＳＩ１２竪穴住居跡

深さ44.5cm、ＰＰ２が径53×48cm、深さ48.5cmを測る。これらの柱穴は、その配列から見て住居の主柱穴を構成するものと思われ、未調査の南東部分にも同様の柱穴が存在するものと推測される。

遺物

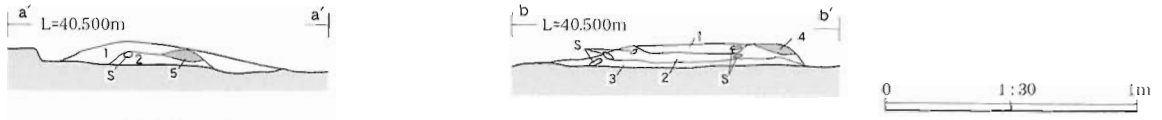
遺物は出土していない。形態から古代の遺構と推察できるが、詳細については不明である。



No.	PP1	PP2
規模(cm)	21×18	38×33
深さ(cm)	23.5	24.2

PP3	PP4	PP5
37×33	48×32	25×23
23.0	22.1	16.7

PP6
48×37
30.7



埋土断面(A－A′・B－B′)

1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中	しまり中	灰白色粒1%含む 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
2	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR2/2黒褐色シルトブロック10%含む 灰白色粒1%未満含む
3	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR2/2黒褐色シルト斑状に5%含む 灰白色粒2%含む 径1cm以下の小礫が多い
4	10YR4/4 褐色やや砂質のシルト	粘性弱	しまり中	10YR3/4暗褐色シルト斑状5%含む 灰白色粒1%未満含む
	10YR3/2 黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの混合土	粘性中	しまりやや密	灰白色粒1%未満含む
5	10YR2/3 黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの混合土	粘性中	しまりやや密	5YR4/8赤褐色の焼土ブロックを含む

カマド埋土断面(a－a′・b－b′)

1	7.5YR3/3 暗褐色シルト	粘性弱	しまり密	7.5YR8/6浅黄橙色の小ブロック含む 焼土ブロック5%炭化物粒2%含む
2	7.5YR3/2 黒褐色シルト	粘性中	しまり密	灰白色粒1%未満含む 焼土粒・炭化物粒各1%含む
3	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性弱	しまり密	灰白色粒1%未満含む 焼土粒1%未満含む 径1cm前後の礫多い
4	7.5YR4/6 褐色シルトと5YR5/8明赤褐色の焼土の混合土	粘性弱	しまり密	
5	7.5YR8/6 浅黄橙色の灰と5YR5/8明赤褐色の焼土の混合土	粘性弱	しまり中	炭化物粒1%含む

ＰＰ１～３・５共通(c－c′・d－d′・e－e′・g－g′)

1	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性弱	しまりやや密	10YR5/8黄褐色砂質シルトブロック5%含む 灰白色粒1%未満含む 炭化物粒1%含む

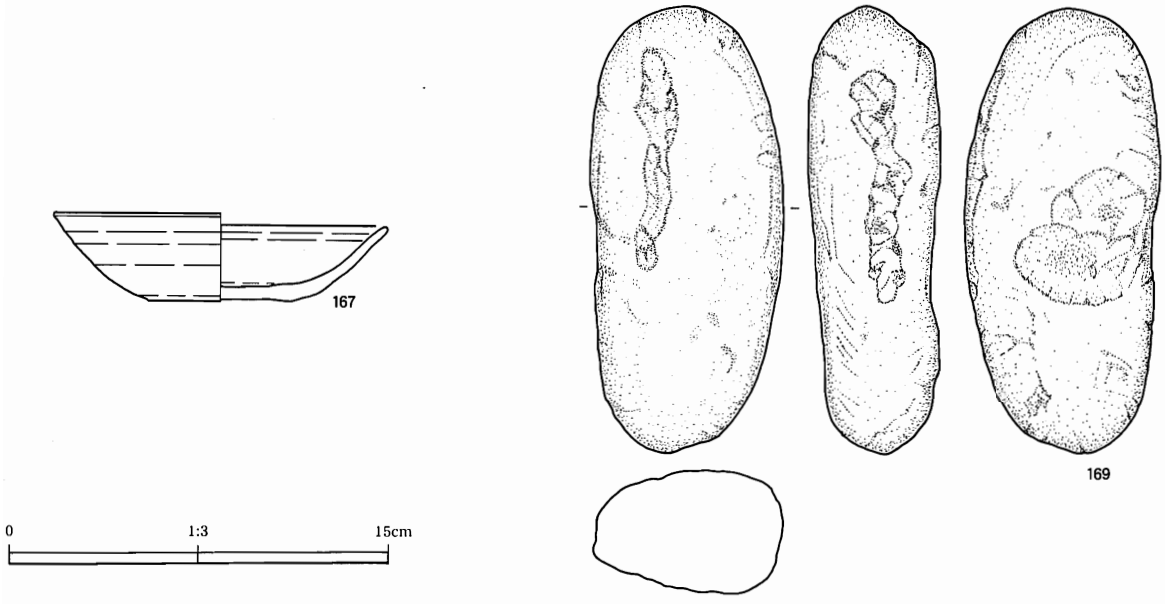
ＰＰ４(f－f′)

1	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR5/6黄褐色砂質シルト粒3%含む 灰白色粒1%含む
2	10YR4/2 灰黄褐色シルト	粘性弱	しまりやや密	

ＰＰ６(h－h′)

1	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性弱	しまり中	10YR5/6黄褐色砂質シルト粒3%含む 灰白色粒1%未満含む

第49図　ＳＩ１３竪穴住居跡（１）



第50図　ＳＩ１３竪穴住居跡（２）

ＳＩ１３竪穴住居跡

遺構（第49図、写真図版15）

＜位置・重複関係＞ＸⅡＢ８ｃグリッドに位置する。検出面はⅢ層で暗褐色のプランとして確認した。検出の時点で上部は削平され消失しており、東側の壁については確認できなかった。

＜規模・平面形＞東辺（3.95）m、西辺4.4m、北辺5.48m、南辺－3.3mの不整な隅丸方形を呈するものと推定される。東辺は推定値、南辺は残存値である。

＜埋土＞５層からなる。灰白色粒、焼土、炭化物を含む黒褐色シルト主体で構成される。

＜壁＞壁高の残存値は２～７㎝である。

＜床面＞床面はⅣ層基盤礫上まで掘り込んで構築され、ほぼ平坦で堅く締まる。北西隅には移地性と思われる焼土ブロックの広がりが観察された。黒褐色と褐色シルトの混合土によって貼り床が施されている。

＜カマド＞北壁東寄りの部分で構築土と思われる焼土ブロックを含む黒褐～暗褐色シルトの堆積を確認した。煙道、煙出孔などの施設は削平により残存しない。

＜柱穴・ピット＞床面から５基、住居の西側に１基、計６基の柱穴が検出されている。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は径21～48㎝前後、深さ16～36㎝前後を測る。これらの柱穴は住居の主柱穴を構成したものと推定される。

遺物（第50図、写真図版48）

堆積土中より土師器坏が１点出土している。内外面共にロクロナデ調整され、底部の切り離し技法は回転イトキリである。石器類は床面から２点が出土している。168は安山岩製の円礫である。169は安山岩製の敲石である。出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属するものと推察される。

ＳＩ１４竪穴住居跡

遺構（第51～53図、写真図版16）

＜位置・重複関係＞ＸⅡＢ７ｂグリッドに位置する。検出面はⅢ層で黒褐色のプランとして確認した。検出の段階で本調査前試掘トレンチによる削平を受けており、遺構の一部が破壊されていた。

＜規模・平面形＞東辺3.53m、西辺－2.65m、北辺3.48m、南辺（3.50）mの隅丸方形を呈するものと推定される。西辺は残存値、南辺は推定値である。

＜埋土＞８層からなり、灰白色粒、焼土、炭化物を含む暗褐色シルトを中心として構成される。

＜埋土＞壁の残存値は20～28cmである。

＜床面＞床面はほぼ平坦で固く締まるもので、一部が段丘基盤礫と接する。貼り床は確認できなかった。

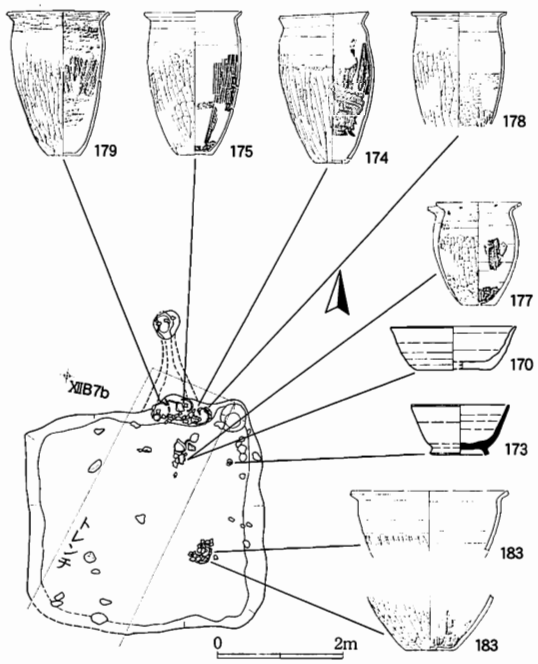
＜カマド＞北壁の東寄り、壁辺1/3の場所に構築されている。試掘トレンチによって削平、破壊を受けているが、残存状態はそれほど悪くない。左右の袖からは芯材として用いられた礫、土師器の甕がまとまって出土している。燃焼部には焼土が殆ど認められず、ブロックとして黒色土に混入する程度である。煙道部は長さ1.4mを測り、緩やかな傾斜をもって徐々に深く掘り込まれ煙出孔へと続く。上部が削平を受けているため詳細は不明であるが、これらのことから判断して、煙道部の構造は刳り貫き式であると推定される。煙出し部は径48×43cmの不整円形を呈し、確認面からの深さは38.4cmを測る。

＜柱穴・ピット＞北東隅、カマド脇からピットが１基検出された。平面形は円形を呈し、規模は径42×40cm、深さ8.1cmを測る。

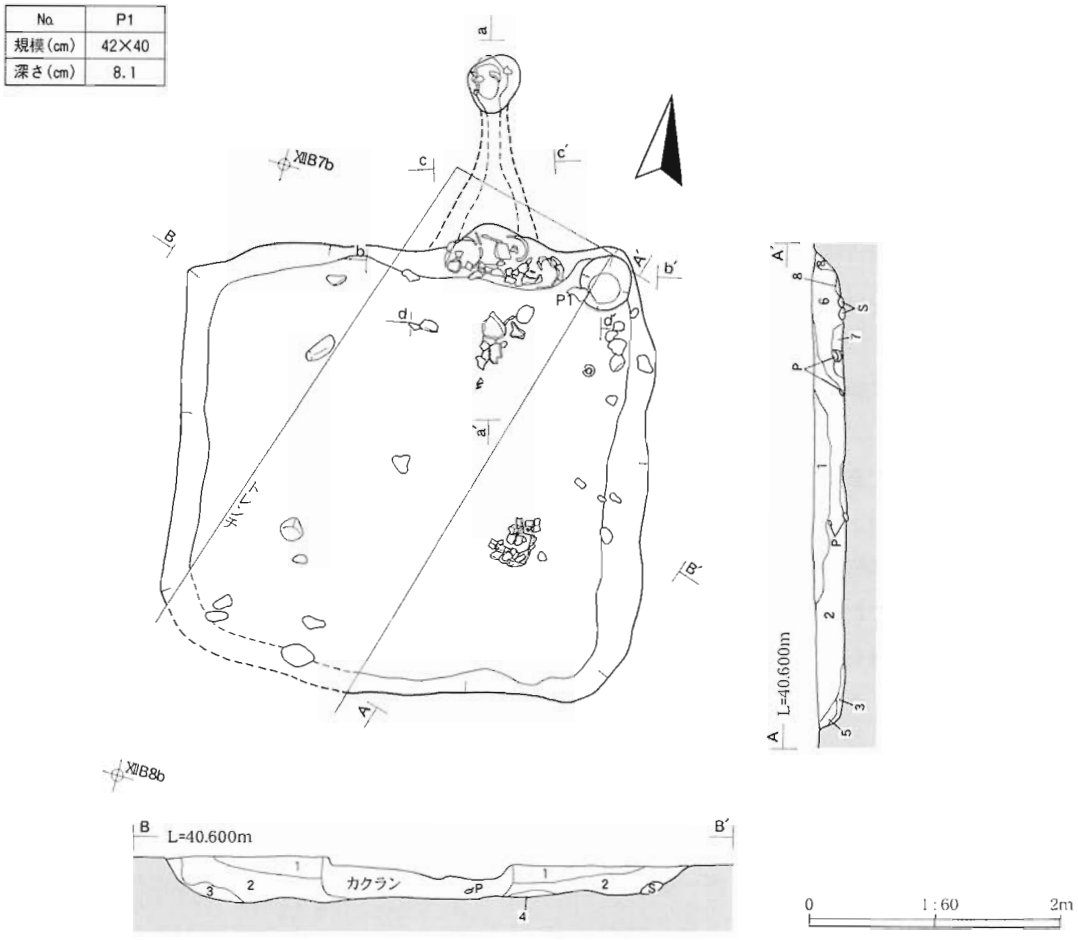
遺物（第54～56図、写真図版48～50）

床面から土師器片４点、須恵器片２点、カマドの構成材として土師器片８点、堆積土中より土師器片１点が出土している。器種は坏、高台付坏、堝、甕壺類で構成される。製作に際してはいずれもロクロが使用される。坏は内外面共にロクロナデ調整、底部は回転イトキリされる。173は須恵器の高台坏で、ほぼ完形に近い状態で出土している。183は土師器堝で、上半部ロクロナデ調整、下半部ケズリ調整される。石製品としては床面から砥石が１点出土している（185）。

出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属するものと推察される。

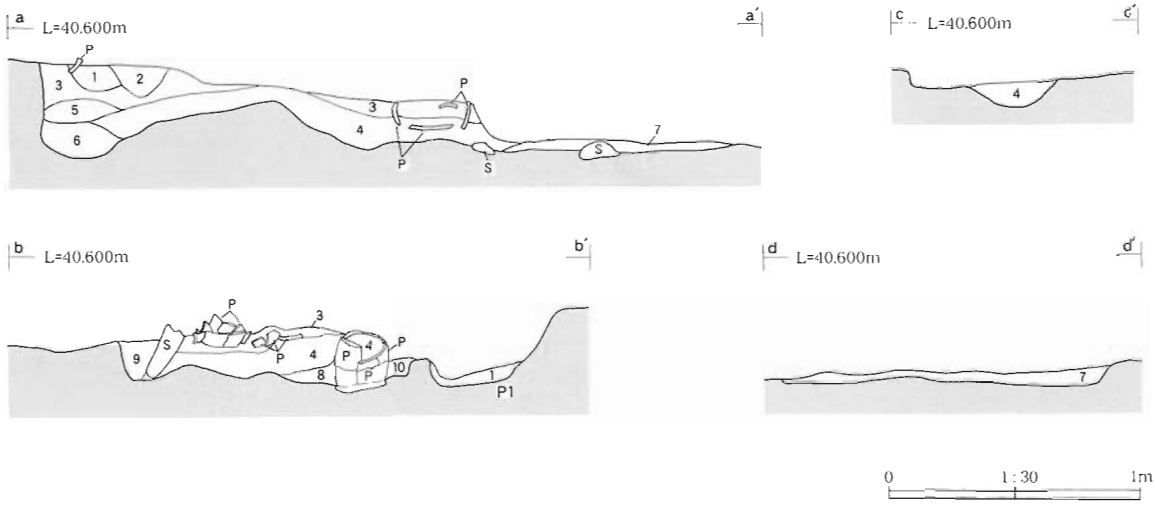


第51図　ＳＩ１４竪穴住居跡（１）



埋土断面(A－A′・B－B′)				
1	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまりやや密	灰白色粒3%含む　焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
2	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	灰白色粒1%未満含む　焼土粒・炭化物粒各2%含む
3	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性やや強　しまり中	10YR4/6褐色砂質シルト斑状3%含む
4	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8黄褐色シルト斑状2%含む　文化課試掘トレンチによる撹乱
5	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	
6	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	灰白色粒1%未満含む　焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
7	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性弱　しまり中	10YR4/6褐色砂質シルト斑状10%含む
8	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	

第52図　ＳＩ１４竪穴住居跡（２）



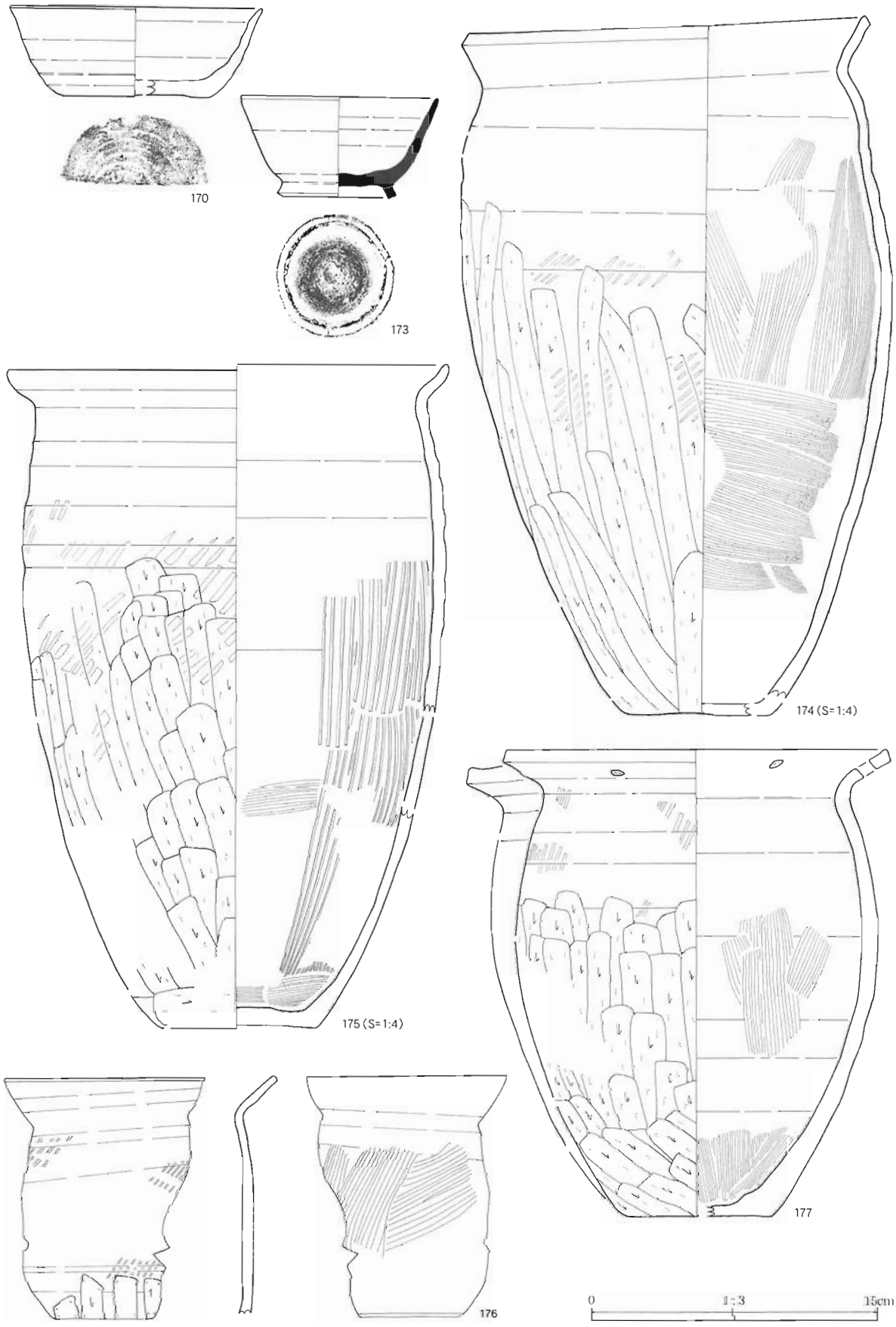
カマド断面（a－a′・b－b′・c－c′・d－d′）

1	7.5YR3/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり密	灰白色粒1%未満含む 焼土粒・炭化物粒各2%含む 土器片を含む
2	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性中 しまりやや密	灰白色粒2%含む
3	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性やや弱 しまり中	灰白色粒1%未満含む(1層よりも少ない) 焼土粒・炭化物粒各1%含む
4	7.5YR2/3 極暗褐色シルト	粘性やや強 しまり中	焼土粒3%含む 炭化物粒2%含む
5	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性やや弱 しまりやや疎	10YR4/6褐色シルトブロック含む 炭化物粒1%含む
6	10YR3/1 黒褐色やや砂質のシルト	粘性中 しまり中	
7	10YR5/8 黄褐色シルトと10YR 2/3黒褐色シルトの混合土	粘性中 しまり中	
8	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性弱 しまり中	10YR5/8黄褐色砂質シルト10%含む
9	10YR2/3 黒褐色やや砂質のシルト	粘性弱 しまりやや密	10YR4/6褐色シルト粒1%含む 灰白色粒1%未満含む
10	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性中 しまり中	灰白色粒1%未満含む

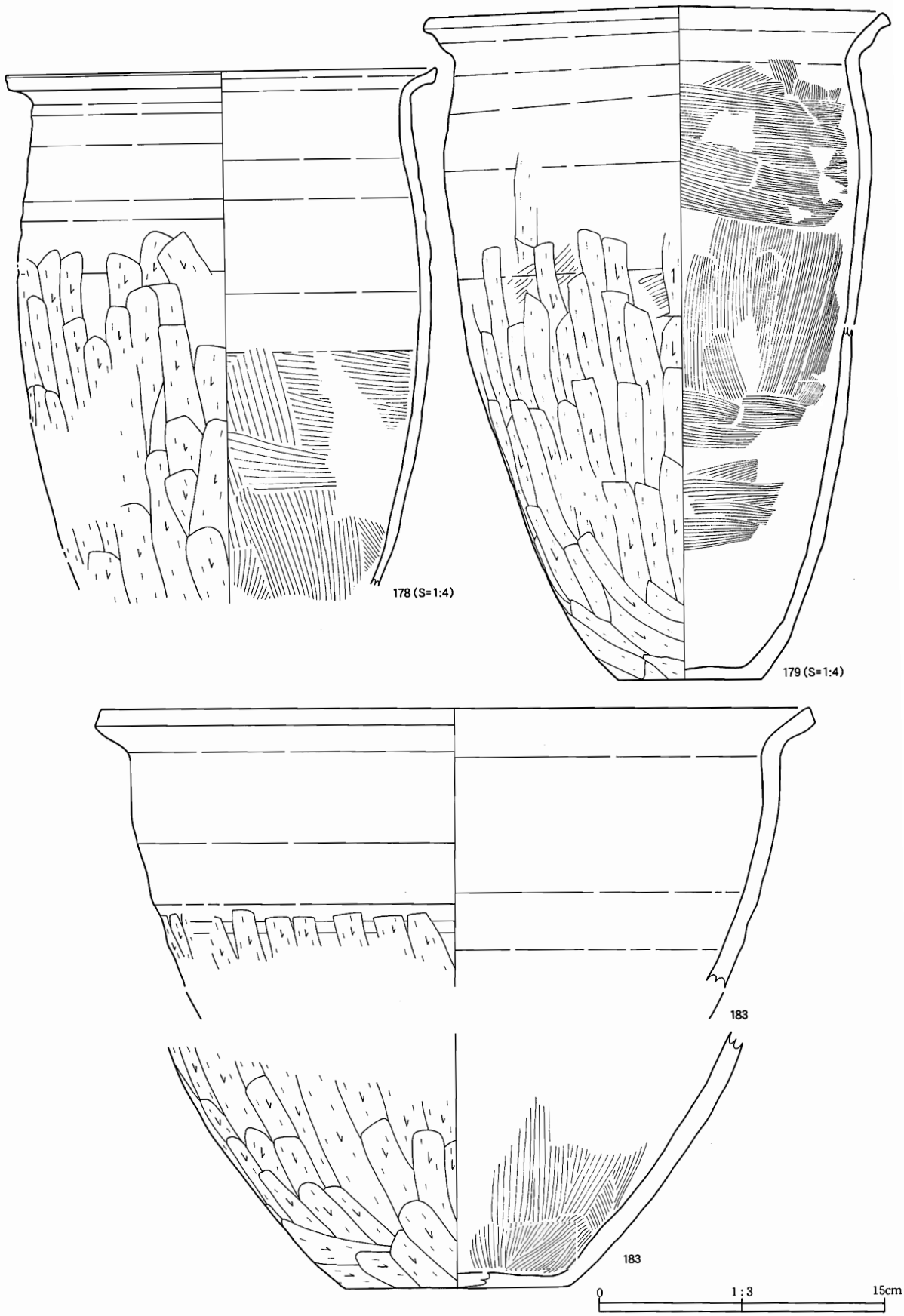
P1（b－b′に含）

1	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性中 しまり中	灰白色粒1%未満含む

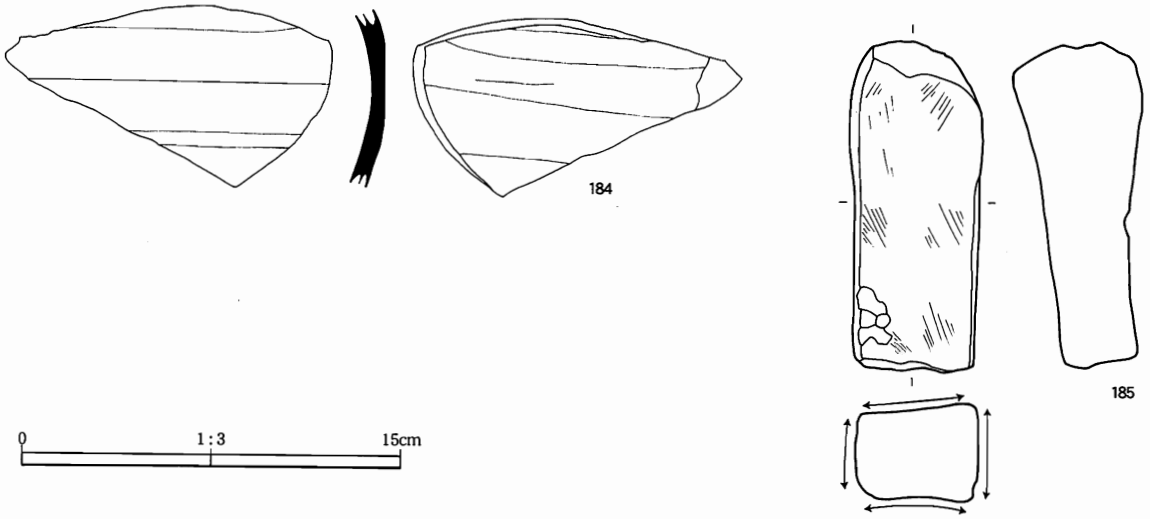
第53図　ＳＩ１４竪穴住居跡（３）



第54図　ＳＩ１４竪穴住居跡（４）



第55図　ＳＩ１４竪穴住居跡（５）



第56図　ＳＩ１４竪穴住居跡（６）

ＳＩ１５竪穴住居跡

遺構（第57～59図、写真図版17）

<位置・重複関係>ＸＩＡ10ｊグリッドに位置する。検出面はⅣ層で黒褐色のプランとして確認した。

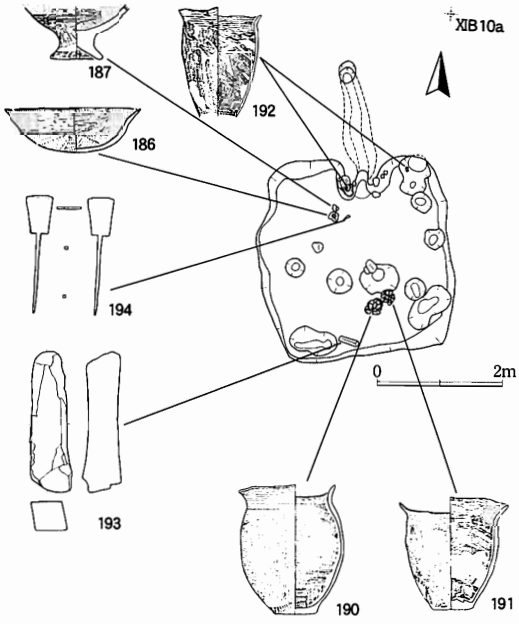
<規模・平面形>東辺2.93m、西辺2.97m、北辺2.62m、南辺2.5mの隅丸方形を呈する。

<埋土>５層からなり、黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルト主体で構成される。

<壁>壁高の残存値は10～20cmである。

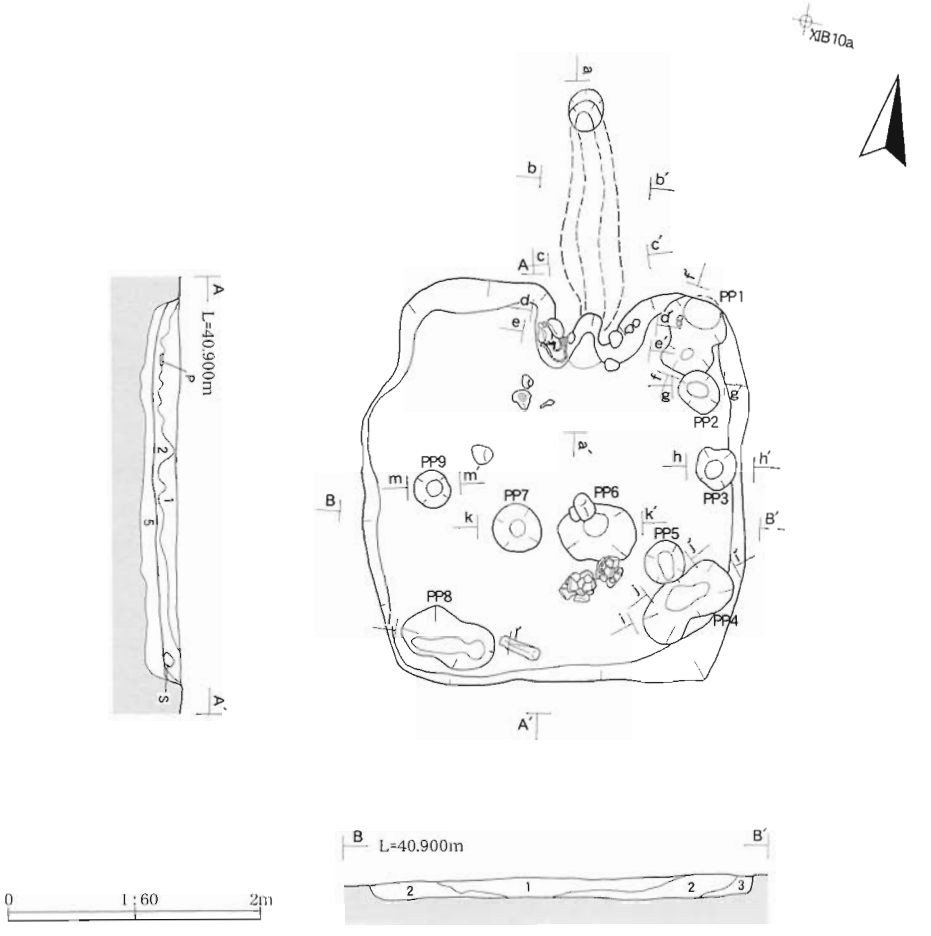
<床面>床面は砂質土で構築されており、ほぼ平坦でやや締まる。黒褐色と褐色シルトの混合土によって貼り床が施される。

<カマド>北壁の中央やや東寄りに構築されており、カマド本体はにぶい黄褐色～暗褐色シルト、黒褐色シルトの混合土によって造られ、左右の袖には芯材として大型の礫、土器片が用いられている。煙道は刳り貫き式と推定され、長さ1.54mを測る。煙出し部は楕円形を呈し、規模33×24cm、深さ40.9cmの土坑状に掘り込まれる。燃焼部中央には褐色砂質シルトを班状に含む黒褐色土が確認されるのみで明確な焼土は認められない。



第57図　ＳＩ１５竪穴住居跡（１）

<柱穴・ピット>床面から計７基の柱穴が検出された。柱穴の平面形は円形、または不整円形を呈し、規模は径32～78cm前後、深さ14～26cm前後を測る。これらの柱穴は住居の主柱穴を構成するものと推定されるが、詳細は不明である。



No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9
規模(cm)	62×35	34×28	32×30	78×36	34×32	63×44	43×38	76×34	30×28
深さ(cm)	16.8	14.5	22.3	21.7	15.8	25.9	23.8	21.7	13.5

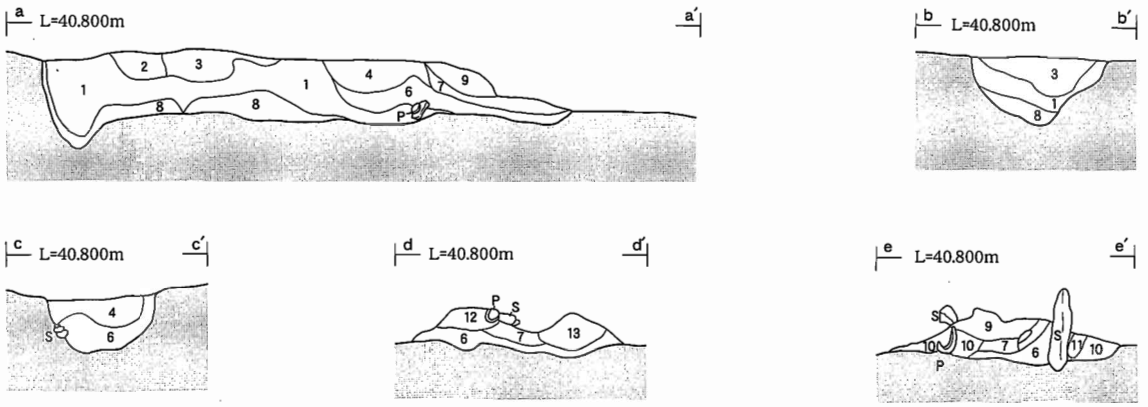
埋土断面(A－A′・B－B′)

1　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性中　しまり中　10YR5/8黄褐色砂質シルトブロック3%含む　炭化物片1%含む
2　10YR3/3　暗褐色シルト　粘性中　しまり弱　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト斑状5%含む　炭化物粒1%未満含む
3　10YR3/4　暗褐色シルト　粘性中　しまり中　10YR5/6黄褐色砂質シルト斑状10%含む
4　10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト　粘性弱　しまり中　10YR3/3暗褐色シルトブロック5%含む
5　10YR3/1　黒褐色シルトと10YR4/6褐色シルトの混合土　粘性弱　しまり密

第58図　ＳＩ１５竪穴住居跡（２）

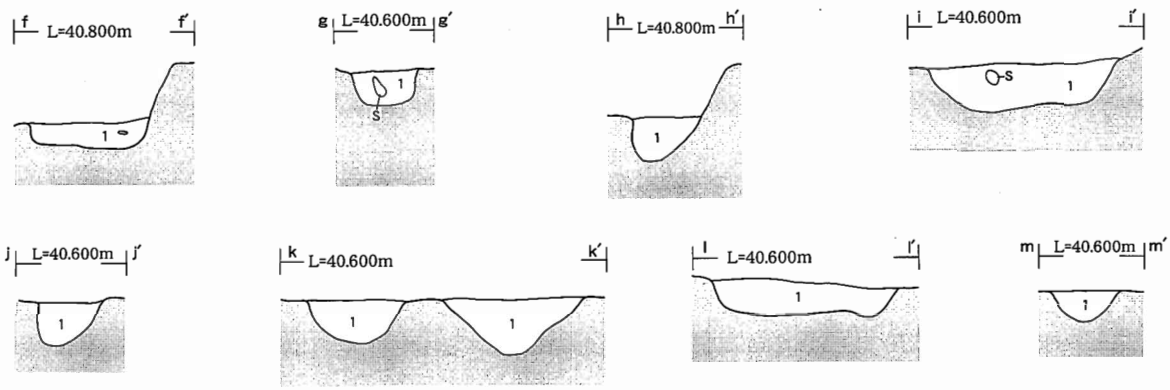
遺物（第60図、写真図版50・51）

床面から土師器片６点、堆積土から土師器片１点が出土している。器種は坏、高坏、甕で構成される。製作に際してロクロが使用されるものはない。186は床面から出土した土師器坏で、底部丸底風を呈し、体部にごく緩い段を持ち、外反しながら口縁部に至る。内外面共に粗いミガキ調整が施され、黒色処理される。187、188は高坏である。188は底部にヘラ書「×」を持つ。190は土師器甕で、底部は丸底風を呈する。内外面ともにナデ調整される。石製品としては床面から砥石が１点出土している（193）。鉄製品は床面より鉄鏃が１点出土している（194）。出土遺物から判断して、本遺構は奈良時代に属するものと推察される。



カマド煙道断面（a－a′・b－b′・c－c′・d－d′・e－e′）

1	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性弱　しまりやや疎	10YR4/6褐色砂質シルトブロック5%含む　焼土粒・炭化物粒各1%未満を含む
2	10YR3/4	暗褐色やや砂質のシルト	粘性弱　しまり中	10YR2/2　黒褐色シルトブロック3%
3	10YR4/6	褐色砂質シルト	粘性弱　しまり中	
4	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	7.5YR4/4褐色の焼土ブロック2%含む　灰白色粒1%未満
5	10YR4/4	褐色シルト	粘性中　しまり疎	10YR3/3　暗褐色シルト斑状5%含む
6	10YR3/2	黒褐色シルトと10YR4/6褐色砂質シルトの混合土	粘性弱　しまり中	焼土粒1%未満含む
7	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまりやや密	10YR4/6褐色砂質シルト斑状に2%含む
8	10YR4/4	褐色の砂	粘性弱　しまり疎	10YR2/3　黒褐色シルト斑状2%
9	10YR4/3 10YR3/1	にぶい黄褐色シルトと黒褐色シルトの混合土	粘性弱　しまり疎	赤褐色焼土ブロック1%含む
10	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性中　しまり密	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む（カマドのソデ）
11	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性やや強　しまり中	
12	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり密	5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック1%含む　炭化物粒1%を含む
13	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性弱　しまり中	10YR4/6褐色砂質シルトブロック5%含む　焼土粒1%未満含む



ＰＰ１・２共通（f－f′・g－g′）

1	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性弱　しまり中	10YR4/6褐色の砂斑状に10%含む

ＰＰ３（h－h′）

1	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性弱　しまり疎	10YR4/4褐色の砂ブロック5%含む

ＰＰ４（i－i′）

1	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性弱　しまり疎	10YR4/6褐色の砂斑状に5%含む　焼土粒・炭化物粒各1%未満を含む

ＰＰ５（j－j′）

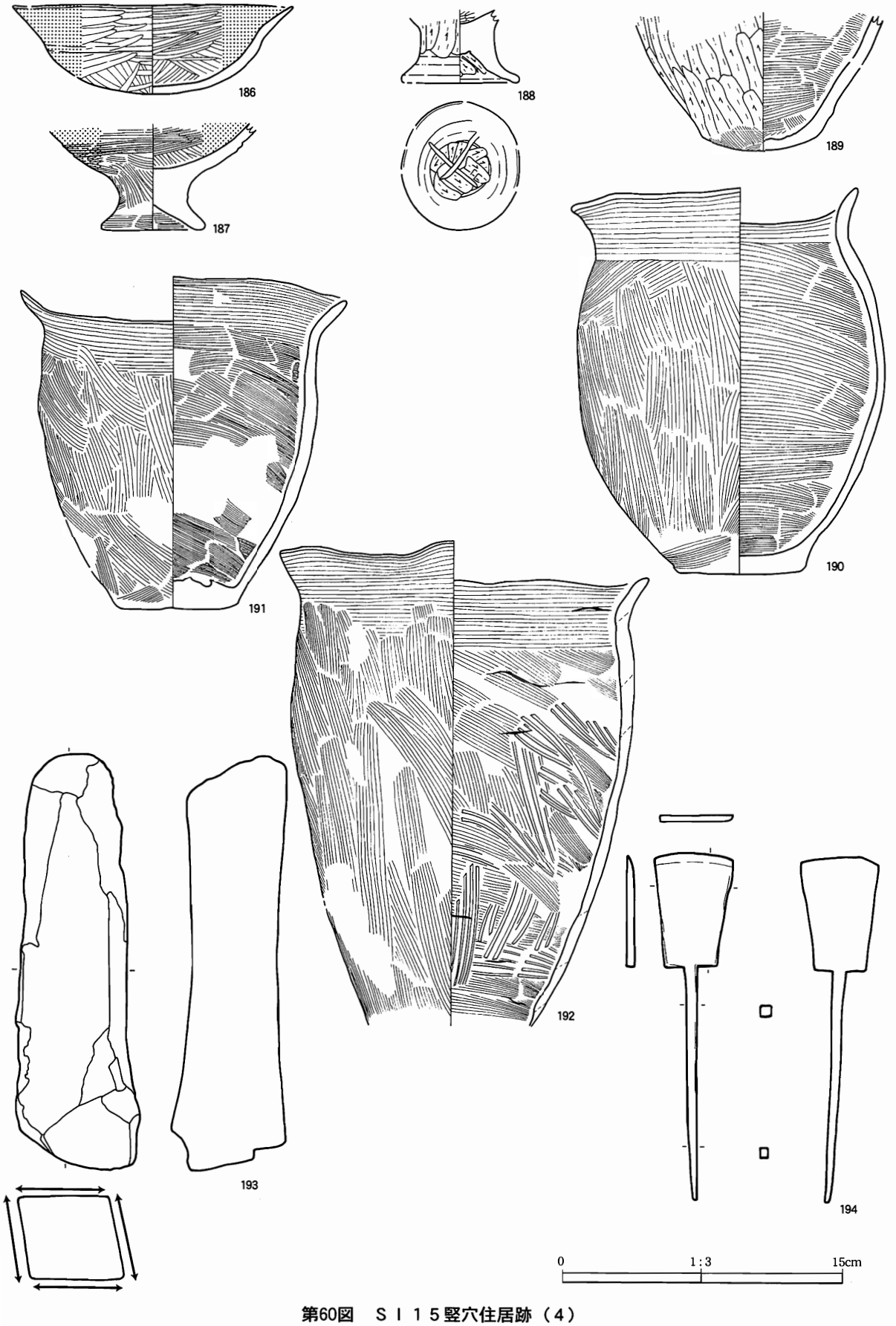
1	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性　中　しまり疎	10YR5/3にぶい黄褐色の砂斑状5%含む

ＰＰ６～ＰＰ９共通（k－k′・l－l′・m－m′）

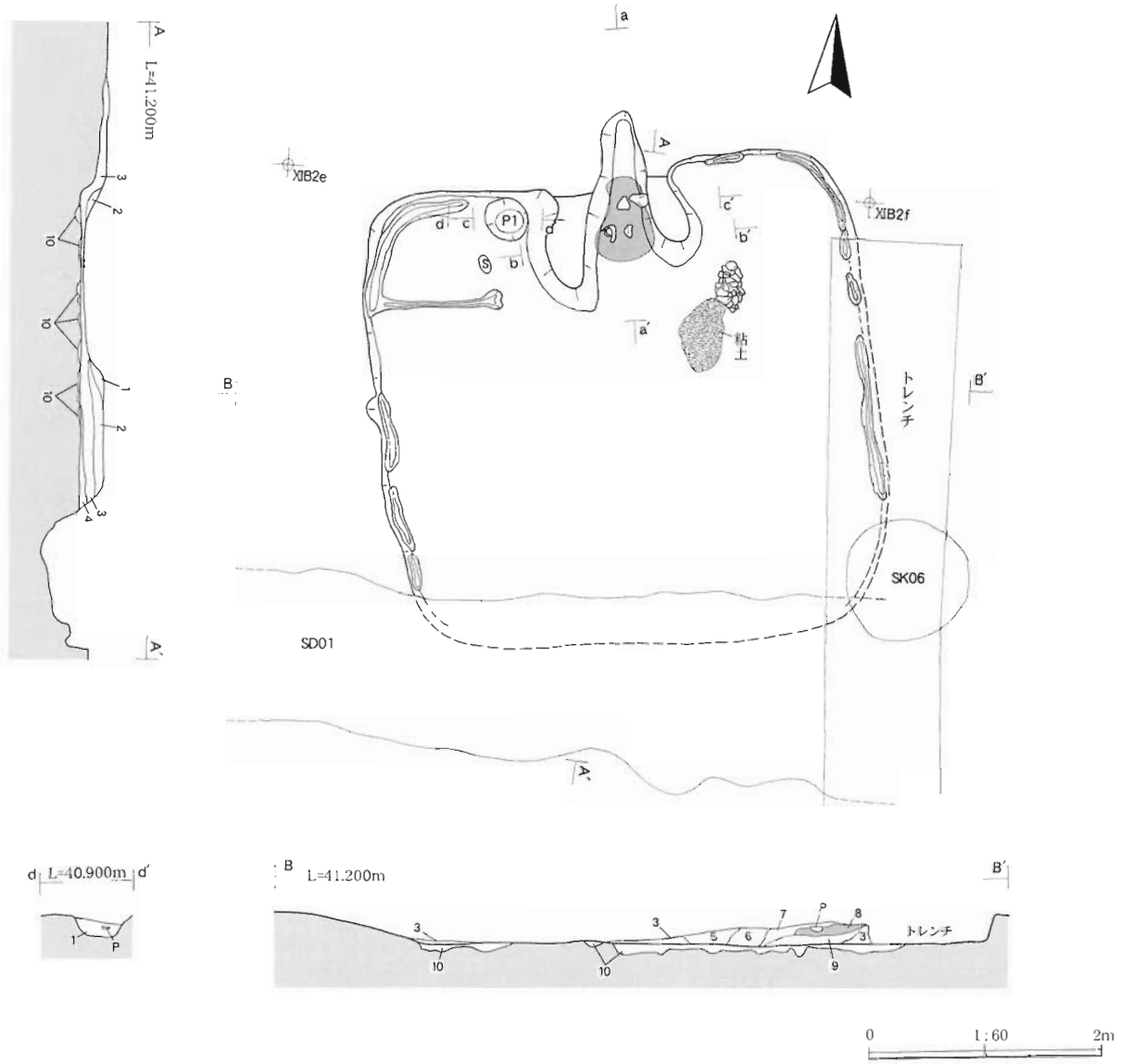
1	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性弱　しまり疎	10YR5/6黄褐色砂質シルトブロック状3%含む　10YR4/6褐色の砂斑状に10%含む

0　1:30　1m

第59図　Ｓ Ｉ １５竪穴住居跡（３）



第60図　ＳＩ１５竪穴住居跡（４）

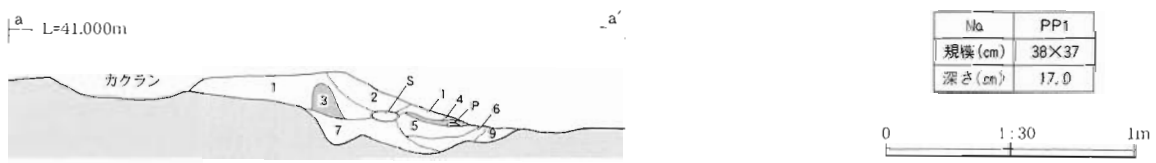


埋土断面（A－A′・B－B′）

1	10YR3/4　暗褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	10YR5/8黄褐色シルト粒2%含む　灰白色粒1%含む
2	10YR2/3　黒褐色シルト	粘性やや弱　しまりやや密	10YR5/8黄褐色シルト粒3%含む　灰白色粒1%未満含む
3	10YR3/1　黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8黄褐色シルト斑状、ブロック状5%含む　炭化物粒1%含む
4	10YR3/1　黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8黄褐色シルト斑状3%含む　炭化物粒1%含む
5	10YR3/3　暗褐色シルト	粘性弱　しまり密	10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック5%含む　焼土粒1%未満含む　炭化物粒3%含む
6	10YR2/2　黒褐色シルト	粘性やや弱　しまり密	10YR5/4にぶい黄褐色シルト斑状8%含む　焼土粒・炭化物粒各1%含む
7	10YR2/3　黒褐色シルト	粘性やや強　しまり中	5YR4/8赤褐色の焼土粒3%含む　炭化物粒2%含む
8	5YR4/8　赤褐色の焼土と10YR 3/4暗褐色シルトの混合土	粘性中　しまりやや密	炭化物片2%含む　赤変した礫を含む
9	10YR2/2　黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR6/6明黄褐色シルト粒3%含む　焼土粒・炭化物粒各1%含む
10	10YR2/2　黒褐色シルトと10YR 5/8黄褐色シルトの混合土	粘性弱　しまり密	（貼り床部分）

P1（d－d′）

1	10YR3/4　暗褐色シルト	粘性やや弱　しまり疎	10YR5/8黄褐色シルト砂質シルト斑状に5%含む　5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック3%含む　土器片多く含む



No.	PP1
規模(cm)	38×37
深さ(cm)	17.0

第61図　ＳＩ１６竪穴住居跡（１）

ＳＩ１６竪穴住居跡

遺構（第61・62図、写真図版18）

＜位置・重複関係＞ＸＩＢ２ｅグリッドに位置する。検出面はⅣ層で黒褐色のプランとして確認した。ＳＤ01方形周溝、ＳＫ06土坑と重複しており、これらに切られて遺構の南側は消失している。また本調査前試掘トレンチによる削平を受け、東壁の大部分は失われている。

＜規模・平面形＞東片－85cm、西辺－3.36m、北辺3.82m、南辺（3.8）mの隅丸方形を呈するものと推定される。東西辺は残存値、南辺は推定値である。

＜埋土＞10層からなり、黄褐色シルトを含む黒褐色シルトを主体として構成される。

＜壁＞東壁の大部分と南壁は消失している。壁の残存値は７～24cmである。

＜床面＞床面は平坦で堅く締まる。黄褐色シルトと黒褐色シルトの混合土によって、貼り床が施される。壁際には壁溝が巡り、西壁の北寄り1/4の地点に長さ1.1m、幅８cmほどの間仕切り溝を持つ。

＜カマド＞北壁ほぼ中央に設置されている。両袖は黒褐色～黄褐色のシルト主体で構築されている。燃焼部中央には円礫が据えられ、周辺に現地性の焼土の広がりが見られる。このことから円礫は支脚として用いられた可能性がある。焼土の範囲は径70×38cmで不整な楕円形を呈し、厚さ３cmを測る。煙道、煙出し部は攪乱によって破壊され、残存状態は不良である。残存する煙道部の規模は幅35cm、長さ50cmの溝状に掘り込まれる。煙道部は煙出孔へ向かい徐々に浅くなっており、約７°の角度をもって立ち上がる。煙道の構造など詳細は残存不良のため不明である。

＜柱穴・ピット＞カマド左袖脇の壁際にピットが１基検出された。平面形は円形を呈しており、規模は径38×37cm、深さ17cmを測る。

遺物（第63図、写真図版52）

床面から土師器片２点、カマド燃焼部から土師器片１点、堆積土中から土師器片５点、須恵器片１点が出土した。器種は坏、鉢、甕、甕壺類で構成される。195は土師器坏で、内面黒色処理される。196は土師器鉢で内面黒色処理される。198～201は土師器甕で、内外面共にハケメ調整されるものが多い。203は須恵器の甕壺類で、タタキ成形を経てロクロナデ＋ケズリ調整される。土製品としては床面より土製紡錘車が１点出土している（204）。出土遺物から判断して、本遺構は奈良時代に属するものと推察される。

ＳＩ１７竪穴住居跡

遺構（第64図、写真図版19）

＜位置・重複関係＞ＸＩＡ３ｊグリッドに位置する。検出面はⅥ層で黒褐色のプランとして確認した。検出の時点で上部は削平を受けてほとんど消失しており、更に床面中央部は本調査前試掘トレンチやゴミ穴によって破壊されていた。

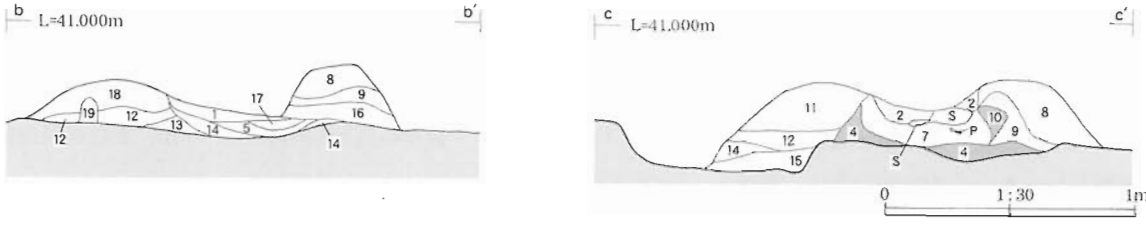
＜規模・平面形＞東辺5.0m、西辺5.7m、北辺（5.54）m、南辺（5.44）mの隅丸方形を呈するものと推定される。北辺、南辺は推定値である。

＜埋土＞残存部は黒褐色シルト主体で構成されるもので、埋土に多量の礫を含む。

＜壁＞ほとんど残存しておらず、計測できた部分でも１～４cmを測るのみである。

＜床面＞床面は砂礫層まで掘り込んで構築されており、中央部に試掘トレンチ、ゴミ穴が掘削されており、破壊されている。貼り床は認められなかった。

＜カマド＞東壁のほぼ中央に構築されているが、削平を受けて残存状態は不良である。残存部からカマド本



カマド煙道（a－a′・b－b′・c－c′）

1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中	しまり密	10YR5/6黄褐色シルト粒8%含む 炭化物粒1%含む 燃焼部では一部被熱赤変する
2	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性中	しまり密	10YR5/6黄褐色シルト粒8%含む 焼土粒3%含む 炭化物粒1%未満含む
3	5YR4/8 赤褐色の焼土	粘性弱	しまりやや疎	10YR2/2黒褐色シルト斑状3% 炭化物粒1%未満含む
4	5YR5/8 明赤褐色の焼土	粘性弱	しまり中	炭化物粒1%未満含む
5	7.5YR5/8 明褐色シルト	粘性弱	しまり密	5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック2%含む
6	7.5YR4/6 褐色シルト	粘性弱	しまり密	5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック1%含む
7	7.5YR2/2 黒褐色シルトと10YR5/8黄褐色シルトの混合土	粘性中	しまり密	
8	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性中	しまり密	10YR5/8黄褐色シルトブロック3%含む 焼土粒1%含む(カマド右袖)
9	7.5YR3/2 黒褐色シルト	粘性中	しまり密	10YR5/8黄褐色シルト斑状5%含む 焼土粒2%含む(カマド右袖)
10	5YR5/4 にぶい赤褐色の焼土	粘性弱	しまり密	
11	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR5/8黄褐色シルトブロック8%含む 焼土粒1%含む(カマド右袖)
12	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR2/3黒褐色シルト斑状10%含む(カマド左袖)
13	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR2/3黒褐色シルト斑状8%含む 焼土粒1%未満含む(カマド左袖)
14	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト	粘性中	しまり中	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
15	10YR5/6 黄褐色シルト	粘性中	しまりやや密	
16	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック5%含む(カマド右袖)
17	7.5YR3/4 暗褐色シルト	粘性中	しまり中	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
18	10YR5/8 黄褐色シルト	粘性中	しまり密	10YR2/2黒褐色シルト斑状5%含む(カマド左袖)
19	10YR5/8 黄褐色砂質シルト	粘性弱	しまりやや疎	10YR2/3黒褐色シルト斑状2%含む

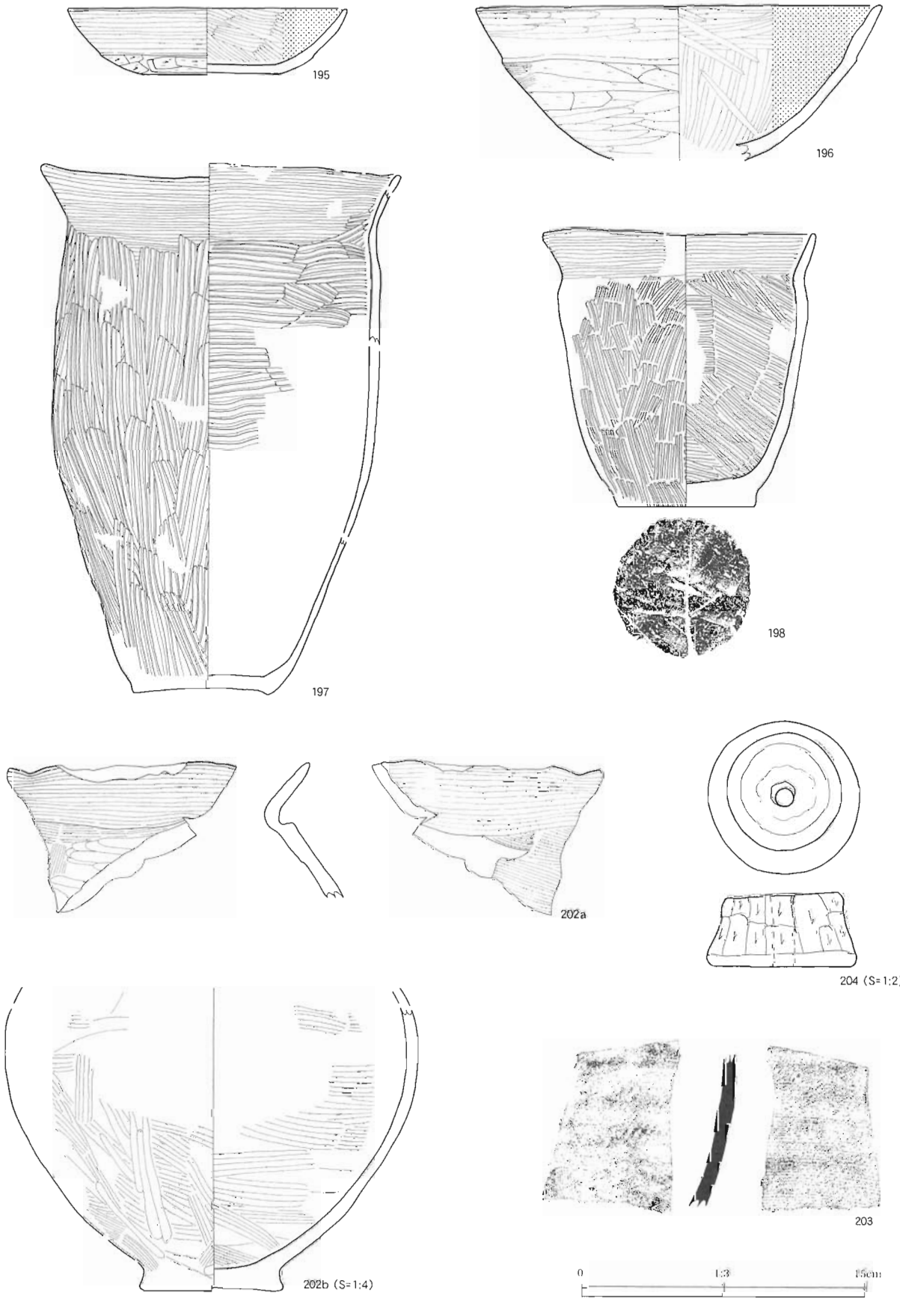
第62図　ＳＩ１６竪穴住居跡（２）

体は黒褐～暗褐色シルトを主体として構築されていたものと推定される。燃焼部にはにぶい赤褐色の焼土ブロックと炭化物粒を含む暗褐色シルトが80×45cm、厚さ５cmの範囲で広がる。煙道、煙出し部は残存不良のため検出されず、構造など詳細については不明である。

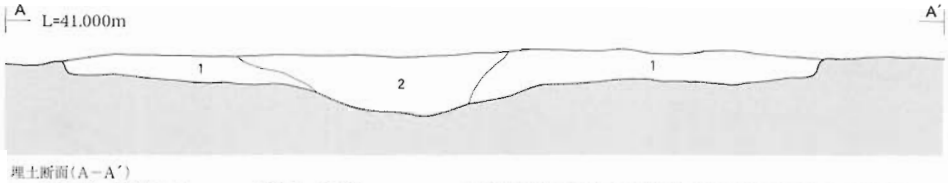
＜柱穴・ピット＞検出されなかった。

遺物（第65図、写真図版53）

床面からのみ出土している。土師器片５点、須恵器片２点である。器種は坏、甕、甕壺類で構成され、製作に際してはロクロが使用されるものと使用されないものが混在する。205は土師器坏で底部に弱いヘラケズリ再調整を持つ。206は須恵器の坏で、底部に弱いヘラケズリ再調整を持つ。甕はハケメ、ケズリ調整を持つものと、タタキ成形後、ロクロナデ、ケズリ調整されるものがある。出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属するものと推察される。



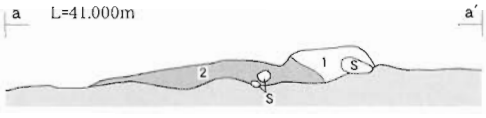
第63図　ＳＩ１６竪穴住居跡（３）

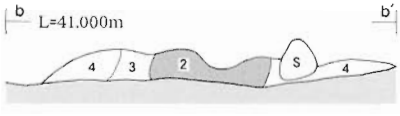


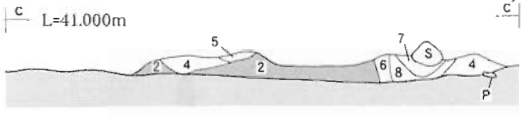
埋土断面（A－A′）

1	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性中	しまり密	10YR4/6褐色シルトブロック2%含む 径5～10cm大の礫多量に含む 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む（住居の埋土）
2	10YR3/2 黒褐色シルトと10YR4/6褐色シルトの混合土	粘性中	しまりやや疎	炭化物を多量に含む 現代の撹乱層

0 1:60 2m





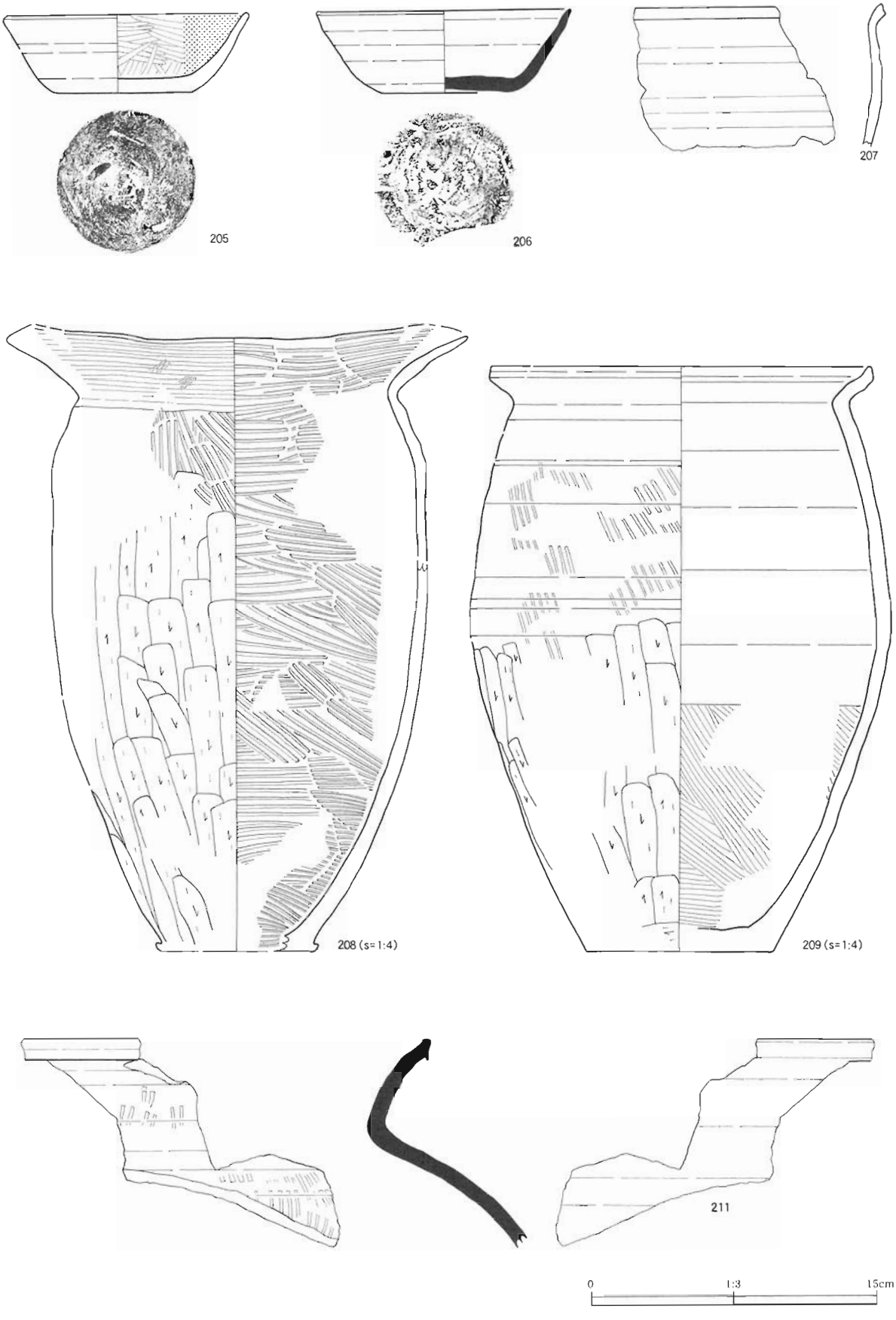


カマド断面（a－a′・b－b′・c－c′）

1	7.5YR3/2 黒褐色シルト	粘性弱	しまり中	焼土粒・炭化物粒各1%含む
2	7.5YR3/4 暗褐色シルト	粘性弱	しまり中	5YR5/4にぶい赤褐色の焼土ブロック10%含む 炭化物2%含む 径1～3cm大の礫多く含む
3	7.5YR3/3 暗褐色シルト	粘性中	しまり中	焼土粒・炭化物粒各1%含む
4	10YR4/2 灰黄褐色シルト	粘性弱	しまりやや密	焼土粒・炭化物粒各1%含む
5	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性中	しまり中	焼土ブロック5%含む
6	10YR2/1 黒色シルト	粘性中	しまりやや疎	焼土粒1%未満含む
7	7.5YR3/3 暗褐色シルトと10YR2/2黒褐色シルトの混合土	粘性中	しまり中	炭化物粒各1%含む
8	7.5YR3/3 暗褐色シルト	粘性中	しまりやや疎	焼土粒2%未満含む 炭化物粒各1%含む
9	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性弱	しまり密	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む

0 1:30 1m

第64図　ＳＩ１７竪穴住居跡（１）



第65図　ＳＩ１７竪穴住居跡（２）

ＳＩ１８竪穴住居跡

遺構（第66・67図、写真図版20）

＜位置・重複関係＞ＸⅡＡ１ｉグリッドに位置する。検出面はⅣ層で８号住居跡埋土掘削時に重複する暗褐色のプランを確認した。このため当初ＳＩ18住居跡の存在に気付かず東壁上部を掘削してしまった。ＳＩ08住居跡と重複しており、これを切る。

＜規模・平面形＞東辺3.47m、西辺3.75m、北辺3.5m、南辺－3.3mの隅丸方形を呈するものと推定される。南辺は残存値である。

＜埋土＞７層からなり、灰白色粒を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

＜壁＞残存値は31～34cmを測る。

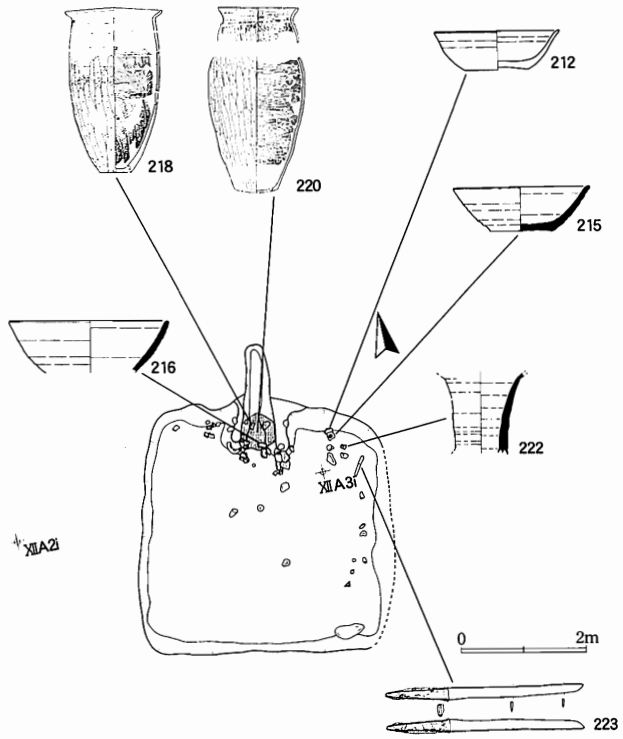
＜床面＞床面はほぼ平坦で硬く締まっている。褐色砂質シルトと黒褐色シルトの混合土によって、貼り床が施される。

＜カマド＞北壁のほぼ中央に構築されている。カマド本体は褐色シルトを主体として構築され、左右の袖には土師器の長胴甕片、径10cm大の礫が芯材として用いられる。燃焼部には径20cm大の比熱礫が左右に据えられ、現地性の焼土が形成されていることから支脚として用いられたものと推定される。焼土の範囲は径56×54cm、厚さは２cmを測る。煙道部は長さ85cmを測り17°の角度をもって緩やかに立ち上がり煙出し部に至る。煙道部の構造など詳細は残存不良のため不明である。

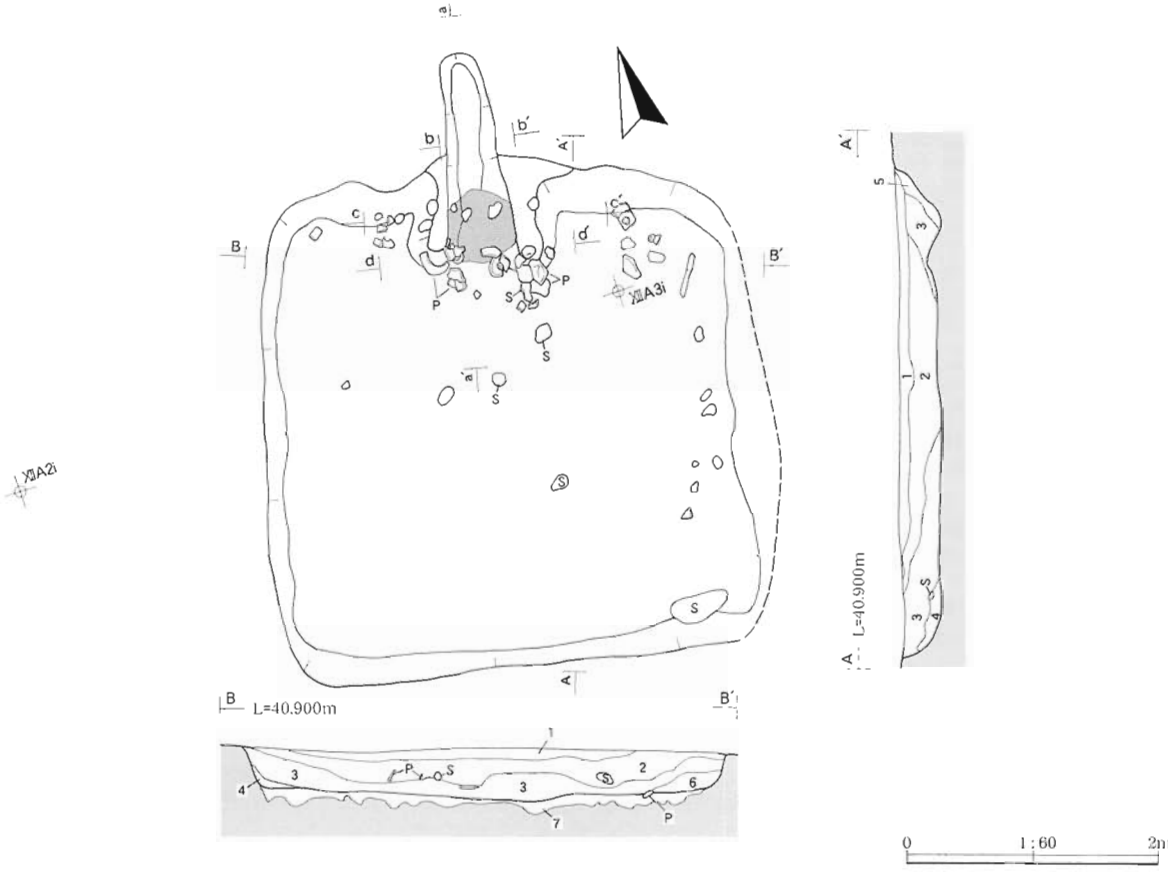
＜柱穴・ピット＞検出されなかった。

遺物（第68・69図、写真図版53・54）

床面から土師器片１点、須恵器片４点、カマド構成材として土師器片４点、須恵器片３点が出土している。器種は坏、甕、甕壺類、長頸瓶で構成される。製作に際してはロクロが使用されるものと使用されないものがある。坏は須恵器が卓越し、底部の切り離し技法は回転ヘラキリと回転イトキリの両者が混在する。212と217は墨書土器で、それぞれ底部と体部に墨書を持つ。鉄製品としては１点が出土している。223は床面から出土した短刀である。出土遺物から本遺構は平安時代に属するものと推察される。

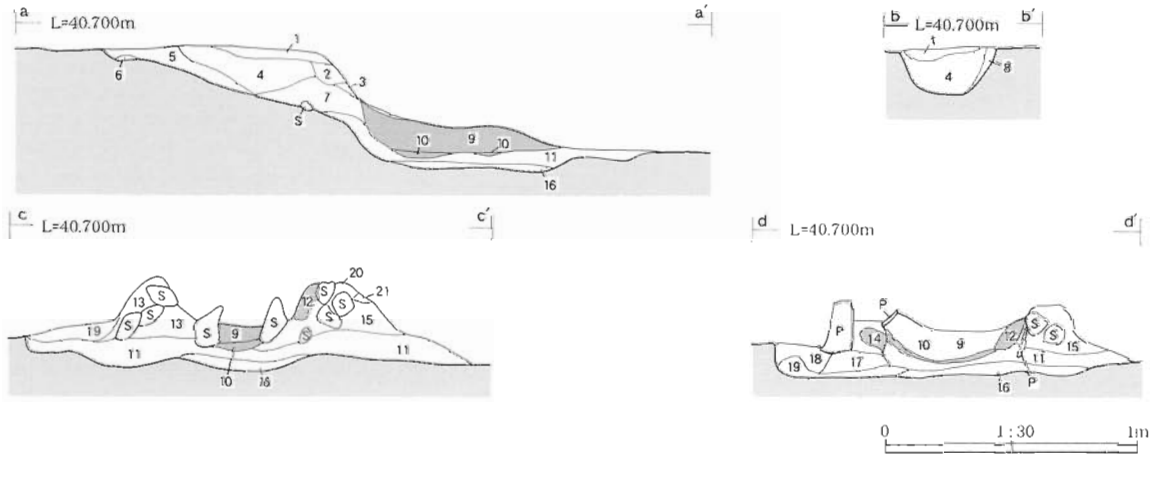


第66図　ＳＩ１８竪穴住居跡（１）



埋土断面

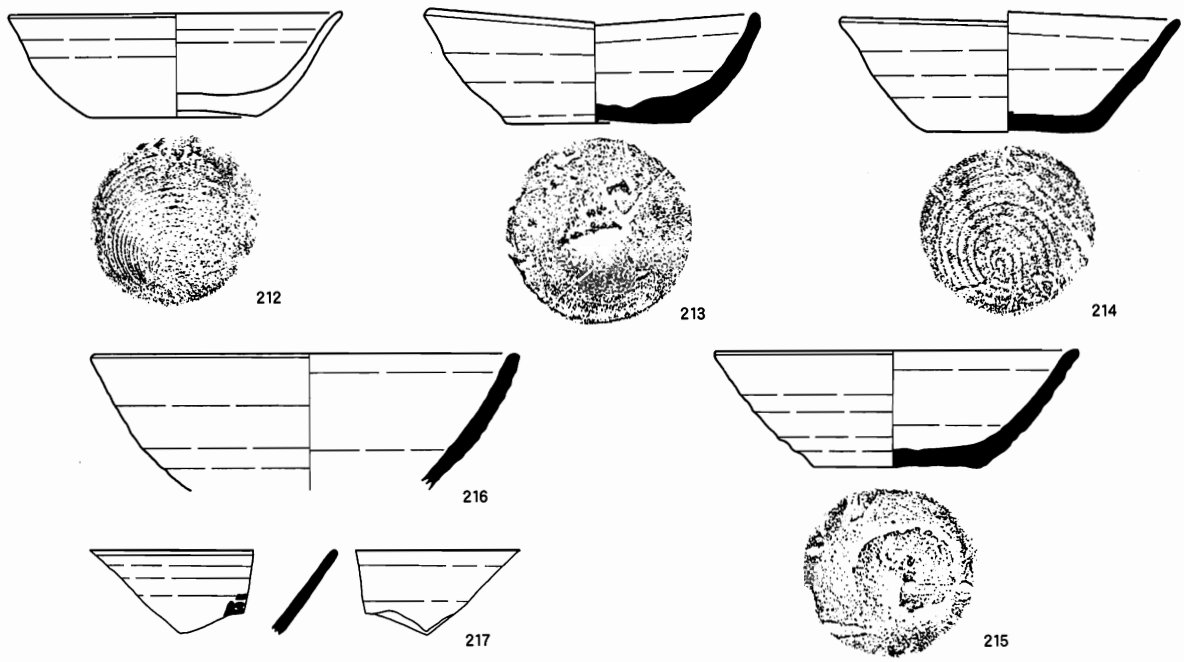
1	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	灰白色粒1%未満含む　径1cm大の礫3%含む
2	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	灰白色粒3%含む　焼土粒・炭化物粒各2%含む　径1cm大の礫5%含む
3	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8黄褐色シルト粒3%含む　焼土粒・炭化物粒各3%含む　径1cm大の礫5%含む
4	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8黄褐色シルト粒1%未満含む　径1cm大の礫1%含む
5	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性やや弱　しまり密	10YR5/8黄褐色砂質シルト斑状10%含む　焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
6	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8黄褐色シルト粒2%含む　炭化物粒1%未満含む
7	10YR4/4 10YR2/2	褐色砂質シルトと 黒褐色シルトの混合土	粘性弱　しまりやや緩	(貼り床部分)



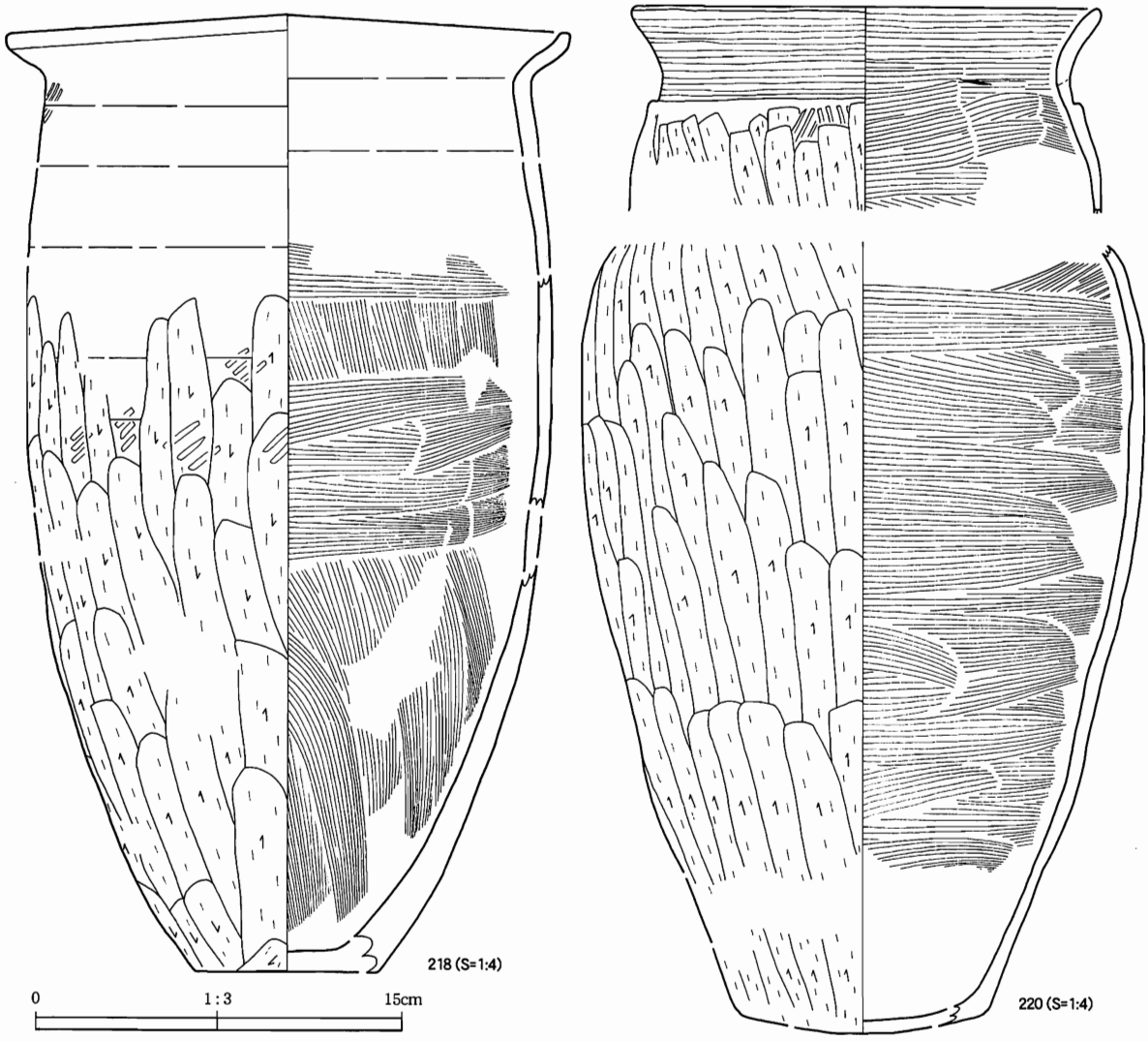
第67図　ＳＩ１８竪穴住居跡（２）

カマド煙道断面（a－a′・b－b′・c－c′・d－d′）

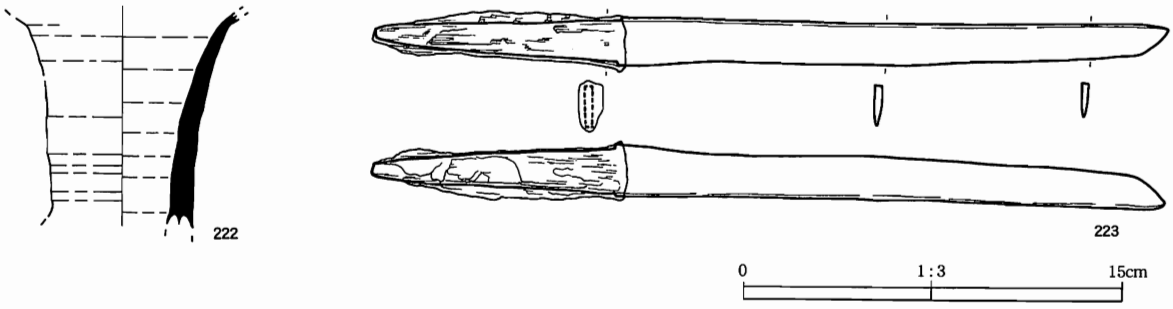
1	7.5YR3/3 暗褐色やや砂質シルト	粘性弱	しまり密	7.5YR4/6褐色砂質シルト斑状5% 灰白色粒1%含む 炭化物粒1%未満含む
2	7.5YR3/4 暗褐色シルト	粘性弱	しまり密	7.5YR4/6褐色砂質シルト斑状10% 灰白色粒1%含む 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
3	7.5YR3/2 黒褐色シルト	粘性弱	しまり中	焼土粒・炭化物粒各1%含む
4	7.5YR2/3 極暗褐色シルト	粘性やや弱	しまり中	焼土ブロック3%含む 炭化物粒1%含む
5	10YR3/3 暗褐色シルトと10YR 4/4褐色シルトの混合土	粘性弱	しまり密	炭化物粒1%未満含む
6	10YR4/4 褐色砂質シルト	粘性弱	しまり中	
7	7.5YR3/2 黒褐色シルト	粘性弱	しまり密	焼土ブロック5%含む 炭化物粒1%未満含む
8	7.5YR3/2 黒褐色シルト	粘性中	しまり中	焼土粒2%含む 炭化物片1%含む
9	10YR3/1 黒色シルト	粘性中	しまりやや疎	10YR6/6明黄褐色シルト5%含む 5YR3/3暗赤褐色の焼土ブロック5%含む（崩落土）
10	7.5YR2/3 極暗褐色やや砂質のシルト	粘性弱	しまり疎	5YR3/3暗赤褐色の焼土ブロック5%含む
11	10YR5/6 黄褐色シルトと10YR 3/2黒褐色シルトの混合土	粘性中	しまり中	炭化物粒1%含む
12	5YR3/6 暗赤褐色の焼土	粘性弱	しまり中	炭化物粒2%含む カマドの袖部分
13	10YR4/6 褐色シルト	粘性弱	しまり密	灰白色粒2%含む 焼土粒1%含む カマドの袖部分
14	5YR4/8 赤褐色の焼土	粘性弱	しまり中	炭化物粒1%未満含む
15	10YR4/4 褐色シルト	粘性中	しまり密	10YR3/4暗褐色シルトブロック2%含む カマドの袖部分
16	10YR5/6 黄褐色シルト	粘性弱	しまり中	10YR3/1黒褐色シルトブロック3%含む
17	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性弱	しまり疎	10YR4/4褐色シルト斑状に3%含む
18	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性弱	しまり密	10YR5/6黄褐色シルト斑状3%含む
19	10YR5/6 黄褐色シルト	粘性中	しまり疎	



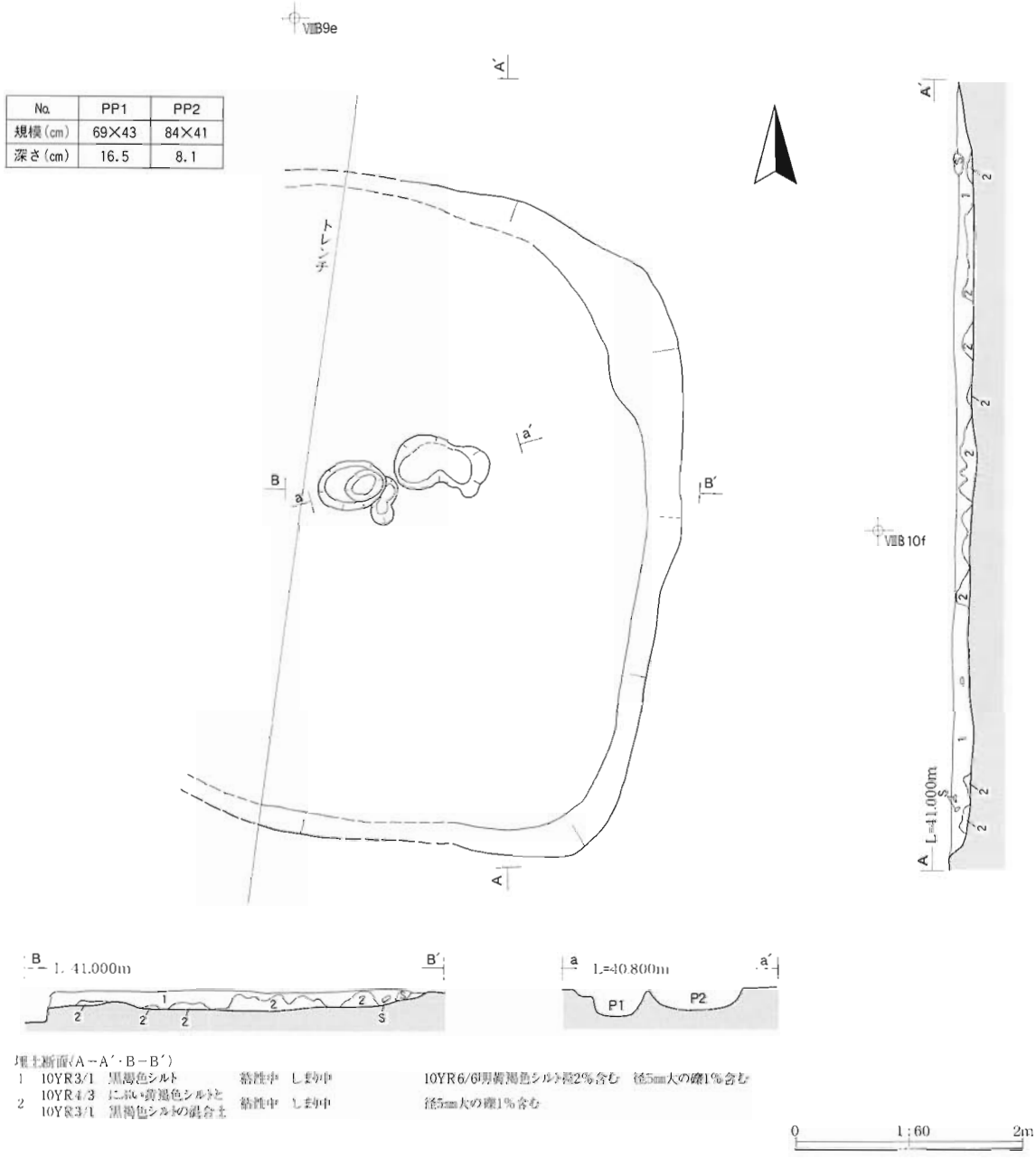
第68図　ＳＩ１８竪穴住居跡（３）



ＳＩ１８竪穴住居跡出土遺物①



第69図　ＳＩ１８竪穴住居跡（４）



No.	PP1	PP2
規模(cm)	69×43	84×41
深さ(cm)	16.5	8.1

埋土断面(A－A′・B－B′)

1	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性中 し まり中	10YR6/6明黄褐色シルト粒2%含む 径5mm大の礫1%含む	
2	10YR4/3 にぶい黄褐色シルトと 10YR3/1 黒褐色シルトの混合土	粘性中 し まり中	径5mm大の礫1%含む	

第70図　ＳＩ１９竪穴住居跡（１）

ＳＩ１９竪穴住居跡

遺構（第70・71図、写真図版21）

＜位置・重複関係＞ＸⅡＢ９ｅグリッドに位置する。検出面はⅣ層で、遺物の集中する黒褐色のプランとして確認した。上部は後世の削平を受け消失しており、西側部分も本調査前試掘トレンチによって破壊、消失していた。遺構の残存状態は不良である。

＜規模・平面形＞東辺5.07m、北辺－2.2m、南辺－2.9mを測る。西辺は残存していないが、本来は隅丸方形状と推定される。北辺、南辺とも残存値である。

＜埋土＞２層からなる。上層は黒褐色シルト、下層はにぶい黄褐色シルトと黒褐色シルトの混合土で構成される。埋土中に多量の礫を含む。

＜壁＞西壁は本調査以前のトレンチによる掘削を受け消失しており、北壁、南壁も残存状態は不良である。残存値は10～16cmを測る。

＜床面＞床面は砂礫基盤層上に接して構築されたもので、やや起伏を持ち堅く締まる。貼り床は確認できなかった。

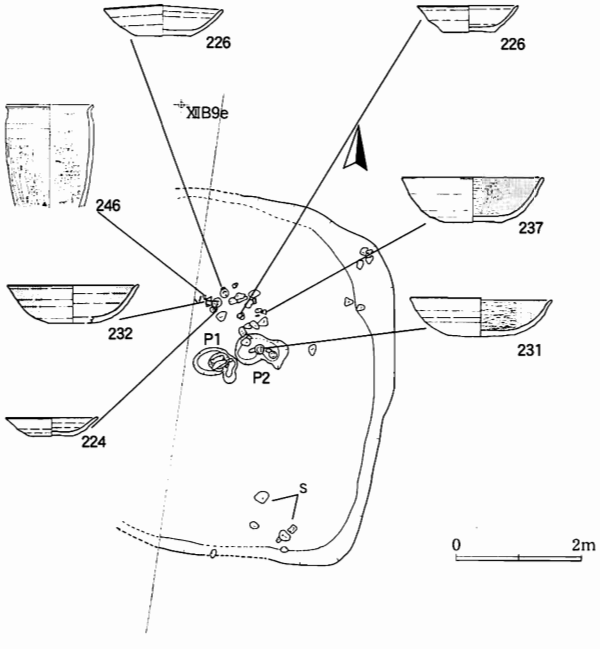
＜カマド＞調査範囲においては未確認であるが、削平されて残存していない可能性、あるいは西側に存在する余地も残される。残存不良により詳細は不明である。

＜柱穴・ピット＞住居の中央部から２基のピットが検出された。Ｐ１は径69×43cm、深さ16.5cmを測り、平面形は不整な円形を呈する。Ｐ２は径84×41cm、深さ8.1cmを測り、平面形は不整な円形を呈する。２基とも内部から礫、遺物が出土している。

遺物（第72・73図、写真図版54・55）

床面から土師器片11点、土師器片３点、堆積土中より土師器片10点、須恵器片３点が出土している。器種は坏、高台付、鉢、甕、甕壺類、大甕で構成され、製作に際してはロクロが使用されている。坏は全て土師器で、底部の切り離し技法は回転イトキリによる。坏の法量が小形のものが存在する。

241・242は土師器高台坏で、内面黒色処理される。249・250は須恵器の大甕で外面平行タタキ、内面平行アテグによる器面調整を持つ。出土遺物から本遺構は平安時代に属すると推察される。



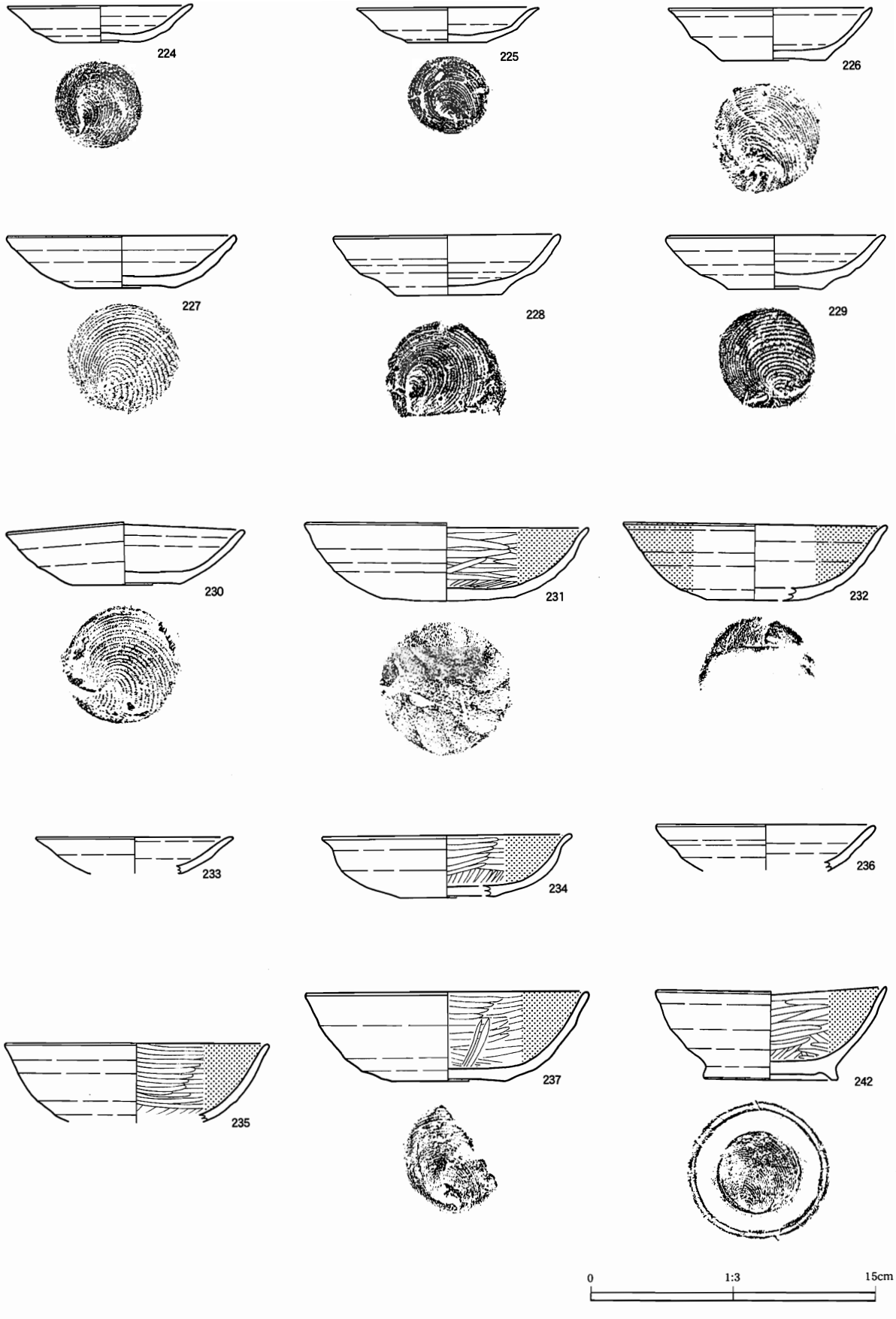
第71図　ＳＩ１９竪穴住居跡（２）

ＳＩ２０竪穴住居跡

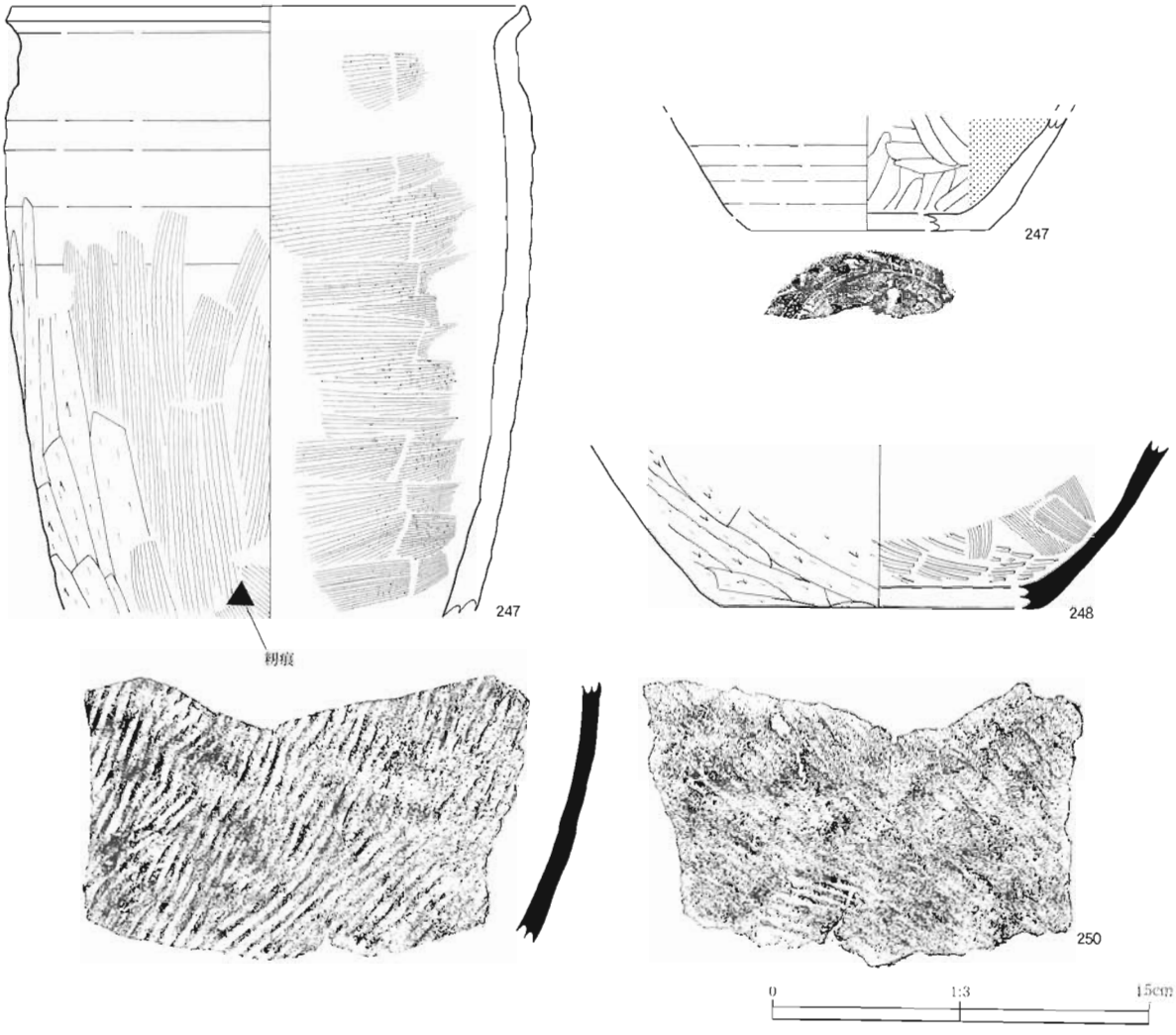
遺構（第74図、写真図版22）

＜位置・重複関係＞ＸＩＡ10ｇグリッドに位置する。検出面はⅣ層で暗褐色のプランを確認した。検出時に上部は後世の削平を受けており、残存状況は不良である。また、北辺から東辺にかけては攪乱によって破壊、消失しており、東壁を検出できなかった。

＜規模・平面形＞西辺3.7m、北辺－1.15m、南辺－3.06mを測る。東辺は消失していたが、本来は隅丸方形を呈するものと推定される。北



第72図　ＳＩ１９竪穴住居跡（３）



第73図　ＳＩ１９竪穴住居跡（４）

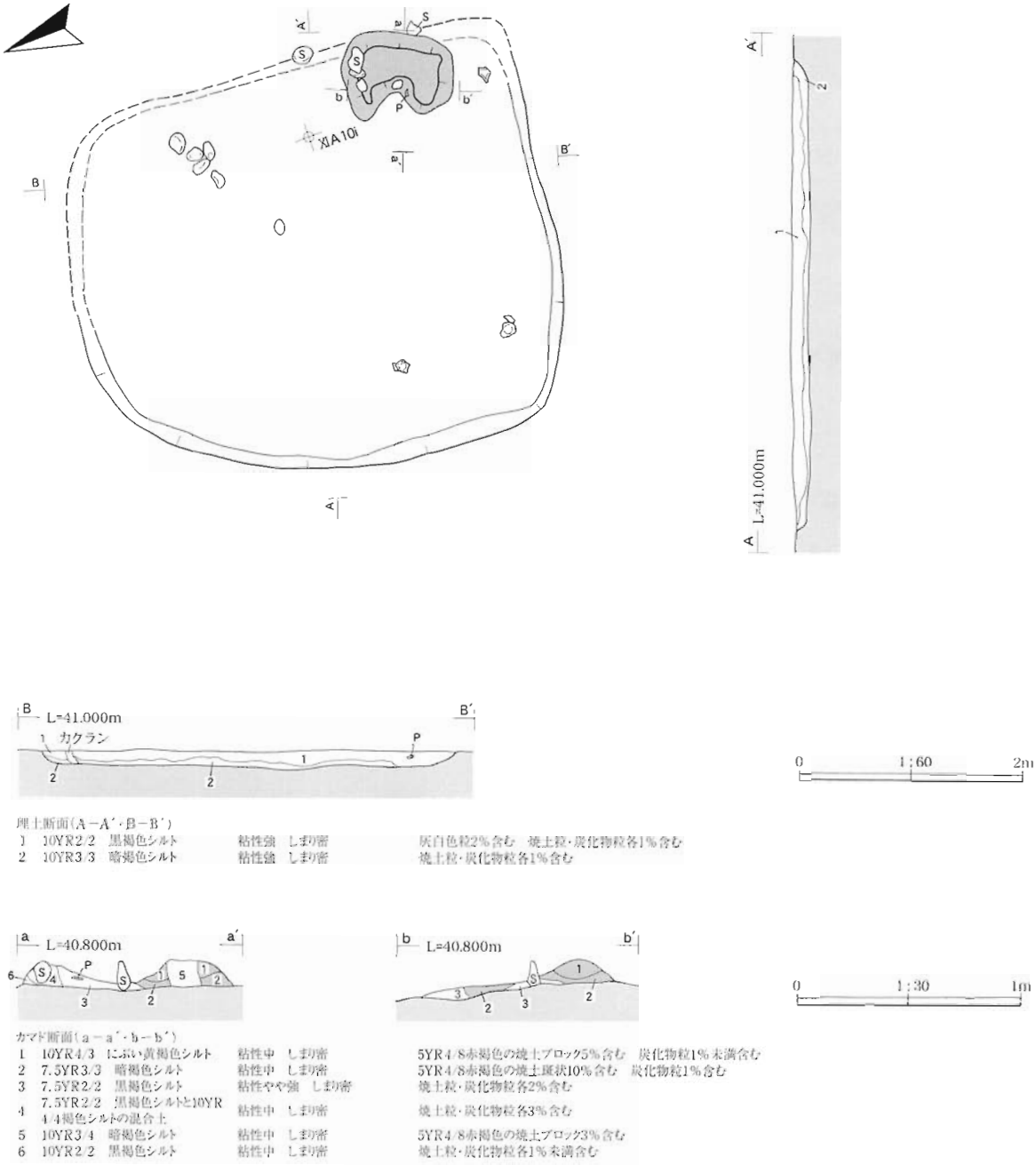
辺と南辺も残存値である。

＜埋土＞２層からなる。上位は灰白色粒、焼土、炭化物を含む黒褐色シルト、下位は焼土、炭化物を含む暗褐色シルトで構成される。

＜壁＞残存値は７～12cmである。北壁から東壁にかけては撹乱で破壊され、消失していた。

＜床面＞砂礫基盤層を床面とし、ほぼ平坦で堅く締まる。

＜カマド＞東壁南寄り1/3の地点で構築土と思われる焼土ブロック混じりのにぶい黄褐色シルトの堆積を確認した。袖部からは被熱して赤変した礫が検出されており、これを芯材として黄褐色～褐色シルトで覆って構築されたものと見られる。また、燃焼部では中央に礫が据えられてあり、これを支脚として用いていた可能性がある。煙道部、煙出し部は残存不良のため確認できず、詳細は不明である。



埋土断面(A－A'・B－B')

1	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性強 しまり密	灰白色粒2%含む 焼土粒・炭化物粒各1%含む
2	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性強 しまり密	焼土粒・炭化物粒各1%含む

カマド断面(a－a'・b－b')

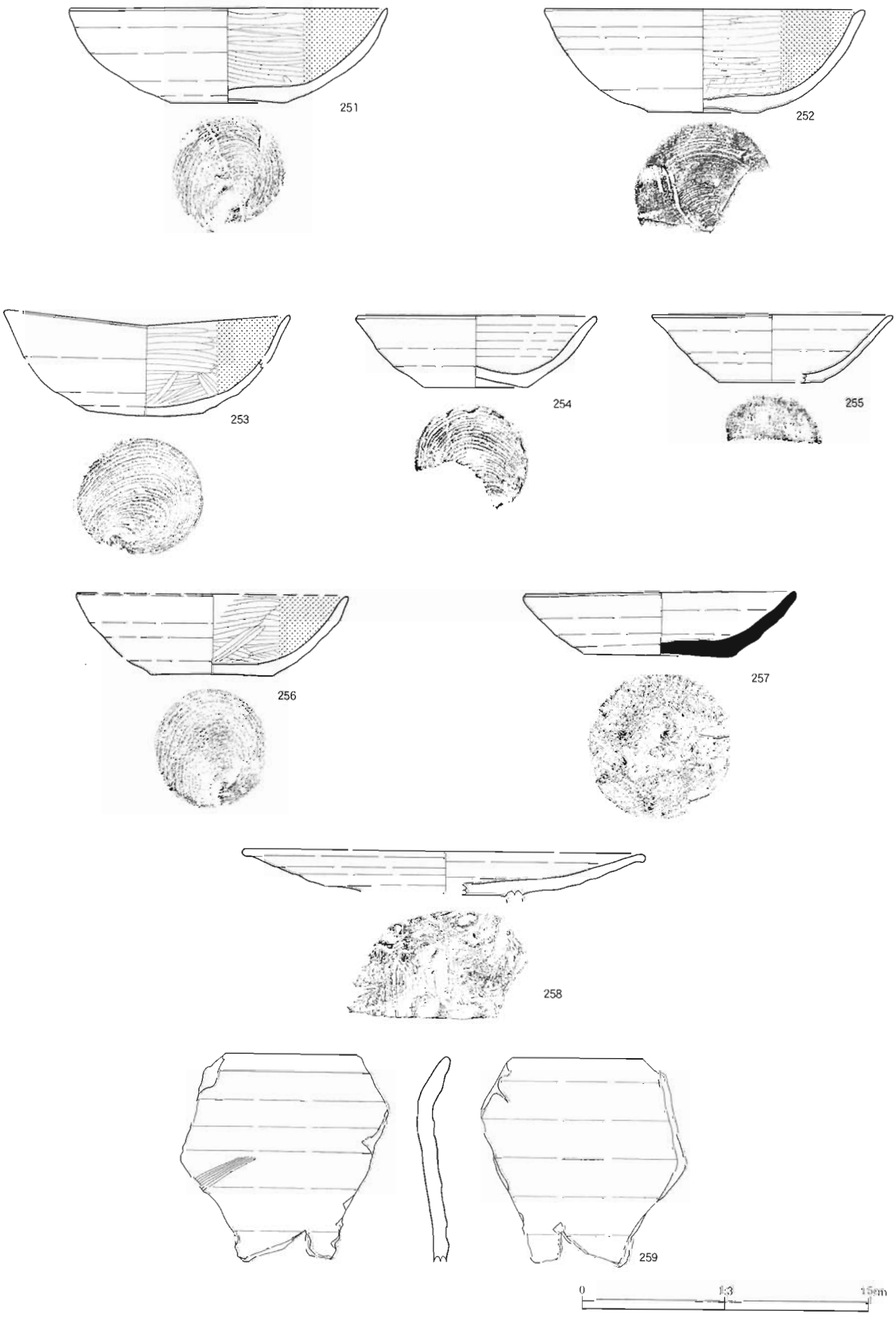
1	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト	粘性中 しまり密	5YR4/8赤褐色の焼土ブロック5%含む 炭化物粒1%未満含む
2	7.5YR3/3 暗褐色シルト	粘性中 しまり密	5YR4/8赤褐色の焼土斑状10%含む 炭化物粒1%含む
3	7.5YR2/2 黒褐色シルト	粘性やや強 しまり密	焼土粒・炭化物粒各2%含む
4	7.5YR2/2 黒褐色シルトと10YR 4/4褐色シルトの混合土	粘性中 しまり密	焼土粒・炭化物粒各3%含む
5	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性中 しまり密	5YR4/8赤褐色の焼土ブロック3%含む
6	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり密	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む

第74図　ＳＩ２０竪穴住居跡（１）

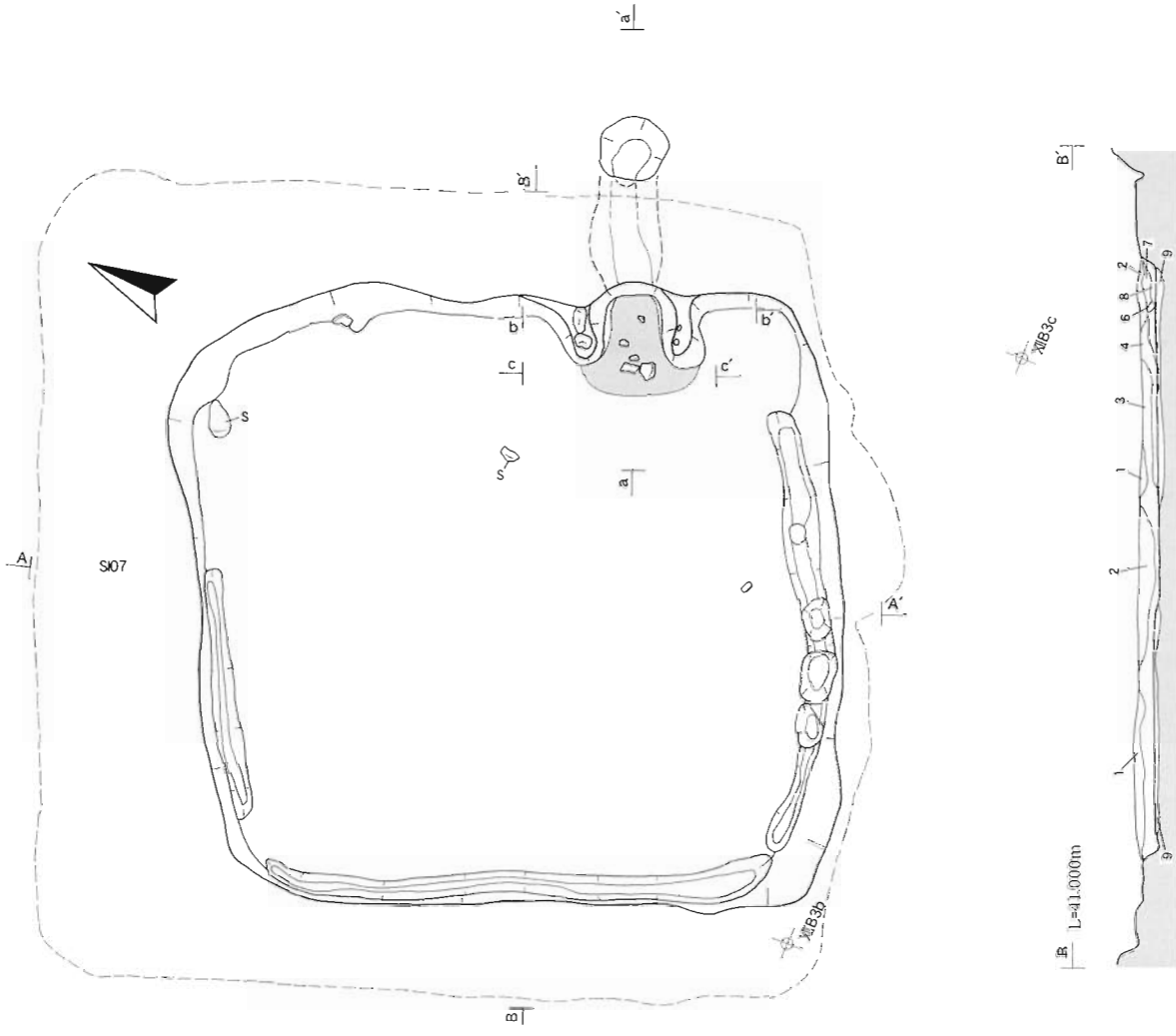
<柱穴・ピット>検出されなかった。

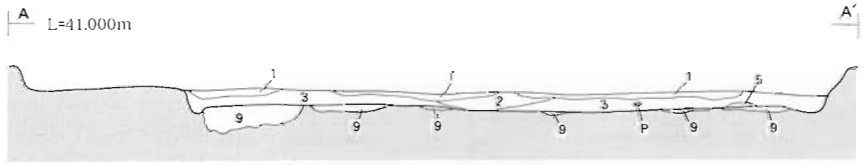
遺物（第75図、写真図版56）

床面から土師器片３点、須恵器片１点、カマドの構成材として土師器片１点、堆積土中より土師器片４点が出土している。器種は坏、皿、甕で構成され、製作に際してはロクロが使用されている。坏は土師器が多く、底部の切り離し技法はは回転イトキリによるものが多い。257は床面から出土した須恵器の坏で、底部はヘラケズリ再調整される。258は堆積土から出土した土師器皿で、内外面共にロクロナデ調整される。出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属するものと推察される。



第75図　ＳＩ２０竪穴住居跡（２）



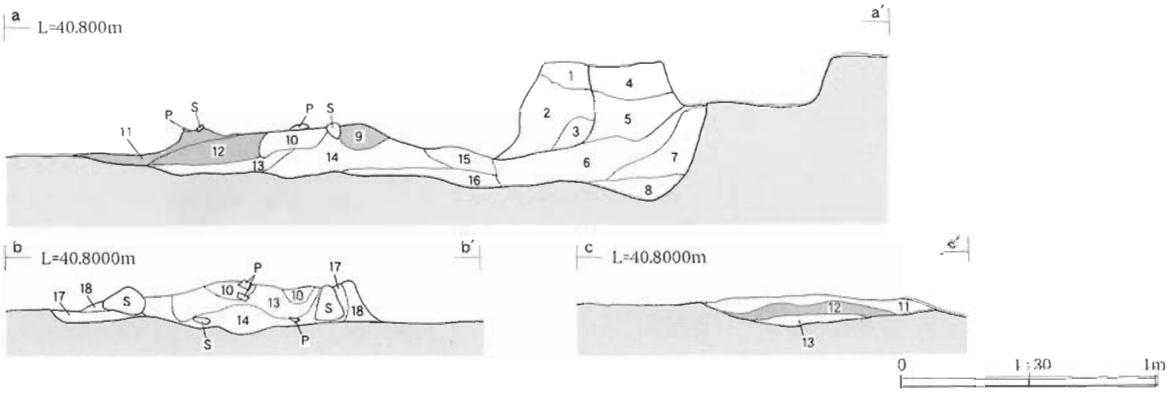


堆土断面（A－A′・B－B′）

1	10YR3/2 黒褐色シルトと10YR5/6黄褐色シルトの混合土	粘性弱 しまり密	灰白色粒3%含む 焼土粒2%含む 炭化物粒5%含む （SI07の貼り床部分）
2	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり強	灰白色粒3%含む 焼土粒・炭化物粒各1%含む
3	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性弱 しまり密	10YR5/6黄褐色シルトブロック3%含む 焼土粒3% 炭化物粒1%含む
4	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性中 しまりやや密	灰白色粒2%含む 焼土粒・炭化物粒各2%含む
5	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性やや強 しまりやや密	10YR5/8黄褐色砂質シルト斑状3%含む 炭化物粒1%未満含む
6	7.5YR2/3 極暗褐色シルト	粘性中 しまり中	炭化物粒1%未満含む
7	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR5/6黄褐色シルト粒2%含む
8	5YR3/3 暗赤褐色の焼土	粘性中 しまり密	一部により強くあぶられた焼土粒が混じる 炭化物粒1%含む
9	10YR3/3 暗褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色シルトの混合土	粘性弱 しまり密	径2cm大の礫含む（貼り床部分）

0 1:60 2m

第76図　ＳＩ２１竪穴住居跡（１）



カマド煙道埋土（a－a′・b－b′・c－c′）

1	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまり密	10YR4/4褐色シルトブロック8%含む
2	7.5YR5/8	明褐色シルト	粘性中　しまり中	5YR5/6明赤褐色の焼土ブロック5%含む　炭化物粒1%含む
3	7.5YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまりやや密	焼土粒・炭化物粒各2%含む
4	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性やや強　しまり密	10YR5/6黄褐色シルト粒1%含む　径5mm大の小礫3%含む
5	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8黄褐色　やや砂質シルトブロック5%含む　焼土粒1%含む
6	7.5YR3/3	暗褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	焼土粒1%含む　土器片を含む
7	7.5YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	炭化物粒1%未満含む　土器片を含む
8	10YR4/6 10YR3/4	褐色砂質シルトと 暗褐色シルトの混合土	粘性弱　しまり中	
9	5YR4/6	赤褐色の焼土	粘性弱　しまり密	
10	7.5YR2/2	黒褐色シルト	粘性弱　しまり密	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
11	7.5YR3/3	暗褐色シルト	粘性弱　しまり密	焼土粒2%含む　炭化物粒8%含む
12	7.5YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり密	5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック5%含む　炭化物粒1%含む
13	7.5YR4/4	褐色シルト	粘性中　しまり密	炭化物粒1%未満含む　径5mm大の小礫含む
14	7.5YR4/3	褐色シルト	粘性弱　しまり密	5YR5/8明赤褐色の焼土粒8%含む　炭化物粒2%含む
15	7.5YR3/4	暗褐色シルト	粘性弱　しまり密	焼土粒1%含む　炭化物粒2%含む　上部は被熱赤変する
16	7.5YR4/6	褐色シルト	粘性中　しまり密	焼土粒1%含む　炭化物粒1%未満含む
17	7.5YR2/3	極暗褐色シルト	粘性弱　しまり密	灰白色粒1%未満含む　焼土粒1%未満含む（カマドの袖部分）
18	7.5YR3/2	黒褐色シルト	粘性弱　しまり密	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む（カマドの袖部分）

第77図　ＳＩ２１竪穴住居跡（２）

ＳＩ２１竪穴住居跡

遺構（第76・77図、写真図版23）

＜位置・重複関係＞ＸⅢＢ２ｂグリッドに位置する。７号住居跡を精査中、住居の床面で暗褐色のプランを確認した。埋土の断面観察、貼り床の状況から本住居跡はＳＩ07住居跡よりは時期的に旧いと判断され、ＳＩ07住居跡拡張以前の構築であると考えられる。

＜規模・平面形＞東辺4.81m、西辺4.6m、北辺4.27m、南辺4.75mの隅丸方形を呈する。

＜埋土＞９層からなり、灰白色粒、焼土、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成される。最上部の１層は７号住居跡の貼り床である。

＜壁＞残存値は３～12cmである。

＜床面＞やや起伏を持ち、硬くしまる。埋土の９層部分に、暗褐色とにぶい黄褐色シルトの混合土によって貼り床が形成される。壁際には壁溝が巡る。

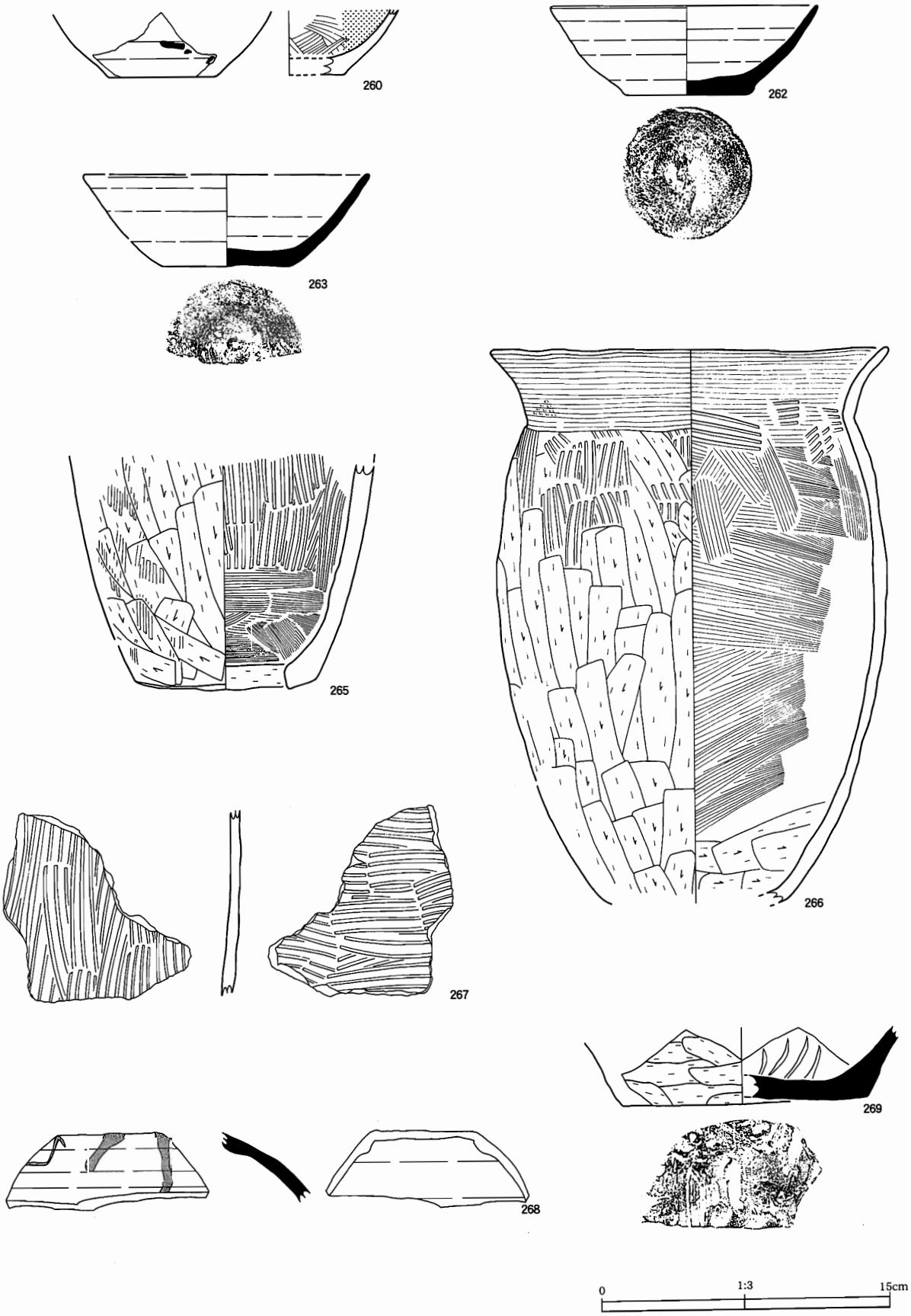
＜カマド＞東壁の南寄りの部分に構築されていた。残存状態はやや不良である、両袖は礫を芯材として粘土で覆って構築されている。燃焼部には90cm×70cm、厚さ８cmの範囲で、現地性の焼土が形成される。

煙道部は刳り貫き式で、長さ80cmを測る。煙道部の半ばまで赤く被熱していた。煙出し部は不整な円形を呈しており、径54cm×49cm、深さ37cmの土坑が掘り込まれる。

＜柱穴・ピット＞検出されなかった。

遺物（第78図、写真図版56・57）

床面から須恵器片２点、カマド燃焼部から土師器片１点、堆積土中から土師器片５点、須恵器片２点が出土している。器種は坏、高坏、甑、甕、甕壺類で構成される。製作に際してはロクロが使用されるものと使



第78図　ＳＩ２１竪穴住居跡（３）

用されないものがある。土師器の坏は外面ロクロナデ調整、内面ミガキ＋黒色処理されるものが多く、底部は切り離し後、ヘラケズリ再調整される。262・263は須恵器坏で、底部の切り離し技法はそれぞれ、回転ヘラキリ、ヘラケズリ再調整される。265は土師器の単孔甑で、外面タタキ成形後ケズリ調整、内面ナデ＋ハケメ調整される。268・269は須恵器の甕壺類である。出土遺物から本遺構は平安時代に属するものと推察される。

ＳＩ２２竪穴住居跡

遺構（第79～81図、写真図版24）

＜位置・重複関係＞ＸⅡＡ２ｆグリッドに位置する。検出はⅣ層で、にぶい赤褐色の焼土の広がりとして確認した。検出の段階で上部は削平を受けほぼ消失しており、壁も大部分は確認できなかった。

＜規模・平面形＞西辺－3.2m、北辺－3.75mの隅丸方形を呈するものと推定される。西辺と北辺は残存値である。

＜埋土＞３層からなり、焼土を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

＜壁＞西壁と北壁の壁高は残存値で４cm～16cmを測る。

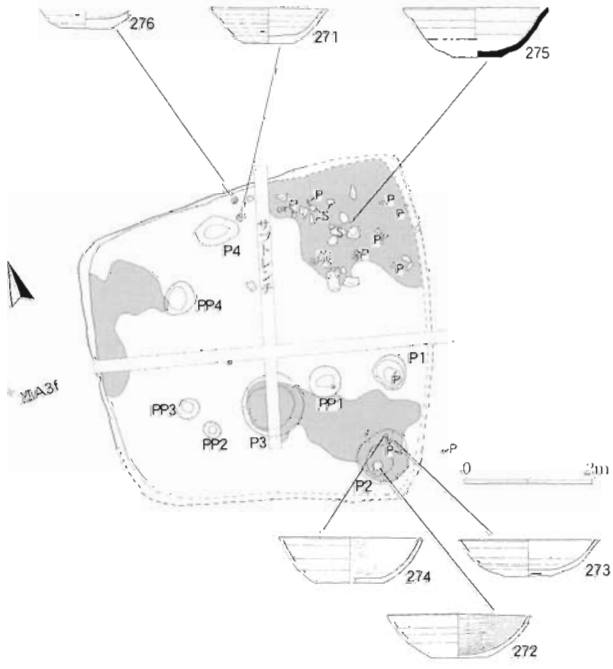
＜床面＞ほぼ平坦であり、粘土質で堅く締まっている。多量の焼土が散在し、炭化材も僅かに認められることから焼失住居と推測される。焼土は北東隅、南東隅、北西壁際に多量に分布する。貼り床は確認できなかった。

＜カマド＞北東隅で構築土と思われる焼土ブロックを含む黒褐色シルトの堆積と、袖部の芯材と見られる礫を検出した。但し、削平を受け残存状態は不良である。

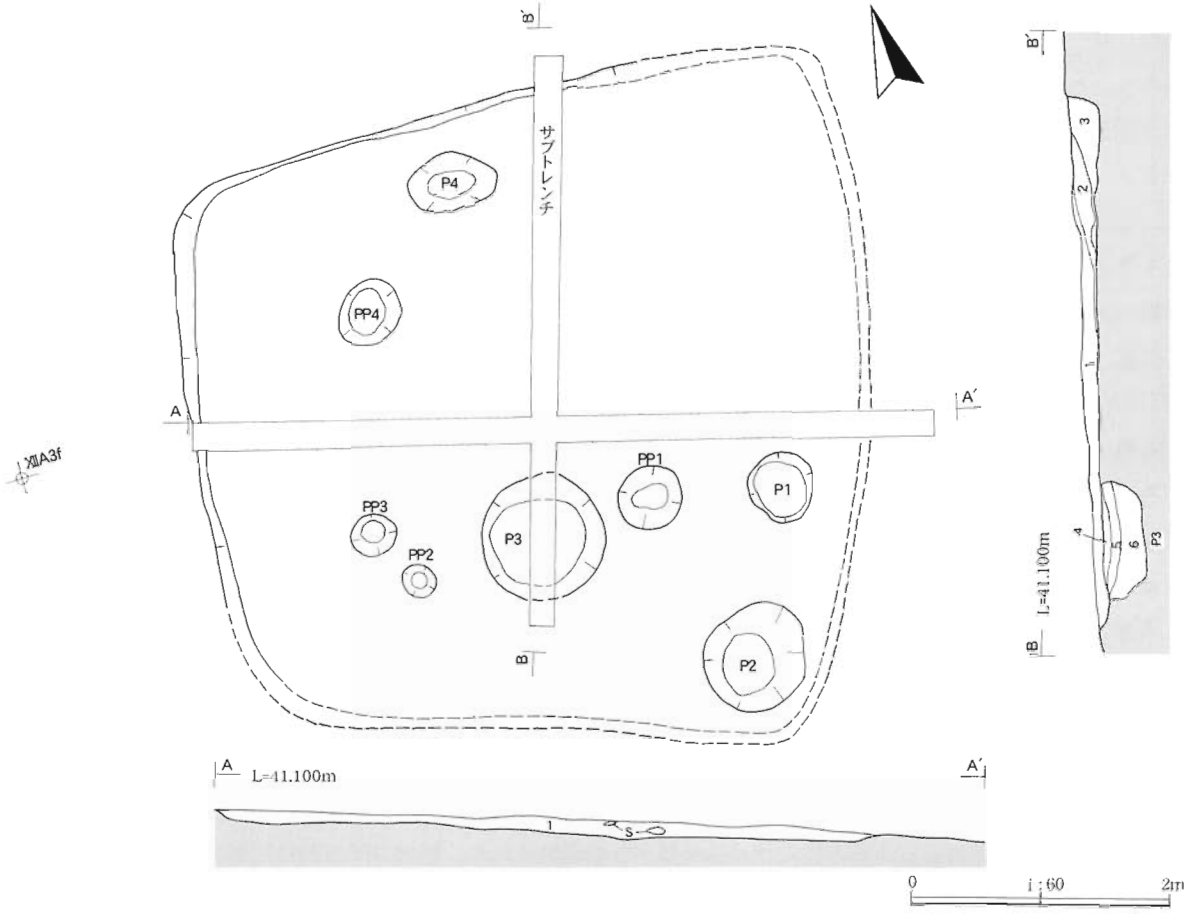
＜柱穴・ピット＞床面から４基の柱穴と４基のピットが検出された。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は径28～54cm前後、深さ14～29cm前後を測る。これらの柱穴はその配置から住居の主柱穴を構成するものと推定される。ピットの平面形は円形から楕円形を呈し、規模は径54～96cm前後、深さ11～34cm前後を測る。このうちＰ２の底面付近からは完形の坏が出土している（272）。

遺物（第82図、写真図版57・58）

床面から土師器片６点、カマド構成材として須恵器片１点、堆積土中より土師器片５点、須恵器片３点が出土している。器種は坏、鉢、甕、甕壺類、大甕で構成され、製作に際してはロクロが使用されている。坏は内外面共にロクロナデ調整されるものと、内面ミガキ＋黒色処理されるものがある。底部の切り離し技法は回転イトキリである。276は土師器鉢で、内面ミガキ＋黒色処理される。石製品は１点が出土している。285はＰＰ２から出土した砥石である。また、カマド構築土中より鉄滓が１点出土している（286）。出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属するものと推察される。



第79図　ＳＩ２２竪穴住居跡（１）



No.	PP1	PP2	PP3	PP4
規模(cm)	48×46	28×24	36×33	54×45
深さ(cm)	14.4	14.1	29.4	28.8

No.	P1	P2	P3	P4
規模(cm)	54×50	86×80	96×95	70×44
深さ(cm)	11.8	33.3	28.0	29.5

埋土断面(A－A′・B－B′)

1	7.5YR3/2	黒褐色シルト	粘性中	しまり密	7.5YR5/6明褐色の焼土粒1%含む
2	7.5YR3/4	暗褐色シルト	粘性中	しまり密	7.5YR7/6橙色の灰ブロック3%含む　焼土粒・炭化物粒各1%含む
3	7.5YR3/3	暗褐色シルト	粘性中	しまり密	焼土粒3%含む　炭化物粒1%含む

P3(B－B′に含む)

4	7.5YR3/3	暗褐色シルトと5YR5/8明赤褐色の焼土の混合土	粘性中	しまり密	7.5YR7/6橙色の灰ブロック5%含む
5	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性中	しまり密	7.5YR7/6橙色の灰ブロック2%含む　焼土粒・炭化物粒各1%含む
6	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性強	しまり密	10YR4/6褐色シルトブロック3%含む　焼土粒・炭化物粒各1%未満含む

第80図　ＳＩ２２竪穴住居跡（２）

ＳＩ２３竪穴住居跡

遺構（第83・84図、写真図版25）

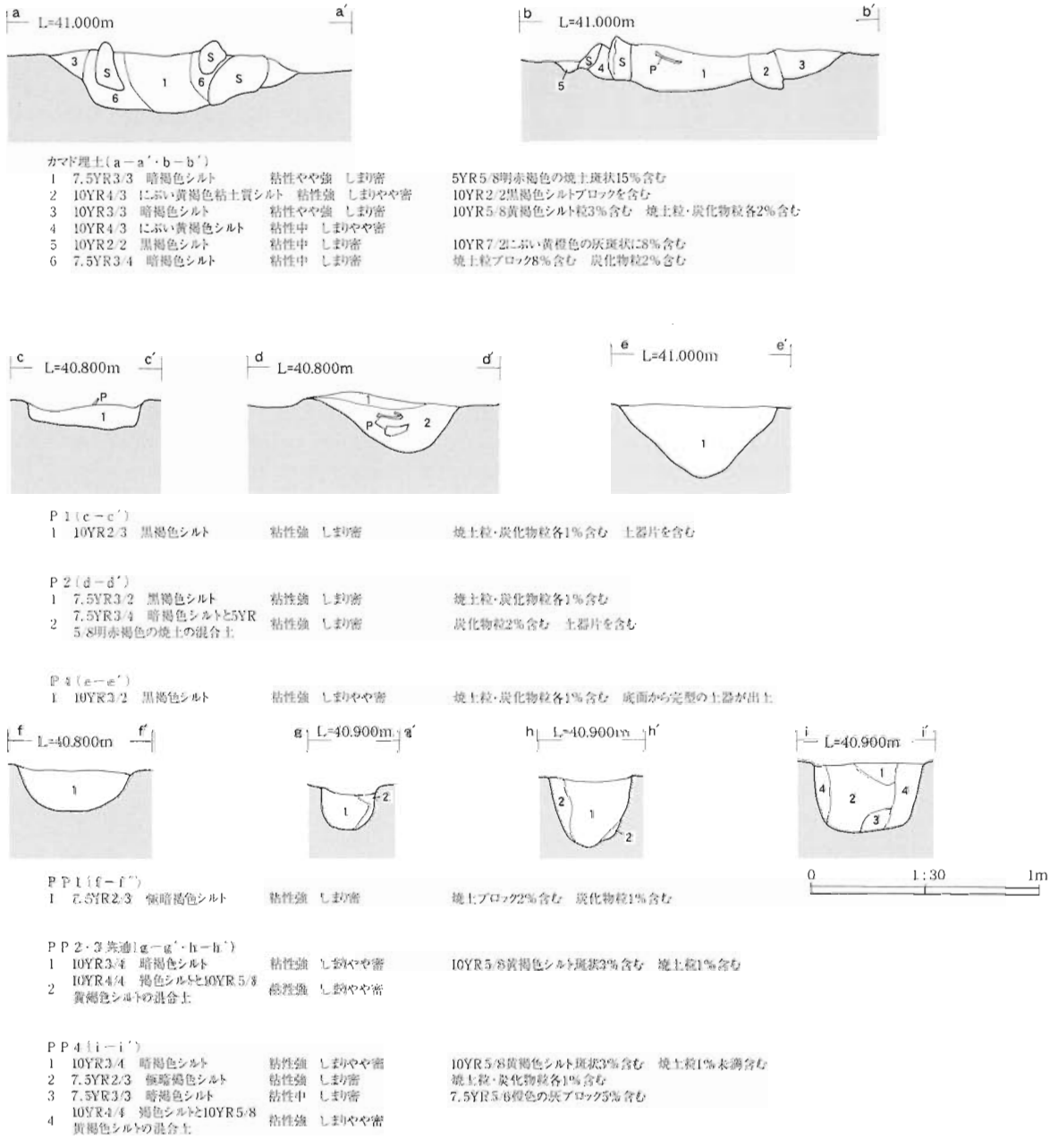
＜位置・重複関係＞ＸＩＢ６ａグリッドに位置する。検出はⅣ層で黒褐色のプランを確認した。

＜規模・平面形＞東辺4.43m、西辺4.85m、北辺4.98m、南辺4.42mの隅丸方形を呈する。

＜埋土＞６層からなり、黄褐色シルトを含む黒褐色シルトを中心として構成される。埋土の上位に径５cm大の礫を含む。

＜壁＞残存値で20～30cmを測る。

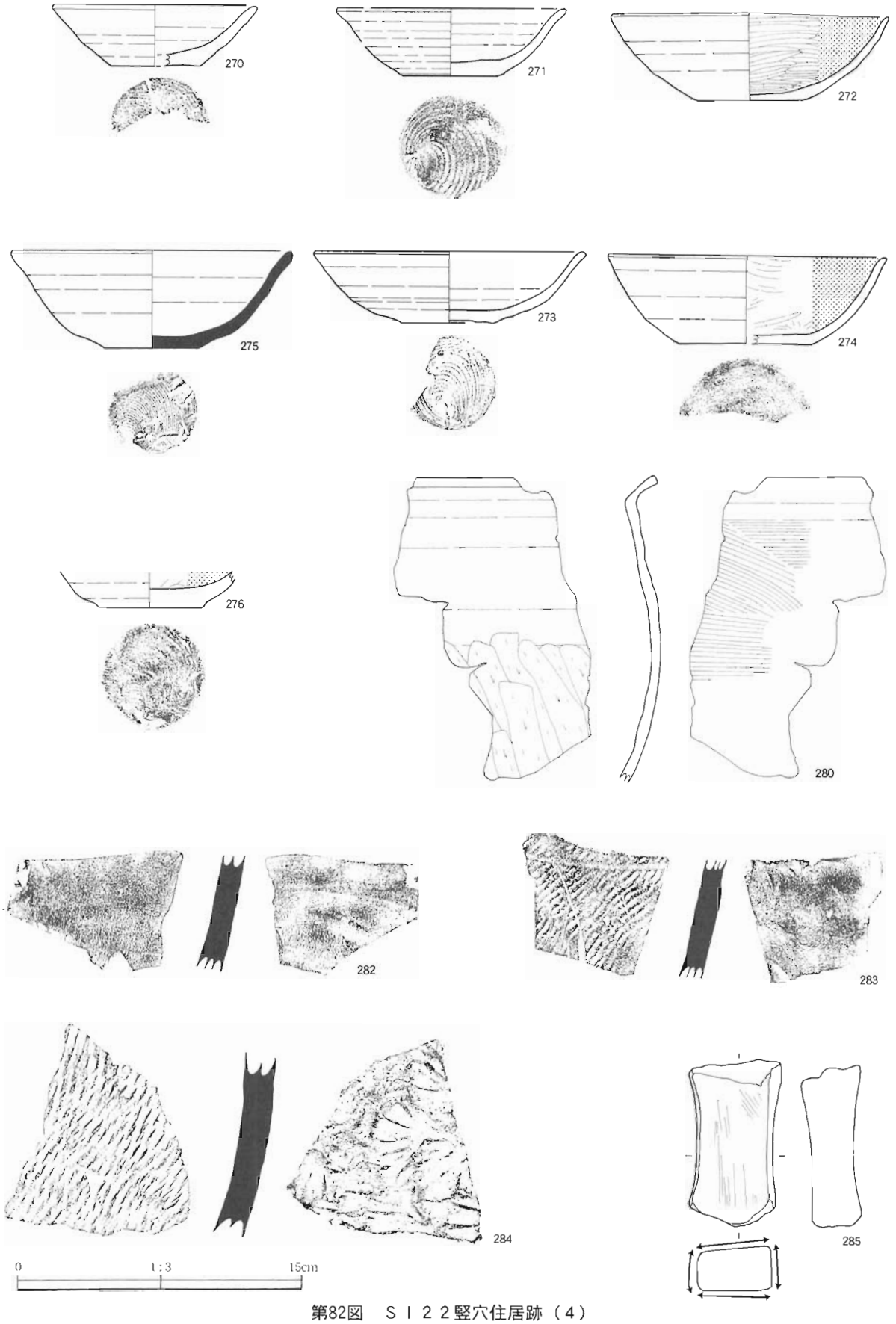
＜床面＞床面はほぼ平坦で堅く締まり、黄褐色シルトと褐色シルトの混合土で貼り床が形成される。



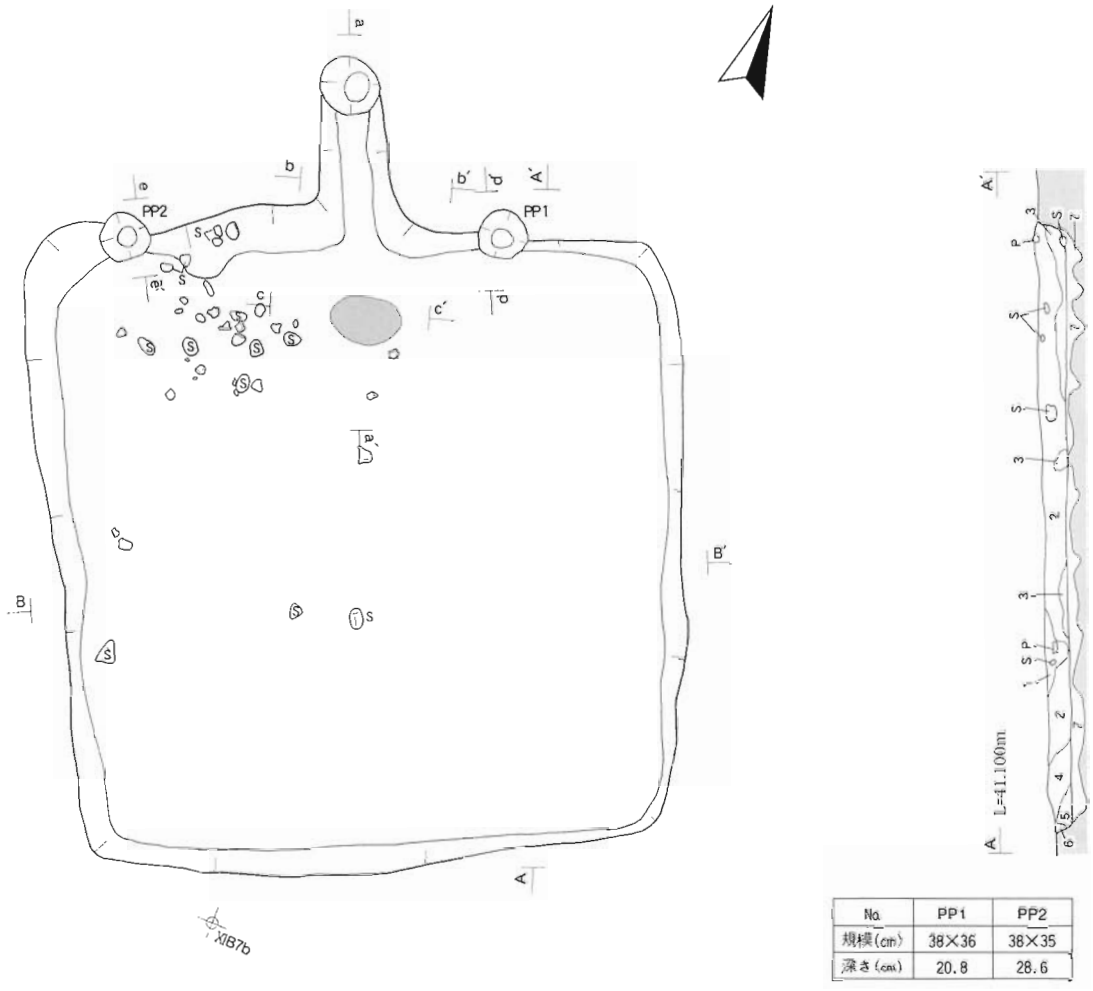
第81図　ＳＩ２２竪穴住居跡（３）

＜カマド＞本体部分は残存せず、燃焼部の焼土を確認したのみである。煙道の位置などから北壁ほぼ中央に構築されていたと推定される。燃焼部と思われる位置には現地性の焼土が形成されている。焼土の範囲は径56cm×38cmの楕円形を呈しており、厚さは８cmである。煙道部は長さ85cmを測る。削平を受け、刳り貫き式か掘り込み式かは不明である。煙出し部は径48×42cmの円形を呈し、深さは32cmを測る。カマド焼土西側に拳大程度の礫、土器片、粘土が多量に散乱するのが確認されている。これらは出土位置、粘土の状況などからカマドの構築材が廃棄された状況を示すものである可能性がある。

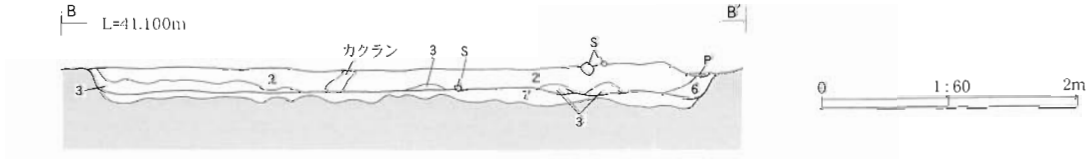
＜柱穴・ピット＞カマド両脇の壁面から壁柱穴が２基検出された。壁柱穴は平面形は円形を呈しており、東



第82図　ＳＩ２２竪穴住居跡（４）

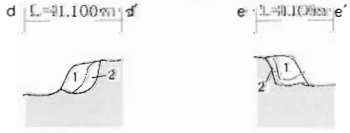


No.	PP1	PP2
規模(cm)	38×36	38×35
深さ(cm)	20.8	28.6



埋土断面(A－A'・B－B')

1	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR5/6黄褐色シルト粒2%含む 炭化物粒1%未満含む
2	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性やや強 しまりやや疎	10YR5/6黄褐色シルト粒1%含む 焼土粒1%含む 炭化物粒2%含む
3	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR5/6黄褐色シルト斑状5%含む
4	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性中 しまりやや弱	10YR5/8黄褐色シルト粒3%含む 炭化物粒2%含む
5	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性やや強 しまりやや疎	10YR5/8黄褐色砂質シルト微量含む
6	10YR5/8 黄褐色シルトと10YR3/4暗褐色シルトの混合土	粘性弱 しまり密	
7	10YR3/3 暗褐色シルトと10YR5/6にぶい黄褐色シルトの混合土	粘性中 しまり密	(貼床部分)



PP1(d－d')

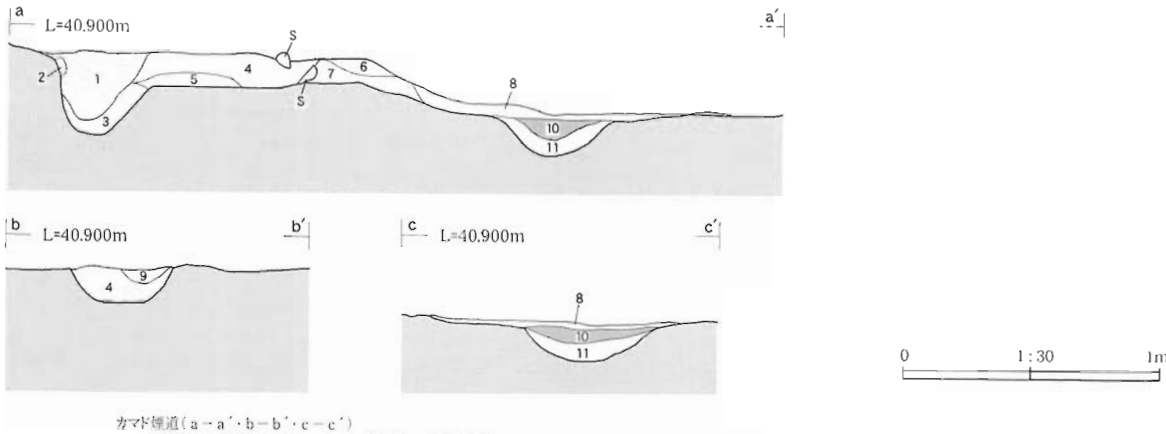
1	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性やや弱 しまり中	10YR5/6黄褐色砂質シルトブロック5%含む
2	10YR5/6 黄褐色砂質シルト	粘性弱 しまりやや密	10YR2/3黒褐色シルトブロック5%含む

PP2(e－e')

1	10YR2/1 黒色シルト	粘性中 しまりやや疎	10YR3/6褐色シルトブロック5%含む 径2cm大の礫2%含む
2	10YR4/3 褐色やや砂質のシルトと10YR2/2 黒褐色シルトの混合土	粘性やや弱 しまり中	径1cm大の礫2%含む

0 1:20 2m

第83図　ＳＩ２３竪穴住居跡（１）



カマド煙道（a－a′・b－b′・c－c′）

1	10YR2/2　黒褐色シルト	粘性中　しまりやや疎	
2	10YR5/8　黄褐色砂質シルト	粘性弱　しまりやや疎	
3	10YR2/3　黒褐色シルト	粘性中　しまりやや疎	10YR4/6褐色砂質シルト斑状10%含む
4	10YR2/2　黒褐色シルト	粘性中　しまり中	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
5	10YR2/3　黒褐色シルトと10YR 4/6褐色砂質シルトの混合土	粘性やや弱　しまりやや疎	径1cm大の礫1%含む
6	7.5YR3/3　暗褐色シルト	粘性やや弱　しまりやや疎	炭化物粒1%含む
7	7.5YR3/3　暗褐色シルト	粘性中　しまりやや密	5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック2%含む　炭化物粒1%未満含む
8	7.5YR3/2　黒褐色シルトと10YR 5/8黄褐色砂質シルト	粘性中　しまり密	炭化物粒1%未満含む
9	10YR2/2　黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8黄褐色シルト粒1%含む
10	5YR4/8　赤褐色の焼土	粘性やや強　しまりやや疎	10YR2/1黒色シルト粒2%含む
11	7.5YR5/8　明褐色の砂	粘性弱　しまりやや疎	

第84図　ＳＩ２３竪穴住居跡（２）

側のＰＰ１の規模は径38×36cm、深さは20.8cm、西側のＰＰ２の規模は径38×35cm、深さ28.6cmを測る。これらの柱穴は配列から見て、住居の柱穴を構成する可能性がある。

遺物（第85・86図、写真図版58・57）

床面から土師器片５点、須恵器片１点、堆積土中より土師器片10点、須恵器片７点が出土している。器種は坏、蓋、鉢、甕、球胴甕、甕壺類、大甕で構成され、製作に際してはロクロが使用されているものと不使用のものが混在する。293は床面から出土した坏で、ロクロナデ調整後、底部縁辺から底部にかけてヘラケズリ再調整される。306は床面から出土した球胴甕であるが、混入の可能性が高い。本遺構は全体的に製作技法、器種構成から判断して外部からの混入と見られる個体が多く混在する。出土遺物から、本遺構は平安時代に属すると推察される。

ＳＩ２４竪穴住居跡

遺構（第87図、写真図版26）

＜位置・重複関係＞ＸＩＢ９ｂグリッドに位置する。検出面はⅣ層で、遺物の集中する暗褐色のプランとして確認した。ＳＩ01住居跡と重複し、これを切る。

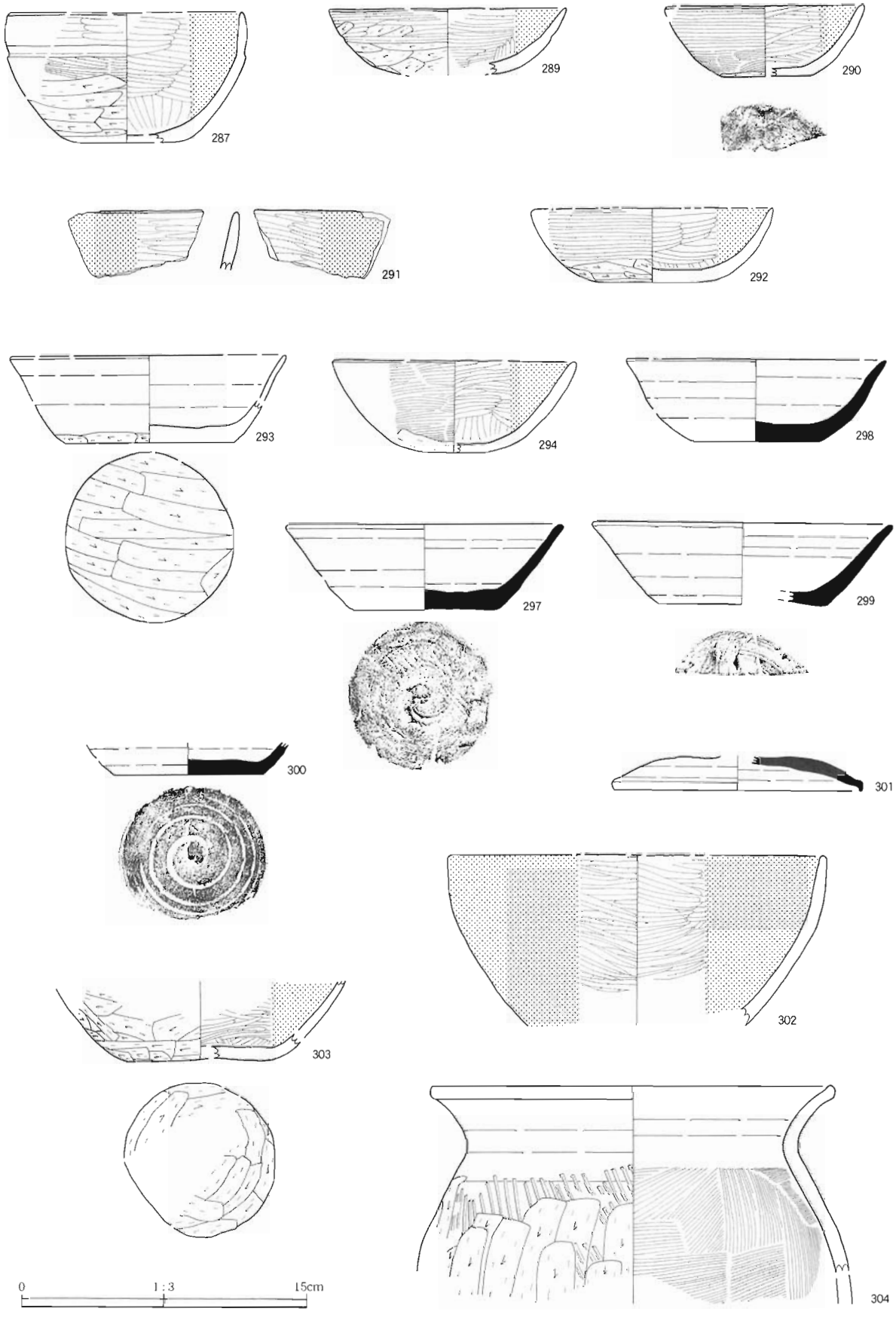
＜規模・平面形＞東辺3.44m、北辺5.0m、東辺3.8m、南辺4.7mの隅丸方形を呈する。

＜埋土＞６層からなり、礫を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

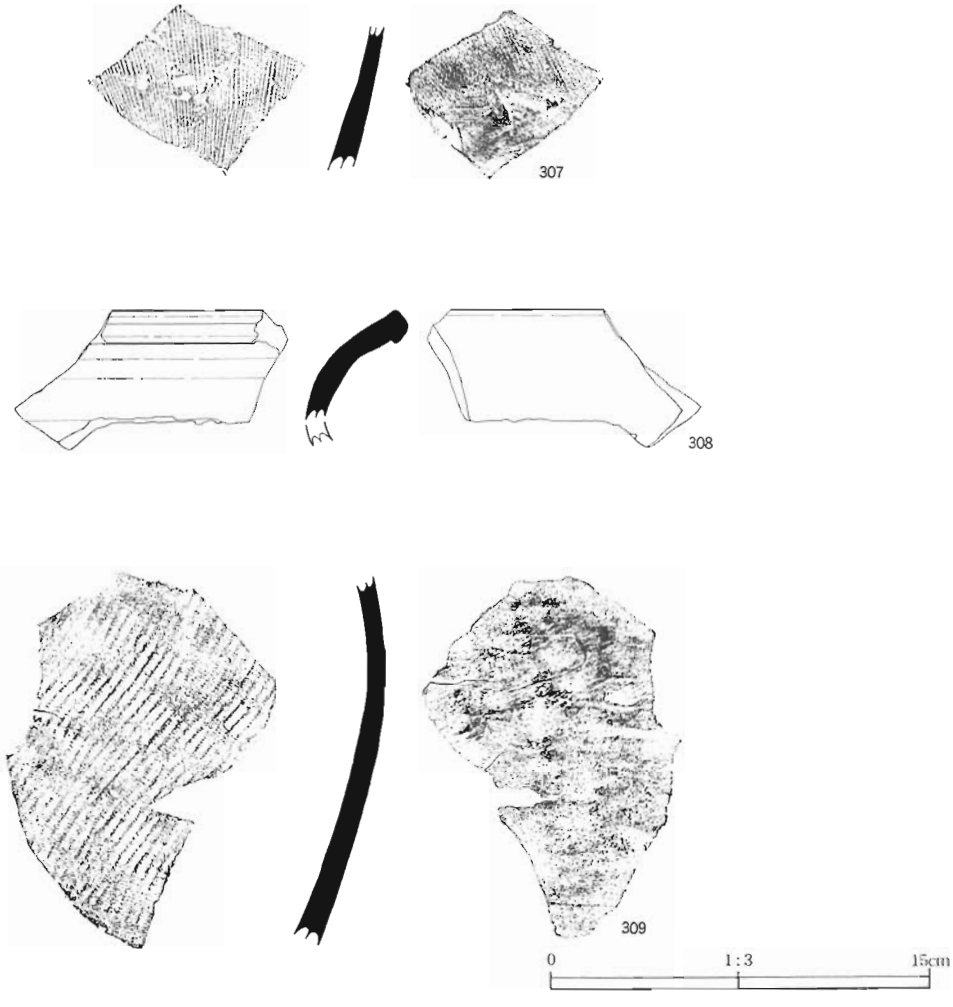
＜壁＞残存値は８～14cmである。

＜床面＞全体的に緩やかに凹凸しており、Ｑ１付近でもっとも低くなる。床面から径５～10cm大の礫が多数出土している。床面は固く締まるものであるが貼り床は確認できなかった。南側の壁際に壁溝が確認されている。

＜カマド＞北壁中央やや東寄りの地点に構築されている。本体部分は焼土・炭化物を含む黒褐色シルトを主



第85図　ＳＩ２３竪穴住居跡（３）



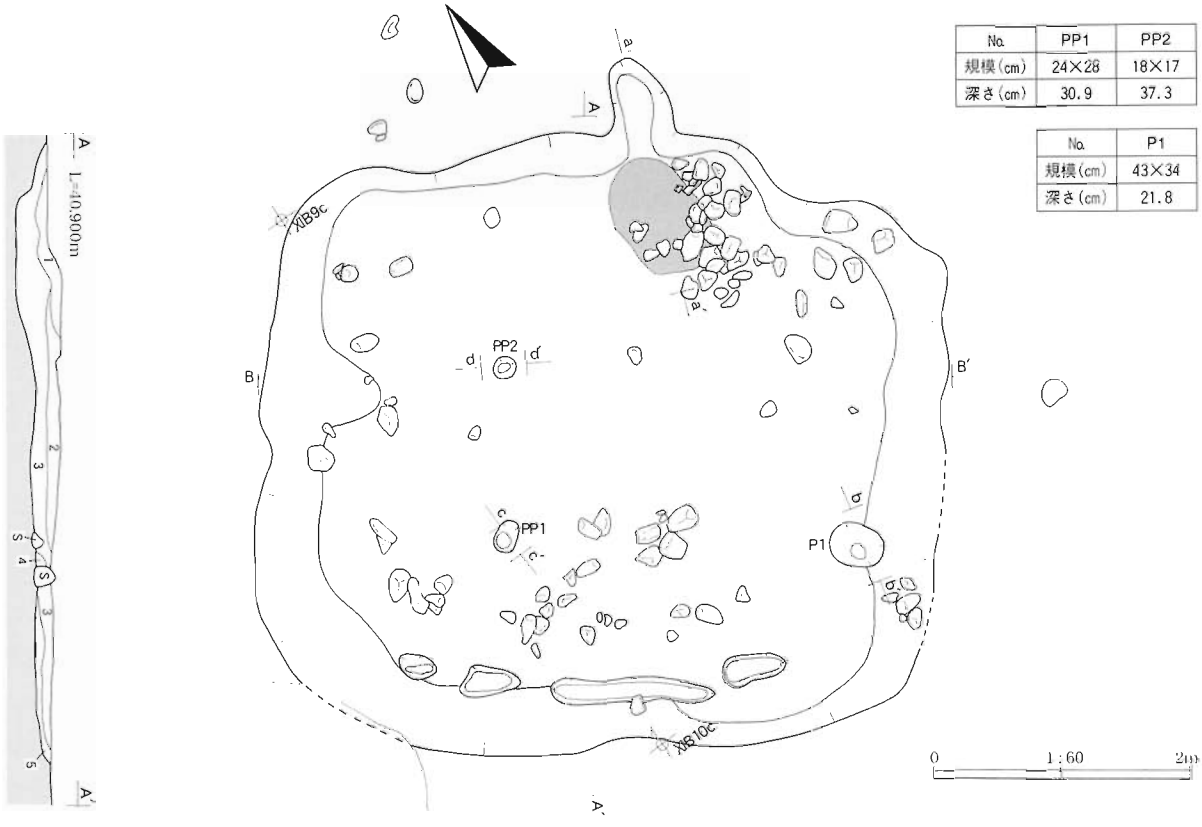
第86図　ＳＩ２３竪穴住居跡（４）

体として構築されるものであるが、残存状況が不良である為、詳細は不明である。周囲からは多数の礫が出土しているが、袖の芯材や支脚に用いられた痕跡が確認できなかったことから、構築材の可能性は低いと考えられる。焼土の範囲は95cm×63cmの楕円形を呈しており、厚さ10cmを測る。煙道は長さ50cmと短く、煙出し部の土坑も検出されていない為、削平を受け消失している可能性もある。このため、煙道および煙出し部の構造は明らかではない。

<柱穴・ピット>床面から柱穴２基、ピット１基が検出された。柱穴の平面形は円形を呈し、規模はＰＰ１が径24×28cm、深さ30.9cm、ＰＰ２が径18×17cm、深さ37.3cmを測る。これらの柱穴は配列から見て、住居の主柱穴を構成するものと推定される。ピットは東壁付近から検出されている。平面形は円形を呈し、規模は径43×34cm、深さ21.8cmを測る。

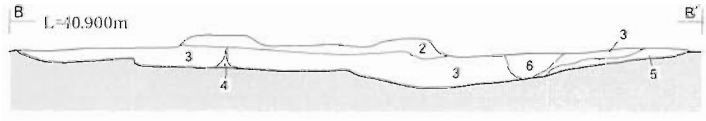
遺物（第88図、写真図版59・60）

床面から土師器片４点、焼土内から土師器片４点、堆積土中より５点が出土している。須恵器は出土していない。器種は坏、高台坏、甕、大甕で構成される。製作に際しては全てロクロが使用され、ロクロ不使用のものはない。坏は概して口径が小形のものが多い。石器類は１点が出土している。323は床面から出土した安山岩製の円礫である。出土遺物から本遺構は平安時代に属するものと推察される。



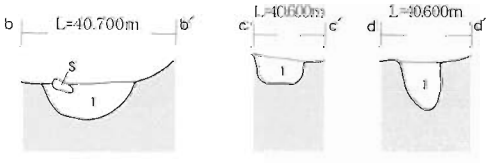
No.	PP1	PP2
規模(cm)	24×28	18×17
深さ(cm)	30.9	37.3

No.	P1
規模(cm)	43×34
深さ(cm)	21.8



埋土断面(A－A'・B－B')

1	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性中 しまりやや疎	灰白色粒1%未満含む 径1cm大の礫3%含む
2	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性中 しまりやや疎	
3	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性中 しまりやや疎	10YR4/6褐色シルト粒2%含む 炭化物粒3%含む 径1～3cm大の礫5%含む
4	10YR2/2 黒褐色シルトと10YR5/8黄褐色砂質シルトの混合土	粘性やや弱 しまりやや疎	
5	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性やや強 しまり中	10YR5/6黄褐色シルトブロック10%含む
6	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性中 しまりやや疎	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む

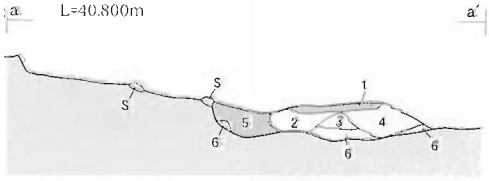


P1(b－b')

1	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性弱 しまり密	10YR4/3にぶい黄褐色シルト斑状5%含む 径3～5cm大の礫を含む

P1・2共通(c－c'・d－d')

1	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性弱 しまり密	10YR5/8黄褐色砂質シルト粒3%含む

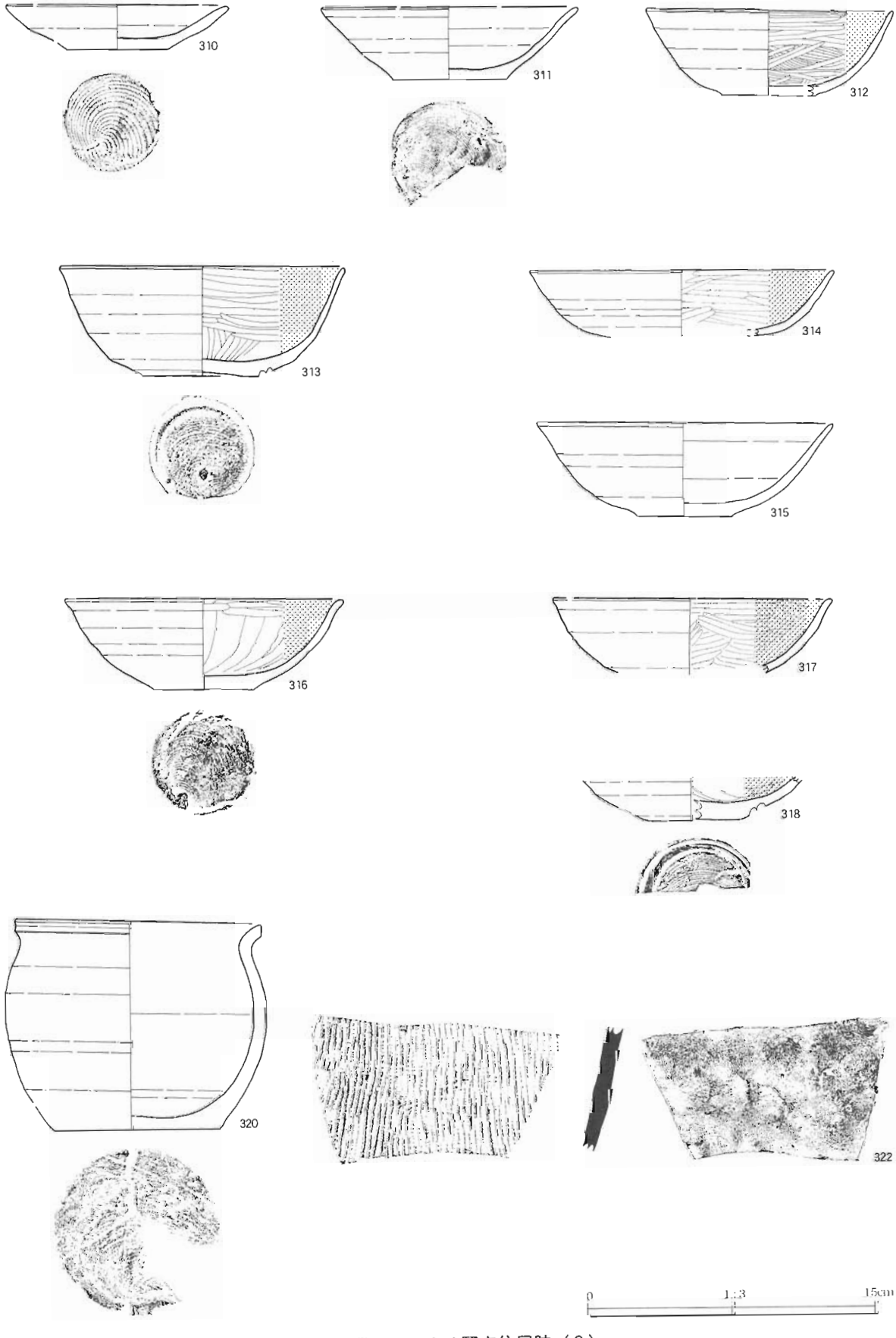


カマド断面(a－a')

1	10YR2/3 黒色シルト	粘性中 しまり中	5YR5/8明赤褐色の焼土ブロック5%含む 炭化物粒2%含む
2	7.5YR4/3 褐色シルト	粘性中 しまりやや疎	5YR5/8明赤褐色の焼土粒1%含む 炭化物粒1%未満含む
3	7.5YR2/3 極暗褐色シルト	粘性やや弱 しまり疎	
4	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR5/8黄褐色の砂質シルトブロック3%含む 炭化物粒2%含む
5	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性やや強 しまり中	5YR5/8明赤褐色の焼土粒3%含む 炭化物粒1%未満含む
6	10YR5/6 黄褐色の砂	粘性弱 しまりやや疎	径1cm大の礫含む

0 1:30 1m

第87図　ＳＩ２４竪穴住居跡（１）



第88図　ＳＩ２４竪穴住居跡（２）

２．遺物集中区・竪穴状遺構

ＳＸ０１遺物集中区

遺構（第89・90図、写真図版27）

＜位置・重複関係＞ＸＩＡ９ｈグリッドに位置する。検出はⅣ層であり、遺物の集中によって確認された。サブトレンチ３本をキの字型に入れて精査を行ったが、壁や明確なプランは確定できなかった。

＜規模・平面形＞明確な平面形は確認できなかったが、径7.2m×5.0mの不整な円形の範囲内に、高坏を中心とする多数の遺物と移地性の焼土が散在し、それを以て遺構の範囲を想定した。遺物の高坏から住居跡ではなく、何らかの祭祀に関係する遺構である可能性がある。

＜埋土＞トレンチで確認できた埋土は６層からなり、焼土、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

＜壁＞壁は検出できなかった。

＜柱穴・ピット＞検出されなかった。

遺物（第91図、写真図版60・61）

土師器片11点、堆積土中から８点が出土している。器種は高坏、甕、小形土器で構成される。325は坏？としたが、高坏の可能性もある。特筆されるのは高坏の多さで、12～13点と卓越する。遺構内からこれだけの点数が出土したものは本遺跡において他に例がなく、特徴的である。出土遺物から判断して、本遺構は奈良時代に属するものと推察される。

ＳＸ０２竪穴状遺構

遺構（第92・93図、写真図版28）

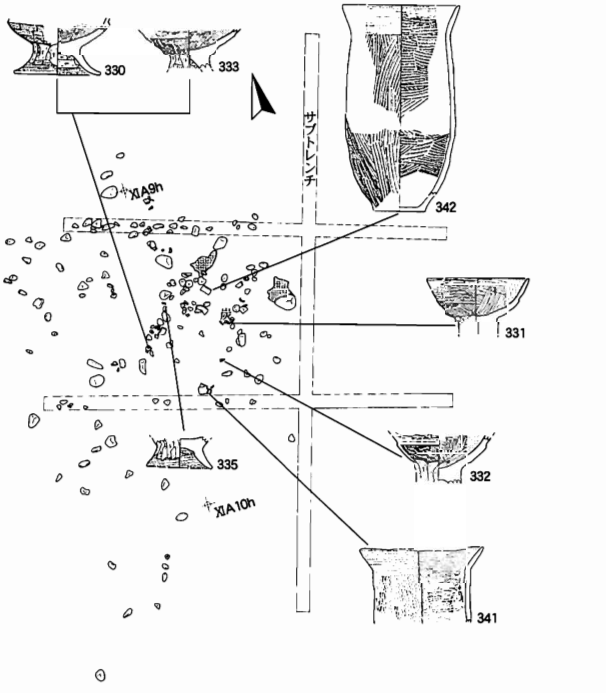
＜位置・重複関係＞ＸＩＢ６ａグリッドに位置する。検出面はⅣ層である。検出の段階で上部は削平されて消失しており、床上数cmが確認されたのみである。

＜規模・平面形＞東辺3.9m、西辺3.65m、北辺5.1m、南辺3.95mの不整な隅丸の平行四辺形状を呈する。

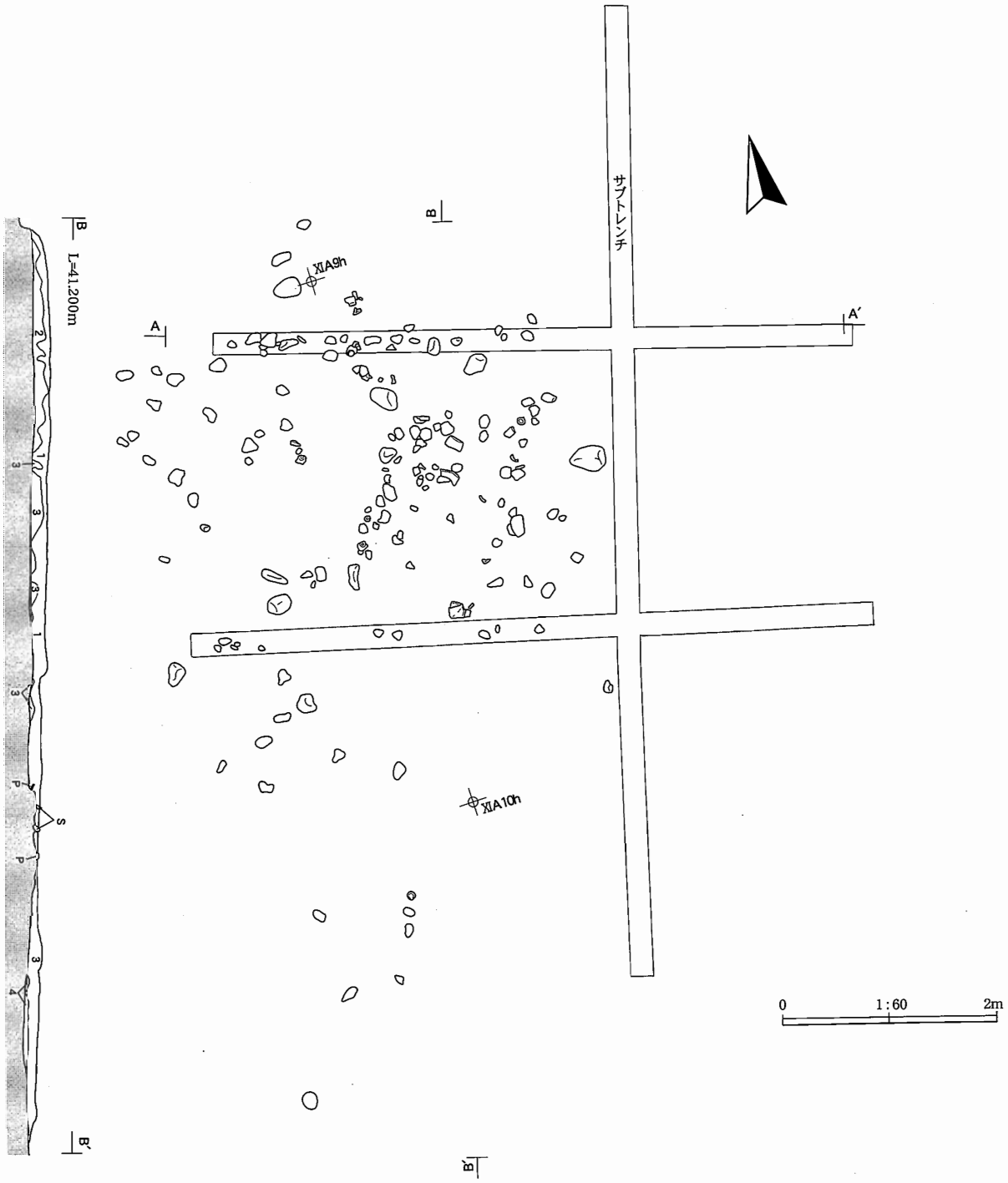
＜埋土＞６層からなり、焼土、炭化物を含む黒褐色シルト主体で構成される。埋土中に径１～５cm大の礫を多量に含む。

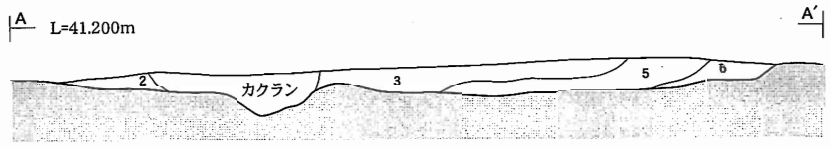
＜壁＞残存値は１～14cmである。

＜床面＞ほぼ平坦で、堅く締まる。一部には礫層が露出する。床面には縁辺部を中心に径５～10cmの円礫や移地性焼土ブロックが散在しており、西半部で顕著である。なお、焼土内（スクリーントーン部）およびＰ１、ＰＰ３からは、多量の炭化穀類、堅果類が出土している。礫層の上に、暗褐色シルトと黄褐色シルトの混合土によって貼り床が形成されている。



第89図　ＳＸ０１遺物集中区（１）

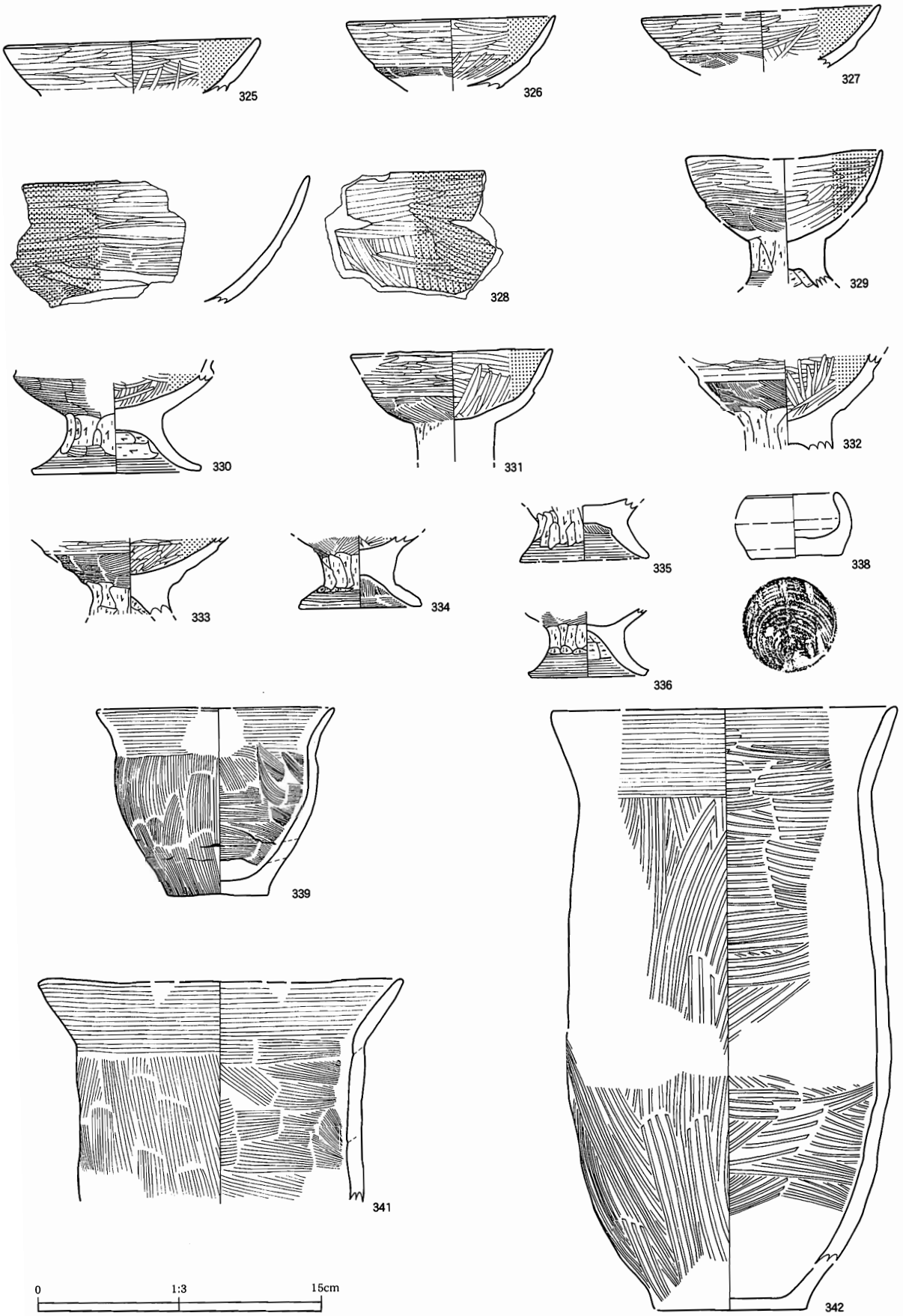




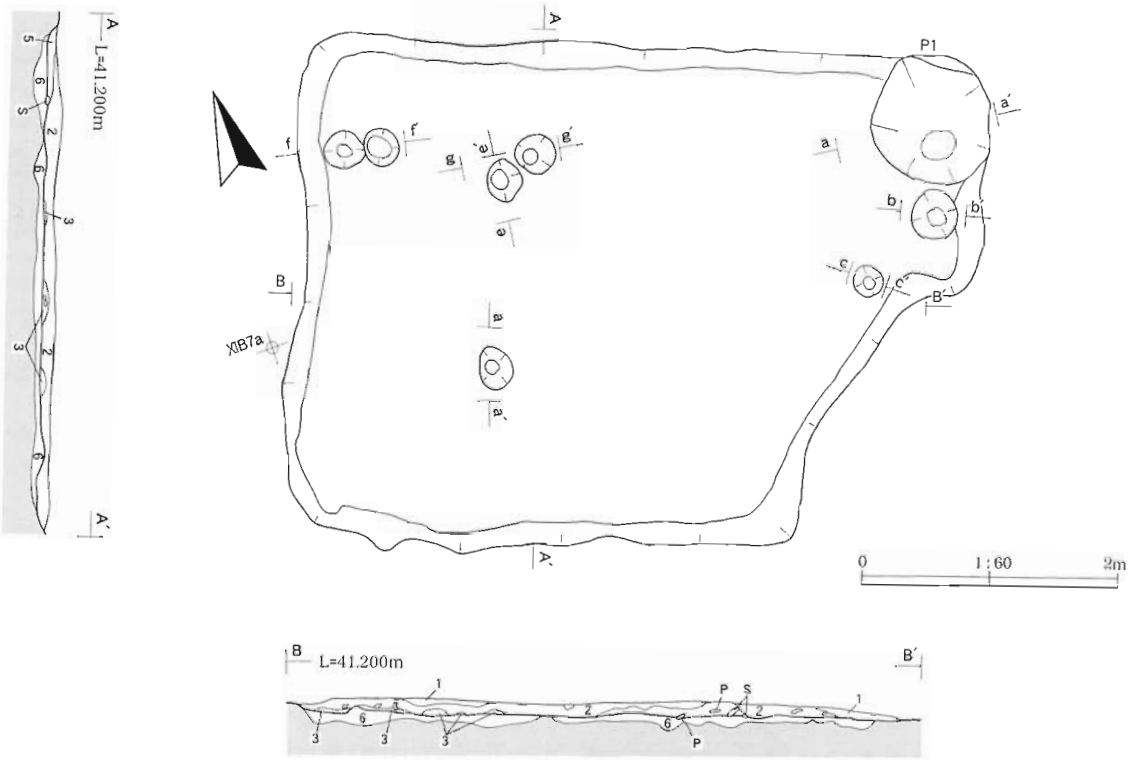
埋土断面

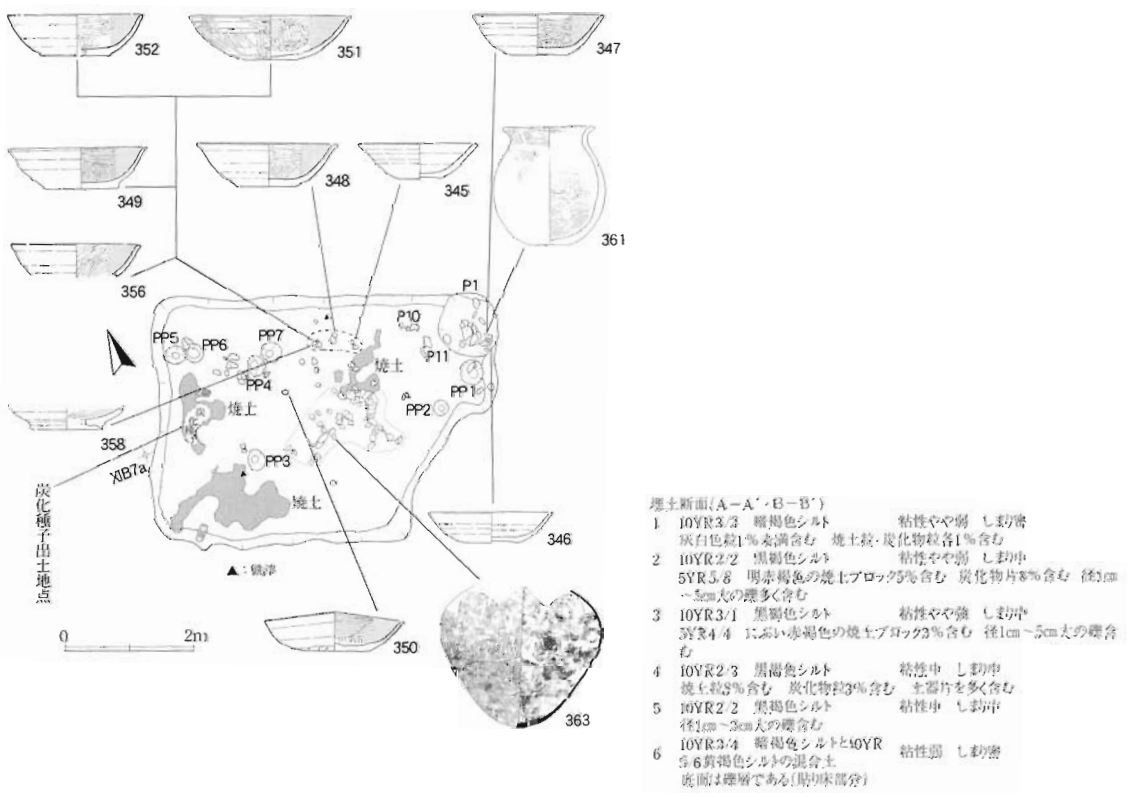
1	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性弱　しまり密	10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック5%含む　灰白色粒2%含む(撹乱層)
2	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり密	灰白色粒3%含む　炭化物粒2%含む
3	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまり密	焼土粒2%含む　炭化物粒3%含む　径3～5cm大の礫含む（遺構本来の埋土）
4	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	
5	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
6	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中　しまり密	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む　径1～3cm大の礫含む

第90図　ＳＸ０１遺物集中区（２）

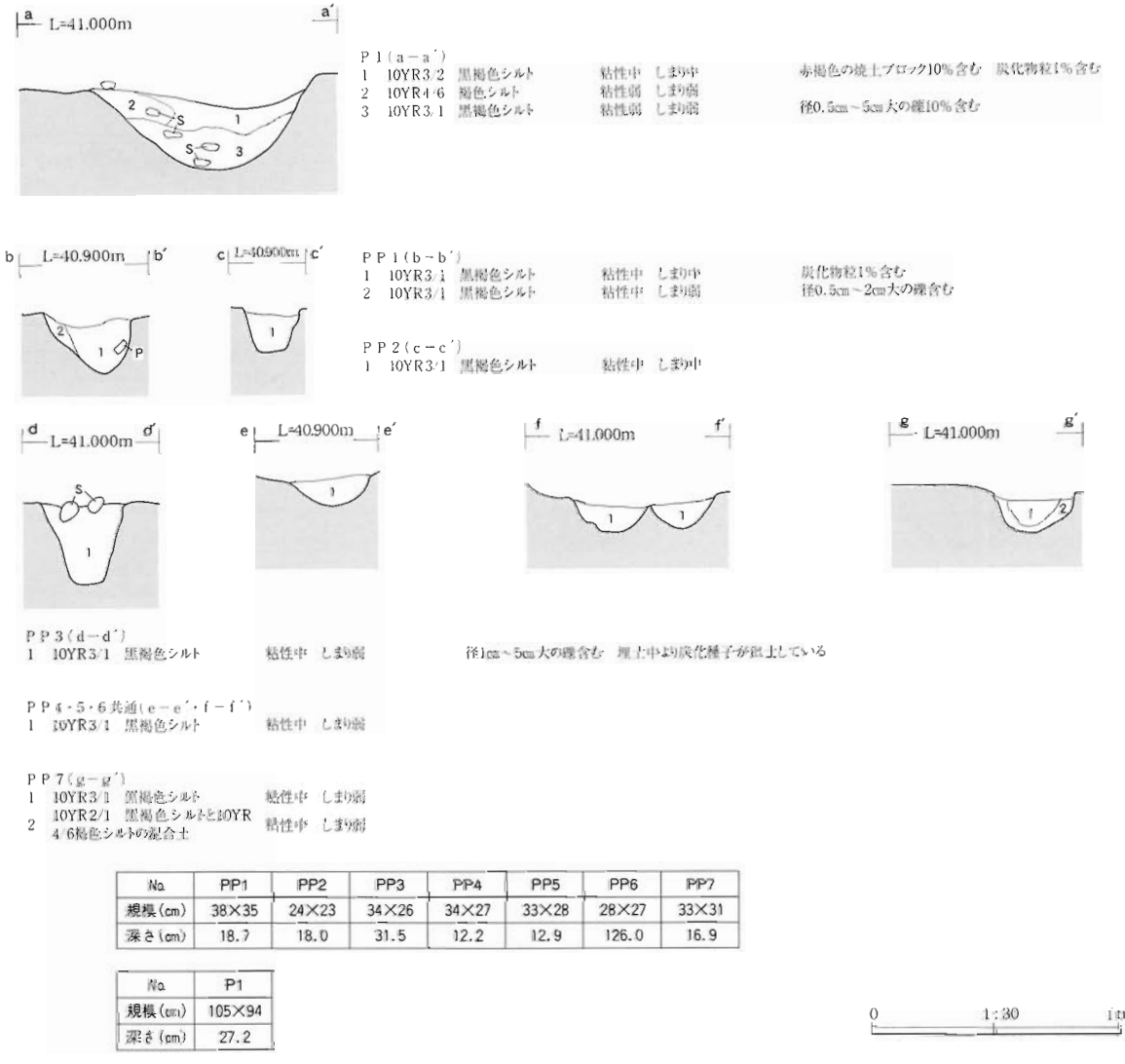


第91図　ＳＸ０１遺物集中区（３）





第92図　ＳＸ０２竪穴状遺構（１）



No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7
規模(cm)	38×35	24×23	34×26	34×27	33×28	28×27	33×31
深さ(cm)	18.7	18.0	31.5	12.2	12.9	126.0	16.9

No.	P1
規模(cm)	105×94
深さ(cm)	27.2

第93図　ＳＸ０２竪穴状遺構（２）

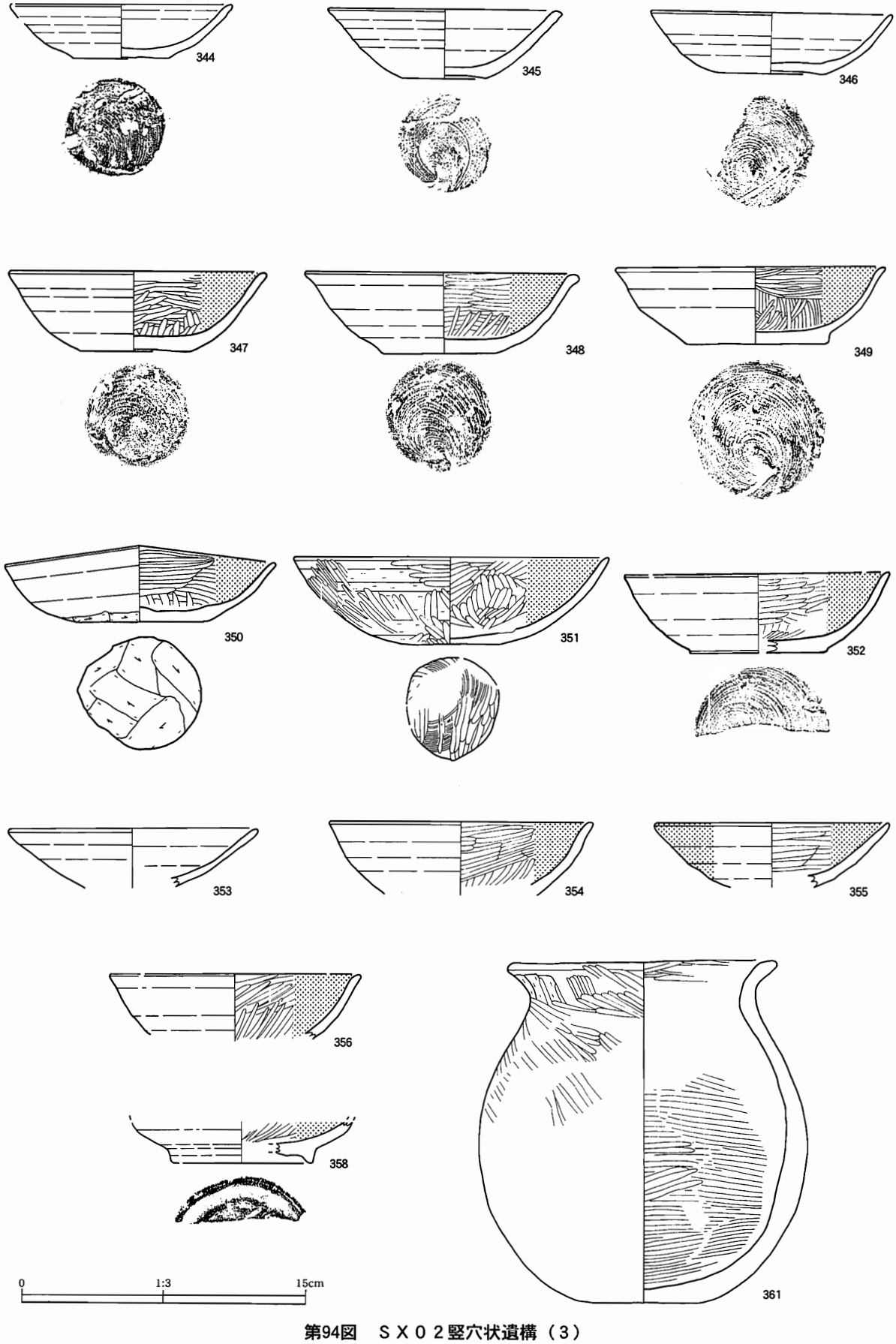
＜カマド＞確認できなかった。

＜柱穴・ピット＞床面から柱穴が７基、ピットが１基検出された。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈し、規模は径24～38cm前後、深さ12～31cmを測る。これらのうちＰＰ３の埋土中から炭化した穀物が出土している。これらの柱穴は住居内の柱穴を構成するものと推定される。Ｐ１は、遺構の北東隅から検出された。平面形は不整な円形を呈し、規模は径105×94cm、深さ20.2cmを測る。

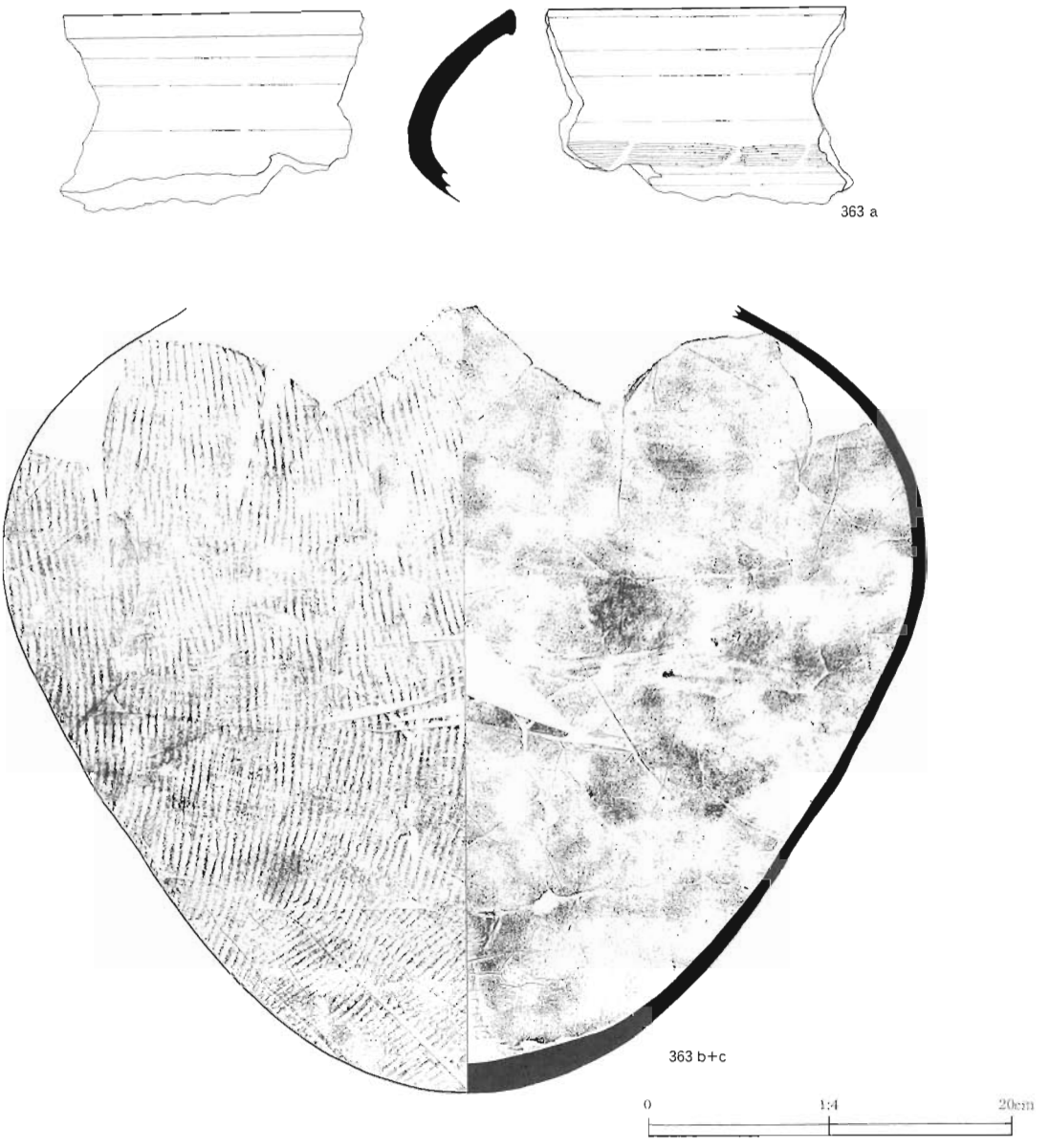
遺物（第94・95図、写真図版61・62）

床から土師器片14点、須恵器片１点、堆積土から土師器片５点が出土している。器種は坏、高台坏、壺、大甕で構成され、製作に際しては361以外の全てがロクロを用いて製作されている。361は床面から出土した土師器壺で、体部球形を呈する。363は床面の中央部からまとまって出土した須恵器大甕の破片である。

また、床面よりソバ、ヒエ、アワ、イネ、オオムギ、コムギ、マメ科、シソ属、ブドウ科、ブナ科コナラ属（ドングリ）などの炭化種子（分析・鑑定の頁を参照）が出土した。うち、ブナ科コナラ属は堅果から出た状態で出土している。そのほか鉄滓が１点出土している。出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属



第94図　ＳＸ０２竪穴状遺構（３）



第95図　ＳＸ０２竪穴状遺構（４）

するものと推察される。

ＳＸ０３竪穴状遺構

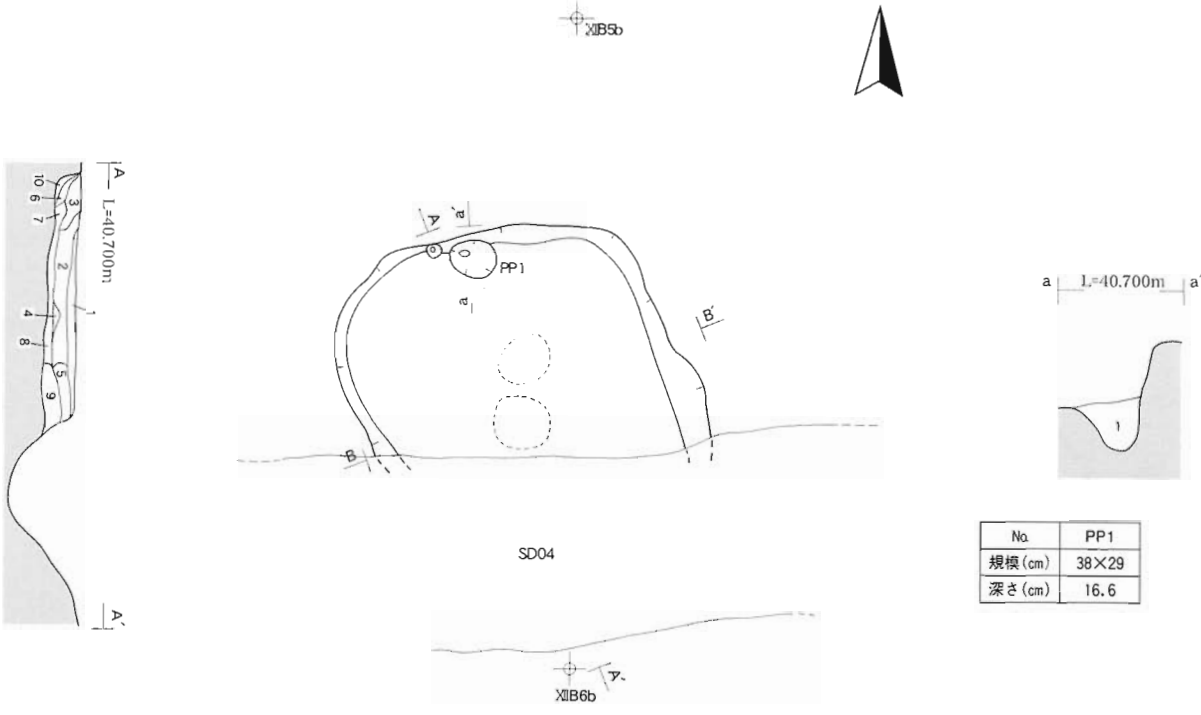
遺構（第96図、写真図版29）

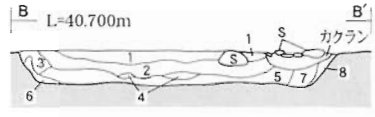
＜位置・重複関係＞ＸⅡＢ５グリッドに位置している。ＳＤ04溝跡と重複してこれに切られており、南側は消失している。

＜規模・平面形＞東辺－1.67m、西辺－1.2m、北辺2.28mを測る。南辺が失われており、詳細は不明であるが、本来は隅丸方形を呈していたものと推定される。東辺、西辺は残存値である。

＜埋土＞10層からなり、褐色シルト粒を含む黒褐色シルトを中心として構成される。

＜壁＞残存値は18～26cmである。





埋土断面(A－A'・B－B')

1	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	炭化物片1%含む
2	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	径1cm大の礫含む5%含む
3	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR4/6褐色シルト粒2%含む
4	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR4/4褐色の砂ブロック状に2%含む
5	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR4/4褐色シルト粒1%含む　炭化物粒1%未満含む
6	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR4/4褐色シルト粒3%含む
7	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性弱	しまり中	径0.5～1cm大の礫5%含む
8	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR4/4褐色シルト粒1%未満含む　径0.5cm大の礫2%含む
9	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒1%未満含む　炭化物粒1%未満含む
10	10YR3/4	暗褐色やや砂質シルト	粘性弱	しまり中	

P1(a－a')

1	10YR2/3黒褐色砂質シルトと 10YR4/4褐色の砂の混合土	粘性弱	しまりやや疎	径1cm～2cmの礫を3%含む

第96図　ＳＸ０３竪穴状遺構

＜床面＞ほぼ平坦で堅くしまるが、貼り床は確認されなかった。一部中央部にごく浅い窪みを持つ。

＜柱穴・ピット＞北壁際の床面から柱穴が１基検出された。平面形は円形を呈しており、規模は径38×29cm、深さ16.6cmを測る。

遺物

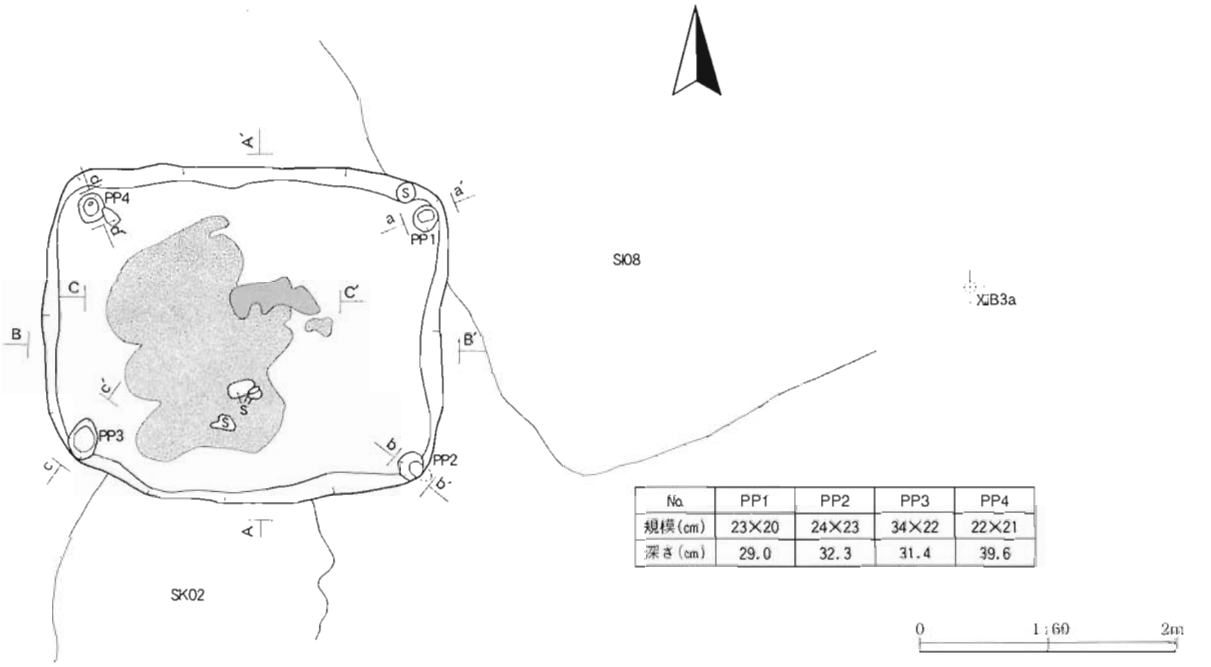
遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

ＳＸ０４竪穴状遺構

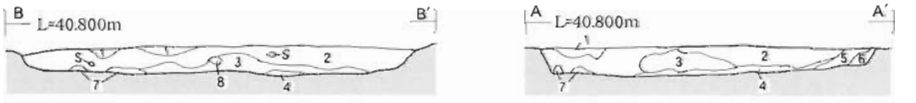
遺構（第97図、写真図版30）

＜位置・重複関係＞ＸⅡＡ２ｉグリッドに位置する。検出はⅣ層で黒褐色のプランを確認した。ＳＩ08住居跡、ＳＫ02土坑と重複しており、これらを切る。

＜規模・平面形＞東辺2.15m、西辺2.24m、北辺2.83m、南辺2.8mの隅丸方形を呈する。



No.	PP1	PP2	PP3	PP4
規模(cm)	23×20	24×23	34×22	22×21
深さ(cm)	29.0	32.3	31.4	39.6



埋土断面(A－A'・B－B')

1	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性中 しまり密		焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
2	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり中		10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒2%含む 焼土粒・炭化物粒各1%含む
3	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性中 しまり中		10YR4/4褐色シルトブロック2%含む 焼土粒・炭化物粒各1%含む
4	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり中		10YR5/8黄褐色砂質シルト斑状3%含む
5	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性中 しまり中		10YR5/8黄褐色シルト粒2%含む 炭化物粒1%未満含む
6	10YR4/4 褐色やや砂質シルト	粘性中 しまり中		10YR3/4暗褐色シルトブロック含む
7	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性中 しまり中		10YR4/6褐色砂質シルトブロック5%含む
8	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性中 しまり中		10YR2/3黒褐色シルト斑状5%未満含む

PP1(a－a')

1	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性中 しまり中	
2	10YR3/3 暗褐色シルトと10YR4/6褐色砂質シルトの混合土	粘性やや弱 しまり中	
3	10YR4/6 褐色砂質シルト	粘性弱 しまり中	10YR3/4暗褐色シルト斑状5%含む

PP2(b－b')

1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性やや弱 しまりやや密(柱痕)	10YR4/6褐色砂質シルトブロック3%含む
2	10YR4/4 褐色砂質シルト	粘性弱 しまりやや密	10YR3/4暗褐色シルト斑状5%含む

PP3(c－c')

1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり中(柱痕)	
2	10YR4/6 褐色砂質シルト	粘性弱 しまり密	10YR3/4暗褐色シルト斑状3%含む

PP4(d－d')

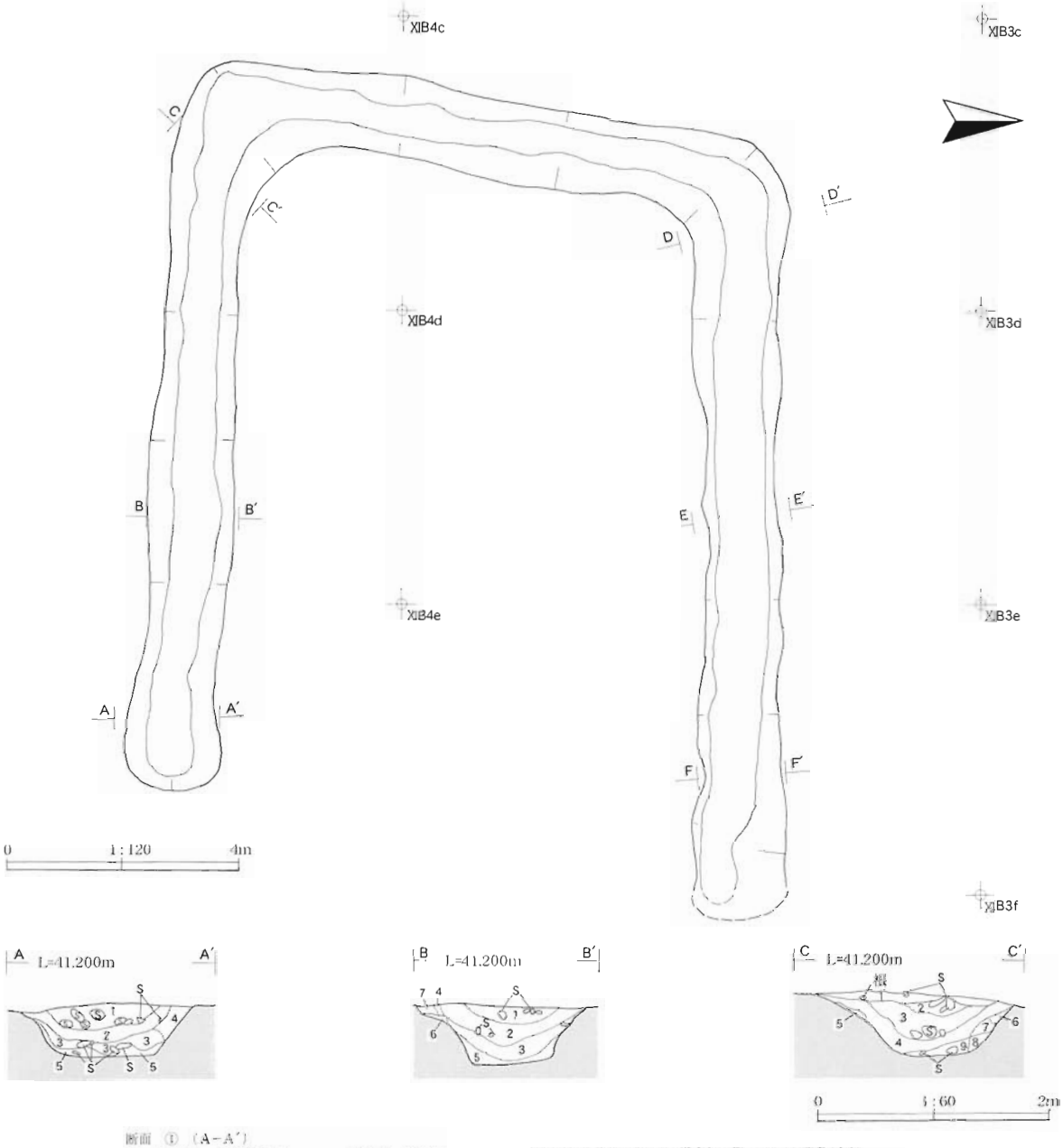
1	10YR2/1 黒色シルト(柱痕)	粘性中 しまり中	
2	10YR3/3暗褐色シルトと10YR4/6褐色砂質シルトの混合土	粘性弱 しまり中	

焼土断面

1	3YR5/3 明赤褐色の焼土	粘性弱 しまり中	10YR4/6褐色シルト斑状3%含む 炭化物粒1%含む
2	10YR4/6 褐色砂質シルト	粘性弱 しまり中	径1～3cm大の炭化物片を大量に含む
3	10YR4/6 褐色砂質シルト	粘性弱 しまり中	焼土の流出分

0 1:30 1m

第97図　ＳＸ０４竪穴状遺構



断面 ① （A－A′）

1	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中 しまり中	焼土粒・炭化物片各1%未満含む 径5～10cmの礫多く含む
2	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒1%未満含む 炭化物粒1%未満含む
3	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒2%含む 径5～10cmの礫多く含む
4	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性強 しまり中	10YR5/8黄褐色砂質シルト斑状3%含む

断面 ② （B－B′）

1	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中 しまり中	灰白色粒3%含む 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む 径5～10cmの礫多く含む
2	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中 しまり中	灰白色粒2%含む 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
3	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック2%含む
4	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR5/8黄褐色砂質シルト斑状5%含む 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
5	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR5/8黄褐色砂質シルト斑状3%含む
6	10YR5/8	黄褐色砂質シルト	粘性弱 しまり中	10YR3/4暗褐色シルト斑状15%含む(地山の崩落部分か?)
7	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中 しまり中	炭化物粒1%未満含む

断面 ③ （C－C′）

1	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性中 しまり中	灰白色粒5%含む 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む 小礫多い
2	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中 しまり密	灰白色粒3%含む 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む 径5～10cmの礫多く含む
3	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中 しまり密	灰白色粒1%含む 焼土粒1%未満含む 炭化物片2%含む 大型の礫多く含む

第98図　ＳＤ０１方形周溝（１）

<埋土>７層からなり、黄褐色シルト粒を含む暗褐色シルトを主体として構成される。
<壁>残存値は11～18cmである。
<床面>ほぼ平坦で硬くしまる。中央部やや西寄りには、不整形を呈する移地性の焼土が形成され、炭化物の散乱が認められる。焼土の範囲は径1.96×1.25m、厚さ２cmを測る。貼り床は確認されなかった。
<柱穴・ピット>住居の四隅から計４基の柱穴が検出された。柱穴の平面形は円形または楕円形を呈しており、規模は径22～34cm前後、深さ29～39cm前後を測る。これらの柱穴は配列からみて住居の主柱穴を構成するものと推定される。

遺物

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

３．方形周溝・溝跡

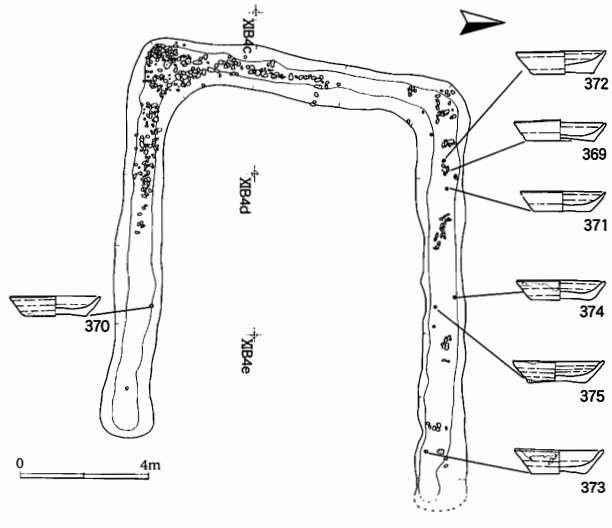
ＳＤ０１方形周溝

遺構（第98～100図、写真図版31）

<位置・検出状況>調査区北東部、ＸＩＢ３ｃ～４ｅグリッドに位置する。検出面はＶ層で、コの字形に湾曲する暗褐色の溝状プランとして確認した。ＳＩ03住居跡、ＳＩ16住居跡と重複関係にあり、これらを切る。
<規模・形状>平面形は東側に開いたコの字形を呈する。規模は南北約11m、東西約15m、溝幅は1.2～1.6cm前後、深さ45～60cm前後を測る。断面形は逆台形、もしくは鉢型を呈する。底面はⅥ層の砂礫面でほぼ平坦であるが、北東部は後世の攪乱を受けて著しい凹凸を持つ。
<埋土>３層に大別される。灰白色粒、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成され、径３～10cm大の礫を多く含む。南西～西側底面上10～23cmのところで径５～10cm大の礫が大量に出土した。これらの礫は出土状況から埋没が開始されて後、意図的に遺構内に投棄されたものと考えられる。

遺物（第101・103図、写真図版63）

全て堆積土中からの出土である。須恵器片１点、かわらけ25点、常滑焼の広口壺・甕片３点が出土している。かわらけの製作に際してはロクロを使用するもの12点、てづくねによるもの13点である。373～375には油煙が付着し、灯明皿として使用された可能性がある。また、ロクロかわらけには完形で出土したものが７点あるのに対して、手づくねかわらけの完形品は皆無であった。鉄製品としては１点が出土している。435は刀子である。出土遺物から判断して、本遺構は12世紀後半代に属するものと推察される。



第99図　ＳＤ０１方形周溝（２）

断面 ④ （D－D′）

1	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性中 しまりやや密	灰白色粒、ブロック3%含む 焼土粒・炭化物粒各2%含む 小礫多く含む
2	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性やや弱 しまりやや	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む 径5～10cmの礫多く含む
3	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり密	径5～10cmの礫を2層より多く含む

断面 ⑤ （E－E′）

1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR4/6褐色シルト斑状2%含む 礫多く含む
2	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性中 しまり密	灰白色粒1%未満含む 焼土粒1%未満含む 礫多く含む
3	10YR2/2 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
4	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性中 しまり中	
5	10YR3/4暗褐色シルトと10YR4/6褐色砂質シルトの混合土	粘性弱 しまり中	

断面 ⑥ （F－F′）

1	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性中 しまり中	灰白色粒1%未満含む 焼土粒・炭化物粒1%未満含む
2	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり中	10YR4/6褐色シルト粒2%含む
3	10YR2/1 黒色シルト	粘性中 しまり中	10YR5/8黄褐色砂質シルトブロック5%含む 底面付近に径10cm大の礫多く含む

第100図　ＳＤ０１方形周溝（３）

ＳＤ０２方形周溝

遺構（第102図、写真図版32）

＜位置・検出状況＞調査区北部、段丘縁辺のＸＢ10ａグリッド付近に位置する。検出面はⅥ層砂礫面で、黒褐色の溝状プランを確認した。ＳＤ03方形周溝と重複し、これを切る。遺構の一部は攪乱を受けている。

＜規模・形状＞平面形は北側に開いた隅丸のコの字～Ｃ字形を呈している。規模は南北約６ｍ、東西約８ｍ、溝幅は30～55cm前後、深さは10～25cm前後を測り、北側では浅くなって消滅する。断面形は皿状、もしくは浅鉢状を呈する。底面は砂礫である。

＜埋土＞黄褐色の砂礫を含む黒褐色シルトの単層からなる。径１～５cm大の礫が多量に含まれる。

遺物（第103図、写真図版63）

堆積土中より常滑の広口壺片１点、かわらけ１点が出土した。394はロクロ成形の小形かわらけである。出土遺物から、本遺構は12世紀後半代に属するものと推察される。

ＳＤ０３方形周溝

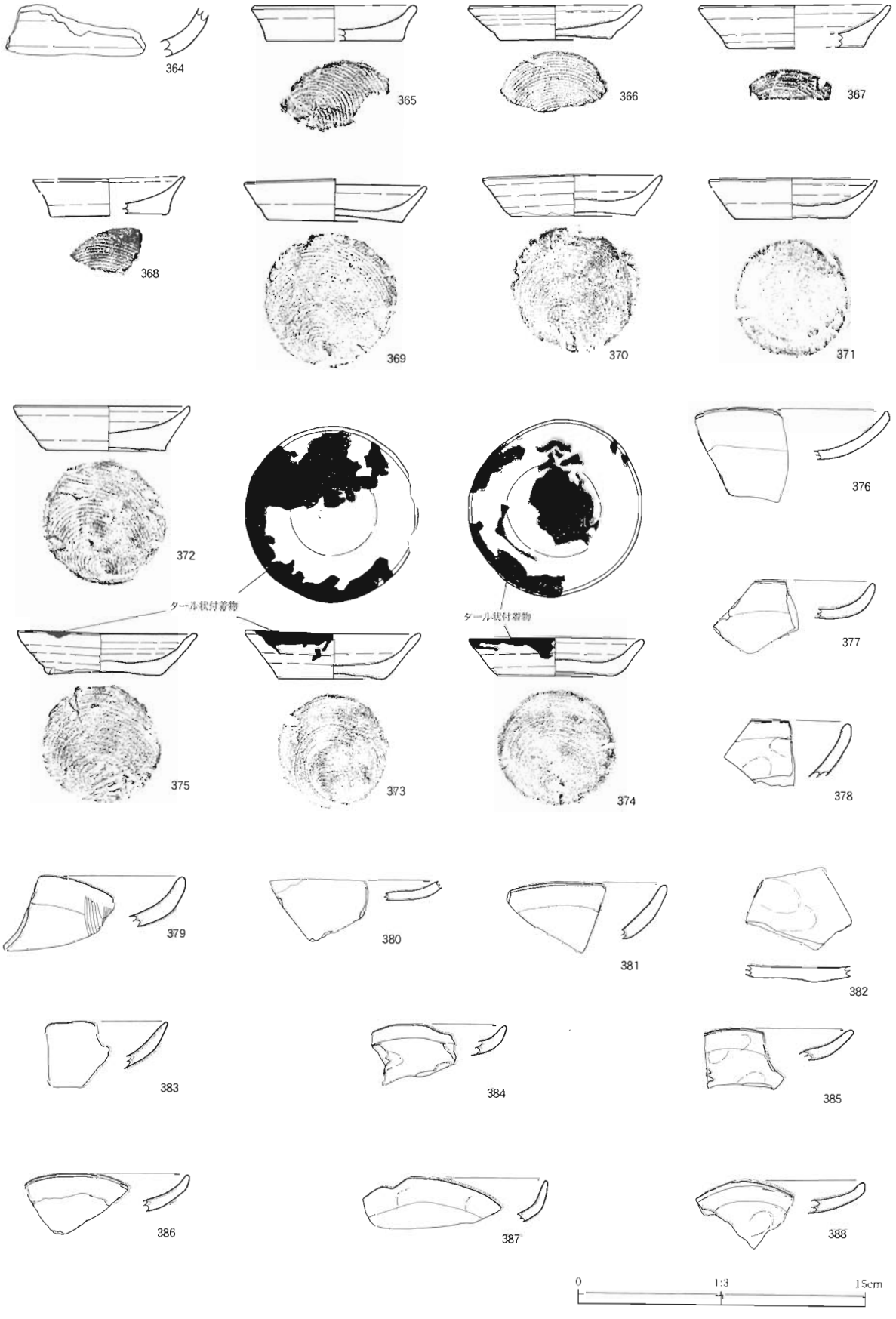
遺構（第102図、写真図版32）

＜位置・検出状況＞調査区北部、段丘縁辺のＸＢ１ａ・１ｂグリッドに位置する。検出面はⅥ層砂礫面で、黒褐色の溝状プランを確認した。２号溝跡と重複してこれに切られている。遺構の一部は攪乱を受けている。

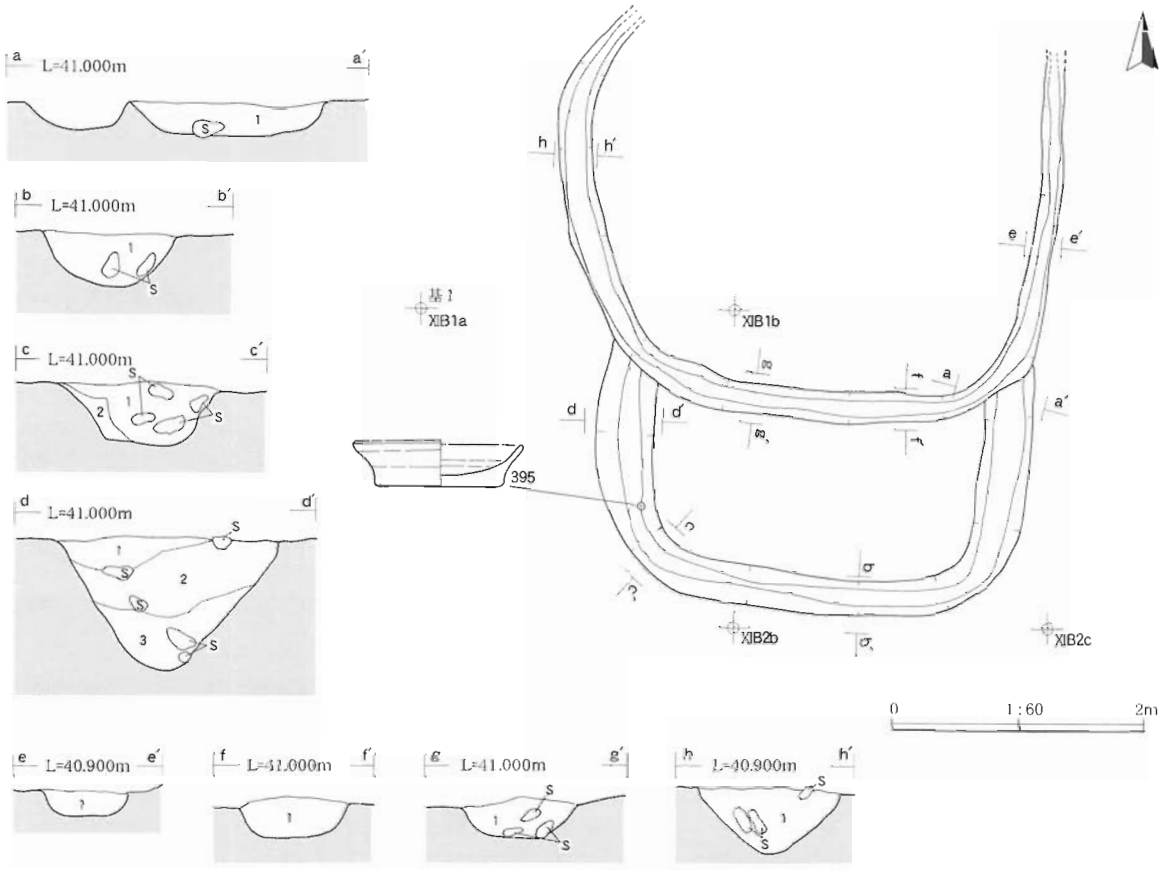
＜規模・形状＞平面形は北側に開いた隅丸のコの字～Ｃ字形を呈していると推定されるが、北側は２号溝に切られているため詳細は不明である。規模は南北約3.5m、東西約6.5m、溝の幅は50～95cm前後、深さは10～55cm前後を測る。西側では深く、東側は浅くなっている。断面形は皿状、もしくは浅鉢状を呈する。底面は砂礫である。

＜埋土＞部位によって異なるが１～３層からなる。焼土、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成され、径１～５cm大の礫を多量に含む。

遺物（第103図・写真図版63）



第101図　ＳＤ０１方形周溝（４）



断面 ②～④共通 （f－f′・g－g′・h－h′）

1	10YR2/1 黒色シルト	粘性中 しまり中	10YR5/8黄褐色砂2%含む 径3～5cm大の礫多く含む	

断面 ④ （e－e′）

1	10YR3/2 黒褐色シルトと 10YR5/8 黄褐色砂の混合土	粘性弱 しまり中	径1～3cm大の礫を含む

断面 ① （a－a′）

1	10YR2/3 黒褐色シルトと10YR 5/8黄褐色砂質シルトの混合土	粘性弱 しまり密	径5～10cmの礫多く含む

断面 ② （b－b′）

1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり密	焼土粒1%未満含む 径1～5cm大の礫多く含む

断面 ③ （c－c′）

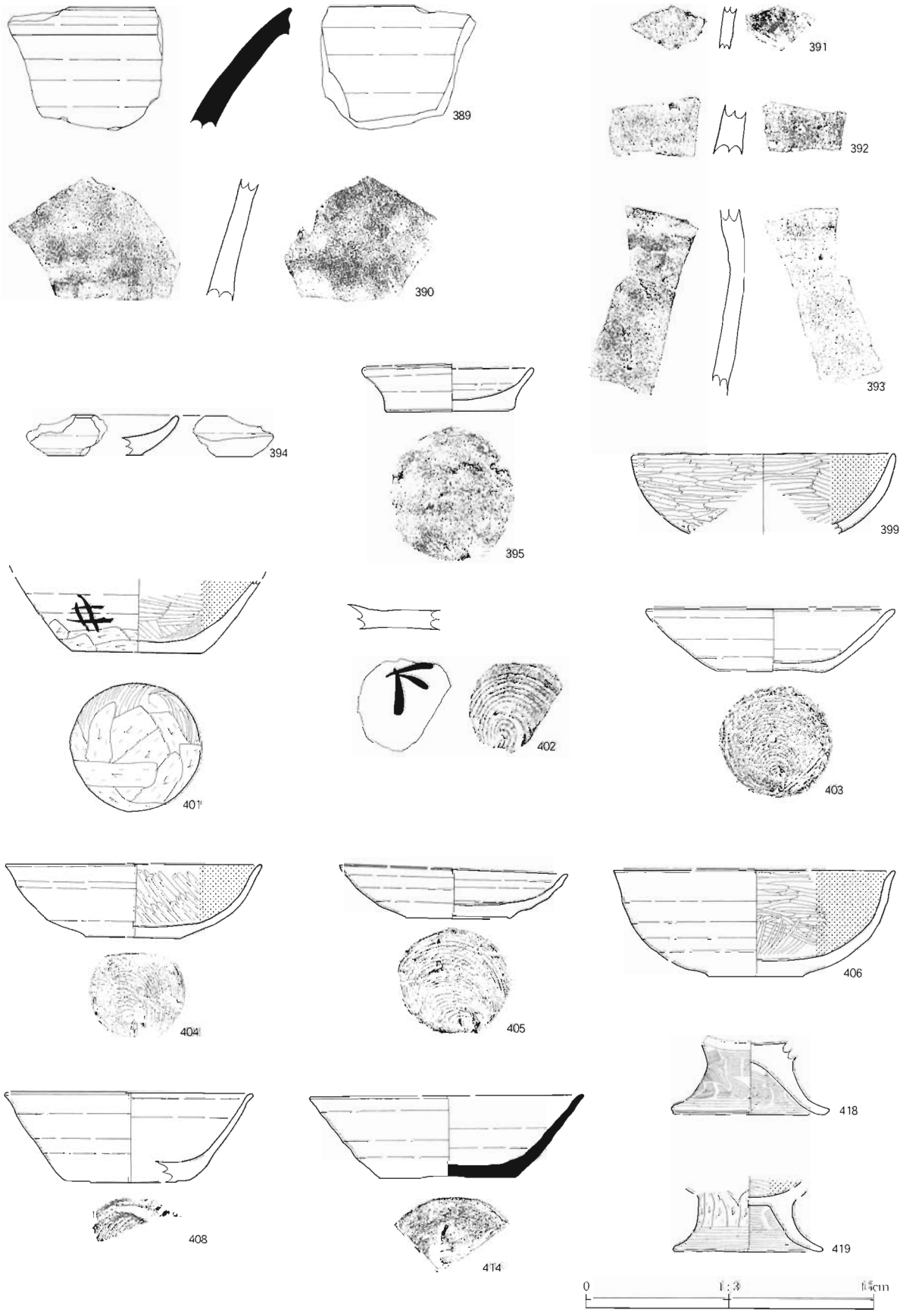
1	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり密	焼土粒1%未満含む 径1～5cm大の礫多く含む
2	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性弱 しまり密	径5～10cmの礫多く含む

断面 ④ （d－d′）

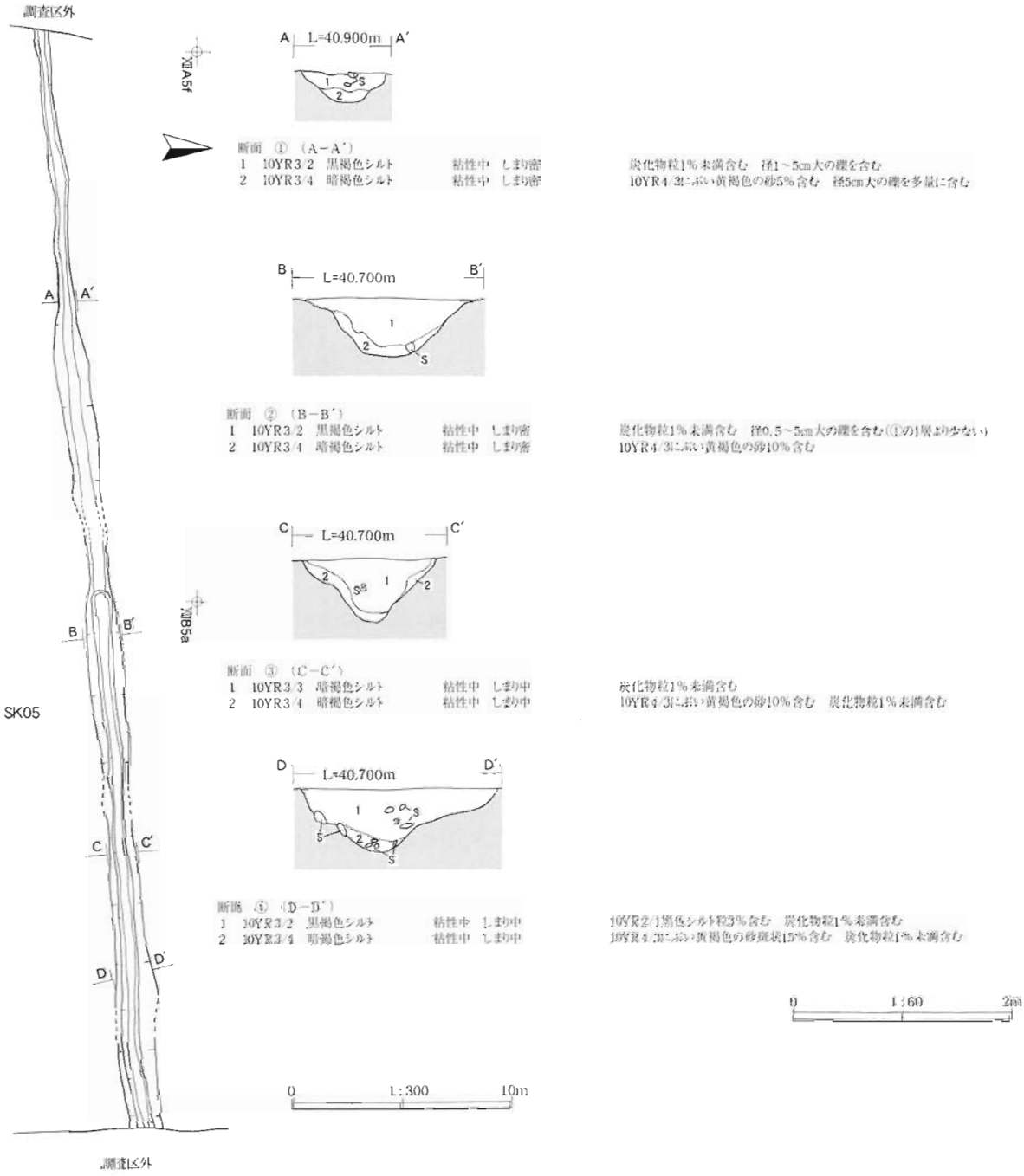
1	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性中 しまりやや密	焼土粒・炭化物粒1%未満
2	10YR2/3 黒褐色シルト	粘性中 しまり密	焼土粒1%未満含む 径1～5cm大の礫多く含む
3	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性弱 しまり密	径5～10cmの礫多く含む

0 1:30 1m

第102図　ＳＤ０２方形周溝・ＳＤ０３方形周溝



第103図　ＳＤ０１～ＳＤ０３方形周溝・遺構外出土遺物（１）



第104図　ＳＤ０４溝跡

堆積土中よりかわらけ１点が出土した。395はロクロ成形の小形かわらけである。出土遺物から、本遺構は12世紀後半代に属するものと推察される。

ＳＤ０４溝跡

遺構（第104図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞調査区南側ＸⅡＡ５ｆ～ＸⅡＢ５ｅグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の帯状プランとして確認した。遺構は調査区の東西を横断するような形状を呈し、両端部は調査区域外へ延びる。中央部付近でＳＸ03竪穴状遺構と重複し、これを切る。

＜規模・形状＞平面形は直線状に長い溝状を呈する。規模は長さ約50m、溝幅50～150cm前後、深さ８～60cm前後を測る。西側では上部が削平されたものと考えられ、幅が狭く浅い。ほぼ中央の部分で底面が上がり、極端に浅くなっている部分が見られる。断面形は皿状、もしくは浅鉢状を呈する。底面は砂礫である。

＜埋土＞２層からなる。上位は炭化物を含む黒褐色シルト、下位は黄褐色の砂礫を含む暗褐色シルトから構成され、東側では砂礫の量が多い。

遺物

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

（丸山直美・齋藤麻紀子）

４．土坑

ＳＫ０１土坑

遺構（第105図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞　調査区中央部南寄り、ＸⅡＡ３ｈグリッドに位置する。検出面はⅣ層で黒褐色の不整な円形プランとして確認された。

＜規模・形状＞開口部径2.0×1.72m、底部径1.73×1.3mの不整な円形を呈する。断面形は浅鉢状を呈し、深さは最深部で31.1cmを測る。底面は凹凸を持ち、硬く締まる。

＜埋土＞埋土は８層からなり、黒褐色シルトを主体として構成される。下位には黄褐色シルトを含む。

遺物

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

ＳＫ０２土坑

遺構（第105図・写真図版34）

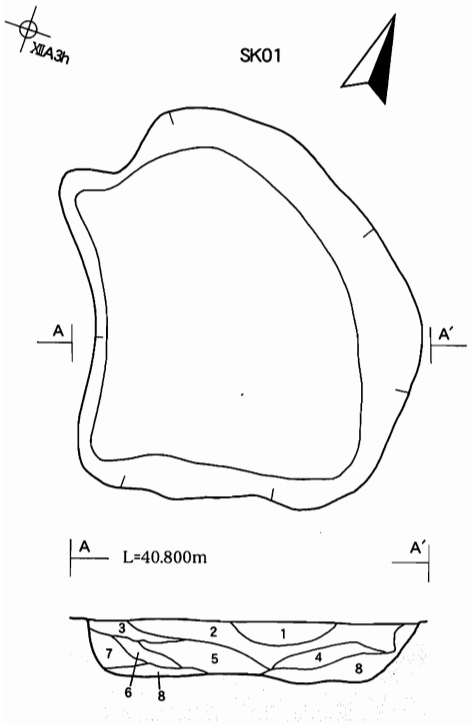
＜位置・検出状況＞調査区中央部南寄り、ＸⅡＡ３ｉグリッドに位置する。検出面はⅣ層で、28号住居跡を精査中に住居跡に切られるような形で暗褐色の不整な円形プランを検出した。

＜規模・形状＞開口部径（2.33）×2.13m、底部径1.22m×96cmの不整な円形を呈する。断面形は浅鉢状を呈し、深さは最深部で47.3cmを測る。底面は丸みを帯び大型の礫が多く見られる。

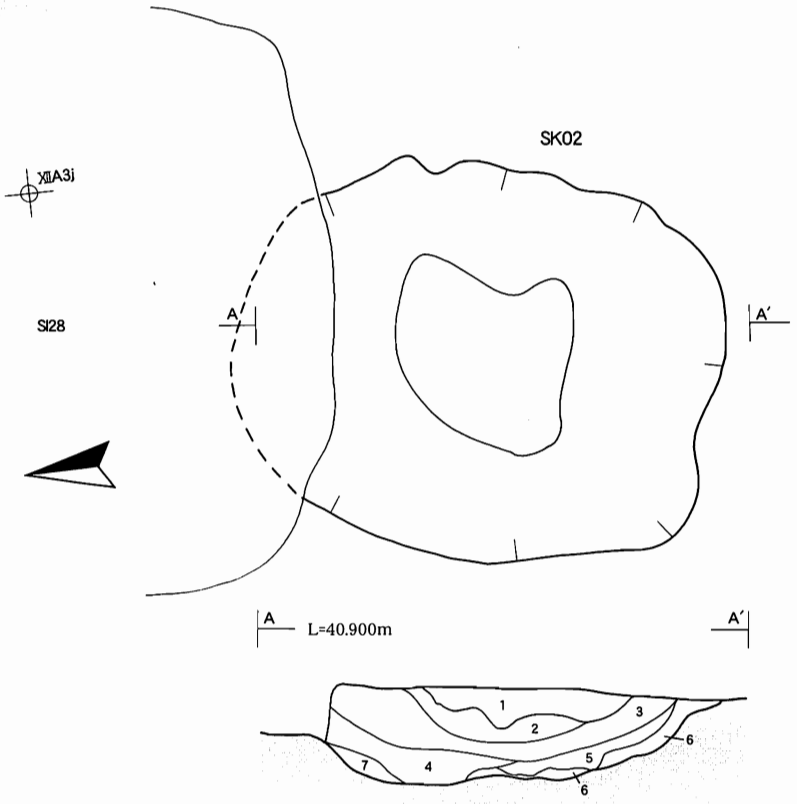
＜埋土＞７層からなり、灰白色粒、炭化物を含む暗褐色シルトを主体として構成される。下位には黄褐色砂質シルトを含む。

遺物

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。



1	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	
2	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	
3	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR5/6黄褐色シルト粒1%含む
4	10YR5/6	黄褐色シルト	粘性中	しまり中	
5	10YR5/6	黄褐色シルトと10YR 3/2黒褐色シルトの混合土	粘性やや強	しまりやや密	
6	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中	しまり中	
7	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中	しまり中	10YR5/6黄褐色シルト粒1%含む
8	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	粘性強	しまり密	



1	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性弱	しまり密	10YR4/6褐色砂質シルトブロック10%含む　灰白色粒5%含む 焼土粒・炭化物粒各1%未満含む
2	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中	しまり密	灰白色粒3%含む　焼土粒1%未満含む　径0.5～2cm大の礫多く含む
3	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	灰白色粒2%含む
4	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性強	しまり中	灰白色粒1%未満含む
5	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性強	しまり中	10YR3/4暗褐色シルトブロック2%含む　灰白色粒1%未満含む
6	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性強	しまり中	10YR2/3黒褐色シルト斑状5%含む
7	10YR4/6	褐色砂質シルト	粘性弱	しまり中	10YR3/4暗褐色シルト斑状10%含む　灰白色粒1%未満含む

0　1:40　2m

第105図　ＳＫ０１土坑・ＳＫ０２土坑

ＳＫ０３土坑

遺構（第106図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞調査区中央部ＸＩＡ９ｊグリッドに位置する。検出面はⅣ層である。ＳＩ11住居跡を精査中に住居跡と重なる形でプランを確認した。ＳＩ11住居跡と重複しておりこれを切る。検出の時点ですでに住居の埋土が除去された状態であったため、土坑の埋土や壁も消失しており、底面と上端の一部が確認されたのみである。

＜規模・形状＞平面形は楕円形を呈し、底部径は97×42㎝、深さは32.2㎝を測り、底面はほぼ平坦である。開口部径、断面形は不明である。

＜埋土＞埋土の状態は確認できなかった。

遺物

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

ＳＫ０４土坑

遺構（第106図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞　調査区中央部東寄りＸＩＢ10ｃグリッドに位置する。検出面はⅣ層で、ＳＩ01住居跡のカマド西側で黒褐色の円形プランを確認した。ＳＩ01住居跡、ＳＩ24住居跡と重複し、これらを切る。

＜規模・形状＞平面形は円形を呈する。開口部径98×96㎝、底部径は61×58㎝、深さは最深部で17.5㎝を測る。断面形は浅鉢状を呈する。底面は凹凸があり、堅く締まる。

＜埋土＞４層からなり、灰白色粒、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

遺物

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

ＳＫ０５土坑

遺構（第106図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞　調査区中央部東寄りＸＩＢ８ｃグリッドに位置する。検出はⅣ層で、黒褐色の不整な楕円形のプランを確認した。

＜規模・形状＞平面形は楕円形を呈する。開口部径1.5×1.15m、底部径は1.33m×93㎝、深さは最深部で9.7㎝を測る。断面形は浅い皿状を呈する。底面は平坦で硬く締まる。

＜埋土＞褐色シルトを含む黒褐色シルトの単層である。

遺物

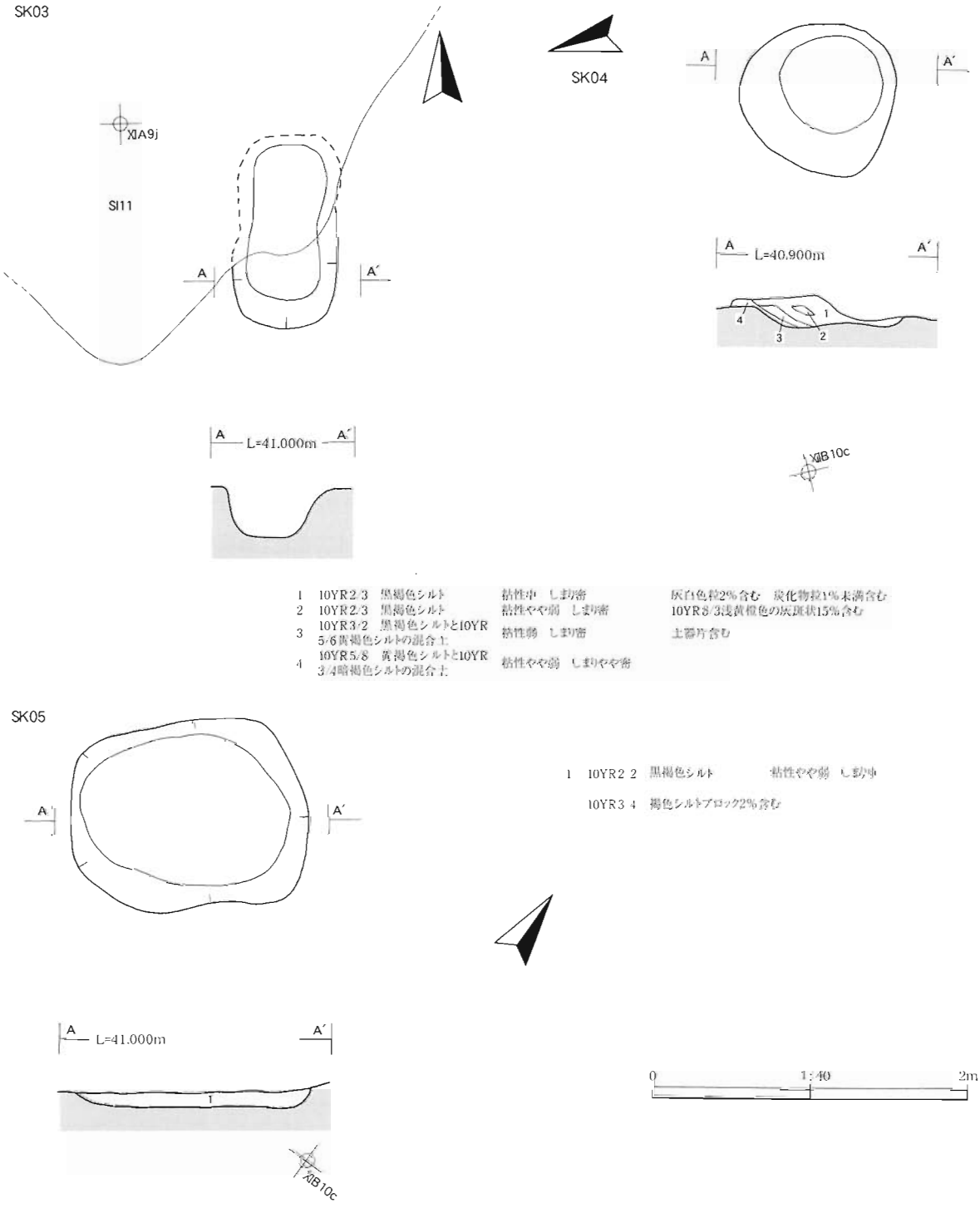
遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

ＳＫ０６土坑

遺構（第107図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞調査区北東端のＸＩＢ２ｆグリッドに位置する。検出面はⅣ層で、黒褐色の円形プランとして確認した。西側の大部分は試掘時のトレンチによって掘削され消失している。ＳＩ16住居跡・ＳＤ01方形周溝と重複しており、これらを切る。

＜規模・形状＞平面形は不整な円形を呈する。開口部径1.09×1.05m、底部径は80×78㎝、深さは最深部で



第106図　ＳＫ０３～ＳＫ０５土坑

36cmを測る。断面形は袋状を呈するものと推定される。底面は丸みを帯び硬く締まる。
＜埋土＞７層からなり、焼土、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成される。下部には黄褐色シルトが含まれる。
遺物
　遺物は出土していない。

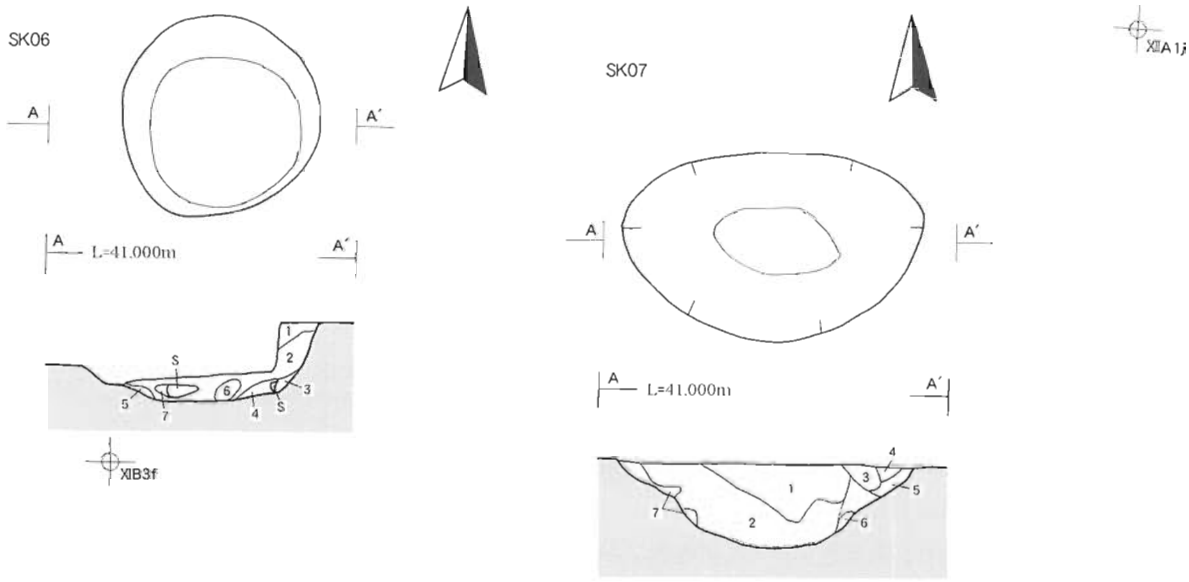
ＳＫ０７土坑
遺構（第107図、写真図版35）
＜位置・検出状況＞調査区中央部やや南寄りのＸⅡＡ１ｉグリッドに位置する。検出面はⅣ層で、黒褐色の不整な楕円形プランとして確認した。
＜規模・形状＞平面形は不整な楕円形を呈する。開口部径1.54ｍ×98cm、底部径は64×34cm、深さは最深部で52.8cmを測る。断面形は浅鉢状を呈する。
＜埋土＞７層からなり、黒褐色シルトと暗褐色シルトを主体として構成され、部分的に黄褐色シルトが混じる。
遺物
　遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

ＳＫ０８土坑
遺構（第107図、写真図版35）
＜位置・検出状況＞調査区西側南寄りの一段高い部分、ＸⅡＡ３ａグリッドに位置する。検出面はＶ層で、暗褐色の溝状プランとして確認した。
＜規模・形状＞平面形は溝状を呈する。開口部径2.73ｍ×37cm、底部径は2.51ｍ×16cm、深さは最深部で73.4cmを測る。長軸の方向はＮ―47°―Ｅ、断面形は壁が垂直気味に立ち上がる逆台形を呈する。短軸の断面形は底部から開口部に向かってやや外傾するＶ字状を呈する。
＜埋土＞９層からなり、黒褐色シルトの混じった黄褐色シルトを主体として構成されている。
遺物
　遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

５．Ａ・Ｂ区小柱穴群

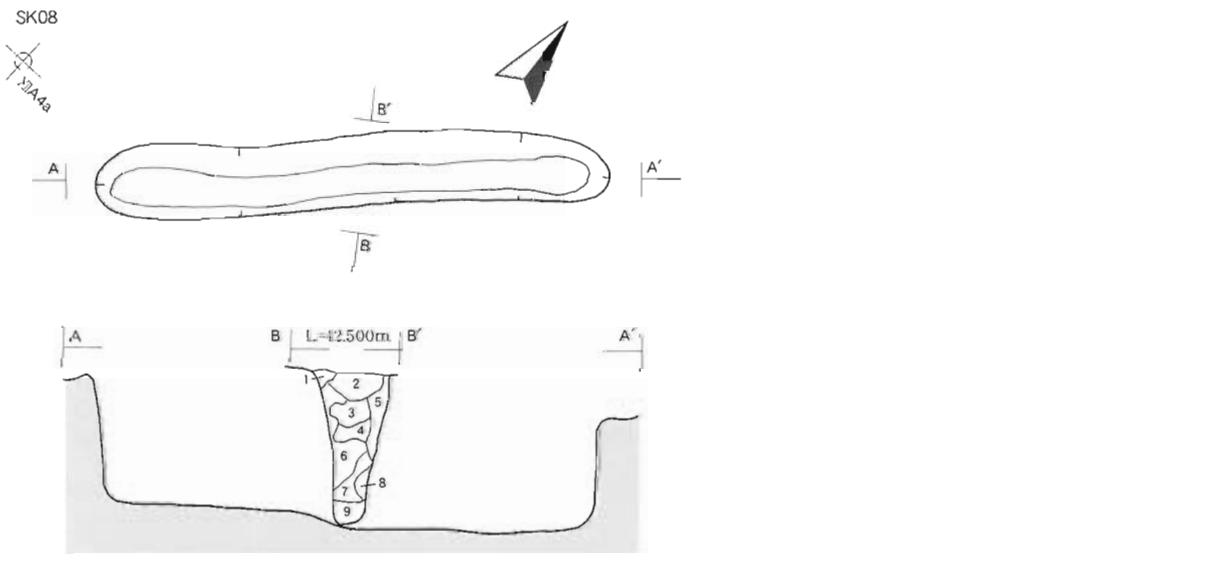
　調査区北側から計29基の柱穴状ピットを検出した。個々の柱穴状ピットの計測値・位置関係については、第２表と第113図の遺構配置図を参照されたい。柱穴状ピットの平面形は、ほぼ円形を基調とする。検出された柱穴では掘建柱建物跡を構成する柱穴配列を想定できなかった。規模は一部に例外が見られるが、おしなべて50cm以下と小規模である。

（齋藤麻紀子）



1	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性弱　しまり密	10YR5/8黄褐色シルト粒3%含む
2	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	焼土粒2%含む　炭化物粒1%含む
3	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	10YR5/8黄褐色シルトブロック5%含む
4	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性やや弱　しまりやや	10YR5/8黄褐色シルト粒1%含む　焼土粒1%含む
5	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/6黄褐色シルト粒3%含む　焼土粒1%未満含む
6	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/6黄褐色シルトブロック8%含む　焼土粒1%含む
7	10YR5/8	黄褐色シルト	粘性中　しまりやや疎	10YR2/3黒褐色シルト斑状5%含む

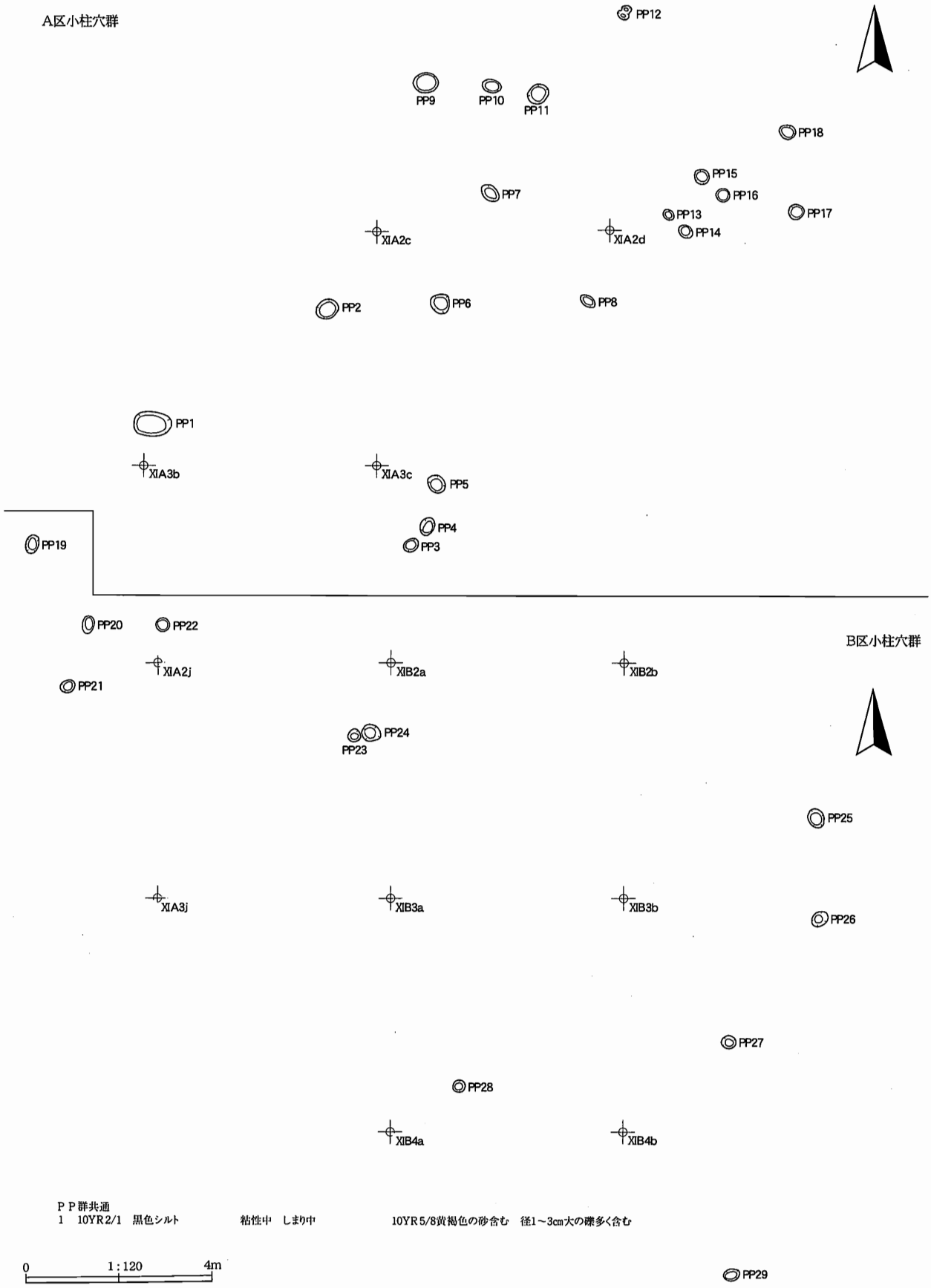
1	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/6黄褐色シルト粒3%含む　灰白色粒1%未満含む
2	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR2/1黒色シルト斑状10%含む　10YR5/6黄褐色シルト粒2%含む
3	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	粘性中　しまり密	
4	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性弱　しまり密	10YR5/6黄褐色シルト粒1%含む
5	10YR4/6	褐色シルト	粘性やや弱　しまり中	10YR2/2黒褐色シルト粒1%含む
6	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	
7	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/8黄褐色シルト斑状5%含む



1	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR5/4にぶい黄褐色シルト斑状10%含む
2	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	粘性強　しまり中	10YR5/8黄褐色シルトブロック5%含む
3	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	粘性強　しまり中	10YR5/8黄褐色シルト粒5%含む
4	10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト		粘性強　しまり中	10YR3/1黒褐色シルト斑状15%含む
5	10YR5/6	黄褐色粘土質シルト	粘性強　しまり中	10YR3/2黒褐色シルト斑状2%含む
6	10YR5/8	黄褐色粘土質シルト	粘性強　しまり中	10YR3/2黒褐色シルト斑状5%含む
7	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR3/2黒褐色シルトブロック10%含む
8	10YR5/8	黄褐色シルト	粘性中　しまり中	10YR3/2黒褐色シルト粒1%含む
9	10YR5/8	黄褐色やや砂質シルト	粘性中　しまり弱	

0　L=40r　2m

第107図　ＳＫ０６～ＳＫ０８土坑

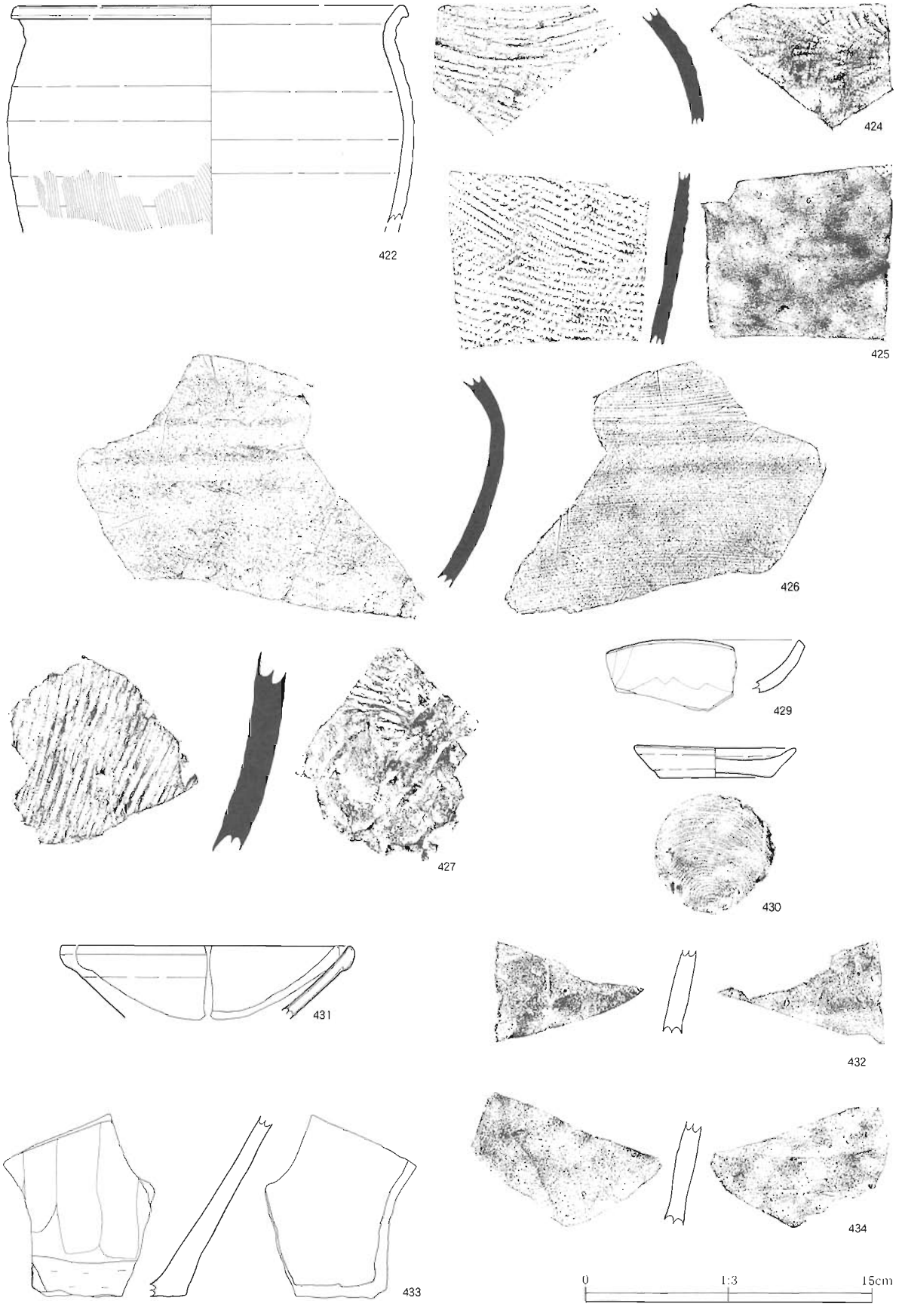


ＰＰ群共通
1　10YR2/1　黒色シルト　　粘性中　しまり中　　10YR5/8黄褐色の砂含む　径1～3cm大の礫多く含む

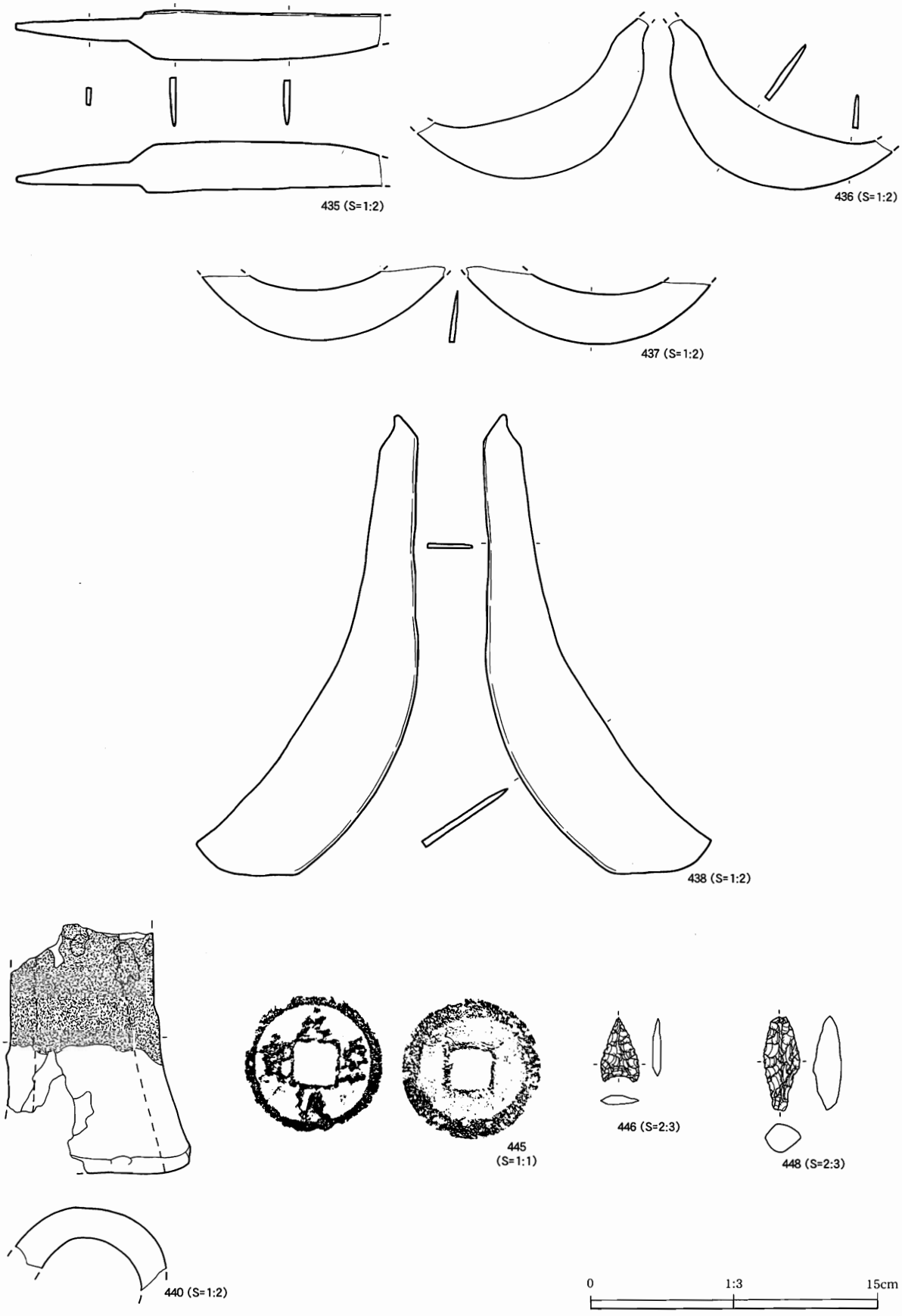
第108図　Ａ・Ｂ区小柱穴群

第２表　Ａ・Ｂ区小柱穴群計測値一覧

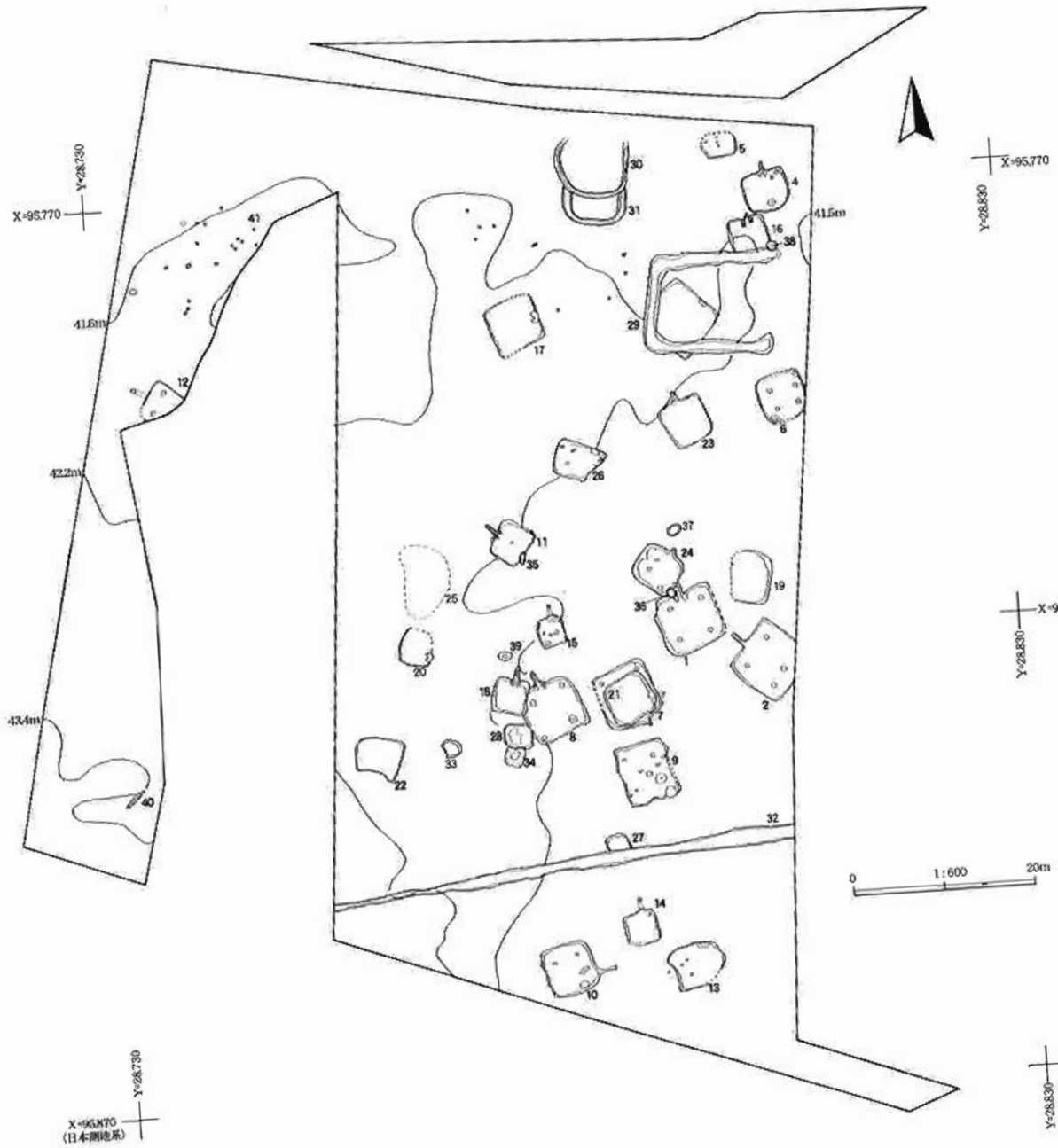
No	グリッド名	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
ＰＰ１	ＸＩＡ２ｂ	80	49	51.9
ＰＰ２	ＸＩＡ２ｂ	47	40	31.8
ＰＰ３	ＸＩＡ３ｃ	32	28	25.5
ＰＰ４	ＸＩＡ３ｃ	41	30	31.8
ＰＰ５	ＸＩＡ３ｃ	40	38	35.3
ＰＰ６	ＸＩＡ２ｃ	44	40	32.5
ＰＰ７	ＸＩＡ１ｃ	44	28	30.3
ＰＰ８	ＸＩＡ２ｃ	34	20	27.5
ＰＰ９	ＸＩＡ１ｃ	54	42	35.4
ＰＰ10	ＸＩＡ１ｃ	40	30	46.3
ＰＰ11	ＸＩＡ１ｃ	46	40	25.0
ＰＰ12	ＸＩＡ１ｄ	32	23	30.9
ＰＰ13	ＸＩＡ１ｄ	26	22	30.1
ＰＰ14	ＸＩＡ２ｄ	32	27	24.6
ＰＰ15	ＸＩＡ１ｄ	34	30	26.8
ＰＰ16	ＸＩＡ１ｄ	30	28	29.5
ＰＰ17	ＸＩＡ１ｄ	35	24	33.5
ＰＰ18	ＸＩＡ１ｄ	32	29	32.7
ＰＰ19	ＸＩＡ１ｉ	39	29	38.4
ＰＰ20	ＸＩＡ１ｉ	40	29	26.3
ＰＰ21	ＸＩＡ２ｉ	31	27	26.3
ＰＰ22	ＸＩＡ１ｊ	33	29	21.3
ＰＰ23	ＸＩＡ２ｊ	33	24	29.9
ＰＰ24	ＸＩＡ２ｊ	41	34	32.3
ＰＰ25	ＸＩＡ２ｂ	40	32	20.4
ＰＰ26	ＸＩＡ３ｂ	38	30	17.9
ＰＰ27	ＸＩＡ３ｂ	32	28	34.5
ＰＰ28	ＸＩＡ３ａ	32	30	25.9
ＰＰ29	ＸＩＡ４ｂ	35	28	28.1



第109図　遺構外出土遺物（２）



第110図　遺構外出土遺物（3）



1 ＳＩ０１竪穴住居跡
2 ＳＩ０２竪穴住居跡
3 ＳＩ０３竪穴住居跡
4 ＳＩ０４竪穴住居跡
5 ＳＩ０５竪穴住居跡
6 ＳＩ０６竪穴住居跡
7 ＳＩ０７竪穴住居跡
8 ＳＩ０８竪穴住居跡
9 ＳＩ０９竪穴住居跡
10 ＳＩ１０竪穴住居跡
11 ＳＩ１１竪穴住居跡
12 ＳＩ１２竪穴住居跡
13 ＳＩ１３竪穴住居跡
14 ＳＩ１４竪穴住居跡
15 ＳＩ１５竪穴住居跡
16 ＳＩ１６竪穴住居跡
17 ＳＩ１７竪穴住居跡
18 ＳＩ１８竪穴住居跡
19 ＳＩ１９竪穴住居跡
20 ＳＩ２０竪穴住居跡
21 ＳＩ２１竪穴住居跡
22 ＳＩ２２竪穴住居跡
23 ＳＩ２３竪穴住居跡
24 ＳＩ２４竪穴住居跡
25 ＳＸ０１遺物集中区
26 ＳＸ０２竪穴状遺構
27 ＳＸ０３竪穴状遺構
28 ＳＸ０４竪穴状遺構
29 ＳＤ０１方形周溝
30 ＳＤ０２方形周溝
31 ＳＤ０３方形周溝
32 ＳＤ０４溝跡
33 ＳＫ０１土坑
34 ＳＫ０２土坑
35 ＳＫ０３土坑
36 ＳＫ０４土坑
37 ＳＫ０５土坑
38 ＳＫ０６土坑
39 ＳＫ０７土坑
40 ＳＫ０８土坑
41 柱穴状ピット群

第111図　遺構配置図

Ⅴ．遺構外の出土遺物

1．遺構外の出土遺物

・土師器（第103・109図、写真図版63・64）

27点が出土している。器種および内訳は坏片18点、高台付坏片３点、高坏片３点、甕片３点である。396～413は土師器坏である。399は製作に際してロクロを使用しないもので、底部を欠き全体の形状は不明である。体部は内湾しながら口唇部に至る。内外面共にミガキ調整され、内面のみ黒色処理される。401は外面ロクロナデ、内面ミガキ＋黒色処理される。体部下半に墨書「井」を持つ。底部～底部縁辺は回転イトキリ後、ヘラケズリ再調整される。402は底部破片でロクロによる回転イトキリ痕を持つ。底部外面に墨書「大」を持つ。403～408は全体の器形が判明するもので、底部から直線的に外傾するもの（403・408）、底部から内湾しながら立ち上がるもの（404・405）がある。このうち404・406・407は内面黒色処理される。415～417は高台付坏で、いずれも残存率25％以下の小片である。418～420は高坏の脚部である。421～423は甕である。いずれも残存率20％以下の小片で、全体の器形の判明するものはない。

・須恵器（第103・109図、写真図版64・65）

６点が出土している。器種およびその内訳は坏片１点、甕壺類片１点、大甕片４点である。414は底部から直線的に外傾して立ち上がる。426は甕壺類の破片で外面ロクロナデ＋ケズリ・ハケメ調整、内面カキメ調整される。424・425・427・428は大甕である。外面は格子目タタキ、平行タタキ成形痕、内面は放射状アテ具痕、内面円形無紋アテ具痕を持つものなどがある。

・かわらけ、陶磁器（第109図、写真図版65）

遺構外からは６点が出土している。429は大形のてづくね成形かわらけ、430は小形のロクロ成形かわらけである。431は白磁玉縁碗、432～434は常滑焼の広口壺、甕類の破片である。以上６点はいずれも12世紀後半代に比定されるものである。

・鉄製品（第110図、写真図版65）

遺構外からは４点が出土している。435は刀子、436～438は鎌である。

・羽口、鉄滓（第110図、写真図版66）

羽口は４点が出土している（439～442）。439・440は先端がラッパ状に開き、次第に器道の内径を減じる形状を呈する。441・442は端部の小片で筒状を呈し、439・440とは形状が異なる。これらのことから両者は使用の形態が異なるものである可能性がある。鉄滓は２点出土している（443・444）。いずれも碗形滓である。

・古銭（第110図、写真図版66）

445は北側段丘崖付近から出土した元祐通宝である。

・石器（第110図、写真図版66）

遺構外からは５点が出土している。446～448は石鏃である。449は打製石斧である。450はフレイクである。

第３表　遺物観察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
1	ＳＩ０１床	土師器	坏	90%	10Ｙ Ｒ7/4にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ＋ミガキ〔体〕ミガキ＋ケズリ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ	10.6	3.0	3.5	内面黒色処理
2	ＳＩ０１床	土師器	坏	100%	10Ｙ Ｒ4/3にぶい黄褐	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	12.7	－	7.8	内外面黒色処理
3	ＳＩ０１床	土師器	坏	85%	7.5Ｙ Ｒ6/6橙	〔口〕ヨコナデ＋ミガキ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ	15.8	－	5.6	内面黒色処理
4	ＳＩ０１カマド左袖	土師器	坏	15%	7.5Ｙ Ｒ7/6橙	〔口〕ヨコナデ＋ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理？
5	ＳＩ０１床	土師器	坏	10%以下	10Ｙ Ｒ7/4にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
6	ＳＩ０１床	土師器	坏？	10%以下	10Ｙ Ｒ5/3にぶい黄褐	〔口〕ナデ	〔口〕ナデ	－	－	－	－	内面黒色処理？
7	ＳＩ０１床	土師器	坏	10%以下	2.5Ｙ4/3オリーブ褐	〔口〕ミガキ	〔口〕ミガキ	－	－	－	－	内外面黒色処理
8	ＳＩ０１　１層	土師器	坏	10%以下	2.5Ｙ Ｒ5/3黄褐	〔口〕ヨコナデ＋ミガキ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
9	ＳＩ０１Ｑ４埋土	土師器	高坏？	15%	N3/　暗灰	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
10	ＳＩ０１Ｑ３埋土	土師器	高坏	10%以下	10Ｙ Ｒ7/4にぶい黄橙	〔脚〕ヨコナデ	〔脚〕ヨコナデ	－	－	－	－	
11	ＳＩ０１床	土師器	高坏	30%	10Ｙ Ｒ6/4にぶい黄橙	〔脚〕ヨコナデ＋ケズリ	〔体〕ミガキ〔脚〕ヨコナデ＋ケズリ	－	－	6.5	(3.7)	内面黒色処理
12	ＳＩ０１Ｑ１埋土	土師器	甕	90%	10Ｙ Ｒ6/4にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ＋ミガキ？	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	16.9	7.1	31.5	
13	ＳＩ０１カマド左袖	土師器	甕	80%	5Ｙ Ｒ5/6明赤褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	16.4	－	(21.4)	口縁部内面炭化物付着
14	ＳＩ０１床	土師器	甕	30%	5Ｙ Ｒ6/4にぶい橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ・ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
15	ＳＩ０１床	土師器	甕	10%以下	10Ｙ Ｒ4/2灰黄褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
16	ＳＩ０１Ｑ３埋土	土師器	甕	20%	2.5Ｙ6/4にぶい黄	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
17	ＳＩ０１カマド構成	土師器	甕	30%	7.5Ｙ Ｒ6/4にぶい橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ＋ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	(17.0)	－	(16.4)	
18	ＳＩ０１カマド構成	土師器	甕	15%	7.5Ｙ Ｒ6/6橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	(19.1)	－	(11.9)	
19	ＳＩ０１埋上	土師器	甕	20%	5Ｙ Ｒ5/2灰褐	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	ケズリ	－	－	－	
20	ＳＩ０１床	土師器	甕	10%以下	10Ｙ Ｒ6/4にぶい黄橙	〔体〕ナデ・ケズリ	〔体〕ミガキ？	ケズリ	－	－	－	
21	ＳＩ０１カマド支脚	土師器	甕	10%以下	5Ｙ Ｒ4/6赤褐	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	木葉痕	－	－	－	底部木葉痕
22	ＳＩ０２　１層	土師器	坏	10%以下	10Ｙ Ｒ5/6黄褐	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
23	ＳＩ０２　１層	土師器	坏	10%以下	10Ｙ Ｒ6/4にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ＋ミガキ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
24	ＳＩ０２　１層	土師器	高坏	10%以下	10Ｙ Ｒ7/3にぶい黄橙	〔脚〕ナデ＋ミガキ	不明	－	－	－	－	外面一部黒色
25	ＳＩ０２　１層	須恵器	大甕	10%以下	7.5Ｙ5/1　灰	〔体〕平行タタキ	〔体〕円形無文アテグ	－	－	－	－	
26	ＳＩ０２　１床	土師器	甕	95%以上	10Ｙ Ｒ5/6黄褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ＋ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	ケズリ	19.7	9.5	33.7	
28	ＳＩ０３床	土師器	坏	100%	10Ｙ Ｒ7/6明黄褐	〔口〕ミガキ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ＋ナデ	14.3	6.6	5.6	内面黒色処理
29	ＳＩ０３床	土師器	坏	100%	5Ｙ Ｒ6/6橙	〔口〕ミガキ〔体〕ナデ＋ミガキ	〔口～体〕ミガキ	ミガキ	13.2	5.0	4.0	内外面黒色処理
30	ＳＩ０３床	土師器	坏	100%	10Ｙ Ｒ6/4にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ＋ミガキ〔体〕ケズリ＋ミガキ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ＋ミガキ	12.6	－	4.1	内外面黒色処理？

遺物観察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
31	ＳＩ０３床	土師器	坏	95%以上	5Ｙ R5/6明赤褐	〔口〕ヨコナデ＋ミガキ〔体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ＋ミガキ	12.5	－	3.9	内外面黒色処理？
32	ＳＩ０３床	土師器	高坏	95%以上	10Ｙ R6/6明黄褐	〔口〕ミガキ〔体〕ケズリ〔脚〕ナデ＋ミガキ	〔口～体〕ミガキ	ナデ＋ミガキ	11.8	6.4	7.2	内面黒色処理
33	ＳＩ０３床	土師器	高坏	100%	10Ｙ R6/6明黄褐	〔口〕ミガキ〔体〕ケズリ〔脚〕ナデ＋ミガキ	〔口～体〕ミガキ	ミガキ	11.3	7.3	6.9	内面黒色処理
34	ＳＩ０３Ｑ４床	土師器	鉢	20%	10Ｙ R6/2灰黄褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ＋ミガキ	〔口〕剥落〔体〕ナデ	－	12.2	－	(7.6)	
35	ＳＩ０３床	土師器	甕	95%以上	10Ｙ R6/3にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ＋ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	ケズリ	16.8	8.7	24.1	
36	ＳＩ０３床	土師器	甕	70%	10Ｙ R6/8赤橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	ケズリ＋ナデ	(16.4)	4.0	17.9	器面摩耗顕著
37	ＳＩ０３Ｑ４床	土師器	甕	10%以下	2.5Ｙ R7/6橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
38	ＳＩ０３床	土師器	甕	10%以下	2.5Ｙ R5/1赤灰	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	12.2	－	12.5	
39	ＳＩ０３カマド構成	土師器	甕	15%	10Ｙ R6/3にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	12.2	－	12.5	
40	ＳＩ０３カマド構成	土師器	甕	20%	10Ｙ R6/3にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	12.2	－	12.5	
41	ＳＩ０３カマド構成	土師器	甕	25%	7.5Ｙ R5/3にぶい褐	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	ケズリ	－	－	－	
42	ＳＩ０３Ｑ４埋土	土師器	甕	10%	2.5Y6/2　灰黄	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	ナデ	－	－	－	
43	ＳＩ０３床	土師器	甕	20%	2.5Ｙ R5/3にぶい赤褐	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	ケズリ＋ミガキ	－	－	－	
45	ＳＩ０４カマド支脚	土師器	坏	90%	7.5Ｙ R5/6明褐	〔口〕ミガキ〔体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ＋ミガキ	12.1	－	3.5	内外面黒色処理
46	ＳＩ０４床	土師器	坏	95%以上	7.5Ｙ R5/4にぶい褐	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	ミガキ	12.8	－	3.5	内外黒色処・刱痕？
47	ＳＩ０４Ｑ４埋土	土師器	甕	10%以下	7.5Ｙ R6/2灰褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ・ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
48	ＳＩ０４カマド左袖	土師器	坏	10%	10Ｙ R5/4にぶい黄褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	－	(10.6)	－	(3.2)	内面黒色処理
49	ＳＩ０４床	土師器	坏	10%以下	7.5Ｙ R7/6橙	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	(3.6)	内外面黒色処理？
50	ＳＩ０４カマド構成	土師器	坏	10%	7.5Ｙ R3/3暗褐	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	(12.1)	－	(2.9)	内外面黒色処理？
51	ＳＩ０４Ｑ３埋土	土師器	小形土器	50%	10Ｙ R7/4にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	ナデ	(7.0)	－	3.2	
52	ＳＩ０４床	土師器	鉢	15%	10Ｙ R5/4にぶい黄褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	17.0	－	(8.0)	内面炭化物付着
53	ＳＩ０４埋下～床	土師器	甕	65%	2.5Ｙ R5/8明赤褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	木葉痕	14.2	7.6	16.7	
54	ＳＩ０４Ｑ４埋土	土師器	甕	65%	7.5Ｙ R6/4にぶい橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	穿孔？	15.8	(8.8)	18.7	
55	ＳＩ０４カマド構成	土師器	甕	10%以下	7.5Ｙ R5/4にぶい褐	〔体〕ハケメ	〔体〕ハケメ	－	－	－	(9.3)	
56	ＳＩ０４床	土師器	球胴甕	20%	10Ｙ R7/4にぶい黄橙	〔体〕ハケメ	〔体〕ハケメ＋ナデ	木葉痕	(22.1)	8.6	(8.2)	底部木葉痕
58	ＳＩ０５床	土師器	坏	70%	7.5Ｙ R6/4にぶい橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	－	14.3	－	5.6	内面黒色処理
59	ＳＩ０５床	土師器	甕	45%	7.5Ｙ R7/4にぶい橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ＋ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	ケズリ	15.8	6.4	22.0	
62	ＳＩ０６埋土	土師器	坏	45%	2.5Ｙ R7/3浅黄	〔体〕ロクロナデ	〔体〕極弱いミガキ？	回転ヘラキリ	(12.8)	－	(3.3)	内面黒色処理
63	ＳＩ０６　１層	土師器	坏	20%	10Ｙ R8/4浅黄橙	〔体〕ロクロナデ＋底部縁辺ヘラケズリ	〔体〕ミガキ	ヘラケズリ再調整	－	6.4	(3.0)	内面黒色処理
64	ＳＩ０６　１層	土師器	高台坏	20%	5Ｙ R7/8橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	－	(11.3)	－	4.3	内面黒色処理

遺物観察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
65	ＳＩ０６床	土師器	高台坏	15%	5Ｙ R6/6橙	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	切離し不明	－	－	－	内面黒色処理
66	ＳＩ０６床	須恵器	坏	45%	N7/　灰白	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転ヘラキリ	(14.1)	7.3	4.0	
67	ＳＩ０６埋土	須恵器	坏	15%	10Ｙ R7/2にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	(4.6)	
68	ＳＩ０６Ｑ１埋土	須恵器	坏	10%以下	10Ｙ R7/1灰白	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	内外火襷痕
69	ＳＩ０６Ｑ２埋土	須恵器	坏	10%以下	7.5Y8/2灰白	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
70	ＳＩ０６Ｑ１埋土	須恵器	坏	10%以下	10Ｙ R6/1褐灰	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	－	－	－	－	内外火襷痕
71	ＳＩ０６Ｑ１埋下	須恵器	坏	20%	2.5Y7/3浅黄	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	回転ヘラキリ	－	－	－	
72	ＳＩ０６Ｑ１埋土	須恵器	蓋	80%	5Y5/1　灰	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	17.2	－	(3.5)	
73	ＳＩ０６Ｑ４埋土	須恵器	蓋	15%	5Y5/1　灰	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	(14.4)	－	(3.0)	転用硯
74	ＳＩ０６埋土	土師器	小形土器	20%	7.5Ｙ R5/4にぶい褐	〔口～体〕ユビナデ	〔口～体〕ユビナデ	ユビナデ	－	－	－	
75	ＳＩ０６カマド構成	土師器	鉢	25%	5Ｙ R4/6赤褐	〔口～体〕ケズリ	〔口～体〕ナデ	ナデ	(16.4)	(9.8)	9.8	
76	ＳＩ０６カマド右袖	土師器	甕	10%	10Ｙ R7/4にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	－	22.0	－	(17.3)	
77	ＳＩ０６カマド構成	土師器	甕	10%	5Ｙ R5/6明赤褐	〔口～体〕ロクロナデ＋ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ＋ナデ	－	(18.4)	－	(12.4)	
78	ＳＩ０６床	土師器	甕	10%以下	7.5Ｙ R5/6明褐	〔口〕タタキ＋ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ	－	－	－	－	
79	ＳＩ０６Ｑ２埋土	土師器	甕	15%	10Ｙ R6/2灰黄褐	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	ヘラケズリ再調整	－	－	－	
80	ＳＩ０６床	土師器	甕	10%以下	5Ｙ R5/6明赤褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
81	ＳＩ０６Ｑ１埋土	土師器	甕	10%以下	7.5Ｙ R5/4にぶい褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
82	ＳＩ０６貼床	土師器	甕	10%以下	7.5Ｙ R3/1黒褐	〔体〕タタキ＋ロクロナデ＋ケズリ	〔体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
83	ＳＩ０６Ｑ１埋土	須恵器	甕壺類	10%以下	10Ｙ R7/1灰白	〔口〕ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ	－	－	－	－	
84	ＳＩ０６Ｑ２埋土	須恵器	甕壺類	10%以下	N6/　灰	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
85	ＳＩ０７床	土師器	坏	25%	5Ｙ R4/6赤褐	〔口～体〕ロクロナデ＋底部縁辺ヘラケズリ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	(16.6)	(7.2)	6.6	内面黒色処理
86	ＳＩ０７カマド構成	土師器	坏	25%	2.5Y6/4にぶい黄	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	不明	(13.2)	(7.0)	3.7	器面摩耗
87	ＳＩ０７カマド燃焼部	土師器	坏	30%	10Ｙ R7/4にぶい黄橙	〔体〕ロクロナデ＋底部縁辺ヘラケズリ	〔体〕ミガキ	ヘラケズリ再調整	(9.2)	5.5	(1.8)	底面線刻あり
88	ＳＩ０７Ｑ１埋下	須恵器	坏	30%	2.5Y6/2灰黄	〔口～体〕ロクロナデ＋底部縁辺ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ	ヘラケズリ再調整	(14.0)	(6.0)	4.2	内外火襷痕
89	ＳＩ０７床	須恵器	坏	50%	2.5Y7/2灰黄	〔口～体〕ロクロナデ＋底部縁辺ヘラケズリ	〔口～体〕ロクロナデ	ヘラケズリ再調整	13.6	(5.5)	4.6	底部肥厚
90	ＳＩ０７床	須恵器	坏	30%	10Ｙ R8/6黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(14.0)	(8.2)	(3.9)	
91	ＳＩ０７床	須恵器	坏	25%	5Y7/1灰白	〔口～体〕ロクロナデ＋底部縁辺ヘラケズリ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(12.6)	(5.6)	4.8	
92	ＳＩ０７カマド左袖	須恵器	坏	20%	2.5Y6/1黄灰	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	回転イトキリ	－	－	－	
93	ＳＩ０７床	土師器	高坏	35%	7.5Ｙ R6/3にぶい褐	〔脚〕ケズリ	〔体〕ミガキ〔脚〕ケズリ＋ナデ	－	－	(7.0)	(4.1)	内面黒色処理
94	ＳＩ０７Ｑ２埋土	土師器	甑	10%	7.5Ｙ R6/6橙	〔体〕タタキ＋ケズリ	〔体〕ナデ・ハケメ	単孔	－	(9.6)	(6.9)	
95	ＳＩ０７床	土師器	甕	15%	7.5Ｙ R6/4にぶい橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
96	ＳＩ０７カマド左袖	土師器	甕	10%以下	5Ｙ R5/6明赤褐	〔口〕ハケメ＋ヨコナデ〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	(22.9)	－	(10.8)	

遺物観察表（土師器・須恵器）

No.	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
97	ＳＩ０７カマド左袖	土師器	甕	10%以下	2.5Ｙ R5/6明赤褐	〔口〕ハケメ＋ヨコナデ〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ+ナデ〔体〕ナデ	－	－	－	(7.0)	
98	ＳＩ０７カマド右袖	土師器	甕	10%以下	2.5Ｙ R5/6明赤褐	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	ケズリ	－	－	－	
99	ＳＩ０７床	土師器	甕	25%	7.5Ｙ R8/3浅黄橙	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	ケズリ	－	－	－	
100	ＳＩ０７カマド支脚	土師器	甕	100%	7.5Ｙ R7/6橙	〔口〕ロクロナデ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	14.7	7.6	12.7	
101	ＳＩ０７床	土師器	甕	10%以下	10Ｙ R7/3にぶい黄橙	〔口〕ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ	－	－	－	－	
102	ＳＩ０７カマド左袖	土師器	甕	10%以下	7.5Ｙ R7/3にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ+ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ+ナデ	－	－	－	(15.5)	
103	ＳＩ０７床	土師器	甕	10%以下	5Ｙ R6/6橙	〔体〕タタキ＋ロクロナデ+ケズリ	〔体〕ロクロナデ	－	－	－	(10.6)	
104	ＳＩ０７カマド右袖	土師器	甕	10%以下	10Ｙ R7/4にぶい黄橙	〔体〕タタキ＋ロクロナデ+ケズリ	〔体〕ナデ	－	－	－	－	
105	ＳＩ０７Ｑ２埋下	須恵器	甕壺類	10%以下	N4/　灰	〔体〕タタキ＋ロクロナデ	〔体〕指頭圧痕？＋ナデ	－	－	－	－	
106	ＳＩ０７床	須恵器	甕壺類	10%以下	N5/　灰	〔体〕タタキ＋ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
107	ＳＩ０７床	須恵器	甕壺類	10%以下	7.5Y5/1　灰	〔口〕ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ	－	－	－	－	
108	ＳＩ０７Ｑ２埋土	須恵器	大甕	10%以下	N2/　黒	〔体〕平行タタキ	〔体〕円形無文アテグ	－	－	－	－	
114	ＳＩ０８カマド燃焼部	土師器	坏	20%	2.5Ｙ R5/6明赤褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	－	(14.3)	－	(4.0)	内面黒色処理
115	ＳＩ０８カマド構成	土師器	坏	20%	5Ｙ R4/6赤褐	〔口〕ヨコナデ+ミガキ〔体〕ケズリ＋ミガキ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ	(11.1)	－	(4.0)	内面黒色処理
116	ＳＩ０８Ｑ４埋下	土師器	坏？	20%	N3/　暗灰	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	
117	ＳＩ０８床	土師器	坏	45%	7.5Ｙ R7/6橙	（口）ヨコナデ+ミガキ（体）ケズリ	（口～体）ミガキ	ケズリ	(13.0)	－	4.0	内面黒色処理
118	ＳＩ０８Ｑ４埋下	土師器	坏	20%	7.5Ｙ R5/3にぶい褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ	－	－	－	器面摩耗
119	ＳＩ０８床	土師器	坏	50%	10Ｙ R5/4にぶい黄褐	（口～体〕ナデ+ケズリ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ	(16.0)	－	(3.5)	内面黒色処理
120	ＳＩ０８床	土師器	高坏	65%	7.5Ｙ R4/4褐	〔口〕ヨコナデ+ミガキ〔体～脚〕ヨコナデ+ナデ	〔口～体〕ミガキ	－	(12.2)	6.6	7.1	内面黒色処理
121	ＳＩ０８埋下	土師器	高坏	25%	10Ｙ R6/6明黄褐	〔脚〕ヨコナデ+ケズリ	不明	ケズリ＋ヨコナデ	－	6.6	(3.6)	底部ヘラ書き「×」
122	ＳＩ０８埋中	土師器	高坏	20%	2.5Y8/3淡黄	〔脚〕ヨコナデ+ナデ	〔体〕ミガキ	ナデ	－	－	－	内面黒色処理
123	ＳＩ０８床	土師器	甑	10%以下	5Ｙ R6/6橙	〔体〕ナデ	〔体〕ナデ	単孔	－	(4.0)	(8.1)	
124	ＳＩ０８床	土師器	甕	10%以下	5Ｙ R6/8橙	〔体〕ナデ	〔体〕ナデ	－	(21.7)	－	(30.9)	
125	ＳＩ０８カマド構成	土師器	甕	90%	10Ｙ R6/4にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	(4.8)	(6.0)	
126	ＳＩ０８床	土師器	甕	80%	5Ｙ R5/4にぶい赤褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ+ナデ・ケズリ	（口〕ヨコナデ〔体〕ナデ+ハケメ	木葉痕	16.2	8.0	22.5	
127	ＳＩ０８カマド構成	土師器	甕	10%	10Ｙ R7/2にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	(16.3)	－	(10.8)	
128	ＳＩ０８カマド右袖	土師器	甕	90%	7.5Ｙ R5/4にぶい褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ・ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	22.3	－	(32.1)	
129	ＳＩ０８煙出し	土師器	甕	25%	5Ｙ R6/4にぶい橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	(19.7)	(17.2)	－	
130	ＳＩ０８カマド構成	土師器	甕	20%	10Ｙ R6/4にぶい黄橙	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	－	－	－	－	底部剥落
131	ＳＩ０８床	土師器	球胴甕	95%以上	7.5Ｙ R3/2黒褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	ケズリ	12.5	5.8	26.8	

遺物観察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
132	ＳＩ０８床	土師器	球胴甕	90%	10Ｙ Ｒ7/4にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ＋ミガキ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	(21.3)	－	(28.8)	
136	ＳＩ０９床	土師器	坏	80%	10Ｙ Ｒ7/4にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ＋底部縁辺ヘラケズリ	〔口～体〕ミガキ	ヘラケズリ再調整	14.8	6.7	4.8	内面黒色処理
137	ＳＩ０９Ｐ３埋土	土師器	坏	25%	7.5Ｙ Ｒ6/4にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	ヘラケズリ再調整？	－	－	－	内面黒色処理・器面摩耗
138	ＳＩ０９Ｑ３埋土	土師器	坏	10%	10Ｙ Ｒ6/4にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
139	ＳＩ０９　１層	土師器	坏	10%以下	7.5Ｙ Ｒ7/6橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
140	ＳＩ０９　１層	土師器	坏	10%以下	2.5Ｙ Ｒ4/1黄灰	〔体〕ミガキ	〔体〕ミガキ	ミガキ	－	－	－	内面黒色処理
141	ＳＩ０９Ｑ２埋土	土師器	坏	10%以下	7.5Ｙ Ｒ6/4にぶい橙	〔口〕ヨコナデ＋ミガキ〔体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
142	ＳＩ０９Ｑ２埋土	土師器	坏	10%以下	10Ｙ Ｒ4/2灰黄褐	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	回転イトキリ	－	－	－	内面黒色処理
143	ＳＩ０９Ｑ１貼床	土師器	坏	10%	5Ｙ8/1灰白	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	回転イトキリ	－	－	－	外面摩耗顕著
144	ＳＩ０９Ｑ４埋下	土師器	坏	10%以下	2.5Ｙ4/2暗灰黄	〔体〕ロクロナデ	〔体〕不明	回転イトキリ	－	－	－	内面摩耗顕著
145	ＳＩ０９　ＰＰ９	土師器	高坏	10%以下	7.5Ｙ Ｒ7/6橙	〔体〕ミガキ＋ケズリ	〔体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
146	ＳＩ０９Ｑ３埋下	土師器	甕	10%以下	7.5Ｙ Ｒ7/8黄橙	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	－	－	－	－	
147	ＳＩ０９貼床	土師器	甕	10%以下	10Ｙ Ｒ7/3にぶい黄橙	〔体〕ナデ	〔体〕ナデ	木葉痕	－	－	－	
148	ＳＩ０９　１層	土師器	大甕	10%以下	5Ｙ2/1黒	〔体〕平行タタキ	〔体〕円形無文アテグ	－	－	－	－	
149	ＳＩ１０Ｑ２埋下	土師器	坏	20%	10Ｙ Ｒ6/4にぶい黄橙	〔口〕ロクロナデ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	－	(13.4)	－	(5.2)	内面黒色処理
150	ＳＩ１０Ｑ３床	土師器	双耳坏	10%	7.5Ｙ Ｒ7/4にぶい橙	〔把手～体〕ナデ？	〔体〕ミガキ	－	－	－	(3.5)	内面黒色処理
151	ＳＩ１０床	須恵器	坏	30%	5Ｙ Ｒ5/1褐灰	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転ヘラキリ	(13.6)	(6.8)	4.3	
152	ＳＩ１０床	須恵器	坏	20%	2.5Ｙ8/1灰白	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(13.3)	(7.4)	4.6	
153	ＳＩ１０旧カマド右袖	須恵器	坏	30%	2.5Ｙ Ｒ7/3淡赤橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(13.0)	(6.0)	4.1	
154	ＳＩ１０床	須恵器	坏	35%	2.5Ｙ7/2灰黄	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(12.6)	(6.8)	4.3	
155	ＳＩ１０旧カマド内	土師器	甕	10%以下	7.5Ｙ Ｒ5/4にぶい褐	〔口〕ロクロナデ〔体〕ハケメ・ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	(9.2)	
156	ＳＩ１０旧カマド内	土師器	甕	10%以下	5Ｙ Ｒ4/8赤褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
157	ＳＩ１０Ｑ３床	土師器	甕	10%以下	5Ｙ Ｒ6/6橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	(12.0)	－	(5.7)	内面炭化物付着
158	ＳＩ１０旧カマド構成	土師器	甕	10%以下	5Ｙ Ｒ4/8赤褐	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	静止イトキリ	－	(7.2)	(3.4)	
159	ＳＩ１０　ＰＰ１４	土師器	甕	10%以下	5Ｙ Ｒ5/8明赤褐	〔体〕タタキ＋ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ＋ナデ	－	－	－	－	
160	ＳＩ１０床	須恵器	甕壺類	10%以下	7.5Ｙ Ｒ5/1褐灰	〔口〕ロクロナデ〔体〕タタキ＋ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	(9.6)	
164	ＳＩ１１床	土師器	坏	30%	5Ｙ Ｒ5/6明赤褐	〔口〕ヨコナデ＋ミガキ〔体〕ケズリ＋ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	(16.0)	－	－	内面黒色処理
165	ＳＩ１１床	土師器	甕	90%	7.5Ｙ Ｒ6/6橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	木葉痕	(18.1)	8.3	27.2	底部木葉痕
166	ＳＩ１１床	土師器	甕	35%	10Ｙ Ｒ7/4にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ＋ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	(18.5)	(8.4)	(24.2)	
167	ＳＩ１３床	土師器	坏		7.5Ｙ Ｒ5/4にぶい褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	13.3	5.8	3.5	

遺物観察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
170	ＳＩ１４床	土師器	坏	35%	10Ｙ R6/6明黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(13.2)	(7.8)	4.6	底部柱状づくり
171	ＳＩ１４カマド構成	土師器	坏	10%	5Ｙ R6/8橙	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
172	ＳＩ１４カマド構成	土師器	坏	15%	5Ｙ R6/8橙	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	回転イトキリ	－	－	－	
173	ＳＩ１４床	須恵器	高台坏	95%以上	2.5Ｇ Ｙ5/1オリーブ灰	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	切離し不明	10.3	6.2	5.2	
174	ＳＩ１４カマド構成	土師器	甕	80%	5Ｙ R4/8赤褐	〔口〕ロクロナデ〔体〕タタキ＋ロクロナデ＋ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ＋ハケメ	ナデ	(20.9)	(7.2)	30.2	
175	ＳＩ１４カマド構成	土師器	甕	90%	5Ｙ R5/6明赤褐	〔口～体〕タタキ＋ロクロナデ＋ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ＋ハケメ	ナデ	23.2	18.2	34.3	
176	ＳＩ１４煙出し	土師器	甕	10%以下	5Ｙ R5/6明赤褐	〔口〕タタキ＋ロクロナデ＋ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ＋ナデ	－	－	－	(12.6)	
177	ＳＩ１４床	土師器	甕	25%	5Ｙ R5/6明赤褐	〔口〕タタキ＋ロクロナデ＋ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ＋ナデ	ケズリ	(19.8)	(7.3)	(24.3)	口縁部穿孔有り
178	ＳＩ１４カマド構成	土師器	甕	45%	2.5Ｙ R5/6明赤褐	〔口～体〕ロクロナデ＋ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ＋ナデ	－	(22.6)	－	(27.5)	
179	ＳＩ１４カマド構成	土師器	甕	50%	2.5Ｙ R6/8橙	〔口～体〕タタキ＋ロクロナデ＋ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ＋ナデ・ハケメ	ナデ	24.5	7.5	34.7	
180	ＳＩ１４カマド構成	土師器	甕	10%	2.5Ｙ R5/3にぶい赤褐	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	ナデ	－	－	－	
181	ＳＩ１４床	土師器	甕	10%以下	7.5Ｙ R6/4にぶい橙	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	ケズリ	－	－	－	
182	ＳＩ１４カマド構成	土師器	甕	10%以下	5Ｙ R5/6明赤褐	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
183	ＳＩ１４床	土師器	鍋	20%	2.5Ｙ R5/6明赤褐	〔口～体〕ロクロナデ＋ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ＋ナデ	－	(37.0)	(10.7)	(24.8)	
184	ＳＩ１４床	須恵器	甕壺類	10%以下	2.5Ｙ R5/1黄灰	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	－	－	－	(6.9)	
186	ＳＩ１５床	土師器	坏	60%	7.5Ｙ R5/4にぶい褐	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	ミガキ	(15.0)	－	4.2	内外面黒色処理
187	ＳＩ１５床	土師器	高坏	60%	7.5Ｙ R5/6明褐	〔口～脚〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	ナデ	－	5.6	(5.8)	内外面黒色処理
188	ＳＩ１５　１層	土師器	高坏	30%	10Ｙ R7/4にぶい黄橙	〔脚〕ヨコナデ＋ケズリ	〔体〕ミガキ	ケズリ＋ヨコナデ	－	(6.3)	(3.8)	底部ヘラ書「×」
189	ＳＩ１５床	土師器	甕	20%	10Ｙ R4/4褐	〔体〕ナデ	〔体〕ナデ	ナデ	－	－	(7.2)	底部丸底風
190	ＳＩ１５床	土師器	甕	90%	5Ｙ R6/6橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	ナデ	15.2	6.5	20.2	
191	ＳＩ１５床	土師器	甕	85%	5Ｙ R5/4にぶい赤褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	ナデ	17.5	5.2	17.6	
192	ＳＩ１５床	土師器	甕	90%	7.5Ｙ R5/4にぶい褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ・ナデ	－	－	－	－	
195	ＳＩ１６　１層	土師器	坏	80%	2.5Ｙ R6/8橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ	14.7	－	3.5	内面黒色処理
196	ＳＩ１６　１層	土師器	鉢	20%	2.5Ｙ R6/6橙	〔口〕ヨコナデ＋ミガキ〔体〕ナデ＋ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	(21.4)	－	－	内面黒色処理
197	ＳＩ１６床	土師器	甕	90%	10Ｙ R5/3にぶい黄褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	ナデ	19.0	7.1	28.0	
198	ＳＩ１６カマド燃焼部	土師器	甕	80%	2.5Ｙ R4/6赤褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	木葉痕	(14.5)	7.4	14.5	
199	ＳＩ１６埋土	土師器	甕	10%以下	10Ｙ R7/2にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	－	－	－	－	
200	ＳＩ１６Ｑ４埋下	土師器	甕	10%	2.5Ｙ R3/3暗赤褐	〔体〕ハケメ	〔体〕ハケメ	ナデ	－	－	－	
201	ＳＩ１６　１層	土師器	甕	10%以下	10Ｙ R7/3にぶい黄橙	〔体〕ハケメ	〔体〕ハケメ	木葉痕	－	－	－	
202	ＳＩ１６床	土師器	球胴甕	10%以下	10Ｙ R6/4にぶい黄橙	〔体〕ナデ＋ケズリ＋ミガキ	〔体〕ナデ	ナデ	(17.8)	7.6	(22.2)	
203	ＳＩ１６　１層	須恵器	甕壺類	10%以下	N4/　灰	〔体〕タタキ＋ロクロナデ＋ハケメ	〔体〕カキメ	－	－	－	－	

遺物観察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
205	ＳＩ１７床	土師器	坏	65%	7.5Ｙ R6/4にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	弱いヘラケズリ再調整	14.0	7.1	4.1	内面黒色処理
206	ＳＩ１７床	須恵器	坏	55%	10Ｙ R7/3にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	弱いヘラケズリ再調整	13.5	6.8	4.3	
207	ＳＩ１７床	土師器	甕	10%以下	10Ｙ R6/3にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	(7.5)	
208	ＳＩ１７床	土師器	甕	50%	5Ｙ R6/4にぶい橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ＋ケズリ	〔口〕ヨコナデ＋ハケメ〔体〕ハケメ	ケズリ	(24.1)	(8.0)	(32.9)	
209	ＳＩ１７床	土師器	甕	70%	10Ｙ R7/4にぶい黄橙	〔口〕ロクロナデ〔体〕タタキ＋ロクロナデ＋ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ	ナデ	(20.0)	(9.7)	30.5	
210	ＳＩ１７床	土師器	甕	10%以下	7.5Ｙ R7/2明褐灰	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	－	－	－	－	
211	ＳＩ１７床	須恵器	甕壺類	10%以下	2.5Ｙ R3/4暗赤褐	〔口〕ロクロナデ〔体〕タタキ＋ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	(11.0)	
212	ＳＩ１８床	土師器	坏	90%	5Ｙ R6/4にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	13.2	6.6	5.0	底部墨書有り
213	ＳＩ１８カマド構成	須恵器	坏	90%	7.5Ｙ R5/1褐灰	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転ヘラキリ	14.3	7.2	4.5	
214	ＳＩ１８床	須恵器	坏	90%	7.5Ｙ R4/1褐灰	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	13.4	6.5	4.8	
215	ＳＩ１８床	須恵器	坏	70%	N5/　灰	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転ヘラキリ	14.4	6.8	4.7	
216	ＳＩ１８床	須恵器	坏	60%	2.5Y7/2灰黄	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	(16.9)	－	(5.5)	
217	ＳＩ１８カマド構成	須恵器	坏	10%以下	5Y6/2灰オリーブ	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	(3.3)	体部墨書有り
218	ＳＩ１８カマド構成	土師器	甕	70%	5Ｙ R4/6赤褐	〔口〕ロクロナデ〔体〕タタキ＋ロクロナデ＋ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ＋ナデ	ナデ	(30.0)	(7.4)	(38.9)	
219	ＳＩ１８カマド構成	土師器	甕	10%	7.5Ｙ R5/4にぶい褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ＋ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	19.2	－	(8.2)	
220	ＳＩ１８カマド左袖	土師器	甕	45%	10Ｙ R6/4にぶい黄橙	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	－	－	(10.0)	(32.1)	
221	ＳＩ１８カマド構成	土師器	甕	10%以下	5Ｙ R5/3にぶい赤褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
222	ＳＩ１８床	須恵器	長頸瓶	10%	2.5Y5/1黄灰	〔口〕ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ	－	(8.8)	－	(8.6)	
224	ＳＩ１９床	土師器	坏	90%	10Ｙ R6/6明黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	9.8	4.4	1.9	体部油煙付着
225	ＳＩ１９　１層	土師器	坏	60%	7.5Ｙ R6/4にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(9.6)	4.2	1.8	
226	ＳＩ１９床	土師器	坏	95%以上	7.5Ｙ R7/4にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	10.6	5.3	2.7	
227	ＳＩ１９床	土師器	坏	70%	10Ｙ R4/2灰黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	12.0	5.4	2.7	
228	ＳＩ１９　１層	土師器	坏	55%	10Ｙ R6/4にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(12.0)	(5.6)	3.1	
229	ＳＩ１９Ｑ４埋土	土師器	坏	55%	7.5Ｙ R5/6明褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	11.6	5.1	2.8	
230	ＳＩ１９床	土師器	坏	100%	10Ｙ R6/3にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	12.7	6.0	3.3	
231	ＳＩ１９床	土師器	坏	95%以上	10Ｙ R6/4にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	ヘラケズリ再調整	15.0	7.0	4.1	内面黒色処理
232	ＳＩ１９床	土師器	坏	50%	10Ｙ R6/3にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ＋弱いミガキ	弱いヘラケズリ再調整	(13.9)	(5.0)	4.0	内面黒色処理？
233	ＳＩ１９カマド燃焼部	土師器	坏	30%	7.5Ｙ R7/6橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	(10.4)	－	(1.9)	
234	ＳＩ１９　１層	土師器	坏	20%	10Ｙ R7/6明黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	－	(13.2)	－	(3.2)	内面黒色処理

遺物観察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
235	ＳＩ１９カマド燃焼部	土師器	坏	10%	10Ｙ Ｒ6/4にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
236	ＳＩ１９カマド燃焼部	土師器	坏	10%	10Ｙ Ｒ6/3にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ＋ナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
237	ＳＩ１９床	土師器	坏	25%	5Ｙ Ｒ7/6橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	(15.3)	4.7	(6.0)	内面黒色処理
238	ＳＩ１９　１層	土師器	坏	10%以下	10Ｙ Ｒ6/3にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
239	ＳＩ１９　１層	土師器	坏	10%以下	7.5Ｙ Ｒ5/4にぶい褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
240	ＳＩ１９床	土師器	坏	20%	2.5Ｙ4/1黄灰	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	回転イトキリ	－	－	－	底部油煙？墨書？
241	ＳＩ１９床	土師器	高台坏	20%	2.5Ｙ7/3浅黄	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	回転イトキリ	－	－	－	内面黒色処理
242	ＳＩ１９床	土師器	高台坏	95%以上	10Ｙ Ｒ6/4にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	12.2	7.0	5.0	内面黒色処理
243	ＳＩ１９Ｑ４埋土	土師器	甕	10%以下	5Ｙ Ｒ4/4にぶい赤褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
244	ＳＩ１９　１層	土師器	甕	10%以下	5Ｙ Ｒ5/4にぶい赤褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
245	ＳＩ１９Ｑ４埋土	土師器	甕	10%以下	5Ｙ Ｒ5/3にぶい赤褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
246	ＳＩ１９床	土師器	甕	20%	7.5Ｙ Ｒ5/6明褐	〔口～体〕ロクロナデ＋ケズリ	〔口〕ロクロナデ＋ナデ	－	(21.0)	－	(23.7)	体部籾痕
247	ＳＩ１９　Ｐ１	土師器	鉢	10%	10Ｙ Ｒ6/3にぶい黄橙	〔体〕ナデ	〔体〕ミガキ	ヘラケズリ再調整	－	(9.0)	(4.7)	内面黒色処理
248	ＳＩ１９　１層	須恵器	甕壺類	10%以下	5Y5/1　灰	〔体〕ケズリ	〔体〕ハケメ	ケズリ	－	(12.8)	(6.7)	
249	ＳＩ１９Ｑ２埋土	須恵器	大甕	10%以下	N2/　黒	〔体〕平行タタキ	〔体〕平行アテグ	－	－	－	－	
250	ＳＩ１９　１層	須恵器	大甕	10%以下	N6/　灰	〔体〕平行タタキ	〔体〕平行アテグ	－	－	－	－	
251	ＳＩ２０埋土	土師器	坏	45%	10Ｙ Ｒ7/3にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	(16.5)	6.0	5.0	内面黒色処理
252	ＳＩ２０Ｑ２埋土	土師器	坏	75%	7.5Ｙ Ｒ6/4にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ＋底部縁辺ヘラナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ＋ヘラケズリ再調整	16.8	5.6	5.3	内面黒色処理
253	ＳＩ２０床	土師器	坏	60%	10Ｙ Ｒ4/3にぶい黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	(15.0)	6.2	5.4	内面黒色処理
254	ＳＩ２０埋下	土師器	坏	30%	7.5Ｙ Ｒ6/6橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(12.6)	(5.6)	3.5	
255	ＳＩ２０カマド構成	土師器	坏	15%	7.5Ｙ Ｒ6/6橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(12.6)	(5.4)	(3.5)	
256	ＳＩ２０床	土師器	坏	45%	10Ｙ Ｒ3/3暗褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	(14.2)	6.2	4.2	内面黒色処理
257	ＳＩ２０床	須恵器	坏	95%以上	2.5Ｙ8/2灰白	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	ヘラケズリ再調整	14.3	7.7	3.5	
258	ＳＩ２０Ｑ３埋土	土師器	皿	20%	7.5Ｙ Ｒ7/4にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	－	－	－	
259	ＳＩ２０床	土師器	甕	10%以下	2.5Ｙ Ｒ6/8橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
260	ＳＩ２１Ｑ３埋土	土師器	坏	10%	2.5Ｙ Ｒ6/8橙	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	ヘラケズリ再調整	(11.4)	(5.8)	(3.4)	内黒処理・体部墨書
261	ＳＩ２１Ｑ１埋土	土師器	坏	10%	10Ｙ Ｒ5/1褐灰	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	ヘラケズリ再調整	－	－	－	内面黒色処理
262	ＳＩ２１Ｑ４埋土	須恵器	坏	70%	7.5Ｙ Ｒ7/4にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転ヘラキリ	13.9	6.8	4.7	
263	ＳＩ２１埋土	須恵器	坏	30%	10Ｙ Ｒ8/3浅黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	ヘラケズリ再調整	(14.8)	(6.6)	4.8	
264	ＳＩ２１Ｑ１埋土	土師器	高坏？	10%	10Ｙ Ｒ6/4にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
265	ＳＩ２１カマド燃焼	土師器	甑	10%	7.5Ｙ Ｒ6/6橙	〔体〕タタキ＋ケズリ	〔体〕ハケメ＋ナデ	単孔	－	(9.4)	(12.2)	

遺物観察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
266	ＳＩ２１煙道部	土師器	甕	40%	5Ｙ Ｒ5/6明赤褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ＋ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ＋ナデ	－	(20.7)	－	(28.8)	
267	ＳＩ２１カマド埋土	土師器	甕	10%以下	7.5Ｙ Ｒ6/6橙	〔体〕ハケメ	〔体〕ハケメ	－	－	－	(9.5)	
268	ＳＩ２１床	須恵器	甕壺類	10%以下	5Ｙ6/1灰	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	－	－	－	(3.9)	
269	ＳＩ２１床	須恵器	甕壺類	10%以下	N6/灰	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	ケズリ	－	(12.4)	(4.0)	
270	ＳＩ２２　１層	土師器	坏	25%	10Ｙ Ｒ7/3にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(10.7)	－	(3.0)	
271	ＳＩ２２床	土師器	坏	35%	7.5Ｙ Ｒ6/4にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(12.2)	(5.2)	3.6	
272	ＳＩ２２床	土師器	坏	100%	10Ｙ Ｒ6/4にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	不明	14.7	5.5	4.7	内黒処理・器面摩耗
273	ＳＩ２２床	土師器	坏	40%	7.5Ｙ Ｒ8/3浅黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(13.3)	(4.6)	3.7	
274	ＳＩ２２床	土師器	坏	20%	7.5Ｙ Ｒ6/4にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	14.0	－	4.8	内黒処理・器面摩耗
275	ＳＩ２２カマド構成	須恵器	坏	50%	7.5Ｙ Ｒ7/4にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	14.6	4.9	5.2	
276	ＳＩ２２床	土師器	鉢	10%	2.5Ｙ Ｒ5/8明赤褐	〔体〕ロクロナデ？	〔体〕ミガキ	回転イトキリ？	－	5.5	1.9	内面黒色処理
277	ＳＩ２２　１層	土師器	甕	10%以下	7.5Ｙ Ｒ5/6明褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
278	ＳＩ２２　１層	土師器	甕	10%以下	10Ｙ Ｒ7/3にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
279	ＳＩ２２　１層	土師器	甕	10%以下	10Ｙ Ｒ7/4にぶい黄橙	〔口〕工具圧痕列＋ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
280	ＳＩ２２床	土師器	甕	10%	5Ｙ Ｒ6/6橙	〔口～体〕ロクロナデ＋ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ＋ナデ	－	－	－	(15.9)	
281	ＳＩ２２Ｑ３埋土	土師器	甕	10%以下	10Ｙ Ｒ6/3にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
282	ＳＩ２２Ｑ２埋土	須恵器	甕壺類	10%以下	N2/　黒	〔体〕平行タタキ	〔体〕ナデ	－	－	－	－	
283	ＳＩ２２　１層	須恵器	大甕	10%以下	N5/　灰	〔体〕平行タタキ	〔体〕円形無文アテグ＋ナデ	－	－	－	－	
284	ＳＩ２２Ｑ３埋土	須恵器	大甕	10%以下	7.5Ｙ4/1灰	〔体〕平行タタキ	〔体〕放射状アテグ	－	－	－	－	
287	ＳＩ２３Ｑ４埋下	土師器	坏	15%	10Ｙ Ｒ6/6明黄褐	〔口〕ミガキ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	ヘラケズリ再調整	(12.2)	－	(5.6)	内面黒色処理
288	ＳＩ２３Ｑ４埋下	土師器	坏	15%	10Ｙ Ｒ5/2灰黄褐	〔口〕ミガキ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
289	ＳＩ２３Ｑ４埋下	土師器	坏	20%	7.5Ｙ Ｒ6/3にぶい褐	〔口〕ヨコナデ＋ミガキ〔体〕ケズリ＋ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	(12.5)	－	(3.4)	内面黒色処理
290	ＳＩ２３Ｑ４埋下	土師器	坏	20%	7.5Ｙ Ｒ7/3にぶい橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ	(10.4)	(4.2)	3.7	内面黒色処理
291	ＳＩ２３Ｑ４埋下	土師器	坏	10%以下	7.5Ｙ2/1黒	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	(3.5)	内外面黒色処理
292	ＳＩ２３Ｑ２埋下	土師器	坏	50%	5Ｙ Ｒ5/6明赤褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ	(12.6)	5.2	3.9	内面黒色処理
293	ＳＩ２３床	土師器	坏	70%	5Ｙ Ｒ5/6明赤褐	〔口～体〕ロクロナデ＋底部縁辺ヘラケズリ	〔口～体〕ロクロナデ	手持ちヘラケズリ再調整	(14.5)	8.9	4.6	
294	ＳＩ２３床	土師器	坏	15%	10Ｙ Ｒ6/3にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ	(12.8)	－	(4.8)	内面黒色処理
295	ＳＩ２３Ｑ１埋下	土師器	坏	10%以下	10Ｙ Ｒ5/2灰黄褐	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内外面黒色処理？
296	ＳＩ２３Ｑ３埋土	土師器	坏	10%以下	10Ｙ Ｒ5/1褐灰	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内外面黒色処理
297	ＳＩ２３　１層	須恵器	坏	60%	10Ｙ Ｒ7/4にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転ヘラケズリ	(14.6)	7.9	4.5	
298	ＳＩ２３Ｑ４埋土	須恵器	坏	30%	2.5Ｙ7/3浅黄	〔口～体〕ロクロナデ＋底部縁辺ヘラケズリ	〔口～体〕ロクロナデ	ヘラケズリ再調整	(13.6)	6.4	4.3	底部籾痕？
299	ＳＩ２３Ｑ３埋下	須恵器	坏	20%	10Ｙ Ｒ6/2灰黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(15.0)	(8.2)	(4.5)	

遺物観察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
300	ＳＩ２３床	須恵器	坏	20%	7.5Y5/1　灰	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	回転ヘラキリ	(10.6)	7.8	(1.7)	
301	ＳＩ２３Ｑ４埋土	須恵器	蓋	45%	7.5Y5/1　灰	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	－	13.2	－	1.8	
302	ＳＩ２３床	土師器	鉢	15%	10ＹＲ5/3にぶい黄褐	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	(20.0)	^	(7.3)	内外面黒色処理
303	ＳＩ２３Ｑ４埋土	土師器	鉢？	10%	10ＹＲ5/4にぶい黄褐	〔体〕ナデ	〔体〕ミガキ	ケズリ	－	(7.6)	(4.1)	内面黒色処理
304	ＳＩ２３床	土師器	甕	10%	5ＹＲ5/4にぶい赤褐	〔口〕ロクロナデ〔体〕タタキ＋ケズリ	〔口〕ロクロナデ〔体〕ナデ	－	(21.2)	－	(11.5)	
305	ＳＩ２３埋土	土師器	甕	10%以下	5ＹＲ6/6橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
306	ＳＩ２３床	土師器	球胴甕	10%以下	10ＹＲ4/3にぶい黄褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ミガキ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
307	ＳＩ２３Ｑ３埋下	須恵器	甕壺類	10%以下	7.5Y4/1灰	〔体〕ハケメ	〔体〕ハケメ	－	－	－	－	
308	ＳＩ２３Ｑ４埋土	須恵器	甕壺類	10%以下	2.5Y4/1黄灰	〔口〕ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ	－	－	－	－	
309	ＳＩ２３Ｑ４埋土	須恵器	大甕	10%以下	2.5Y5/2暗灰黄	〔体〕格子目タタキ	〔体〕ハケメ＋ナデ	－	－	－	－	
310	ＳＩ２４焼土内	土師器	坏	30%	7.5ＹＲ6/6橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(11.6)	5.2	2.3	
311	ＳＩ２４　ＰＰ１１焼土	土師器	坏	25%	10ＹＲ5/4にぶい黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(13.4)	6.0	3.7	
312	ＳＩ２４焼土内	土師器	坏	50%	10ＹＲ4/3にぶい黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ＋ミガキ	回転イトキリ	(12.8)	(5.0)	4.4	内面黒色処理
313	ＳＩ２４床	土師器	高台坏	50%	7.5ＹＲ6/6橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	(15.0)	(5.6)	5.7	内面黒色処理
314	ＳＩ２４床	土師器	坏	30%	10ＹＲ6/3にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	－	(16.0)	－	(3.4)	内面黒色処理
315	ＳＩ２４　１層	土師器	坏	25%	7.5ＹＲ7/4にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(15.4)	2.5	4.9	
316	ＳＩ２４床	土師器	坏	35%	7.5ＹＲ6/4にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	(14.6)	5.2	4.8	内面黒色処理
317	ＳＩ２４焼土内	土師器	坏	20%	7.5ＹＲ6/4にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	－	(14.5)	－	－	内面黒色処理
318	ＳＩ２４床	土師器	高台坏	10%	7.5ＹＲ6/8橙	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	回転イトキリ	－	(4.8)	(2.8)	内面黒色処理？
319	ＳＩ２４Ｑ３埋土	土師器	高台坏	25%	10ＹＲ8/4浅黄橙	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	弱いヘラケズリ再調整	－	－	－	
320	ＳＩ２４埋土	土師器	甕	90%	5ＹＲ4/4にぶい赤褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	12.0	8.6	10.8	
321	ＳＩ２４埋土	土師器	甕	10%以下	7.5ＹＲ6/6橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
322	ＳＩ２４Ｑ３埋土	土師器	大甕	10%以下	5Y3/1オリーブ黒	〔体〕格子目タタキ	〔体〕円形無文アテグ＋ナデ	－	－	－	－	
325	ＳＸ０１　１層	土師器	坏？	20%	10ＹＲ7/4にぶい黄橙	〔口〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
326	ＳＸ０１　１層	土師器	高坏	20%	10ＹＲ6/3にぶい黄橙	〔口〕ミガキ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
327	ＳＸ０１Ｑ２埋土	土師器	高坏？	15%	10ＹＲ6/4にぶい黄橙	〔口〕ミガキ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
328	ＳＸ０１床	土師器	高坏？	10%以下	10ＹＲ7/3にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ＋ナデ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	(6.6)	内面黒色処理
329	ＳＸ０１埋土	土師器	高坏	40%	10ＹＲ6/4にぶい黄橙	〔口〕ミガキ〔体〕ナデ〔脚〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	－	(10.4)	－	(7.0)	内面黒色処理
330	ＳＸ０１床	土師器	高坏	60%	7.5ＹＲ5/6明褐	〔体〕ナデ〔脚〕ケズリ	〔体〕ミガキ	－	－	(8.8)	(5.9)	内面黒色処理
331	ＳＸ０１床	土師器	高坏	25%	2.5Y2/1　黒	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ〔脚〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	－	(10.0)	－	－	内面黒色処理
332	ＳＸ０１床	土師器	高坏	40%	7.5ＹＲ7/4にぶい橙	〔口〕ミガキ〔体〕ナデ〔脚〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	(10.2)	内黒処理・底部ヘラ書「×」有り
333	ＳＸ０１床	土師器	高坏	30%	7.5ＹＲ5/4にぶい褐	〔口〕ミガキ〔体〕ナデ〔脚〕ケズリ	〔体〕ミガキ	－	－	－	(4.2)	内面黒色処理

遺物観察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
334	ＳＸ０１埋土	土師器	高坏	25%	7.5Ｙ Ｒ6/6橙	〔体〕ナデ〔脚〕ヨコナデ+ケズリ	〔体〕ミガキ	－	－	(6.5)	(3.5)	内面黒色処理
335	ＳＸ０１床	土師器	高坏	25%	10Ｙ Ｒ5/4にぶい黄褐		〔体〕ミガキ	－	－	(6.8)	(3.1)	内面黒色処理
336	ＳＸ０１床	土師器	高坏	25%	10Ｙ Ｒ6/6明黄褐	〔脚〕ヨコナデ+ケズリ	－	－	－	6.0	(3.5)	
337	ＳＸ０１１層	土師器	高坏	10%以下	10Ｙ Ｒ7/4にぶい黄橙	〔脚〕ナデ	〔体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
338	ＳＸ０１床	土師器	小形土器	70%	5Ｙ Ｒ6/8橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(4.8)	4.8	(3.3)	
339	ＳＸ０１床	土師器	甕	30%	10Ｙ Ｒ5/4にぶい黄褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	ナデ	(12.5)	5.3	9.0	
340	ＳＸ０１１層	土師器	甕	10%以下	5Ｙ Ｒ5/6明赤褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕不明	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	器面摩耗
341	ＳＸ０１床	土師器	甕	10%以下	10Ｙ Ｒ7/4にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	－	(19.2)	－	－	
342	ＳＸ０１床	土師器	甕	25%	10Ｙ Ｒ7/3にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	－	(18.4)	－	(31.6)	
343	ＳＸ０１埋土	土師器	甕	10%	10Ｙ Ｒ6/6明黄褐	〔体〕ケズリ＋ハケメ	〔体〕ハケメ＋ナデ	－	－	－	－	
344	ＳＸ０２Ｑ１埋土	土師器	坏	50%	10Ｙ Ｒ4/1褐灰	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(11.7)	5.0	2.8	
345	ＳＸ０２床	土師器	坏	30%	10Ｙ Ｒ6/3にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(12.0)	(4.6)	3.5	
346	ＳＸ０２床	土師器	坏	50%	7.5Ｙ Ｒ6/6橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	12.8	5.8	3.2	
347	ＳＸ０２床	土師器	坏	90%	10Ｙ Ｒ7/3にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	13.7	5.6	4.3	内面黒色処理
348	ＳＸ０２床	土師器	坏	60%	2.5Ｙ7/3浅黄	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	14.4	5.7	4.4	内面黒色処理
349	ＳＸ０２床	土師器	坏	50%	5Ｙ Ｒ6/6橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	14.2	7.4	4.1	内面黒色処理
350	ＳＸ０２床	土師器	坏	50%	7.5Ｙ Ｒ5/3にぶい褐	〔口～体〕ロクロナデ+底部縁辺ヘラケズリ	〔口～体〕ミガキ	ヘラケズリ再調整	(14.4)	6.5	3.5	内面黒色処理
351	ＳＸ０２床	土師器	坏	60%	10Ｙ Ｒ5/4にぶい黄褐	〔口～体〕ロクロナデ+回転ケズリ＋ミガキ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ＋ミガキ再調整	(16.6)	(5.0)	4.6	内外面黒色処理
352	ＳＸ０２床	土師器	坏	30%	7.5Ｙ Ｒ5/3にぶい褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	(14.0)	(7.2)	(4.2)	内面黒色処理
353	ＳＸ０２床	土師器	坏	15%	7.5Y3/1オリーブ黒	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	－	(13.2)	－	(3.4)	内面黒色処理
354	ＳＸ０２床	土師器	坏	10%以下	10Ｙ Ｒ4/2灰黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
358	ＳＸ０２床	土師器	高台坏	15%	10Ｙ Ｒ4/2灰黄褐	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	不明	－	－	(2.2)	内面黒色処理
359	ＳＸ０２床	土師器	高台坏	15%	10Ｙ Ｒ4/3にぶい黄褐	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ナデ+ミガキ	回転イトキリ	－	－	－	内面黒色処理
360	ＳＸ０２Ｑ２埋土	土師器	高台坏	15%	10Ｙ Ｒ6/2灰黄褐	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	不明	－	－	－	内面黒色処理
361	ＳＸ０２床	土師器	壺	90%	10Ｙ Ｒ4/6褐	〔口～体〕ミガキ	〔口〕ミガキ〔体〕ナデ	ケズリ＋ミガキ	12.3	－	18.0	体部下半摩耗・焼けはじけ顕著
362	ＳＸ０２床	土師器	甕	25%	10Ｙ Ｒ7/4にぶい黄橙	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	ヘラケズリ再調整	－	－	－	
363	ＳＸ０２床	須恵器	大甕	25%	7.5Y5/1灰	〔口〕ロクロナデ〔体〕平行タタキ	〔口〕ロクロナデ〔体〕円形無文アテグ+ナデ	－	－	－	(10.8)	
389	ＳＤ０１埋土	須恵器	甕壺類	10%以下	10Ｙ Ｒ7/6明黄褐	〔口〕ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ	－	－	－	(6.4)	外面自然釉
396	ＸＩＢ５ｅ	土師器	坏	10%	2.5Y3/1黒褐	〔口〕ミガキ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ	－	－	－	内面黒色処理
397	ＸＩＢ２ｃ～４ｃ	土師器	坏	10%以下	7.5Ｙ Ｒ7/3にぶい橙	〔口〕ミガキ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
398	ＸＢ８ｂ	土師器	坏	20%	2.5Y6/2　灰黄	〔口～体〕ナデ+ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
399	ＸＩＢ６ａ	土師器	坏	15%	2.5Y6/4にぶい黄	〔口〕ミガキ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
400	ＸＩＢ２ｃ～４ｃ	土師器	坏	20%	10Ｙ Ｒ6/4にぶい黄橙	〔体〕ナデ+ケズリ	〔体〕ミガキ	ケズリ	－	－	－	内面黒色処理

遺物観察表（土師器・須恵器）

№	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
401	ⅩⅡA区	土師器	坏	65%	10Y R6/4にぶい黄橙	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	回転イトキリ＋ヘラケズリ再調整	－	－	－	体部墨書「井」？有り
402	ⅩⅠB２e	土師器	坏	10%以下	2.5Y6/4にぶい黄	－	－	回転イトキリ	－	－	－	底部墨書有り
403	ⅩⅠB９c	土師器	坏	55%	7.5Y R7/6橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	12.9	5.5	3.2	
404	ⅩⅠB４c	土師器	坏	40%	7.5Y2/1黒	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	13.4	5.1	4.0	内面黒色処理
405	ⅩⅠB４c	土師器	坏	85%	10Y R6/4にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	11.9	5.3	2.6	
406	ⅩⅠB９c	土師器	坏	25%	7.5Y R4/4褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(14.8)	5.0	5.6	内面黒色処理
407	ⅩⅠA８i	土師器	坏	10%	7.5Y R5/6明褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
408	ⅩⅠB６a	土師器	坏	20%	7.5Y R5/6明褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	－	－	－	
409	ⅩⅠA９h	土師器	坏	10%以下	10Y R6/4にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
410	ⅩB10d	土師器	坏	20%	10Y R6/4にぶい黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
411	ⅩⅠA区	土師器	坏	10%	7.5Y R7/3にぶい橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
412	ⅩB区	土師器	坏	10%以下	10Y R5/3にぶい黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内面黒色処理
413	ⅩⅠB２c～４c	土師器	坏	10%以下	7.5Y R6/3にぶい褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
414	ⅩⅡA２j	須恵器	坏	25%	10Y R8/4浅黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	ヘラケズリ再調整	－	－	－	
415	ⅩB10d	土師器	高台坏	10%以下	7.5Y R7/6橙	〔高台〕ロクロナデ	〔高台〕ロクロナデ	－	－	－	－	
416	ⅩⅠB４c	土師器	高台坏	15%	5Y R6/8橙	〔体〕ロクロナデ＋ミガキ	〔体〕ロクロナデ＋ミガキ	切離し不明	－	－	－	内外面黒色処理
417	ⅩⅠB４c	土師器	高台坏	25%	7.5Y R7/6橙	〔台〕ロクロナデ	〔台〕ロクロナデ	切離し不明	－	－	－	
418	ⅩⅠB９b	土師器	高坏	30%	7.5Y R7/6橙	〔脚〕ヨコナデ＋ケズリ＋ナデ・一部ミガキ	〔底〕ミガキ〔脚〕ヨコナデ＋ケズリ	－	－	8.0	(4.1)	内面黒色処理
419	ⅩⅠA10g	土師器	高坏	40%	10Y R6/3にぶい黄橙	〔脚〕ナデ＋ヨコナデ	〔体〕ミガキ〔脚〕ナデ＋ヨコナデ	－	－	－	－	内面黒色処理
420	ⅩⅠB７b	土師器	高坏	15%	5Y R7/3にぶい橙	〔脚〕ケズリ	〔脚〕ナデ	－	－	－	－	
421	ⅩⅡB区	土師器	甕	10%以下	5Y R5/8明赤褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ＋ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	－	－	－	－	
422	ⅩⅠB４c	土師器	甕	10%	10Y R3/1黒褐	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ＋ナデ	〔口～体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
423	ⅩB10d	土師器	甕	20%	5Y R5/4にぶい赤褐	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ＋ケズリ	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ＋ナデ	－	－	－	－	
424	ⅩⅡB７a	須恵器	大甕	10%以下	5Y6/2灰オリーブ	〔体〕格子目タタキ	〔体〕放射状アテグ	－	－	－	－	
425	ⅩⅡB４dⅢ層	須恵器	大甕	10%以下	2.5Y6/1黄灰	〔体〕格子目タタキ	〔体〕円形無文アテグ＋ナデ	－	－	－	－	
426	ⅩⅠB４c	須恵器	甕壺類	10%	5Y4/1灰	〔体〕タタキ＋ロクロナデ＋ケズリ・ハケメ	〔体〕カキメ	－	－	－	－	
427	ⅩⅠB２c～４c	須恵器	大甕	10%以下	N4/　灰	〔体〕平行タタキ	〔体〕平行アテグ＋円形無文アテグ	－	－	－	－	
428	ⅩⅠB２c～４c	須恵器	大甕	10%以下	2.5Y5/1黄灰	〔体〕格子目タタキ	〔体〕円形無文アテグ＋ナデ	格子目タタキ＋ナデ	－	－	－	

第４表　遺物観察表（かわらけ）

No	出土地点	器種（分類）	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存状態	特徴など
364	ＳＤ０１埋土	ロクロ大形	－	－	－	１／４以下	スノコ痕明瞭
365	ＳＤ０１埋土	ロクロ小形	8.5	7.0	1.9	１／４程度	スノコ痕明瞭
366	ＳＤ０１埋土	ロクロ小形	9.2	5.8	1.8	１／４程度	
367	ＳＤ０１埋土	ロクロ小形	9.0	5.8	2.1	１／４以下	スノコ痕明瞭
368	ＳＤ０１埋土	ロクロ小形	8.0	6.0	1.95	１／４以下	
369	ＳＤ０１埋土	ロクロ小形	9.5	7.0	2.2	完形	スノコ痕明瞭
370	ＳＤ０１埋土	ロクロ小形	9.1	6.4	2.1	ほぼ完形	
371	ＳＤ０１埋土	ロクロ小形	8.8	5.8	2.1	３／４程度	
372	ＳＤ０１埋土	ロクロ小形	9.3	6.3	2.3	３／４以上	スノコ痕明瞭
373	ＳＤ０１埋土	ロクロ小形	9.1	5.6	2.5	完形	油煙付着
374	ＳＤ０１埋土	ロクロ小形	8.9	6.0	2.1	完形	スノコ痕明瞭　油煙付着
375	ＳＤ０１埋土	ロクロ小形	9.5	6.2	2.3	完形	スノコ痕明瞭　油煙付着
376	ＳＤ０１埋土	てづくね大形（Ｃ５）	－	－	－	１／４以下	
377	ＳＤ０１埋土	てづくね大形（Ｄ３）	－	－	－	１／４以下	
378	ＳＤ０１埋土	てづくね大形（Ｄ３）	－	－	－	１／４以下	
379	ＳＤ０１埋土	てづくね大形（Ｄ３）	－	－	－	１／４以下	
380	ＳＤ０１埋土	てづくね大形（Ｄ３）	－	－	－	１／４以下	
381	ＳＤ０１埋土	てづくね大形（Ｄ３）	－	－	－	１／４以下	
382	ＳＤ０１埋土	てづくね大形（Ｄ３）	－	－	－	１／４以下	
383	ＳＤ０１埋土	てづくね大形（Ｄ３）	－	－	－	１／４以下	
384	ＳＤ０１埋土	てづくね小形（Ｄ３）	－	－	－	１／４以下	
385	ＳＤ０１埋土	てづくね小形（Ｄ３）	－	－	－	１／４以下	
386	ＳＤ０１埋土	てづくね小形（Ｄ３）	－	－	－	１／４以下	
387	ＳＤ０１埋土	てづくね小形（Ｄ３）	－	－	－	１／４以下	
388	ＳＤ０１埋土	てづくね小形（Ｄ３）	－	－	－	１／４以下	
394	ＳＤ０２埋土	ロクロ小形				１／４以下	
395	ＳＤ０３埋土	ロクロ小形	8.7	6.3	2.45	ほぼ完形	スノコ痕明瞭
429	ＸＩＢ10ｃ　Ⅱ	てづくね大形（Ｄ３）	－	－	－	１／４以下	
430	ＸＩＢ９ｄ　Ⅱ	ロクロ小形	8.5	5.8	2.2	３／４程度	

第５表　遺物観察表（国産陶器・磁器）

No	種類	器種	部位	出土地点	年代など	色調	その他
390	常滑	広口壺	体下	ＳＤ０１埋土埋土	12世紀代	外灰褐色、内自然釉	400と同一か
391	常滑	広口壺か甕	体上	ＳＤ０１埋土埋中	12世紀代	外自然釉、内褐灰色	
392	常滑	広口壺	体下	ＳＤ０１埋土埋土	12世紀代	外灰赤色、内自然釉	402と同一か
393	常滑	広口壺	体下	ＳＤ０２　埋土	12世紀代	外暗赤灰、内褐灰色	
431	白磁	玉縁碗	口縁部	ＸＩＢ９ｃ　Ⅱ	12世紀後半代	灰白色	
432	常滑	甕	体下	ＸⅡＢ４ａ攪乱	12世紀代	外灰褐色、内自然釉	
433	常滑	広口壺	体下～底	ＸＩＢ６ａ　Ⅱ	12世紀代	内外自然釉	
434	常滑	広口壺	体下	ＸⅡＢ４ａ　Ⅱ	12世紀代	内外暗赤褐色	

第６表　遺物観察表（土製品）

No	出土地点	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（ｇ）	備考
60	ＳＩ０５床	紡錘車	4.7	4.75	1.85	47.45	
204	ＳＩ１６床	紡錘車	5.4	5.3	2.6	82.62	

第７表　遺物観察表（羽口）

No	出土地点	種類	長さ（cm）	外径（cm）	内径（cm）	重量（ｇ）	備考
27	ＳＩ０２Ｑ１床	羽口	(8.0)	6.8	2.2	160.7	分析No９
439	ＸⅡＢ６ｅⅡ	羽口	(9.8)	4.2	3.2	137.14	
440	ＸⅡＢ６ｅⅡ	羽口	(8.7)	5.4	3.6	78.1	分析No14
441	ＸⅡＢ１ｂⅡ	羽口	(4.2)	7.0	2.4	48.86	
442	ＸⅡＢ９ｅⅡ	羽口	(2.8)	6.4	2.2	32.8	

第８表　遺物観察表（鉄製品）

No	出土地点	器種	大きさ（cm）			重量（ｇ）	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ		
57	ＳＩ０４埋土	刀子	6.2	1	0.5	7	
61	ＳＩ０５埋土	刀子	7.7	1.3	0.4	8.89	
112	ＳＩ０７埋土	刀子	11.8	10.3	0.4	15.25	４分割　分析No３
113	ＳＩ０７埋土	刀子	4.9	0.9	0.3	2.52	
134	ＳＩ０８ＰＰ７	鏃	7.1	0.6	0.6	3.49	２分割
135	ＳＩ０８埋土	刀子	5.3	1.1	0.3	4.98	分析No１
162	ＳＩ１０埋下	刀子	6.7	1.5	0.3	14.52	
163	ＳＩ１０埋下	刀装具	3.2	1	0.3	3.68	

No	出土地点	器種	大きさ（cm）			重量（g）	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ		
194	ＳＩ１５床面	鉄鏃（方頭斧箭式）	12.4	3	0.5	20.35	２分割　分析No２
223	ＳＩ１８	短刀	31.5	1.8	0.6	75.27	４分割　分析No４
435	ＳＤ０１	刀子	13	1.8	0.4	28.55	２分割　分析No５
436	ＸＩＢ９ｄ	鎌	13.4	3.7	0.5	70.1	２分割　分析No６
437	ＸＩＢ９ｄ	鎌	12.7	2.9	0.4	50.15	分析No７
438	ＸＩＢ９ｄ	鎌	17.2	3.6	0.3	60.91	分析No８
445	ＸＩＢ１ｆ	古銭	2.5	2.5	0.1	2.58	元佑通宝

第９表　遺物観察表（石器・石製品）

No	出土地点	器種	大きさ（cm）			重量（g）	石質	産地	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ				
44	ＳＩ０３床	円礫	10.2	8.2	6.4	730	安山岩	奥羽山脈	
109	ＳＩ０７カマド	有孔石製品	6.7	7.1	1.0	400	凝灰岩	奥羽山脈	
110	ＳＩ０７床	砥石	38.7	18.4	14.1	13000	砂岩	奥羽山脈	６面使用
111	ＳＩ０７床	砥石	8.15	11.2	5.8	680	安山岩	奥羽山脈	３面使用
133	ＳＩ０８床	石鍬	22.8	11.2	3.4	89.9	砂岩	北上山地	内面剥離調整後、基部側敲打調整
161	ＳＩ１０床	磨石	12.7	10	7.3	1300	安山岩	奥羽山脈	片面
168	ＳＩ１３床	円礫	8.5	7	6.3	550	安山岩	奥羽山脈	
169	ＳＩ１３床	敲石	17.7	7.8	5.3	915	安山岩	奥羽山脈	表裏面および右側面に敲打痕跡
185	ＳＩ１４床	砥石	12.9	5.3	5.1	317	安山岩（溶岩）	奥羽山脈	５面使用
193	ＳＩ１５床	砥石	29.5	9	8.15	2700	石英安山岩	奥羽山脈	４面使用（デイサイト）
285	ＳＩ２２ＰＰ２	砥石	8.8	4.9	3.1	189.7	凝灰岩	奥羽山脈	４面使用
323	ＳＩ２４床	円礫	11.1	8.3	5.9	700	安山岩	奥羽山脈	
446	ＸⅡＡ９ｊ　Ⅲ	石鏃	2.2	1.3	0.3	0.9	頁岩	産地不明	凹基
447	ＸＩＢ９ｂ	石鏃	1.5	1.4	3	0.6	頁岩	産地不明	凹基　先端部及び基部片側欠損
448	ＸⅡＢ区	石錐	3.25	1.25	1.0	3.3	頁岩	産地不明	先端部欠損
449	ＸⅡＡ６ｅ	打製石斧	13.4	5.5	3.3	250	ホルンフェルス	北上山地	主に片面調整、裏面は刃部のみ
450	ＸⅡＡ２ｆ	フレイク	6.6	6.5	1.7	85.6	頁岩	奥羽山脈？	礫面１／２以上残す

Ⅵ. ま と め

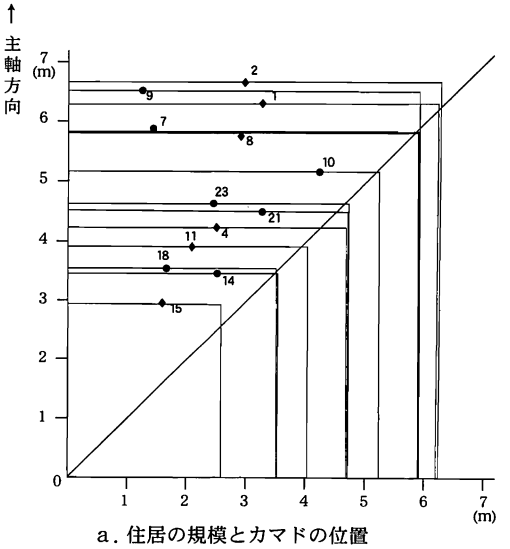
杉の堂遺跡は昭和55年に早稲田大学の桜井清彦氏らによる調査が行われて以来通算24回もの調査が行われ、これまでに縄文時代晩期の居住域や墓域、奈良・平安時代の居住域を中心とした遺跡であることが周知されている。今回対象となったのは段丘の北側縁辺部で、過去の調査で縄文時代晩期の居住域や墓域が確認された東側の段丘崖からは500mほど南東にあたっている。確認された遺構は竪穴住居跡24（古墳１、奈良８、平安15）棟、遺物集中区１カ所、竪穴状遺構４棟、土坑８基、方形周溝３基、溝跡１条、柱穴状小ピット29基である。

調査区は水沢高位段丘上に立地し、北東側の段丘崖に向かい低く緩やかに傾斜するような地形に位置する。竪穴住居跡をはじめとする遺構の大部分は標高41.0mから41.5m付近で多く検出され、段丘基盤礫層が露出する北側、南東側での分布は疎であった。表土除去の結果、調査区本来の地形は北西～南東を結んだラインから南西側へ向かい台地状に緩やかに標高を増しており、遺構の分布が広がるものと予想された。しかしながらこの部分では後世の宅地造成により旧地形が相当の削平を受けているためか、或いは段丘の縁辺を外れるためか遺構の存在が疎であることが判明した。このため南西側の遺構の分布状況については陥し穴状遺構１基を確認したのみで不明な点が多い。調査の結果、調査区は古墳時代後期から奈良～平安時代を主体とする居住域として利用されていたことが判明した。

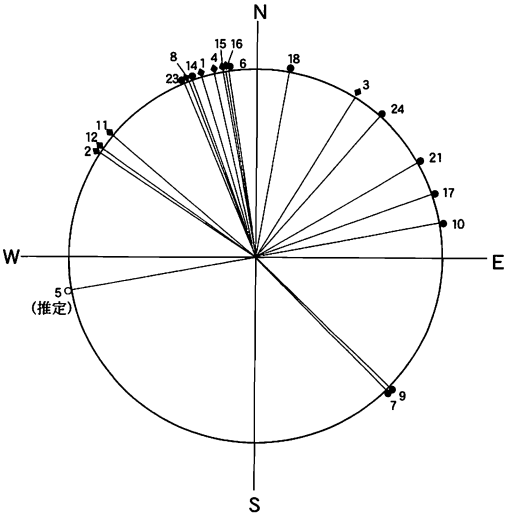
１．竪穴住居跡

〔平面形・規模〕 平面形にはほぼ方形のものと長方形のものとがある。図ａは規模の明確な13棟について示したもので、カマドが設置された壁側の軸ともう一方の軸との相関図である。縦軸に主軸方向の２辺の壁の平均値、横軸に主軸と直交する２辺の壁の平均値をとった。これによると、住居跡の規模は一辺が３ｍ以下のもの（ＳＩ15）、3.5～5.2mのもの（ＳＩ04・10・11・14・18・21・23）、5.8m以上のもの（ＳＩ01・02・07・08・09）の３つのグループに分かれ、3.5～5.2mを示すものが最も多い。縦軸と横軸とを比較すると、縦軸が長いもの４棟、横軸が長いもの４棟、縦軸・横軸ともほぼ同じもの５棟であり、縦軸・横軸とも長さにおいてはほとんど差が見られない。

〔重複関係・拡張〕 竪穴住居跡においては、同一の時代間での遺構同士の重複は見られない。拡張が認められたのは平安時代のＳＩ21１棟のみである（ＳＩ21→ＳＩ07）。ＳＩ21では東壁を80cm、西壁を70cm、北壁を130cmほど拡張し、床面積が20.99m²から36.91m²に増えている。これに伴ってカマドは東側から南側へ移動し、煙道部の構造も刳り貫き式から壁面で短く立ち上がるものへと変化している。



ａ．住居の規模とカマドの位置



ｂ．住居跡の主軸方向

第10表　竪穴住居跡一覧

	規模（m）	壁高(cm)	床面積(m²)	主軸方向	カマドの種類	柱	プラン	付属施設	重複関係	備考
SI01	6.20×6.40	15～28	37.05(推定)	N－17°－W	掘り込み（推定）	G	隅丸方形	壁溝（西・南・東壁）	SI24と重複、これにより切られる	SI02構築時の不要礫を廃絶後のSI01住内へ廃棄か？
SI02	6.48×6.90	2～8	44.08(推定)	N－57°－W	掘り込み	C(推定)	隅丸方形	壁溝（西壁と南壁の一部）・ピット		近接するSI01よりは新しい？
SI03	(6.26)×5.95	10～20	38.66(推定)	N－32°－E	不明	F	隅丸方形	壁溝（西；北・東壁）・ピット	SD01方形周溝と重複、これに切られる	
SI04	4.24×4.65	12～20	18.23	N－13°－W	掘り込み	G	隅丸方形	壁溝（南・西・北壁）・ピット		
SI05	－1.44×3.26	4～9	8.11(推定)	N－100°－W	不明	H	方形基調（推定）			北側段丘崖に位置
SI06	4.60×(4.54)	14～17	22.56	N－9°－W	不明	B	隅丸方形	壁溝（ほぼ全周する）・ピット	本調査前トレンチで破壊	SI04、SI16などと規模や軸方向は似るが、4本柱を有する点で異なる。
SI07	6.00×5.96	12～26	36.91	N－136°－E	壁面で短く立ち上がる	D	隅丸方形	壁溝（西・北・東壁）・ピット	SI21から拡張された。こちらが新しい	平角材の柱穴を有する
SI08	5.80×5.98	21～39	37.45(推定)	N－21°－W	掘り込み	A	隅丸方形	壁溝（ほぼ全周する）・ピット	SI18．SX03と重複。これにより切られる	SI01とカマド軸線がほぼ同じ
SI09	6.60×5.64	7～14	33.20	N－134°－E	壁面で短く立ち上がる	G	隅丸方形	ピット		SI07とカマド軸線が同じ
SI10	5.14×5.22	11～18	26.23	N－79°－E	掘り込み～立ち上がり？	C	隅丸方形	壁溝（ほぼ全周する）・ピット		
SI11	3.60×4.19	23～31	13.38	N－50°－W	掘り込み	F	隅丸方形		SK03と重複し、これに切られる	SI02とカマド軸線がほぼ同じ
SI13	4.40×5.48	2～7	22.97	不明	壁面で短く立ち上がる？	G	隅丸長方形基調	ピット		
SI14	3.53×3.48	20～28	9.99	N－21°－W	掘り込み	H	隅丸方形	ピット		
SI15	2.95×2.56	10～20	7.01	N－11°－W	刳り貫き	G	北西隅を欠く方形基調	ピット		
SI16	－3.36×3.82	7～24	13.27(残存)	N－10°－W	掘り込み	G	隅丸方形	壁溝（西；北・東壁）・間仕切り溝		
SI17	(5.49)×5.35	1～4	28.77	N－70°－E	不明	G	隅丸方形基調			
SI18	3.75×3.50	31～34	11.54	N－10°－W	掘り込み	H	隅丸方形		SI08と重複、これを切る	
SI19	5.07×－2.20	10～16	14.53(残存)	不明	不明	G	隅丸長方形基調	ピット		
SI20	－2.10×3.70	7～12	12.65	不明	不明	H	隅丸方形基調			
SI21	4.51×4.70	3～15	20.99	N－59°－E	刳り貫き	H	隅丸方形	壁溝（北・西・南壁）	拡張されてSI07となる、こちらが旧い	
SI22	－3.20×－3.75	4～16	22.98(推定)	不明	不明	G	隅丸長方形基調	ピット		
SI23	4.64×4.70	20～30	12.43	N－23°－W	掘り込み（推定）	E	隅丸方形	ピット		
SI24	3.62×4.85	8～14	16.37	N－41°－E	掘り込み	G	隅丸方形	ピット		

〔焼失住居と炭化材〕 検出した24棟中、焼失住居の可能性のあるものは５棟確認された（ＳＩ03・08・10・11・22)。出土遺物はほとんど出土しないのが多数であるが（ＳＩ11・22)、なかには廃棄された状況を示すものもある（ＳＩ03・08)。炭化材の検出状況は、大半の住居跡で出土量が少なく、あっても本来の形状や上屋構造等を復元できるものはほとんど無い。その中で炭化材が比較的良好な状態で出土したのはＳＩ03である。本住居跡では南東側床面より柱或いは上屋の構築材の可能性が考えられる長さ60～100cm、幅10cm前後、厚さ2.5cm前後のクリ材が検出された。比較的残存状態が良好であった炭化材にアルファベットのａ～ｏまで番号を付した（第14図参照)。ｏ・ｐとｑは直行しており、壁際に沿って構造を支えた壁柱穴の可能性がある。検出された木材はほとんどが厚さ２～2.5cm、幅10cmほどの角材で、柾目が多く、一定の規格性があることが確認できた。また、出土した炭化材について、樹種同定を行っている。対象としたのはＳＩ03・12・11である。結果はそれぞれクリ材（ＳＩ03)、ケヤキ材（ＳＩ11・12）という鑑定結果を得た。

〔壁および壁溝〕 本調査区における壁高の残存値は２～39cmで、南東側に位置するものほど残存状態は概して不良となる。壁溝が確認されたのは24棟中10棟であるが、残存不良で溝の識別が困難であったものもあり、詳細が不明なものも存在する。壁溝が確認されなかったものは14棟存在する。床面積14m²以上の住居跡に壁溝が確認され、これより小形の住居跡では壁溝が見られないといった傾向が認められる。また、床面積36m²以上の住居跡ではすべてに壁溝をともなうことが確認されている。

〔柱穴および柱穴配置〕 住居跡24棟のうち明確に柱穴配置が確認されたものは６棟であり、これらは中型、大型のものである。これ以外の住居跡では、全く柱穴が確認されないか、検出されても浅い小ピットが１個ないしは数個点在する程度である。また、検出したピットのうち、深さのしっかりしたものは柱穴と判断できるが、浅いものについては柱穴と言い難いものも存在している。これらの検出状況を次のように分類した。

Ａ類：壁に近いところに４本の主柱穴をもつもの（ＳＩ01・08・02：ＳＩ02は推定)

Ｂ類：やや中央よりに４本の主柱穴をもつもの（ＳＩ06)

Ｃ類：３本の柱穴がＬ字状に配置されるもの（ＳＩ10・02：ＳＩ02は推定)

Ｄ類：Ａ類のカマド側の２本がなく、カマドと反対側の２本で構成されるもの（ＳＩ07)

Ｅ類：カマドの構築される側の壁際に２本の浅い柱穴状のピットを持つもの（ＳＩ23)

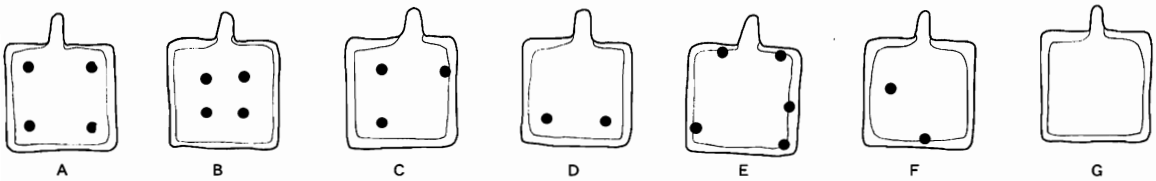
Ｆ類：壁に近いところに浅い柱穴が複数配置される可能性のあるもの（ＳＩ03)

Ｇ類：柱穴状の浅いピットが１～数個検出されるが、柱穴配置が不明のもの(ＳＩ15・09・11・24・04・17)

Ｈ類：柱穴がまったく検出されないもの（ＳＩ05・14・18・20)

〔間仕切り溝〕 ＳＩ16の西壁の北壁寄り1/4ほどの床面で長さ11.3cm、幅５～７cm、深さcmの浅い溝跡を検出した。溝の先端部には径16cm、深さ8.5cmほどの円形の小ピットが掘り込まれている。位置、形状から住居跡の間仕切り溝である可能性が考えられる。

〔カマドの方向〕 141頁図ｂはカマドの構築された方向を示した模式図である。対象としたのはカマドの構築位置が明確な20棟である（ＳＩ01～12、ＳＩ14～18、ＳＩ21、ＳＩ23、ＳＩ24)。方向は北を基準として西に振れるものをＮ－○°－Ｗ、東に振れるものをＮ－○°－Ｅとして表記した。これによるとカマドは16方位



Ｃ．柱穴配置凡例

第11表　岩手県内炭化種子出土遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	時期	種別	共伴土器	遺体	出土状況・備考
1	馬場野Ⅱ	九戸郡軽米町	縄文・弥生	集落跡	縄文・弥生土器	オニグルミ・ナラ・クリ・ハシバミ	住居跡・焼土遺構より出土
2	上水沢Ⅱ	九戸郡大野村	縄文・弥生	集落跡	縄文土器	オニグルミ	住居跡より出土
3	君成田Ⅳ	九戸郡軽米町	縄文・古代	集落跡		クリ・クルミ・ドングリ	縄文の土坑、縄文と古代の住居跡から出土。
4	赤坂田Ⅰ	二戸郡安代町	縄文・平安	集落跡		トチ	時期不明（縄文？）の土坑より大量に出土
5	大地渡	稗貫郡石鳥谷町	縄文・平安	集落跡		トチ・クリ	住居跡・床面の貯蔵穴より出土
6	兎Ⅱ	江刺市愛宕字兎	弥生中期	集落跡	弥生土器	籾圧痕	包含層出土の土器片（壷）の内面に付着
7	常磐広町	水沢市佐倉河	弥生後期	集落跡	弥生土器	籾圧痕	土器片に付着
8	膳性	水沢市佐倉河字膳性	奈　良	集落跡	土師器	籾圧痕	住居跡より出土の土師器（坏）に付着
9	今松	岩手郡岩手町一方井	奈　良	集落跡	土師器	籾圧痕・ヒエ痕	住居跡より出土の土師器（甕）に付着
10	上野山	久慈市長内町	奈　良	集落跡	須恵器模倣土師器	籾圧痕（陸稲？）	住居跡より出土の土師器（坏）に付着
11	銭瓶平	浄法寺町銭瓶平	奈良・平安	集落跡	土師器	籾圧痕	
12	稲荷田	水沢市佐倉河字平沢	古　代	集落跡	土師器	籾圧痕	
13	細越Ⅰ	宮古市	古　代	集落跡	土師器	コナラ・アワ？	竪穴住居跡のカマド跡から出土。貝殻・蟹殻をともなう
14	北舘	一戸町一戸字北舘	古　代	集落跡	土師器	栽培種以外の種子	焼失住居跡より出土
15	厨川柵跡	盛岡市安倍館町	平安？	柵跡		米	
16	胆沢城跡	水沢市佐倉河	平　安	官衙		籾	柵の掘立柱柱穴、柵杭の下から出土
17	真城雷神	水沢市真城雷神	平　安	集落跡		米	
18	似内	花巻市上似内	平　安	集落跡	土師器	米・アワ・クルミ・コムギ	焼失住居跡の床面、煙道埋土から出土
19	長者屋敷	松尾村松尾大花森	平　安	集落跡		籾圧痕	
20	下谷地Ｂ	江釣子村北鬼柳	平　安	包含層		籾圧痕	
21	中平	九戸郡野田村野田中付近	平安（9ｃ）	集落跡	土師器・須恵器	米	焼失住居跡の箱状木製容器より出土
22	上平沢新田	紫波町上平沢新田	平安（9c～10c）	集落跡	土師器・須恵器	米	焼失住居跡の床面に散在して出土
23	猫谷地	江釣子村猫谷地	平安（9c～10c）	集落跡	土師器	米・籾圧痕	竪穴住居跡より出土
24	田中Ⅲ	一戸町岩舘字田中	平安（9c～10c）	集落跡	土師器・須恵器	米	焼失した竪穴状遺構の床面より出土
25	田中Ⅳ	一戸町岩舘字田中	平安（9c～10c）	集落跡	土師器・須恵器	米	焼失した竪穴状遺構の床面より出土、一部は穂についたままであった
26	馬場平	一戸町岩舘字馬場平	平安（10ｃ）	集落跡		コムギ	
27	機織山Ⅱ	一関市機織山	平安（10ｃ）	集落跡	土師器	米・籾・アズキ	米・籾は塊状。小豆は土師器の甕から大量に出土
28	川向Ⅲ	九戸市	平安（10ｃ）	集落跡		籾圧痕	
29	上野Ｂ	一戸町一戸字上野	平安（10c～11c）	集落跡	土師器	籾圧痕	内黒坏内面に付着
30	江差家	九戸郡九戸村江差家	平安（10c～11c）	集落跡	土師器	米・アワ・オオムギ・アズキ	焼失住居跡の床面より出土
31	五庵Ⅰ	二戸郡浄法寺町	平安	集落跡	土師器	オオムギ・アワ・ヒエ	複数の住居跡より出土
32	駒焼場	二戸市	平安～中世	集落跡	土師器	米・オオムギ・マメ・アワ	焼失住居跡の床面より出土
33	馬場	二戸市	古代～中世	集落跡	土師器	米・マメ・アサ	焼失住居跡その他から出土
34	五庵Ⅱ	二戸郡浄法寺町	中・近世	城館跡		米・籾・オオムギ・アズキ・アワ・ヒエ	住居跡、柱穴より出土
35	沖Ⅰ	二戸市	中世	集落跡		米・アワ・マメ・コムギ	調査区内、住居の地床炉から出土
36	岩谷堂城跡	江刺市岩谷堂字舘下	中世	城館跡		米	方形の竪穴住居跡より塊状で出土
37	水神	安代町字土沢	中世	集落跡		米	
38	古館	花巻市中根子字古館	中世	城館跡		米・コムギ・アズキ・葛	建物跡床面より出土
39	館山	金ヶ崎町字上宿	中世	城館跡		米	
40	伊勢館	大東町鳥海字清水	中世	城館跡		米	
41	繋Ⅱ	盛岡市繋字湯の館	中世	集落跡		籾殻	
42	岩崎城	和賀郡和賀町岩崎	中世（15c～16c）	城館跡		米	
43	一戸城跡	一戸町一戸字北舘	中世（15c～16c）	城館跡		籾殻・米塊	昭和54年度調査分
44	一戸城跡	一戸町一戸字北舘	中世（15c～16c）	城館跡		米・オオムギ・ダイズ・アワ・ソバ	昭和58年度調査分
45	一戸城跡	一戸町一戸字北舘	中世（15c～16c）	城館跡		米・籾・ダイズ・ヒエ・アワ?	昭和59年度調査分
46	柳田館	紫波町片寄字中平	中世（16ｃ）	城館跡		米・オオムギ・コムギ・アズキ・ヒエ・ソバ	
47	大瀬川Ｃ	石鳥谷町字大瀬川	中世（16ｃ）	城館跡		米・オオムギ・アズキ・ヒエ・ソバ	
48	上尾田の館	九戸郡軽米町	中・近世	城館跡・包蔵地	中国磁器・国産陶器	イネ・アワ・マメ	掘立柱建物跡の柱穴から布にくるまれて出土
49	高山遺物包含地	水沢市佐倉河西高山	不明	包含地		米・籾	炭化した笹と共に出土
50	飯岡林崎	盛岡市下飯岡	平安	集落跡	土師器	イネ	焼失住居跡から塊状で出土
51	杉の堂	水沢市神明町	平安（10ｃ）	集落跡	土師器・須恵器	イネ・ソバ・マメ科・ブナ科コナラ属・オオムギ・コムギ・アワ・ヒエ属・オニグルミ他	焼失住居跡の床面から出土

（齋藤麻紀子）

でいう西南西～南東の間に構築されており、北北西付近にピークが見られる。◆、●の記号はそれぞれ出土遺物による時期差を介在させて示したものである。これによると◆（８世紀代）は北西と北北西の２カ所、●（９世紀初頭から10世紀前半代）は北北西から南東にかけて集中するような傾向が見られる。なかでも９世紀初頭から10世紀前半代の住居跡に属するカマドは北北西から南東にかけて、特にピークを持たずに散在する傾向が認められた。

〔平角材を用いた柱について〕本遺跡ではＳＩ07から平角材を用いたとみられる柱穴が２基確認されている。堀り方は長径43～52㎝の楕円形で、長辺30㎝×短辺９～12㎝の断面が短冊形を呈する柱当りを確認した（カラー図版参照）。堀り方底面～側面には拳大の扁平礫が認められることから、根固め石と推測される。同様な平角材を用いた柱穴の例としては、江戸時代（文化14年）に秋田県北秋田郡脇神村小勝田（現鷹巣町小ヶ田）で洪水の際に川端の畑地が崩れて現れた埋没家屋の記録がある。この家に関する記録は菅江真澄が『贄能辞賀楽美』に記した聞き書き、平田篤胤が『皇国度制考』に引いた岡見知康の実見記、黒沢道形が『秋田千年瓦』に記した聞き書きの３つが知られる（奈良・豊島1967、永井1975）。このうち黒沢道形の書中には、「柱の末を矢筈の如く削剥ぎて、其刻みへ横木を架し屋根を蓋いたるなり」と記した一節がある。すなわち柱頂をＵ字状に穿っていたとあり、このことは岡見知康の描いた柱図にも同様に示されているという。知康の計測では、その中の１本は長さ1.87m、幅33㎝、厚さ９㎝でかなり扁平な断面を持つ、いわゆる平角の柱であったとされる。また昭和34年に男鹿市の小谷地遺跡が発掘調査されると、そこでも薄くて幅広の材を柱とし、頂部をＵ字状に穿って桁を納める状況が確認されたことから、この柱形態が秋田地方における古代家屋の特徴として指摘されている。小谷地遺跡の調査の結果、発見された住居跡の時期は、大量の出土遺物（墨書土器含む）から推定して平安時代の中期ないし後期に属するとされる。本遺跡で発見された平角材を用いた柱穴は上部構造が不明であるが、特徴的な形態を持つ柱の空間的な分布を示す好資料といえよう。

２．住居跡以外の遺構について

竪穴状遺構

本遺跡では竪穴状遺構として３棟が確認されている。「竪穴状遺構」という呼称は、居住を想定させうる付属施設を伴わないことから「竪穴住居跡」と分離する意味で使用するものである。また、明確な柱穴が伴わないことから「竪穴建物跡」（渡辺修一1992）とも異なる呼び名を冠するものである。

出土遺物によって遺構の時期が推測できるのはＳＸ02の１棟のみである。ＳＸ02は焼失遺構で、西壁際床面から炭化種子が多量に出土している。出土の状況は西壁際に65×27㎝の不整な楕円の範囲で散在していたもので、容器に入っていたような痕跡は確認できなかった。炭化構築材はほとんど残存しておらず詳細は不明であるが、棚状の施設などから落下して散らばったような状況も推測できる。調査では、この範囲の床面堆積土を対象にフローテーションを行った結果、116.27ｇ以上の炭化種子が得られた。東京都立大学の高瀬氏の分析によると、内訳はオニグルミ、タデ科、ソバ、マメ科、シソ属、イネ、オオムギ、エノコログサ属、アワ、ヒエ属、ヒエ、不明種子である。また、Ｐ１からはブナ科コナラ属、マメ科、ブドウ科、イネ、コムギ、ヒエ、不明種子が、Ｐ３からはソバ、シソ属、イネ、オオムギ、エノコログサ属、ヒエが検出されている。ＳＸ02の重量比ではソバが最も多く、床面だけで95.58ｇが検出されている。ついで多いのはヒエで、8.63ｇが出土している。イネは44個出土しており、このうち１点をＡＭＳによる放射性炭素年代法で測定したところ、10世紀代に属する可能性が高いという結果が得られている（分析鑑定の項参照）。マメ科は確実なものが５点出土している。このほか、炭化時に発泡した可能性のあるマメ科植物が12.06ｇ出土している。本

遺跡の炭化種子は分析の結果、キビを欠きながらも栽培種を中心とした組成であり、明らかに人為的に集積されたことを示すものであることが判明した。県内では現在までのところ、炭化種子の発見例はそれほど多くなく、(第11表　岩手県内炭化種子出土遺跡一覧参照)、近年では盛岡市の飯岡林崎遺跡で、塊状の炭化米が出土した例や、北上市の猫谷地遺跡で長洞甕のなかから炭化米が出土した例が存在する（尚、未焼成であるが胆沢城跡からも籾に入った米が出土している)。穀物との関連で述べると、本遺跡では籾痕付土器が3点発見されている（46、246、298)。貯蔵容器である大甕の存在、炭化種子が多量に出土した状況などから判断すると、本遺構の性格としては食料庫に類するような機能を想定するのが適当と思われる。

方形周溝

本遺跡では3基の方形周溝が北側段丘崖付近から互いに近接、重複して確認されている。そのうちＳＤ01は長軸10m、短軸８ｍを測り、平面形はカタカナのコの字形を呈するものである。覆土中からはかわらけ(京系のてづくね・在地系のロクロが共伴)、常滑焼の壺甕類、また検出層位は遺構検出面と同位かは不明であるが、周辺からは白磁の玉縁碗破片など12世紀後半代に属する遺物が出土している。一方ＳＤ02・03はＳＤ01の６ｍほど北西方に位置しており、互いに重複関係にある。ＳＤ02の覆土からもまた12世紀後半代のかわらけが１点出土した。これらのかわらけには、製法の違いと投棄状態に特徴がみられた。すなわち手づくねかわらけは破片のみで出土し、接合関係がほとんど認められないのに対し、ロクロかわらけは完形に近い個体が多く、その中に煤状の付着物が認められるものが存在するということである。この煤状の付着物はてづくねかわらけには認められず、両者の違いには投棄者の何らかの意図が介在すると考えられる。また、遺物はすべて底面より浮いた地点から出土しており、埋没の過程で投棄されたものと判断された。本遺構の南西側に混入する多量の礫については構築材崩落層か、人為的な投棄によるものの双方の可能性が考えられる。

次に類似例について述べる。本遺跡のものと類似する遺構が確認された遺跡としては岩手県紫波郡所在の墳館遺跡、静岡県磐田市所在の一の谷中世墳墓群遺跡などが挙げられ、それぞれ10世紀～13世紀、13世紀～16世紀の年代が与えられている。中でも墳館遺跡の方形周溝は東側を開口部とするものが多く本遺跡のものと形態が共通する。墳館遺跡ではほかに墳墓群が確認されており、火葬骨が出土している。本遺跡において墳墓と断定できるような証拠は得られなかったが、類似例との比較から総合的に判断すれば、墳墓、あるいは同族の共同墓など宗教上の施設であった可能性が高いと考えられる。

２．竪穴住居跡出土の土器

掲載した土師器および須恵器片は総数367点である。そのほとんどは竪穴住居跡からの出土が多く、その大多数が破片資料である。カマドの構築材として使用されたものや、床面に廃棄されたような状態で出土したものが多い。出土遺物の遺構内での接合率は高いが、遺構間での接合率は低く、ＳＩ01とＳＩ02で接合関係が認められたのみである。また、上部が削平を受けており、堆積土の残存状態は概して不良であるが、セット関係を知ることのできる出土状況が数棟で確認できた。ただし、混入とみられる遺物が床面近くから出土する状況も見られ、攪乱も多い状況となっている。対象となる器種には坏、高台坏、双耳坏、高坏、鉢、甑、長胴甕、球胴甕、甕壺類、大甕がある。なお、杉の堂遺跡は来年度も調査が予定されていることから、今回は簡単なまとめのみを行う。

ＳＩ01からＳＩ24までの出土遺物を床面出土遺物とカマドの構成材に限って集成したのが第112図～第117図である。ここではこれらの資料を概観した後、おもな器種である坏（高台付坏）と甕（甑）に絞ってそれぞれの特徴をまとめる。

ＳＩ０１：土師器坏４点・高坏１点・甕３点で構成される。坏は底部平底風を呈し体部に弱い稜を持ち、内湾気味に立ち上がるもの（１・３）、丸底を呈し口縁部まで内湾して立ち上がるもの（２）の二種類がある。５は器形が判然としないが体部上半に弱い稜をもつことから前者に近いものであろう。甕は３個体出土している。口縁部形状には大きく外反するもの（18）と、外反するもの（17）、外傾するもの（13）などがある。胴部形状には上半がやや張るもの（17）、それほど張らないもの（13・18）がある。

ＳＩ０２：土師器甕１点が出土している。胴部は扁平な紡錘形で口縁部直立気味に外反する。

ＳＩ０３：土師器坏４点・高坏２点・鉢１点・甕３点で構成される。坏は平底風を呈し、体部の下半～中程で稜を持ちやや内湾しながら口縁部に至る器形を呈する（29・30・31）ものと、稜を持たないもの（28）がある。甕は３点が出土している（35・36・40）。35は胴部の中程に張り出しを持つもので、口縁部は外反しながら大きく開く。36、40は胴部上半に張り出しを持つもので、口縁部はやや外傾しながら開く。

ＳＩ０４：土師器坏５点・鉢１点・甕２点・球胴甕１点で構成される。坏は平底風～丸底を呈する。体部はやや内湾しながら立ち上がり、胴部中央～上半部に沈線あるいは稜が形成される（45・50）ものと、稜や沈線を持たないもの（46・48）とがある。甕は１点が出土している（53）。球胴甕は１点が出土しているが、全体の器形は不明である。

ＳＩ０５：土師器坏１点・甕１点で構成される。坏は特徴的な器形を呈し、口縁部と体部との接続部分が外側において稜線を形成するものである（58）。甕は器厚がやや厚く、胴部中程でやや張り出す。

ＳＩ０６：須恵器坏１点、土師器鉢１点・甕２点で構成される。坏は製作に際してロクロを使用するもので、底部の切離し技法は回転ヘラケズリである（66）。甕は製作に際してロクロを使用しないもの（76）とロクロを使用するもの（77）がある。前者の甕の器形は胴部上半でやや膨らみを持ち、口縁部やや外傾して口唇に至るものであるが、後者は胴部の形状がより丸みを帯び、口唇部の形状がやや外反の強いものである。

ＳＩ０７：須恵器坏３点、土師器坏３点・高坏１点・甕６点、須恵器甕壺類２点で構成される。坏の制作に際してはいずれもロクロが使用されている。底部切離し技法は回転イトキリで、切り離し後にヘラケズリ再調整されるものが卓越する。高坏は従来の器種構成の観点から混入の可能性が高い。甕は製作に際してロクロが使用されないもの（95～97）と、使用されるもの（100・102・103）の両者がある。ロクロが使用されない甕の口縁部は長く「く」の字状に外反し、最大径を口径部に持つもの（96）と、口縁部が短くやや直立するような形状で、体部の最大径が口径とほぼ同じであるもの（95）がある。ロクロを使用して製作されるものにはロクロ調整以前のタタキ目が見られるもの（103）と、見られないもの（100・102）があり、口縁部～口唇部形状には「く」の字形に外反し、口唇部の下が引き出されるような形状のもの（102）、口縁部が非常に短く外反するもので、口唇部の上端がつまみ上げられるような形状のもの（100）がある。

ＳＩ０８：土師器坏４点・高坏１点・甑１点・鉢１点、甕５点・球胴甕２点で構成される。坏は底部丸底で体部中程に稜を持つ（114・115・117）。甕は胴部が膨らみを持たず扁平なもの（125）、中央～上半にかけてやや膨らみをもつもの（127・126・125・129）などがある。球胴甕は２点が出土している（131・132）。

ＳＩ０９：土師器坏１点のみ該当する。136は製作に際してロクロが使用されるもので底部は回転イトキリ後、ヘラケズリ再調整される。内面はミガキ調整後、黒色処理される。

ＳＩ１０：土師器双耳坏１点・甕３点、須恵器坏４点、甕壺類１点で構成される。坏は床面～カマドから出土するものはすべて須恵器のみであり、特徴的な様相を呈する。底部の切り離し技法は回転イトキリのみで、再調整は認められない。土師器の双耳坏は１点が出土している。類例としては盛岡市志波城跡などから出土した例がある。甕は製作に際してロクロを使用しないもの（155）と、使用するもの（157・158）がある。後者２点は同一個体の可能性がある。底部の切り離し技法は回転イトキリである。

ＳＩ１１：坏１点・甕２点で構成される。坏は丸底を呈し、体部中央に稜を持つ。甕は口縁部が長く「く」の字形に外反し、最大径が口径にあるもの（165）と、口縁部がやや直立し、胴部上半部に最大径を持つもの（166）がある。

ＳＩ１４：須恵器高台坏１点、土師器坏１点・甕５点・堝１点、須恵器甕壺類１点で構成される。土師器坏、須恵器高台坏はロクロを使用して製作される。170は土師器の坏で、口径に比して底径が大きい。底部の切り離しは回転イトキリによる。173は須恵器の高台坏で、付け高台である。甕は５点が出土しているが、すべてロクロを使用して製作されている。口縁部の形状は「く」の字状に外反し、胴部上半に最大径を持つものが大半で、口縁部の形状によって口唇部の下が引き出されるもの（176)、口唇部の断面が丸く内湾するような形状のもの（175)、口唇部の上端がつまみ上げられるような形状のもの（178）が見られる。

ＳＩ１５：土師器坏１点、高坏１点、甕４点で構成される。製作に際してロクロは使用されない。坏は丸底を呈し、体部中程に弱い稜を持つもので口縁部は外傾する。器厚は薄い。甕は器径の歪みが大きく雑な印象のものが多い。口縁部は緩やかな「Ｓ」字状を呈し、胴部上半部（191・192）中央部に最大径を持つものである（190)。189は底部丸底を呈する。

ＳＩ１６：甕３点、球胴甕１点で構成される。ロクロは使用されない。甕は口縁部が直立気味に外傾し、口縁部に最大径を持つ（198）ものと、胴部中央がやや張る紡錘形を呈するものがある（197)。

ＳＩ１７：須恵器坏１点、土師器坏１点・甕３点、須恵器大甕１点で構成される。206は須恵器坏で底部径が口縁部径に比して大形である。底部は切り離し後、弱いヘラケズリ再調整される。205は土師器坏で、底部径が口縁部径に比して大形である。底部は切り離し後、弱いヘラケズリ再調整される。甕は３点が出土している。ロクロが使用されないもの（208）とロクロを使用して製作されるもの（207・209)、があり、前者は口縁部が長く「く」の字状を呈し、外反するものである。底径は口径の三分の一ほどで、口径に最大径を持つ。後者は口縁部形状で細分され、口縁部短く外反して口唇部の断面が角張り、その部分がやや凹むものと、口縁部「く」の字形で、口唇部の上端がつまみ上げられるような形状を呈する。209は胴部の中央に最大径を持つものである。

ＳＩ１８：須恵器坏５点、土師器坏１点・甕４点、須恵器長頸瓶１点で構成される。坏類では須恵器が卓越する。須恵器坏は底部から直線的に立ち上がり口唇部に至るもの（214)、やや内湾しながら口唇部に至るもの（216・213)、やや内湾しながら立ち上がり口唇部やや外反するもの（215）などがある。底部の切り離し技法は回転ヘラキリ（213・215)、回転イトキリ（214）がある。土師器坏は底部からやや内湾して立ち上がり口唇部外反するものがある（212)。底部の切り離し技法は回転イトキリである。甕は３点が出土しているが、ロクロ使用しないもの（219・220)、ロクロ使用するもの（218）があり、後者はロクロ調整前のタタキ目を持つ。

ＳＩ１９：土師器坏11点、高台坏２点、甕１点で構成され、すべて製作に際してロクロが使用されている。須恵器は皆無である。坏は法量が小形のものが混在する（224・233・236・226・227・230)。器形は底部から口唇部まで内湾しながら立ち上がるもの（227・237・242)、もしくは口唇部に至ってやや外反するもの（235・232・224・233・231・226・236・230）の両者が見られる。底部の切り離し技法は回転イトキリが多数であるが、切り離し後にヘラケズリ再調整が施されるものも存在する。甕は口縁部が非常に短く外反するもので口唇の上端部がつまみ上げられるような形状を呈する。最大径を胴上部付近に持つ。

ＳＩ２０：須恵器坏１点、土師器坏３点・甕１点で構成され、すべて製作に際してロクロが使用されている。坏は土師器・須恵器ともに法量がやや小形のもの（255・257）が見られる。器形は底部から内湾しながら立ち上がり口唇部に至るもの（256・257）と口唇部に至り外反するもの（253・255）とがある。底部の切り離

し技法は回転イトキリされるもの（253・255・256）、切り離し後ヘラケズリ再調整されるもの（257）がある。

ＳＩ２１：須恵器甕壺片２点、土師器甑片１点・甕片２点で構成される。268のみロクロを使用して製作される。266は土師器の甕で、口縁部外傾しながら開く。胴部上半に膨らみをもつものである。265は単孔式の甑で、上半部を欠いており全体の器形は不明である。外面にはヘラケズリ調整前に施されたタタキ目が残る。内面はハケメ・ナデ調整される。

ＳＩ２２：須恵器坏１点、土師器坏４点・鉢片１点、甕片１点で構成される。すべてロクロを使用して製作されたもので、底部は判明するものはすべて回転イトキリされる。内面ミガキ＋黒色処理されるもの(272・274・276）と、内外共にロクロナデ調整されるもの（271・273）がある。275は須恵器坏である。280は土師器の長胴甕で、外面上半部ロクロナデ、下半部ケズリ調整、内面ナデ調整される。

ＳＩ２３：土師器坏２点、須恵器坏１点、土師器鉢１点、甕１点、球胴甕１点で構成される。土師器坏はロクロを使用して製作されるもの（293）と、ロクロを使用しないもの（294）の両者が存在する。前者の坏は底部切り離し後ヘラケズリ再調整されるもので、底径も比較的大きなものである。300の須恵器坏は底部回転ヘラキリされる。304は土師器長胴甕で、タタキ成形を経てロクロナデ調整、ケズリ調整される。306の球胴甕は外部からの混入の可能性が高く、ここでは除外する。

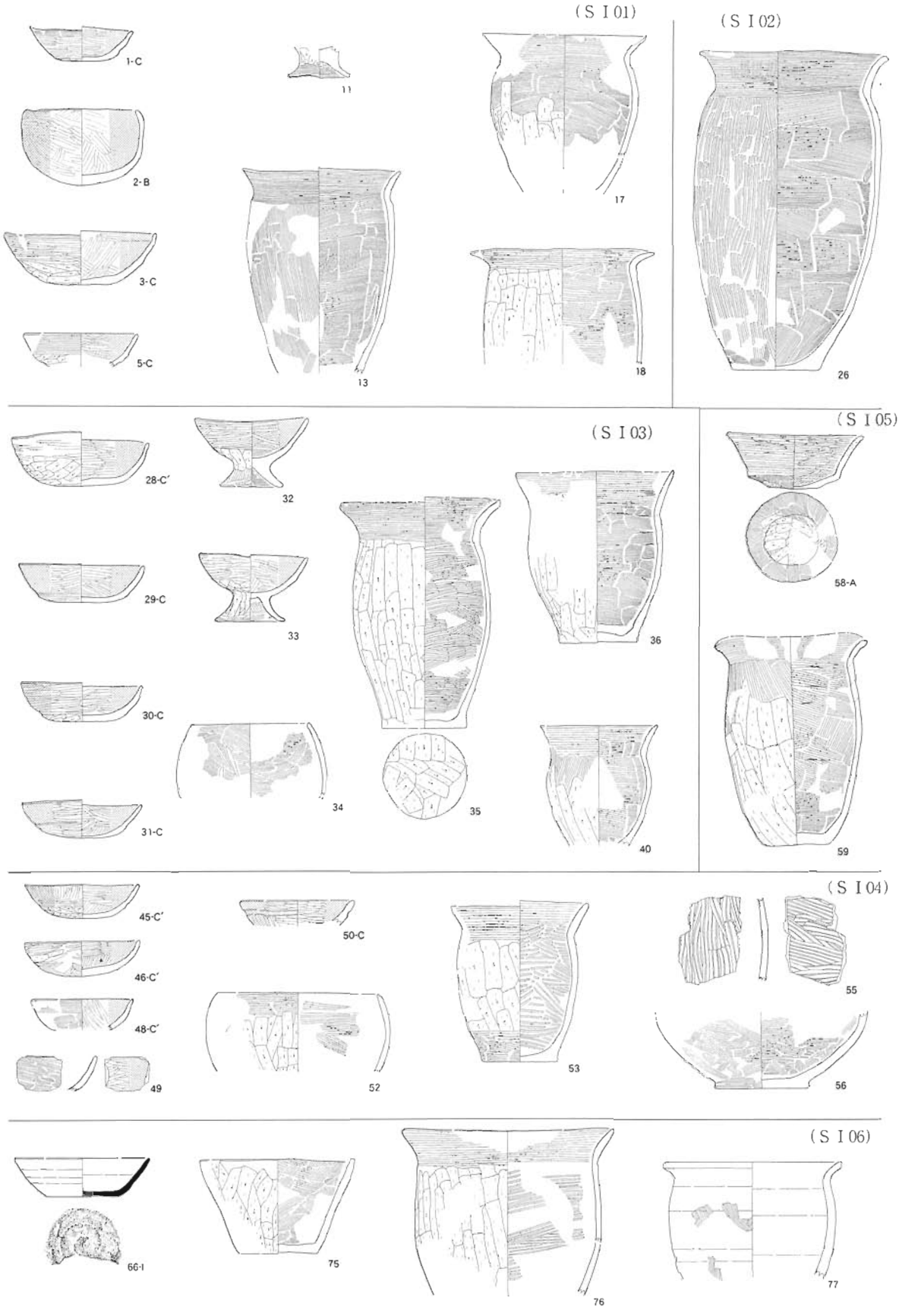
ＳＩ２４：土師器坏６点、高台付坏２点で構成される。ロクロを使用して製作された土師器坏（310～312、314、316、317）および高台付坏（313・318）のみで構成される。底部の切り離し技法は回転イトキリで、再調整のあるものは認められない。310の坏は法量が小形化し、小皿に近い形態を呈する。

ＳＸ０１：土師器高坏６（＋１？）点、甕３点で構成される。小形土器は製作技法などから判断して混入の可能性が高く、ここでは除外する。土師器の高坏の出土が卓越し（330～333、335～336、328）、明確に坏を

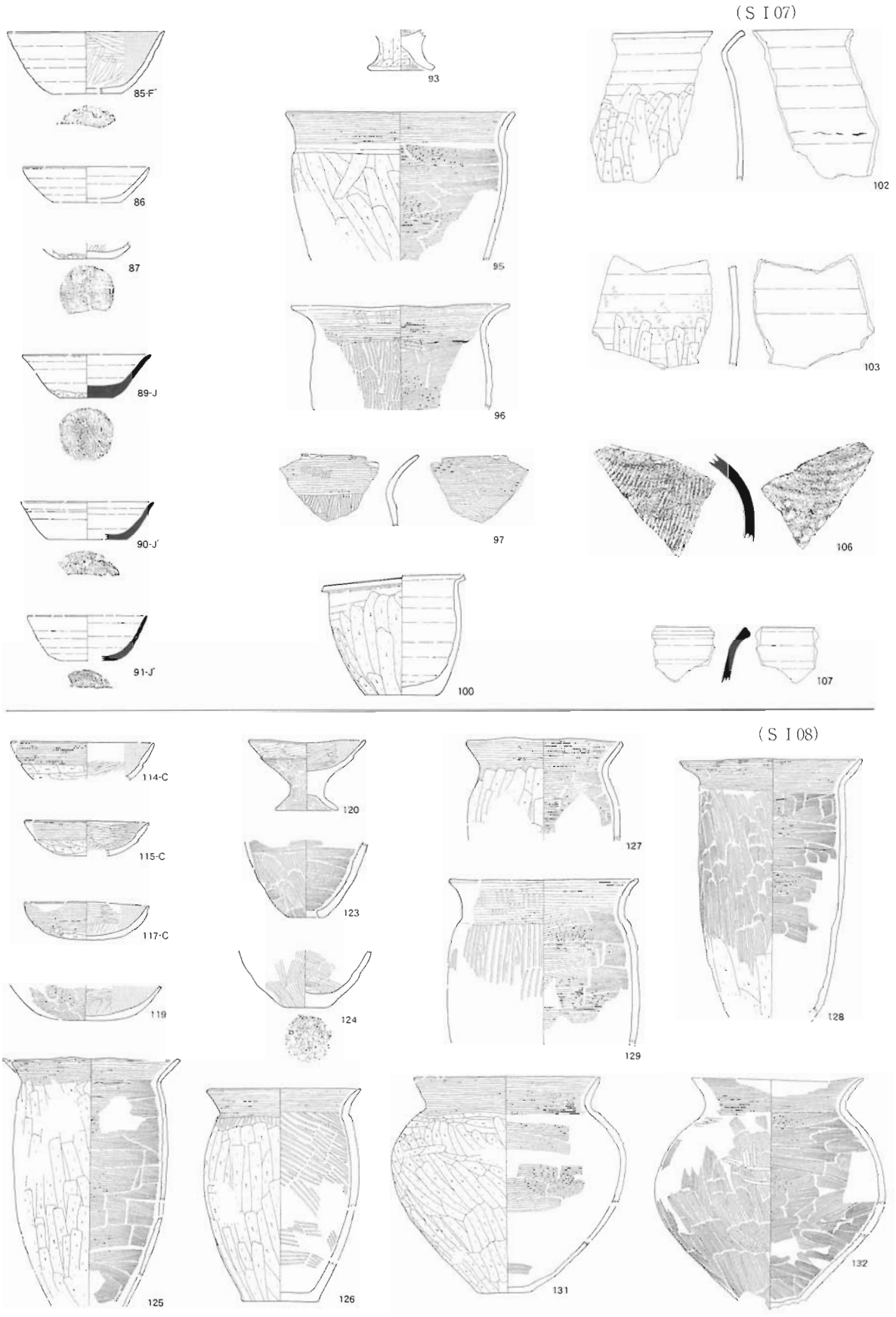
第12表　床面・カマド内出土遺物器種構成一覧

	土師器坏	土師器高台付坏	双耳坏	須恵器坏	須恵器高台付坏	高　坏	甑	鉢	甕	球胴甕	須恵器甕・壺	大甕
ＳＩ０１	4					1			3			
ＳＩ０２									1			
ＳＩ０３	4					2		1	3			
ＳＩ０４	5							1	2	1		
ＳＩ０５	1								1			
ＳＩ０６				1				1	2			
ＳＩ０７	3			3		1			6		2	
ＳＩ０８	4					1	1	1	5	2		
ＳＩ０９	1											
ＳＩ１０			1	4					3		1	
ＳＩ１１	1								2			
ＳＩ１２												
ＳＩ１３												
ＳＩ１４	1				1				5		1	
ＳＩ１５	1					1			4			
ＳＩ１６									3	1		
ＳＩ１７	1			1					3		1	
ＳＩ１８	1			5					4		1	
ＳＩ１９	11	2							1			
ＳＩ２０	3			1					1			
ＳＩ２１							1		2		2	
ＳＩ２２	4			1					1			
ＳＩ２３	2			1				1	1	1		
ＳＩ２４	6	2										
ＳＸ０１						6(+1)			3			
ＳＸ０２	10	2							1+壺1		1	1
ＳＸ０３												
ＳＸ０４												
計	63	6	1	17	1	12(+1)	2	6	58	5	9	1

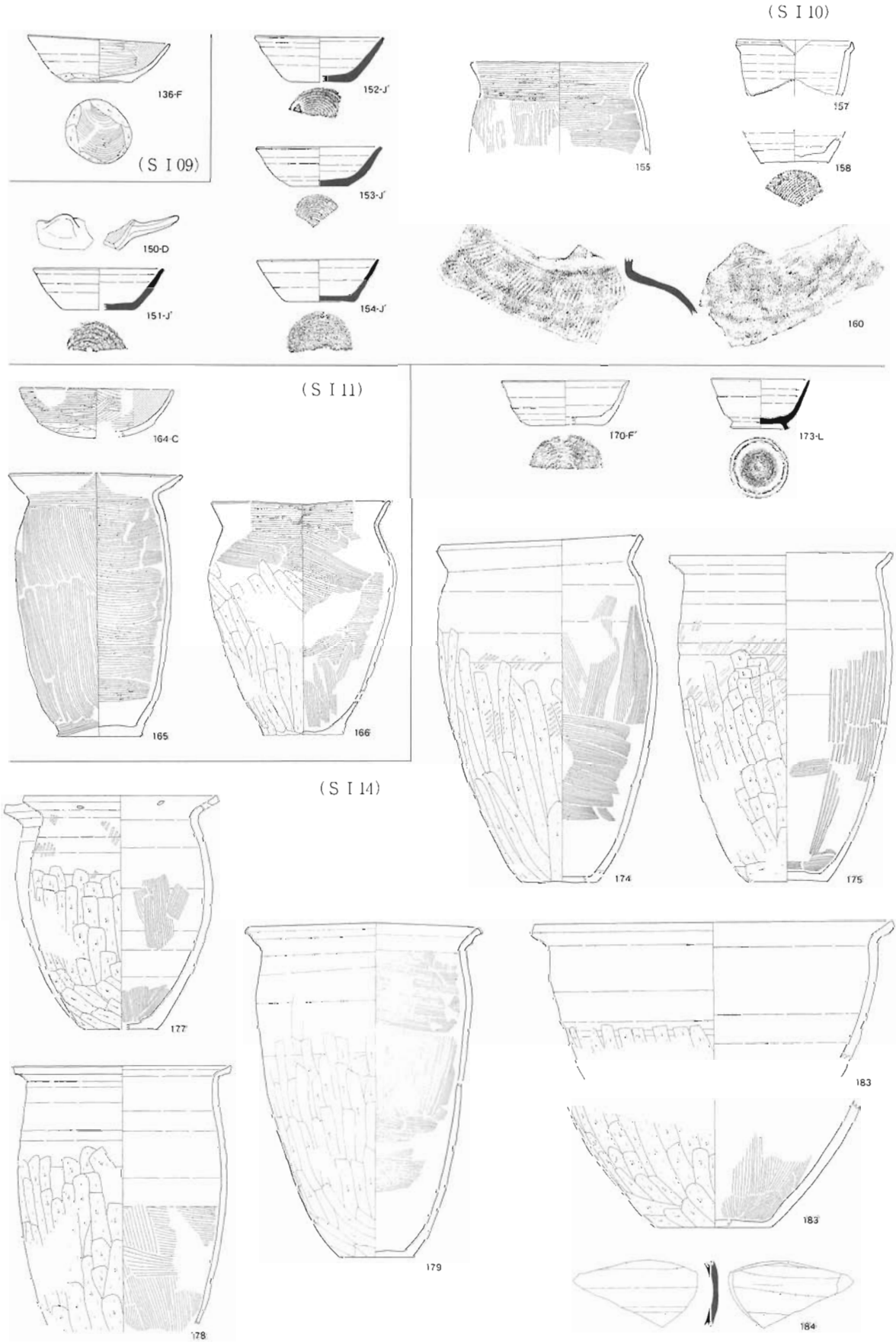
※　遺物番号に後続するアルファベットは遺跡内での分類記号を表す



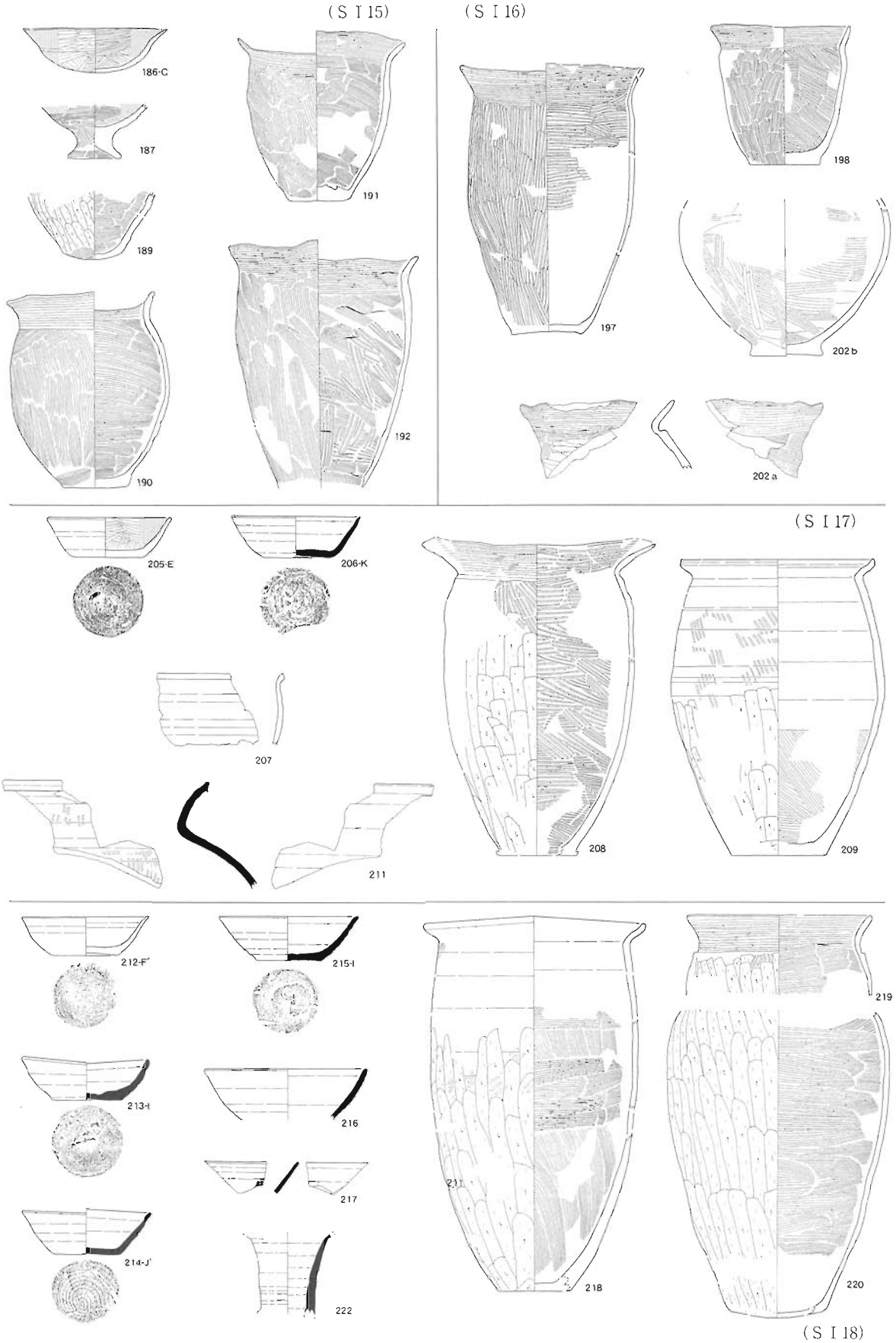
第112図　床面・カマド内出土遺物集成（1）



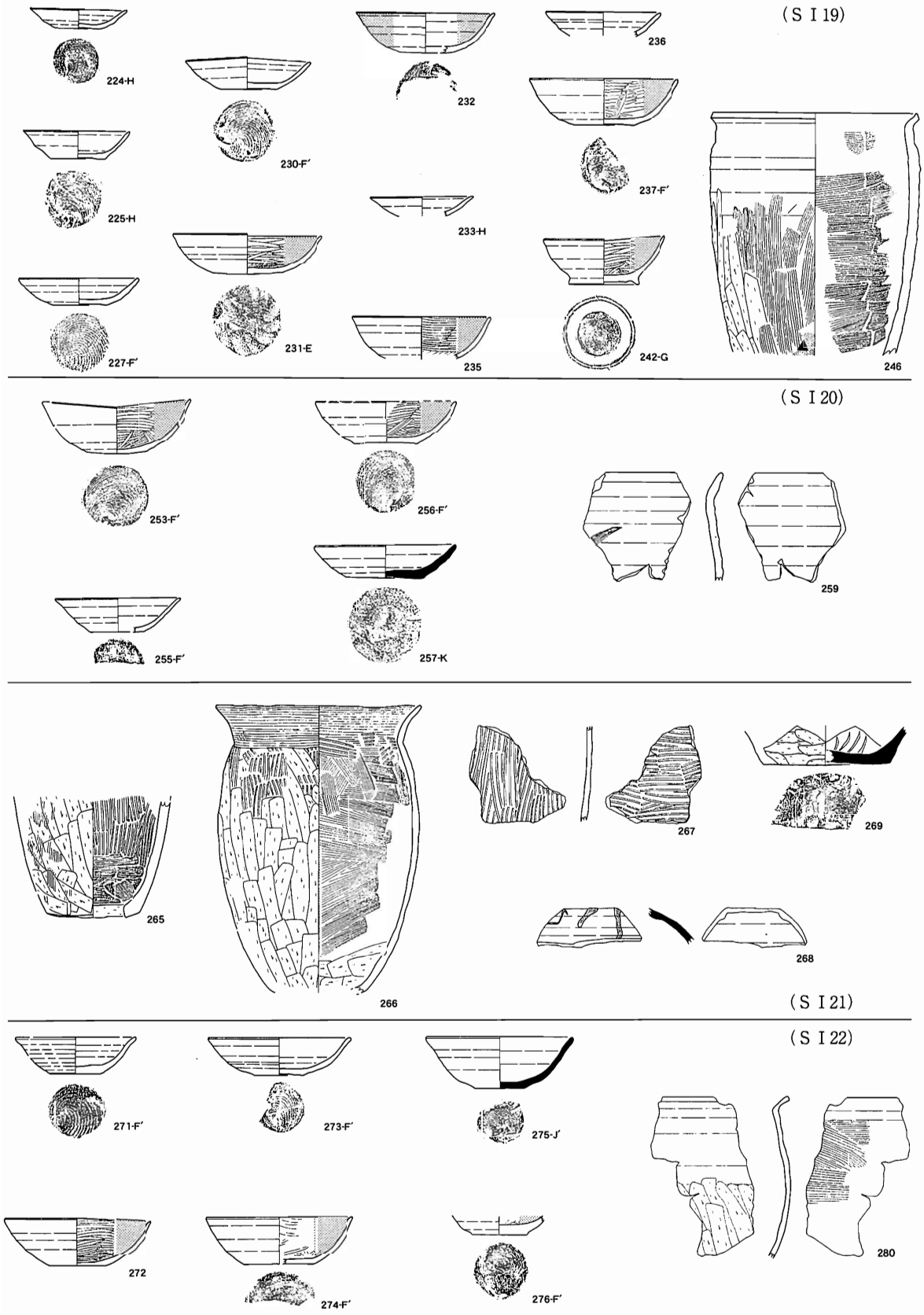
第113図　床面・カマド内出土遺物集成（2）



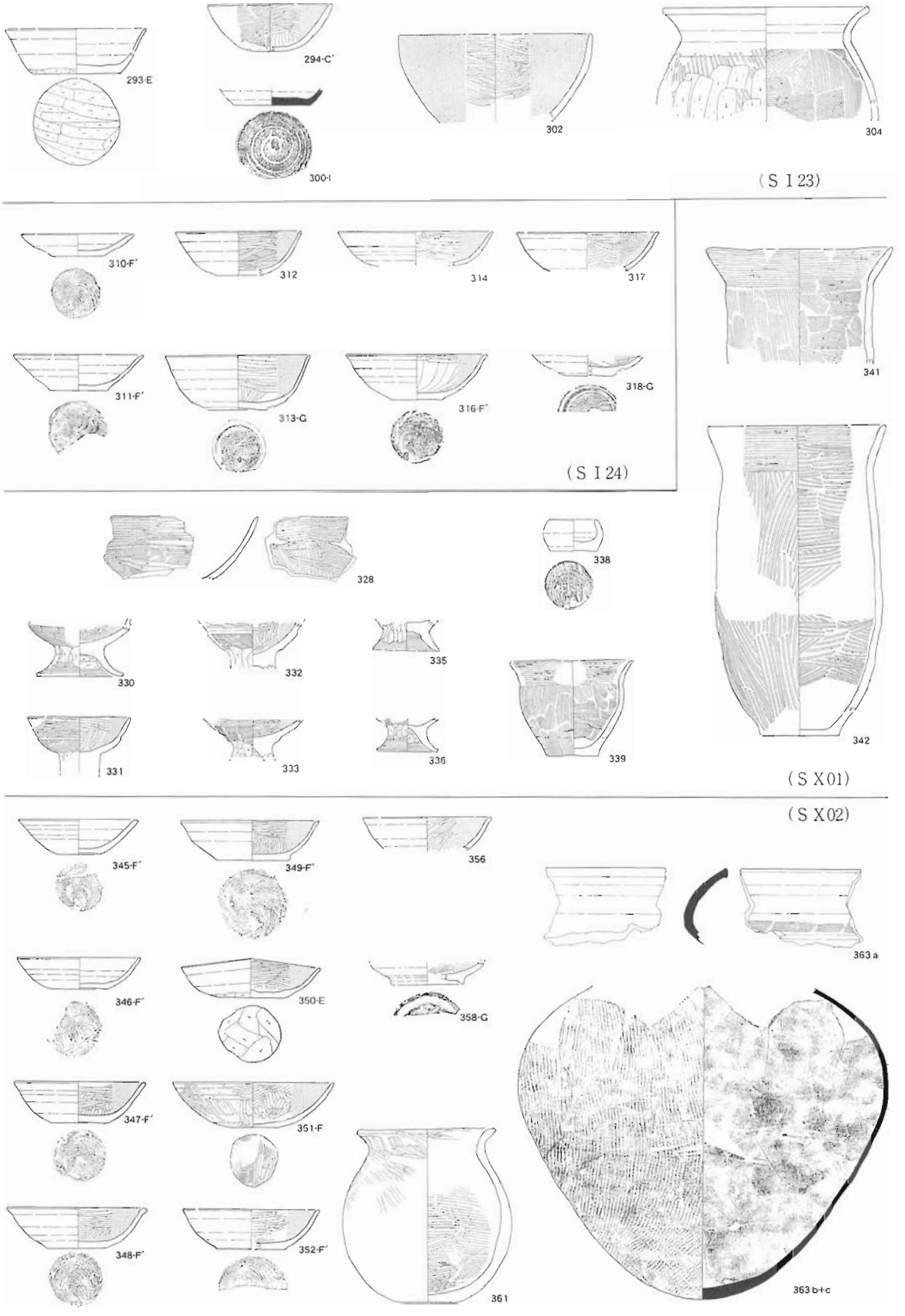
第114図　床面・カマド内出土遺物集成（3）



第115図　床面・カマド内出土遺物集成（4）



第116図　床面・カマド内出土遺物集成（5）



第117図　床面・カマド内出土遺物集成（6）

伴わないのが特徴的である。このほか非ロクロの長胴甕が３点出土しているが（339・341・342)、内外面調整にはナデ、ハケメ調整などが用いられる。

ＳＸ０２：土師器坏10点、高台付坏２点、甕１点、壺１点、須恵器大甕１点で構成される。361以外はすべてロクロを使用して製作される。土師器坏には多様な底部切り離し技法・調整技法が認められ、回転イトキリによるもの（345～349、352)、その後ミガキによる再調整が行われるもの（351)、手持ちヘラケズリ再調整が行われるもの（350）などがある。358は高台付坏である。361は土師器壺で、内外面ミガキ＋黒色処理される。363は須恵器の大甕である。

３．出土遺物から見た遺跡の年代

ここでは、本遺跡から出土した遺物を従来の編年観と比較して出土遺物から見た遺跡の年代を概観したい。岩手県内～東北南部の古代の土器編年については、氏家和典（1957)、桜井清彦（1958)、草間俊一（1958）の各氏によりその大綱が組み立てられている。その後、資料の増加を経て沼山源喜治（1968・1969)、桑原滋郎（1976)、伊藤博幸（1976)、佐久間豊（1978）の各氏らによって東北地方南部を中心とする編年との比較検討も含めて研究が進められた。そうした中で相原康二氏は、今まで空白のあった時期を埋める資料をふまえた県南部を中心とする古代土器の編年試案を発表した（相原1981)。いっぽう高橋信雄氏は、岩手県を北上川中流域と馬淵川流域に二大別し、県北部地方の土器の編年も含めての編年を行っている（高橋1982)。その後、八木光則氏は、斯波郡と爾薩平地域の二つの地域に注目し、律令施行地域と郡の置かれない非律令地域とを比較する視点から７Ｃ中葉から12Ｃまでの土器編年を行った（八木1993)。これらが現在も県内における編年観の基礎となっている。

本遺跡から出土した土器を坏に焦点を当て特徴を列記すると以下のようになる。

Ａ：酸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用しない。底部平底を呈し、口縁部と体部との接続部分外側に稜線が形成される。外面ミガキ、内面ミガキ＋黒色処理される。

Ｂ：酸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用しない。底部丸底を呈し、内湾しながら口縁部まで立ち上がる。内外面ともにミガキ＋黒色処理される。

Ｃ：酸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用しない。底部丸底風～平底を呈する。口縁部と体部の接点に弱い稜や沈線を持つもの（Ｃ）と、持たないもの（Ｃ´）あり。体部外面ミガキ調整、体部～底部にかけてはケズリ調整されるものが多い。内面はミガキ＋黒色処理される。

Ｄ：酸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。体部上半両側に耳状の把手が付属する（双耳坏)。外面ロクロナデ、内面ミガキ＋黒色処理される。底部は残存しておらず詳細は不明である。

Ｅ：酸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。底部切り離し技法は再調整により不明。底部全面ヘラケズリ再調整される。外面ロクロナデ、内面ロクロナデもしくはミガキ＋黒色処理される。

Ｆ：酸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。底部切り離し技法は回転イトキリによる。再調整を持つもの（Ｆ）と持たないもの（Ｆ´）がある。外面ロクロナデ、内面ロクロナデもしくはミガキ＋黒色処理される。

Ｇ：酸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。底部は回転イトキリ後、高台が付けられる。外面ロクロナデ調整、内面ミガキ＋黒色処理される。

Ｈ：酸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。法量小形化（口径11cm以下・器高５cm以下）し、小皿に近い形態を呈する。内外面ともにロクロナデ調整され、底部は回転イトキリされる。

Ｉ：還元炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。底部切り離し技法は回転ヘラキリにより、体部下端～底部縁辺ヘラケズリ再調整多い。内外面共ロクロナデ調整される。

Ｊ：還元炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。内外面ロクロナデ調整され、底部切り離し技法は回転イトキリによる。再調整を持つもの（Ｊ）と持たないもの（Ｊ´）がある。

Ｋ：還元炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。底部切り離し技法は再調整により不明。底部全面弱いヘラケズリ再調整される。内外面共にロクロナデ調整される。

Ｌ：還元炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。底部は回転イトキリ後、高台が付けられる。内外面ともにロクロナデ調整される。

Ａの土器は、１点のみ（ＳＩ05－58）該当する。口縁と体部の接続部の外側に稜が形成されるのが特徴的で、高橋氏のⅡ－１群よりやや古相を呈するものである。いわゆる住社式期に相当するものと考えられる。ＳＩ05の出土遺物は坏と甕がそれぞれ１点のみであり、遺跡内での類例もないことから詳細は不明である。

Ｂの土器は１点のみ（ＳＩ01－２）の出土である。器高やや高く（深く）、直上気味に内湾する体部を持つもので、丁寧なミガキ＋黒色処理が内外面に施される。共伴関係にあるのはＣ〈３〉のみであることからこれらと同時期のものと判断される。９世紀代までは下らないものである（以下、〈〉内の数字は点数を表す）。

Ｃに該当するのは13点である。体部に弱い稜あるいは沈線を有するもので、本来は更に細分の余地があると思われる。共伴関係にあるのはＢ〈１〉、Ｃ´〈３〉で、高橋氏のⅡ－２群、国分寺下層式期に相当すると思われる。いっぽう八木氏は該期の坏の器形について、外面：段～沈線を有する／内面：無段で丸底主体（段の下が平底風あり）のものが８Ｃ代でも古く、次第に外面：沈線～無段へ／内面：無段～平底主体へと変遷するとの見解を述べている。坏の特徴から両氏の見解をもって判断すれば、８世紀中～後半代頃に相当するものと捉えたい。

Ｃ´に該当するのは４点で、体部に稜や沈線をもたないものである。共伴はＣ〈５〉、Ｅ〈１〉、Ｉ〈１〉で、１点のみではあるが底部回転ヘラ削りの須恵器が伴っている。上記の見解によれば、こちらがＣよりも新しい特徴を有するものである。Ｅが共伴することから９Ｃ初頭頃までの幅をもって解釈したい。

Ｄは１点のみが該当する。共伴するのはＪ´〈４〉である。双耳坏は官衙的な色彩が強い器種で、県内ではこれまで水沢市胆沢城跡、盛岡市志波城跡ほか数例からしか出土例がない。胆沢城の設置が802年であることから、今のところ上限年代をほぼこの時期と想定することができよう。

Ｅの土器は４点が該当する。製作に際してロクロを使用し、底部切り離し後に底部全体をヘラ削りするものである。共伴するのはＦ´〈９〉、Ｈ〈３〉、Ｊ´〈４〉、Ｋ〈２〉、Ｇ〈２〉、Ｃ´〈１〉で土師器・須恵器共にあり、器形も多様である。

Ｆ：２点該当する。回転イトキリ後に縁辺を再調整するもので、高橋氏のⅢ－１群期に相当するものである。共伴はＦ´〈６〉、Ｇ〈１〉、Ｅ〈１〉である。須恵器は共伴していない。

Ｆ´は21点と最も多い。回転イトキリ再調整無しの土師器で、共伴するのはＨ〈３〉、Ｇ〈４〉、Ｊ´〈４〉、Ｉ〈２〉、Ｅ〈２〉、Ｆ〈１〉、Ｋ〈１〉である。こちらも土師器・須恵器共にあり、器形も多様である。

Ｇは４点該当する。土師器高台坏である。共伴するのはＦ´〈12〉、Ｈ〈３〉、Ｅ〈２〉、Ｆ〈１〉である。回転イトキリ再調整なしの坏〈12〉、小皿に近い形態の坏〈３〉との組み合わせが多い。高橋のⅢ－２群期に相当するものであろうか。須恵器の共伴はない。

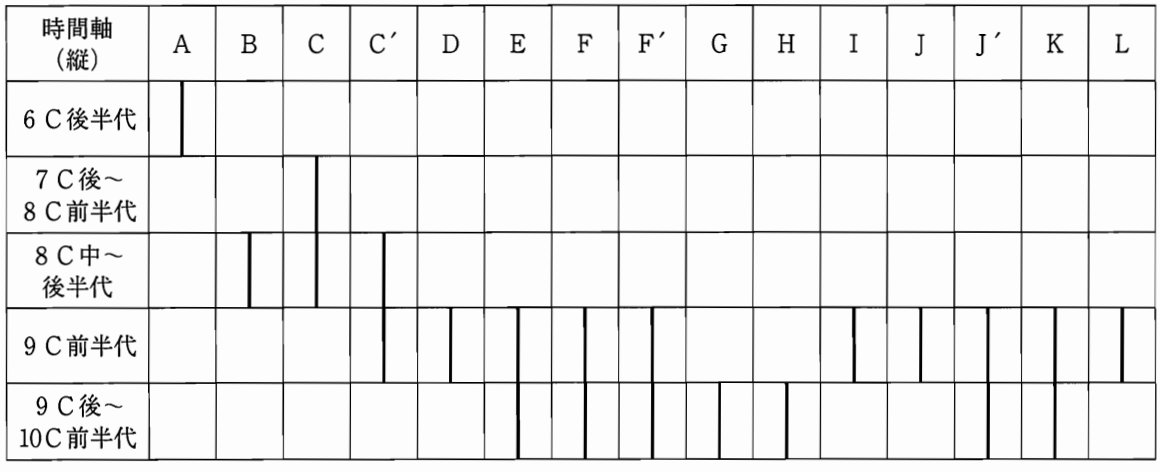
Ｈは３点が該当する。小皿に近い形態を呈するもので、高橋のⅢ－２群期に相当すると考えられる。共伴

床面出土坏分類一覧

遺構名	酸化炎焼成(非ロクロ)				酸化炎焼成(ロクロ)						還元炎焼成				
	A	B	C	C′	D	E	F	F′	G	H	I	J	J′	K	L
ＳＩ01		1	3												
ＳＩ02															
ＳＩ03			3	1											
ＳＩ04			2	2											
ＳＩ05	1														
ＳＩ06											1				
ＳＩ07								1				1	2		
ＳＩ08			3												
ＳＩ09							1								
ＳＩ10					1								4		
ＳＩ11			1												
ＳＩ12															
ＳＩ13															
ＳＩ14								1							1
ＳＩ15			1												
ＳＩ16															
ＳＩ17						1								1	
ＳＩ18								1			2		1		
ＳＩ19						1		3	1	3					
ＳＩ20								2						1	
ＳＩ21															
ＳＩ22								4					1		
ＳＩ23				1		1					1				
ＳＩ24								3	2						
ＳＸ01															
ＳＸ02						1	1	6	1						

SI02，12，13，16，21，SX01は該当遺物なし
※図版については床面・カマド内出土遺物集成（１～６）を参照されたい
※Ａ～Ｌは時間軸を示すものではない

各坏形態の共伴関係と遺物から推定される時間幅



はG〈1〉、F′〈3〉、E〈1〉で、回転イトキリ再調整なしとの組み合わせが多い。須恵器の共伴はない。

Iは4点該当する。底部回転ヘラキリ後再調整される須恵器坏である。共伴はF′、E、C′、J′がそれぞれ1点づつである。

Jは1点のみ該当する。底部回転イトキリ後再調整される須恵器坏である。共伴するのはJ′〈2〉、F′〈1〉である。

Kは2点該当する。弱いヘラ削り再調整により底部切り離し技法不明のものである。共伴するのはF′〈2〉、E〈1〉である。

Lは1点のみ出土した。須恵器高台坏である。共伴はF′〈1〉である。

以上のことをまとめると次のようになる

＊　本遺跡出土の資料は6世紀後半代～10世紀前半代までの幅をもつものであり、その主体は8世紀後半代～9世紀前半代である。

＊　須恵器を伴わないものはA，B，C，F，G，Hの7タイプある。このうちA～Cはロクロ技術導入以前の時期、G，Hは須恵器の数が著しく減少する時期にそれぞれ相当するものと思われ、これまでの研究史に沿う結果が得られた。

＊　非ロクロで須恵器との共伴関係が認められたのはC′の1点のみである。回転ヘラキリの須恵器（I）、ロクロ使用の土師器（E）が伴っていることから、本遺跡においては9C初頭頃まで残存する器形であることが指摘できる。

＊　SI21から出土した甑（265）は外面タタキ＋ケズリ調整、内面ハケメ＋ナデ調整される。同住居跡は共伴する遺物から9世紀前半代に相当すると捉えられることから、ロクロ技術導入後間もなくの過渡的な様相を反映した資料として注目される。

本来は遺物のみならず、遺構の特徴も考慮した検討を行うべきであるが、残存状態の不良なものが多数であるため、これを統計的に処理し分析を加えることは叶わなかった。このため遺構に関しては、比較一覧表を作成するに留めている。

（丸山直美）

（参考・引用文献）

氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」「歴史」第14巻　東北史学会　1957
桜井清彦「東北地方北部における土師器と竪穴住居に関する諸問題」江上波夫・関野雄・桜井清彦「東北地方における集落址の研究」「舘址」東京大学出版会　1958
草間俊一「第九、土師器文化・先史期」「盛岡市史」盛岡市役所　1958
佐久間豊「奈良・平安期土師器の型式学的分析」「考古学研究」第25巻第2号　考古学研究会　1978
桑原滋郎「東北地方北部および北海道の所謂第I型式の土師器について」考古学雑誌第61巻第4号　1976
伊藤博幸「岩手県の古代土器生産について」「岩手史学研究」61　p43～44
相原康二「岩手県南部（北上川中流域）における所謂第I型式の土師器・前期土師器の内容について」遠藤勝博・相原康二　1981
高橋信雄「東北地方北部における古代の土器研究」1982
八木光則「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」1993

（参考・引用文献）

『膽澤城跡－水澤市所在－』文化財調査報告第４集	岩手県教育委員会	1957
「岩手県野田村中平遺跡」	草間俊一岩手大学教養部報告12	1967
『岩崎城の発掘』	和賀町教育委員会	1967
『秋田県の考古学』	奈良修介・豊島　昂　吉川弘文館	1967
『岩手県岩手町仙波堤・今松遺跡』	岩手町教育委員会	1970
『日本の古代米』	佐藤敏也　雄山閣	1971
『秋田の埋没家屋』日本古代文化の探究「家」より	永井規男　社会思想社	1975
『主要地方道一関北上線関連遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1979
『東北新幹線関係埋蔵文化財報告書Ⅰ』	岩手県教育委員会	1979
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』	岩手県教育委員会	1980
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』	岩手県教育委員会	1980
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』	岩手県教育委員会	1981
『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』	一戸町教育委員会	1981
『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1981
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』	岩手県教育委員会	1981
『水沢市膳性遺跡金ヶ崎バイパス関連遺跡調査報告書Ⅱ』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1982
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅦ(北上地区)』	岩手県教育委員会	1982
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅥ(猫谷地遺跡)』	岩手県教育委員会	1982
『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』	一戸町教育委員会	1982
『川向Ⅲ遺跡発掘調査報告書（昭和55年度)』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1982
『君成田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1983
『赤坂田Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1983
『上野山遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1983
『館山遺跡第２次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1983
『長者屋敷遺跡発掘調査報告書（Ⅲ)』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1984
『江差家Ⅳ遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1984
『昭和57年度伊勢館遺跡発掘調査報告書』	大東町教育委員会	1984
『岩手の遺跡』	岩手県埋蔵文化財センター	1985
『上野遺跡』昭和59年度発掘調査報告書	一戸町教育委員会	1985
『一戸城跡』昭和59年度発掘調査概報	一戸町教育委員会	1985
『九戸郡軽米町馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1986
『五庵Ⅰ遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1986
『五庵Ⅱ遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1986
『水神遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1986
『駒焼場遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1989
『馬場遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1990
『馬場Ⅱ遺跡・沖Ⅰ遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1990
『北舘遺跡』平成２年度発掘調査報告書	一戸町教育委員会	1991
『細越Ⅰ遺跡・芋野Ⅱ遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書36	岩手県宮古市教育委員会	1992
『「竪穴住居」か「竪穴建物」か』研究連絡誌第34号	渡辺修一　㈶千葉県文化財センター	1992
『岩谷堂城跡発掘調査報告書』	江刺市教育委員会	1996
『上田尾の館跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1999
『似内遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	2000
『上水沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	2002
『岩手県埋蔵文化財調査略報（平成13年度)』	岩手県埋蔵文化財センター	2002

岩手県水沢市杉の堂遺跡出土の炭化種子

高　瀬　克　範
（東京都立大学人文学部史学科）

はじめに

岩手県水沢市杉の堂遺跡において検出されたＳＸ02・ＳＩ03内の土壌を水洗選別（最小メッシュ１㎜）した結果、ややまとまった量の炭化種子が検出された。ここでは、これらの炭化種子について報告を行うとともに、若干の考察を行う。

遺跡の所在地：岩手県水沢市神明町２丁目58－４ほか
発掘調査期間：2002年４月16日～2002年９月４日
調査委託者：国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所
調査機関：（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
調査担当者：丸山直美・齋藤麻紀子
遺跡の性格：集落跡（竪穴住居跡、竪穴状遺構、方形周溝、溝跡、土坑などが検出された）
資料の年代：ＳＩ03は８世紀後半代、ＳＸ02は９世紀後半から10世紀前半代
ＳＸ02底面直上出土炭化イネの年代測定結果（未補正）は、1020±30ＢＰ（ＩＡＡ－11832）。

１．出土植物種名表 List of plant remains from Suginodo site

双子葉植物綱
離弁花亜綱
クルミ科　JUGLANDACEAE
　オニグルミ　*Juglans mandshurica*
ブナ科　FAGACEAE
　コナラ属　*Quercus*
タデ科　POLYGONACEAE
　ソバ　*Fagopyrum esculentum*
マメ科　LEGUMINOSAE
ブドウ科　VATACEAE

合弁花亜綱
シソ科　LAMIACEAE
　シソ属　*Perilla*

単子葉植物綱

イネ科　GRAMINEAE

イネ　*Olyza sativa*

オオムギ *Hordeum vulgare*

コムギ *Triticum aestivum*

エノコログサ属　Setaria

アワ　*Setaria italica*

ヒエ属　ECHINOCHLOA

２．ＳＸ０２出土の炭化種子

底面および底面直上からオニグルミ、タデ科、ソバ、マメ科、シソ属、イネ、オオムギ、エノコログサ属、アワ、ヒエ属、不明種子が検出された。Ｐ１からは、ブナ科コナラ属、マメ科、ブドウ科、イネ、コムギ、ヒエ属、不明種子が検出された。Ｐ３からは、ソバ、シソ属、イネ、オオムギ、エノコログサ属、ヒエ属が検出されている。

ＳＸ０２全体の重量比ではソバがもっとも多量に出土しており、床面だけでも総重量95.58ｇが検出されている。本遺構出土ソバ500個あたりの重量は4.05ｇであることから推定すると、11,800個以上のソバが出土していることとなる。すべて炭化しており、種皮が付いているものが相当な割合で含まれており、付いていないものも被熱による種皮の剥落が関与している可能性もある。出土ソバ50個の平均長さは3.27㎜、平均幅は2.70㎜である。

ついで多いのがヒエ属Ａであり、総重量8.63ｇが出土している。本遺構出土の炭化ヒエ属Ａ500個の重量は0.30ｇであり、推定概数では14,383個あまりが出土していることとなる。形態は、腹部の膨らみがやや弱いが現在の栽培品種にかなり近いといえる。出土ヒエ50個の平均長さは1.43㎜、平均幅は1.25㎜であり、現在の栽培品種の平均長さ1.8±0.1㎜、平均幅1.5±0.1㎜（中山ほか2000）とくらべるとサイズが小さい。ほぼすべてが脱穀されているとみてよい。

イネは44個出土しているが、サイズの変異が大きい。１点を試料としてＡＭＳによる年代測定をおこなったところ、上記のように10世紀代に属する可能性が高い結果が得られている。

マメ科は確実なものが５点出土している。底面出土資料のうち保存状態が比較的よいもの１点を解剖し、初生葉の形態観察を行った。その結果、初生葉はほぼ45度の角度で斜め上から斜め下にむかって確認された（写真27・28）。吉崎・椿坂（2001）が提示している初生葉の違いに照らし合わせるならば、本資料はリョクトウではなくアズキあるいはアズキ近似種と判断できる。このほか、炭化時に発泡した可能性のあるマメ科植物が12.06ｇ出土しており、互いに癒着しているものもある。発泡による表面変形のためすべての資料にヘソが確認できるわけではないが、粒径と炭化・発泡状態の共通性がたかいことからマメ科植物と考えられる。

オオムギは、長粒タイプ（椿坂1998、山田1998）と思われる種子が床面とＰ３から１点ずつ出土している。前者は穎が付いた状態で長さ6.0㎜、幅2.5㎜、後者は穎果のみで長さ5.1㎜、幅2.7㎜である。前者には被熱して一部穎の剥落がみられるが大部分が癒着して残存しており皮性の品種と思われる。後者も形態は長粒タイプと考えられ、表面には一部穎の残存と考えられる部分もあるが明確ではない。北海道島では短粒タイプ・長粒タイプの双方が分布するが、サイズのうえでも本遺跡出土資料は長粒タイプと共通する特徴を有している。

Ｐ１からはコムギが３点検出されており、完形１点は長さ4.6㎜、幅3.0㎜である。粒径の小さいエゾコムギと仮称されているグループよりはあきらかに大きく、北海道島に分布しているものとは系統が異なっているのかもしれない。

アワは２個出土しているが、ヒエ属にくらべて圧倒的に少ない。大きさは、ひとつが長さ1.3㎜、幅1.1㎜、いまひとつが長さ1.2㎜、幅1.1㎜である。擦文期の北海道島から出土するものは札幌市Ｋ441・Ｎ34遺跡で平均長さ1.43㎜、幅1.26㎜、札幌市Ｈ317遺跡３層で平均長さ1.11㎜、幅1.09㎜、札幌市Ｋ39(第６次)で1.23㎜、1.19㎜であり、本遺跡出土資料はこれまで北海道島内で出土しているアワの変異幅に収まるものである。

栽培種の可能性があるものとしてはこのほかにシソ属があり、偏球形の形態で果皮表面には大型網目模様がみとめられる。また、ヒエ属Ｂ・エノコログサ属・ブドウ科・不明種子も検出されており、オニグルミ・ブナ科コナラ属（ドングリ）も量は非常に少ないがすべて炭化した状態で出土している。ブナ科コナラ属の種子はすべて形態が非常に細長いものである。大きさの変異が大きいが、サイズは総じて小さい。

３．ＳＩ０３出土の炭化種子

マメ科、シソ属、ソバ、不明種子が出土している。ソバは未熟できわめて小さい。マメ科は解剖を行っていないので詳細は不明である。シソ属種子は２個出土している。

４．杉の堂遺跡出土炭化種子の特徴

焼失住居と考えられるＳＸ02出土炭化種子は栽培種が圧倒的多数を占めており、明らかに人間の選択が関与している組合せといえる。ごく小数のエノコログサ属は雑穀などに混在した雑草の可能性があるとしても、ヒエ属Ａ・ソバ・シソ属・マメ科・イネ科が組成の中心となっており、それ以外の野生植物もオニグルミ・コナラ属であり、おもに食用に供する目的で人為的に集積されたものと考えられる。

調査者によれば、本遺構の種子は遺構の西壁付近で65㎝×27㎝の範囲内に集中して検出されたという。多量のソバが調理のために保管されていたのか、作付けのために保管されていたのかは現時点ではわからない。ヒエ属Ａは間違いなく脱穀を経たものであるが、これがどのような経緯でソバと共存していたのかも大きな問題である。焼失住居での出土状況とそこで見られる種子の組合せは、調理のコンテクストで残存したカマド・焼土関係の資料とはべつの意味で、今後、重要な情報源となる可能性を秘めている。焼失住居における「種子コンプレックス」の詳細な地域差・時間差および出土状況があきらかになってくれば、畠の作付け作物とそのサイクル、またその地域差・時間差などとの関連で評価することができるかもしれないからだ。いずれにしても、まず必要なのは土壌水洗の実践と資料の増加である。

すでに触れたとおり、出土したヒエ属Ａは栽培品種にかなり近い形態をしめすが、サイズは小さい。北海道島擦文期の札幌市Ｈ317遺跡３層（土器編年観では９Ｃ末～10Ｃ前半）出土ヒエ属は、平均長さ1.44㎜、平均幅1.16㎜である。これは杉の堂遺跡のヒエ属Ａときわめて近い値であるが、幅は杉の堂遺跡のほうがやや広い。長幅比のグラフをみても、同じ長さでは杉の堂出土資料の幅がやや上回っていることが判る。しかし、資料はあまりにも断片的であり、これをもって両地域における栽培化の進展度のちがいと評価することは現段階ではできそうにない。ソバも現在の栽培品種と比べると大きさは小さく、そう果の長さが３㎜以下の未熟なものもが多数含まれている。

多様な地理的・気候的条件を擁する岩手県内においては、先史・歴史時代の生業活動はかならずしも均質であったわけではない。栽培植物の利用においても、イネ一辺倒ではなく、多様な畠作作物が利用されてい

た時期・地域があってもおかしくはない。本遺跡の成果もこの点を見事に物語っている。発掘調査を行うにあたってあらかじめ組織的・体系的な土壌洗浄をおこなってゆく意識が芽生えないかぎり、重要な情報源をみすみす捨ててゆくことになる。今回は、やむなく1㎜メッシュをもちいたが、今後は、小型の雑穀類までをももれなく回収するために0.5㎜もしくは0.425㎜メッシュをもちいるべきであろう。

謝辞　遺構内土壌の洗浄の必要性に理解を示し、本遺跡における炭化種子の検出にご協力いただいた（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査員の丸山直美氏に感謝申し上げる。また、本稿の執筆にあたっては、佐々木由香氏（(株）パレオラボ）・椿坂恭代氏（札幌国際大学考古植物研究会）から貴重なご教示を賜った。この場を借りて御礼申し上げたい。

引用・参考文献

大井次三郎1983『新日本植物誌　顕花篇』至文堂。
黒尾和久・高瀬克範2003「縄文・弥生時代の雑穀栽培」木村茂光編『雑穀』青木書店。
椿坂恭代1993「アワ・ヒエ・キビの同定」『吉崎昌一先生還暦記念論集　考古学と自然科学』。
椿坂恭代1998「オオムギについて」『時の絆　石附喜三男先生を偲ぶ』。
中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会。
山田悟郎「日本列島北端で展開された雑穀農耕の実態」『北海道開拓記念館研究紀要』26。
吉崎昌一・椿坂恭代1995「H317遺跡から検出された植物種子」仙庭伸久編『H317遺跡』札幌市教育委員会。
吉崎昌一・椿坂恭代2001「先史時代の豆類について―考古植物学の立場から―」『豆類時報』24。
吉崎昌一・椿坂恭代2001「札幌市K39遺跡第6次調査で出土した炭化種子」藤井誠二『K39遺跡第6次調査』札幌市教育委員会。
吉崎昌一・椿坂恭代2001「札幌市K39遺跡第7次調査で出土した炭化種子」秋山洋司『K39遺跡第7次調査』札幌市教育委員会。

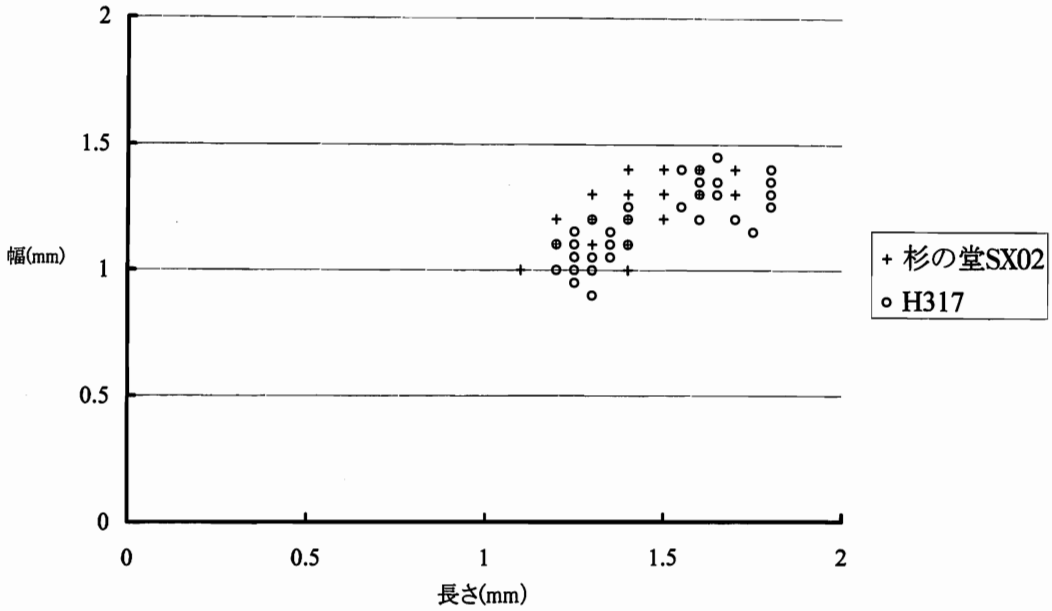
出土ヒエ属Ａ計測値

No	杉の堂ＳＸ０２		H317遺跡３層	
	長さmm	幅mm	長さmm	幅mm
1	1.4	1.3	1.6	1.3
2	1.2	1.1	1.6	1.35
3	1.4	1.1	1.3	1.2
4	1.5	1.3	1.25	1
5	1.4	1.3	1.2	1.1
6	1.3	1.2	1.6	1.4
7	1.4	1.3	1.25	1.15
8	1.5	1.2	1.3	1.05
9	1.4	1	1.3	1
10	1.6	1.3	1.3	1.2
11	1.6	1.4	1.6	1.3
12	1.4	1.3	1.3	0.9
13	1.6	1.3	1.6	1.2
14	1.4	1.3	1.25	0.95
15	1.6	1.4	1.35	1.15
16	1.4	1.2	1.65	1.35
17	1.7	1.3	1.25	1.05
18	1.3	1.1	1.4	1.25
19	1.6	1.4	1.7	1.2
20	1.5	1.2	1.75	1.15
21	1.4	1.2	1.6	1.4
22	1.7	1.4	1.65	1.3
23	1.3	1.2	1.8	1.4
24	1.2	1.2	1.55	1.4
25	1.4	1.2	1.3	1
26	1.6	1.4	1.25	1.1
27	1.4	1.4	1.8	1.4
28	1.2	1.2	1.2	1
29	1.4	1.3	1.25	1.05
30	1.4	1.2	1.4	1.2
31	1.5	1.4	1.4	1.1
32	1.5	1.3	1.8	1.35
33	1.5	1.3	1.3	1.05
34	1.4	1.3	1.35	1.1
35	1.4	1.2	1.25	1
36	1.5	1.2	1.35	1.15
37	1.3	1.1	1.8	1.3
38	1.6	1.4	1.2	1
39	1.5	1.2	1.25	1.05
40	1.3	1.2	1.25	0.95
41	1.5	1.4	1.65	1.45
42	1.2	1.2	1.35	1.05
43	1.3	1.2	1.25	1
44	1.1	1	1.6	1.2
45	1.5	1.2	1.4	1.2
46	1.3	1.3	1.25	0.95
47	1.7	1.4	1.35	1.05
48	1.5	1.2	1.55	1.25
49	1.5	1.3	1.8	1.25
50	1.3	1.1	1.35	1.1
平均	1.43	1.25	1.43	1.16

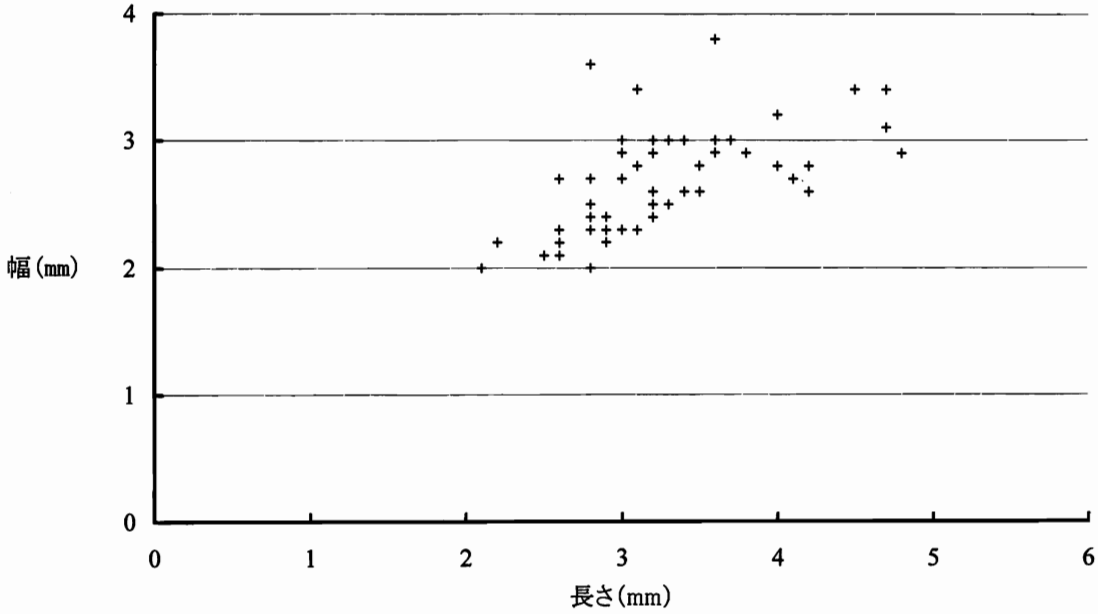
出土ソバ計測値

No	長さmm	幅mm
1	2.5	2.1
2	2.6	2.2
3	3.3	3
4	3.6	2.9
5	2.8	2.7
6	4.1	2.7
7	4.7	3.4
8	2.8	3.6
9	4.2	2.8
10	4.8	2.9
11	4	3.2
12	4.2	2.6
13	3.2	2.9
14	2.8	2.3
15	3.5	2.8
16	3.6	3.8
17	4.7	3.1
18	3.2	2.4
19	3.2	2.5
20	2.8	2
21	3.2	2.6
22	3.7	3
23	3.4	2.6
24	2.2	2.2
25	3	2.7
26	2.8	2.4
27	2.1	2
28	4.5	3.4
29	4	2.8
30	3.4	3
31	3	3
32	3	2.9
33	2.6	2.7
34	2.8	2.5
35	3.1	2.8
36	2.6	2.1
37	3.2	3
38	3.1	3.4
39	2.8	2.4
40	3	2.3
41	2.9	2.2
42	2.9	2.4
43	3.3	2.5
44	2.6	2.3
45	3.6	3
46	2.9	2.3
47	3.5	2.6
48	3.1	2.3
49	3.8	2.9
50	2.6	2.7
平均	3.27	2.7

ヒエ属Ａの長幅比



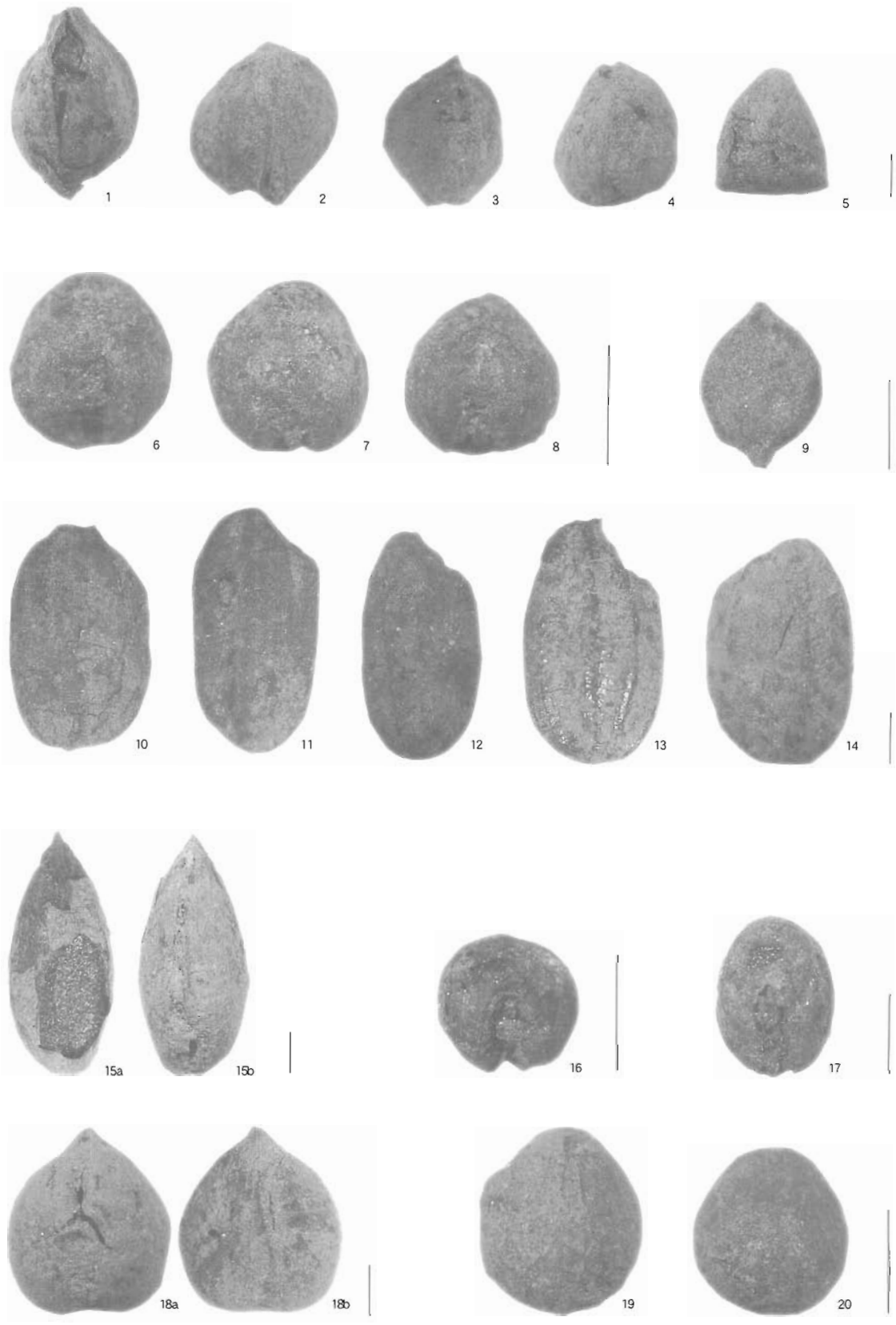
ソバの長幅比



杉の堂遺跡出土炭化種子集計表

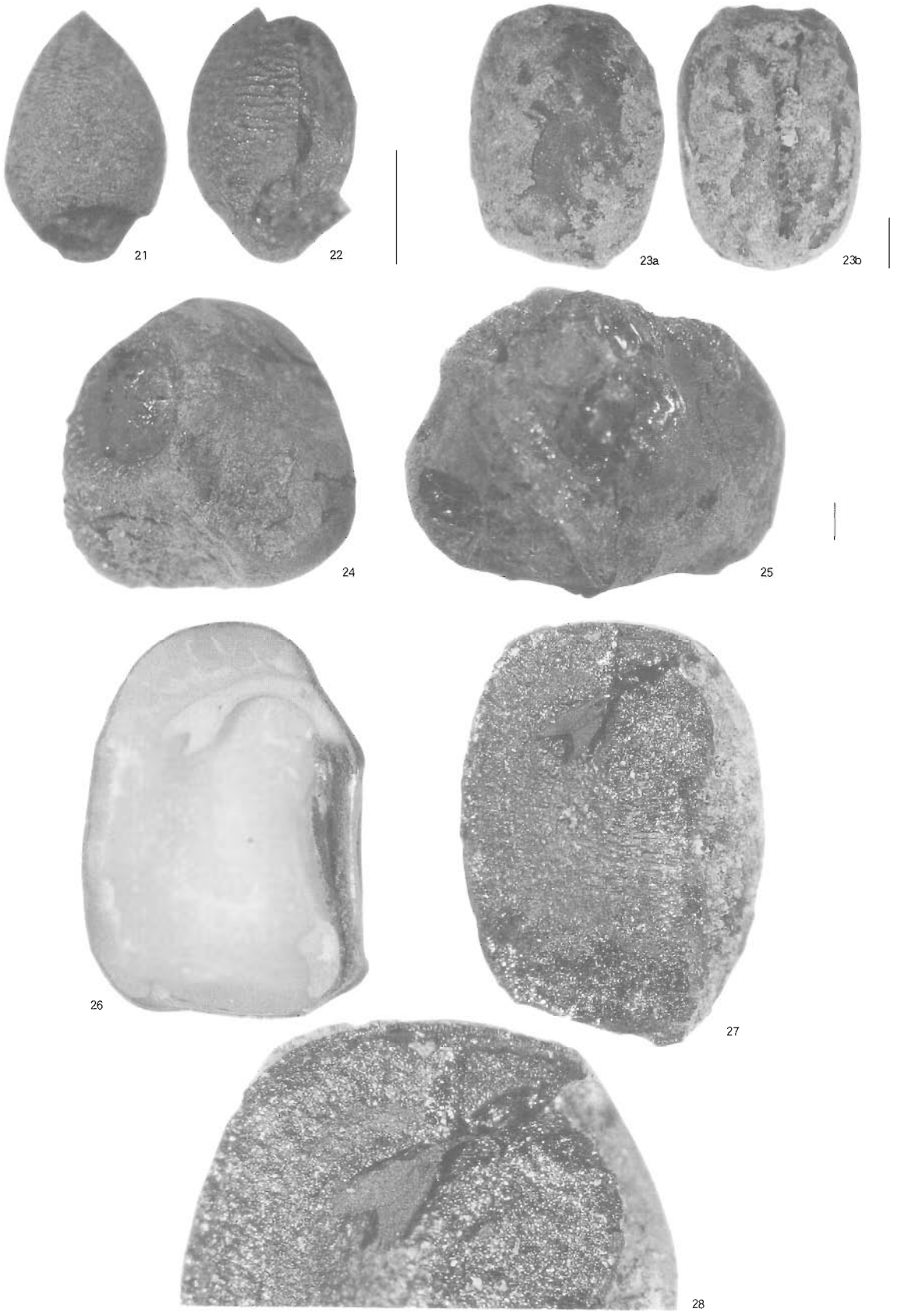
遺構名	ＳＸ02	ＳＸ02　Ｐ１	ＳＸ02　Ｐ３	ＳＩ03
オニグルミ	3.17ｇ	1	0	0
ブナ科コナラ属	0	12	0	0
タデ科	2	0	0	0
ソバ	11,800*	0	40	1
マメ科	5+発泡資料(ヘソが確認できるもの0.95ｇ,確認できないもの11.11ｇ)	1	0	1
ブドウ属	0	1	0	0
シソ科	3	2	0	2
イネ	44	4	3	0
オオムギ	1	0	1	0
コムギ	0	3	0	0
エノコログサ属	41	0	1	0
アワ	2	0	0	0
ヒエ属Ｂ	1	0	0	0
ヒエ属Ａ	14,383*	1	3	0
不明種子	6	1	0	1

＊は推定概数



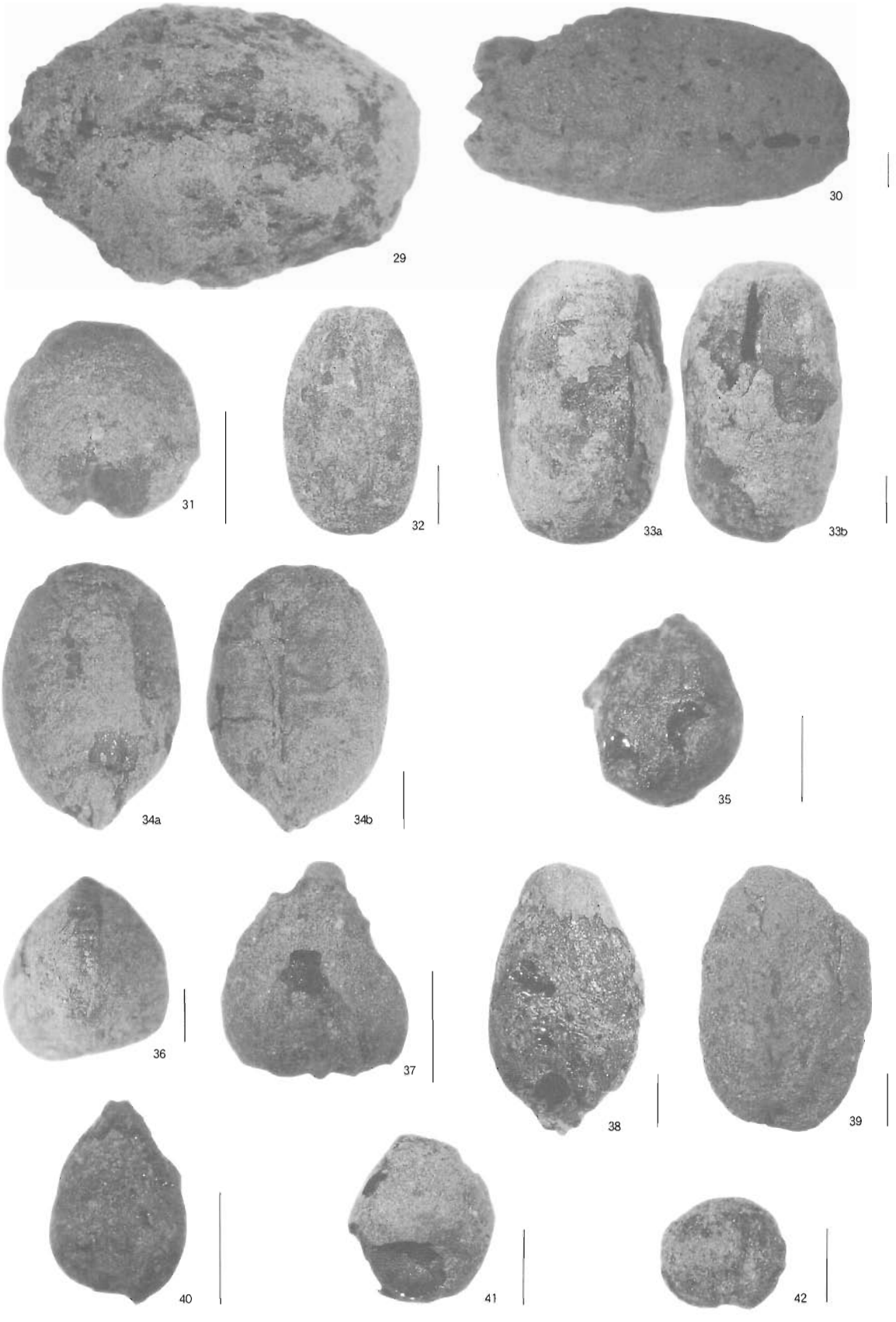
杉の堂遺跡出土炭化種子(1)　[1-20：ＳＩ12出土　スケール：1㎜]

1-5：ソバ，6-8：ヒエ属Ａ，9：タデ科，10-14：イネ，15：オオムギ，16：アワ，17：ヒエ属Ｂ，18：ブドウ科，19-20：シソ属



杉の堂遺跡出土炭化種子(2)　[21-25-27-28：ＳＩ12出土　スケール：１㎜]

21・22：エノコログサ属，23：マメ科，24・25：マメ科？（発泡），26：現生アズキ断面，27：出土マメ科（23と同一）の断面（アズキの仲間），28：出土マメ科初生葉拡大



杉の堂遺跡出土炭化種子(3)　[29-35：ＳＩ12Ｐ１出土、36-40：ＳＩ12Ｐ３出土、41･42：ＳＩ03Ｐ５出土　スケール：１㎜]
29・30：コナラ属，31：ヒエ属Ａ，32：イネ，33：マメ科，34：コムギ，35：シソ属，36：ソバ，37：ヒエ属Ｂ，38：オオムギ，39：イネ，40：エノコログサ属，41：シソ属，42：不明

杉の堂遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

杉の堂遺跡は（岩手県水沢市神明町所在）北上川右岸に位置し、胆沢扇状地の下位段丘である水沢段丘上に立地しており、現在は畑作地や果樹園などとして利用されている。今回は、検出遺構の年代資料を得る目的で、平安時代の竪穴状遺構（ＳＸ02）の床面直上から出土した炭化イネの年代測定を行なう。

１．試料

試料は、床面直上（焼土まじりの黒褐色土中）より、フローテーション法にて抽出した炭化イネ１点である。イネの他、オオムギ、ソバ、アワ、ヒエ属、マメ科、オニグルミ、ブナ科コナラ属、タデ科、シソ属、エノコログサ属なども一緒に出土している。

２．分析方法

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。年代の算出にはＬｉｂｂｙの半減期5568年を使用、ＢＰ年代値は1950年からさかのぼって何年前かを表している。付記した誤差は、標準偏差（１σ）に相当する時代である。δ^{13}Ｃの値は、ＡＭＳ測定の場合、同時に測定される値を用いている。

３．結果

測定の結果、1,090±30ＢＰ（ＩＡＡ－11832）という値が得られた。なお、δ^{13}Ｃによる同位体効果の補正を行なっていない値は1,020±30ＢＰ、δ^{13}Ｃの値は－17.11±0.90である。

４．考察

炭化試料の測定値は10世紀頃の年代を示し、土器などの遺物から想定される時代観と矛盾しない。古代には東北地方でも多くの炭化イネが検出されており（三浦，1992；松谷，2001など）、広く栽培・利用されていたことが伺われる。

引用文献

松谷暁子（2001）灰像と炭化像による先史時代の利用植物の探求．植生史研究，10，ｐ.47-66.

三浦圭介（1992）青森県での遺跡調査におけるフローテーション法の導入とその成果について．考古学ジャーナル，355，ｐ.29-31

杉の堂遺跡出土鉄関連遺物の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館　赤　沼　英　男

1　はじめに

岩手県水沢市に所在する杉の堂遺跡は、国道４号水沢東バイパスの建設工事に伴い平成14年に発掘調査された遺跡である。調査の結果、６世紀後半代から10世紀前半代に比定される竪穴住居跡が検出され、８世紀代の住居跡床面からは鉄器および羽口が、９世紀～10世紀前半代の住居跡床面からは鉄器および鉄滓が検出された[1)]。時代経過とともに遺跡内において鉄器が普及し、その製作までもがなされるようになった様子をみてとれる。

遺跡内における鉄に関する生産活動内容を推定し、鉄器製作の素材となった地金の時代経過に伴う組成変化の有無を明らかにすることを目的として、出土鉄関連遺物（鉄器、鉄滓、および羽口）の金属考古学的調査を実施した。調査の結果、８世紀から９世紀に比定される鉄器は全て鋼製鉄器であり、化学組成上４つに分類された。鉄滓は銑鉄を脱炭して鋼を製造する過程で生成した可能性がある。検出された２点の羽口のうち、肉厚で軌道内径が細いものについては、溶融または部分溶融した銑鉄に空気を送風する、空気酸化の道具として使用された可能性が考えられた。もう一方の羽口については構造物（炉と推定される）内に空気を送り込むために用いられた可能性が高いと推定されたが、具体的用途を特定することはできなかった。鉄滓の成因および鋼製鉄器にみられる化学組成上の差異を加味すると、製品供給、鋼製造の素材となる原料銑鉄の供給、および使用不能となった鉄器の再利用によって、遺跡内に鉄器が普及し利用されたと推定される。以下に金属考古学的調査結果を報告する。

2　調査資料

金属考古学的調査を行った資料は鉄器８点、羽口２点、および鉄滓４点の合計14資料である。鉄滓はいずれも椀形滓で凸部表面は溶融または部分溶融した粘土状物質で覆われており、凹部には錆と鉄滓が混在した資料が残存している。羽口には、先端部付近の気道内径が約３㎝、気道外径が約５㎝、もう一方の端部の気道内径が約4.5㎝、気道外径が約７㎝で、先端に向かって先細るもの（表１№９、図７ $a_{1\text{-}2}$）と、気道内径が約2.3㎝、外径が約７㎝でほぼ一定の太さをしたもの（表１№14、図８ $a_{1\text{-}2}$）の２つが検出されている。前者は後者に比べ肉薄で、表面は先端から約５㎝の領域が灰褐色、その外側は約２㎝の黄褐色を呈する帯状領域からなり、さらに端部までは赤褐色を呈する領域によって構成されている。黄褐色を呈する領域が壁体に装着されていたものと推定される。№14羽口表面は青灰色を呈する粘土状物質で覆われている。表１に調査資料番号、検出遺構、推定時期を示す[1)]。

3　調査試料の摘出

鉄器についてはダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル（以下、ハンドドリルという）を使って、資料の外観形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、約0.5ｇの試料を摘出した。羽口については先端部ともう一方の端部から約0.5ｇの試料を、鉄滓については中心部分にハンドドリルで深さ１～２

cmの切り込みを入れ、一方の切り込み面から約１ｇの試料を切り取った。摘出した試料をさらに２分し大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。鉄器の中で、№２、№４、№６、№７、および№８については、刃（Eg）部および棟（Rg）部または基（Bs）部の２ケ所から試料を摘出し、それぞれを金属考古学的調査に供した。各資料からの試料摘出位置は、図１～５、図７～９に示すとおりである。

4　分析方法

組織観察用試料についてはエポキシ樹脂で包埋し、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、鉄器地金の製造方法、鉄滓の成因、および羽口の使用方法を推定するえで重要と判断された鉄器の非金属介在物（鋼を製造する過程で分離することができずに残った異物）、鉄滓および羽口に残存する鉱物相をエレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）で分析した。鉄器から摘出した試料のうち、メタルが残存する試料については、ナイタール（硝酸2.5ml とエチルアルコール97.5ml の混合液）で腐食した後、組織観察した。

化学成分分析用試料は外表面に付着する土砂を除去するため、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。試料を130℃で２時間以上乾燥し、テフロン分解容器に直接秤量して、塩酸、硝酸、フッ化水素酸、および蒸留水を加え密栓した後、マイクロウエーブ分解装置を使って分解した。溶液を蒸留水で定溶とし、T.Fe（全鉄）、Cu（銅）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、マンガン（Mn）、リン（P）、チタン（Ti）、ケイ素（Si）、カルシウム（Ca）、アルミニウム（Al）、マグネシウム（Mg）、バナジウム（V）の12元素を誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP－OES法）で分析した。

5　調査結果

5－1　鉄器の化学組成

表２に鉄器から摘出した試料の化学成分分析結果を示す。№５、№６Bs、および№８Eg・Bsから摘出した試料のT.Feは95.48～98.57%でほぼメタルからなる試料が、№２Eg・BsのT.Feはそれぞれ89.85%、83.07%で、メタルに錆が混在した試料が分析されている。他の７試料のT，Feは65.37～76.85%で錆化が進んでいる。№３、№４Eg・Rg、№６Bs、および№７egからは0.01%以上のCuが、№１、№２Eg、№３、№４Eg・Rg、№６Bs、№７Eg・Bs、および№８Bsからは0.01%以上のNiが検出され、分析した13試料全てに0.01%を上回るCoの含有が確認された。№２Eg・Rg、№６Eg、および№７Egからは0.1%以上のPが分析されている。

錆化が進んだ試料に含有される微量元素を検討する場合、埋蔵環境からの富化について検討する必要がある[2)]。５－３で述べる羽口の分析結果（表３）が示すように、遺物を埋蔵する土砂に100ppm（0.01%）以上のCu、Ni、およびCoが含有されることはまずない。金属考古学的調査を行った鉄器に銅またはその合金をはじめとする異種金属の付着がみられなかったこと[1)]を考慮すると、0.01%以上のCo、Ni、Cuが検出された試料については、そのほとんどが錆化前の地金に含まれていたと判断される。

一方、Pについては埋蔵環境下から富化されることがある[3)]。錆化した試料におけるPの分析値を評価する場合、遺物を取り囲んでいた土壌中のP含有量、およびほぼ同じ埋蔵環境下にあったとみなすことのできる他の鉄器のP含有量を調査し、それらの結果を比較して富化の有無を検討する必要がある。№９羽口の製作に使用された粘土状物質に0.1%を上回るPが含有されていることをふまえると、錆化が進んだ試料から検出されたPをただちに製作に使用された鋼中のPに起因するとみるのは難しい。ここではメタルと錆が混

在した試料からなる№2 Eg・Rgに0.1%近く、またはそれ以上のPが含有されていた可能性があることを指摘するにとどめる。

5－2　鉄器の組織観察結果

№2 Eg（図1 a_1）およびBsから摘出した試料にはメタルが残存していたので、ナイタールで腐食した後、組織観察した。Eg部から摘出した試料は黒く腐食されたパーライト〔フェライト（αFe）とセメンタイト（Fe_3C）の共析組織〕とフェライトによって（図1 $b_{1\text{-}2}$）、Bs部から摘出した試料は微細なパーライトとフェライトからなる領域と主としてフェライトからなる領域が層状に並んだ組織によって構成される（図1 $c_{1\text{-}2}$）[4]。前者はパーライトの占める面積割合から炭素量0.1～0.2%の鋼、後者は炭素量0.1%以下の鋼と評価される。Eg部のメタルにはFe-Ti-Al-Mg-O系の化合物（XT、以下では主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物をXTとする）、および微細な結晶を内包するガラス化した領域（Ma）からなる非金属介在物が、Bs部のメタルには灰色の粒状をしたウスイタイト（Wü：化学理論組成FeO）、化合物XT、および微細な結晶を内包するガラス化した領域（Ma）からなる非金属介在物がいたるところに残存していた。

№5、№7 Bs、および№8 Eg部から摘出した試料も№2 Eg部同様炭素量0.1～0.2%の鋼によって、№8 Bsから摘出した試料は炭素量0.3～0.4%の鋼によって構成されている（図3・4）。№6 Egから摘出した試料に残存するメタルは、その全域がマルテンサイト組織からなる4）。この組織の場合、熱処理を施し標準組織に戻した後炭素量を評価する必要があるが、上記組織の喪失を考慮し今回は実施を見合わせた。№6 Bsから摘出した試料に残存するメタルはその全域が黒く腐食されており、炭素量0.6～0.7%の鋼と評価される（図2 a_1-c_2）[4]。

№3および№7 Egの錆部分には金属光沢を呈する線状結晶（Cm）またはその欠落孔が観察される（図3）。№3の結晶Cmまたはその欠落孔は層状に並び島状領域を形成する。これまでに行われた組織観察結果に基づけば[2)5)]、結晶Cmはパーライト中のフェライトが錆化し、セメンタイトが抜け落ちることによって生成した組織と推定される。この組織をパーライトとし錆化による組織の膨張を無視すると、№3は炭素量0.2～0.3%の鋼とみることができる。№7 Egについては結晶Cmが局所的に残存しているに過ぎず、錆化前の地金の炭素量を推定することは困難であった。№1、№4 Eg・Rgには製作時に使用された地金の組織を推定できる領域を見出すことはできなかった。

№1および№4 Egから摘出した試料にはFe-Ti-Al-Mg-O系のチタン化合物（XT）、№3および№7 Egから摘出した試料にはFe-Ti-Al-Mg-O系のチタン化合物（XT）とガラス質ケイ酸塩（Gl）からなる非金属介在物が、№4 Rgから摘出した試料にはFe-Ti-Al-Mg-O系のチタン化合物（XT）と微細な結晶が混在したガラス化した領域（Ma）からなる非金属介在物がみられた。№5および№6 Bsには、Fe-Ca-Al-K-Na-Mg-Si-Ti-O系ガラス質ケイ酸塩（Gl）、№6 Egおよび№8 EgにはFe-Mg-Si-O系化合物［Fa：マグネシウムを固溶した鉄かんらん石｛$2(Fe,Mg)O\cdot SiO_2$｝と推定される］、および微細な結晶を内包するガラス化した領域（Ma）、№8 Bsにはそれにウスタイトが加わった非金属介在物が見出され、№7 Egには灰色を呈するFe-O系領域とやや暗灰色を呈するFe-Si-O系領域が混在した非金属介在物が観察された（図2－4）。上述の組織観察結果を整理すると表2右欄のとおりとなる。

5－3　羽口の化学組成

No.9 $Sa_{1\text{-}2}$のT.Feはそれぞれ9.00%、4.31%、Al、Si、およびCaはそれぞれ8～10%、20～22%、0.7～2.4%である。Alに富む粘土状物質が羽口の製作に使用されていて、先端部分から摘出した試料はもう一方の端部からの試料に比べFe、Caに富んでいる。No.14の$Sa_{1\text{-}2}$からはそれぞれ4.24%、3.76%のT.Fe、0.3～0.5%のCa、9～11%のAl、18～24%のSiが検出された（表3）。

5－4　羽口の組織観察結果

No.9 Sa_1から摘出した試料は酸化ケイ素(Qz：石英と推定される)、Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物(XT)とガラス化した領域から、Sa_2から摘出した試料は酸化ケイ素（Qz：石英と推定される）とほぼガラス化した領域からなる（図7）。No.14 Sa_1から摘出した試料はFe-Ti-Al-Mg-O系化合物（XT）、Fe-Mg-Al-O系化合物（Ha）、およびガラス化した領域からなり、Sa_2から摘出した試料は酸化ケイ素（Qz：石英と推定される)、斜長石と思われる鉱物(Opl)、およびほぼガラス化した領域によって構成される(図8)。

5－5　鉄滓の化学組成

No.11・12およびNo.13・14のT.Feは42.32～61.50%で、他に5.70～7.00%のSi、0.632～3.09%のAlを含有する。酸化鉄に富む鉄滓である。No.12、No.14にはそれぞれ9.73%、7.61%のTiが含有されており、No.11およびNo.13とはTi含有量の点で明瞭な差異がみられる（表4）。

5－6　鉄滓から摘出した試料の組織観察結果

No.10の凸部表面は青灰色を呈し、部分溶融した粘土状物質が固着している。摘出した試料にはいたるところに空隙がみられる。マクロ組織枠内部のEPMAによる組成像（COMP）には、灰色の粒状化合物ウスタイト（Wu)、やや暗灰色のFe-Mg-Si-O系化合物（Fa)、微細な結晶を内包する黒色領域（Ma）が観察された（図9）。No.12から摘出した試料もNo.10とほぼ同様の鉱物組成をとる。ただしNo.12にはやや暗灰色をした微細なFe-Al-O系化合物（Ha）が化合物Faの周縁に残存する（図10)。

No.11のマクロ組織枠内部はFe-Ti-Al-Mg-O系化合物（XT）と微細な化合物を内包するガラス化した領域（Ma）によって構成され、No.13領域R_1はFe-Ti-Al-Mg-O系化合物（XT）とガラス化した領域（Gl）によって、領域R_2はやや暗灰色のFe-Ca-Mg-Si-O系化合物（Fa)、Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物（XT)、および微細な化合物を内包するガラス化した領域（Ma）からなる。上記組織観察結果は表4右欄に整理される。

6　考察

6－1　鉄器の分類

後述するように、鉄器製作の素材となる地金は銑鉄（現代の金属工学の定義に従えば炭素量が2%を上回る鉄）と鋼（現代の金属工学の定義に従えば炭素量2%以下の鉄）に分類される。金属考古学的調査を行った8点の鉄器はいずれも鋼を素材とし、No.6には炭素量0.6～0.7%の鋼が、No.2、No.3、No.5、およびNo.7には炭素量0.4%以下の鋼が配されていた。とりわけNo.6の刃部には焼き入れ組織が観察された。炭素量0.6～0.7%の鋼を使って鎌の形を整えた後、刃部に熱処理が施されたものと推定される。なお、調査に使用した試料は調査対象とした鉄器の一部であり、資料全体の断面構造は不明である。古墳出土刀剣の中に人為的に炭素量の異なる鋼を合わせ鍛えて作刀したと推定される資料がみられること[6]、奈良時代の直刀の中にも

炭素量の高い鋼を心金としその両側を炭素量の低い鋼で挟んだ断面構造を有するものが確認されていること[7]を加味すると、８点の調査対象とした鉄器についても炭素量の異なる鋼を合わせ鍛えて製作された可能性がある。この点については当該資料から広領域にわたる調査試料を摘出し確認する必要がある。

６－２で述べるように、古代には複数の鋼製造法があった可能性がある。いずれの方法が用いられたとしても、多段階の工程を経て目的とする鋼が製造されたことは確実である。出発物質として同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件に応じ、製造される鋼の組成にはばらつきが生じる。従って、表２の分析結果を単純に比較するという解析方法では、実態を反映した資料の分類結果を得ることは難しい。表２の中で、Cu、Ni、Coの三成分は鉄よりも錆にくい金属のため、一度メタルに取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまる。従って、合金添加処理が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似すると推定される。図６ａは鋼製鉄器から摘出された13試料のうち、錆化しNiが100ppm（0.1%）未満にあるNo.２Bs、No.６Egを除く11試料の（mass％Cu）/（mass％Ni）と（mass％Co）/（mass％Ni）を、図６ｂには調査した13試料すべての（mass％Cu）/（mass％Co）と（mass％Ni）/（mass％Co）を求め、その値をプロットしたものである。図６ａ・ｂでは非金属介在物中に主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物（ＸＴ）が見出されたものを黒丸（●）、として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物（ＸＴ）が見出されなかったものを白丸（○）で示した。

図６ａではNo.６Bs、No.７Eg・Bs、No.８Eg・Bsはほぼ中央下にまとまって、No.３はその右方に近接して分布する。No.２Ｅｇは中央下に、No.１およびNo.５は右方に、No.４Eg・Rgは中央上方の離れた位置にプロットされる。図６ｂでは、No.６Eg・Bs、No.７Eg・Bs、No.８Eg・Bsは左下右方にほぼまとまって分布し、その左方にNo.１、No.２Eg・Rg、No.３、およびNo.５がプロットされる。No.４Eg・Rgは図の上方に分布する。図６ａ・ｂから以下の２点を指摘できる。

① No.１およびNo.５、No.２およびNo.３、およびNo.６～No.８はそれぞれ組成が同じ製鉄原料を使って生産された鋼を用いて製作された可能性が高い。

② No.４は①とは組成が異なる鋼を用いて製作された可能性が高い。

６－２　古代における鋼の製造

古代の鋼製造法については幾つかの方法が提案されており見解の一致をみるにいたってはいない。その主因は、原料鉱石〔砂鉄もしくは鉄鉱石[8]〕を製錬して得られる主生成物の組成についての見解の相違にある。

製錬産物である鉄は炭素量に応じ、鋼と銑鉄の２つに分類される。製錬炉で得られた鉄から極力鋼部分を摘出し、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そのようにして製造された鋼を使って、製品鉄器が製作されたとする見方がある[10]。製錬炉で直接に鋼がつくり出されるという意味で、この方法は近世たたら吹製鉄における鍛押法[11]によって生産された鉄塊を純化する操作に近似する。また、この方法によって得られた鉄〔炭素量が不均一で鉄滓が混在した鉄（主に鋼からなるが銑鉄も混在すると考えられている）〕を精製し目的とする鋼に変える操作は、精錬鍛冶[10]と呼ばれている。

古代に鋼を溶融する技術は未確立であったと考えられるので（溶融温度は炭素量によって異なるが、炭素量0.1～0.2%の鋼を溶融するためには炉内温度を1550℃以上に保つ必要がある[4]）、主として鋼から成る鉄から鉄滓を分離・除去する際の基本操作は加熱・鍛打によったと推定される。組成が不均一な鉄から純化された鋼を得る操作に精錬鍛冶という用語が用いられたのは、上述によるものと推察される。

一方、おびただしい数の鉄仏や鉄鍋、鉄釜をはじめとする鋳造鉄器の普及が示すように[12][13]、遅くとも９

世紀には銑鉄を生産する技術、すなわち銑鉄を炉外に流し出す製錬法が確立されていたとする見方が出されている[14]。得られた銑鉄を溶解し鋳型に注ぎ込むことによって鋳造鉄器が製作される。また、生産された銑鉄を脱炭することにより鋼の製造も可能となる。この方法による鋼製造は、銑鉄を経由して鋼が製造されるという意味で、間接製鋼（鉄）法[15]に位置づけられる。

銑鉄を脱炭する方法の一つとして、近世たたら吹製鉄における大鍛冶[5]がよく知られている。たたら吹製鉄には銑押法と鍛押法の２つの方法がある。後者における生産の主目的物は鍛鉄(主として鋼からなる鉄塊)、前者は炉外に流し出される銑鉄で、副生成物として炉内に鍛鉄もできる。銑押法において鍛鉄は操業の妨げになるので、鉄棒をたえず炉内に入れ炉外に取り出すようつとめたという。このようにして生産された銑鉄は鍛冶場に運ばれる。そこではまず火床炉の炉底に木炭を積み、その上に銑鉄を羽口前にアーチ形に積み重ね、さらに小炭で覆った後底部に点火する。積み重ねられた銑鉄は内部にあるものから溶融し、滴下する。この時、羽口付近の酸化性火？にふれ酸化され、鋼（左下鉄）となる。ここまでの操作は「左下」と呼ばれる。左下鉄は製錬時の副生成物である鍛とともに再度同じ火床炉にアーチ状に積まれ、上述と同様にして脱炭が図られる。脱炭が十分に進んだところで金敷の上にのせ、加熱・鍛打によって鉄滓の除去と整形がなされる。後者は「本場」と呼ばれる。上記の「左下」と「本場」、２つの操作を経て包丁鉄を造る方法が大鍛冶といわれている[16]。上述から明らかなように、大鍛冶における「本場」の操作内容は出発物質こそ異なるものの、基本的に先に述べた精錬鍛冶とほぼ同じとみることができる。

大鍛冶では空気酸化により局所的に銑鉄の脱炭が図られるが、溶銑を準備し、大鍛冶と同じ原理によって脱炭する方法が古代に行われていたとする見方が出されている[17)-19]。この方法の場合、溶銑の確保とそれを脱炭するための設備・道具が不可欠であり、現在その点についての検討が進められている。

上記から明らかなように、鉄に関する生産設備として少なくとも①製錬炉、②溶解炉、③精錬炉、④鍛冶炉の４つがあった可能性がある。さらに、製錬炉としては主として銑鉄を生産するための炉と鋼を生産するための炉が、精錬炉については銑鉄を局所的に溶融し脱炭するための炉と、溶融または部分溶融した銑鉄を準備した後それを脱炭して鋼を製造する炉が、鍛冶炉については精錬鍛冶と小鍛冶があった可能性があり、検出された炉跡の残存状況と出土資料の形状でただちに機能を決定することはきわめて危険である。以下ではこの点に留意し、考古学の発掘調査結果と出土鉄滓の金属考古学的解析結果を基に、羽口の用途および鉄滓の成因について検討することとする。

６－３　推定される羽口の用途

№９は黄褐色を呈する帯状領域が壁体に装着され、赤褐色を呈する領域が構造物の外側に、灰褐色を呈する部分が構造物にあったと推定される。なお、構造物内で生じた反応については不明である。№14は軌道内径がほぼ一様で肉厚であるという点で№９とは形状が異なる。先端部分は一部溶損し、黒褐色を呈している。№９および当該資料のもう一方の端部に比べ先端部は鉄に富むが、これは羽口先の反応サイトにおいて生成した酸化鉄に起因すると考えられる。№14については鉄に関する生産活動で使用された可能性が高い。

６－４　鉄滓の成因

金属考古学的調査を行った鉄滓は９世紀代に比定されるＳＩ22住居跡およびＳＸ02竪穴状遺構床面から検出された４点の椀形滓である。これら２遺構において鉄関連炉跡は未検出なため、遺構に基づく成因推定は困難である。ここでは鉄滓の形状と組成を基に、その成因について検討する。

4点の鉄滓の凸部はいずれも青灰色を呈し、いたるところに溶融または部分溶融した粘土状物質が残存している。木炭の噛み込みや固着はみられない。表面形状と組織観察結果に基づけば、Si、Alを主成分とする粘土状物質に酸化鉄を主成分とする鉄滓が反応し生成した資料と推定され、外観形状の点からは、6－2で述べた精錬鍛冶または精錬に伴って生成した資料とみることができる。

精錬鍛冶における出発物質は、主として鋼からなり、相当量の鉄滓が混在した組成が不均一な鉄である。木炭の燃焼熱による炉内到達可能温度を考慮すると、主として鋼からなる鉄を溶融することは困難であり、純化の操作は基本的に加熱・鍛打によったとみなければならない。この操作では鉄塊に付着または鉄塊中に固着する鉄滓が破砕され除去される。その過程で飛散した鉄滓が炉内に入り、炉材粘土と反応しながら溶融もしくは部分溶融した後、炉底にたまり固化する。精錬鍛冶の立場に立った場合、4点の椀形滓はその形状から、炉底部において生成したと判断される。その場合、熱源である木炭が共存しているので、鉄滓中にある程度の木炭が噛み込まれるはずである。上記4点の鉄滓には木炭の噛み込みや固着はみられない。熱源である木炭と反応サイトとが分離された状況下において生成した鉄滓の可能性がある。

椀形を呈すること、木炭と反応サイトとが離れた位置にあった可能性が高いことを考え合わせると、粘土状物質を用いて製作された椀形容器の中に溶銑を準備し、主として空気酸化によって溶銑を脱炭して鋼を製造する操作（精錬）が行われていた可能性が高いと筆者は考える。4点の椀形滓に残存する酸化鉄、鉄かんらん石、またはFe-Mg-Al-O系化合物は、溶銑の再酸化物質と粘土状物質との反応生成物とみることによってその説明が可能となる。6－3で確認された形状の異なる羽口のうち、軌道内径がほぼ同じ太さで肉厚のNo14については、銑鉄を脱炭するための空気送風に使用された可能性がある。

No11～14椀形滓において検出された酸化鉄は、銑鉄の一部が再酸化し粘土状物質と反応して生成したもの、No12・14鉄滓中の主として酸化鉄および酸化チタンからなる化合物は、粘土状物質中に残存するチタン鉱物と酸化鉄との反応生成物、あるいはチタン化合物を含む物質の造滓材として使用されたことのいずれかに起因し、炭素含有量の異なる鋼の造り分けを行うために施された操作上の措置の可能性が考えられる。また、No14羽口先端部から摘出した試料中の酸化鉄は、鉄浴の再酸化物が揮発し羽口先端に固着したものと思われる。これらの点については今後再現実験も含め吟味する必要がある。

精錬を想定した場合、銑鉄の入手方法が問題となる。精錬鍛冶の出発物質である組成が不均一な鉄はしばしば「荒鉄」と呼ばれる[10]が、文献資料の研究によってそれは「銑鉄」であることが指摘されている[18][20]。東京都多摩市別所遺跡や岩手県平泉町柳之御所遺跡からは銑鉄塊が見いだされ、金属考古学的調査によってそれらは他地域からもたらされた可能性の高いとする見解が提示されている[21]。8世紀前葉に比定される茨城県つくば市島名八幡前遺跡では、鉄錆の中に銀化合物が点在した鉄滓が検出され、精錬過程で銀化合物を含む物質が使用された、あるいは精錬の出発物質として使用された原料銑鉄に銀化合物が含まれていた可能性のあることが指摘されている[22]。後者の場合、使用された原料銑鉄は特異な組成の鉄鉱石を始発原料とし、他地域から供給された可能性が高い。これらの調査結果は鋼製造の素材となった原料銑鉄が8世紀段階に流通していた可能性があることを示している。

杉の堂遺跡では、製品鉄器の他地域からの供給、鋼製造の素材となった原料銑鉄の獲得、および使用不能となった鋼製鉄器の再利用を図りながら鉄器の使用が図られたと思われる。これまで古代の鋼造りは直接製鋼法を基軸に検討されてきたきらいがあるが、銑鉄の生産と流通、および銑鉄を素材としての鋼の製造と鋼製鉄器の製作を考慮に入れる古代の鋼製造と鉄器製作を考える必要がある。この問題意識の基に鉄関連遺構の発掘調査が進められ、生産設備の復元が図られれば、古代の鋼製造法の実態に迫ることができるにちがい

ない。

註

1） 遺跡を発掘調査された財団法人岩手県文化振興事業団　丸山直美氏からのご教授による。

2） 佐々木稔、村田朋美「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、８、1984、pp.27-33。

3） 佐々木稔、伊藤薫「川合遺跡出土の鉄斧、鉄鎌ならびに鋤先の金属学的調査」『静岡県埋蔵文化財調査研究所紀要』Ⅱ、1987、pp.63-73。

4） 『鉄鋼の顕微鏡写真と解説』丸善株式会社、1968年。

5） Knox. R. "Detection of carbide structure in the Oxide remains of ancient steel", Archaeometry, Vol. 6 , 1963, pp.43-45.

6） 俵国一『日本刀の科学的研究』日立印刷、1982年。

7） 赤沼英男、木村克則「東北地方北部終末期古墳出土直刀の材質と製法」岩手県立博物館研究報告、７、1989、pp.63-74。

8） 各種の岩石、とりわけ火成岩中の主として磁鉄鉱と含チタン磁鉄鉱を構成鉱物とする粒子が岩石の風化に伴って分離し、現地残留や風および水などの淘汰集積作用などで濃縮したものが砂鉄鉱床である[8]。従って、砂鉄を構成する主要鉱物は磁鉄鉱であり、鉄鉱石と区別して使用することには岩石鉱物学上誤解を招く恐れがあるが、ここでは上述によって生成した鉱床から採取された磁鉄鉱および含チタン磁鉄鉱を主成分とする粒子を砂鉄、他の成因によって生成した鉄鉱床から採掘されたものを鉄鉱石と呼ぶ。

9） 『鉄鋼便覧』日本鉄鋼協会編、1981年。

10） 大澤正己「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始時期」季刊考古学、８、1984、pp.36-40。

11） 河瀬正利「中国地方におけるたたら製鉄の展開」『たたらから近代製鉄へ』平凡社、1990、p.11。

12） 五十川伸矢「古代・中世の鋳鉄鋳物」国立歴史民俗博物館研究報告第46集、1992、pp.１-79。

13） 五十川伸矢「古代から中世前半における鋳鉄鋳物生産」季刊考古学、57、1996、pp.57-60。

14） 関清「古代末の北陸－富山湾岸部の遺跡群－」季刊考古学、57、1996、pp.30-32。

15） 空気酸化により銑鉄中の炭素を脱炭した場合、操作方法によってはただちにαFeに近い組成の鉄が得られた可能性もある。古代の鋼製鉄器によく使用される亜共析鋼が銑鉄を精錬してただちに得られたかどうか不明なため、本論では間接製鋼（鉄）法という表現をとった。

16） 村上英之助「村上・中澤の往復書簡」たたら研究、36・37、1996、p.78-88。

17） 福田豊彦「近世における『和鉄』とその技術－中世の『和鉄』解明のために－」『製鉄史論文集たたら研究会創立四十周年記念』たたら研究会、2000、pp.195-228。

18） 福田豊彦「近世前期，和鉄の生産と流通の基本形態」たたら研究、39、1999、pp.15-24。

19） 赤沼英男「みちのくの地から中世の鉄をみる」ふぇらむ、Vol.2No1、社団法人日本鉄鋼協会、1997、pp.44-51。

20） 福田豊彦「鉄を中心にみた北方世界―海を渡った鉄」『中世の風景を読む　第一巻　蝦夷の世界と北方交易』新人物往来社　1995、pp.154-198。

21） 赤沼英男、佐々木稔、伊藤薫「出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通」『製鉄史論文集』たたら研究会編、2000、pp.553-576。

22）『島名八幡前遺跡』財団法人茨城県教育財団、2003。

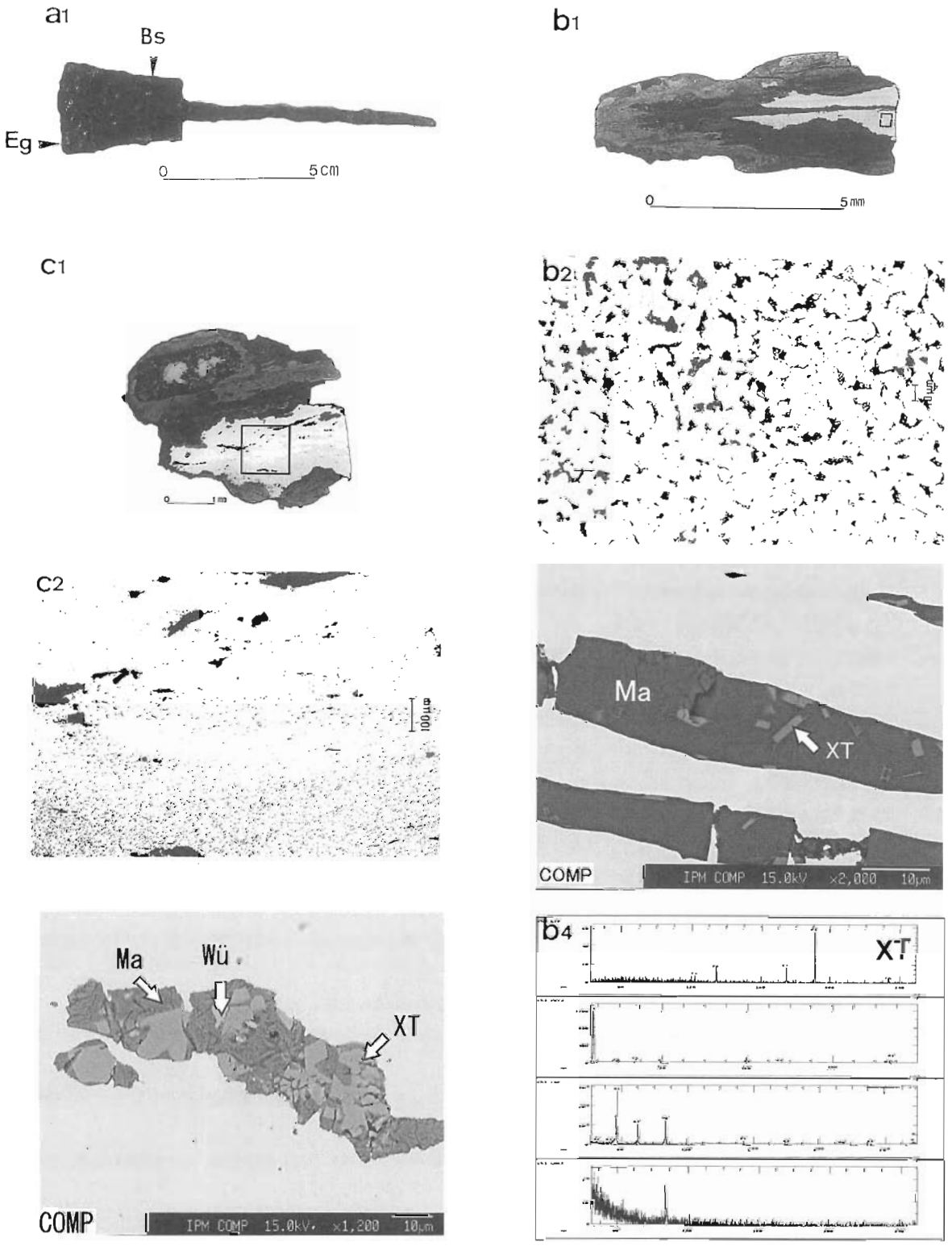


図１　No.２の外観と摘出した試料の組織観察結果

a_1：外観、矢印は試料摘出位置。b_1：a_1Eg部から摘出した試料のマクロエッチング組織、エッチングはナイタールによる。b_2：b_1枠内部のミクロエッチング組織、エッチングはナイタールによる。$b_{3\text{-}4}$：b_1メタルに残存する非金属介在物のＥＰＭＡによる組成像（COMP）と定性分析結果。ＸＴ：Fe-Ti-Al-Mg-Ｏ系化合物、Ma：マトリックス。c_1：a_1のBsから摘出した試料のマクロエッチング組織。c_2：c_1枠内部のミクロエッチング組織、エッチングはナイタールによる。c_3：c_1メタルに残存する非金属介在物のＥＰＭＡによる組成像。Wü：ウスタイト、ＸＴ：Fe-Ti-Al-Mg-Ｏ系化合物、Ma：マトリックス。

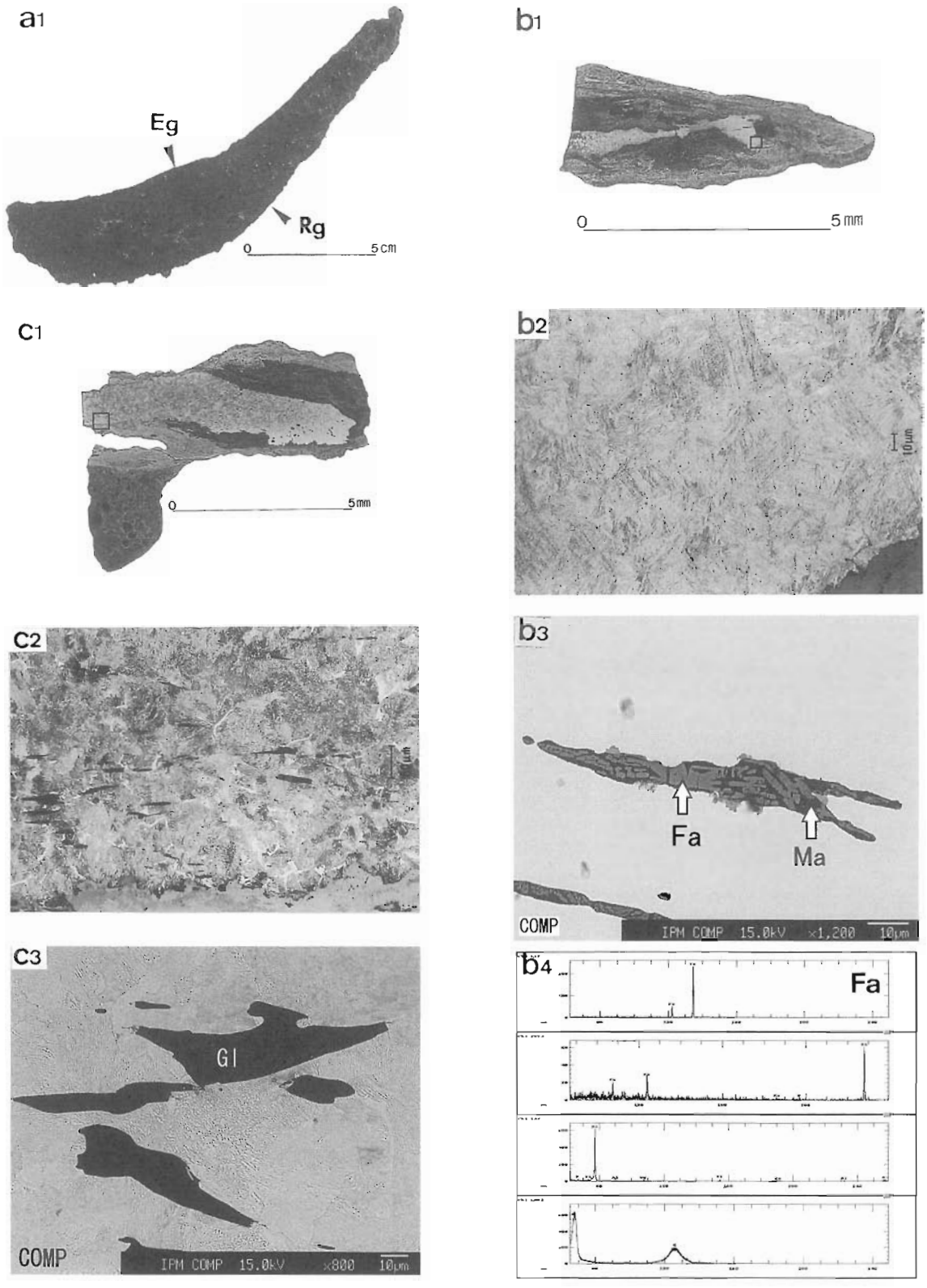


図２　No. 6 の外観と摘出した試料の組織観察結果

a_1：外観、矢印は試料摘出位置。b_1：a_1Eg 部から摘出した試料のマクロエッチング組織、エッチングはナイタールによる。b_2：b_1枠内部のミクロエッチング組織、エッチングはナイタールによる。$b_{3\text{-}1}$：b_1メタルに残存する非金属介在物のＥＰＭＡによる組成像（COMP）と定性分析結果。Fa：Fe-Mg-Si-O系化合物、Ma：マトリックス。c_1：a_1Rgから摘出した試料のマクロエッチング組織。c_2：c_1枠内部のミクロエッチング組織、エッチングはナイタールによる。c_3：c_1メタルに残存する非金属介在物のＥＰＭＡによる組成像。Gl：ガラス質ケイ酸塩。

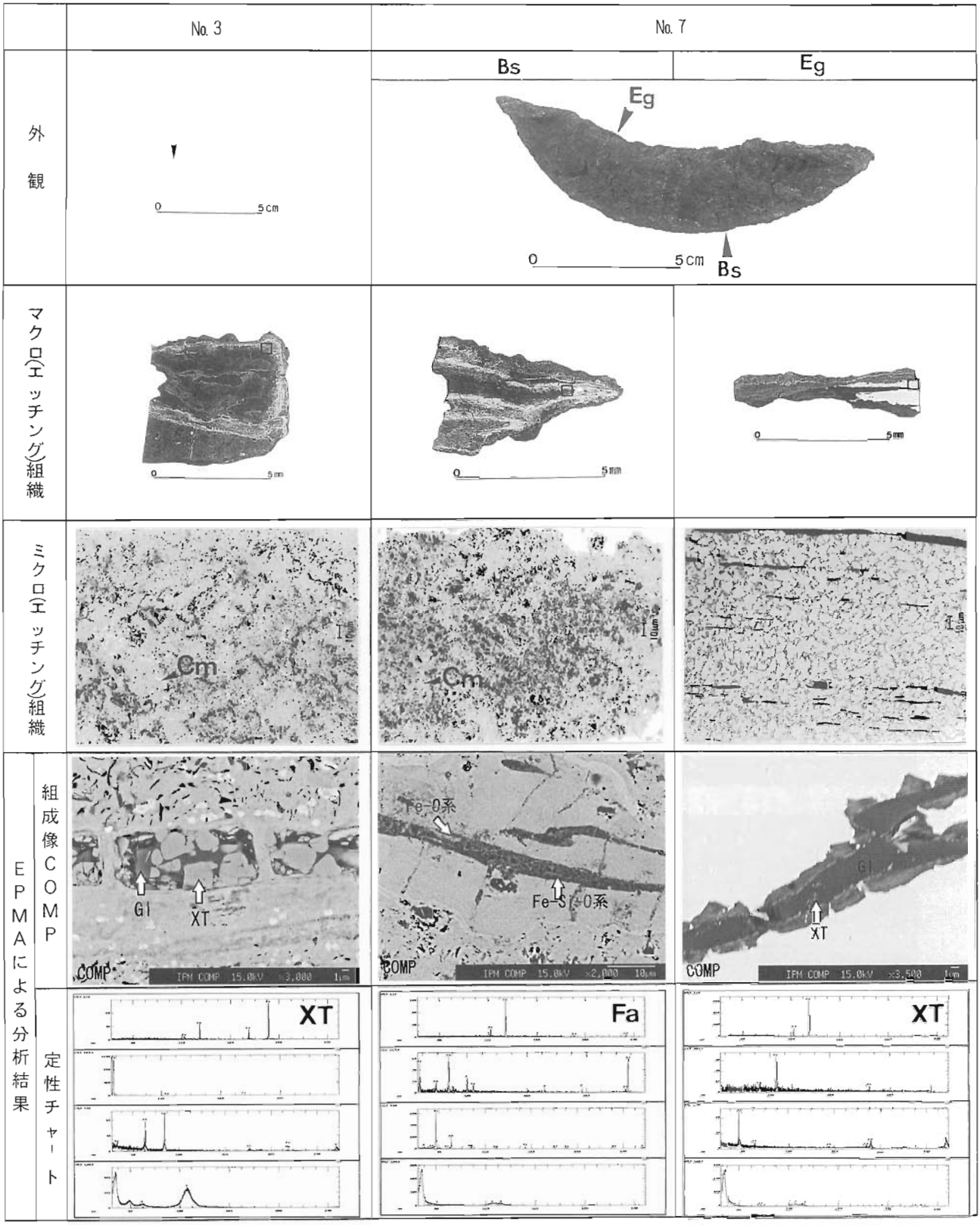


図3　No.3・7の外観と摘出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料摘出位置。ミクロまたはミクロエッチング組織はマクロまたはマクロエッチング組織の枠内部。エッチングはナイタールによる。Cmはセメンタイトまたはその欠落孔。XT：Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、Gl：ガラス質ケイ酸塩。

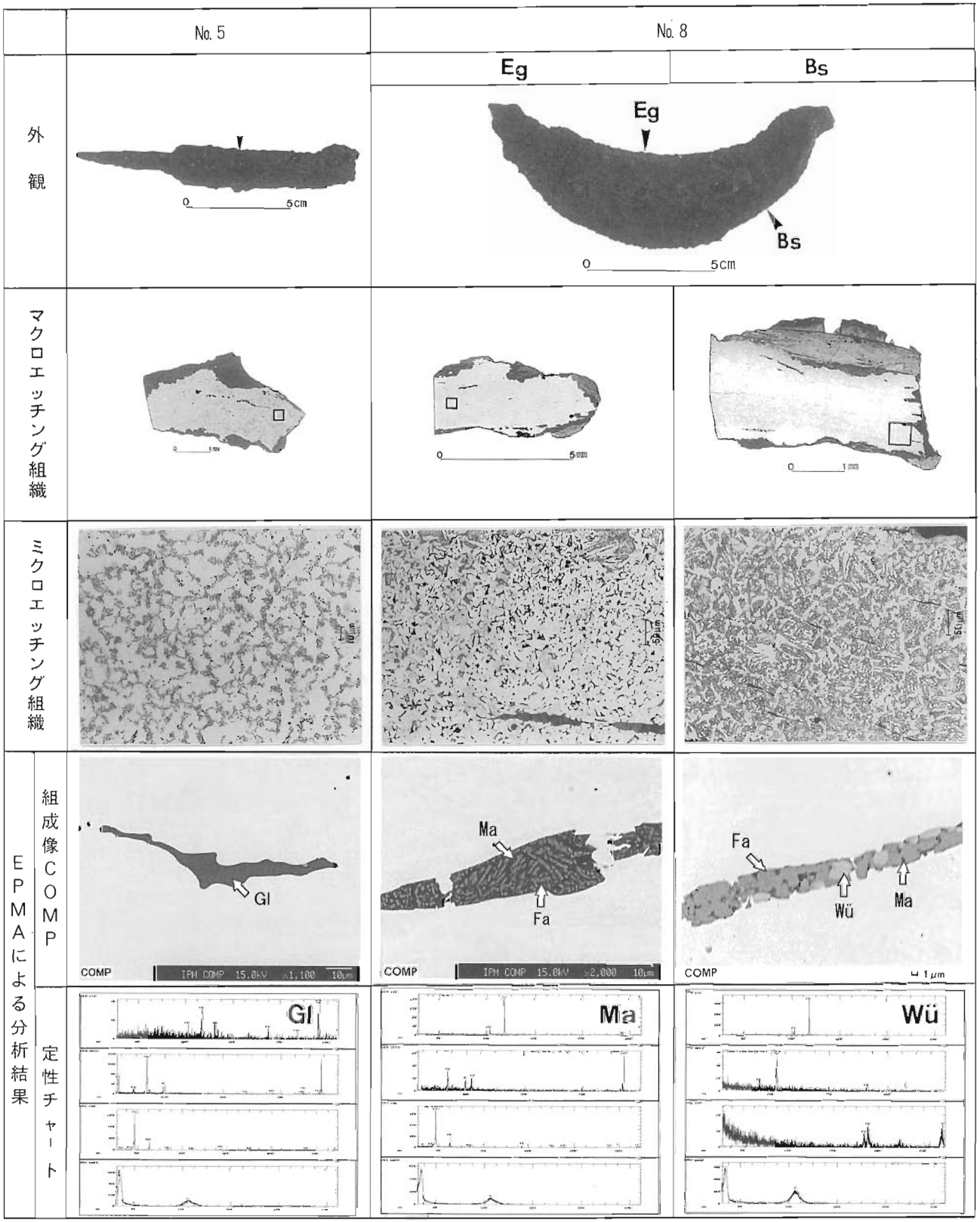


図４　No.５・８の外観と摘出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料摘出位置。ミクロエッチング組織はマクロエッチング組織の枠内部。エッチングはナイタールによる。Wu：ウスタイト、Fa：Fe-Mgi-Si-O系化合物、Gl：ガラス質ケイ酸塩、Ma：マトリックス。

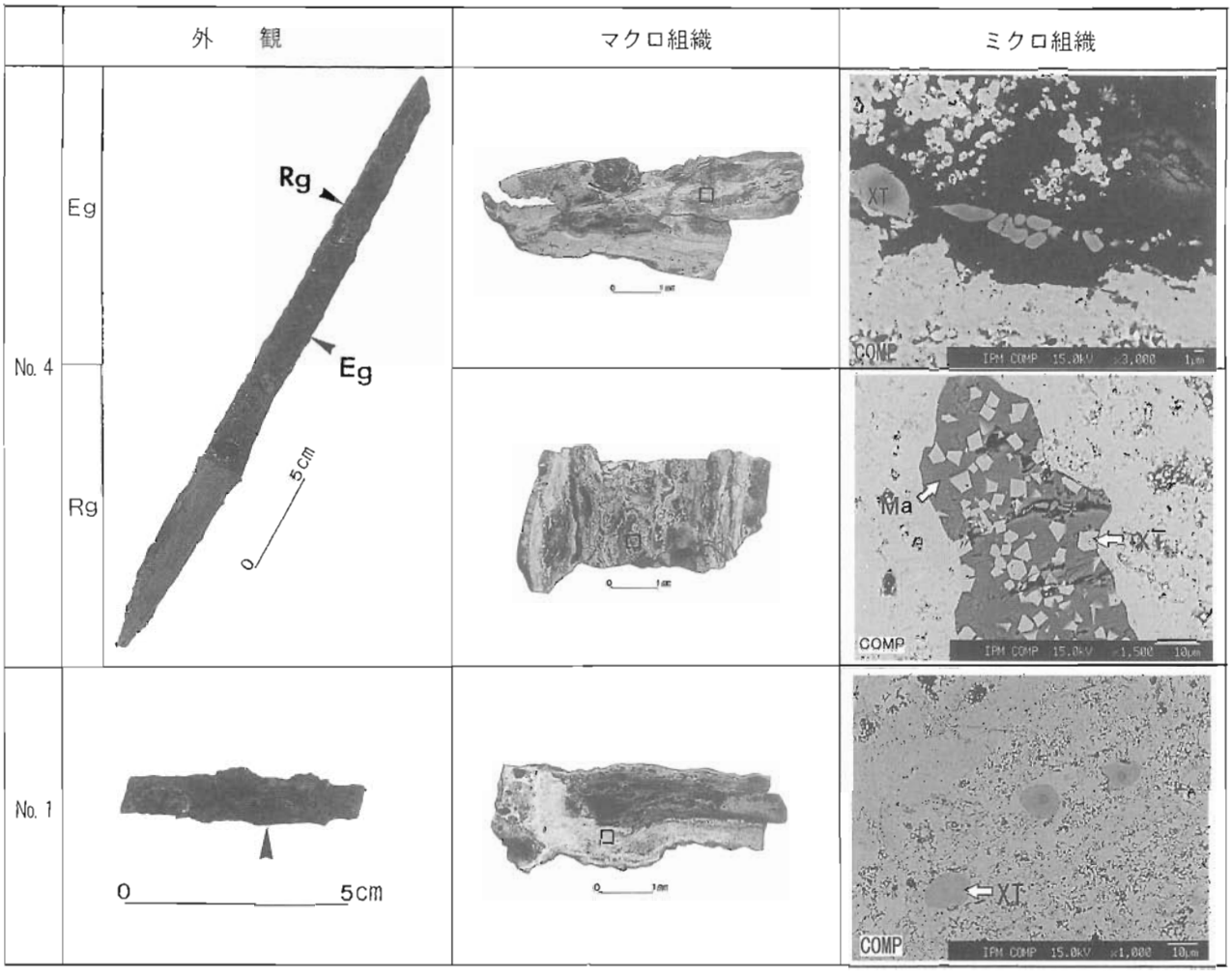


図５　No. 1・４の外観と摘出した試料の組織観察結果
外観の矢印は試料摘出位置。ミクロ組織はマクロ組織の枠内部。ＸＴ：Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、Ma：マトリックス。

表１　調査資料の概要

No	分類	検出遺構		資料番号	資料名	推定年代
		遺構名	層位			
1	鉄器	ＳＩ０８	カマド右袖	135	刀子	８世紀前半代
2		ＳＩ１５	床面	194	鉄鏃(方頭斧箭式)	８世紀前半代
3		ＳＩ０７	床面直上	112	刀子	９世紀前半代
4		ＳＩ１８	床面	223	短刀	９世紀前半代
5		ＳＤ０１	埋土中位	435	刀子	－
6		ＸＩＢ９ｄ	Ⅱ層	436	鎌	－
7		ＸＩＢ９ｄ	Ⅱ層	437	鎌	－
8		ＸＩＢ９ｄ	Ⅱ層	438	鎌	－
9	鉄生産関連資料	ＳＩ０２	Ｑ１床面	27	羽口	８世紀代
10		ＳＩ２２	床面	－	鉄滓	９後～10世紀前半
11		ＳＸ０２	床面	－	鉄滓	９後～10世紀前半
12		ＳＸ０２	床直	－	鉄滓	９後～10世紀前半
13		ＳＸ０２	床直	－	鉄滓	９後～10世紀前半
14		ＸⅡＢ６ｅ	Ⅱ層	440	羽口	－

注）Noは分析番号、検出遺構、資料番号、資料名、推定年代は岩手県埋蔵文化財調査センター丸山直美氏による。

表２　鉄器の分析結果

No	Sa	検出遺構 遺構名	検出遺構 層位	資料名	化学組成（mass%） T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	ミクロ組織	n.m.i.
1	－	SI08	カマド右袖	刀子	66.48	0.009	0.010	0.038	0.003	0.06	0.080	1.18	0.019	0.366	0.028	<0.001	no	XT
2	Eg	SI15	床面	鉄鏃	89.85	0.009	0.013	0.039	0.001	0.10	0.017	0.32	0.002	0.015	0.002	0.004	Pa(0.1－0.2)	XT, Ma
	Bs				83.07	0.007	0.009	0.030	0.005	0.13	0.033	0.81	0.014	0.225	0.017	0.002	Pa(≦0.1)	Wü, XT, Ma
3	－	SI07	床面直上	刀子	67.25	0.016	0.018	0.049	0.001	0.08	0.015	0.95	0.009	0.247	0.017	<0.001	Cm(0.2－0.3)	XT, Gl
4	Eg	SI18	床面	短刀	65.37	0.030	0.011	0.032	0.001	0.06	0.026	0.66	0.009	0.151	0.021	<0.001	no	XT
	Rg				67.15	0.066	0.020	0.042	0.002	0.08	0.078	0.67	0.008	0.217	0.014	<0.001	no	XT, Ma
5	－	SD01	埋土中位	刀子	98.57	0.004	0.003	0.012	0.001	0.03	0.001	0.30	<0.001	0.004	<0.001	<0.001	Pa(0.1－0.2)	Gl
6	Eg	XⅠB9d	Ⅱ層	鎌	76.85	0.009	0.009	0.020	0.001	0.16	0.001	0.92	0.029	0.108	0.005	0.001	Pa(不明)	Fa, Ma
	Bs				96.24	0.012	0.014	0.035	<0.001	0.04	0.000	0.34	0.007	0.015	<0.001	<0.001	Pa(0.6－0.7)	Gl
7	Eg	XⅠB9d	Ⅱ層	鎌	68.59	0.007	0.017	0.030	0.011	0.15	0.039	0.97	0.122	0.163	0.066	0.001	Cm(不明)	XT, Gl
	Bs				68.29	0.010	0.015	0.024	0.004	0.08	0.005	0.58	0.004	0.038	0.006	0.002	Pa(0.1－0.2)	Fe-O 系, Fe-Si-O 系
8	Eg	XⅠB9d	Ⅱ層	鎌	95.48	0.005	0.006	0.012	<0.001	0.03	0.001	0.27	<0.001	0.011	<0.001	0.001	Pa(0.1－0.2)	Fa, Ma
	Bs				96.00	0.009	0.015	0.028	<0.001	0.06	0.002	0.29	<0.001	0.015	<0.001	<0.001	Pa(0.3－0.4)	Wü, Fa, Ma

注１）Noは表１に対応。Saはサンプル摘出位置。化学成分分析はICP-OES法による。
注２）Paはパーライト、Cmはセメンタイトまたはその欠落孔。括弧内の数値はミクロ組織またはミクロエッチング組織から推定される炭素量。noは見いだされず。
注３）n.m.i.は非金属介在物組成。Wü：ウスタイト（化学理論組成FeO）、XT：主として酸化鉄および酸化チタンからなる化合物、Fa：FeO-MgO-SiO_2系化合物、Gl：ガラス質ケイ酸塩、Ma：マトリックス。

表３　羽口の金属考古学的解析結果

No	Sa	検出遺構 遺構名	検出遺構 層位	資料番号	化学成分（mass%） T.Fe	Cu	Mn	Ni	Co	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	鉱物組成
9	1	SI02	Q１床面	27	9.00	0.003	0.051	0.003	0.004	0.10	0.478	20.3	2.33	8.48	0.661	<0.001	XT, Ha, Gl
	2				4.31	0.001	0.023	0.002	0.001	0.19	0.466	21.8	0.717	9.64	0.337	<0.001	Qz
14	1	XⅡB6e	Ⅱ	435	4.24	0.001	0.023	0.003	0.001	0.01	0.510	18.9	0.523	10.4	0.553	<0.001	XT, Qz, Gl
	2				3.76	0.002	0.011	0.003	0.001	0.03	0.494	23.6	0.362	9.77	0.321	<0.001	Qz, Opl

注１）Noは表１に対応。Saはサンプル摘出位置。化学成分分析はICP-OES法による。
注２）XT：主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物、Ha：Fe-Mg-Al-O系化合物、Qz：酸化ケイ素（石英と推定される）、Opl：斜長石と推定される、Gl：ガラス質ケイ酸塩。

表４　鉄滓の分析結果

No	検出遺構 遺構名	検出遺構 層位	資料番号	化学成分（mass%） T.Fe	Cu	Mn	Ni	Co	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	鉱物組成
10	SI22	床面	286	61.50	0.003	0.069	0.001	0.003	0.05	0.037	5.70	0.523	0.632	0.211	0.004	Wü, Fa, Ma
11	SX02	床面	361	47.61	0.003	0.365	0.002	0.023	0.09	9.73	5.73	1.23	1.78	0.894	0.077	XT, Ma
12	SX02	床直	362	59.81	0.018	0.056	0.003	0.008	0.11	0.215	6.74	0.587	2.50	0.301	<0.001	Wü, Ha, Fa, Ma
13	SX02	床直	363	42.32	0.003	0.184	0.001	0.018	0.08	7.61	7.00	1.57	3.09	0.925	0.086	(XT, Gl)(XT, Fa, Ma)

注１）Noは表１に対応。化学成分分析はICP-OES法による。
注２）Wü：ウスタイト（化学理論組成FeO）、XT：主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物、Fa：FeO-MgO-SiO_2系化合物、Ha：Fe-Al-O系化合物、Q：酸化ケイ素（石英と推定される）、Gl：ガラス質ケイ酸塩、Ma：マトリックス。

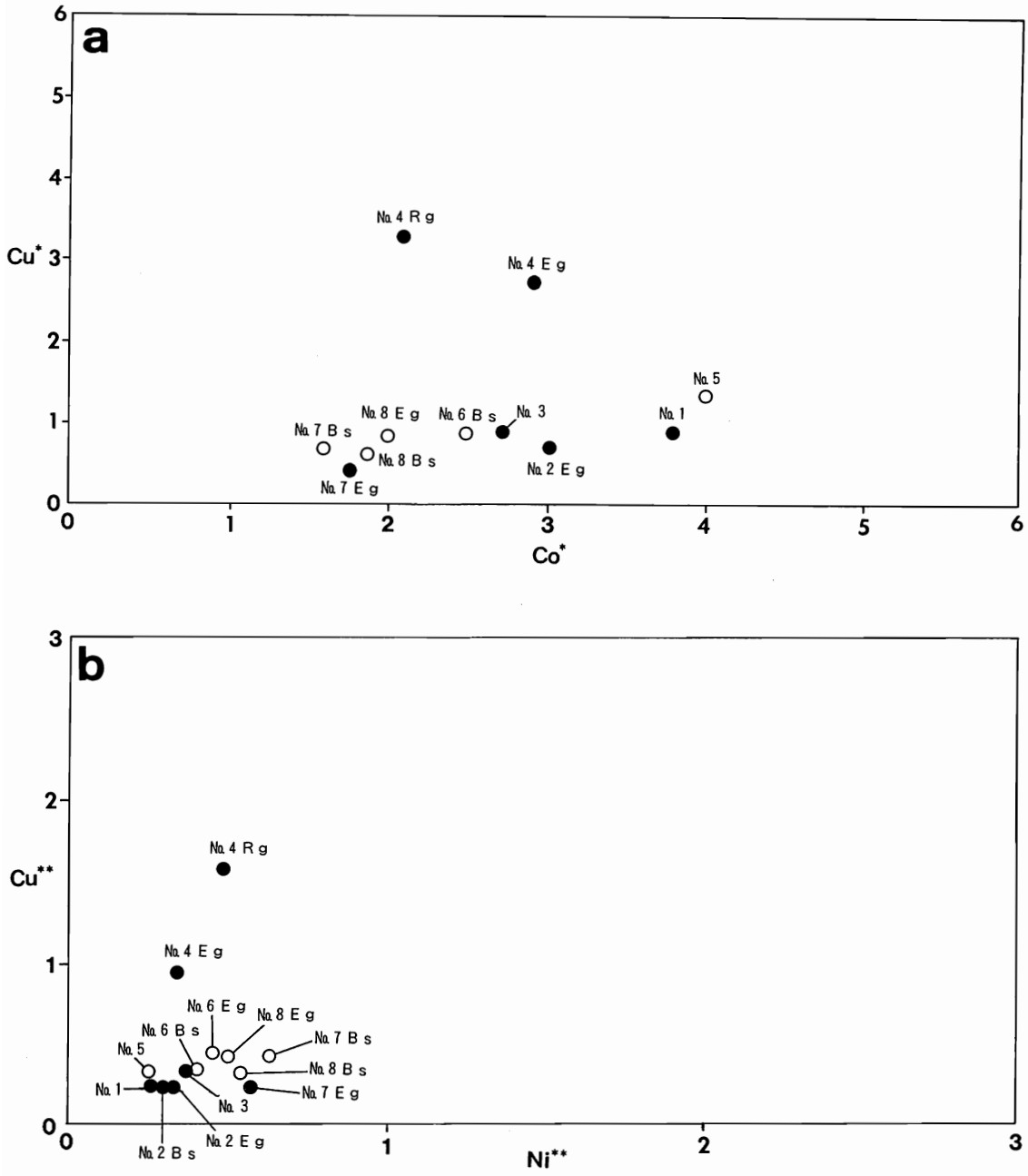


図6　鉄器に含有されるＣｕ、Ｎｉ、Ｃｏ三成分比

Co*：（mass％Co）／（mass％Ni）、Cu*：（mass％Cu）／（mass％Ni）。

Ni**：（mass％Cu）／（mass％Co）、Cu**：（mass％Ni）／（mass％Co）。

Noは表１に対応。白丸（○）：非金属介在物中にチタン化合物が見出されなかったもの。黒丸（●）：非金属介在物中にチタン化合物が見出されたもの。

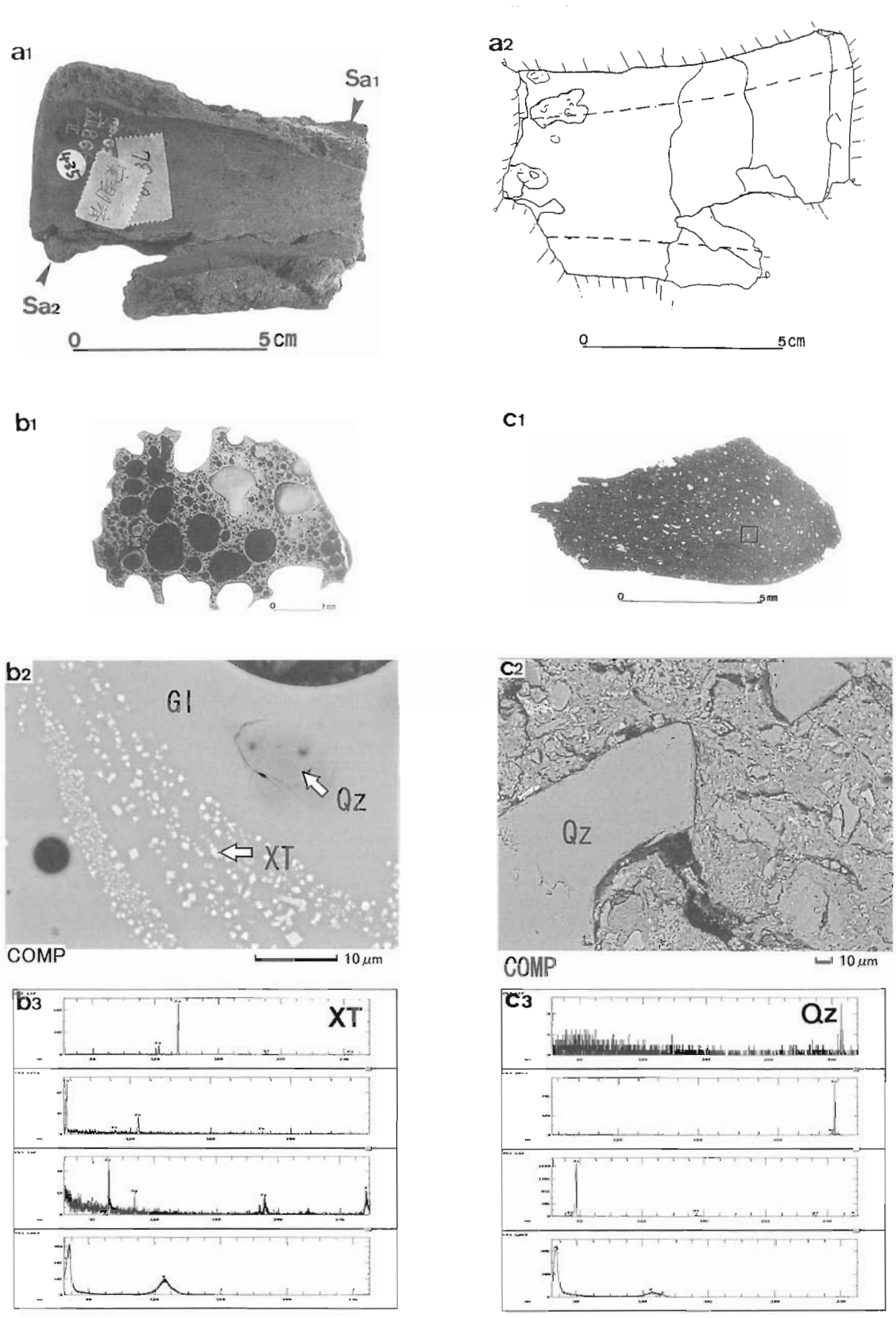


図７　No. 9 の外観と摘出した試料の組織観察結果

a_1：外観、矢印は試料摘出位置。a_2：実測図。b_1：a_1Sa_1から摘出した試料のマクロ組織。$b_{2\text{-}3}$：b_1枠内部のＥＰＭＡによる組成像（COMP）と定性分析結果。ＸＴ：Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、Ｇｌ：ガラス化した領域。c_1：a_1Sa_2から摘出した試料のマクロ組織。$c_{2\text{-}3}$：c_1枠内部のＥＰＭＡによる組成像と定性分析結果。Qz：酸化ケイ素（石英と推定される）。

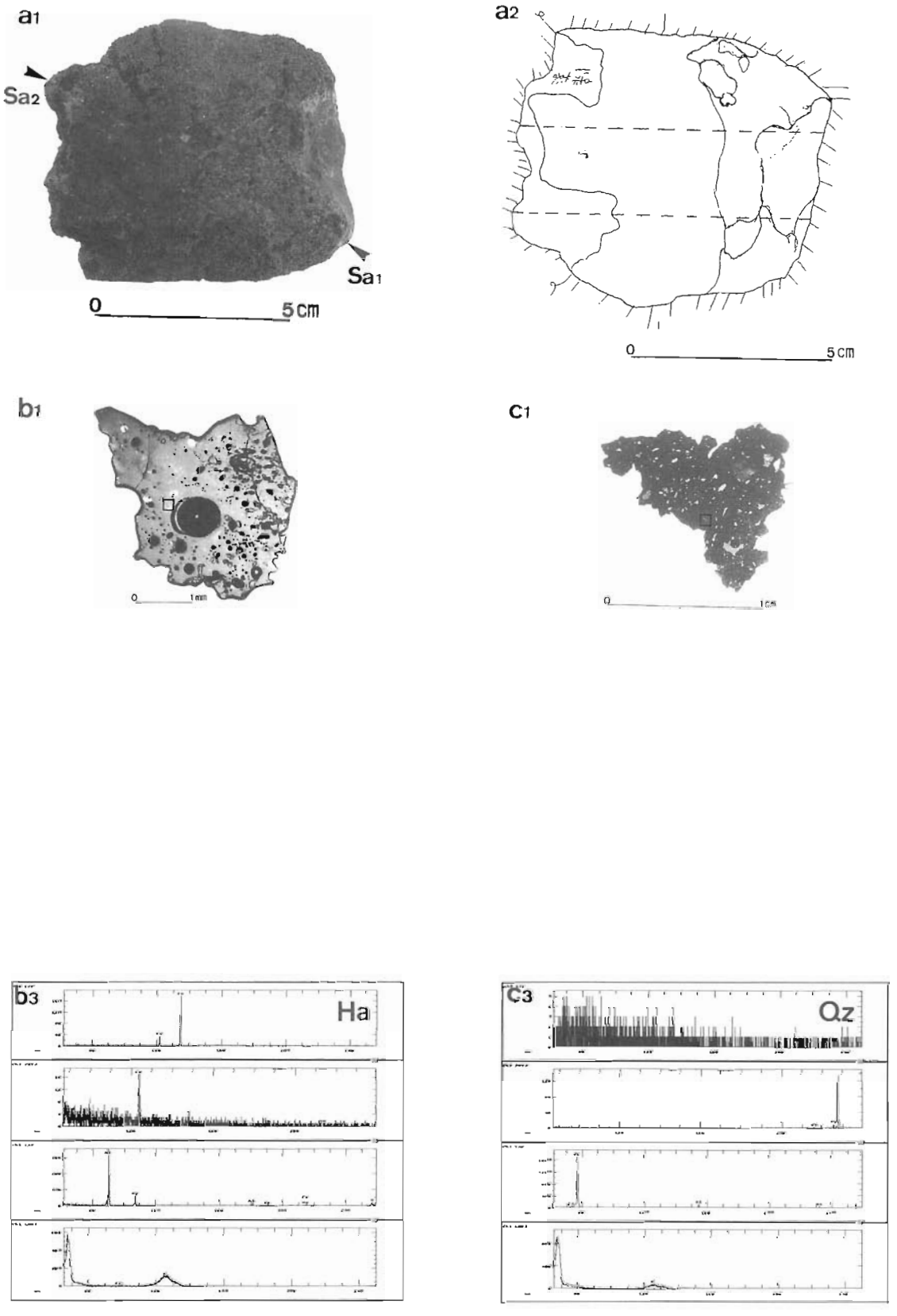


図8　No.14の外観と摘出した試料の組織観察結果

$a_{1\text{-}2}$：外観と実測図、矢印は試料摘出位置。b_1：a_1Sa_1から摘出した試料のマクロ組織。b_2：b_1枠内部のEPMAによる組成像(COMP)と定性分析結果。XT：Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、Ha：Fe-Mg-Al-O系化合物、Gl：ガラス化した領域。c_1：aSa_2から摘出した試料のマクロ組織。c_2：c_1枠内部のEPMAによる組成像(COMP)と定性分析結果。Qz：酸化ケイ素(石英と推定される)、Opl：斜長石と推定される。

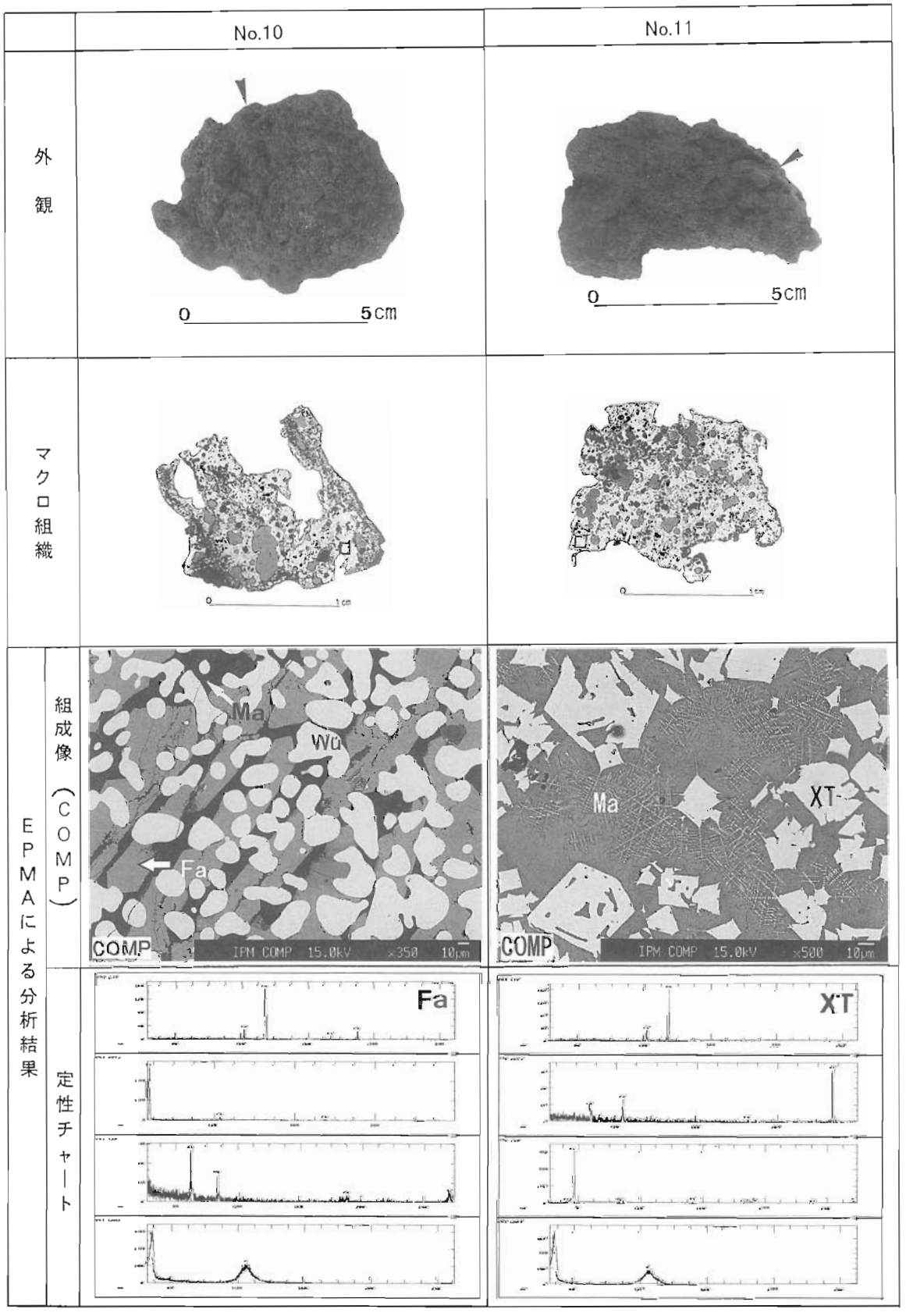


図９　No.10・No.11の外観と摘出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料摘出位置。ＥＰＭＡによる分析位置はマクロ組織枠内部。Wu：ウスタイト、Ｆａ：Ｆｅ-Ｃａ-Ｍｇ-Ｓｉ-Ｏ系化合物、ＸＴ：Ｆｅ-Ｔｉ-Ａｌ-Ｍｇ-Ｏ系化合物、Ma：マトリックス。

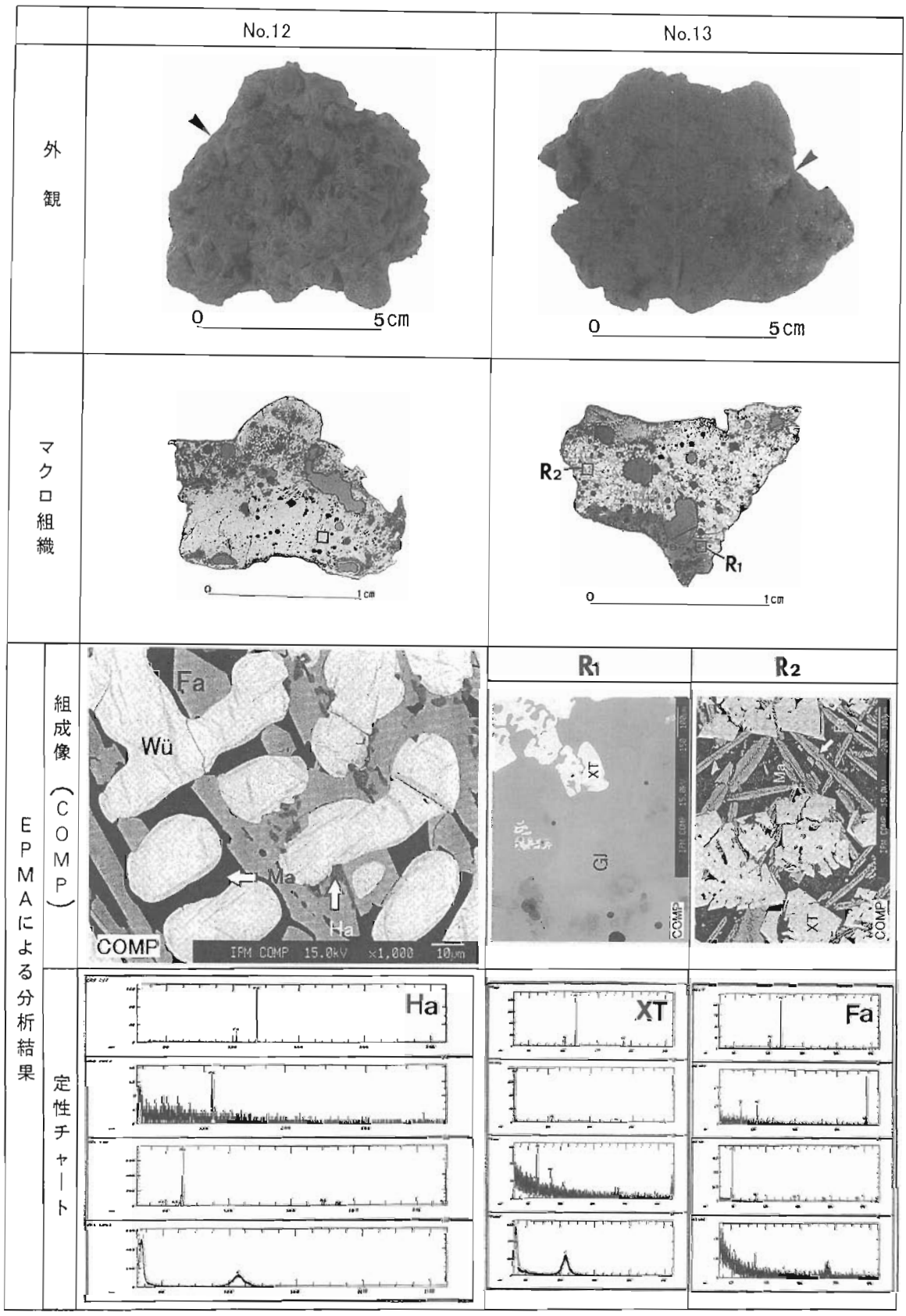


図10　No.12・No.13の外観と摘出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料摘出位置。No.12のEPMAによる分析位置はマクロ組織枠内部。No.13のEPMAによる分析位置はマクロ組織領域R_1、R_2内部。Wü：ウスタイト、Fa：Fe-Mg-Si-O系化合物、Ha：Fe-Al-O系化合物、XT：Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、Gl：ガラス質ケイ酸塩、Ma：マトリックス。

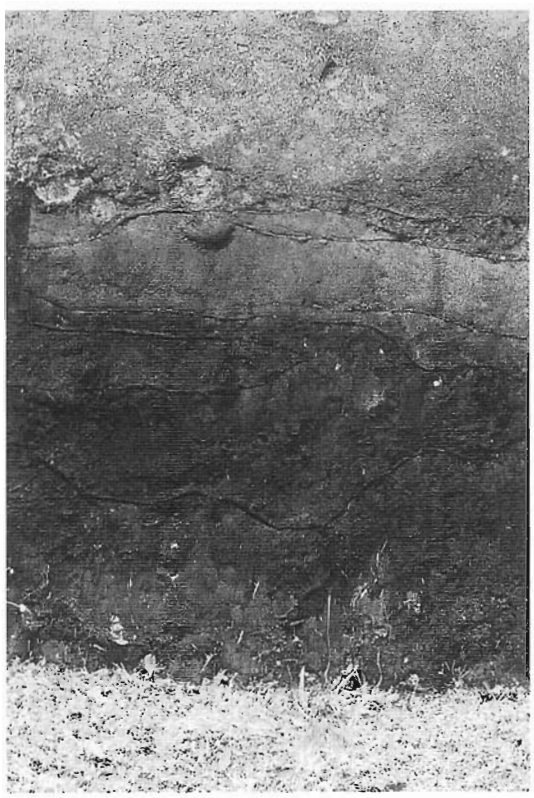
写　真　図　版

遺跡遠景（南から）

調査区全景（北から）

写真図版１　遺跡遠景・調査区全景

調査区近景（南から）

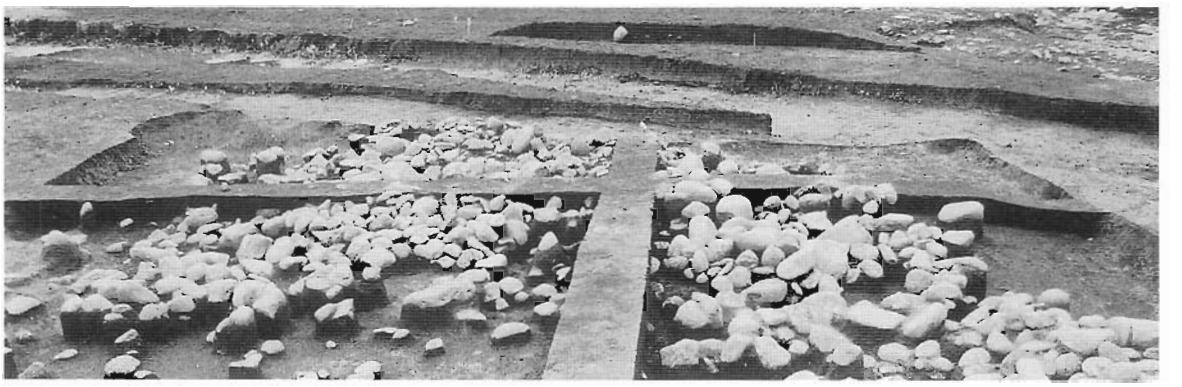


土層断面（東側）

土層断面（西側）

写真図版２　調査区近景・土層断面

平　面



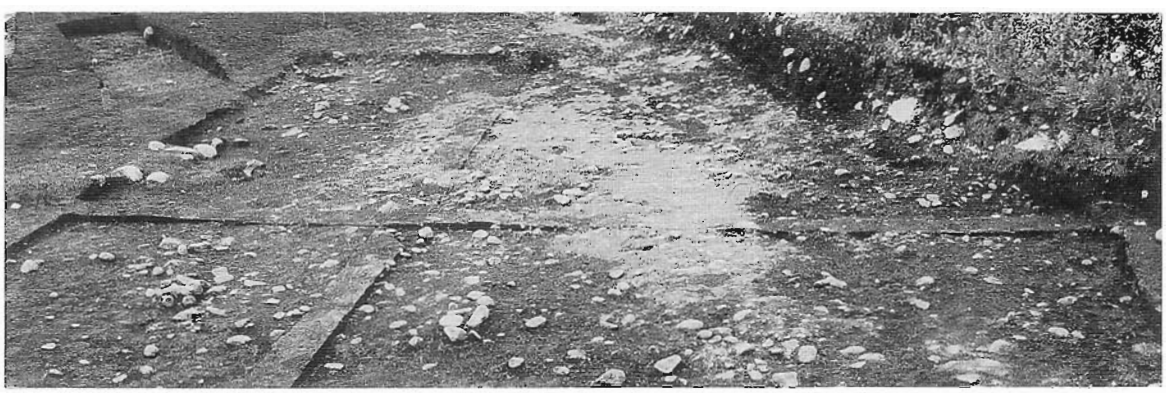
断　面

カマド断面（西から）

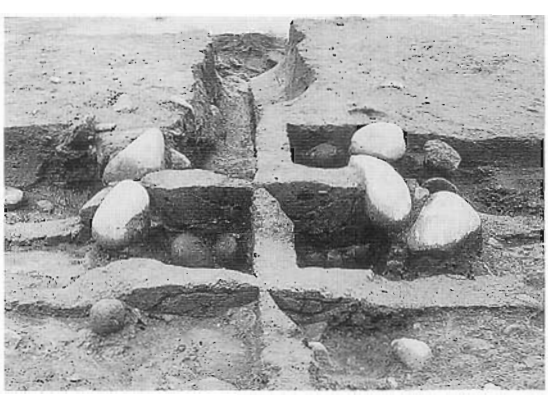
遺物出土状況

写真図版３　ＳＩ０１竪穴住居跡

平面（南から）



断面（南から）



カマド断面（東から）

遺物出土状況

写真図版４　ＳＩ０２竪穴住居跡

平面（南から）

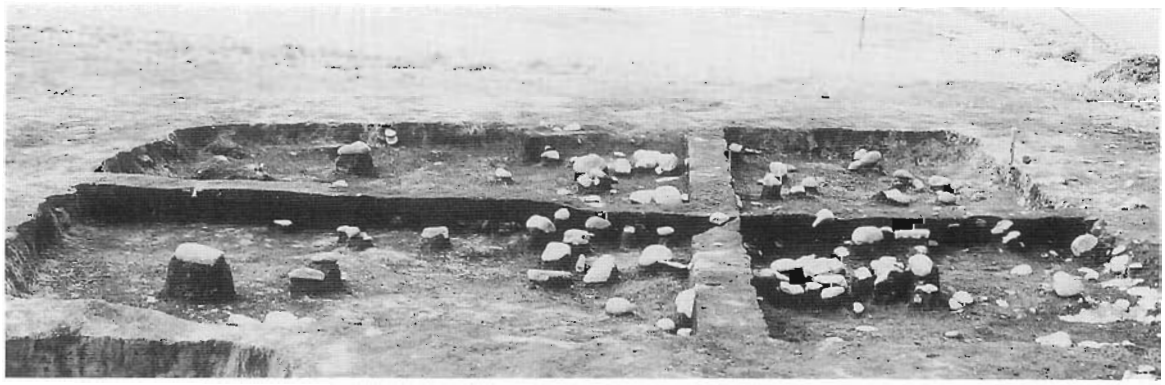
断面（南から）

遺物出土状況

炭化材出土状況

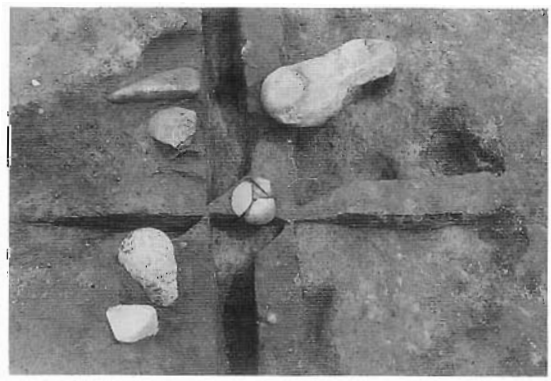
写真図版５　ＳＩ０３竪穴住居跡

平面（南から）



断面（南から）

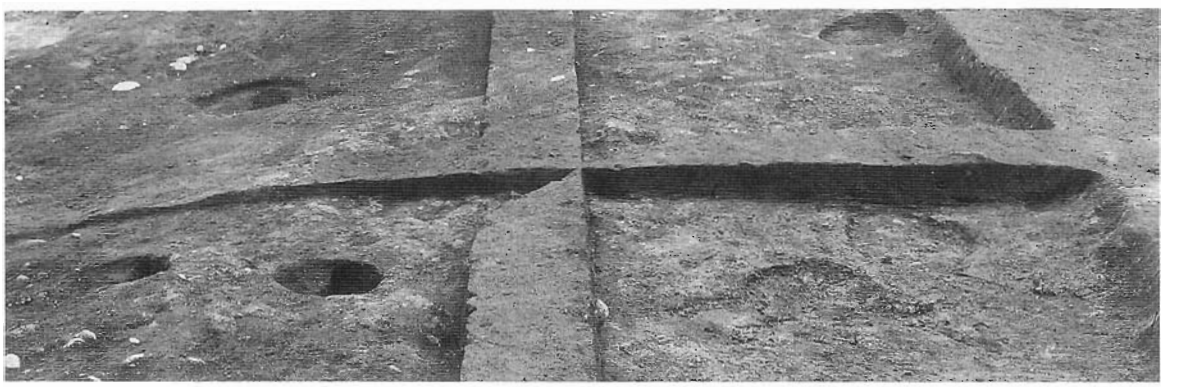
カマド断面（南から）



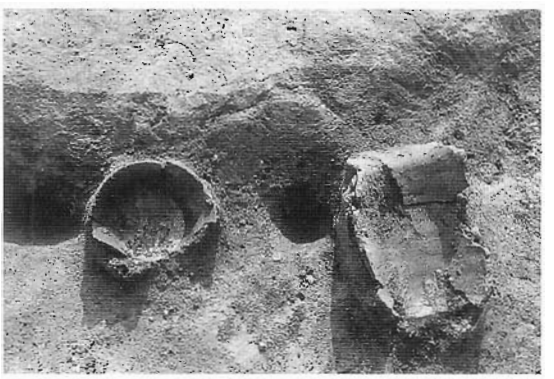
カマド断面（西から）

写真図版６　ＳＩ０４竪穴住居跡

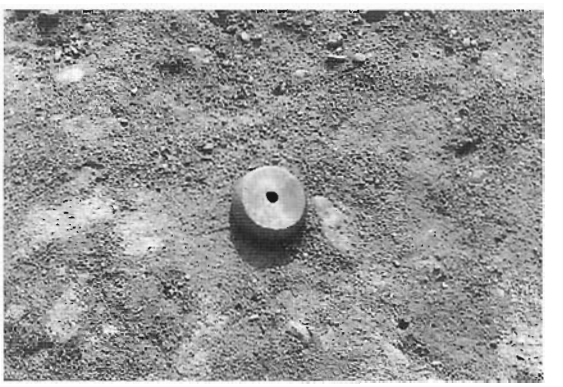
平面（東から）



断面（西から）



遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版７　Ｓ１０５竪穴住居跡

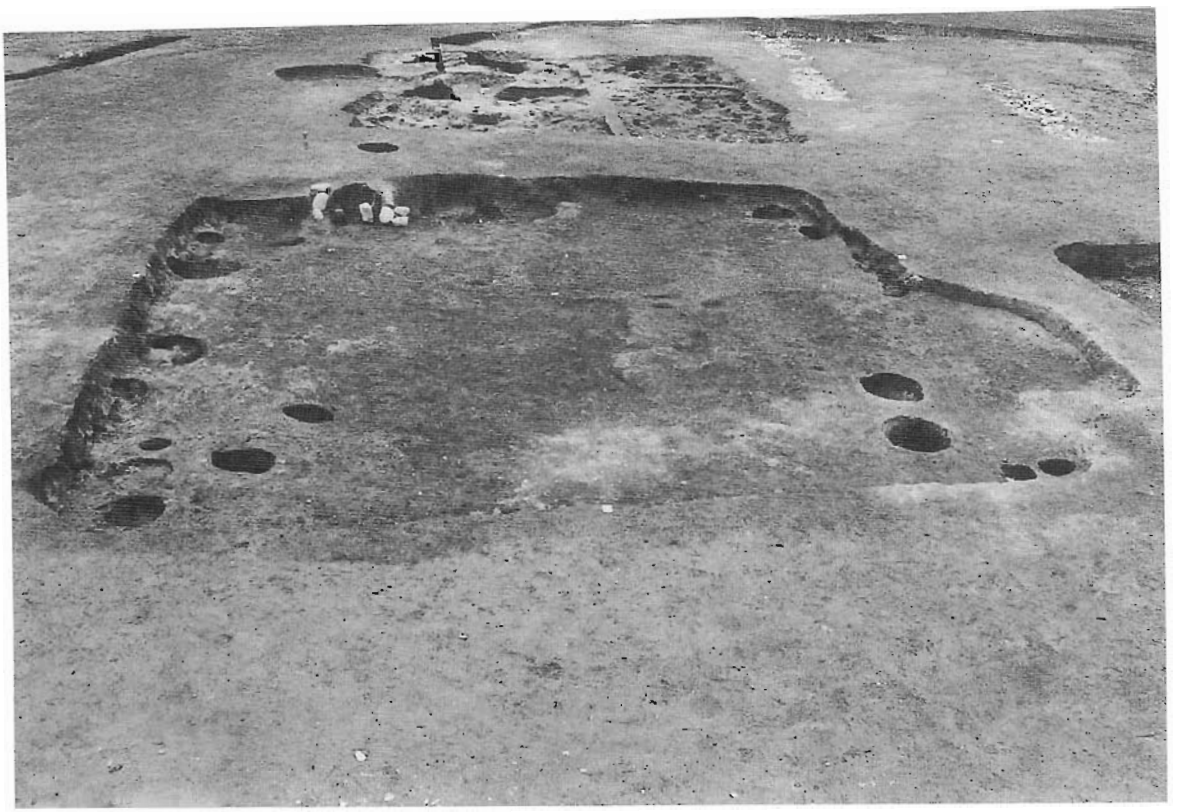
平面（南から）

断面（西から）

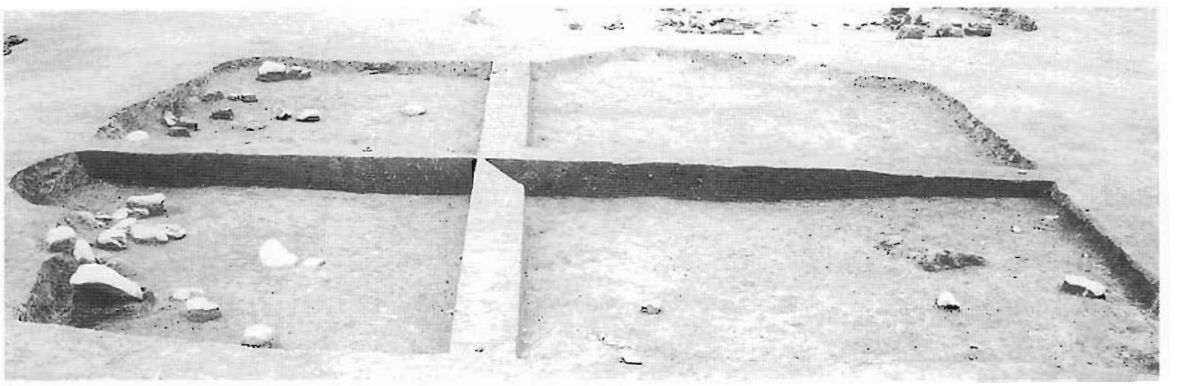
カマド焼土跡

壁溝断面（南から）

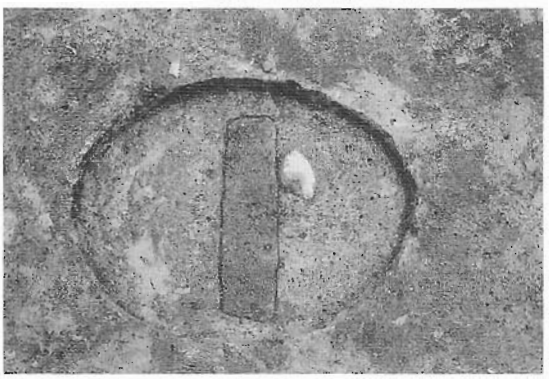
写真図版８　ＳＩ０６竪穴住居跡



平面（北から）



断面（東から）



柱穴平面

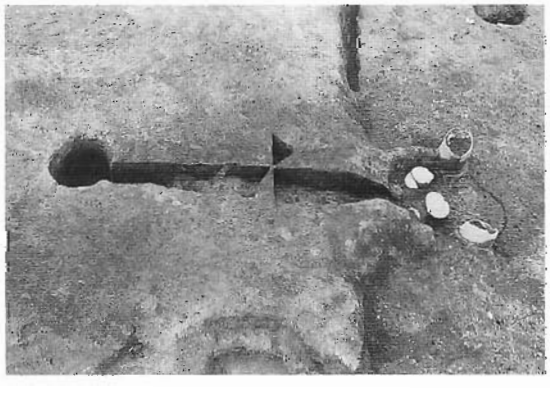
カマド断面（北から）

写真図版９　ＳＩ０７竪穴住居跡

平面（南から）

断面（西から）

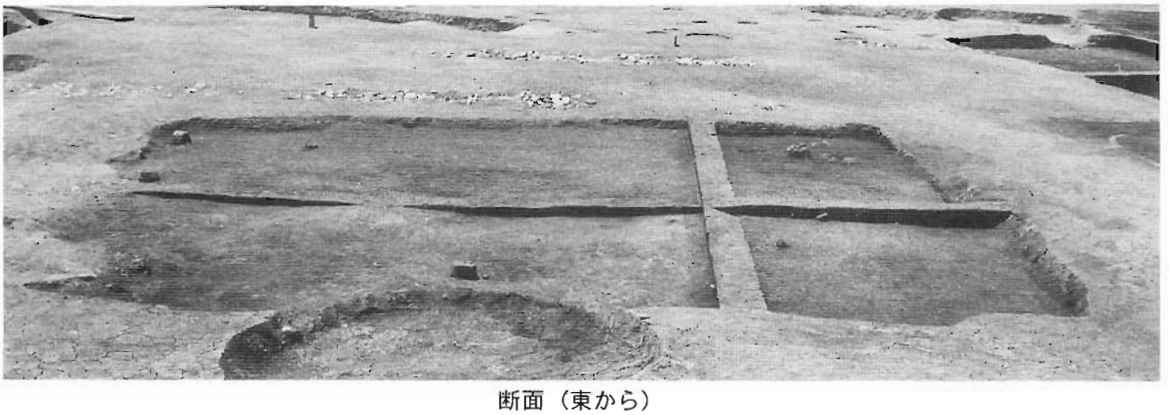
カマド使用状況



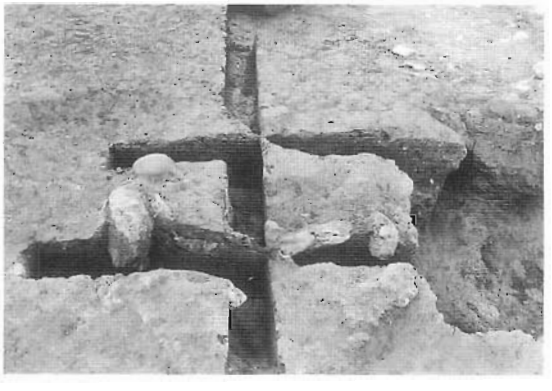
煙道断面（西から）

写真図版10　Ｓ１０８竪穴住居跡

平面（北から）



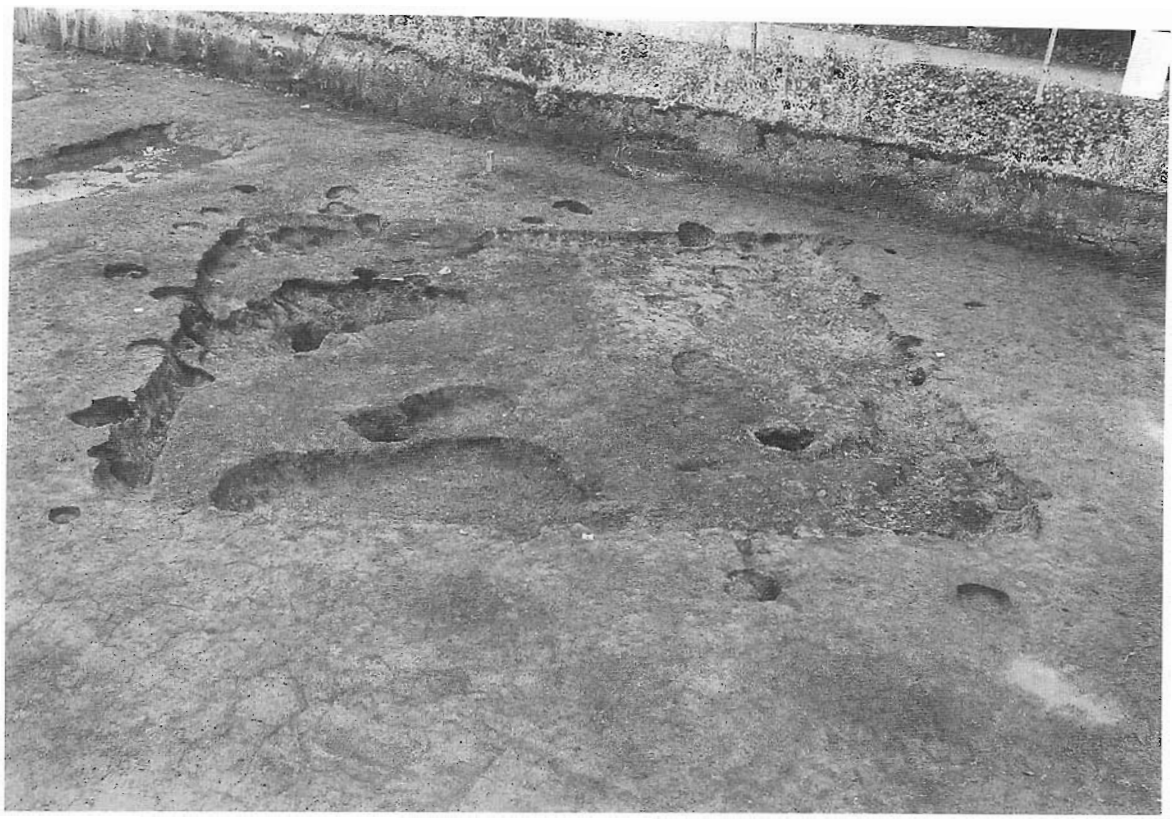
断面（東から）



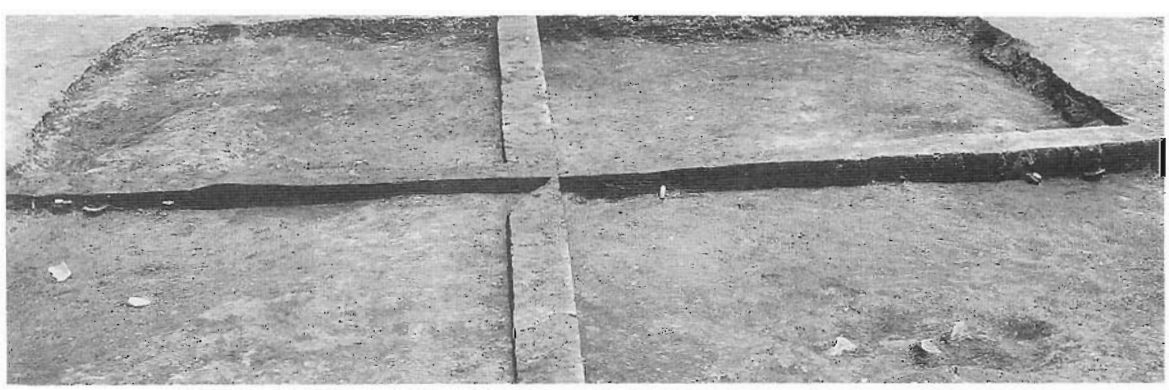
カマド断面（北から）

カマド断面（南から）

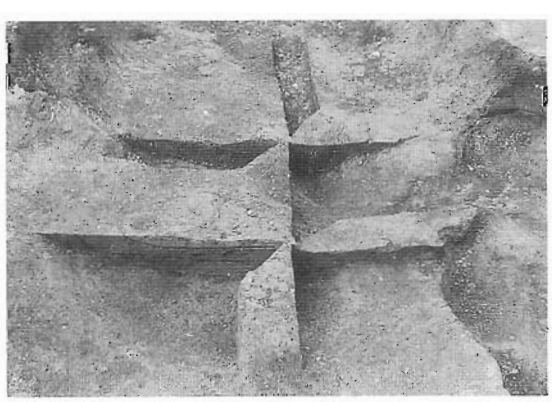
写真図版11　ＳＩ０９竪穴住居跡



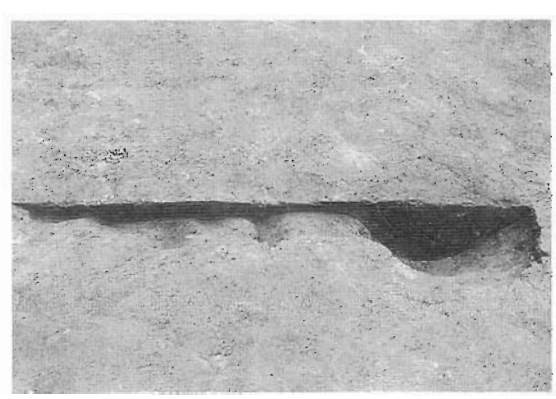
平面（北西から）



断面（南から）



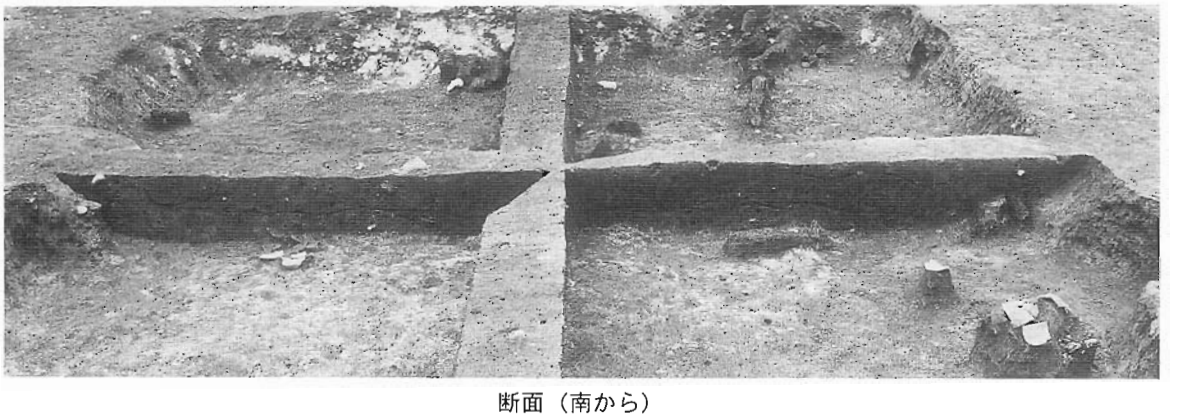
カマド断面（西から）



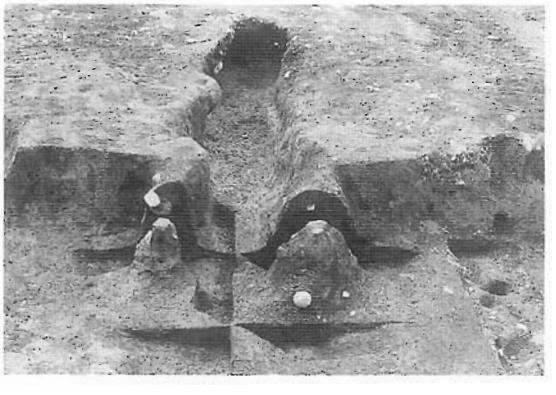
煙道断面（南から）

写真図版12　ＳＩ１０竪穴住居跡

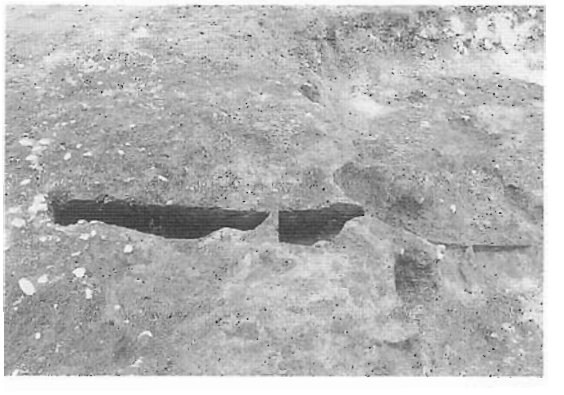
平面（東から）



断面（南から）



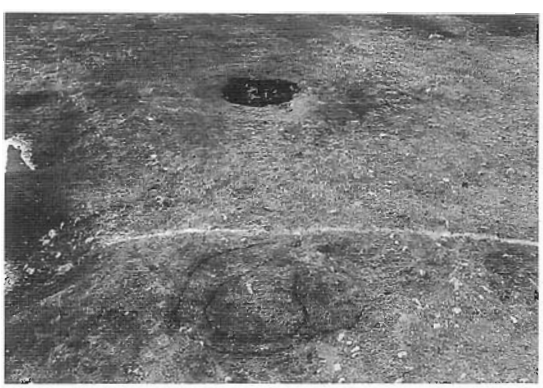
カマド断面（東から）



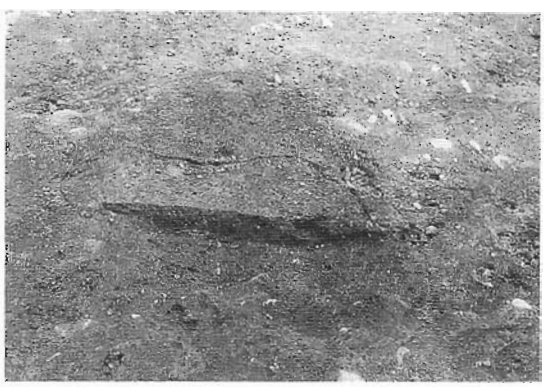
煙道断面（南から）

写真図版13　ＳＩ１１竪穴住居跡

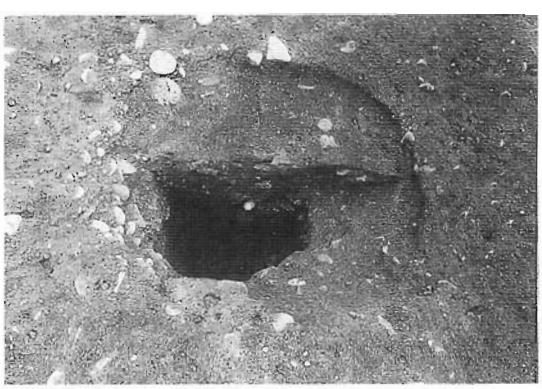
平面（東から）



カマド跡焼土平面



焼土断面



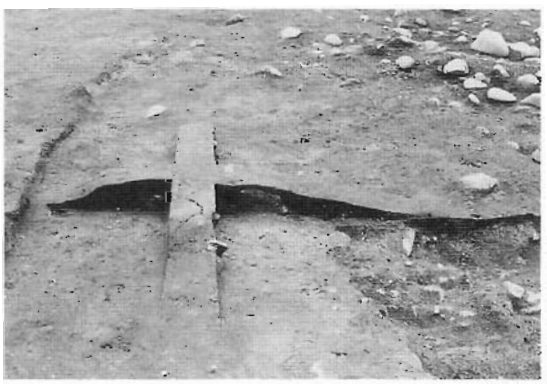
柱穴断面

煙出し断面

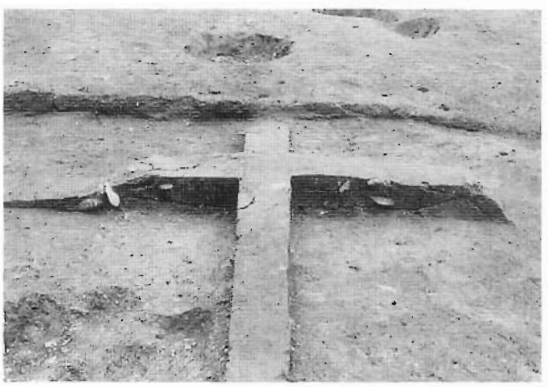
写真図版14　ＳＩ１２竪穴住居跡

平面（南から）

断面（西から）



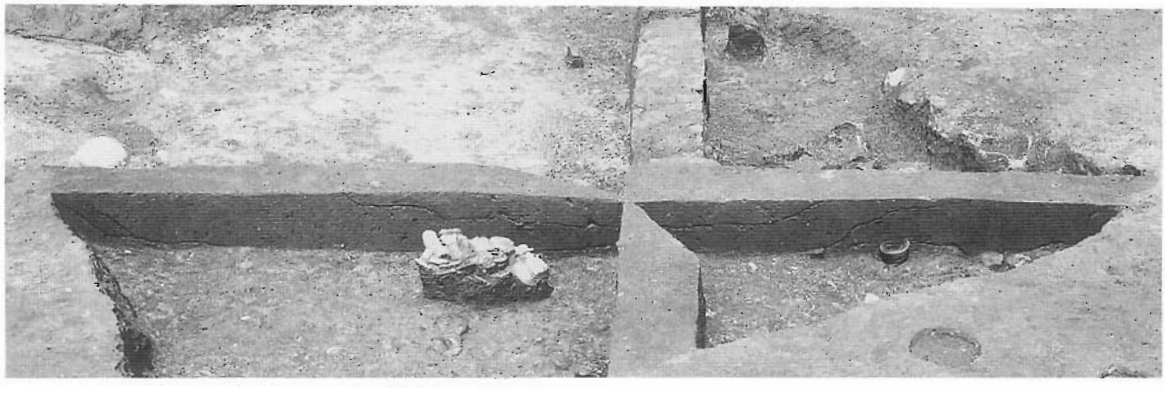
焼土断面（西から）



焼土断面（南から）

写真図版15　ＳＩ１３竪穴住居跡

平面（南から）

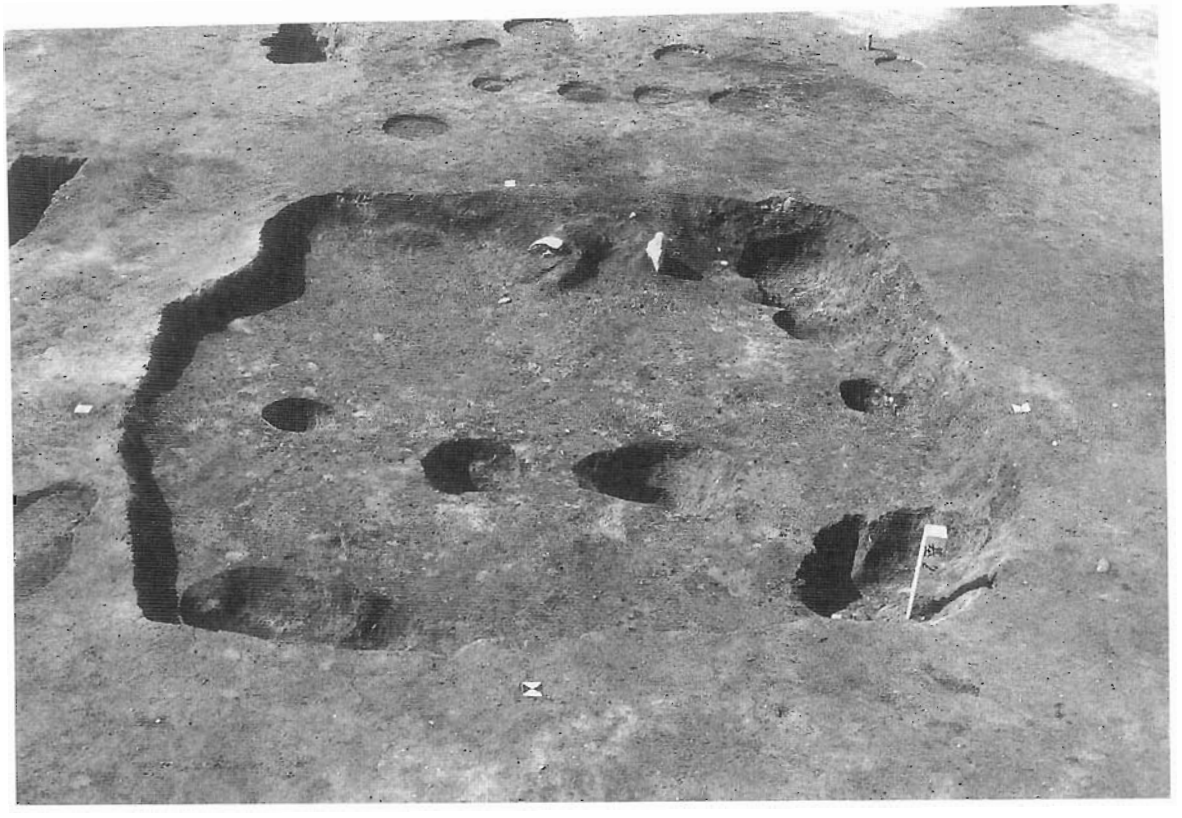


断面（東から）

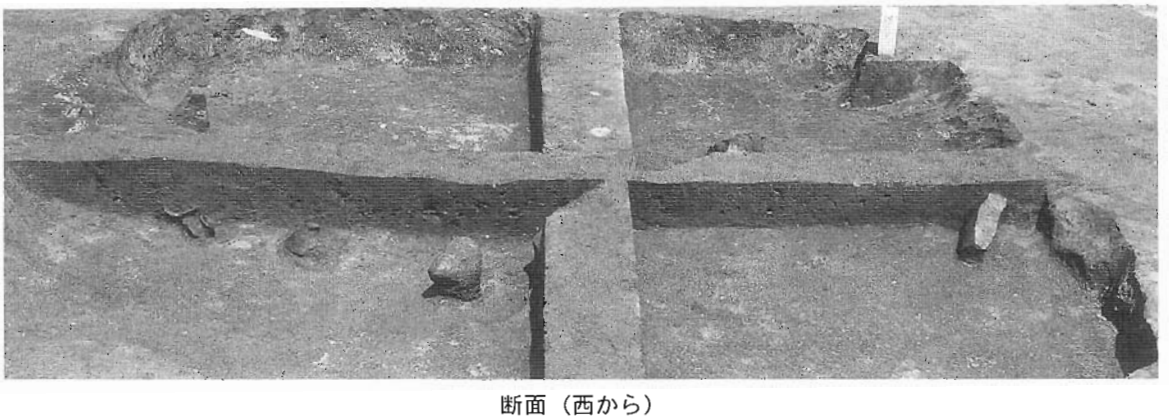
カマド断面（南から）

遺物出土状況

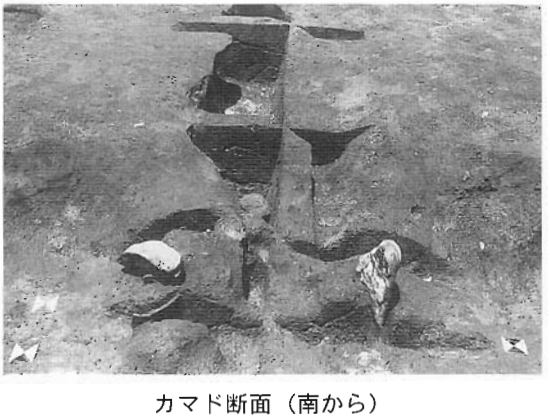
写真図版16　ＳＩ１４竪穴住居跡



平面（南から）



断面（西から）

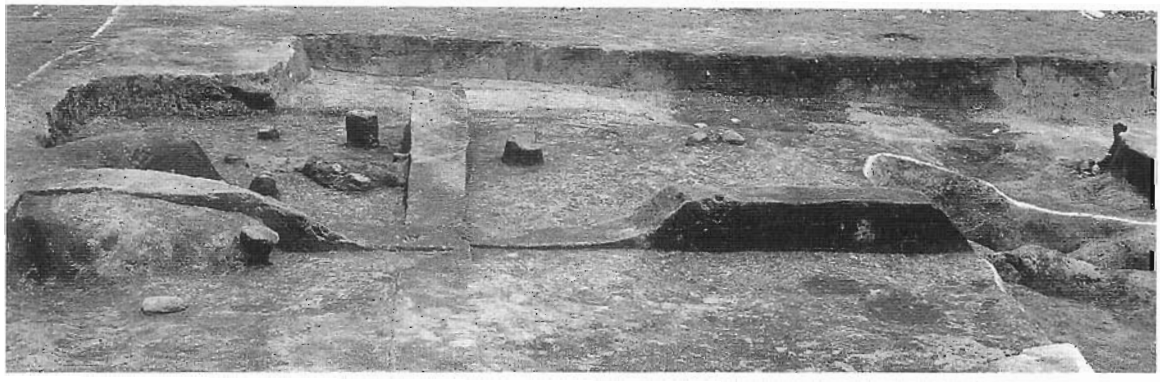


カマド断面（南から）

遺物出土状況

写真図版17　ＳＩ１５竪穴住居跡

平面（南から）



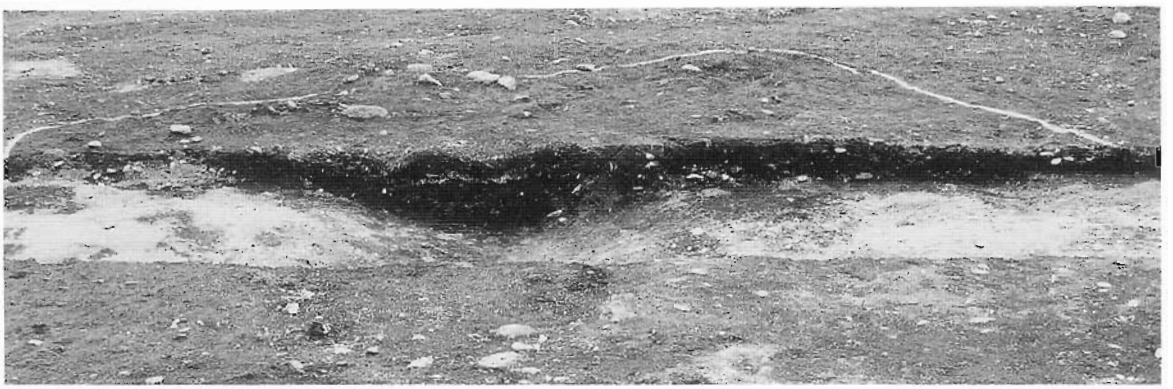
断面（西から）

カマド断面（南から）

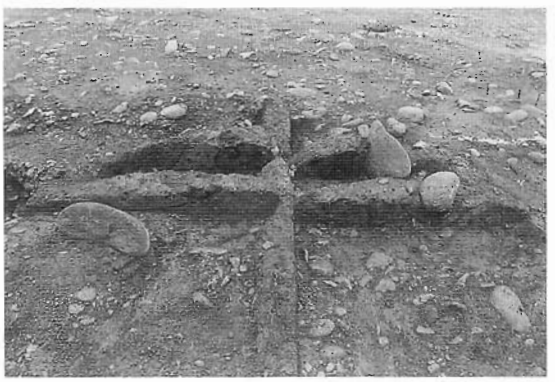
遺物出土状況

写真図版18　Ｓ１１６竪穴住居跡

平面（西から）



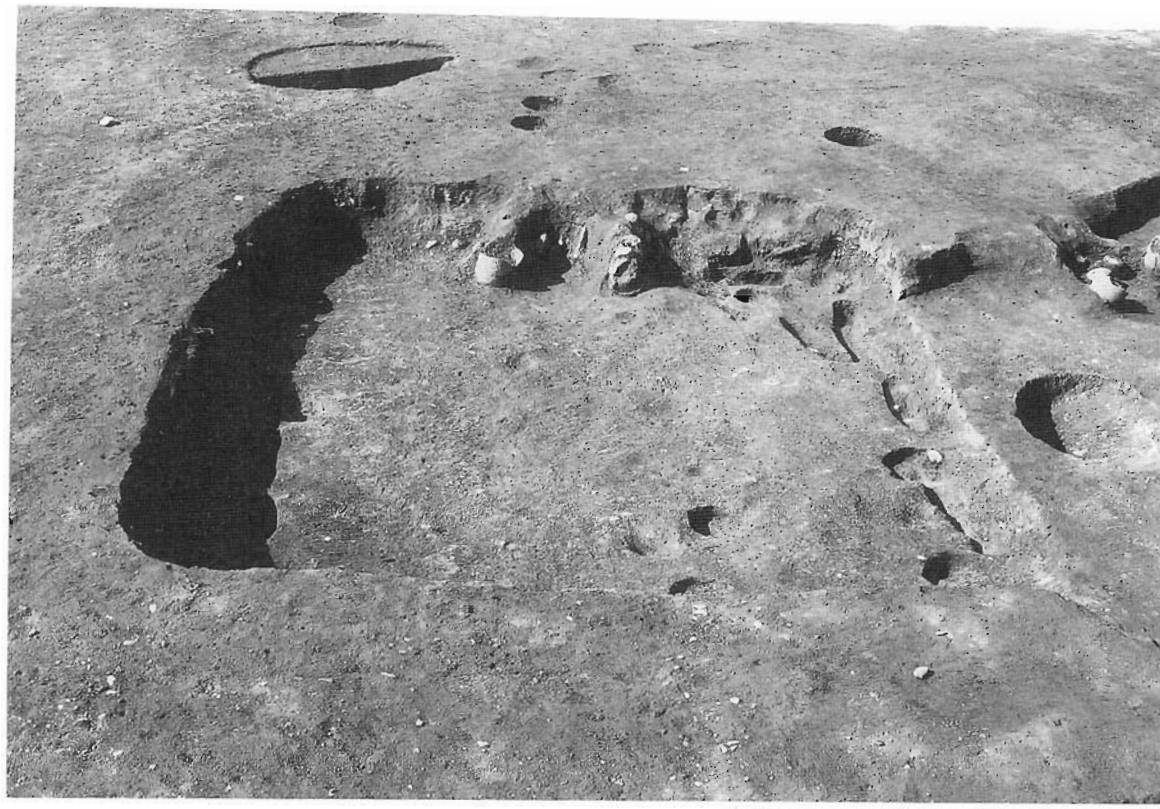
断面（西から）



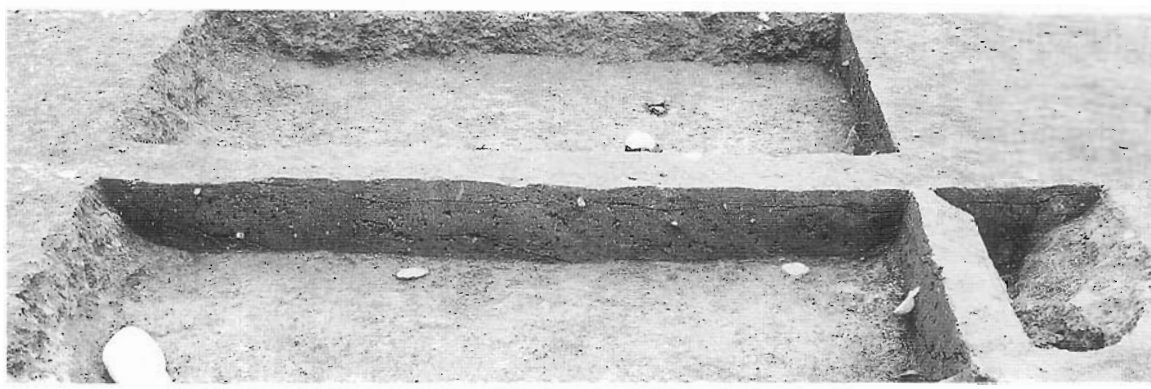
カマド断面（西から）

カマド断面（南から）

写真図版19　ＳＩ１７竪穴住居跡



平面（南から）



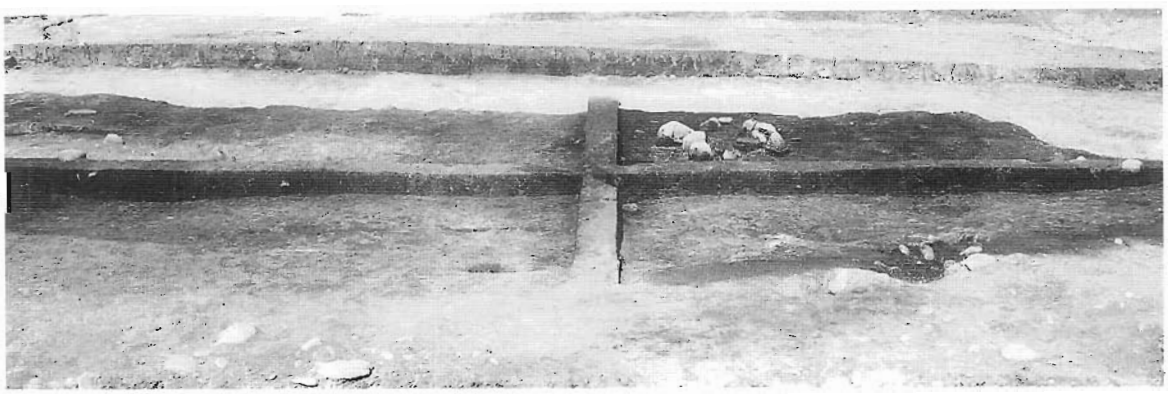
断面（東から）

カマド断面（南から）

遺物出土状況

写真図版20　ＳＩ１８竪穴住居跡

平面（南から）



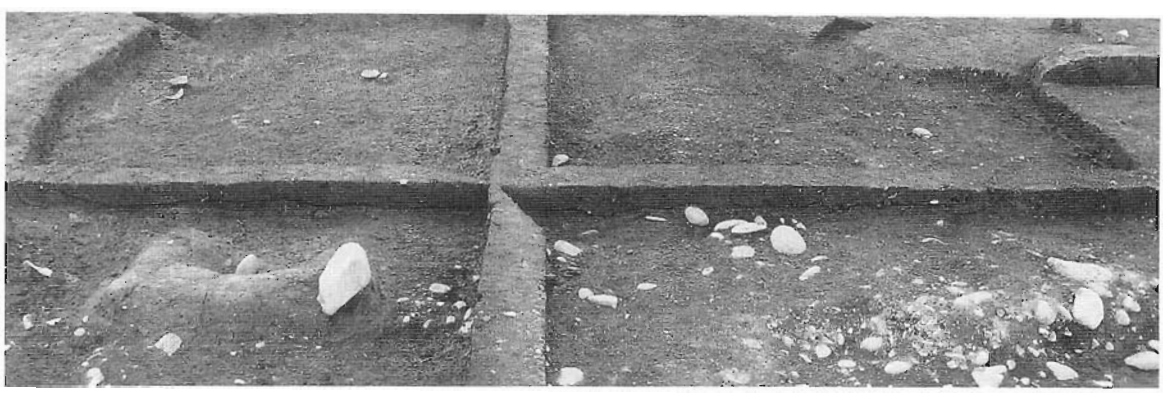
断面（東から）

遺物出土状況

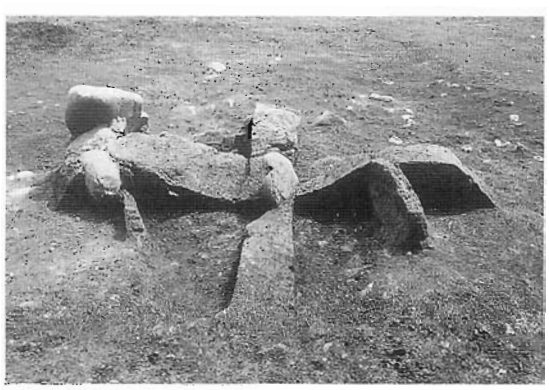
遺物出土状況

写真図版21　ＳＩ１９竪穴住居跡

平面（西から）



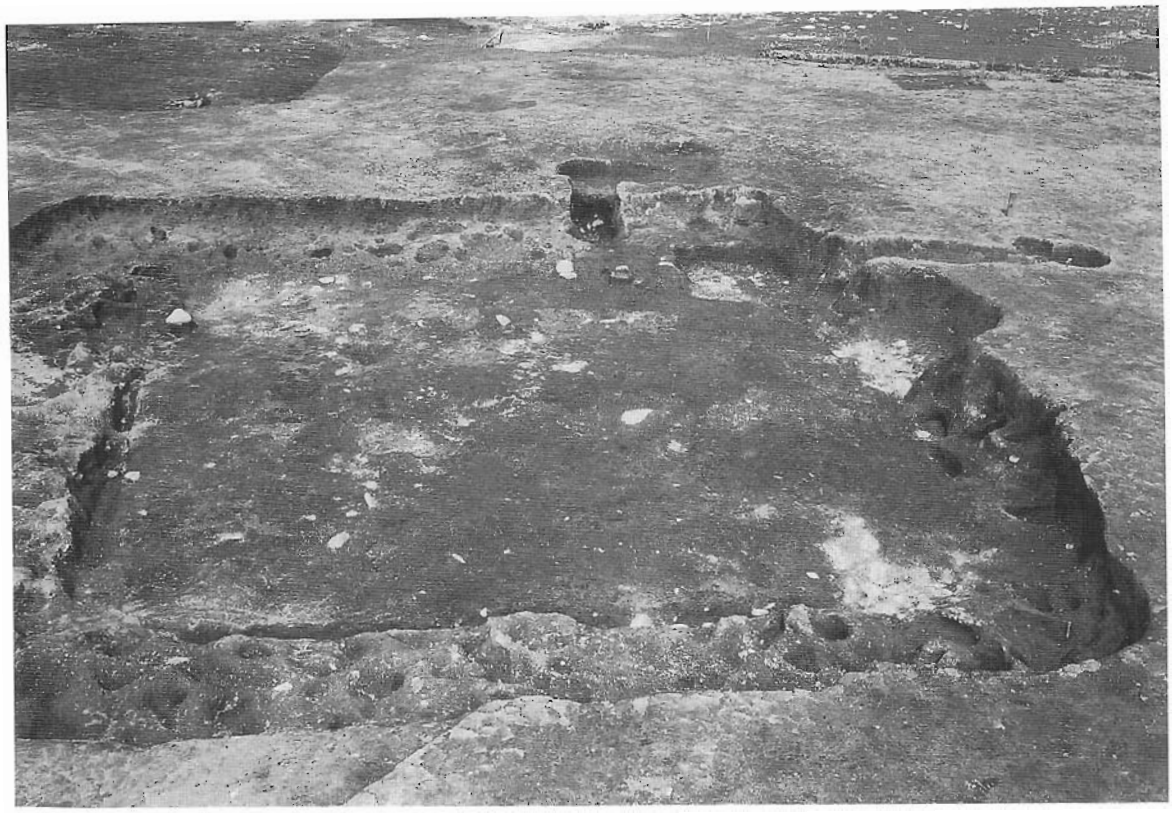
断面（東から）



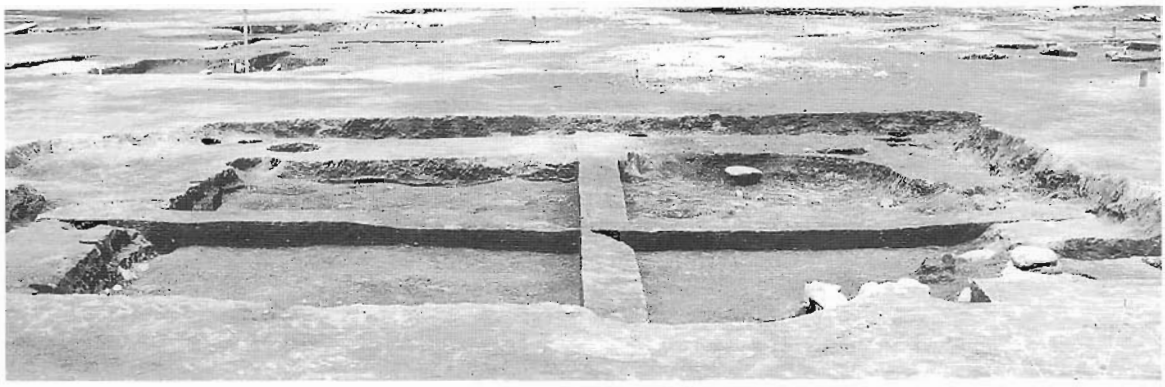
カマド断面（西から）

カマド断面（南から）

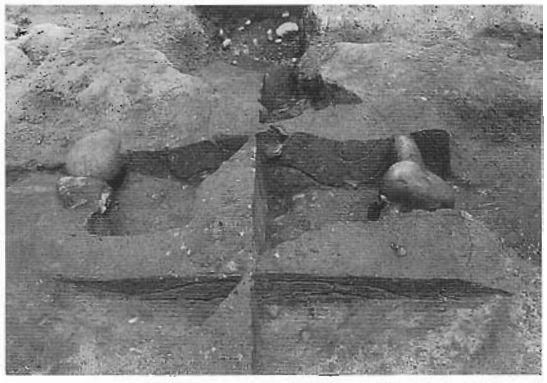
写真図版22　ＳＩ２０竪穴住居跡



平面（西から）



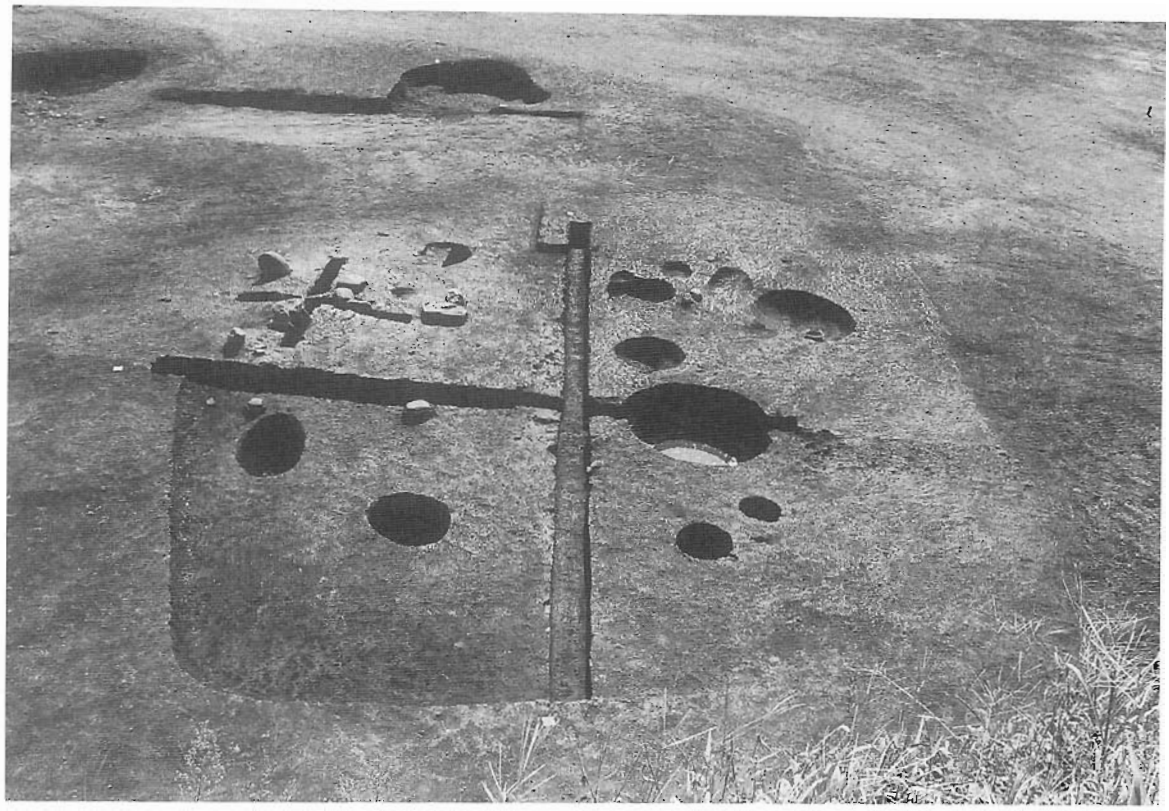
断面（南から）



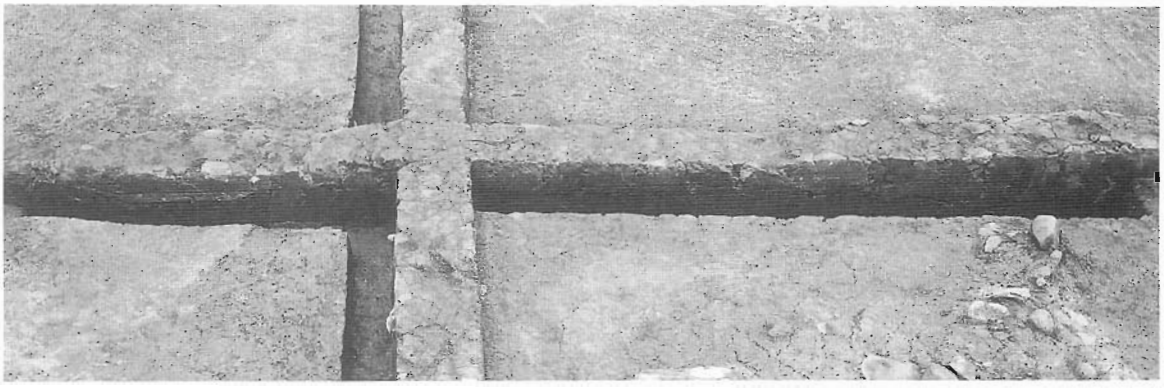
カマド断面（西から）

カマド煙道断面（南から）

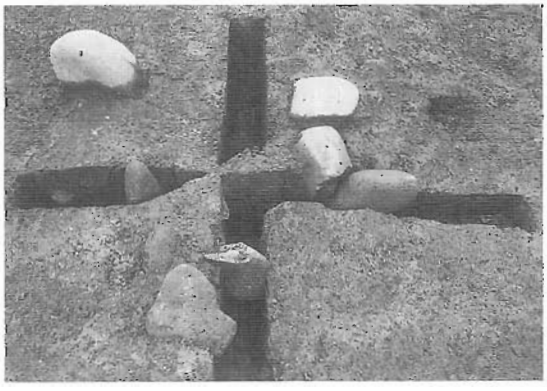
写真図版23　ＳＩ２１竪穴住居跡



平面（西から）



断面（南から）

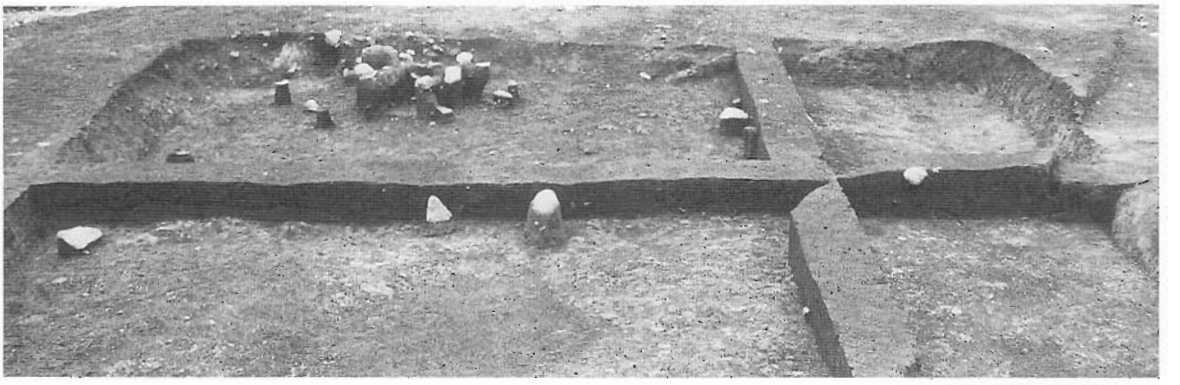


カマド断面（西から）

Ｐ２　遺物出土状況

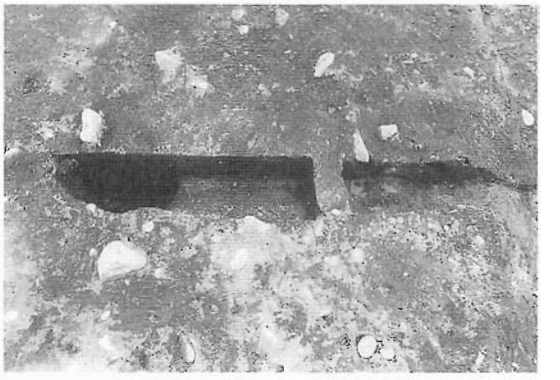
写真図版24　Ｓ１２２竪穴住居跡

平面（南から）



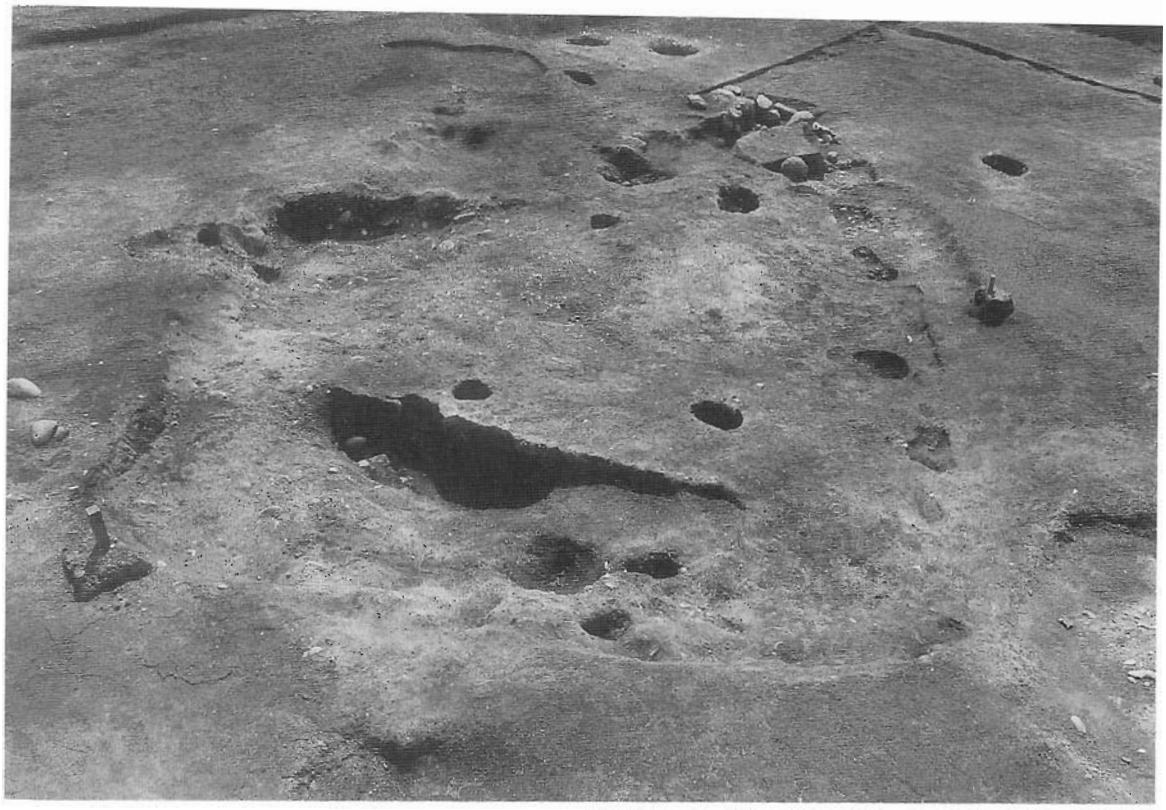
断面（南から）

カマド（南から）

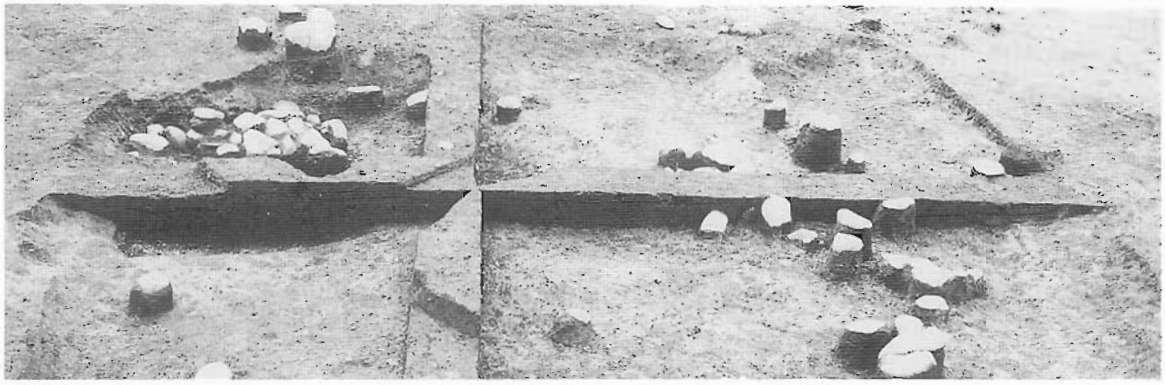


煙道断面（西から）

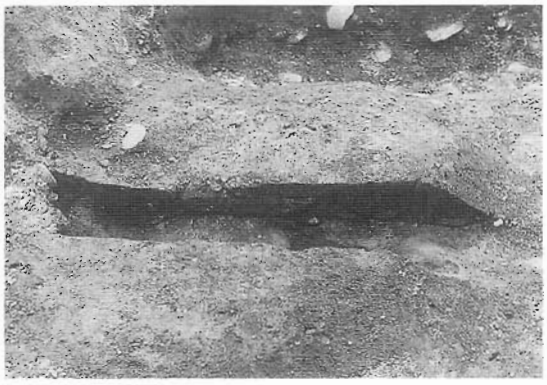
写真図版25　ＳＩ２３竪穴住居跡



平面（北西から）



断面（西から）

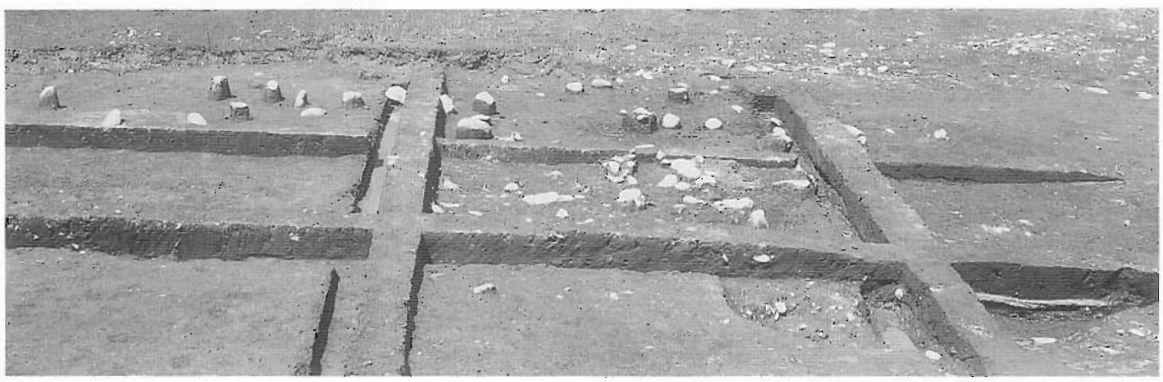


カマド焼土断面（西から）

礫出土状況

写真図版26　ＳＩ２４竪穴住居跡

平面（東から）

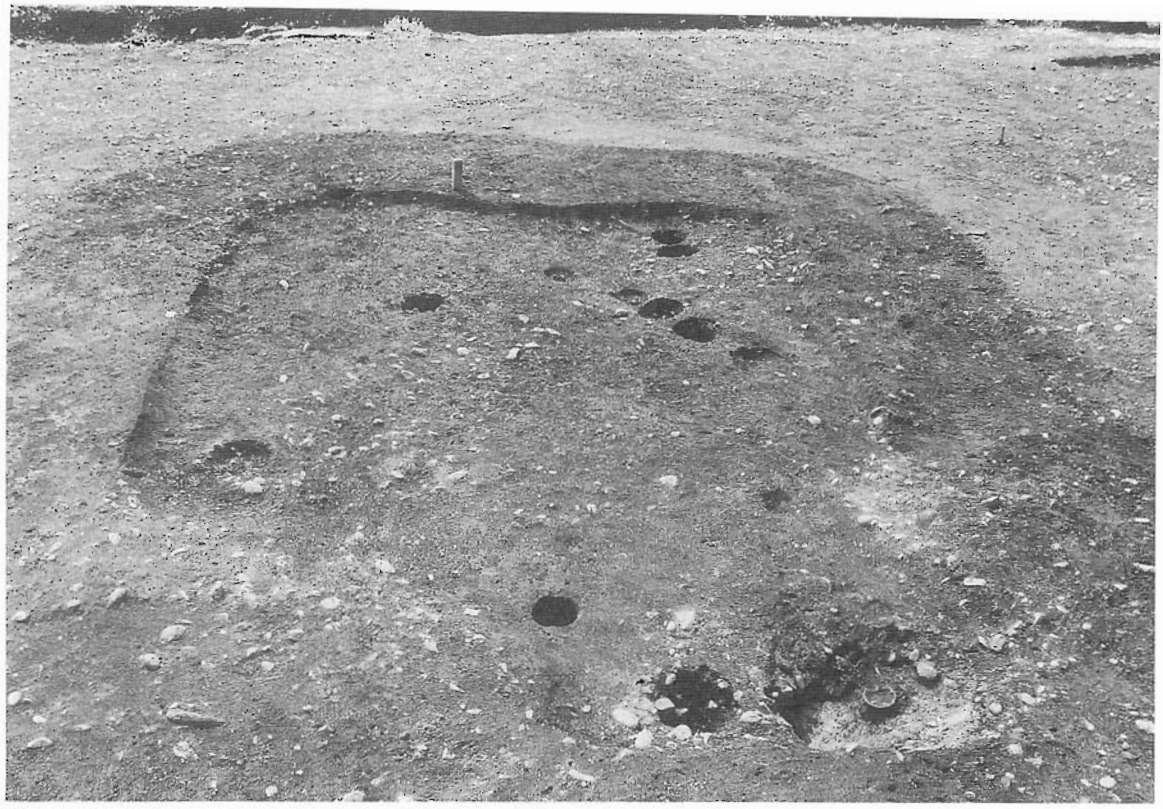


断面（東から）

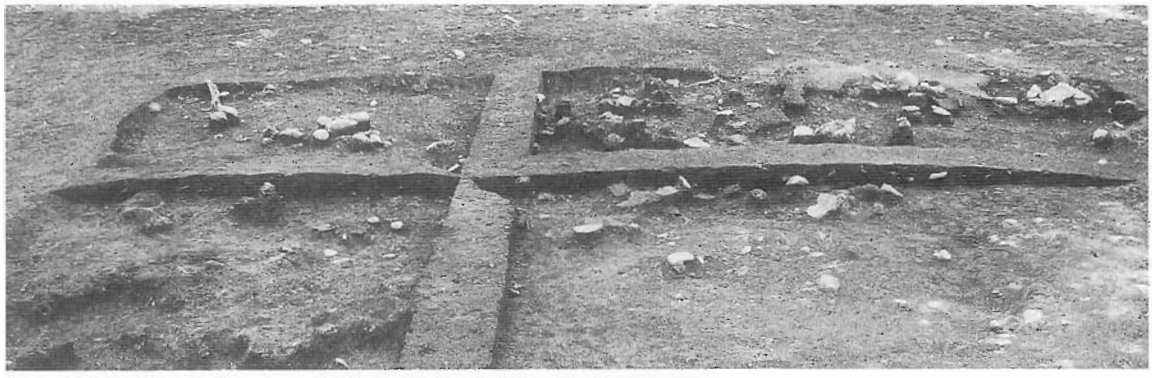
遺物出土状況

作業風景

写真図版27　ＳＸ０１遺物集中区



平面（東から）



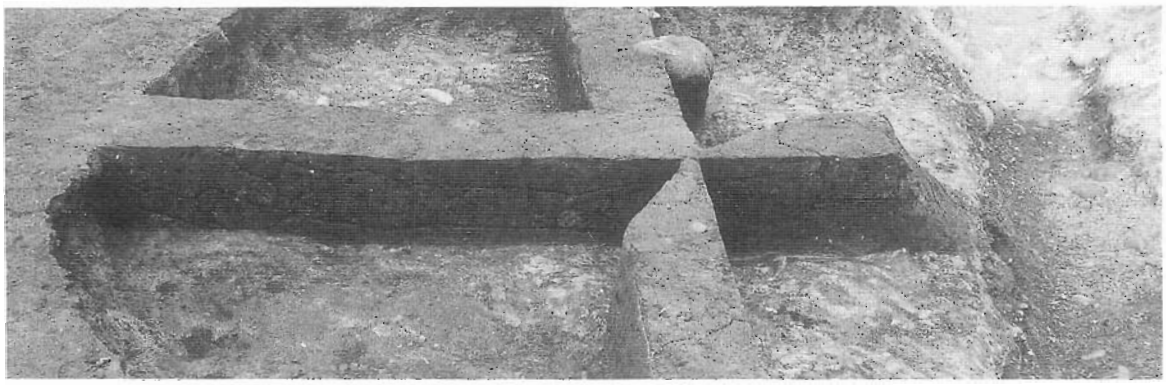
断面（南から）

炭化種子出土状況

遺物出土状況

写真図版28　ＳＸ０２竪穴状遺構

平面（南から）

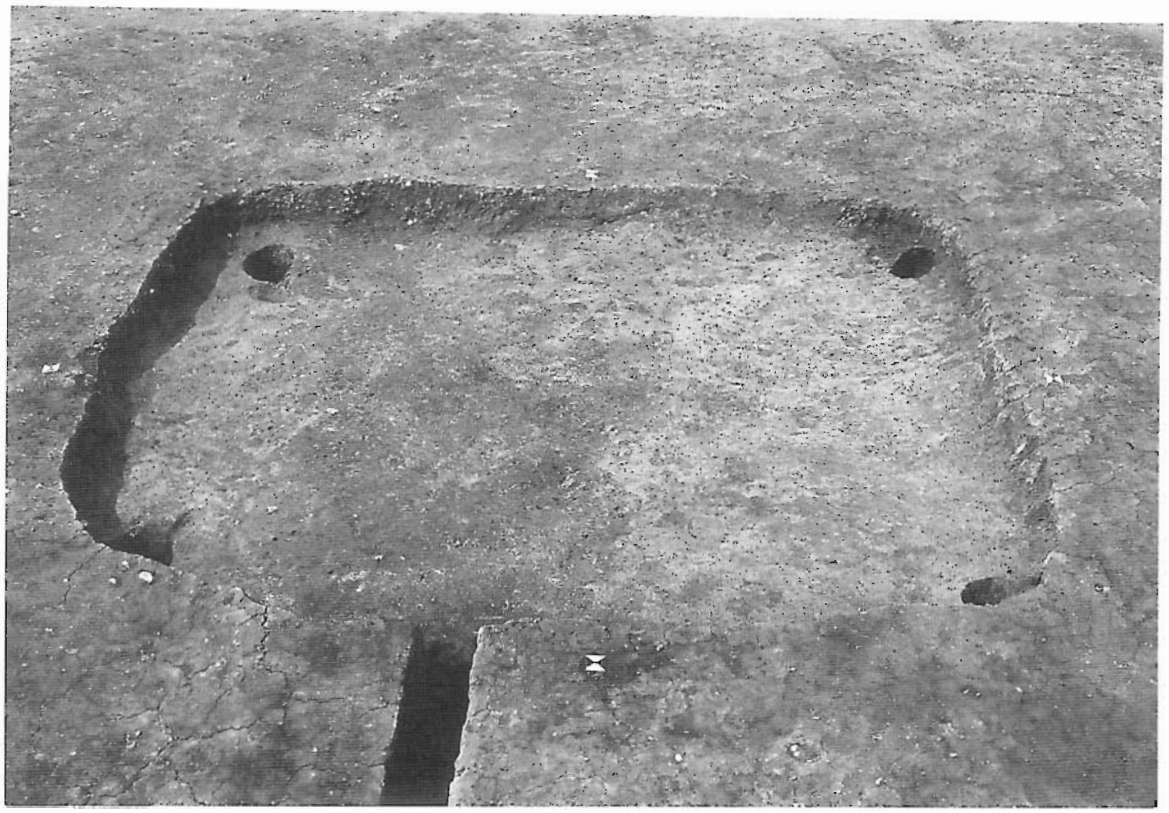


断面（西から）

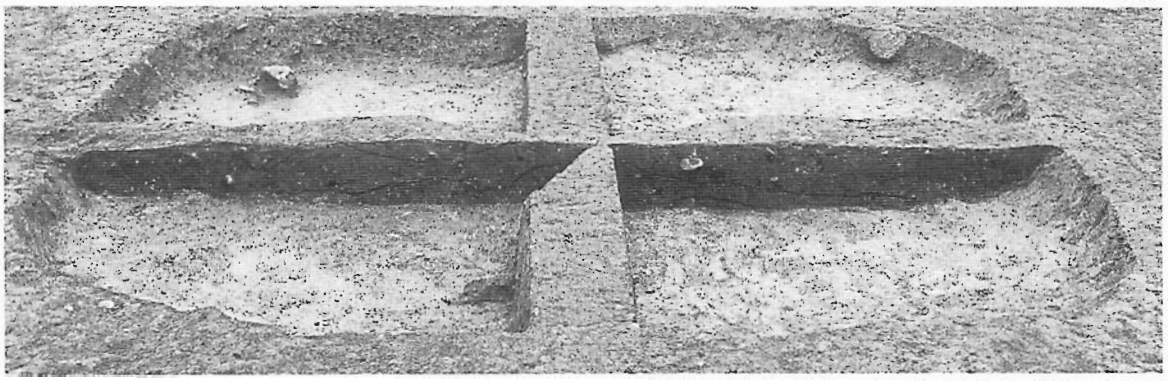
現地説明会風景

現地説明会風景

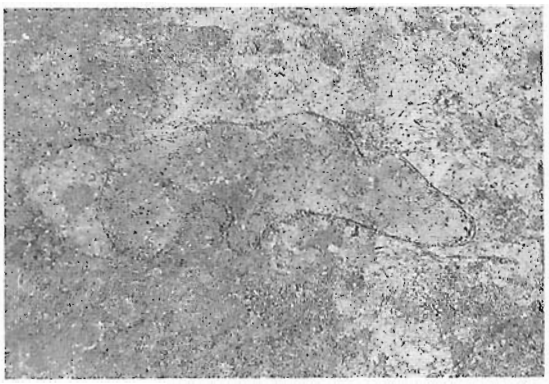
写真図版29　ＳＸ０３竪穴状遺構・現地説明会風景



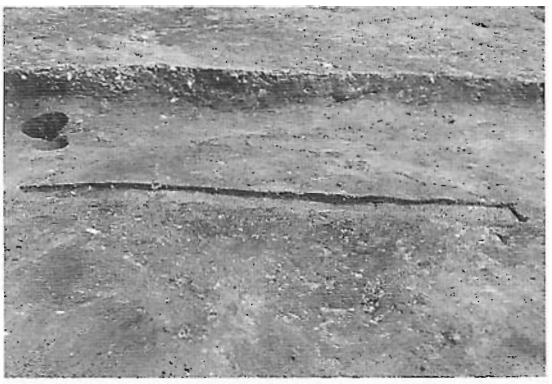
平面（南から）



断面（南から）

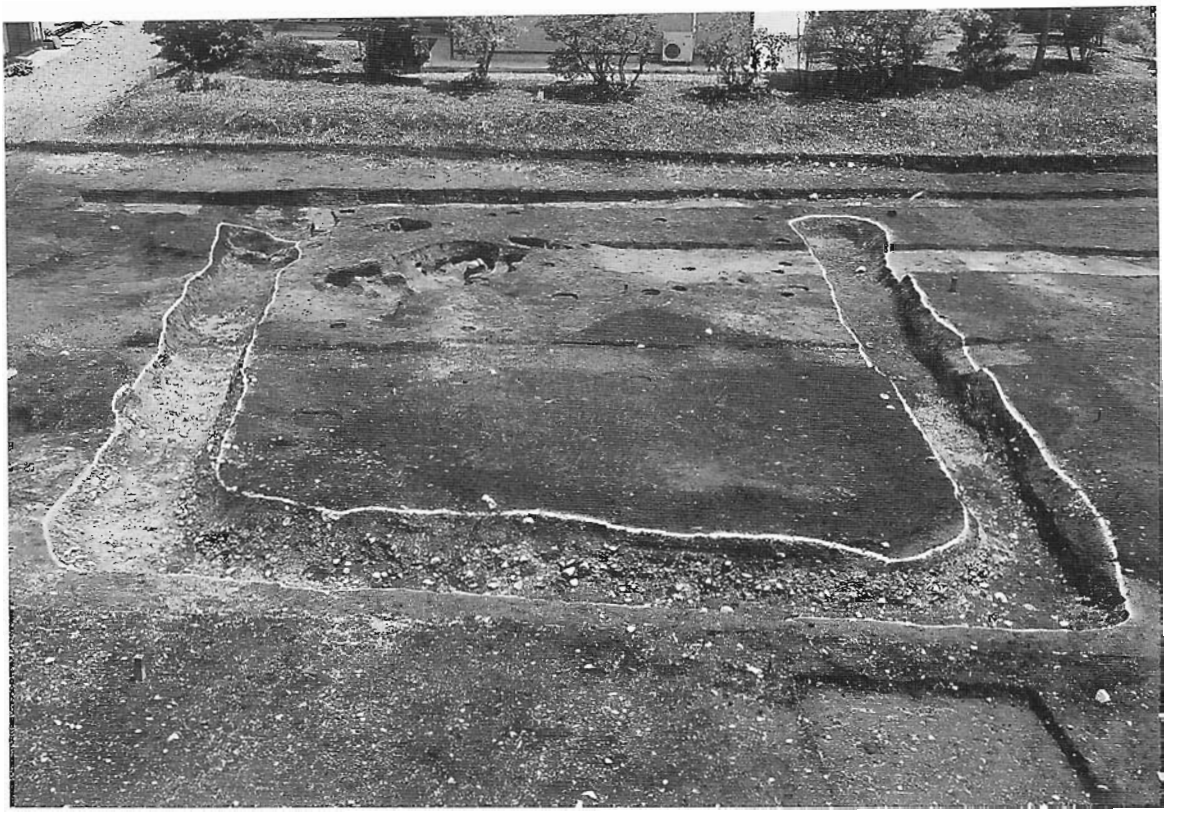


床面焼土平面

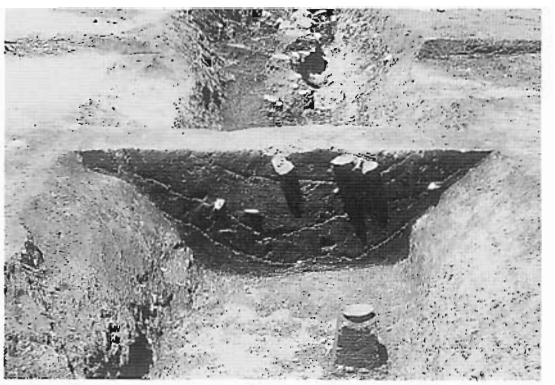


床面焼土平面（南から）

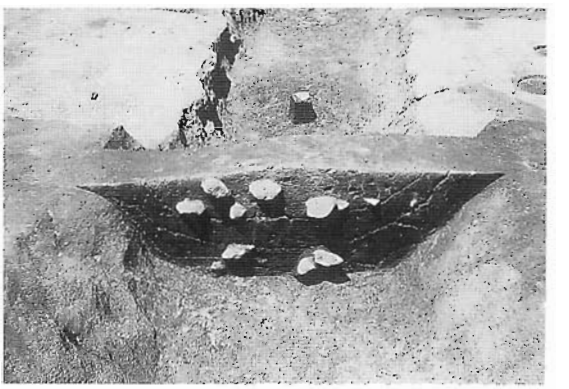
写真図版30　ＳＸ０４竪穴状遺構



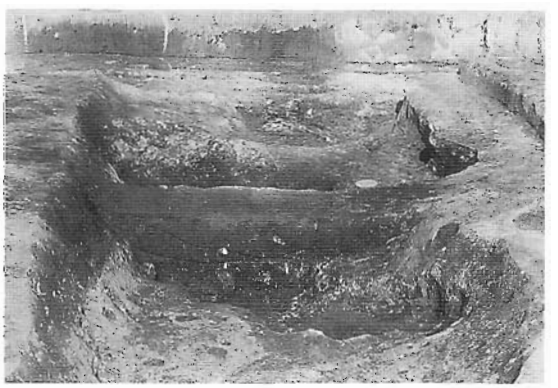
平面（西から）



断面①



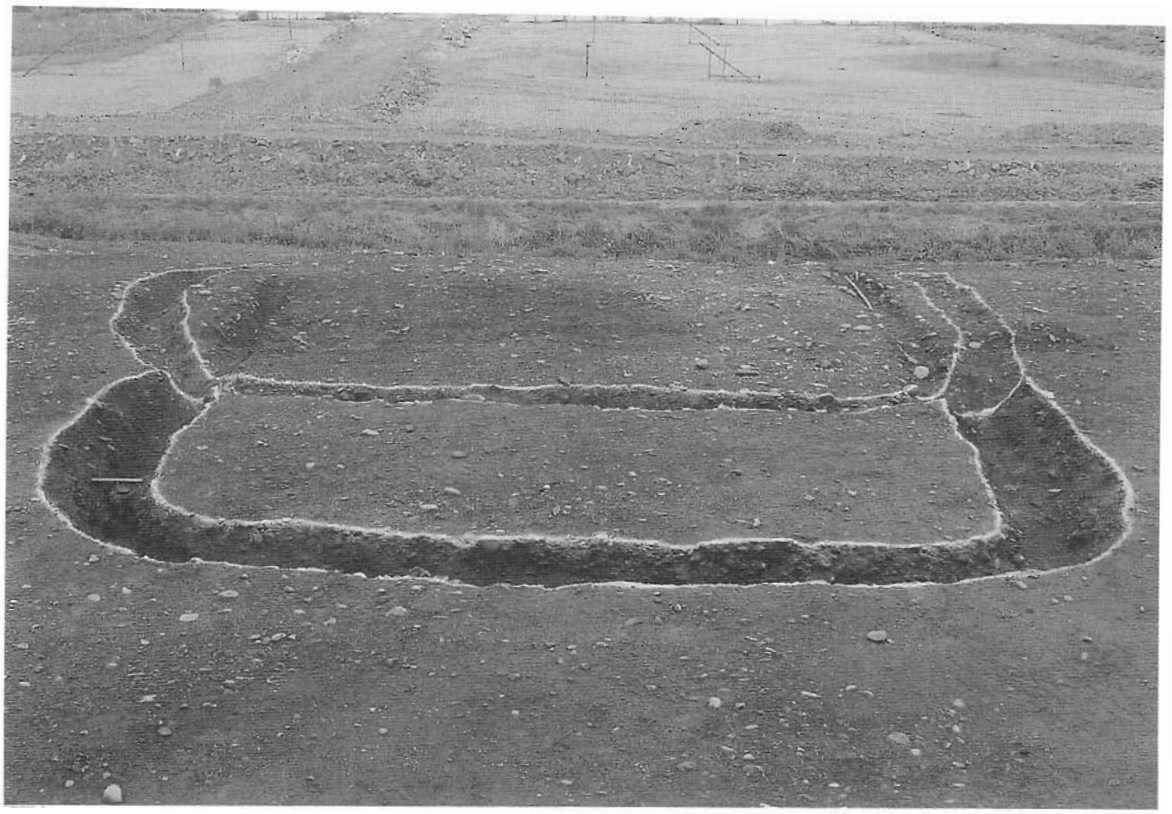
断面②



断面③

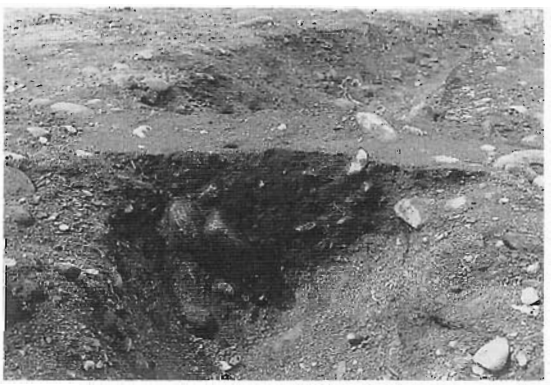
遺物出土状況

写真図版31　ＳＤ０１方形周溝



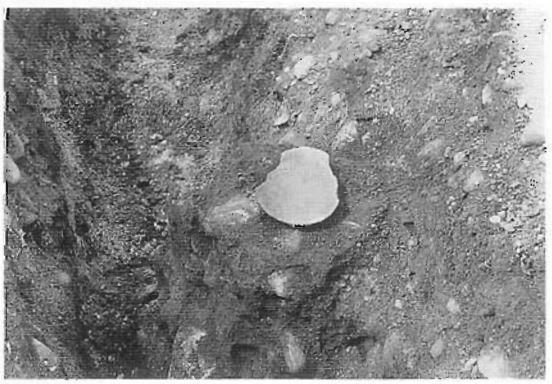
平　面

ＳＤ０２方形周溝　断面①



ＳＤ０２方形周溝　断面②

ＳＤ０３方形周溝　断面

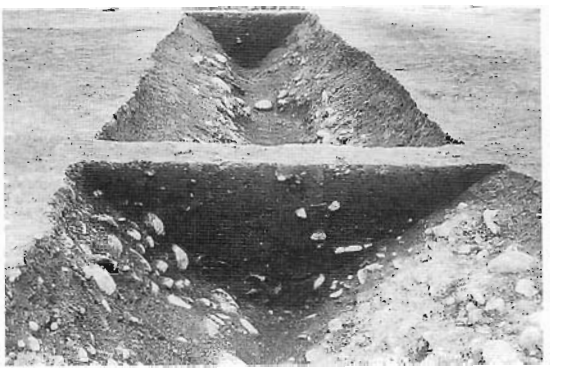


ＳＤ０３方形周溝　遺物出土状況

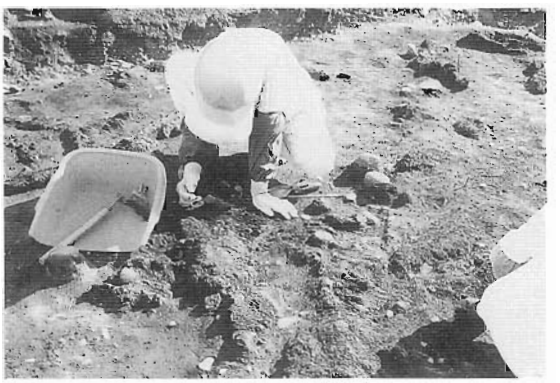
写真図版32　ＳＤ０２・ＳＤ０３方形周溝

ＳＤ０４溝跡　平面

ＳＤ０４溝跡　断面③



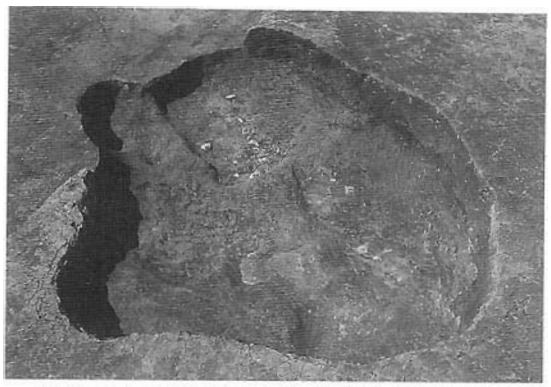
ＳＤ０４溝跡　断面①



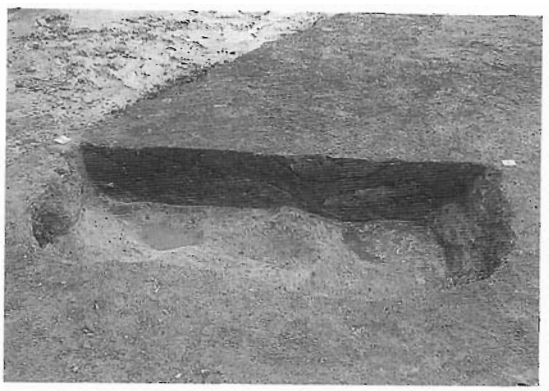
作業風景

調査前現況

写真図版33　ＳＤ０４溝跡・作業風景・調査前現況

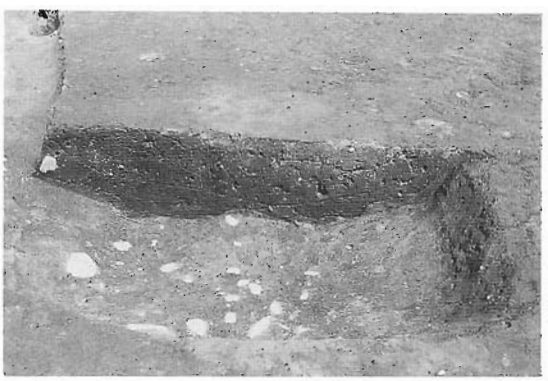


ＳＫ０１土坑　平面



ＳＫ０１土坑　断面

ＳＫ０２土坑　平面



ＳＫ０２土坑　断面

ＳＫ０３土坑　平面

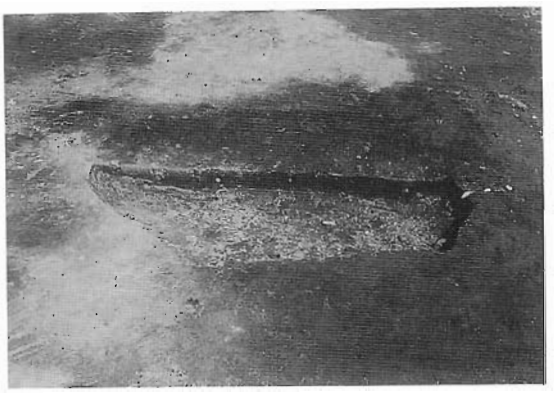
ＳＫ０４土坑　平面

ＳＫ０４土坑　断面

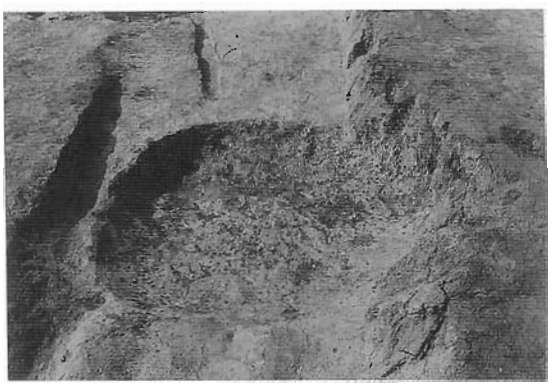
作業風景

写真図版34　ＳＫ０１～０４土坑

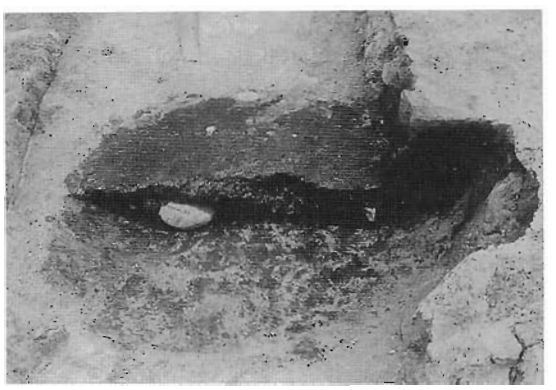
ＳＫ０５土坑　平面



ＳＫ０５土坑　断面

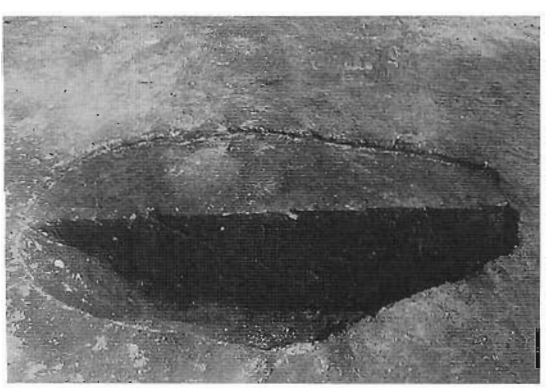


ＳＫ０６土坑　平面

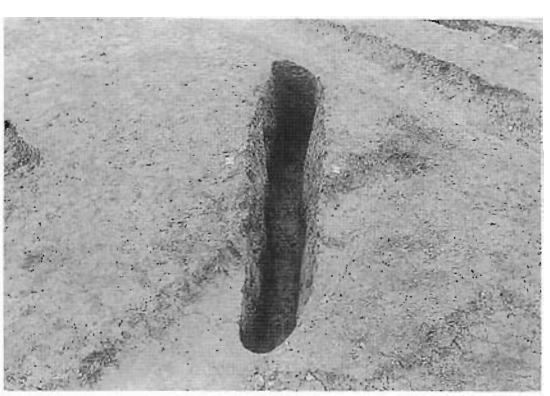


ＳＫ０６土坑　断面

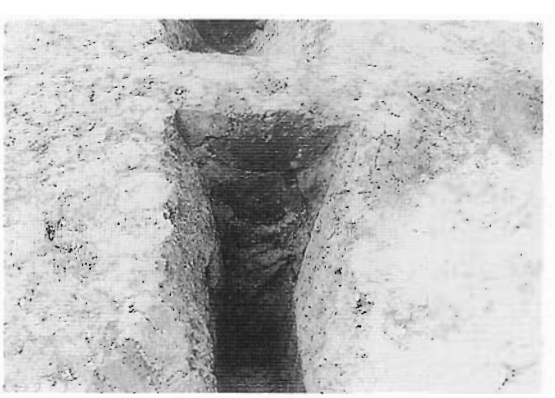
ＳＫ０７土坑　平面



ＳＫ０７土坑　断面



ＳＫ０８土坑　平面



ＳＫ０８土坑　断面

写真図版35　ＳＫ０５～０８土坑

写真図版36　ＳＩ０１竪穴住居跡出土遺物

写真図版37　ＳＩ０１・０２竪穴住居跡出土遺物

28

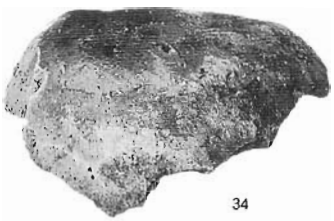
29

30

31

32

33

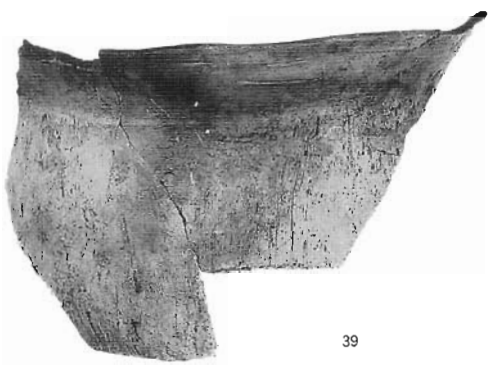

34

35

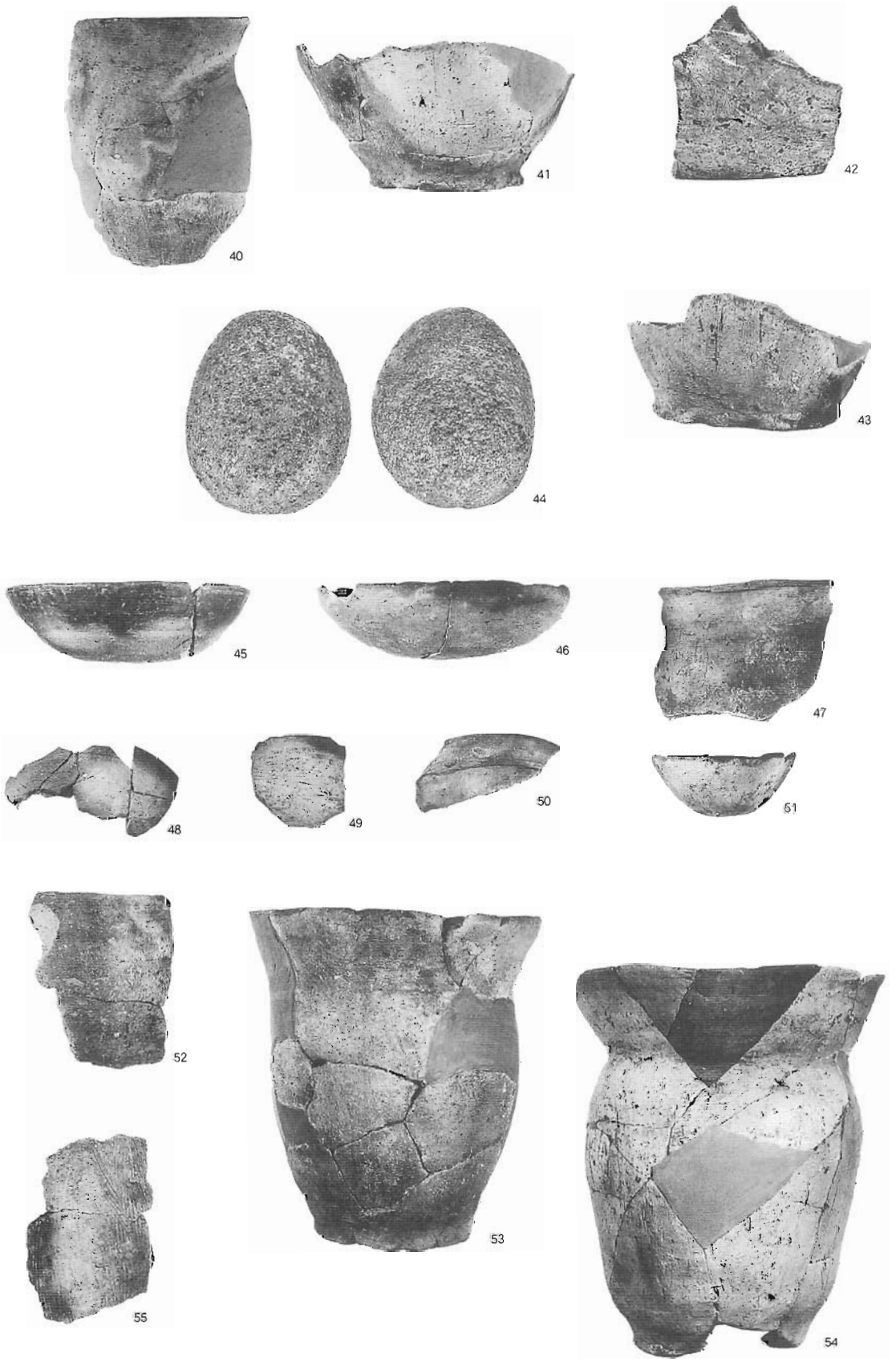
37

38

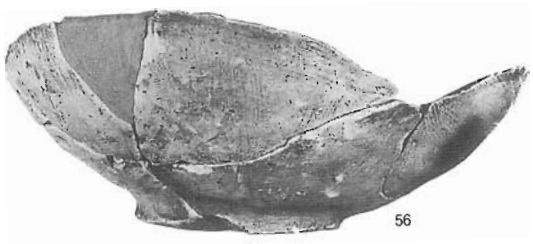
36

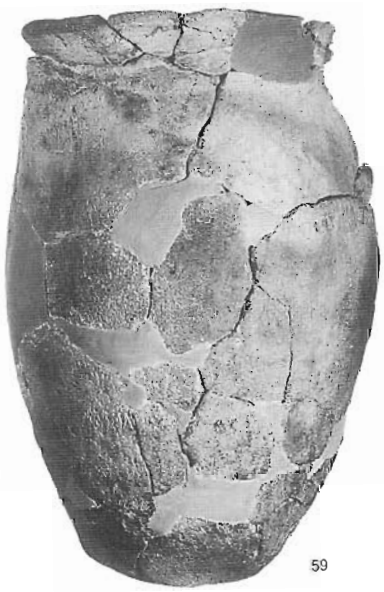

39

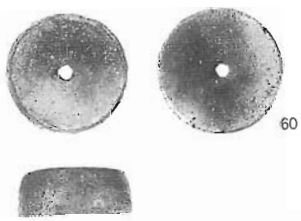
写真図版38　ＳＩ０３竪穴住居跡出土遺物

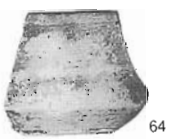


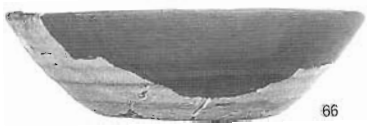
写真図版39　Ｓ１０３・０４竪穴住居跡出土遺物

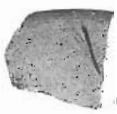






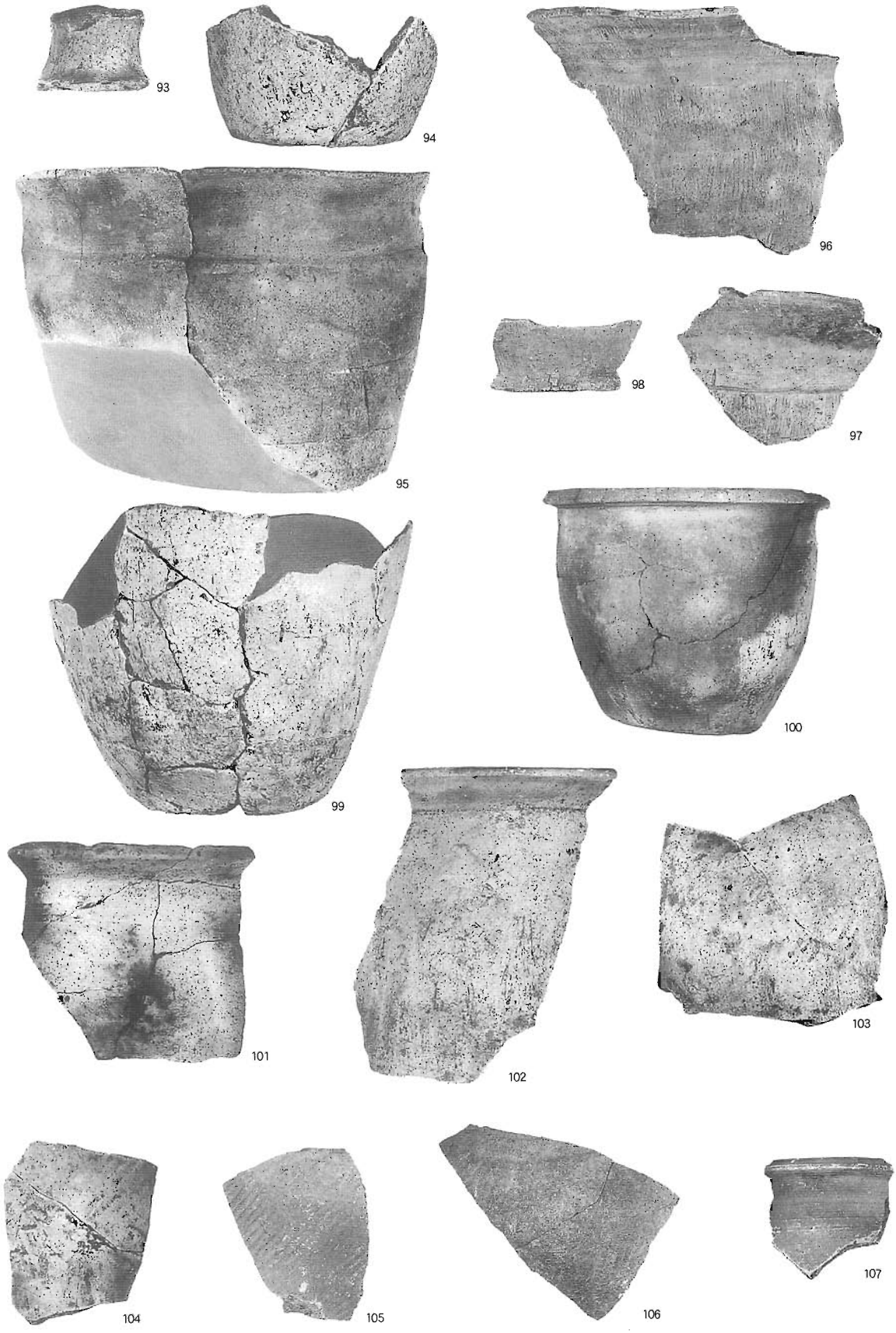




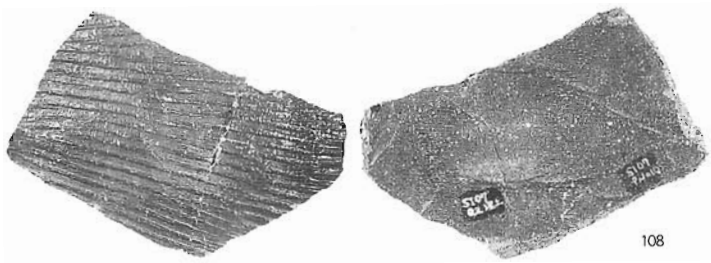


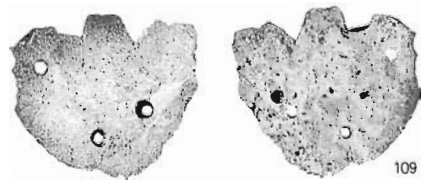
写真図版40　ＳＩ０４～０６竪穴住居跡出土遺物

写真図版41　ＳＩ０６・０７竪穴住居跡出土遺物



写真図版42　ＳＩ０７竪穴住居跡出土遺物





写真図版43　ＳＩ０７・０８竪穴住居跡出土遺物

118

120

121

122

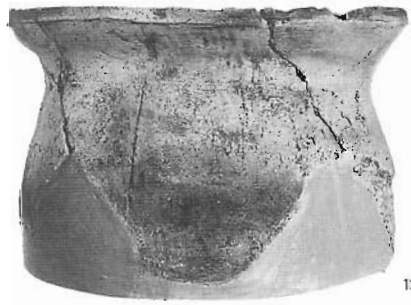
119

123

124

125

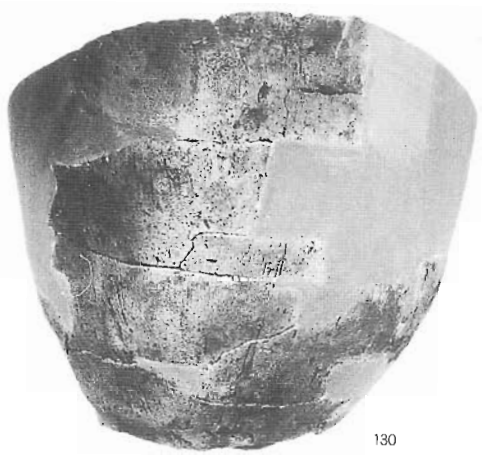
126

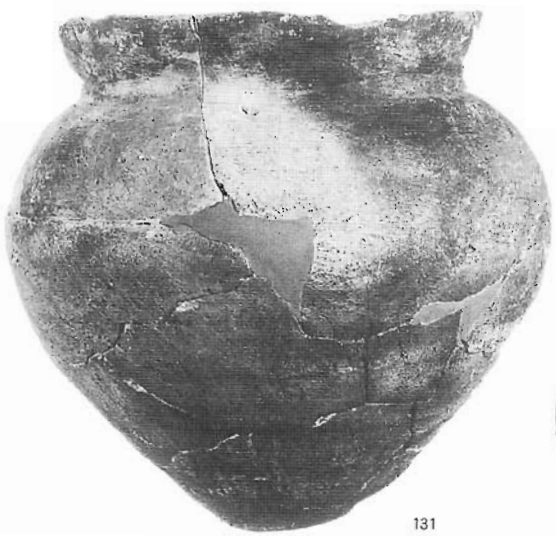

127

写真図版44　ＳＩ０８竪穴住居跡出土遺物

128

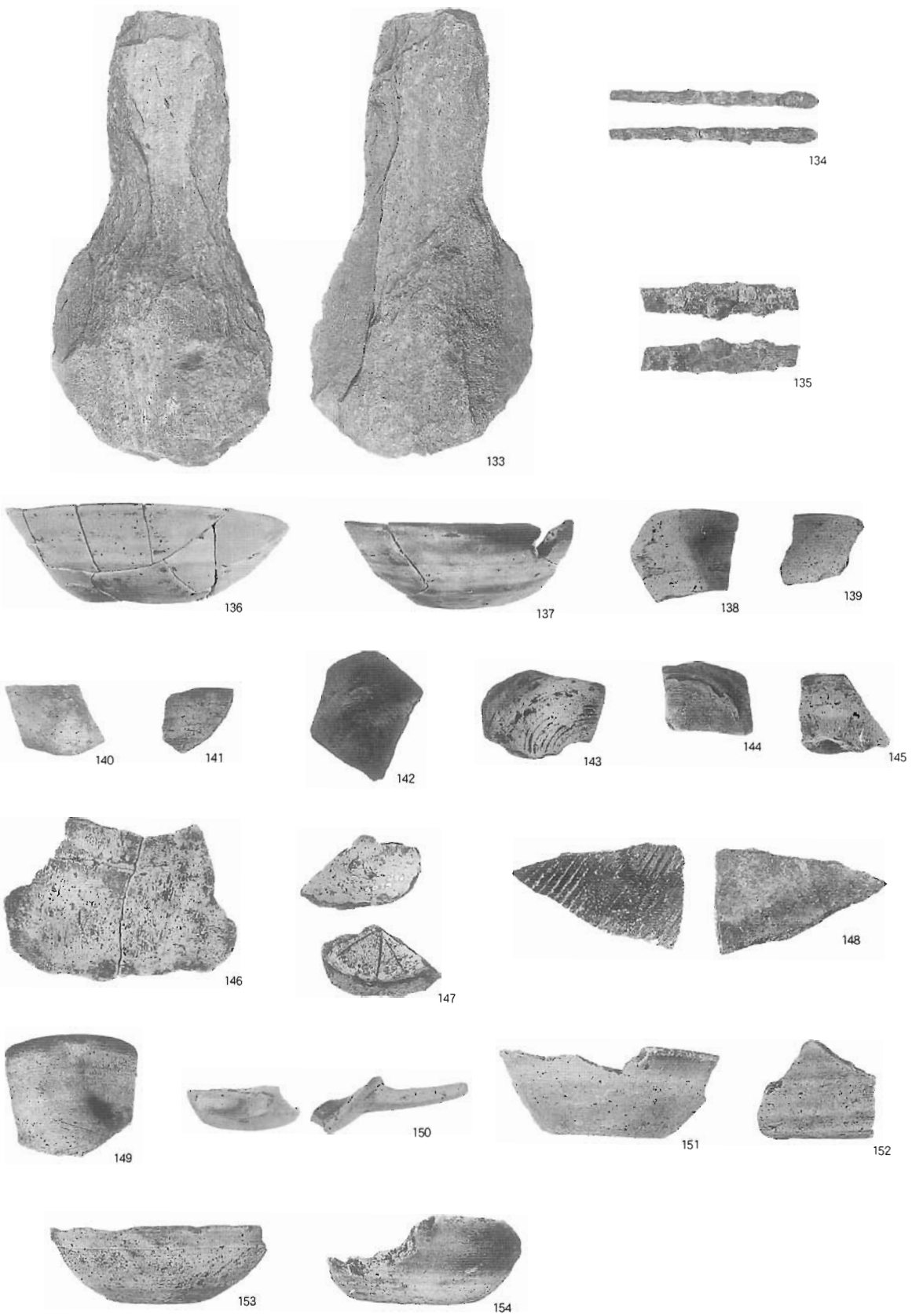
129


130

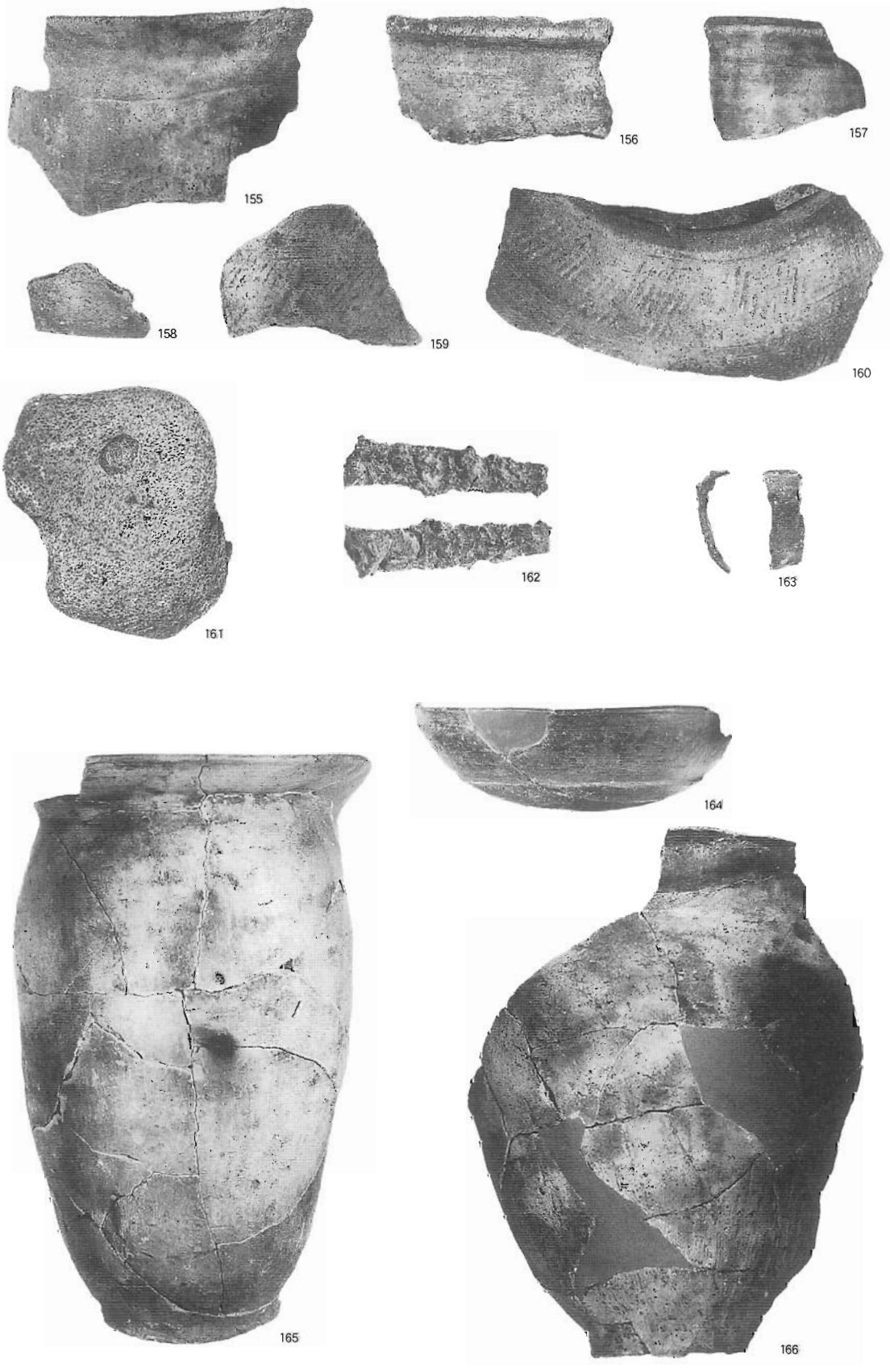

131

132

写真図版45　ＳＩ０８竪穴住居跡出土遺物



写真図版46　Ｓ１０８～１０竪穴住居跡出土遺物

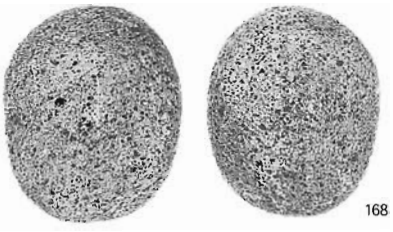


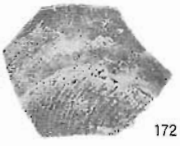
写真図版47　ＳＩ１０・１１竪穴住居跡出土遺物

167

170

171


168


172

173

169

174

175

176

写真図版48　ＳＩ１３・１４竪穴住居跡出土遺物

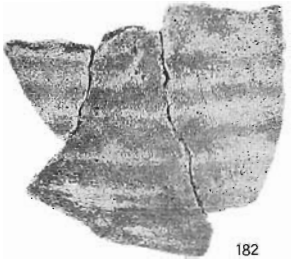
177

178

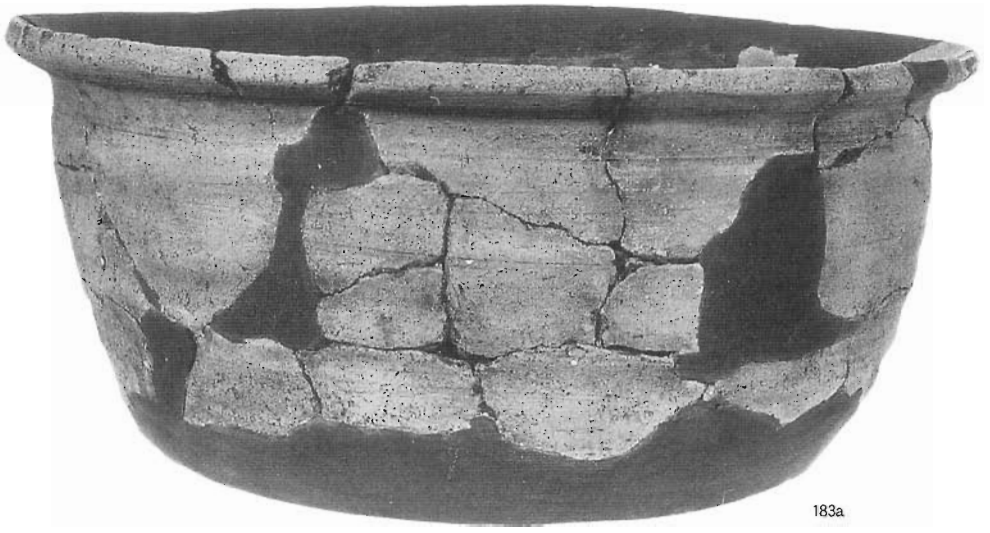
179

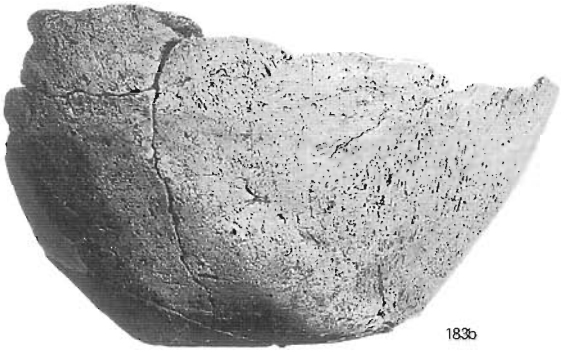
180

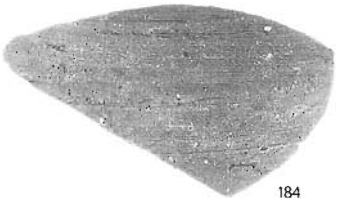
181


182

写真図版49　ＳＩ１４竪穴住居跡出土遺物

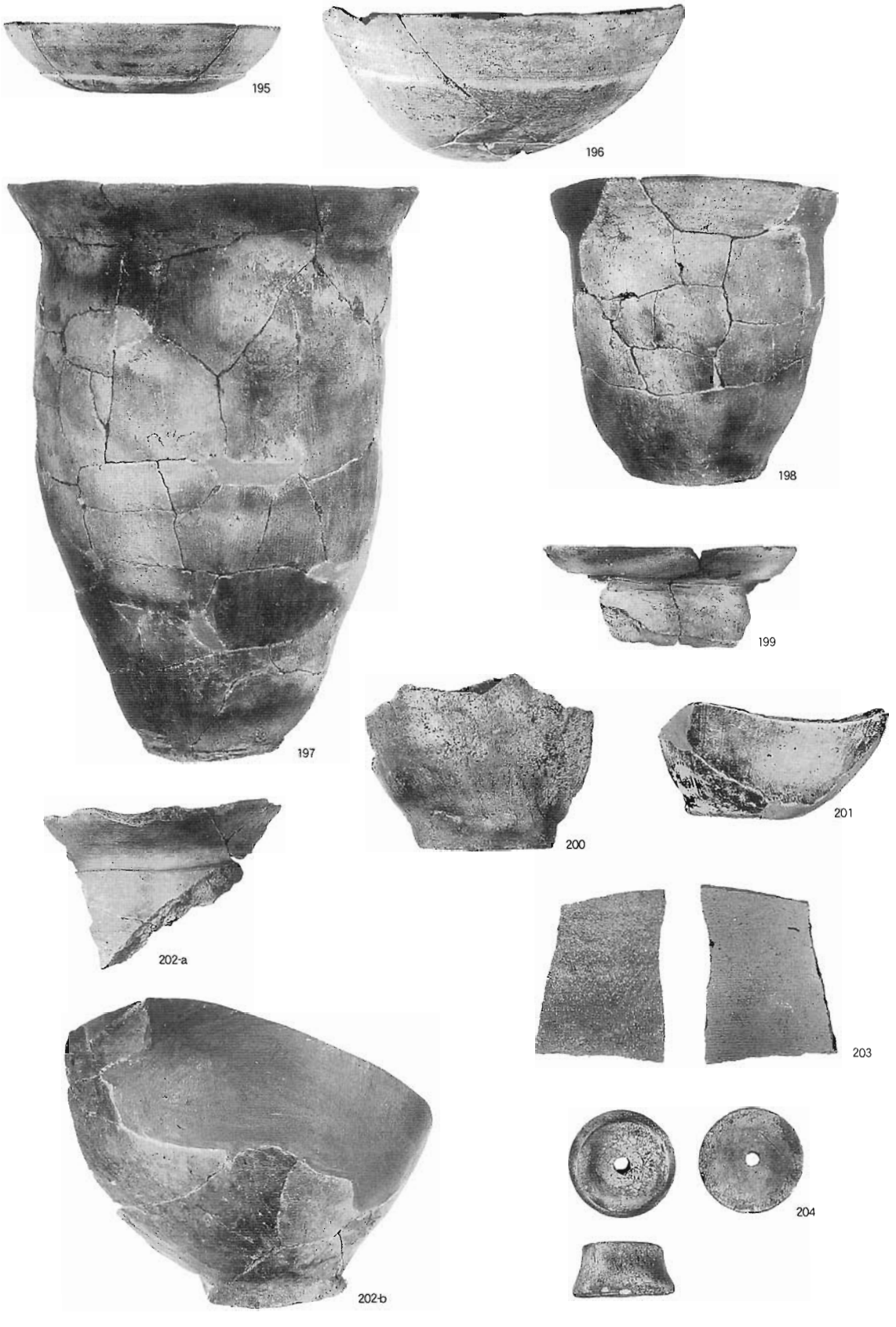




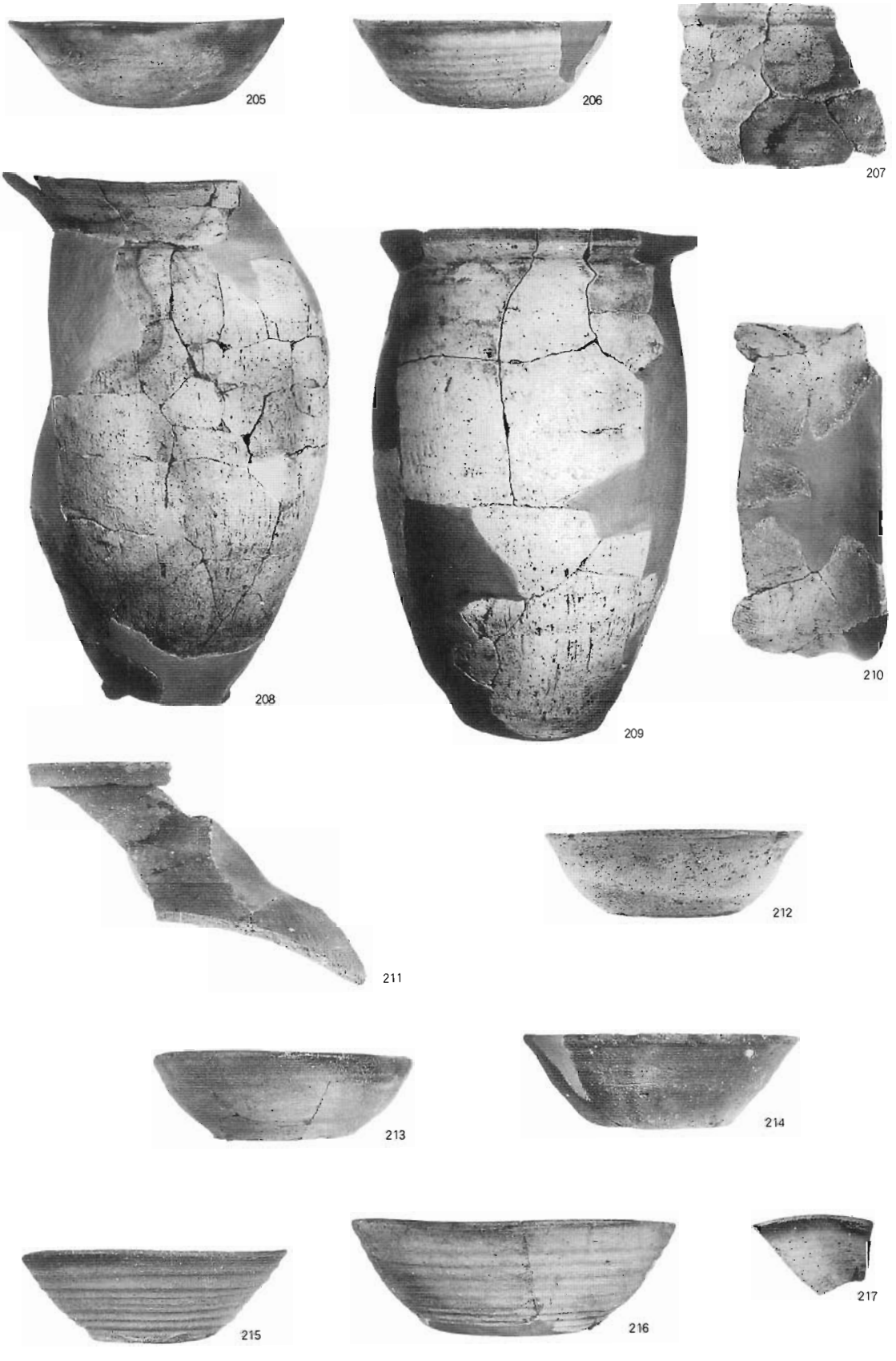


写真図版50　ＳＩ１４・１５竪穴住居跡出土遺物

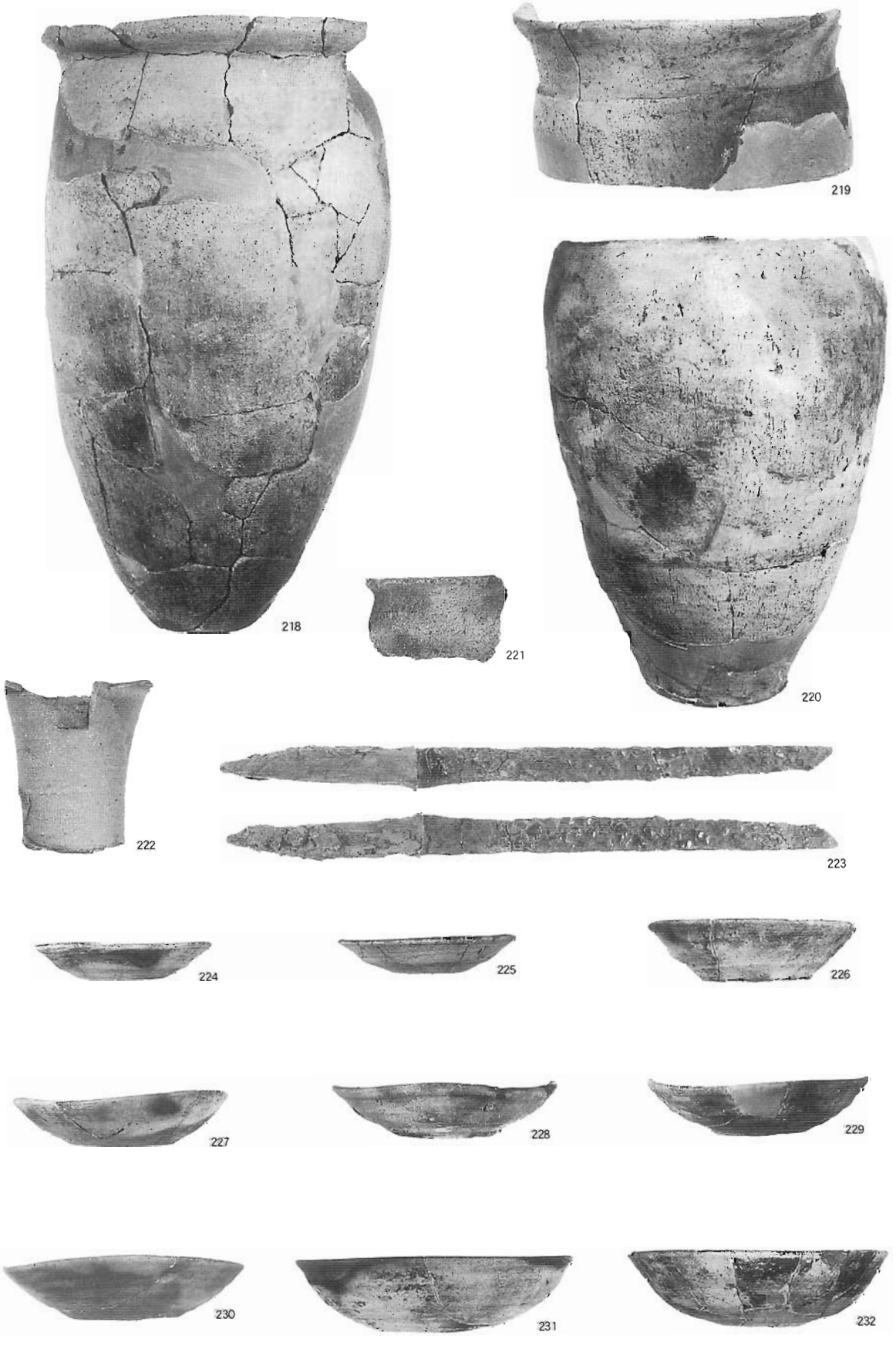
写真図版51　ＳＩ１５竪穴住居跡出土遺物



写真図版52　ＳＩ１６竪穴住居跡出土遺物

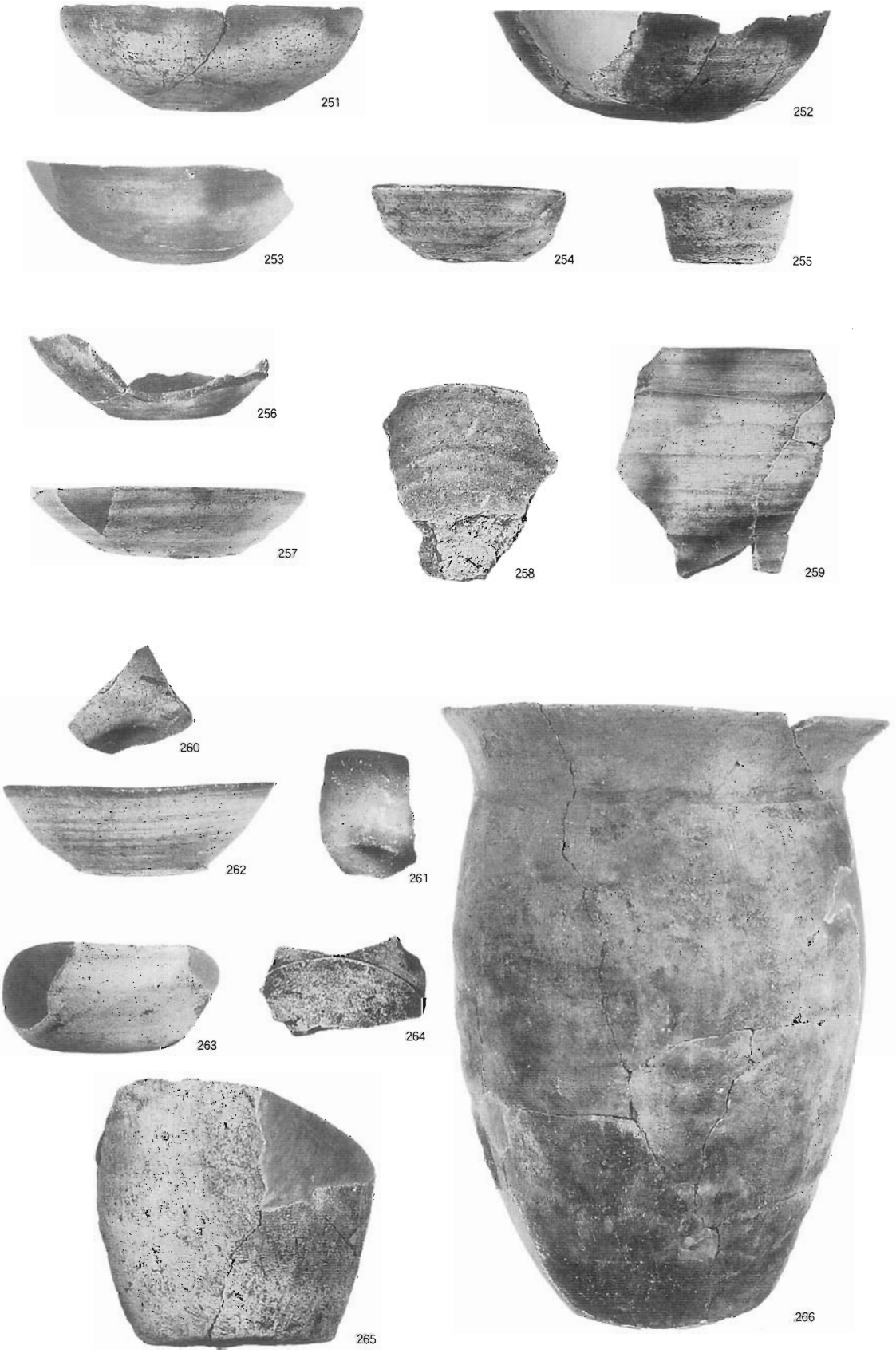


写真図版53　ＳＩ１７・１８竪穴住居跡出土遺物



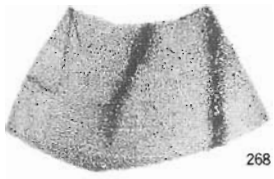
写真図版54　ＳＩ１８・１９竪穴住居跡出土遺物

写真図版55　ＳＩ１９竪穴住居跡出土遺物



写真図版56　ＳＩ２０・２１竪穴住居跡出土遺物

267


268

269

270

271

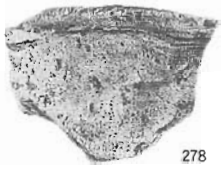
272

273

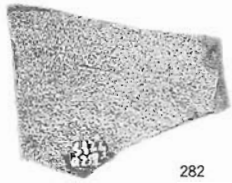
274

275

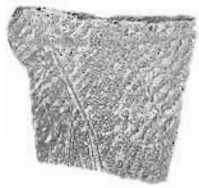
276

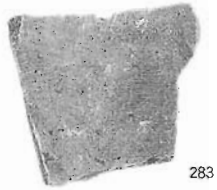

278

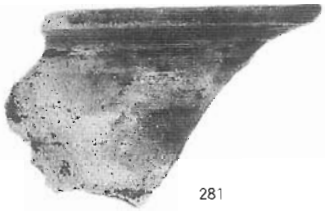
277


282

279



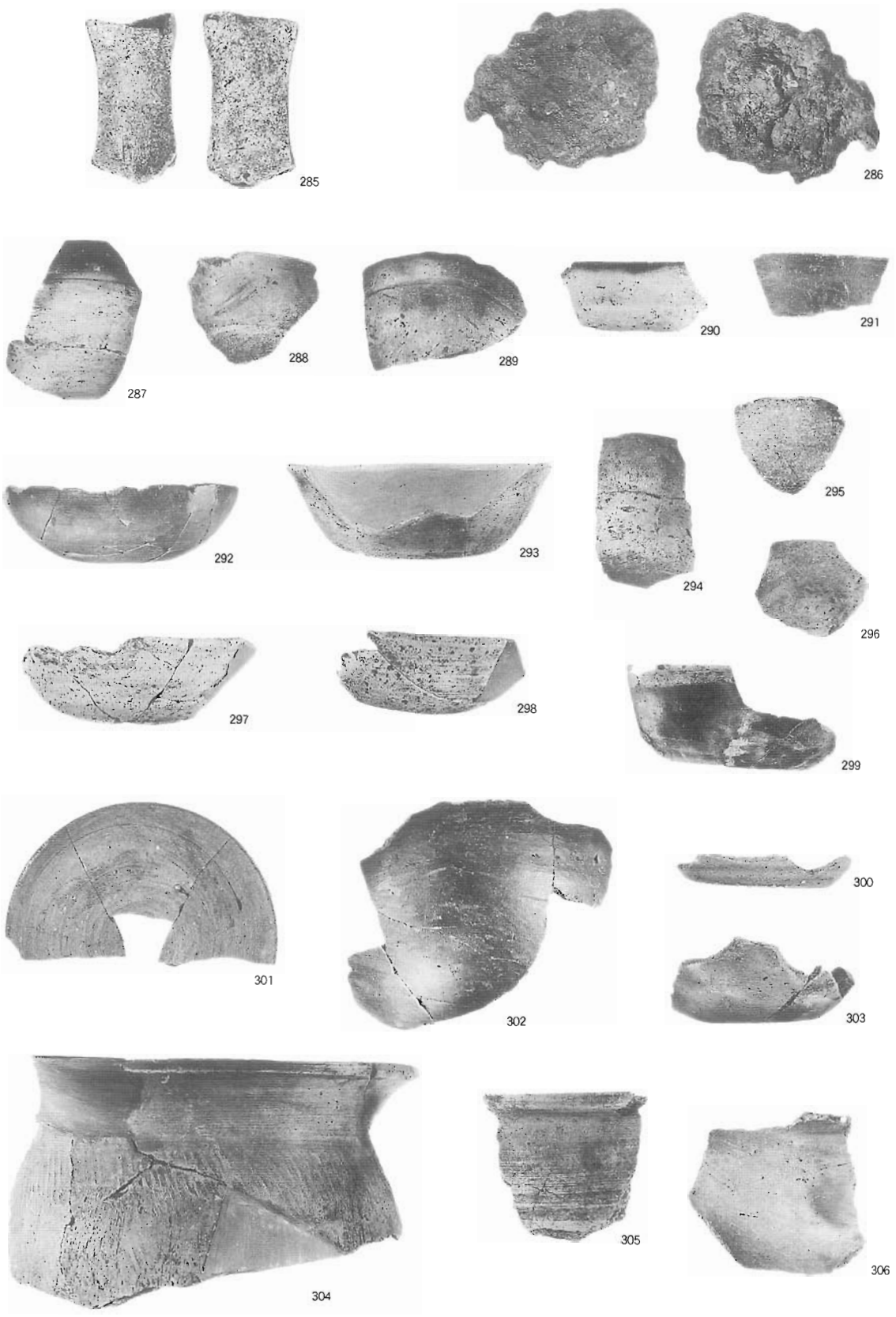

283


281

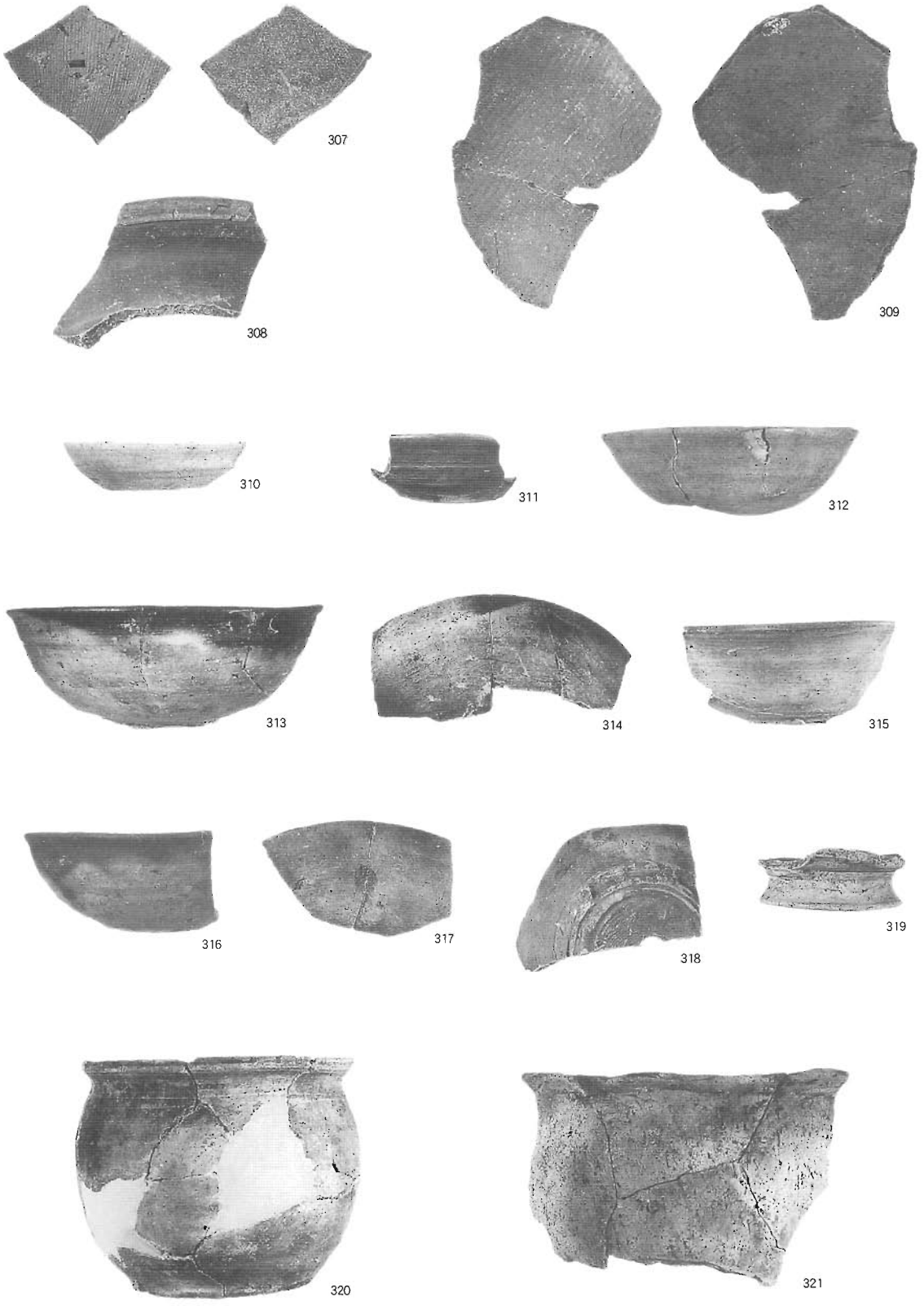
280

284

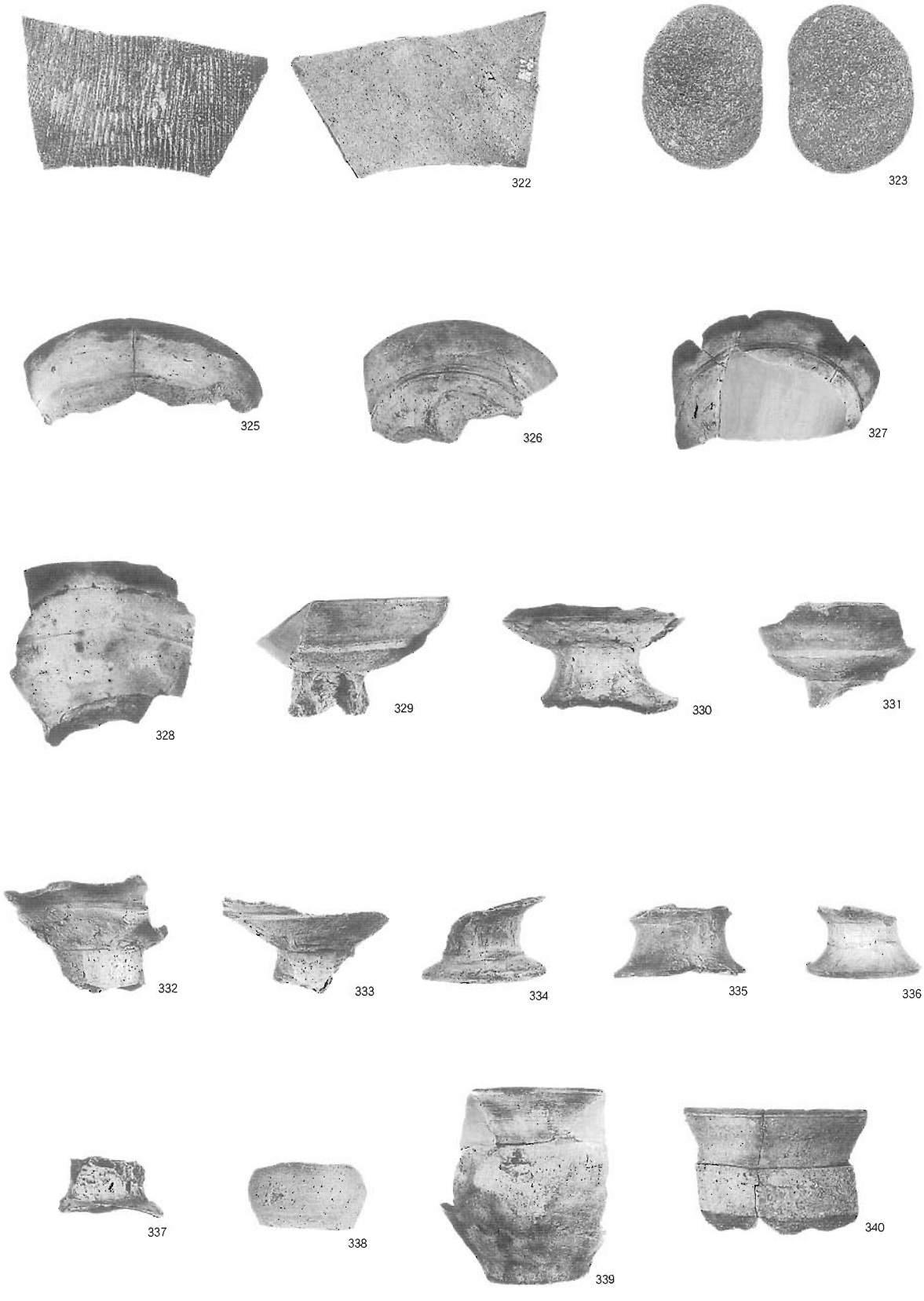
写真図版57　ＳＩ２１・２２竪穴住居跡出土遺物



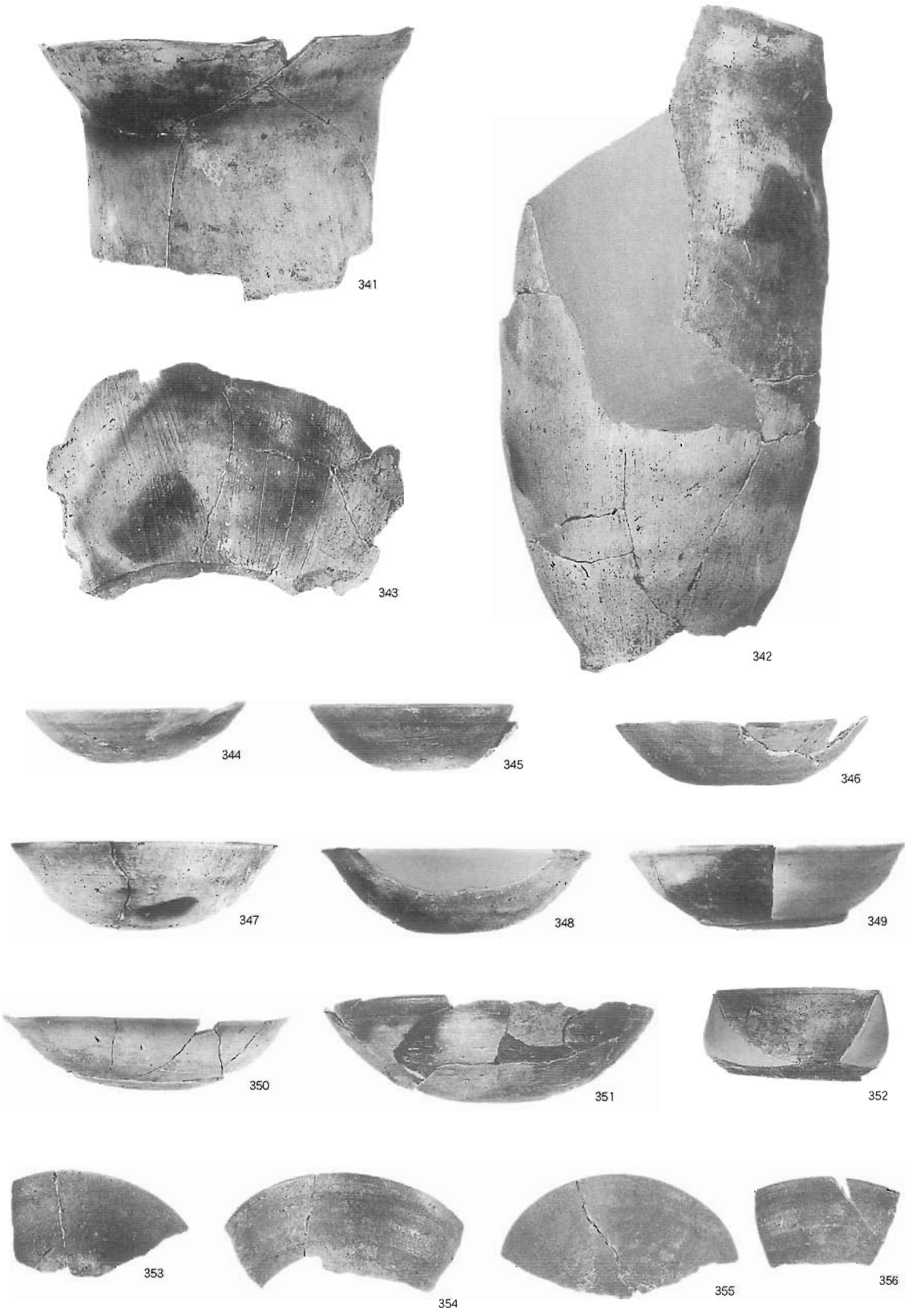
写真図版58　ＳＩ２２・２３竪穴住居跡出土遺物



写真図版59　ＳＩ２３・２４竪穴住居跡出土遺物



写真図版60　Ｓ１２４竪穴住居跡・ＳＸ０１遺物集中区出土遺物



写真図版61　ＳＸ０１遺物集中区・ＳＸ０２竪穴状遺構出土遺物

357

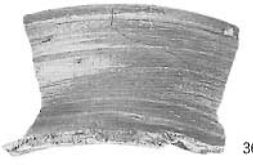
358

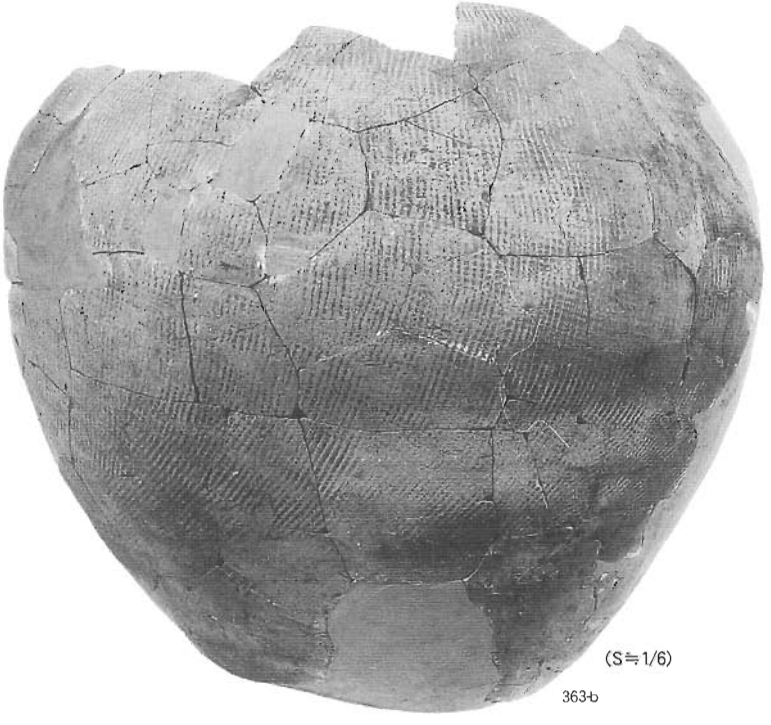
359

360

361

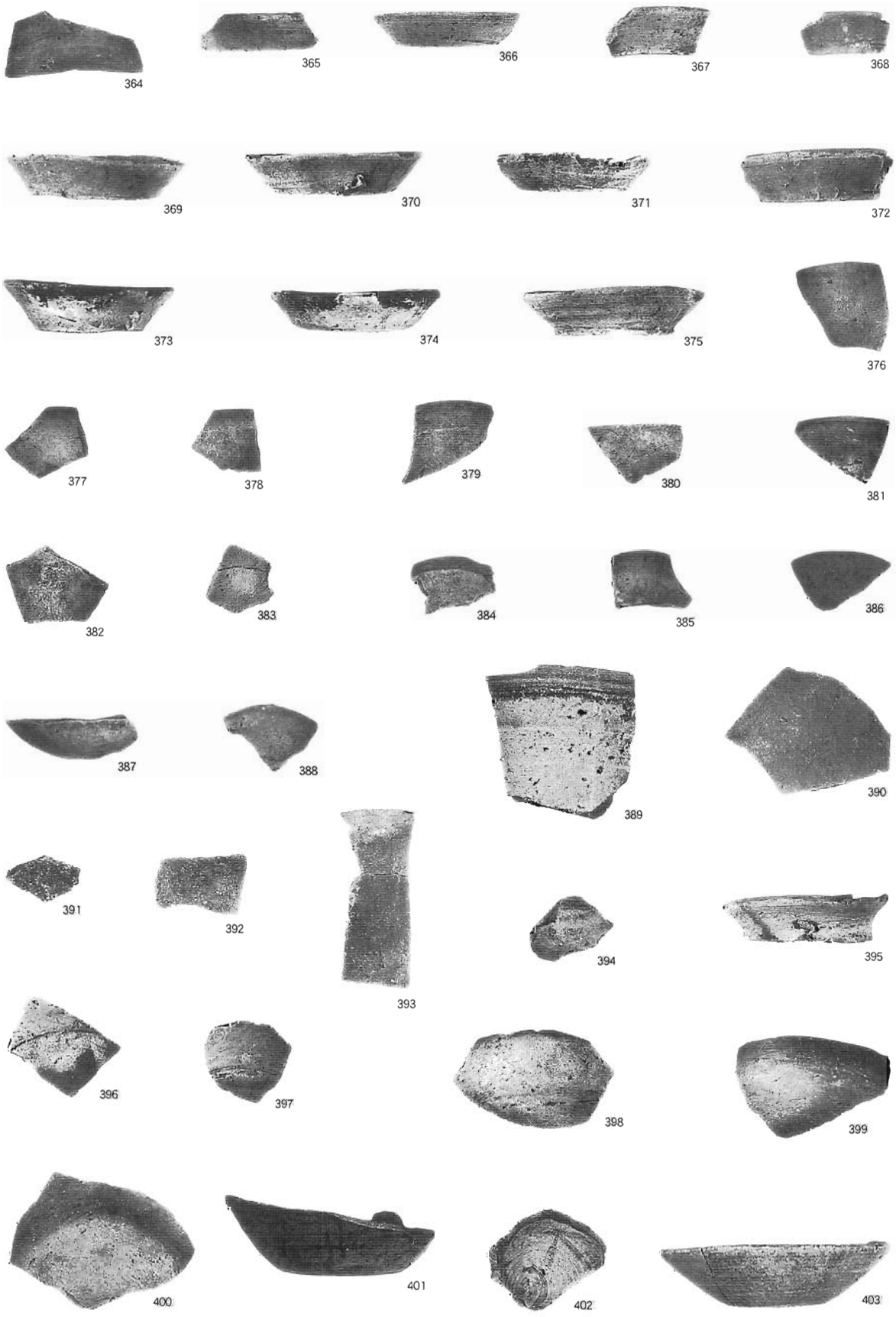
362


363-a

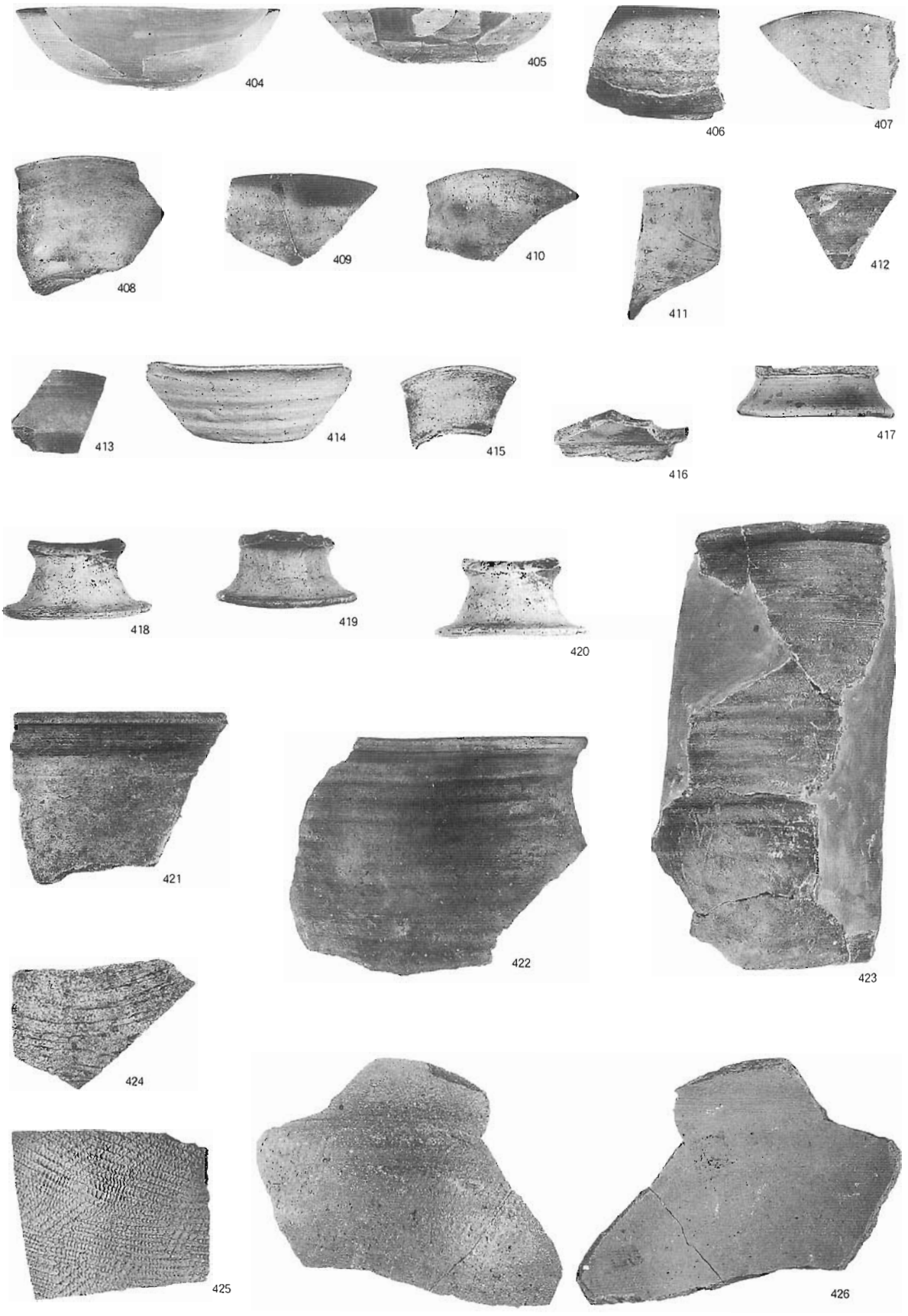

(S≒1/6)
363-b

363-c

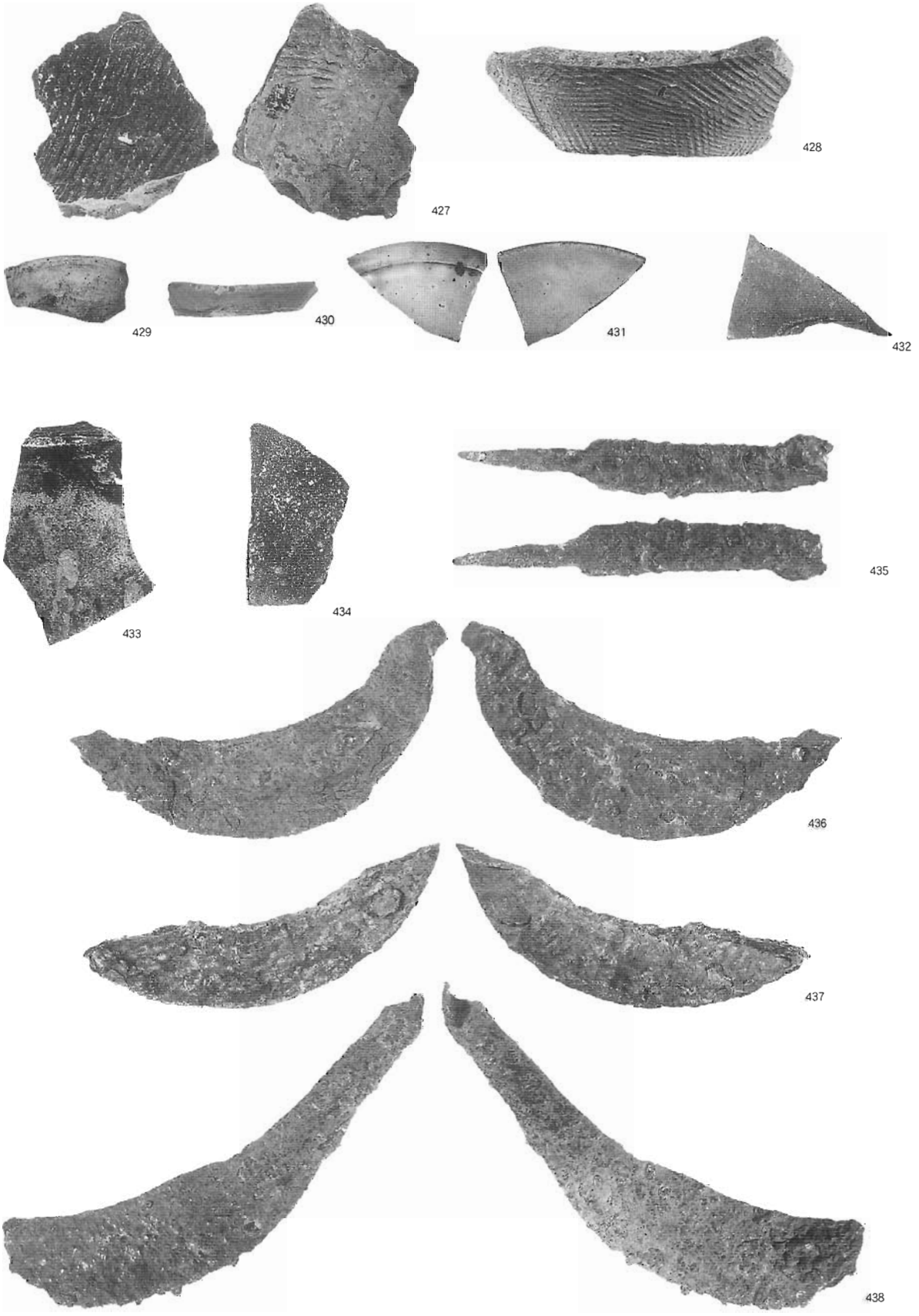
写真図版62　ＳＸ０２竪穴状遺構出土遺物



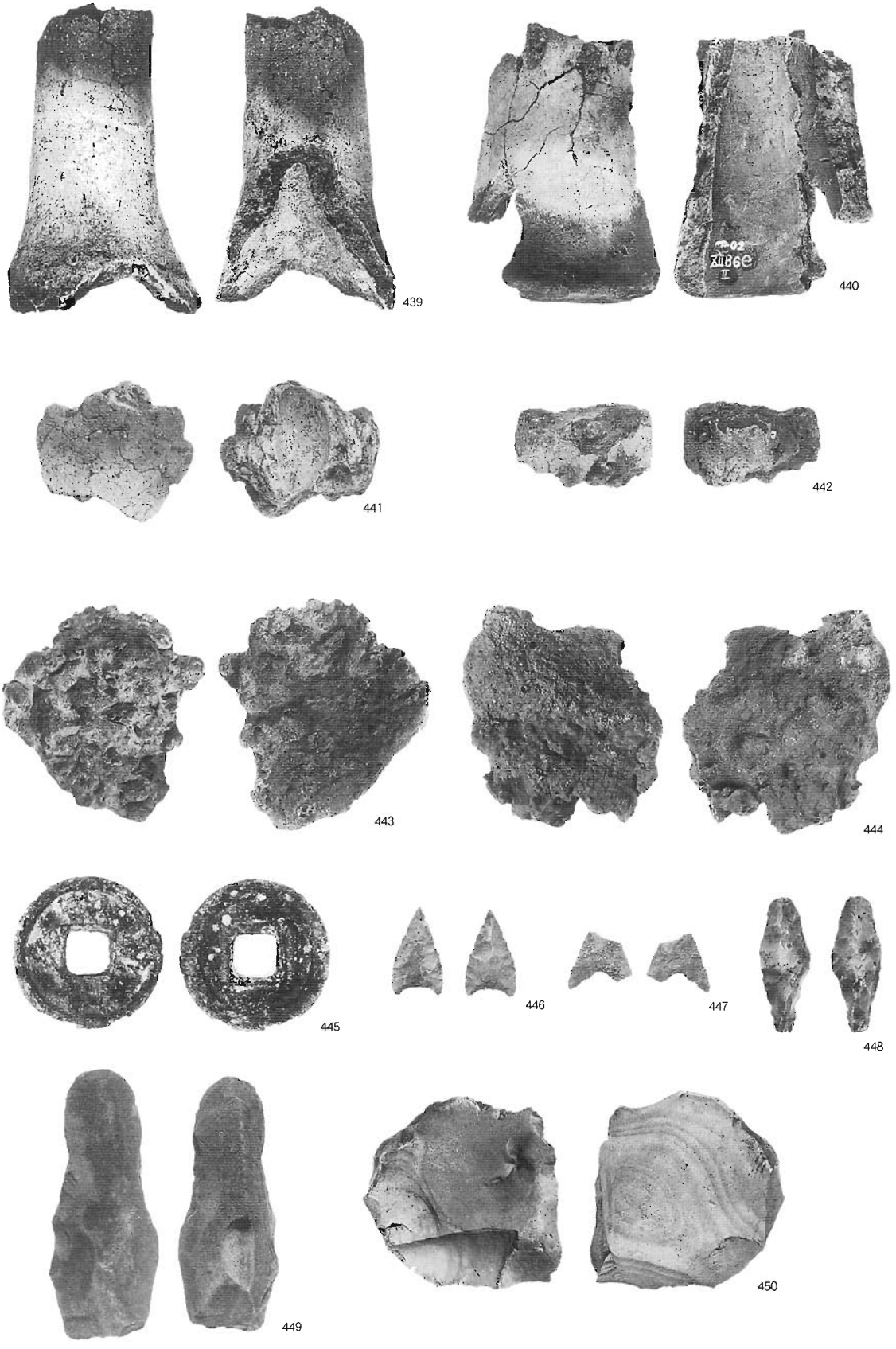
写真図版63　ＳＤ０１～０３方形周溝・遺構外出土遺物（１）



写真図版64　遺構外出土遺物（２）



写真図版65　遺構外出土遺物（３）



写真図版66　遺構外出土遺物（４）

報 告 書 抄 録

ふりがな	すぎのどういせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	杉の堂遺跡発掘調査報告書
副書名	国道４号水沢東バイパス建設関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第425集
編著者名	丸山直美・齋藤麻紀子
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185　TEL019-638-9001
発行年月日	西暦2004年２月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
杉の堂遺跡（すぎどういせき）	岩手県水沢市神明町（いわてけんみずさわししんめいちょう）2-58-45ほか	03204	ＮＥ27－0100	39度8分21秒	141度9分45秒	2002.04.16～2002.09.04	6,626㎡	国道４号水沢東バイパス建設による緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
杉の堂遺跡	集落	古墳	竪穴住居跡　１棟	土師器 土製品(紡錘車)	
		奈良	竪穴住居跡　８棟 遺物集中区　1箇所	土師器	
		平安	竪穴住居跡　15棟 竪穴状遺構　3棟	土師器・須恵器 鉄製品(小刀･鉄鏃)	平角材の柱を用いた住居跡
			竪穴状遺構　1棟	土師器・須恵器 炭化種子	炭化種子が多量に出土した竪穴状遺構
		(12Ｃ後)	方形周溝　3基	かわらけ・常滑片	
		時期不明	竪穴状遺構　2棟 土抗　7基 溝跡　1条 柱穴状小ピット　29基		

＊　緯度・経度は世界測地系による

平成15年度　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長	木村　昇	副所長	平野允苗
〔管理課〕			
課長	韮沢正吾	嘱託	高橋照雄
課長補佐	山岸直美	〃	湯沢邦子
主査	中嶋賢一	〃	沼田テル子
主事	猿橋幸子	〃	伊藤滋子
〔調査第一課〕			
課長	佐々木　勝	文化財調査員	北村忠昭
課長補佐	佐々木清文	〃	八木勝枝
文化財専門員	金子昭彦	〃	丸山浩治
文化財調査員	吉田　充	〃	北田　勲
〃	亀　大二郎	〃	島原弘征
〃	野中真盛	期限付調査員	坂部恵造
〃	新妻伸也	〃	小林弘卓
〃	阿部勝則	〃	藤原大輔
〃	杉沢昭太郎	〃	小針大志
〃	西澤正晴	〃	太田代一彦
〃	村木　敬	〃	新井田えり子
〔調査第二課〕			
課長	三浦謙一	文化財調査員	星　雅之
課長補佐	中川重紀	〃	佐藤淳一
〃	高橋義介	〃	星　幸文
文化財専門員	小山内　透	〃	溜　浩二郎
〃	金子佐知子	〃	本多準一郎
〃	濱田　宏	〃	丸山直美
文化財調査員	赤石　登	〃	福島正和
〃	阿部眞澄	〃	米田　寛
〃	水上明博	〃	須原　拓
〃	阿部　憲	〃	中村絵美
〃	早坂　淳	〃	川又　晋
〃	小松則也	〃	村田　淳
〃	阿部徳幸	〃	(村上　拓)
〃	窓岩伸吾	期限付調査員	齋藤麻紀子
〃	亀澤盛行	〃	石崎高臣
〃	飯坂一重	〃	吉田里和
〃	鈴木裕明	〃	立花　裕
〃	林　勲	〃	江藤　敦
〃	阿部孝明	〃	駒木野智寛
〃	羽柴直人		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第425集

杉の堂遺跡発掘調査報告書

国道４号水沢東バイパス建設関連遺跡発掘調査

印刷　平成16年２月20日
発行　平成16年２月27日

発行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185
電　話（019）638－9001
ＦＡＸ（019）638－8563
印刷　永代印刷株式会社
〒020－0811　岩手県盛岡市川目町23－10
電　話（019）623－0111
ＦＡＸ（019）625－5454

©㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004